日本プロレタリア文学大系

3

三一書房

責任編集　平野謙　藏原惟人
小田切秀雄　野間宏　竹内好

日本プロレタリア文学大系

3

運動開花の時代　上

「戦旗」創刊から文化連盟結成まで

三一書房

第三巻

「運動開花の時代」

凡例

一、収載作品はできるかぎり初出の新聞・雑誌によって校合した。ただし仮名づかいはすべて新カナに改め、伏字はおおむねもとのままとした。

二、収載作品の配列は、小説・戯曲、評論、詩・詩論、短歌、俳句の各文学ジャンル別にしたがった。無署名のアッピールなどは資料として評論の部に編入した。

三、各ジャンル内の収載作品は、原則として発表年月順によったが、ときに執筆年月によって配列した場合もある。

四、短歌・俳句の作品選定は、各巻をとおして、渡辺順三、栗林一石路の両氏に協力をあおいだ。

第三巻　目次

I　小説

II　評論

III　詩・詩論・短歌・俳句

詩

短歌

俳句

I 小説

十姉妹

山本勝治

田面には地図の様な線条が縦横に走って、旱の空は雨乞の松火に却って灼かれたかの様に、あくまでも輝やき渡った。情けないほどのせせらぎにさえ仕掛けた水車を踏む百姓の足取りは疲れた車夫の様に力がなく、裸の脊を流れる汗は夥しく増えた埃りに塗れて灰汁の様だった。

そして、小作争議事務所に当てたS寺の一室は日増しに緊張して行った。

「おい、遂々、彼奴等白東会を雇いやがったぜ」引裂く様に障子を開けて入って来た藤本は、一座をにらみ廻して報告すると、新たに現われた敵を、眼前に挑む様に唇を噛んだ。居合わせた者は一様に肩を揺すり眼を据えた。

「知ってやろ、この県の白東会の支部長云うたら、ほら、この間町でコーヒ呑んだやろ、あの時隅に坐って俺達をにらんでいた紋付の羽織着てた奴、彼奴だよ、永い間東京をうろついていた、そら、町の前川新聞取次店の息子や…」

「ああ、胸毛の生えた、柔道二段とか云う、心臓の強そうな…」と、誰かが訊くと、藤本はグッと首肯いて胸を張った。

「そうや、あれで江戸仕込みの壮士そうな、どうせ、腕力と心臓の強いだけが取柄の男さ、けど、注意せんと彼奴等の唯一の戦術である「切り込み」があるか知れんぜ、地主からだいぶ金も出てる様子やから…」

藤本の歪めた唇には、激げしい敵慨心が、冷めたい微笑となって漂っていた。同じ想像と期待に、一座の顔は潮の引く様にすっと蒼ざめて誰れもが深い溜息をついた。

慎作は、勿論この報告に衝撃を受けた。が、その衝撃が忽ち火に落ちた錫箔の様に崩折れて、燃えあがるべき反抗心が、雑草を揺がす一戦ぎの風ほどの力しかないのを如何することも出来なかった。一寸ひるがえった心が、直ぐと暗い懐疑と姑息な内省に重くよどんでしまった。慎作は、新しく刺戟されて炎の様に闘志を沸き立たせて居る同志の前に、深く自分を恥じた。同時に、この心の秘密を持ちつつ、同志と共に嘆き共に憤っているかの様に装っている自分に、たまらない憎悪を感ぜずにはいられなかった。やっぱり俺は駄目だ。この刺戟に於てさえ、自分の心は豚の様に無感動だ、俺はいよいよ戦列の落伍者だ。何時、何処で、どうして、あれほどに燃えあがっていた意識が、常夜燈の様に消えることのないと信じ切っていた反抗の火が、かく

まで力弱くされたか自分ながら不可解だった。いや、諸々の原因は数えあげることは出来たが、その諸々の原因そのものが本来ならば胸の火をより燃え熾からしむべき薪である筈だった。この新しい薪であるべき事柄が、何時の間にか石綿の様に燃えなくなった以上に、却って自分を卑怯にする鞭の役目を努めるとは、前線に立つ者にとって致命傷だと思った。だが、この理智に頓着なく慎作の心は懐疑に燻って羊の様に繊弱なものになる一方であった。理智と思想に於てはまだ、決して曇っていないと確信しているだけに、この脆弱な感情の泥沼から匐いあがろうとする焦燥は一倍強かったが、次々と周囲に起る事柄が反抗を薄めて、不可抗力に裾をかまれた様に動きがとれないのだった。

そうだ。第一に暗い一家の現在が、慎作をひしぐ力の最大なものに違いはなかった。

前年からの借金が抜けない上に、養蚕の不成功に次ぐこの大旱だった。家産を傾むけた正直一途というものよりほかに何の才能も持合せない父は、目前の仕事を唯がむしゃらにするより思案がなかった。日向を追っかけ廻る様になっても、まだ維新当時、区長という大役の下命された名誉を、晩酌の酔と共に吹聴することを忘れない祖父は、去年の春、祖父そっくりの頑固者だった兄が死ぬと共に飾るべき何者もなく、只ストーブのように温かい資本家を憎む思想と感情とを土産に、顔を蒼くし髪を長くして帰郷するやいなや、農民運動に寧日ない慎作を目の敵にして、事々に小姑の様な執拗さで楯付いた。母は洗濯とボロ綴りに総ての時間を消費し、妹の絹は、あどけなさと快活な足音を何処かで失くした様な佗しい小娘だった。

催促のはげしい負債返還の日が近づいても、一年の衣類代と肥料代に当てるべき養蚕の上り高さえ予想外に少くない現在如何にし様もない事は、碌々稼ぎを手伝えない慎作には身に沁みて分かっていた。仙人の様にしなびた脛を、とは反対に顔を無闇にガクンガクンさせて、落着き過ぎた下半身一種超然たるあぐらに組んだ祖父は、切抜け様もない窮迫を、慎作と父のせいにして怒鳴り立てた。

「ほんまに如何する気や、お前等呑気そうに黙ってくさるが、今度こそわしにも見当はつかんぞ、おい慎作、お前の…その何や、新しいとか云う頭で考えついたこと云うてみい。ヘン、こんな世帯智慧は出まへんがな、直造かて、足しにもならん水換ばかり能やないぜ、何んとか法見付けたらどうやね」

七十八にしてはまだ弾力のある声だった。父は眼を眇める様にしてチラと慎作を一瞥しただけで黙っていた。皆の無視的な態度が祖父の尖がった肩を余計に厳めしくした。

「組合やたら、何やたら、碌でもないことばっかり仕腐って、ええ若い者が何の様や、一ペンでもええから、絹に一枚の木綿物位、買うてやってみい、罰は当らんぞオ」

だが、慎作は祖父の毒舌には別に反感も覚えなかった。無理にいからした肩も尖先の様にとがり、憎まれ口も歯の

ない唇にもつれるのを見ると、寧ろ哀憐が先に立った。祖父と違って父は、組合運動のため蕩児の様に家を明ける慎作を責めなかった。時々開催する演説会等にも、祖父だと「文章規範も碌に読めんそこいらの青二才の話し見たいな、ヘッ、あほらしゅて聞けまへんわい！」と鼻先で嗤って、てんで問題にもしなかったが、父は、暇の許す限り出席した。慎作が興奮して卓を叩き、拍手の前に一寸見得を切る時等見ると、大抵父も遠慮勝ではあったが、パンパンと手を叩いて、少なからず得意気であった。それは慎作の演説に共鳴すると云うよりは、何でもよい自分の息子が人前で拍手されることを祝福する、愚かな親心の飾らない現われであるらしかった。慎作はそれをくすぐったく思ったが、併しこの父のたとえ子煩悩からの支持にしても、家の中では古い豪傑の様に威張り返って居る祖父の手前、甚だ心強くもあった。必然、父は板ばさみになつた。そこへ母は、父に譲らない引込思案の女だった。祖父が「体あたり」式な論法、糞味噌に慎作をやっつけ、しいては、それを黙視する父自身にまで鋭鋒を向けてくると、流石に父も、昔の思想習慣に引戻されて父親としての責任も考え出す様ではあったが、それでも、丁度赤穂浪士の様に苦難して百姓達の幸福の為に闘うのだと勇んで走り廻って居る慎作の決心の様を見ては、どうしても口に出しては攻撃しかねる様だった。それに慎作の演説会場に於ける一種の勇姿も、鳥渡捨てかねる風でもあった。兎も角父と母との思惑は水銀の様に動き易く難かしく言わば「対立」するところの祖父と慎作との間を、振子の様に行ったり来たりした。

ある日だった。

慎作は帰宅するとすぐ祖父に掴まって、宣言的に言い渡された。

「おい、お前は反対やそうだが、こうなったら背に腹は換えられんさかい、どうせ、肥代にも、足らん金や、繭の金で小鳥飼おうと思うのや、今、流行ってる十姉妹な、あれに定めたんや」

慎作は、吐胸をつかれて言葉がなかった。愈々来た…ある決定的な問題が、突然、目前一杯に立はだかった様な気がした。

民衆への救いでもあるのか、或は悪魔の手弄みか、実際この十姉妹の流行は、一時天下を風靡した万年青と同じく、不可解な魅力をもって、四国を発端にして中国近畿、殊に慎作の故郷附近には、感冒より凄じい伝染力をふるった。この小鳥は、安易な世話と僅少な食餌代とで六十日目毎に幾つかの雛鳥を巧みに巣立させた。巣立った雛は飛ぶ様に売れて、それで親鳥の代価は完全に償われ、後は全くお伽話の様に金の卵を産むに等しかった。憑かれた様な流行力は、何の変哲もなく、只日本人の如く多産であると云うだけのこの鳥に「白」だとか「背残り」だとか「チョボ

一」だとかまるで骨董の様な種別を創造し、価値の上には相場の様な変動を生みつけた。需給の関係等は悪宣伝と浮気な流行心理の後ろに霞み去り「飼鳥」と云う純粋な愛鳥心等も病的流行の前に死滅し、そこには唯、露骨な殖金の一念ばかりがはびこった。にわかの小鳥屋が相継いで出来、遊人は忽ち役者の様に小鳥ブローカーとなりすまし、連日の小鳥の市で席貸するお寺には厄病時の様に金が落ちた。事実、この流行力が存続する限り損失者は殆んど例外で、十姉妹はインチキ骰子同様だった。

「阿呆奴、今に暴落が来るぞ」と嘲笑していた人達が、何時の間にか悪夢の捕虜になって、ぞくぞく渦に巻きこまれた。旱りで、田に旧い餅の様な亀裂が出来初める頃には、地道な百姓達までが鳥籠を造り出した。それは全く異様であった。行逢った人達は、天気の挨拶より旱りの噂より先に十姉妹の話だった。それは唯、不景気の病的な反動だとだけでとり澄ましていられなかった。個人を利己的に、歪めて一攫千金を夢見させる事に於て、賭博に譲らない蠱惑を持っていた……

慎作は今、祖父から唐突に飼鳥を言い渡されて、足許に火のついた驚きを味わずにはいられなかった。

「お前が、なぜ反対するのか知らんけど、見て見い、拡がる一方やないか。これから東京や北海道の方へも、どしどし出るそうや、ほんまに、これこそ間違いない内職やぜ、こんなええ事、又とほかにあらへん！」

是が非でもこの思い付は実行するぞと云う意気込みは、畳みかけるような口吻に明かだった。

「金が儲かる儲からんは別問題だよ。僕の反対するのは、どれだけ苦しゅても、こんなばくちみたいな流行鳥を飼うなんて、如何にも心を見すかされるこっちゃし、それに、この前の万年青みたいに何時がらが来るか分からんし……」

慎作は、若し正面切って反駁して行ったら、八歳の様にカッとして枯枝の様な腕をも振りあげかねない祖父なので、出来るだけ調子を柔げ静かに言い続け様としたのだが、もう祖父は、怒った時の癖である首をガクンガクンさせて管を巻くようにいきり立った。

「儲かる儲からんは別問題やで！　何をぬかしやがる阿呆め、金を儲けたいさかい、苦るしいならこその話しやないか、これこそ窮余の一策ちうのや！　それに、まだまだ暴落なんか来るもんかい、誰かてまだ二三年は受合や言うてるし、おれ、今日仏さんの前でけんとく（予想）みたんや「吉兆」と心の底で声がしたわい」

「そら分かってる。苦しいから鳥でもと思うのはよく分かってるが、そうやないのに祖父さん、おれの言うのは、一羽二羽楽しみに飼うのと違うて、大切な資本をかけて小鳥屋みたいに鳥飼うて、そら今日も鳥の市や、明日は西応寺で交換会や、そら「背残り」はいっぺんに二十円も値が上った。ほら何、ほら何やと、百姓がまるで相場師みたいに

なるのが間違うてると云うのだ。この旱りと繭の不作で苦しいのは、今切り抜け様と、皆が結束して争議を起してる最中やないか…」
「へん、偉そうなほげた吐かさんとけ！　小作争議みたいな、第一お前等が先頭やないか。負けるに決まってる。小鳥で儲かるのは、ちゃんと見えたことや、ここ二年三年のうちに、何千何万と儲けた人が幾人あるか分らん位やないか。小鳥で儲けたら、小作料を負けろって、徒党なんか組んで騒がんでもええのや…」
「それがいけないのだ、争議に加わっている者のうちでも、だいぶ十姉妹に色目つかう者もあるけれどその度におれは云うのだ。十姉妹の流行など決して永久に続くものでもない。と云うと、たとえ流行ってる間だけ飼うて助かりたいと云うかも知れんが、そういう心は、自分一人だけよかったら、他の者は構わないって云う心と同じだ。百姓は百姓として働き、それで如何して食えなんだから、それは、天候と地主と社会全体の責任だから、その時は百姓は一致団結して…」
「ええい、黙らんかッ、この社会主義奴！　十姉妹は大丈夫やわい、この勢いやったら世界中ひろまる！」
「とにかく、おれはこの理由のもとに、蚕の金で十姉妹飼う事は大反対だ」と慎作は断定的に併し半分はおどけた顔色を忘れずに云った。反射的に、多分祖父は喉で叫んだのだろう、声は出ずに唇が「何！何!!何!?」と云う風に動いた。すぼんだゴム風船の様にペロペロ皮膚のたるんだ頸が驚くほど延びた。慎作は、この一徹な祖父を納得させるだけの言葉を知らない自分が腹立たしかった。いや、自分の思想を如何に嚙み易く柔かなものになし得ても祖父の歯牙は、既に郡長授与の刹那に於て抜け落ちてしまったのを如何せん…であった。

その夜、父は、祖父と慎作との間で眼の遣り場に困った。「お父っつぁんの様に云うたかて考えもんやぜ、慎作が反対しよるだけでなく、なんぼ流行かって、きっと儲かるもんとはきまってやせんしなあ…それに、もう遅いわい！」だが、その事より何より、父は慎作の意嚮に気をかけていることは確かだった。父にしてみても、不成功だった養蚕をこの鳥で、或はとりかえされるかも知れない事は、何に増しの誘惑であるに違いなかった。
「いや、儲かる、世間をみたら分かるこっちゃ、一体誰れが損をしよったんや？　皆、儲けてるやないか、この村でかって、十姉妹飼えんのは慎作みたいな因果な息子持った家だけや、慎作に何の遠慮があるや！　飼う言うたら飼う！」祖父は唾を飛ばしてあくまで決定的であった。
「そやなあ、どっちにしてみてもええ考えやが、十姉妹ででも儲かったら、少しは助かるのやけども…」余程、心動いたらしい母が横から口を出すと、父は何時になく顔を赤くしてたしなめた。

「糸、お前は黙っとれ！」
併し父は、直ぐお祖父さんの逆襲を受けねばならなかった。
「何やて直造！　糸になんの怒ることあるや、そやったら何やな、お前にはこの苦しい家を明るみに出す好い考えがあるのやな、それを聞かせてもらおうかい、この際、鳥より上手な金儲を知ってたら、教えてほしいもんや！」
父は瞬間、顔を逆撫ぜにされた様な表情を見せたが、すぐと持ち前の、如何にもお人好しらしい微笑をたたえて
「これや敵わん」という様な眼色で慎作を見た。
祖父の罵りと迫る貧困と、さし招ねく誘惑の中で、どう梶をきめて好いか迷い乍ら、辛ろうじて自分を尊重してくれる父に、慎作は心から感謝した。
けれど、それから一週間ほど経って、委員会が永引いたため夜十時頃帰宅した慎作は、敷居を跨たぐと同時にはっとして棒立になった。蚊遣りの煙りが薄い幕の様に立ちこめたほの暗い土間で、白襦袢一枚の父と祖父とが並んで坐り、父は板をカンナで削っていた。坐禅めいたあぐら姿の祖父が、両手を膝に端然とつき、亀の様に首を延ばして父の手付を頼もし気に覗き込んでいた。薄い燭光と蚊遣りの煙りに包まれた二人の周囲に、心なしか、何か秘密の作業場と云った雰囲気が感ぜられた。門口に突立った慎作をみて、台所で縫物をしていた母も、土間の二人も、一瞬に、息を呑んで体を固ばらせた。と、父は慌て、側に置いた鳥籠を糖桶の蔭へ押しやった。そして、不自然なほどかがみ込んでカンナに力を入れた。「シュッ、シュッ」とカンナの音が何かの悪い前兆の様に四辺に際立って、むくれあがる白いカンナ屑が傷ついた者の様に転がった。白い眉を上げて祖父は屹と慎作を見たが、思い返した様に舌打して向き直り、故意と慎作を無視する様な高い皺枯れ声を出した。
「これで八つ位は大丈夫出来るやろな！」
「…う…」父は曖昧に首肯いていよいよかがみ込んだ。胸一杯にふくれあがって来る感激めいたものを拒むように慎作は晴れがましく「只今」と言って上がった。母は、慎作の翻った態度にほっとして、すがりつく様に云った。
「慎作、粥、温めるかい」
慎作は首を振って冷めたい芋粥を水の様に流し込んだ。たかが些細な十姉妹の問題だ自己の主義主張と家人の行動とは、必ずしも併立するものじゃない、清濁あわせ呑む度量と矛盾の中での一つの…けれど鼻が痛く眼頭が熱く見まいとしていて視線を土間に引寄せられた。無論、父は祖父の強制に、詮方なく露の様に向う側へ転んで行ったに違いなかった。責めたてられる奴隷の様に手を休めなかった。祖父は愈々肩を張り、ゴムの様に居をもぐつかせていた。慎作が食事を終っても二人は土間を離れなかった。
「もう、好加減にして寝なはれ、明日また、水換えで急が

しいさかい！」と、母が白けた空気をとりなす様に云ったのをきっかけに二人は道具をかたづけたが、寝ようとはせずに、慎作の居る火鉢の前に坐って無闇と煙草を吹かした。父は、すまなさそうに慎作の眼を逃げては故意とらしい咳払いに何度も拘泥し、祖父は喧嘩前の腕白みたいに唇を尖がらし、パタパタと団扇を煽った。慎作は、この場合何とか云わねばと思っていて、思考がとりとめないままに深く沈んで言葉が無かった。
「慎作、やっぱり十姉妹飼う事に定めたぜ」
祖父は止めの様に云い切って心構えたが、何時までも慎作が黙っているので気抜けした様に声を落し「なんぼお前が嫌いかてこうなったら、藥にでも摑まるより仕様あらへん、さあ、直造、寝よ、寝よ…」と危かしいすり足で次の間に入った。
思い切って慎作は併し哀願的に言わずにはいられなかった。
「お父っつぁん、どうしても十姉妹飼うのかい」
「……」
「鳥渡、考えただけでは別に悪い事とは思えんけれど、この間から何度も云う様に、俺の立場から言うと…」慎作が父の顔を見ない様にして云い続けようとすると、父は狼狽てて「いや、その事やったら、よう分かってるのやが」とせき込んで遮切ったが、何かの固まりの様に唾を呑むと弱弱しく呟やいた。

「何せ、爺さんはガミガミ云うし、蚕があんな様やった上に、この旱りやろ…おまけに、この秋に返えさんならん借金の當は皆目つかんしなあ、わしかって、お前の理窟は成程と思うてんのやが…」
「俺も、お父っつぁんの心配は分り過ぎる位分かってるよ、充分家の手伝出来ん俺がかれこれ云う権利はないか知らんが…」
「いいや、そんな事あらへんど…」
慎作への理解を眼色にふくめて、彼の述懐をいたわってくれた父の言葉を、次の間から祖父の疳癪声が更に強く打消した。
「そやそや、慎作なんかに、ちょっとも権利なんかあらへんぞ」
後に、白けた沈黙が深かった。
慎作は、坑道を見失った土龍の様な父が、最後に頼ろうとする飼鳥を、理性一点ばりで拒否する自分が非常に冷酷なものに思えてならなかった。赫黒い父の額に、藪蚊が一匹血に膨れて止まっていたが、鳥渡、眉をしかめただけで叩こうともしなかった。掌のマメをぽりぽり掻きつつ、頭の中で難解な謎でも解きほぐそうとするかの様に、永い間、上眼遣いに顔を動かさなかったが、ふと決心した様に父は慎作を真直に見た。
「お前が、顔出し出來んことやし、そうや、やっぱり十姉妹は止めにしよう」

「ええ、止める？」

「ああ、爺さんは怒るやろが、止めるよ、何とか考えよう」

父はにじむ様に微笑した。同時に次の間で「何やて、止めるて!?」と祖父の叫びがしたかと思うと、ゴソゴソ赤児の様に匍い出して來た…。

父の默意に、慎作は自分のために飼鳥を思い止まってくれたのだと云う喜びだけでは足りない、もっと大きい感激を覚えた。寧ろ自分への愛だ等と推断するのは、父への冒瀆だと思った。父に一つの根強い自覚を見た…そう慎作は考えた。

が、その翌晩、何処へ行ったのか父は十二時過ぎまで帰らなかった。それは今までにない異例だったので慎作は非常にいぶかったが夜更けに帰宅した父の、大きい過ちでも犯したような自卑的な眼差しと物腰しを、狸寝の眇めに見せつけられて、尚の事、不審を大きくした。不躾な祖父の追窮にも、父は誤魔化す様に笑うのみで、はっきり言おうとはしなかった。それが隔日か、二日置きに半月程も続いた。

その間に只一度、珍らしく濁酒を呑んで酔った時、父は哄笑しながら「まあ、爺さんも、慎作も、心配せんと見ておくれ、今に皆んなをアッと云わせるからな、それまで種明しはおあずけや、あははは、近いうちに、皆んなでエビス顔やぜ」と云った事があったが、その調子が如何にも附元気らしく、あははと笑っても、その笑顔が今にも惨めな泣顔に変りそうなのを、慎作は、いやにはっきり感じた。併し父は、それ以上の詰問には碁盤の様に固ばるのみで答えなかった。

父の秘密な外出―この間に遊びという感じは毛頭なかったが、それだけにまた異様な恐怖を、大袈裟に云わば密封された恐ろしい贈物を前に置く様な恐怖を、抱かずにはいられなかった。

ある晩、とうとう母は、祖父には内密に自分の想像を、そっと慎作に打明けた。

「ひょっとすると…あの人田村へ行ってるのかも知れまへんぜ」

「田村へ！　まさか…」と打消したものの、慎作は変に吐胸をつかれた。予想外の事ではあったが言われてみると、この際、案外近々しい想像なのに驚かされた。田村の賭場へ父が…と想っただけで「勝負」と骰子壺の伏せられた瞬間、試みにピアノの鍵板を叩いてみたら、その音波が散り拡がろうとはせずに何時までも響いているような、極度に張り切った空気、押し潰した囁やきと、袖口と胸元から隠見する入墨、その片隅で、例のお人好らしいにじみ笑を浮かべて、しかし両手は中風の様に震わせているであろう土に汚れた父…が見える様だった。ふと描がき出した幻影の様なこの想像に見る間に、額にはまった絵の様な確實味が

帯びた。だが愼作は何気なく云った。
「母さんに、思い当たる節でもあるの」
「そやかて…こないに毎晩、何処へ行くとも云わんと出て行くのが、第一変やないか、それにあの人の、近頃、落着きのないこと、そら可笑しい位やぜ、引出しの鍵はあの人が持ってるよってに、蚕の金はどうなったか知らんけど、な、愼作、きっとそうやで」
ひそめるだけ声をひそめた母は、若し愼作が「そうだ、それに定まった」とでも云おうものなら、わっと飛び立ち兼ねない様子を示していた。十姉妹を一つの自覚から思い止まってくれたのだとすると、その父がこっそり賭場通いする等とは、どうしても算出されない答案ではあったが、また一方、たとえ飼鳥は思い切っても他に何とか収拾をつけねばならない責任のある父にしては、あの晩、既に「賭場」が思い当っていたのかも知れないとも考えられた。自覚からじゃなかった、少くともそれは第一義じゃなかった。子煩悩から支持する愛児の面目を、理由は第二として盲愛から立てずにはいられなかった。そうは思っても、愼作は父に対して決して幻滅を覚えたりはしなかった。総を胸のうちにおさめて臆病な父が、賭場通い等と云う様な冒険を決意した…その間の苦渋が胸の痛むほどに察しられた。

田村の賭場は巧妙な客引策に依って百姓達を鴨にする、近代には珍らしい（或は当局に何等かの了解を得てるのかとも邪推されるほどに）堂々たる賭場であった。村の銀三や源太等の常連のほか、愼作の村にも少なからず田村のぉ客がある様子だった。この附近には、十姉妹や万年青等の流行を先鞭的にきたすだけに、賭博等の悪習も封建時代から濃い筋を引いていた。田村の賭場は、玄関先でそっと面を見せれば、中ではお客に覆面さえ許した。面を包んだ客がさし向いに黙って賭に熱中し、無意識に覆面をとり、後ではっとして見交すと、それがお互に知人でお互によもやと思っていた人間であった……こんなエピソードまであった。養蚕期の直後等は定例の様に、源太や銀三が百円札の五六枚も見せびらかせつつ一種の勧請に歩いた。
「お前、ちょっと田村の近所までも、見に行ってくれへんかい」と、母にも悲しい確信があるらしかった。
「大丈夫そんな所へは行ってへんと思うが、よし今晩、どれだけ遅くなってもよく父っつぁんに訊いて見るよ」
「そやかって、今晩も、もう九時過ぎやのにまだ帰ってきやへんし！」
とその時だった。表戸が突然細目に開いて、そこに覗う様な二つの眼が光って、声は表でした。
「エエへへへ今晩は！」と漸く戸を開けて入って来たのは、遊人風体の男だった。
「へへへどうも、こんなに遅くお邪魔して何とも申訳ありません。直造旦那のお宅はこちらで？」小腰をかがめ乍らその男は封書をさし出した。そこに、薄い墨で認めた下手

な父の筆蹟があった。

くわしきは帰りて申上候。この使の者に金三十円也お渡し下され度し、家には三十円無之と思うが、三十円のネブチのある品物にてもお渡し下され度し。爺殿にも慎作にも何卒ないしょにお願申候。それからタンスの百五十円は無之御すいりょ下されて何卒々々宜敷願上候。お詫びは帰りて幾重にもいたす可候。

直　造

糸　殿

手紙を書いたこと等の殆んど無い父の、この拙い文章がどんな悲痛な台詞にも増して胸にせまった。荒々しい風が直接身内へ流れこんで、ふっと音を立てて何もかも吹き消された様な気がした。この気配に折悪しく祖父が起き出てきた。

「何や、何や？」と祖父は、手紙をひったくるなり念仏の様に音読して「外道奴」と唾をとばし、再び音読して「情けないこっちゃ、この下手糞な字を見たれ！」と泣声で呟やいた。

「へへへどうも…」他国者らしい男は懐から風呂敷を出して下品に笑い、袖からのぞく入墨に似合ない猫撫声を出した。

「何しろ、このいたずらって奴は「目」でしてね、へへへその運ですね、此方の旦那なんざぁ、仲々どうして素人衆にしちゃ上手なもんですが、何分、今言った様な次第で、今夜その目ってのが無く、それに、あせって追っかけなすったもんですから無理な借りまで背負いこんだ様な訳でして、この落目の時の追っかけってのはまた不思議と！」

「ええ、ゴタゴタ言わんといてくれッ」と祖父は男をグッと睨みつけて、母に怒鳴った。

「糸ッ、何を泣いてるのや、早出してやらんかい、わいの紋付も絹の外出着も、皆包んでやれ、ほほたら、少しは性根にこたえるやろ」

男が出て行くと祖父は通りの悪い煙管を岬の様に唇を尖らせて吹きまくり泣く母をたしなめた。「お糸、泣くなよ、泣いたかて如何なるこっちゃ、見っともない、泣くな、泣くな！」

母は、塗りの褪せた箪笥に凭れかかり、空になった欝金の財布を、ハンケチの様に目に当てて嗚咽った。

妹は、影の様に裏口から出て行ったと思うと、すぐコソコソ戻ってきてカマドの蔭に蹲った。

「あんな人が丁半するなんて、蚕の金までとられてしまうて、ほんまに、肥代や今度の利息どうする気や、夜も寝やんと桑洗うた絹や、手伝うてくれた新宅の里代にも、まだ一枚の着物もこしらえてやらんのに…、ほんまに、あの人、気でも違うたんや！」

「気も狂うやろかい、この旱と繭の不作やないか、彼奴か

てその苦労しとるんや、苦しまぎれに田村へなんか行く気になりよったんやわい。こんなやったら十姉妹でも飼うといたら！」と祖父は、たるんだ瞼を釣りあげる様にして慎作を睨みつけた。

「鳥でも飼うといたら、こんな事起らなかったンや。わいがなんぼよぼよぼでも、十姉妹の世話位出来たんや！　みてみい、あれから鳥の相場、まるで鰻のぼりやないか、それにこれから南洋へまで送り出すって、新聞に書いたある。それやのに、この餓鬼が、屁理窟並べやがったさかいに…こら慎作未練やないぞォ、お父っつぁんが、一人で苦労してばくちみたいなものに手を出しよったのも、みんなお前のせいやぞ」

祖父は喋り乍ら、日頃からの不平不満に一時に火が付いた様に熱して行った。裄丈の短かい浴衣が、憤怒を笑うように枯れた全身にまつりついていた。

「さ、違うなら違うと言うてみい、こら、なんぜ黙ってくさる、返事せんかい、この罰あたりめ、この先、この一家はどうして暮らすのか言え。これでも貴様はまだ、十五円の月給仕事仕腐さる気か!?　改心するなら両手をついてあやまれ、こ、こら、慎作、なんで、寝転びやがる！　この阿呆、年寄やと思うて馬鹿にする気か、こん畜生！」

堪え兼ねた様に祖父は立上ろうとしたが、利かない体は無闇な威勢を裏切って、つつかれた達磨の様に尻餅をついてしまった。

その夜、父は帰らなかった。

明け方、心配の余り、町の田村まで迎いに行こうとした慎作は、裏の田で軍雞の様に眼を薄黒く窪ませた父が祈る様に眼を閉じて、水車を踏んで居るのを見た。

ふいと慎作を見付けた父は、危く足を踏みはずそうとしたが、やっと両肱で体を支え、それでも微笑もうとした。が、笑えなかった。どんな時にでも、看板の様に面から去った事のない微笑が、もう拭きとった様に消え去ったのだ。慎作は、ただ泣き笑うより術はなかった。出来る事なら、愛撫を籠めた手で父の背を叩き、何んでもよい涙の出る様な慰めを何時までも言い続けたかった！

振りかかってくる火の粉の様な苦痛は、街と野にあふれた悲惨は、すべて皆、反抗の火を焚く燃料たるべきであった。だが一家の悲惨はあまりに身近過ぎる様だった。それは余りに生々し過ぎる薪であった。理智が悩みを清算する前に感情は迷児の様に泣きわめいた。慎作は、この事実に、全く打ひしがれた自己をはっきり知った。そうだ、慎作は常夜燈の様に消えなかった胸の火を、忽然吹き消されたまま、村を背に、同志を背に殊に真暗な一家を背にして、何処までも何処までも走って行きたかった。だが、足には思想のおもりが離れず、頭では間断なく理智の鐘が鳴った。何のこれしきに、闘争児の総てが甜める苦痛ではないか、高く批判せよ、あらゆる煩悶を情熱の糧にせよ！　けれど

この呟きも野面を渡る一陣の風であった。一戦ぎの後に、古沼の様な憂鬱が襲いかかった。これが、毎日の闘争にまで尾を引いた。今まで気に止めなかった同志の、ふと不用意に洩す利己的な言葉の端が棘の様に心にささり、ともすれば白眼をむきたがる仲間の百姓に、日頃にない軽蔑を覚えたりした。

慎作は恐れ乍らも想った。もう一つの苦痛が、より大きい試練がほしい、それに依って現在の如何にもならないこの怯懦が、このまま絶望の底へ沈潜してしまうか、或はまたそれを契機として再び暗雲の様に情熱が染め出されるか……いささかこの希求に不安とあるおこがましさを覚えつつも、抱かずにはいられなかった。

白東会を雇って応戦準備を整えた地主達は、戦艦の様に落着き小作人達の結成を眼下に視下した。

「農民組合を脱退して来い。すべての交渉はそれからの事だ」

これが動かない最後の返答だった。

示威と結成の固めを兼ねて、大演説会がS寺の電気のない大広間で開催された。説教壇に弁士が立って激烈な言葉を吐いた。百目蠟燭が聴衆のどよめきにゆらぎ、その都度、融け合った陰影が生物の如く躍った。

藤本が、台に立った。川っ縁や林で鍛えた声が、二十四にしては朗々として太かった。金色の仏具に反映する柔かな光芒、感激に息を呑む聴衆、一堂の場景は何か尊厳な、旧びたフィルムの様だった。藤本の論点は白東会に及んだ。

「…諸君、地主は遂に白東会を抱き込んだ。これが彼奴等の常套的な最後の手段なのだ。白東会とは何か…名を正義に藉りたる暴力団に過ぎないではないか！　彼等地主は、今や悪劔をとって立ったのだ。諸君は、桜田門外の雪が血に染められたのは！　井伊の握った暴劔の報いであることを忘れないだろう。我等、正義を主張する、国宝たるべき百姓に、劔を持って臨まんとする彼等…」

この時であった。演壇の直前にすっくと立あがった一人があった。おや、と思う間もなく人陰は演壇に飛びあがった。

「国賊ッ」叫喚が礫の様に聴覚を打った。

と、白刃がサッと光芒を切って、高く翳された藤本の右腕に、にぶい強靱な音を立てた。慎作は駈け寄った。どっと殺到する群衆の上で、白刃が瞬間鋭くきらめいたが、忽ち拭われる様に消えた。藤本は血のしたたり落る右腕を支え乍ら、微笑を忘れていなかった。左右から警官に掴まれたその男は荒々しい胸毛の胸をはだけて、闘犬の様に吠え立てた。

「俺は、白東会の前川だ、正成じゃないが、七度生れ変って国賊を誅すぞ」

犯人を奪おうとして犇めく群衆に、揉みほぐされそうになり乍ら警官は退場した。

藤本の右腕は失われた、だが、彼の逞しい勇気には、失くした右腕だけ附加した様だ。
「なあ、慎ちゃん、こうして俺達の意志は鍛金の様に強くされるんや、白東会の奴等、俺が右腕やられたさかい、もう争議には出るまいて言いふらして居るそうだが、ふン、右腕一本位で屁こたれる品物と、品物が違うわい。左手と足がまだ二本もあるやないか、かりに、これ皆やられて胴ばかりになっても、若し生きてさえいたら、俺は止めんぞ、そうなったら慎ちゃん、いざり勝五郎やないが乳母車にでも乗って、君に後押しして貰うわ、ははは」
「ああいいとも、後押しして引受けた」
藤本の凄まじい闘志に、却って励まされる形であったが、それでも慎作は、久しぶりで心の底からはっきりものを言った様に思った。とぐろを巻いていたが、春を迎えた蛇のそれの様に、のろりと頭をもたげた様な気がした。自家の暗鬱は、まだどうしても燃えない薪ではあったが、藤本の遭難は暗い心に一つの窓を開けてくれた。
病院を同志の宮崎と連れ立って出た時は、黄昏であった。宮崎は涙をためて藤本の闘志を讃嘆した。
「宮崎、やろうぜ、どうせ、階級戦線に体を曝す吾々だ」
慎作も合槌を打ちつつ、寧ろ自分に言い聞かせる気持だった。そうだ。まだ俺の心は死火山ではない筈だ。今に、藤本に負けない活動を始めるであろう。
常設館の角を曲がってA川に沿って坂をのぼりつめるところA橋と小さい公園の入口とが、T字形に接して居た。そこに夕照を受けて涼みの群が円を造っていた。近寄るにつれて、はげしい拍手と笑声が聞えてきた。
「何んだろう」と、宮崎は小走りに寄って行った。慎作も大股になり延びあがる様にして中心をすかし見たが、二三間先の宮崎が突然くるっと廻って慎作を睨み、何か訳の分らない叫けびをあげたので中心に何があるか分からないまに立止まった。宮崎は何故か酷く狼狽して、慎作の腕を摑んで橋を渡ろうとした。
「何だ、どうしたんだい」宮崎の腕にグングン引っぱられながら、後に凭れる様にして慎作は原因を探った。と、また、宮崎は急に立止まった。まじまじと慎作を見詰めて、徒に唇を歪めた。
「おい、喫驚させるなよ」と呆れて慎作が叫んだのと、聞覚えのある声を耳にしたのと、群衆の隙から眼球を引抜かれる様なものを一瞥したのと、殆んど同時だつた。
「おおッ」慎作は泳ぐ様に群衆をかきのけた。クワッと最後の一炎をあげた晩暉の中に、拳が空を叩き、熱弁をふるっているのは、盲縞の裾をはしょり、全身を痙攣させた、まぎれもない慎作の父だった。
「物持階級は百万円の問題である。吾々は団子の様に困って…」
父は据えきった眼をギロッギロッと人々の上に流して行ったが、突然、恰も空から落ちかかる何物かを受け止める

様に、両手を高々と翳して、一語一語に永い尾を引かせて叫んだ。
「十姉妹は悪いぞォ、なんぜ皆は、鳥なんか飼うのかあ、丁と半とは仲々分からないぞォ、諸君、物持階級は百万円の問題でああるー」
誰れかが「ヒヤ」と彌次り、誰かが「ノー」と嘲笑った。怪訝そうに足を止める新らしい通行人も演説者の狂気を知ると安心して顔を崩した。
「…であるからして、吾々は団子の様に固まって…」父は皮肉にも愼作の演説の端っくれを、而かも愼作そっくりの抑揚で叫ぶと、だしぬけに掩口された様に行詰まり、義眼の様に瞳孔を拡大させた。汗と涎れが哀愁と憤怒の表情のまま氷りついた顔皮をびっしょり濡らしていた。
「団子の様に固まってどうするのや」
「喰うのかい」
「この狂い、さっきから同じ事ばかり言いよるがな、浪花節でもやってんか」
父は狂った。狂った父が、機械の様な饒舌であった。昏倒しそうな衝動が愼作を一種の無感覚に誘ったが、次の刹那せきを切った怒濤の様なものが、爆発した火華の様なものが、全身に狂い廻った。
愼作は泥酔者の様によろめいて近寄った。
「おい、お父っつぁん、しっかりしてくれ、おい、おおいッ」
涙で震える視野に、不審気な青い顔が、ぼッと霞んでいた。
「おい、分らないのかい、俺が—愼作が分らないのかい」
襟首を鷲掴みにされて身悶えした。父は渋面一杯鯉の様にパクパク口を開き、何か叫び出しそうにした。群衆はどよめいて、囁きが飛び交うた。
「あ、親子やぜ」
「ありャ、S村の直造さんや」
「二人とも狂うてンのかい」
「何や、何や?」
愼作は、父をかかえ込んで叫んだ。
「諸君、これは私の愛する父です。私は、父の狂ったことを今はじめて知りました。私の父は従順しい、正直者でした、それが…どうして、こんなあさましい気狂いになったか、諸君、諸君にも責任があるのだ。それは十姉妹の悪流行だ、この大旱りだ、貧乏だ、悪地主だ、いや、それはそれは資本主義制度の…」
声は泣きかすれて行った。が、見よ! 愼作の胸底にうず高く積まれた悲惨な薪に、遂に火がついたのだ。今こそ無産階級意識が、大炬火の如く燦々と輝き出したのであった。

（一九二八年五・七・十一月「文芸戦線」）

氾濫

黒島伝治

一

晩に人々は、寺の広場へ出かけて行った。手拭を継ぎ合して縫った派手な浴衣を着て、老婆が扇を持っていた。娘達が四五人ずつ群がって、軽く笑いながら、小さい櫂をかついで、田の中を急いで行った。手には緑色の手甲をはいていた。

「おい、八重ちゃん。今夜は俺と踊ろうや。――安ッさんは待っても来やせんぞ。」

「いやだよ。」

「何だって……いやなら、むがむじに腕で行くぞ。」

娘達のあとから、鉢巻をした肌ぬぎの若衆が追いかけるようにつづいて来た。

「いやな奴！ ――十の阿呆。」

娘は、うしろへ振りかえって、十吉に云いかえした。一番うしろの小娘は、不意に、一人の青年にくすぐられて、故意に、仰山な悲鳴をあげた。

「どうしたんだい？」くすぐった青年は、白ッぱくれていた。

うしろの方で、誰かが突然、おかしそうに高く笑いだした。八月の夜は、さわやかに、透明に、落ちついて黒ずんで行った。遠く山際で稲妻がきらめいた。寺の広場には赤い提灯が群がり、篝火が燃えていた。火の粉がパチパチ飛んだ。そこの広場の一角だけは、空が赤く火事のように照りはえていた。

人々は、草履を引きずって、広場やその附近にぞよめいた。土ほこりが、篝火にすけて、眼に見えて、黄粉のように立上った。荷桶を担った、寺男が乱暴に水を打ってまわった。女達は、キャアキャア叫びながら、水の飛沫をさけて一方へ密集した。

「なんて勿体ないことをするんだ。」隅の方で、ある爺さんがぶつぶつ云っていた。「一荷の水だって、田へ汲んでやれや、よれかけとる稲が息づくんだ。」

提灯をつるした四本の柱に支えられている櫓へ、太鼓や三味線が持ち運ばれた。囃方が、水瓶をさげて梯子を上った。

雑然と群がっていた男女は、互に組みあって、櫓の周囲に輪を作った。

海に沿うて、長く一列にのびている松原のかげに墓場が

あった。そこには、燈火が点々と静かに、ねむるようにともされていた。啓助が燈火をともし、墓前に線香を立てて田の畦道を引っかえしていると、いくえに出会した。青い稲の香わしい匂いがただよっていた。
「私も、あんたに出会すような気がしていたの。」いくえは白い反ッ歯をあらわして笑った。
「俺もなんだか、そんな気がしとった。」
啓助は、いくえについて、また墓場の方へ下った。波の音が稲田の上を伝ってきた。海岸は、人影が少くひんやりしていた。松原の沖に、八月の波が、夜光虫で青くきらきら光った。
いくえが、燈火をともし、線香を立てて墓石の間をくぐりぬけて来ると、二人は、別の道を川伝いに寺の方へ上って行った。稲田の夜は、暗く静かであった。
「お月さんが出なけや、お盆のような気がせんわのう。」いくえが云った。
「十二時すぎなけや、新だから、月は出ないんだ。」
啓助は、闇の中に、嬉しそうないくえの横顔を見ながら、二人が初めて手をつないで一晩中踊りぬいた夜のことを思った。まだその時は、旧暦でお盆をしていた。大きな月が踊っているうちにいつか山の峡から出て来たものだ。櫓から手を伸ばせば届く位に、それは地上に接近して見えた。あれから何年たつだろう。——その時、彼は二十歳になったばかりであった。いくえは四ッ少なかった。

彼女は、町の莫大小工場へ年期で稼ぎに出ていた。盆と正月とには、ひまを貰って村へ帰って来る。啓助は、顔を合せるたびに、彼女が次第に年を取り、やつれてくるのを見た。初め、彼と手をつないで踊った時には、彼女はまだ内に充実した処女の生気を持っていた。
「いつ年期があくんだったかな?」
「この十月いっぱい。」彼女は、頬に血液をみなぎらせ華やかになった。中から嬉しさがこみ上げて来るのであった。
「でも、今年中は、居らなけやならんかも知れんわ。」
「どうして?」
「私、モスの羽織くらい一枚稼いでこしらえたいと思うの……」
大きな樟が、杜の上にぬきん出て、傘のように拡がっている。その杜かげに彼女の家があった。踊があると毎晩、彼は、そこの納屋かげにかくれて、彼女が扇を持って出て来るのを待ったものだ。彼は、すっかり暗くなるのが待ちきれなかった。夕方、たそがれだすと、そこへ行って立っていた。蚊がやかましく、物置からうなり出てきた。
「だいぶ待った?」いくえは、白い反ッ歯を見せながら、土蔵の細あいから、そっと忍び出て来た。
「いや。」
「あの林のかげから廻って行かない。」
二人は、家人に気づかれないように、草履の音をしのばせて、家の裏から人通りの少ない林の方へ行った。その家

は抵当に這入っていた。貸主は、家を取り上げようとしていた。いくえが莫大小工場へ行くことになったのは、その借金が主な原因だった。

啓助は、盆がすむと、あくる年の盆が来るのを待った。そして翌年の盆がすむと、またその次の盆が来て、いくえが町から帰って来るのを待った。彼は、幾年盆を待ったであろう。彼は二十七歳になっていた。いくえは二十三だった。

彼は、小作料を三年分滞納していることを思った。まだ西瓜が出だしたばかりの夏である。だが百姓達は、既に、食うべき米を殆んど持っていなかった。二人が結婚するには、米がなければならなかった。

二

薪を加えられて、篝火は、花火のようにパチパチ火の粉を散らした。

踊子が輪を作っている外側に、踊に加わらない老人や中年者が、蓆を敷いて見物していた。太鼓が調子をとって鳴り始めた。おぼつかなげな三味線がそれに和した。踊子は、日の丸の扇を拡げて振った。派手な水色の中柄や、花模様の長襦袢が彼等が手足を動かすにつれて、提灯と篝火の光りの下にひらひらひるがえった。

「いくちゃん踊れよ。」

「手拭をくれるまで踊ってやろうかしら。」いくえは、啓助を見て微笑した。「あんた踊らない？」

「俺や、今年はやめとく。——誰れかいい相手はないかな。」

いくえは、見物人の間をかき分けて、相手をさがして歩いた。彼女がほかの男と踊っても啓助は嫉妬する男ではなかった。しかし彼女は、意識して相手を選んだ。啓助と同年輩の者と手をつなぎたくなかった。

太鼓の音は、広場の空気を震動させた。連日の野良仕事に、日に焦げ、汗に汚れた音頭取りの声にも張気があった。盆の休日を、彼等は、夕方まで寝て暮し、休養したのだ。

踊子は、軽く見物人の前を舞いながら通りすぎて行った。いくえは、十一になる彼女の従弟をつれて来た。彼女は細紐でたすきをかけ、長い着物の裾を引き上げた。

「仙ちゃん、さ、とびこむのよ。」

潮風で皮膚を焦がした、肉づきのいい仙吉は、いくえに手を引かれて、見物の間から早足に走り出た。彼女は、踊子の輪の切れ目を探した。そして、そこへ、投げられた石のように全速力でとび込んだ。

啓助の前を幾組もの男女が、扇を振り、分れては、また手をつなぎながら、キリキリ廻って行きすぎた。バネが狂って、で、規則的に、はねている人形のようだ。バネ仕掛音頭の調子にはずれた踊り方をしている組もやって来た。わざと滑稽なしぐさをして見せる老婆も交っていた。老人

は、踊りながら、傍の若い男女にわるさをしかけた。啓助はそこに、町へ稼ぎに出ている沢山の若い男女を見た。紡績工場へ行っている者があった。女中奉公から帰っている者もあった。石鹸工場から帰っている者もあった。また、啓助は万問屋の息子の喜作を見た。彼は、ふと嫌悪と不快から顔をそむけた。女の服装をしてよろよろ戯れ半分にやって来る。それが喜作だった。喜作は鶴亀算さえ完全に解けない癖に親爺の威力で小学校を常に首席で通した。次には、金の威力で町の学校を卒業した。啓助は、羨望と反感をいまだに忘れることが出来なかった。しかし、彼が顔をそむけたのは、それにのみ起因しているのではなかった。

喜作は、踊りつつ衆目を憚らず、薄い浴衣を通して、肉体の温度や、柔かい皮膚の感触が殆んど直接的に感じられる、発育しきった匂い高い女の腰に抱きついた。相手は、憐憫を求める捨てられた恋人のように、喜作に反抗しなかった。その女は、健かな、汚れない血を持っていた。篝火のかげに、彼女は紅みを帯びて昂奮し、かがやいていた。弾力ある二つの腕は、強い速力で、磁石のように、相手の肉体を引きつけた。二人は一つになった。そしてバネのように脚をはね上げながら見物人の前を廻った。喜作は故意によろよろした。女は、倒れそうになる彼を支えた。それが妹のお清だった。

「何てことをしやがるんだ！」啓助は、歯痒ゆさと同時に腹立たしさを感じた。

二人は、離れて扇を振った。そして幾秒かの後、再び手をつなぎ合って、尾のあるアミーバのようにむすばれ、一つにとけ合った。啓助は、お清を引きずり出しに、とびこみたくなった。彼は自分の顔がほてって来るのを感じた。妹の醜い、ふしだらな恰好は、多くの踊子の中で特別に目立ち、見物人に対して、小作人との結婚を真面目に考える男ではなかった。それだのに、お清は、一図に、喜作の云うがままに柔順になっているのだ。

太鼓が不意に鳴りやんだ。夢中に廻っていた踊子は、号令でもかかったように、立止まった。坐っていた見物人の中から五六人の老婆が立上って、踊子の方へ早足にやって行った。

寺の廊下へテーブルにのせて、紅木綿の手拭が持運ばれて来たのだ。皆、その紅い手拭に眼をつけた。見物席からまた、五六人立上った。踊子は列を乱して、廊下の紅木綿の方へなだれよった。

「待て、待て！　順を作って来い。慌ていでも、皆に一つ宛やるんだ。」

テーブルの傍には、万問屋の下男と、お作とが立っていた。お作は、にこにこ笑った。彼女は、五十歳をすぎたばかりだが、髪は真白になっていた。下男は、さきに、紅い手拭を一筋取って、鉢巻をして人々に叫んでいた。

「おい、おい。順を作って来い。順を！　皆に一と筋ずつ

誰にでもやるんだ。」
広場からは黄色の土煙が、篝火にすけて、再び、ひどく立上った。
村の中ほどに、新しくつけられた道路に面して、新しい二階建がある。村に使う必要な品々を、なんでも残らず並べたてて売っている。菓子、荒物、雑貨、酒、醤油、鍬、肥料、それから風薬、肝油。これが、万問屋の半次郎の店だ。
そこには、主人の姪の新子が店番に坐って、酸っぱい声で笑い喋っていた。新子は三十をすぎていた。が独身だった。口の悪い青年は猥褻な表現で――その表現を自ら喜びつつ――彼女は生れつきの性的欠陥があると云っていた。
半次郎は、小作地の差配も兼ねていた。地主の節田組は村の近くに事務所がなかった。彼は、節田組の手代の仕事をやっていた。小作料の籾粒を口に入れて、乾燥の程度を嚙んで試すことを忘れない男だった。掌に籾粒をのせ、口を細くしてそれを吹くと、空殼が呼気の力でとび落ちたりする。彼はそういう籾を見つけると、籾俵を秤にかけることを要求した。節田組の社長はF男爵である。その男爵に忠義立てをすることを名誉と心得ているのだ。
その外、金貸し、穀物問屋、木問屋など、儲かる商売なら何にでも半次郎は手を出した。
店の品物は、粗悪で高かった。醬油は塩水のようだった。酒には薬や、水がまざっていた。彼が貸した金は、まるで高利貸のような利子を取った。百姓達の苦情は、絶えなかった。だが、半次郎は、
「これで気に入らなければ店へ厄介をかけに来るな。」と叱るようにがみがみ云った。
新子は、村に一軒しか雑貨店がないのにつけこんで、小作人を見くびり、自分の好悪に従って売値に高低をつけたりした。
彼女は、金をよこす男には、いくらでも水の混った酒を押し売りした。金のない男には、コップ一杯の酒をさえ渡さなかった。季節に、掛が払えない家からは、穀物でも、薪でも、鍬でもそこらにあるものをなんでも金の代りに取り上げた。
半次郎の妻は、信心ばかりに凝りかたまり、商売には、全然かかずらわなかった。彼女は――名前をお作と云った――近所の老人達をさそい合して、よく隣村の真言宗の寺へ参った。どこかへ参る時、お作は、店へ這入って、駄菓子と一緒に向うへ供えるものを持出した。
新子は、腹立たしげにふくれ面をして、何にも、ものを云わず、叔母の行為を睨むように見ていた。
「あとをちゃんと閉めといて頂だい！」
新子の物惜みと不服は、こういう表現をとった。そして、叔母が閉めたばかりの障子を彼女は、手荒く開けたて、梯子段をきしきし踏みならして、二階へ馳せ登った。

「また叔母さんが店のものを持ち出したぞな！」
半次郎は二階で帳面を繰り、利子の勘定をしていた。
「ふむ。」彼は眼鏡を外して考えこんだ。
「煎餅を二十五枚に、線香を三束……」
「ま、ええよ。持って行かせ。」
「なんぼ持ち出したって切りがあれせん！」新子の癇高い声は、近くの田で草を取っている百姓にまで聞えた。
「ええよ。信心ごとに使うたものは、また御利益で、ひとりでに戻って来るもんじゃ。ええよ、ええよ。」そんな時、半次郎は、満ち足りた者の微笑を浮べた。
お参りごとの行きかえりに、お作は、何かむしゃむしゃ食った。老人達に煎餅を分けてやった。
彼女の信心とお供えものは、村人の心を和げた。半次郎と新子に深く反感を抱き憤っている者も、同じ家に信心深いお作が住んでいることを思うと、まだしも許せるような心持になった。宗教が民衆の闘争力を鈍らせるように、彼女の信心と施し物は、百姓達の燃え上る反抗心に安全弁の役目をした。
彼女は、毎年、お盆には、手拭をやることにしていた。百姓は、何ヵ月かの労力を積んで作った穀物を売らなければ、一銭の金さえ得られなかった。また、彼等は、その金を出さなければ、一枚の紙だって只では得られなかった。お作の手拭は、彼等を喜ばせ、彼等の憤怒を解いた。人々は只で貰える手拭をあてに広場へ集って来た。

小娘達は、貰った手拭を早速拡げて頭にねえさん冠りをした。娘はそれで、頭や顔をかくして踊るのだった。お作は、提灯の光の下に喜ぶ婆さんや若者や娘達を見て、自分までが嬉しそうにほくほくした。
下男は、脇からひょいとテーブルのさきへ現れた者を突きのけ、順を作って来るように力いっぱいに繰りかえし叫んだ。
踊子は、褒美を貰いに行く生徒のようであった。櫓に上っていた太鼓方も、三味線方もおりてきた。見物人は蓆から立上った。彼等も、踊子のうしろに列を作って押しかけた。
「何だい！　こんな安物の手拭をくれたって！」誰かが列の中で腹立たしげに叫んだ。
「水のような酒を売りやがって、こんな手拭でごま化そうたって、ごま化されやせんぞ。」
「そうだ。その通りだ！」ほかの声が応じた。
お作は、嬉しげに笑うことをやめなかった。
「定五郎！」彼女は下男に云った。「あの庄さんにも一つやっておくれ」
定五郎は、文句を云った男の方へ別な手拭を投げた。人人はどよめき、手拭を受取ることを急いだ。定五郎に突きのけられた男が、反動的に強く押しかけた。
廊下の柱の提灯は、ぼんやり周囲を明るくしていた。奥の仏壇には、かすかな燈明がふるえていた。そこは、暗く

無気味で、抹香の匂いがただよっていた。喜作が突然その闇の中から折り畳んだ手拭を腕一杯にかかえてむっくり廊下へ現れた。彼は、だらしなく笑い、依然としてよろよろした足どりだった。彼は、廊下に出ると彼は、腕から急に力を抜いた。かかえられていた手拭は、一時に、廊下へ崩れ落ちた。

「そらッ、行くぞ！」

不意に彼は、のど一杯の声を出した。人々は彼に眼を注いだ。喜作は手拭を掴み上げた。そしてつづけさまに、群衆の頭をめがけて、畳んだ手拭を投げた。手拭はそう遠くへはとばなかった。

人々はどよめき、列が乱れた。喜作は出たらめに、大声で叫びながら、手あたり次第に手拭をまるめて、広場の方へ投げた。

篝火のあかるみは衰え、提灯はゆらめいた。群衆は、闇を通してとんで来る手拭を眺め、その方へ殺到し、互に手をかきむしり合った。

三

太陽が登り始めた。白い、爽かな夜明けが、いつか、灼熱焼くような日中に変って行った。夜半すぎまで踊りくたびれた人々は、泥臭い溝の水が煮えかえり、悪臭を放っている稲田へ水を取りに出かけた。

旱天つづきに、田の水は涸れ、所々、亀裂を生じていた。盆の休みに水を汲まなかったことは、直ちに稲の発育に影響した。葉末のよれ方が一層ひどくなった。海岸近くの田には、塩気がさした。青い真直な稲葉が、錆鉄色に変りだした。

啓助は、父親の啓太郎と二人で池の水を汲んだ。彼等はいつも、休日の後では、休んだ分をも取かえすために、二倍も三倍も働かねばならなかった。百姓が休んでも、太陽は、水分を蒸発させ、稲を枯らすことをやめはしなかった。雑草は、根をからませはびこることを中止はしなかった。

太陽は、薄い襦袢を透して焼きつけるように肌を射た。何百回となく重い釣瓶を引き上げると、腰が筋ばり痛んだ。啓助は、百姓がつくづくいやになった。稲はこのまま四五日も放って置けば、枯れてしまうだろう。すると、春以来の労力や、肥料や、種苗がなんにもならなくなってしまうのだ。

出稼ぎから帰っている者達は、正月以来、着汚し、着破った着物を洗いつづくって、行李につめ、村の背後の丘を登って、再び町へ出稼ぎに出かけた。いくえもそこを登った。妹のお清もそこを登った。それから、与吉も、浪次もてい子も。

啓助は、撥釣瓶を引き上げながら、それを見送った。彼も二十歳以前に、醤油工場で働いたことがあった。工場の労働の方が野良仕事よりも遥かに容易だった。労働時間が

十時間働くとしても限られている。それだけでもよほどましだ。野良仕事はそうは行かない。彼は今、十三時間も、十五時間も働いているのだ。そうして、仕事はなおあとからいくらでも追っかけて来る。

丘の上には、松林があった。松林を登りきると、道は平坦になって、細く真直につづいていた。若者達は、そこを行っていた。一里半歩いて停車場へ着くのだ。

彼等は、町でいくらかの金を稼いで来た。そして、それを、家の生活費や借金の利子にあてた。が、それだけでは半次郎への節季の支払に足りなかった。不足分だけ金の代りに麦を渡さなければならなかった。それは、啓助の家でそうするばかりではなかった。百姓達は、それぞれ、息子や娘を稼ぎに出し、儲けてきた金は、すっかりそのまま半次郎へ払ってしまった。その不足は、食糧とする麦を節約して金の代りに渡すのだ。

彼等は、理由なしに、只で大豆一粒さえ半次郎へやりはしなかった。半次郎へ渡すものは、小作料だった。肥料代だった。酒、醤油、その他の日用品を買った代価としてであった。ところが要求されるままに、それ等を渡していると、一年中、家族の者全部が町と、村で汗を流し、骨身を削って稼ぎ得たものを悉くやってしまわなければならないソロバンになった。

彼等は、自分の空腹を幾分か満たし、餓死すまいとすれば、それだけ小作料が払えなくなった。そこで、一年分滞納した。彼等は小作料一石六斗を一石一斗に負けることを要求した。要求は容れられなかった。二カ年分滞納した。

百姓は、酒を二合のむところを一合に節約した。団子の砂糖餡を塩餡にかえた。ある者は、欲しい酒をやめてしまった。またある者は、茶碗に五杯の麦飯を、四杯で我慢した……。

四十人ばかりの若者が町へ行ってしまうと、村は急に空ッぽになったように目立って淋しくなった。ひょろひょろして手脚のきかない老人が残されていた。あとをついで百姓をすべく習慣づけられている長男が残されていた。残された者の前に希望はなかった。飢餓と過労があるばかりだ。

一反歩ばかりに、正午からかかって汲んだ水が、まだ夕方になっても、田の隅々に行き渡らなかった。

「また蟹が孔をあけとるんやらしれんぞ。」啓太郎は、薄暗くなった田を足先でさぐりさぐり見まわった。

海岸から上ってきた、大きい黄い強盗蟹が沢山住んでいる。それが田の底や、畦の端へ深い孔を掘った。蟹は稲の葉や雑草をついばみ、肥料を孔の中へ引っぱりこんだ。百姓は、見つけ次第、その甲羅を叩き潰した。その蟹の孔が鰐のようにぐいぐい水を呑みほしてしまうのだ。

「畜生！　また孔を開けとるわい！」向うの畦の近くで啓太郎が腹立たしげに云った。

啓助は、がっかりした。急に疲労が増して来た。

あたりは次第に暗くなった。人家では老人が蚊遣火を焚

き始めた。蓬の煙が稲の上を静かに流れ匂って来た。
　啓助は、ふと、手に持っている釣瓶の竿が見えなくなったことに気づいた。汲み上げられて底深くなった水面に釣瓶があたるのが手に感じられる。が、池の石崖が見えない。稲も、畔も見えない。汚れた指を単衣の袖で拭いて眼をさぐってみた。潰れているのではない。開いている。それだのに眼が見えない。
「お父う。俺ら、鳥眼にやられたようじゃ。」彼は悲しげに泣き出しそうな声を発した。「眼が見えん。」
「どうした？」
「俺ら、鳥眼にやられたようじゃ。眼が見えん。」
「半次郎の二階に電気がついとるだろう。――あれが分るか？」
「いいや、分らん」
　彼は、父親に手を引いて貰った。そして、畦を踏外さないようにさぐりさぐり細道に出た。
　どっか遠くから、御詠歌と鐘の音がなごやかに伝わって来た。
「あれはどこ？」
「あれか、あれが半次郎の二階じゃ。お作が人を集めて御詠歌をあげとるんじゃ」
「ああ、成程。」
「あの電気が見えんかい？」啓太郎は口惜しそうに繰かえした。「五十燭が光っとるんじゃが。」
　父子は、細道をさぐりながら、ぼつぼつ家路をたどった。啓太郎は、寸時、立止ってなごやかな御詠歌に耳を傾けた。彼は、悲しい、湿った心持になった。
「盆も、とうとう去んでしもうたか！」

四

　九月がすぎ、十月が来た。軟い北風が陸から海へ毎日稲穂をそよがせて通った。蝗が葉から葉へ、はねとんだ。鵙子の栈が立てられた。
「半次郎から刈入れまでに昨年の地子を納めろちゅってやって来たが。」
　或る夕方、晩飯を食おうとしていると、誰れかが戸口で云った。そして、なお、何か小声で喋べって、声の持主は向うへ消えてしまった。
　啓太郎が蒼くなって這入って来た。その唇がぴくぴく慄えていた。
「今のは誰れじゃ？」勝手元で鍋を洗っていたお鹿がきいた。「じゃらじゃらしたことを云うてくれな。刈入れまでに地子を納めろたって、米も籾も有れやせんが、刈入れてから始めて籾が取れるんじゃないか！」
　箸を持っていた小さい栄枝の手がぶるぶる慄えた。
「なんでも、地子を納めなんだら、半次郎はお上に頼んで今年の稲を刈らさんという算段を立てとるらしい。」

啓太郎の声は慄えた。何か目に見えない悪霊が家の上から襲いかかってきたようだった。
「何じゃって？」婆さんは、二本の前歯を露わした。「そんなことになったら、うら等、どないしたらええんじゃ。地子に納める米は一升もないのに。」
「立毛差押えをやろうというんじゃな。」鎌の柄をすげかえていた啓助が云った。
「うら等、昔人間にゃ、今の者のすることが訳が分らんわ。」お鹿は泣き出しそうな顔をした。「こっちに、汗水たらして休みもせずに作ったものを、むざむざと取り上げて、饉えさそうとは訳が分らんわ。」
土間の隅でミノルカが、何かに驚いて、けたたましく騒ぎだした。
「どうしたんぞいの？」
病気で寝ている千代が納戸から這い出て来た。栄枝を産んで三十日も経たないうちに、田植に這入り、それがもとで血の道が出た。彼女はそれから始終健康がすぐれなかった。ひどく黒血がおりて、身体を引き締めている筋が狂ってしまったような気がする、彼女はそんなことを繰りかえしていた。彼女の病気は七八年もつづいていた。
「あアに、なんでもない。俺がたしかめて来てやる。」啓助が茶漬をかきこんで外へ出た。
家の中には、薄暗い豆ランプが一ツともっているきりだった。ホヤには黒い煤がこげついていた。ホヤの上辺のふちはかけていた。油壺にはほこりが積んでいた。芯がジジジイと不吉な音をたてた。
「苗一本も植付けん者が刈らさんやこし、そんなじゃらじゃらしたことがようも云えたこっちゃ！」お鹿は繰りかえした。「誰が川普請をしたり、溝をつけたりしたと思うて、刈らさんやこし云うんじゃ。……砂のような田だけ有ったって何が作れるもんか！」
「今年や、もう麦も売ってしもうたし。」啓太郎は嘆息した。「稲が刈れなんだら何を食うて暮すか……芋や大根でもかじるか。」
ランプの芯がつづけて、ジイジジ、ジイジジと音をたてた。そしてどうしたのか、暫らくジイジイジジがつづいて、急にポッと消えてしまった。
家の中がまっ暗闇になった。
「石油はないかな？」母の千代がきいた。
「もう徳利に一としずくも入っとらん。」栄枝が答えた。
「ごそごそしてランプを割るとまた銭がいるぞ！」お鹿は孫を叱りつけた。「われ、じっとしとれい！」
病気の母親は溜息をついた。
動いていた子供は、身体を小さくちぢめて、手を両脇につけた。誰れも微動だもしなかった。やがて、栄枝は、祖母の耳に入らないように、ひそかに敷き流しの寝床の方へぽそぽそ這って行った。

五

スコップのような大きな手を持っている啓太郎は、一度に二株ずつ握って鎌に引っかけた。栄枝がそれを真似て、手頸を曲げて二株を一緒に無理に握りこもうとした。稲は彼女の手にあまった。そして、湿った粘土の上へバラバラに乱れ倒れた。

「てんごをするな！」お鹿は、黒く煤けた手拭を冠り、孫と並んで稲を苅っていた。稲のもとにしゃがみつづけて、彼女の腰は痛み疼いた。それを無理やりに我慢した。「倒れたやつを拾うて、ちゃんと揃えとけ！」

千代も姑と並んで苅っていた。彼女は、血の道の頭痛を無理やり押し怺えていた。彼女はおくれ勝になった。

「お母あ、これや、まだ青いことないん？」栄枝は倒れた稲を揃えながら、籾を指先でひねりつぶしてみた。がさがさ、はしっかい感触の籾の中から白い乳のような汁が出た。

「まだ米になっとらんのが有らあ。」

「だいぶ青いなあ。」千代も腰の痛みを怺えかねていた。彼女の腰は、狂った筋が引きつった。一と握り苅って、娘に答える間、彼女は姑の様子に気を配りつつ背後へ反るように腰を伸した。

「青いとてだんない。しゃんしゃん苅れい！」すぐお鹿が腹立たしげに二本の前歯をむき出した。「逆さにして、なるに掛けとけや、実は入って来るんじゃ。」

祖母は、心で予算を立てていた。今日のうちには、この一枚だけは苅ってしまえる。明日は、朝からほかの田を苅る。お昼からは、苅ったのを束ねて家へ取りこむ。なんでも苅取ることが急ぐのだ。千代は、姑に負けないようにした。お鹿は嫁と孫とが腰を伸すために、ぼんやり立たないように、自分からさきになって追いたてた。

雀が、彼女等の附近で戯れ、穂をついばみ、囀っていた。未熟な、白い汁の出る籾が雀にとってはうまいのだ。人間が、捕えたり、撃ったりするひまがないのを見ぬいて、雀は、大胆に揃えた稲穂をかきさがしつついた。やかましく囀りながら角力をとったりした。

「シッ！　シイッ！　こらッ！」栄枝が手を振り上げて追うた。雀は子供を見くびって知らぬ顔をしている。

栄枝はまた手を振り上げた。祖母と母とは、互に苅りまけないことにばかり心を奪われていた。常々の、ひそかないがみ合いが、こんな時にまで現われた。二人は早く苅る競争を始めた。

「シイッ！　シイッ！」

栄枝は土塊を拾い上げて、雀に投げつけようとした。その時、彼女は急に狼狽したように口を喋んで棒立ちになった。

向うの畦の近くまで苅り進んでいた父親も、稲を置いて突ッ立っていた。執達吏が、四五人の警官と、役場の書記

と、人夫をつれて、松林の方から坂を下って、田の畦へやって来たからだった。

「こら、苅るでない。やめろ！　苅っちゃいかん！」

執達吏は、四分の一ばかり苅り倒されている田を見渡しながら、太い、精力的な声を伝えた。

「こらッ、苅るでない。畦へ出ろ！」

お鹿と千代は、苅ることに夢中になって、その声に気づかなかった。執達吏は、精力的な声を再三繰りかえした。身体の締っている警官が、故意に高く剣を鳴らして、田の中へ這入って来た。

「こらッ！　こらッ！」警官は、靴を粘土にぬめりこまさないように、苅株の上を選って踏んで行きながら、なおきつく剣を鳴らした。百姓の暴力に備えてついて来たのだ。だが、百姓や、労働者を××する平生の習慣が、無意識に婆さんを引きずり出しに行かせた。

お鹿は、ひょいと突立った。彼女は、何事が起ったのか理解できないような顔をして、まばゆげな眼で、畦の方を眺めた。

「なんでござりますか？」

「畦へ出ろ！」

「稲を苅るのが悪いんでござりますか？」

「早く出ろ！——苅っちゃいかんのだ！」

「この稲は、わし等が作ったのでござりますが、それを苅らさんというんでござりますか。」

「早くこっちへ出ろ！」

千代はくたびれて、顔に血の気がなくなっていた。彼女は、苦るしい競争から救われて、ほっとした。だが、裏に泥が粘着した重い草履を引きずって畦へ出る時には、恐怖に、動悸がひどく高まって来るのを感じた。とうとう予期したものがやって来たのだ！

「この稲を苅って米にせんと、家にゃもう食うものがないんでござりますが。」婆さんは繰りかえした。

「芋がちっとあるばかりで、麦もないし、六人の家内が食うものが無うて饉えにゃならんのでござりますが。」

「早く出ろって云ってるんだ！」

お鹿は警官に襟頸を掴まれた。せいの高い警官の肩は、彼女の黒い手拭をかむった頭の上にあった。襟頸は、力強い手でぐさりと掴まれた。お鹿は、びっくりして泣くような、また反抗するような、恐怖に満ちた叫声を発した。泥のついた骨ばかりの両手を後頭部にまわして、警官の手を握り、力いっぱいに、それをのけようとした。が、肉づきのいい一本の手は襟頸から離れなかった。彼女は、畔まで引ずり出された。お鹿は尻に力を入れて、反抗的に田の中にへたばりつこうとしながら、必死に呪うような言葉を発して呻いた。帯がゆるみ、着物がぬげそうになった。

執達吏は、人夫に、将棊の駒のような立札を打ちこませた。田の四隅へは杭を打ち、畦に添うて、携えて来た縄を張りめぐらした。人夫は巻いてある縄の端をほぐして、畔

を走った。縄の輪が一方の杭の下で、敏速に、たぐり出された。畔に穂をもたせかけて並べてあった刈った稲は、無関心にびしゃびしゃ人夫に踏みにじられた。

「苗一本植えるでなし、水一杓汲みこまん者が、こっちの稲を刈らさんやこし、ようも云えたこっちゃ！」お鹿は、髪が乱れ、襟頸からぬげそうになった着物をそのまま、つくろおうともせずに、そこらにいる人間に呪咀をあびせかけた。「お前さん方、誰れの作った米を食うてそんなことが出来るんじゃ！　覚えとるがええ。今にそのむくいが来るんじゃ！」

彼女は執達吏と警官を睨みまわした。

「覚えとるがええ。」

だいぶ離れて立っている警官の方で、誰れかが婆さんの言葉を真似て笑った。

「お前等、苗一本さえ植えん者が……畜生！　罰があたるんじゃ？」

「覚えとるぜええ。」

今度は人夫が笑った。

丘の下から海岸まで、一面に蓆を敷き拡げたように、稲田が遠く伸び拡がっている。そこには百姓達が、人家や杜かげに、見えつかくれつ、こぞって、忙しそうに稲を刈取っていた。

「来たぞお！」

そこで、誰れかが、猛獣に襲われたように悲しみを帯びた声で叫んだ。

「来たぞお！」

稲は、どの田にも、まだ十分実ってはいなかった。だが、彼等は、食うだけの米を取入れることを急いでいた。仮差押えをされないうちに手を廻していたのだ、老人や子供達も緊張していた。

「来たぞお！」

急に百姓達が、戦争のように、田の中を走りまわりだした。稲束を、先の尖った六尺棒に突きさして、若者が納屋へかついで走りだした。老人は刈った稲を集めて束ねかけた。女は、稲束を軽子につけて畔をころびそうに走った。

騒ぎは万問屋へ響いて行った。店から半次郎が、ひょろひょろ道へころび出た。新子が、赤のゴム管を持ってとび出て来た。酒に水を割っていたところだ。彼女は、小作人が勝手に稲を刈取っているのに腹立て、八升の水を割込むところへ、一斗五升を流し込んだ。

「まあ、気味たいがいい。」彼女は蛇のようにペロペロ舌を出して喜んだ。舌には酒の臭がしていた。

「とうとうお上が来てくれた。まあ、気味たいがいい！」

「うむ。」半次郎は一人でうなずいた。「これで助かった。これで助かった！」

嬉しそうに吐息をつきながら、半次郎は、執達吏が縄を張っているところへ、ちょこまか走って行った。そしてペコペコ頭を下げた。

繩張り内の稲は、たとえ苅り倒したものでも、一切、手を触れることは許さない。啓太郎は執達吏から云い渡された。彼は、ききながら脚がぶるぶる慄えた。若し触れると罪になる。精力的な肉づきのいい執達吏は、おどかすことを忘れなかった。
「どうも、御苦労さまでござります。」半次郎は、眼の周囲に、いっぱい皺をよせて笑いながら頭を下げた。「どうも御苦労さまで……」
向うの田では、小作人が必死に働いていた。「早くしろ！」「路を踏み外すな！」「何ぐずぐずしてるんだ！」口々に叱り罵る声が伝わってきた。
「お前さん、苅っとる分だけは、持っていんでもええんじゃろうが！」お鹿は云った。
「いいや、それやいかんのじゃ」半次郎が答えた。「この繩張り内の稲は、お上のものじゃせに、一本でもとるこたならんのじゃ。」
「なんぬがすぞい！」婆さんは二本の前歯をむき出して、「お前等、苗一本さえ植えん者がへちゃこちゃ云うて呉れな。ききとうもない！」

六

籾の腹がふくらんで、秋は深くなって来た。
百姓達の前には、彼等が苗を作り、植付け、水を汲み、育てあげた稲が瑞々しく熟って、穂を垂れていた。彼等は、目前にある、その稲を手を伸ばして苅取ることが出来なかった。どの田にも、いかめしい公示札と、繩張りが、稲に手を触れることを禁じていた。
彼等は落ちつかず、仕事がなく、何もせずにぶらぶら日を過した。折角、春以来、あらゆる労力と、よりすぐった種苗や肥料をいれて、秋の収穫のためにのみ努めてきた。それがふいになってしまったのだ。小作人は集会を開いた。憎悪と憤怒と反抗が、彼等の胸中に渦巻いた。彼等は、この稲を取入れなければ、一年間、食うべき糧が得られないのだ。餓死しなければならないのだ。稲は、差押えられても、まだ完全に地主に取り上げられてはいないことが明瞭になった。差押えたものは、必ず競売に附せなければならなかった。
「この稲を二束三文に買い取ってみろ。その方が、よっぽどいい復讎じゃないか。こっちが団結して競売場へ押しかけさえすれや、うまくやれるんだ。」筆のように頭のさきが尖っている、それで筆次という名がつけられている細長い男が集会で云いだした。
「どうするんだって？」
「寺で競売をやる時にさ、誰れも彼れも、皆んなそこへ押しかけて、寺のぐるりを取巻くんだ。そうして地主や半次郎が入札にやって来たら叩き返して這入らさんのだ。こっちだけで安く落札するんだ。」

「そんなことが出来るかのう?」
「出来るも出来んもない。無理やりにやるんだ。それをやらんけや俺等は餓え死にするばかりじゃないか!」
彼等は、準備を整えて競売日を待った。競売日は、木曜日だった。彼等は、朝から寺の広場へ押しかけた。十時がすぎ、十二時が来た。彼等は、執達吏がやって来るのを待った。二時がすぎ三時が来た。彼等は、寺の廊下の其処、此処に腰かけ、ボンヤリ待った。本堂はがらんとして空虚だった。広場には、枯れ松葉が落ち松毬がころんでいた。村はお盆に賑い騒いだ踊りのあとは全然見られなかった。村は鳴りを静めて、ひっそりしていた。四時頃、誰れかが日延べされたことを半次郎からきいて来た。
「何だい。じゃどうして前からそのことを知らせなかったんだ!」彼等は知らして来た、小さい男が癪に障るかのように腹立てた。
「何で日延べをしたか、その理由を追及しようじゃないか! こっちを馬鹿にしてるんだ!」
彼等は、終日、全然働かなかったのに、非常な疲労を覚えた。ひどい損をしたような心持を抱いた。そして不服に分れ散った。
稲は熟れすぎた。青くかりかりしていた藁が枯れて灰色に変った。穂の重みに圧されて、稈が折れだした。
一週間を経た、次の日曜日だった。日曜日に、執達吏がやって来る筈がなかった。啓助は見るともなく自分の家の前から、石に腰かけて、松林の方を眺めやった。三人、見覚えのある男が急ぎ足におりて来た。町へ出稼ぎに行っている男だ。仲仕をしている俊次と、仲さんと、福松だ。仲さんと福松は、塩田稼ぎをやっている。啓助は、そうきいていた。三人は村に這入ると、何事か、大声に喋りだした。それは、すぐ、人々の注意を惹いた。
三人より、一と汽車おくれて、若者が群がって、土埃を立てながら馳せつけて来た。工場へ出稼ぎに行っている伜や、中年者の三男だ。娘が二三人、桃色の湯巻を露わに、裾をまくりあげて、若者にまじっていた。娘は、男達からおくれまいと息を切らしていた。
「俺ら、親方の目のン玉を叩き潰して失業しとったんだ。そうすると、俺等、失業者仲間の亀太という、こいつも眼かんちだがな、そいつが西条の半次郎へ稲刈に傭われて行くちゅうじゃないか。」俊次は人々に取かこまれていた。彼は途中で誇らかに喋って自分の家へ帰っていなかった。
「西条ったら俺等の村だろう。それで俺や、こいつはおかしい、と睨んだんだ。これにや、何か仔細がなけれやならん。そこで俺れや、播州の者だって、だまして、傭うてくれないかと、そこへ行ってみたんだ。すぐ訳は分ったよ。半次郎は、差押えた稲の任意処分を受けてさ、一気に刈るとて、沢山の人夫を募集しとったんだ。」
「なんでも、この稲を残らず、四百両で買うたちゅう話だ。」
仲さんは鰻のような顔をして俊次の話を補足した。彼は村

に生れ、村に育った男だった。が、家は離散して落ちつくあてはなかった。
「だが、稲は競売に附せなけやならん筈だ」誰れかが云った。「いったい、いつのまに、俺等に内緒で売っちまったんだ」
「そんなこた、どうやったか、俺れや知らねえ。なんでもこの稲みんなで（仲さんはかきまわすように両手を拡げた）四百両ちゅんだ。なんてベラ棒な値だ。まるで只じゃないか。普通の相場にしてみろ、四千両がところは鳴っとらあ。」「お上も半次郎と、ぐるになって、くそたれめが、悪いたくらみをして居ったな！」群衆の中から溜息と同時に呟きが聞えた。「くそたれめが、俺等をひぼしにしようというんじゃ。覚えとるがええ！」
「俺れや、そこで、村から行とる者全部にふれてまわったよ。」俊次はつづけた。「町のことは放っといて去ね。去んで半次郎を叩き殺してしまえって！」
　人々は次第に多く集って来た。最初の競売が延期され、彼等の眼にふれないところでどんなからくりが遂行されたか、それはすぐ了解された。啓助のあとについて話をききにやって来た栄枝は、訳が分らずにがちがち慄えていた。正吉が速急に集会をふれてまわった。
「くそッたれめが！　××も半次郎もぐるになって、悪いたくらみをやりやがったな！　もう承知がならねえ！」溜息が憤怒に変った。「俺等を餓えさそうというんじゃ。……じっと怯えて居るもんか、覚えとるがええ。やってやる！」
　隣村の安右衛門を集会に加えるために、一人が坂路を跳せ登って使いにたった。

七

　近道をして、啓助は蜜柑畑を横切った。そして、山の方へ急いだ。山の中に壊れかけた祠がある。そこで会合をすることになっているのだ。重っ苦しい墨色の雲は、空一面に拡がっていた。彼が蜜柑畑を出はずれると、今さっき、通りかけに、半次郎の店の前に集っていた群集が、ドッと騒ぎだした。物を叩きつけ硝子が毀れる音がしだした。十五六の少年が畔から二階へ石を投げつけているのが見えた。二階には手すりの内側に戸が閉めてあった。石は戸にあたり、屋根瓦の上にころがり落ちた。店の前から湧きかえるような叫び声がひびいてきた。
　そこに集っているのは、主に、老人や、中年者だった。「半次郎を引っぱり出せ！」彼等は口々に叫んだ。「今こそ、長い間、むざむざと俺等をいじめやがったカタキを取って呉れる。引っぱり出せ！　引っ張り出せ！」
　叩き破った戸を押し開けて、鉢巻をしている丑ッさんが、薄暗い店へ這入った。あとにつづいて三四人が押しこんだ。中でまた、硝子が鋭い音をたて、割れくずれた。

「半次郎出て来い――出て来い！」群集は叫んだ。「俺等が汗を流して作った米をむざむざと取りやがって！　高利貸め！　出て来い！　出て来て話をしろッ！」

またつづいて、人々は店の中へ押し入った。若い一人が、土のついた手に駄菓子を掴んで頬張り乍ら、群集のために戸に押しつけられそうになって出て来た。人々は、先を争って、そこらにある煎餅や、南京豆や、椎茸などを手あたり次第に掴み取って、懐へねじこんだ。酒樽の呑口が引きぬかれた。彼等は冷たい酒を貪りのんだ。瞬間、彼等は、平常ならば、新子がちゃんと見はっていて、必ず金を出さなければ、煎餅一枚、酒一滴でさえ只では得られないことを思った。長い間、何等の反抗もなし得ず、みすみす水の混った酒をのまされ、高い菓子を買わされたことを思いかえした。彼等は、よくもこれまで、忍びに忍んでいられたものであった。彼等にとって、今こそその復×をしてやる好機だった。遺×を晴すべき時だった。

「何だ、けち臭いことをするな、やれッ！　かまうか、やれッ！　やっちまえ！」

戸棚や空樽が、××××××××、××××××××そうにぶつかった。

「なむあみだぶ。なむあみだぶ。」

二階では、お作が恐怖に慄えながら、一図に、阿彌陀如来の救助を求めていた。戸を閉めきって、そこは何も見分けがつかなかった。

「なむあみだぶ！　なむあみだぶ！」

彼女は必死に救助を求めた。

ふと、全身がずぶぬれになって、誰れかが、勝手元からの細い梯子を這い上って来た。そしてお作の傍へしのびよった。

「誰れッ！」

お作は、冷たさと恐怖にびっくりした。

「わたし。」それは新子であった。寒さに歯をがたつかせていた。

「まあ、お前どうしたん？」

「覚えてろ！　ドン百姓が、ドン百姓が！」彼女はがたがた慄えた。

「私を河ン中へ突きこんだんだ。銭ったら一文もないくせに！」

不意に荒々しい声を張り上げて、新子は泣きだした。激昻した群衆の罵声は戸外で一層熱してきた。×××××××××××××。××　××××。

「喜作はどうした？」押入れの襖を細目に開けて、半次郎が顫え声で囁いた。「喜作はどうした。警察へ走ってくれたかいなア？」

「おそくなっちゃった。どうするかきまったかな？」

祠の前の芝生には、庄作を中心に集っている青年達が、それぞれ好きな恰好をして坐っていた。鉢巻をして細帯を

締めている老人もいた。啓助は正吉の傍に坐った。
「何もせずに、泣き寝りじゃ！」
「何に？」
「安右衛門が暴力反対なんだ。」正吉が囁いた。
壊れ放題にされている祠の下に、両肩を持ち上げ、亀のように頸をすくめている老人が坐っていた。それが、隣村から来た安右衛門だった。彼は四十歳だったが、六十に見えた。彼は暴力に訴えることに反対した。暴力を以てすれば結局負ける。
「競売をやり直さすんが当然じゃないか。」
団栗にもたれて立っている良助が云った。
「それや、出来んのじゃ。」
「どうして出来んのですか？」
安右衛門は、一度売られると、たとえそれが任意処分でも、あとへ引戻すことが出来ない。それには、損害賠償を要求する方法があるのみだ、そう説明した。
啓助は、聞いて、物足りなさと、いらいらしさを感じた。
「何だい、あんな爺さんに何が分るか！」傍で正吉が呟いた。
附近の農村で、一番早く、小作人の団結運動に気づいた人だという、そのことが皆なをして、安右衛門に反対するのを遠慮させた。彼等は、落ちつかぬ眼で安右衛門の故意に持ち上げられた肩や、壊れかけた、祠の屋根を見上げた。彼等は退屈した。彼等の耳は何事をも聞かずに、脳髄はほかのことを考えていた。
啓助は、安右衛門に対する軽蔑を、皮肉を含んだ眼に表現しつつ庄作に合図を送った。庄作は安右衛門の傍に坐っていた。庄作は、いつも彼等が思っていることをさきになって表現してくれる男だ。ところが、彼は、故意か、偶然か、啓助の眼くばせをそらしてしまった。
集会には、激しい討論もなければ、親しみのある空気も出なかった。決議はすんでしまった。皆、山を下りかけた。各自、不満と腹立たしさを怺えていた。彼等の体内には、熱い狂暴なものが渦巻いた。
「今夜こそ寝られるもんか！」啓助は、うしろにおくれながら、庄作に近づいた。「俺ら、やってやる！ やってやるんだ！」
庄作は決議を守らなければならないことを考えていた。彼も、皆の胸中に、醸成されている狂暴な情熱を感じていた。それは、はげしく外へ、迸り出ずにはやまないものだった。このはりきった感情は、青年達の胸中にあるばかりではなかった。老人にも、中年者にも、女にも、子供にも行き渡っていた。彼はそれを知っていた。
祠から下り、杉の谷を通りぬけると、村が一望の下に見おろされる団栗山に来た。田の面から、崖にぶっかかる波のような群衆のどよめきと叫喚が伝わり上って来た。つい一時間ばかり前まで厳めしく立っていた立札は粉砕され、繩はずたずたに切断されていた。人々は暴々しく吠え叫びな

がら鎌を振り、穂を叩き落し、稲をなぎ倒していた。
山を歩いてきた青年達の体内に緊張し煮えかえっていた感情は、瞬間に、パット破れ、迸り出だした。石ころの多い細道をさきに行っていた者は、急に歓喜に燃えるような叫び声を上げて、一散に山を馳せ下った。と、一列にあとからつづいていた者も、同様な叫び声をあげて馳せだした。彼等の眼下には、妹や弟までが、鎌を持って田に入り乱れていた。子供を背負った母親が、稲穂をすごいて籾を手籠に取っていた。
「結局こうやるつもりだったんだ！　こうやるつもりだったんだ！」
彼等は馳せ下りながらそう思った。彼等は自分の周囲が輝かしく明るくなったような気がした。
「やれ、やれ、やれッ！　やっちまえ！」
安右衛門は、立ち止って、自分の眼前をフィルムのように走り去る青年達をポカンと見ていた。青年達は、猫背の爺さんに突きあたった。安右衛門は突きとばされないように、道から山の中へ引っこんだ。彼は、眼で庄作を捜した。庄作は、彼を支持するだろうと思っていたのだ。
庄作は、うしろから皆におくれまいと歩度を伸して来た。
「君、君、どうしたこったい！」安右衛門は自分の言葉が相手の耳からそれるのを恐れるように早口に云った。
庄作は、何も聞えなかったもののように彼には眼もくれず、馳せすぎてしまった。
青年達はつづけて歓喜に満ちた叫びを放ちながら、山を下っていた。彼等の間隔は次第に距たってきた。
「何としたこったい！　何としたこったい！」
安右衛門は、山に立って村を見下していた。彼は動かなかった。村に下ると、青年は、火薬を撒くように田の中へばらばらに分れ散った。
稲田に入り乱れ渦巻いていた百姓達のうごめきは、なお一層はげしく怒濤のように強く熱してきた。罵り叫ぶ憎悪と憤激に満ちた声は、龍巻きのように上空へ捲き上って来た。そこには、むがむじに稲を刈取っている老人があった。穂をすごき取っている娘があった。運動帽子をかむって、棒で稲をなぎ叩いている少年があった。その間を縫って青年達が走っていた。
安右衛門はいつのまにか、知らず知らず百姓達の蠢めきに引きつけられ、自分の心が熱してくるのを覚えた。
「これや、実に壮観だ！　壮観だ！」彼は、自分一人であることを忘れ、傍に誰れかが立っているかのように、左右を顧みて云った。そして彼も山を馳せ下った。

八

けたたましくベルを鳴らして、数十輌の自転車が、一直線に突進して来た。それ等は、松林を突き切ると、坂道

を、全速力で滝のように流れ下った。

それには、鼻の平ったい男がのっていた。ちょんびり髭をおいている男が乗っていた。眼窩の奥に小さい眼が光っている男が乗っていた。――いずれも戦争に行く者のように、殺気立ち、緊張していた。

警官隊が繰込んで来たのだ。

三十分ほどたつと、また、数十輛の自転車が先を競って突進して来た。それから二十分たつと、またまたやって来た。彼等は、交通妨害になるのもかまわず、道路の両側へその自転車を並べたてた。そして、鉄葉のようなサーベルを稲にもつらせながら、田の中へ急ぎ散った。

薄墨色の雲は、その黒さを加え、頭を圧しつけるように、重っ苦るしく村の上にのしかかった。太陽は黒い雲のかたまりに包まれ、夕映一ッ残さずに、いつのまにか沈んで行った。村は暗くなってきた。稲田は物が見分けられなくなった。百姓は、依然として、田に入り乱れ、渦巻いていた。

「なに、おまわりが来た。」彼等は冷笑した。

「おまわりなんど、何が怖いもんか。俺等が作った稲を、俺等がどんなに処分しようと勝手じゃないか！」

彼等は俯向いて稲を苅るのがまだるっこかった。××は稲を完全に半次郎のものとして保有せしめようがためにやって来たのだ。それは、彼等の反抗力を押し潰そうとしてやって来たのだ。彼等は、今稲を叩き散らし、胸に湧きたぎる憤怒と憎悪を幾分なりとも癒やすより外、とるべき方法がなくなった。それがせめてもの復讎であった。彼等の憤怒と憎悪は、一層強く奔放に荒れ狂いだした。

最高度の能率に於て、鎌は振りまわされた。穂は頸からなで切られ、左右へ激しくとんだ。子供は稲を踏みつけ、田の中を走りまわった。娘達も同様に走った。彼女等の髪や着物には、ちぎれた穂がささって、ぶらぶらゆれた。

警官の靴は田の粘土にずりこんだ。稲は剣にまつわりついた。それは丁度、稲が警官を引きとめて動かせまいとするかのようだった。懐中電燈が銃を発射したように青くところどころに光った。子供達は、その光を見ると、稲をかき分けて逃げた。

啓助は、河の堤を走っていた。向うから両手を前にさし上げて一散に馳せて来る少年があった。鞘を払わない××××を振り上げて、あとからせいの高い男が追っかけて来た。

「お母ア！　お母ア！」子供は必死に叫んだ。

××××が子供の肩でガチャッと鳴った。子供は瞬間、斬られたように、道の上にへたばった。

「お母ア！　お母ア！」子供は拝むように両手をさし上げた。「お母ア！」

啓助は、またしても、子供の頭の上で×が鳴る音を聞いた。恐怖と痛さから、子供がわれるように泣きだした。

警官は、顔をあげると、不意に山猫のように啓助にとびかかって来た。堅い、氷のような金属が、彼の耳を切らん

ばかりに打った。頭がくらくらッとした。鼓膜が破れたようだった。と、彼の背後から別の手が、頸を掴み上げた。拳が、×××が来た方とは反対側の耳の上へ螺蠑殻のようにとんできた。彼は、有りったけの力を搾って四ッの手を振りもごうとした。今度は、つぶてのような拳が、彼の鼻を天に向けてもぎ上げた。彼は眼が見えなくなった。粘っこい鼻血がたらたら落ちだした。

「さあ、こっちへ来い！」四ッの手が彼を引きたてた。

「こっちへ来るんだ！」

彼の背後では、さっきの少年が、なお、泣きわめき、母を呼んでいた。

重っ苦るしい、星のない空から雨がぽつぽつ落ちだした。一時間、或は、一時間半毎に通過する列車から、出稼人達があたふたと、さびれたプラットフォームへ吐き出された。彼等は身軽く裾を端折って、村へ急いだ。

真ッ暗な、さきの見えない、濁った晩であった。空気は生温く、窒息するように蒸した。道は狭くうねっていた。人形屋に奉公している弁吉が真ッ先に歩いた。

「私、お母あが急病だって、親方に嘘をついてきたの。」

弁吉のあとから行っている君江がくすぐられたように、げらげら笑いだした。

「何がおかしいんだ。俺だってそうだよ」弁吉があとへ振りかえって腹立たしげに云った。

「――まともなことを云うて、親方がかえしてくれると思うとるんか？」

「私もだまして帰ったん。」うしろの方で、いくえは、お清に囁いた。お清が啓助の妹であることに、肉身のような親しみを感じながら、彼女はよりそっていた。

「私だってそうよ。」

白石をすぎ、北向地蔵の前を通った。人々は疲れて息を切らした。細い雨が降りだした。生活の糧がなくなるかどうか、必死になっている際、いくえは、結婚が延期される。そのことは考えたくなかった。もう一年、結核菌がうようよしている莫大小工場へ年期を入れて、妹や弟を養わなければならないかもしれない。

「稲を差押えるって、田に生えとるものをどうするんでしょう！」彼女はお清に訊ねた。お清は、喜作がどうしているか！ それを思っていた。

「成程な。」お清よりさきに、放浪好きの老人が答えた。

「それや、いんで見なけや、分らねえ」

北向地蔵から大江に来る途中で雨装束をした青年の一隊が、あとから追いついてきた。彼等は顔が分らないように頬冠りをして、細の帯を引きしめていた。

「橘の衆じゃないか。」老人があとへ振りかえってきいた。

「そうだ。――西条はどうなっとるか知らんか？」てきぱきした声が云った。

「分らねえ。俺等も帰りよるところだ。」老人が答えた。

「……田に立っとる稲を差押えるって、お前さん方、どな

いするんだね。俺等のような昔人間にゃ、皆目想像がつかねえ。」
青年は、二十人くらい一隊をなしていた。墨のように黒い暗闇の中に、鈍く松林の梢がすけて見えた。
「あ、聞える。聞える！」弁吉が歩きながら耳を澄ました。村の騒動が松林を越してひびいて来た。
彼等の脚は戦き躍った。そして速力が早まった。心臓がドキドキ波立ちだした。松林へさしかかった時、突然、威嚇するような声が闇の中からひびいた。
「待てッ！」
松の下で、四五本のサーベルが、ガジガジ鳴った。帽子をかむり、靴をはいた、屈強な男が、彼等の行手に立ちふさがった。
「待て！　お前達はどっから来たんだ？」
青い懐中電燈が、殺人光線のように、サッと娘達の顔を射た。
警官隊が、松林の中に張りこんでいるのであった。そこは関所だった。隣村からの応援隊も、各列車から吐き出された出稼人も、残らずそこで捕虜になっていた。
「俺達は、なんにも悪いことはすれやせん。一寸、村へ帰るだけかえしてくれんかのう。」老人が哀願するように云った。
「いや、待て！」
娘達は慄えた。
「俺達は、女や、子供や年寄りで、なんにも乱暴はすれやせん。ほんの一寸だけ通してくれんかのう。」
老人は繰りかえした。「俺やもう長いこと村へ帰らんので、孫がどうしとるか気にかかるんじゃ。ほんの一寸だけ通してくれんかのう！」
「みんなこっちへ来い！」
部長が下の者に何か命令した。老人も娘も橋の青年達も、真暗闇の、二三尺さきさえ分らない松林へつれこまれ、検束されてしまった。
雨が大粒に落ちて来た。彼等は、一緒に帰った者がどこにいるか、それさえ分らなかった。いくえは、一人で家のことを心配した。お清は喜作の顔を思い浮べようとした。それは、剣の音と共に、彼女の脳裏から破壊され、消えてしまった。彼女は、冷たい石のような牢屋を想像して、恐怖に慄えた。
坂の下から、捕虜のように、検束された百姓達の群が登って来た。

九

河水が、堤防から溢れ、物凄い音響をたてて流れた。雨は来る日も来る日も降りつづいた。そして、気温は降下した。潮が満ちて来た。誰も、河口の水門を閉す者がなかった。潮は河水を逆に押し上げた。水は溝を埋め、稲を浸し

た。昨日まで黄金色に熟って美しかった稲は、折れ、踏みにじられ、穂を失って死んでいた。
町へ引っぱって行かれた者達は帰って来なかった。家々では、女や子供が寒さと不安に顫えながら餓えていた。村は火が消えたように滅入ってしまった。雨に細道の土が流され、礫がでこぼこ地中から露出した。その細道に添うた或る茅屋の前には、雨にぬれた堆肥がむせて、白い蒸気をたてていた。家の中には、老婆が息たえだえにうめき、あがいていた。雨水は破れ屋根を通して、座敷へぽつぽつ落ちてきた。そのしずくは煤の間を通って、黒茶色に染まっていた。千代と栄枝とは、納屋で、前日必死に穂からすこぎ取った籾を人に気づかれぬ片隅へかくそうと骨折っていた。籾には、ごみや土がまじっていた。穂頸から切取ったそのままのもあった。その籾はすぐ殼を脱して食わなければならないものだ。
三束ばかり、慌てて根元から刈取った稲があった。それは栄枝に分けさして、母親が稲扱きで扱いた。新しい藁の匂いが、彼女に娘の時代を思い起させた。青っぽい藁は、若々しく牧歌のように匂った。
「おーい、おーい、おーい。」婆さんは苦しそうにうめいていた。
「おーい、おーい、誰れぞ来て、さすって呉れ。――痛うて辛抱が出来ん。おーい!」
千代は、芥子を水に解いて納戸へ持って行った。

「おーい、おーい、おーい。」婆さんはうめきつづけた。
「なんとかしてくれい。苦しうてならん。早よ死ぬ方がえゝ。おーい、おーい!」
お鹿は、餓えまいがために、食うべき米をとりこんで置こうとして、必死に稲を刈り、穂をすごき取ったのであった。彼女は、一生、餓えまいがために、――ただ、餓えることにのみおびやかされて、始終、慾ばり、息子や嫁を休みなく働かせようと、がみがみ追い立ててきたのであった。
彼女は鎌を取り上げた警官に反抗した。枯枝のような手を爪立ててメを振り上げて来る男に掴みかかった。彼女は、手や脚や、頸を蹴られた。ひからびた皺のよった皮膚には打撲のあとが到るところに刻みこまれていた。それは、細長く、黒紫に、死色を呈していた。
「痛た、痛たあ! あ、あ、痛うてたまらん!」
「さすろうかな。」
千代の手が老婆の腕に触れると、老婆は割れるような悲鳴をあげた。彼女の手は、ほんの一寸触れたばかりであった。それが老婆の肉体に堪え難い疼痛を起すのであった。千代は、何か自分がひどいことをしたもののように、びっくりして手を引いた。老婆は寝がえりを打つことが出来なかった。彼女は腕骨を折られているのであった。
栄枝が学校で手習いに使った紙の裏へ、千代は、芥子をのばした。そして、恐る恐るそれを老婆の身体へ貼りつけた。

「痛たあ、痛たあ、なんどしてくれい、痛たあ！」
戸外では、水に浸された細道を、半次郎が人夫をつれて茅葺の家々を縫って歩いていた。人夫は、大きな籠を六尺棒で担っていた。頑丈な荒っぽそうな男だった。そのあとから×××をさげた男が、長靴を大事そうにして歩いていた。細あいから、じかに納屋をめがけて這入って行くとそこで半次郎は、何か大声に呶鳴った。暫らくすると、人夫は籠に籾を満たして、六尺棒を撓ませながら出て来た。
「取られたものを取りかえすんは、あたりまえだ。それや当然だ！」半次郎は、ぶつぶつ云っていた。
「籾があんたの所有であった確認さえあれや取りかえすのは一向差支ないこってす。」×××が云った。
「そうですよ。みんな、わしが銭を出して買ったもんでさ。このドン百姓の籾ったら、一粒だって有る筈がねえ」
「は、は。」
半次郎は、一つの納屋から出て来ると、また次の家へ這入って行った。そして、それからまた次へ行った。やがて彼は、堆肥から湯気が立っている家へやって来た。家の中から、老婆の瀕死のうめき声がもれて来た。
「おい、おい、誰れかいるか。」彼はいきなり呶鳴った。
「へい。」千代が、蒼い、血の気のない唇をして出て来た。
「納屋の口に藁を三束置いてあるが、あれについとった籾はどこへかくした？」
「置いてあります。」
「出して来い。」
半次郎は土のついている下駄でかまわず納屋へ這入って行った。彼は、蓆をびしゃびしゃ踏んだり、空俵の束を蹴ったりした。下駄の泥がそこら中に散った。彼の足は先日店へ押し入られたその仕返しをするように、残酷に執拗だった。
叺に四斗ばかりの籾が入れてあった。
「これだけか？」
「へい。」
「まだかくしとるだろう」
「いいえ。」
「嘘を云え！」彼は背伸びをして、唐箕の漏斗へ手を突きこんだ。「そら、ここにかくしとる。だましたってすぐ分るんだ！」
「ほう。前の家にもそこにかくしてあった」入口に立って見ていた×××が愉快そうに笑った。
「は、は、そこには必ず入っとるもんですな。」
「へえ。百姓の奴は、浅はかですからな。」
「ふむ。ふふふ。」サーベルは、繰りかえしおかしそうに笑った。
千代は、眼を落して、下駄の土をぬりつけられた新しい蓆を見ていた。顔を上げる勇気がなかった。サーベルと半次郎に対する憤りと共に、折角、長い間、あらゆる労苦を積んで作った籾が、結局、一粒も残らず取り上げられてし

かった。

まった、口惜しさと、悲しさを同時に感ぜずにはいられなかった。

半次郎は、人の家へ侵入する権利が十分あるかのように納屋、木納屋、物置きの隅々をくまなく、そこらに置いてあるものを、引っくりかえしながら、探しまわった。彼は手籠にある最後の糀の一粒まで、人夫の大籠に移した。そして、それ以上、かくしていないことをたしかめると、性急に人夫を追いたて、千代には一言も、物を云わずに、眼で挨拶さえせず、横柄に出て行ってしまった。

サーベルと半次郎に対する憎悪と反感は、千代の胸にこみ上げて来た。彼女は、厚顔にして貪慾な半次郎と、貧乏人が餓えるのもかまわず、満ち足りている半次郎に味方して、なお、最後のものまで取上げる手助けをする、×××を胸がすくまで、罵倒しつくしてやりたかった。彼等の面の皮を引きむいてやりたかった。しかし二人の冷酷な男は、近道をして、納屋の脇の細あいから、隣家の方へ消えて行ってしまった。彼女は自分達が無茶苦茶に踏みにじられてしまったような気がした。

彼女は、薄暗い納屋の隅へ行った。一家が食って行く何物も残っていず、わざわざ娘に分けさして稲を扱き、穂をすごき取ったことが、全然無駄な骨折りであったことを思った。嗚咽が激しくのどもとへこみ上げて来た。彼女は、壁に顔をむけて、それを押し怺え、嚥み下そうと努力した。

「どうしたんじゃ。糀は見つけられやせなんだか?」

お鹿は痛さに顔をしかめ、唸りながら、いつのまにか上り框へ這い出て来た。薄暗い納戸では、はっきり分らなかった紫暗色に膨れ上っている殴られたあとが、痛々しく眼だった。

「半次郎とおまわりの声がしよったが、なにしに来たんじゃ?」

「なんでもない。」

千代は狼狽した。が、咄嗟に瀕死の祖母に一粒の糀もないことを知らせてはいけないと考えた。

「糀は取って行かれやせなんだか?」

「いいや。」

「あんじょうかくしてあったんか?」

「…………。」

千代は、祖母から顔を見られるに堪えなかった。胸の奥から再び激しい、のどがつまるような嗚咽がこみあげて来た。

（昭和三年五月）

黒人の兄弟

江馬修

日本郵船会社の××丸が、ポートサイドを出ようとする半時間ばかり前、印度人の兄弟、ダナとチルタはやっと船に乗りこんだ。

ボーイは二人を直ちに船底のようなうす暗い三等室へ案内した。三等室とは云っても、とにかく船室(ケビン)になっていた。寝床は十あまりあってごたごたしていたが、それぞれ花模様のあるさっぱりした更紗のカーテンがついていたので、部屋全体が狭苦しいながら割合に気持ちよく出来ていた。それに、二人にとって何よりも嬉しかったのは、ここには外に誰も船客のいなかった事だ。白人や日本人が、さぞいっぱいに部屋を占領してのさばり返っている事だろうとあんなに心配でならなかったのに!

「こりゃあ、なかなか良い。」

兄のダナは満足そうに云って、一番奥にある下の寝台の端に両足をかけて、白く塗られた鉄板の天井に近くいかにも、船尾らしく屈曲した壁の上にくりぬかれた小さい円い窓から覗いて見た。つい外には小さい荷積船がゆらゆら揺れていて、蒼黄いろく濁った浪がつい鼻先までひたひた打寄せていた。

「ほんとに良い。」弟のチルタも嬉しそうに云って、ぐるぐるあたりを見廻した。「それに、このままだと、コロンボへつくまで兄さんと僕と二人きりでこのひろい部屋を占領していられる訳ですね。途中エデンへもどこへも寄みちしない筈だから。」

「そうだよ。」兄は窓から身を離して、鷹揚そうにちょっと行きつ戻りつして、巻煙草を吸いつけながら云った。「やっぱし、日本の船にして良かったな」

「だから僕あんなに強硬に言い張ったんですよ。」弟は得意だった。

「僕だって何も、日本の船に乗ることに強いて反対した訳では無かったのさ。実際、この前イギリスの船ではどえらい目に会ったからね。ほんとに白人の船なんかには金輪ざい乗るもんじゃ無いよ。」

「死んだって二度と乗るもんじゃ無い!」

そしてチルタは往きの恐ろしかった航海を思い出して、思わず両肩を竦めた。

「そこへ行くと、日本人は何と云っても我々と同じアジア人種だ。この船なら、きっと気持よく暮らせるだろうよ。さあ、とに角寝台をきめて、荷物を整理してしまおう。」

二人は上着を脱いで仕事にかかった。
彼等はセイロン島のカンジーのもので、宝石商だった。二カ月前、商売のために埃及へやってきて、カイロやアレキサンドリアなぞでかなりうまい取引をすましたので、これから帰国するところだ。兄は二十四になる。脊こそ高くなかったが、体格のがっしりした、きりっとした男だ。同じ黒人と云っても、普通の印度人と違って、落窪んだ、白味の輝くような黒い大きな眼、高い顴骨、赤い厚い唇、むしろアフリカの黒人に似ている。それから見ると、チルタの方は年も十九だが、からだが小柄で弱々しく、どこか女性的だ。褐色の顔は線が細く、上品で、神経質と臆病さとをあらわしている。これは然し印度の現代の青年によく見られるタイプだ。兄はすでに結婚して子供があったが、弟の方はまだひとり身だった。
彼等は奥の方に、対い合いの位置に、それぞれ下の寝台をとった。そしていくつかあるトランクやスートケースは、出し入れに都合の良いように、どこでもそこらの空いた寝台の上に置いた。
「やれやれ。」とチルタは自分の寝台の端に腰をおろして、両足をぶらぶらさせながらうれしそうに云った。「これで、十日あまりここに寝ころんでいれば、ひとりでに家へ帰られるんだな。」
「そうだよ。じゃお別れにデッキへ行ってもう一度ポートサイドを見て来ようかね。もうじき船が出るだろうから。」

そして二人は上着をひっかけ、房のついた濃い海老茶色の埃及帽を冠った。そして細いくらい廊下をうねり、埃っぽい階段を登って、明るい甲板へ出た。
まだ朝だ。アラビアの沙漠から昇った太陽は、ここアフリカの一角に明るく輝いて、空は青々と晴れている。空気は澄明で、肌寒い。その筈だ、ようやく新年になったばかりである。
ポートサイドは見るから植民地らしい町だ。いかにも安普請らしい、高層な、赤いけばけばしい建物が海ぞいに層層重なり合っている。領事館や、ホテルや、商店のいろいろな旗があちこちに上っている。ある屋根の上に広告の言葉が大きく切り抜かれた英語の文字で並べられている。それが遠い青い空を背景にして黒くくっきりと透かして見られる。埃及人に親しみ深い空はこんな広告にまで作用しているのだ。そう云えば、波止場に近く堂々と立っている官省めいた大きな建物には、二つの大きな青いアラビア式の円屋根がついている。立派なもので、天象を形どったようにも見えれば、地球儀めいてもいる。その上には、新月に星をあしらった赤い埃及の国旗が、青空の下朝日の中にしずかに飜っている。
港の中には××丸の外に、イタリアやフランスの旗をつけた商船が三つ四つ碇泊していた。英本国から、支那の革命に備えるために香港へと送られる白い巡洋艦も二つ三つとまっていた。その一つに今石炭船が横づけにされ、跳橋

を伝って多くの土人がせっせと石炭を運びこんでいた。その忙がしげに上ったり下りたりする黒い人影が、遠くからまるで餌を運ぶ蟻のように見える。
　ダナはこうした光景をもっとよく見るために、後甲板へ登って行こうとすると、チルタがそれを引き止めた。そして階段の上に英語と日本語で白く書かれた黒い制札を指ざした。
「二等船客の外登るべからず。」
　ダナは登りかけた階段から、しずかに足をおろした。彼はしかし、別に腹立ちも不愉快も感じなかった。彼は自分たちが三等船客であることを充分心得ていた。唯彼等には、下のメインデッキの外遊歩を許されていない事を知らなかったのに過ぎない。
　メインデッキでは、もう荷つみの作業を終って、小人めいた水夫たちが、大きな二つのハッチを蓋うために忙がしく立働いていた。そして埃及人アラビア人ユデア人なぞの物売りが、——煙草屋、絵葉書うり、頸飾り売り、埃及帽うり、名物の海老うり、それから黒い両手の中で各国の銭をちゃらちゃら鳴らしている両替屋なぞが、それぞれ片言の英語や日本語で騒々しく呼びかけながら、客を目がけて雑然とそこらを歩き廻っている。片隅では、一人の土人がデッキの上へじかにあぐらを掻きこんで、「がらがらがら、がらがらがら」と異様な呪文めいた言葉を唱えながら、茶碗を使ってしきりに奇妙な手品をやっている。日本人の船客と船員たちがそのまわりに垣を作って、面白がって見物している。
　船べりには、一二等客らしい日本人と欧羅巴人が五六人、外を見おろしてしきりに笑ったりどなったりしている。見ると、土人たちがボートを船に近く漕ぎよせて、アラビア織の卓布や壁掛を売りつけようとしているのだ。一人の色の黒い子供がボートを流さないように一心に櫂を操っていると、父親らしい中年のアラビア人が、ピラミッドや、椰子や、沙漠や、駱駝なぞを描いた織物をいくつとなくひろげて見せる。そして片手をあげて指で数を示しながら、上へ向いて大きな口をあけて喚く。
「オールピーセス、五ポンド、大変やすい。」
「馬鹿。」と客がてんで相手にしないと云う様に笑いながら云い返す。「オール、十シルリング。そんなら買ってやろう。」
　掛合が暫くつづく。出帆の時刻の迫つた今となっては、五ポンドの言い値が十シルリングにも五シルリングにも引きさげられる。値がきまると土人は買われた品を細い縄にくくりつけて、甲板目がけて放りあげる、かわりに金がくくりつけて戻される。客たちは買った織物をすぐ甲板の上にひろげて、何かと評価しながら眺め入る。
　ダナとチルタは、こうした中を、もの珍らしげにぶらぶら歩き廻った。日に照らされて、船体が発するあくどい臭気、ハッチから通風塔をとおして発散する咽るような雑貨

の香、そして異った色々な人種の匂い、こんな不愉快な感覚も見るものの面白さに紛らされてしまう。彼等のまわりではそれぞれに異った言葉、——英語、日本語、埃及語、アラビア語、荒々しい土語なぞがのべつ声高に呼び交された……

　機関士か、運転士のような制服をつけた船員が、時々用ありげに甲板を横ぎって行く。その度に、二人は右手をあげて会釈した。船員たちはいずれも叮嚀に挨拶を返して行った。殊に、事務長らしい男は、わざわざ帽子を脱いで彼等に親しみ深く頭をさげて通った。

「兄さん。」チルタは嬉しそうににこにこして云った。「この前こちらへくる時、僕たちはどうして日本の船にしなかったんでしょうね。」

「うむ。」ダナは悠然と巻煙草を燻しながら、やはり満足そうに答えた。「この次から、航海の時はいつも日本の船に乗る事にきめよう。」

「ええ、賛成です。是非そうしましょう。」

　最初の銅羅は、物売りや見送り人たちを下船させるために、ものものしい音を立ててもうかなり前に響き渡った。それでも、船はなかなか出そうに無かった。スエズの水先案内者(パイロット)がまだやって来ないらしい。

　二人の印度人は待ちくたびれて、船室の方へ引返した。戸口から入ろうとした時、先に立ったダナは驚いて立止った。外でもない、六フィート近い巨きな白人がうす暗い船室の中に突っ立っていたのである。そればかりじゃ無かった。ダナが自分のものとして選んで置いた寝床を占領してしまったらしく、そこに置いた小荷物は荒々しく床の上に放り出されていたのである。今しも彼は——植民地わたりの英国人に違いない。四十ぐらいな、酒飲みらしい、横柄で下品な奴だ！——重いトランクを上の寝台へ押しあげようとして、やっと肩のあたりまで持ちあげたところだったが、探るような意地わるい眼付でちょっとダナの顔を見たかと思うと、彼に向ってそのだぶだぶした顎をしゃくった。

　ダナはその意味を悟った。然し彼は戸口に突っ立って、相手を見つめた儘黙っていた。チルタも彼の横に、脅えたような目付をして部屋を覗いていた。

「おい。」と英国人は太い声で腹立たしげに呼んだ、まるで自分の奴隷にものを云うようだ。「ここへ来て己を手伝わないか。」

　ダナの落窪んだ大きな黒い眼はぎらりと光った。数秒すぎた。と、彼は急に何か決心したらしく、手にしていた巻煙草を投げすてて、大股に英国人の側へ行つた。そして彼は手伝ってトランクを上の寝台へあげてやった。

　英国人は別に礼も云わなかった、然しさすがにほっとしたという風で、ダナのものである筈の寝台の上へどかりと腰をおろしながら、小馬鹿にした調子でこう聞いた。

「君たちはどこまで行くのかね。」
「コロンボまで」
そう答えながら、幾分卑下した態度で、ダナは鼈甲製のシガレットケースを隠しから取出した、そしてそれを開いて彼の前へさし出した。
「サンキュー。」彼は尻上りな下品な調子で云って、巻煙草を一本手にした。「ふむ、じゃ君たちは印度人だね。」
「いや、セイロン人です。」ダナはマッチを擦って彼の煙草に火をつけてやった。
英国人はその灰色の眼でずるそうに相手をじろじろ見ながら、いい気になってつづけた。
「ふむ、セイロンもやはり印度じゃ無いのかね。」
「多くの人はそう思っていますが、事実は違います。」ダナは或る民族的な誇りをもって、はっきりした態度で答えた。
「そしてあなたはどちらまで？」
「己か。香港までさ。」
ダナはちらと弟の顔を振返った。
「君たちはやはりここで乗ったのか。」
「はあ。」
「見たところ、君たちは商人だね。」
「はあ。」
「どんな商売をしてるのかね。」
ダナは再び弟の顔をかえり見た。宝石商であることをしゃべったものかどうかと訊ねるように。そういう彼等は、郷土ではもとより今度の旅でもカイロやアレキサンドリアで、買うという体の良い名義のもとに、品物を掠奪するのを常習としている英国人をざらに知っているのだ。
「いいえ。」とダナは当惑しつつ答えた。「僕たちは今度商用で来た訳じゃ無いんです。カイロに親類のものがあって遊びがてらやってきたまでで……」
「ふむ、じゃ君たちは困ってる人達という訳じゃ無いんだね。」
そして彼は意味ありげににやりと笑った。
ボーイが廊下をとおりながらちらと戸口から覗いた。
「おい。」英国人はボーイを呼び止めて、戸口の方へのっそり歩いて行った。
「三等の船室はここだけか。」
「ええ、そうです。もう一つ三等室がありますが、婦人用になっていますから……」とボーイは成っていない、片言の英語で答えた。
「ちえっ！」と彼は忌々しそうに舌打ちした。
「じゃコロンボまで、この臭い黒奴(ニグロ)どもと一緒に行けって云うのか。堪らん。だから日本の船は駄目だ。これが欧羅巴の船なら、我々と黒奴と一緒にするなんて乱暴な事は決してしやしない。馬鹿々々しい。日本人は我々欧羅巴人を待遇する事を知らんのだ」
「じゃ、一等か二等へお変りになったらどうです。」ボーイは真顔の中に、一味皮肉な色を湛えて云った。

「ふむ、もしかするとそうするかも知れん。とに角、今すぐ行ってビールを二本取ってきてくれ。」

「はあ、」とボーイは片手を差出した。「お金を。三等客はみんな現金で頂く事になっていますから。」

「いくらだ？」腹立たしげに云って、彼は片手をずぼんの隠しに突っこんだ。

ダナとチルタは顔を見合った儘、いつまでも黙っていた。やがて、兄は床の上に放り出された小荷物を拾いにかかった。その中には宝石類の見本を納めた大切な箱もあったのである。弟も黙って手伝った。そして英国人の寝床からできるだけ遠く、戸口に近い所に二人の場所を選んで、外の荷物と一緒にそこへ引越した。

そして二人はまた黙然として顔を見合わせた。ダナが巻煙草の吸口を無暗に嚙み切ってぺっぺっと吐き出すのを見ると、チルタは息苦しそうにそっと溜息をついた。

いつのまにかスクリューが響きを立てて、部屋が動揺していた。

船はポートサイドを立ったのだ。

この英国紳士はウィリアム・アンダーソンというのだ。

船客名簿には、職業が技師となっていた。しかしどこの会社の、何の技師であるか、判ったものじゃ無い。一体、植民地から植民地へとわたり歩くこうしたえたいの知れない外国人には、漫然と技師と名乗るものが多い。そしてこんな連中は、大抵底なしに横柄で、ずうずうしくて、ずるい。そしてどこへ行っても、わけても有色人種の間では自分たちが白人であることを、とりわけ大英帝国の臣民であることを誇示したがる。まるで彼の一切が悪徳に包まれていたって、その白い皮膚さえあれば特別な優越を誇り得る充分な理由になると心得ているようだ。アンダーソンも、明らかにそうした奴の一人なのだ。

彼の一つしかないよれよれのスコッチの服も、綻びたワイシャツもひどく汚れていた。そのために靴だけ不調和に立派なのが妙に眼についた。荷物も僅かだった。どうせ三等に乗ってくる紳士気どりの外国人だ、その惨めさは墜落した天使にも例えられよう。

彼は滅多に船室から外へ出なかった。初め毎日一二度くらいビールを買って来させて飲んでいたが、それも三四日で止めた。金が無くなったのだ。そしていつも寝床の上に大きなからだを横たえて、旅行案内記や雑誌をよんでいるか、眠っているかした。

ダナ兄弟は彼に対してできるだけ当らず障らずの態度を取っていた。時には、長い間民族的に植えつけられた宿命的な諦めから、卑下した従順と尊敬さえ示していた。例えば、食事の時には、アンダーソンはまるで主人のように横柄に振舞って、ダナとチルタに何かと用を云いつける、なぜなら、三等ではボーイも忠実には食事に奉仕しないので。そんな時、いつもチルタは兄をかばって、自分が立ってア

ンダーソンのために用を足してやる。そして茶が出ると、ダナはきまって埃及製の上等の巻煙草のつまった鼈甲製のケースを彼の前に差出した。彼は黙って、それをとってチルタに火をつけさせて、悠々と煙を吐きながら、折から皿を集めにきたボーイに不機嫌らしくこんな風に云うのだ。

「おい、この連中が毛むくじゃらな黒い手をぬっと突出して白いパンを掴むところを見ると、己は食慾が消えてしまう。今度からこいつらとは別々に食わせてくれないか。」

二人は例によって黙って顔を見合わせる。そして次からは、英国人が食事がすむ頃を見計らって、そっと食堂へ入つて行くようにした。しかしボーイが一度に片づかないのをぶつぶつ云うので、彼にはチップを握らせねばならなかった。

そして彼等は一日の大部分、甲板で海を見て暮らした。広くもない船室に人もなげにひっくり返っている巨きな白い厭らしい獣のことを思うと、どんなに日ざしが強くっても、または臭くっても、メインデッキをぶらぶらしている方がずっと気持ちよかった。少くとも時折、いるかの群が威勢よく跳ね返りながら船を追っかけたり、波の上を掠めて無数の飛魚がすうっすうっと飛びかうのを気がねなしに眺める事ができるというものだ。

彼等は生れ落ちた日からの苦い経験と見聞によつて、白人、わけても英国人の大部分は何らかの意味で皆人殺しか泥棒であることを知っていた。それで、二人は甲板で暮らしていても、船室に残してある荷物のことがいつも気がかりだった。もっとも、ダナは一番安全な方法をとって、宝石の見本を納めた箱や、セイロン島のあらゆる宝石をちりばめた象牙の象や、現金の大部分は早速事務長の所へ持って行って保管をたのんでしまった。それでもやはり安心がならないので、二人は時々交替に、用ありげな顔をして、そっと船室を覗きに戻ってみた。

一度、ダナがウエストミンスターの五十本入の罐をふたをあけた、そして十本ばかり巻煙草入に入れて、残りを寝台の片隅に隠すようにしまって置いて、デッキへ出て行った。次に部屋へ戻った時、何気なく煙草の罐をみると、残りの大部分は誰かに抜きとられていた。

見ると、アンダーソンは例のように寝台の上に仰向けになって、雑誌を見ながら澄ましてウエストミンスターを燻していた。

ダナは黙っていた。

その夕方、彼は新しいウエストミンスターをひと罐、アンダーソンに送った。まるで盗みをされたことを感謝するようなものだ。多分ダナのこうした心理は、勃興民族、わけても白人なぞには理解されないだろう。もとよりダナとしても、アンダーソンに好意や同情をもってそんな馬鹿をした訳ではない。むしろそれを彼等の間に起ることを予想せずにいられなかった、或る危機に対する一種の予防手段と考えたかも知れない。いずれにしても、結果としては、

だった。

それからまもなくの事だ、チルタは不意に部屋へ戻ってきて、アンダーソンが何やら一心になってダナの寝床をひっ掻きまわしているのを発見した。

チルタはすぐ兄を呼びに行った。ダナが昂奮して部屋へ入ってくると、アンダーソンはいきなり巻煙草を啣えながら聞いた。

「君、マッチを持っていないかね。」

で、ダナは隠しからマッチを取出して、火をすって、彼の煙草につけてやった。

彼は黙って出て行った。兄弟は早速荷物を検べてみたが、幸いまだ何にも取られていなかった。

まるで陸の見えない日がつづいた。暑さは日に日に烈しくなった。この紅海は、両側にアフリカとアラビアの燃えるような沙漠を控えているので、暑さは印度洋にまさっている。そして、メインデッキには、日よけのために大きなずっくの幕が張られた。

ダナたちはもう甲板ばかりで暮らすこともできなくなった。厭でも応でも、狭い暑苦しい船室でアンダーソンと一緒にいなければならなかった。

アンダーソンは相変らず、横柄な、意地わるい主人のように振舞っていた。例えば、煽風器にしても、彼はいつも自分ひとりで風を受けるような風に向けて置く。そしてダナが少しでも、自分たちの方へも風がくるようにその向きを変えると、彼はぶつくさ立って行って、すぐ又もとどおりに直すという仕末だ。唯二人の兄弟がいつも我慢づよく黙々としていたので、まだ荒々しい喧嘩にもならなかったのだ。

或る時彼はダナに向って、不意に、五ポンド貸せと云い出した。

「コロンボにつけば、そこに僕の親友が警察署長をしている。それから金を借りて、まちがいなくすぐに返してやるから。」そして彼はずるい笑いを浮かべて、半ば脅やかすように、じっと相手の顔を見守った。

ダナは非常に当惑した。貸せばもう取れないにきまっている。拒絶すれば、ここに一緒にいてさきざきどんな目に遇わされるか知れたものじゃない。仕方が無い、彼は二ポンドか三ポンドでもやってしまおうか、そう思わないでも無かった。

彼は暫くの間、考え惑っていた。そして結局、ありったけの勇気を絞って、自分たちは余分な金を持たないからと云って断わった、というよりは、寧ろ、あやまったのだ。

アンダーソンは、長い間、ひとりぶつぶつ怒っていた。

ところが、夕食の後で、彼は妙ににやにやしながらダナの側へやってきた。そして写真を二三枚差出しながら、これは滅多に手に入らない珍らしい品だ。一ポンドで買えと

子だ。

云い出した。あくまで押しつけがましい強制的な態度と調子だ。
ダナはまた困ったと思ったが、とにかく写真を手に取ってみた。チルタも側から覗きこんだ。彼等の目の前には、いかがわしい形をした男と女の白いからだが入り乱れた。ダナは殆んど厳粛な、腹立たしい顔をして、同時に赤くなって、大急ぎでそれを相手に返した。
「どうだ、素敵だろう、みんな白人の美人だ。一ポンドは安いもんだ。」と英国人は彼らの前に立ちはだかって、巨きなからだを揺すぶってげらげら笑った。
ダナは十シルリングの金を取出して、彼の前に差出した。
「私はその品はほしくありません。でも、あなたは金が御入用のようですから、これだけ差あげます。取って置いて下さい。」
アンダーソンは大いに不平な顔をして、すぐ金を取ろうとしなかった。
「十シルリング、それでは安すぎる。どうしても一ポンドで無くてはいけない。」
ダナはとうとう一ポンドの紙幣を出してやった。英人は満足して、写真をダナの手に渡そうとしたが、彼は何か穢らわしいもののように振返って見ようともしないで部屋を出て行った。
アンダーソンは上機嫌だった。直ちにボーイが呼ばれた。ビールが運ばれた。彼はじき良い気持ちに酔って、シャツ一枚でひっくり返って眠ってしまった。
アンダーソンがチルタに向って万年筆を貸せと云ったものだ。チルタは素直に、その大事な愛用の万年筆を取出して、彼にやった。彼はその日一日返さなかった。
次の日の午後、二人の兄弟が甲板から部屋へ戻ってみると、アンダーソンはボーイと頻りに烈しく云い争っていた。何でも、アンダーソンが洗濯賃を払わないので、ボーイが怒っていたらしい。彼はひどく激してこう云っていた。
「あなたがもしどうしても払わないと云うんなら、仕方がない。船をおりるまでに荷物を差押えるからそのつもりでいるがいい。」
「ふん、勝手にしろ」巨きな英国人は小さい日本人を掴み潰さないばかりの権幕で烈しくどなった。「英国の紳士を何と考えてるんだ、東洋の小猿め！　もしそんな事をしたら貴様を英国の警察へ突出してやるぞ。」
「何が紳士だ、笑わせやがらあ、」と毒づいてボーイは荒々しく出て行った。
アンダーソンは寝台に腰をおろして、ぶりぶりひとりで怒っていた。そして側にあったビールをとって、癇癪まじりに栓をひっこ抜いた。
ダナは満足そうな微笑をもって、セイロン語で弟にささやいた。
「この白い獣は、僕たちばかりでなく、船の日本人からも

ひどく嫌われてるんだね。」
「あたり前ですよ」とチルタも快心らしく答えた。
そして彼はいつものように、日記を書こうと思いついて手帳を取出した。同時に、万年筆がきのう英人に貸したままになっている事を思い出した。
チルタはアンダーソンの側へ行った。英人が不機嫌きわまる苦い顔をして、ぐびぐびビールを呷っているのを見ると彼はちょっとおじ気ついた。しかし必要なものは仕方がない。彼は、幾分おずおずした叮嚀な調子でこう切り出した。
「書き物がしたいのですが、万年筆を返して頂けませんか。」「何だって？」英人は妙に眼をぎらぎらさせて、射るようにチルタの顔を見つめた。「それならきのうお前に返したじゃ無いか。己は二本も借りやしなかったよ。」
チルタは脅やかされた上にびっくりしてちょっと黙っていたが、やがておずおずと吃った。「私はあなたから返して頂いた覚えがありませんが……。」
「馬鹿っ！」と彼は雷のようにどなった。
「君の寝床へちゃんと入れて置いたんだ。よく検べて見ろ」
「じゃ、お前の寝床を探してごらん、」とダナはしずかに注意した。彼はさっきから異常な緊張をもって彼等の対話を見守っていたのだ。
二人の兄弟は、チルタのばかりでなく、ダナの寝床まで隅から隅まですっかり探してみた。しかし万年筆はどこからも出て来なかった。
「このとおり、」今度はダナが英人の側へ行って、厳とした態度で云った、「いくら探してみても、万年筆はありません。もしや、あなたの考え違いじゃ無いんですか。」
「そんな事を云ったって、返したものは返したんだ。己は知らん。」英人は顔を背けた、そして懊悩と腹立ちにしたたか眉をひそめた。
「でも、もし寝床へ入れて置いたと云われるのが本当ならちゃんとそこにある筈です。ところがこのとおり……」
「じゃ、さっきの日本人のボーイでも盗んだんだろうよ、あの小猿めが！」
「あなたは恥ずかしくないか、」とダナは急にひどく昂奮して云った。「あなたはちゃんと知ってるんだ……」
「じゃ貴様は己を嘘つきだと云うのか、それとも泥棒だと云うのか」
彼は相手をぐっと睨んだ。その間にもぶるぶると震える毛むくじゃらな大きな手は、ビールをなみなみと注いだコップをそろそろと口もとへ運んでいた。
「もし人が、」ダナはきめつけるように云った。「他人から物を借りて置きながら、嘘をついて返さないとしたら、それは明らかに泥棒というものだ。」
この言葉を云いきるか云いきらないに、英人の手からコップが飛んだ。ダナは肩から胸へかけてさっとビールを浴

びた。そしてはっとする間もなく、アンダーソンは更に片足をあげて、靴の踵でダナの太腿のあたりを力まかせにぐんと突き飛ばした。彼はよろよろと倒れそうになった。

この光景に面くらって、チルタは思わず叫び声を立てた。

ダナは立直った時、全身をぶるぶると震わせた。顔は蒼黒くなり、厚い赤い唇はびくびく引きつった。アンダーソンに釘づけにされた彼の落窪んだ、白味の輝く、大きな黒い眼はもの狂おしくぎらぎらと燃えた。両手にはおのずと堅い拳が固められた。突如、彼は猛獣のように身を躍らした。と思うと、巨きな英人を寝床の上へ仰向けに突き倒して、両手で相手の太い咽喉を力かぎりぐいぐい締めつけた……。

チルタは悲鳴をあげて、部屋から外へ飛び出した。そして廊下を走りながら、大声をあげて人を呼んだ。

司厨係や、事務員や、ボーイなぞがどやどやと部屋へ駆けこんできた。それを見て、ダナはようやく相手の咽喉から、手を放した。アンダーソンは気を失って、ぐたり両手をひろげて、死んだもののように寝台の上にぶっ倒れていた。

直ちに船医が呼ばれた。彼はまもなく息を吹き返した。

ダナは事務長の部屋へ呼ばれた。若い事務長の前に立った時、彼は今にも気を失いそうにしていた。英国人に対してあのような暴行を働いた以上、――よしや、全部の罪は相手にあるとしてもだ、――彼は当然受けなければならない重い処罰をすっかり予期しないじゃいられなかったのだ。

しかし、有難い事には、ここは英人によって支配されている彼の郷里セイロンでも無ければ、英本国でも無かった。また、英国の船でも無かった。それは日本の船であり、云わばまるで利害の異っている日本の領土であった訳だ。それで事務長がダナからひと通り事情を聴きとった後で、彼を責めるような色を少しも見せなかったばかりで無く、却って優しい同情と好意を示した時、彼はびっくりした。そして初めてその理由を理解した、そして助かったと思った。

「それは本当にお気の毒でした。」事務長はまるで陳謝するような態度で云った。「どうも、ああした植民地わたりの英国人には、私共もいつも手古ずらされるんでしてね。まったく困ったもんですよ。」

そして彼は実際当惑したように笑った。

ダナは裁判官のかわりに、親切なやさしい味方を発見したのだ。そして彼等白人が印度人に対していつもどんな無茶な横暴や、掠奪や、殺人的な行為をやっているか、それを熱心に訴えはじめた。彼は再びすっかり昂奮していた。

ダナに対する一般の同情から、事件は簡単に片がついた。どっちにしたって、彼には何の罪も無かったのだ、然し、ここに困るのは、船室の問題だ。こんな事になっては、二人の兄弟は、いくら何でも今後アンダーソンと同じ部屋に寝起している訳に行かない、それは虎と同居するようなも

のだ。それで彼等は事務長にかけ合って、二等の方へ移るより仕方あるまいと考えた。

然し、そんな心配は無用だ。アンダーソンはこんな機会を利用しないで置く奴じゃなかった。彼はこの事件は、苟も大英帝国の一紳士をあのような穢わしい黒奴と同室させた船に責任あるものとして、彼のために直ちにもっと適当な別の船室を用意するように、強硬な態度で事務長にねじこんだ。これには事務長も困った。営業政策から云って、殊に殆んど英国の領土ばかり通過しなければならない欧州航路に於いては、英国人の機嫌を損ねることは何よりも禁物なのだ。事務長は仕方なしに、アンダーソンを二等の方へ移そうとした、——勿論三等の料金のままで。ところが、二等の船室はボートサイドからもう満員になっていた。船室は一等にあるばかしだ。アンダーソンは一等へ移される事になった。

こうして、次の日から、アンダーソンの見すぼらしい、しかし傲然たる巨きな姿が、一等のプロムナード、デッキの上に見られるようになった。

ダナとチルタは部屋へとじ籠ってしまった。

わけてもダナはひどく鬱ぎこんでいた。食事さえとらないで考えこんでいる仕末だ。どうやら事件は片づいたようなものの、こうした出来事の後で、白人どもが決して自分たちを許して置く筈の無いことが、ちゃんと判っていたのだ。もし甲板の上でアンダーソンに出会いでもしたら、今度は彼がダナを海へ叩きこんでしまうだろう！　例えそうでなくっても、白人どもがもし黒奴に復讐しようと考えたら、容易にどんな手段でも見出し得るのだ。そんな事は、大人が子供の手をねじあげるくらいに簡単な事だ。ここはまだ日本の船だ。しかしまもなくコロンボへつく、そして英国の権力下に身を置くが最後、どんな事が予期し得られるか知らないものは神様だけだ！……

チルタには兄の心持ちがよく判った。そのために却って慰める言葉も見つからなかった。彼は唯ダナの側に座って、彼の暗い重い心配げな横顔を眺めては、そっと溜息を漏らすだけだ。

次の日だ、見知らない一等のボーイが入ってきた。そしてダナに一通の手紙を渡して行った。

アンダーソンからだ。宛名には「黒き悪魔へ」と書いてある。ダナの手は微かに震えた。彼はすぐに封を切ろうともしない。そして暗欝な眼をじっと床の上に据えている。

「何を云ってよこしたんでしょう。僕開いてみましょうか。」

チルタが兄の手から手紙をとって、封を開いた。中には万年筆で、——こう英文が書かれている。——勿論チルタのそれだ、

「親愛なる黒き悪魔、化物の君よ。御機嫌はいかが、君たちの親切な行為に対しては、僕は今さら何と感謝

していいか知らない。とに角君らが僕を、――大英帝国の善良なる一市民を絞殺せんとしたることは、否殆んど瀕死の状態に陥れたることは、明白なる事実だ。君たちは植民地に於ける英国の法律がどんなものか、充分御承知の筈だ。コロンボにつき次第、僕は直ちに君たちを英国の官憲の手に渡してやる。君たちは直ちに死刑に処せられるであろう。

大英帝国市民
ダブルユー・アンダーソン。」

手紙が床に辷り落ちる。チルタは犇と兄に抱きついた。
「どうしよう、どうしよう、兄さん。」チルタは涙を流し、声を震わして呟いた。「だってみんなあいつが悪いんじゃ無いか……」
「いつもこうなんだ、あいつらのやり方は。僕は知ってる。」ダナはうつろな声で云って　ちょっと唇を噛んだ。「実際あいつはこのとおりやるだろう、僕たちの首を締めてしまうだろう。あの時から、僕にはちゃんと判っていたんだ。」
「だって」気弱なチルタはとうとう泣き出した。「だってそんな無法な事が出来る筈がない。そんな、そんな……」
「駄目だよ、いくら泣いたって。」ダナは殆んど冷酷な調子で云った。この世では、僕たちはどうしてもあいつらには叶わないのだ。それに、お前は知ってるだろう、あいつがいつか五ポンド金を貸せと云った時に、コロンボの警察署長が親友だと云ったことを……」
「おお、兄さん、どうしましょう！」
チルタは一層しっかり兄のからだに抱きついた、そして肩に顔を押あてて子供のように泣き出した。ダナは気の抜けた眼をして、ぼんやりと前方を凝視している……

紅海はすでに通りぬけた。そして船は今燃えるように熱い、茫洋とした印度洋へ乗り出したのだ。
落日は近い。幻想的な狂おしい雲は自分自身を灼熱した焔でかくかくと焼き爛らしながら、水平線の上で巨きな太陽を三つの部分に引きちぎった。そのために、そこにはまるで三つの太陽がひと塊りになってくらくら燃えているようだ。そして凪いだ果てしない海面には、黄金色の熱い熱い光が流れ、輝き、ゆさぶり返っている。
船客はプロムナード・デッキから、ベランダから、メインデッキから、二等の遊歩場から、それぞれこの美しい、眩惑的な、壮麗な印度洋の落日を眺めていた。
船尾には三四の人影に交って、ダナの姿が見られた。彼はさっきから手欄(てすり)に片肱をかけて、何か恐ろしく熱中した顔付で、身動きひとつしなかった。落日の下に揺れかがやくひろびろとした海の上には、船の進んできた跡が、白くうねうねと印されている。彼の沈欝な眼は一心にその跡を追うているのだ。船は進む、船の下では恐ろしい勢いで白い泡が湧き返る。そして新しく跡を刻む。しかし遠くの水脈(みお)

はつぎつぎと浪に消されて、段々幽かになってゆく……
ダナはいつまでもその場を動かなかった。とうとう彼は一人になった。
司厨長（チーフ・スチューワード）が両手をうしろに組んで、ぶらぶらそこを通りかかった。
「もしもし」彼は通りすぎようとしたが、フト立止まって声をかけた、「あなたは何等のお客さんですか。」
ダナは振返ってじろりと相手の顔を見た。そして何にも答えなかった。
「とに角ここは二等客の遊歩場になっているんですから、そうで無い方は下へおりて下さい。」
そう云い棄てて、司厨長はこつこつ立去った。然しダナは依然としてその場から動こうとしなかった。
それから五分とは経っていなかった。
二等の遊歩場でゴルフをやっていた支那人のひとりが不意に途方もない大きな声を立てた。船尾に立っていた知らない男が、不意に手すりに片足をかけて、深く深く前かがみになったかと思うと、そのまま海へ落ちて行ったのを見たのである。勿論、ダナだ。
人々は船尾へかけ集まった。ひとりがいきなり側にあった浮標（ブイ）を海へ投げこんだ。しかしその間も船はぐんぐん進んでいるのだ。もう三十間も彼方に、浪の間からダナの頭がちらと見えるばかりだ。そして白い浮標は彼からずっと離れて、徒らに浪に弄ばれている。

大騒ぎだ。司厨長はまっしぐらに船長室へ駆けて行った。船長はすぐブリッジへ駆け上った、そして船を廻転させるように手筈した。三等運転手は直ちに通信器（テレグラフ）の真鍮のハンドルをとって、「徐行（スロー）」へまわした。それは直ちに気たたましい鈴の音となって、狂暴な轟音を立てて器械の荒れ狂う、汽罐室に通じた。汽罐室では思いがけない命令にみんな異常に緊張して部署についた。船が徐行になるのを待って、舵手はかじを取り直した。
やがて、巨きな船体は徐々に右へまわり始めた。ダナが投身した箇所から少くももう半マイルは来ている。だから船はそこを中心にして、かなり大きな円を描かねばならない。船員も、船客も、みんな手すりによりかかって、緊張した眼を浪の上に注いだ、そこには、アンダーソンさえいた。あっちでもこっちでも双眼鏡が動いた。水夫たちは早くもボートデッキへ集まって、ボートをおろすばかりの用意をしている。
目くるめく日はとうに沈んだ。一時は暖かい華やかな夕焼がぎらぎら海を燃え立たせていたが、それも見る見る薄れて行った。反対の水平線にはもう夕闇が迫っている。そして暮れてゆく海の上には弱い光の反射と、暗い浪の影とがあやしく入り乱れる。何しろここは大海の真ん中というばかりでなく、一万フィートから一万四五千フィートの深海だ。鮫や鱶の類が跋扈しているのは云うまでもない。そこへ今一個の人間が沈んだのだ。人々は魔の淵を覗くよう

な、凄い、無気味な感じを持たずに覗いてみる事が出来るものじゃない。

船はまわる、ゆるゆるとまわる。しかしダナの姿は誰の双眼鏡にも映らない。人々は二三度浪の間に彼の頭を見たと思ったが、それは浪の影がつくる錯覚にすぎないのだ。

三十分ばかりで、船はついに一つの円を描き終った。ダナはとうとう発見されなかった。規約としては、こういう場合、船を二回まわしてみる事になっているのだ。然し、大抵一度まわして見つからなければ、二度とくり返す労は取らない。そして××丸は再び先の針路をとって、東へ東へ走ってゆく。

司厨長が船尾へぶらぶら歩いてゆくと、先にダナがいた所に今チルタが立っていた。

「船長！」とチルタは泣きながら彼に叫びかけた。「船長、どうか船を止めて下さい。そしてもう一遍まわして見て下さい。そしたら兄はきっと見つかります。どうか、どうか船長！」

「あなたはそこにいちゃいけない。ここは二等だから三等の方へおりて下さい。」

これがチルタへの返事だ。そして司厨長は頭を振ってしずかに立ち去った。

チルタはやはりそこを動かなかった。

海は暗くなっていた。月は無かった。それでも船の走ってきた跡は、白い浪がしらによってずっと遠くまでうねうねと見すかされた。そして大きな浪のうねりの上には、斑点になって青い燐光が燃えた。彼の目には人魂のようにも見えるだろう。

真夜中すぎ、そろそろ夜あけの方が近くなる時刻だ。

船は相変らず闇をついて、東へ東へと走っていた。マストには風が鳴り、船のまわりには絶えず大きな浪が白く砕けている。潮が悪いと見えて、プロペラーがまわる度に船体は痙攣するようにぴくんぴくんと妙な揺れ方だ。

よく晴れた印度洋の夜の空こそ見ものだ。オリオンの星座が赤い火のついたマストの上にはっきり懸かっている。ポンチ絵じみた兵隊の姿。南西の空には、特別一等星のシリウスが、燃えている宝玉のような鮮やかさだ。そして南東の空には、美しい十字架星座がようやく水平線の上に昇ってきたところ。これと同時にわれわれは北の空に低く、暗い水平線の上に沈みかかっている北極星と、大熊星を微かに見る事ができるのだ。

甲板には人影が無かった。唯メインデッキのハッチの上に、ボーイが二三人、部屋の苦熱を避けて眠っているだけだ。

水夫がひとり、提灯（ランターン）を手にして、どこからか出てきた。彼は、メインデッキを横切って二等の遊歩場へと登って行く。彼は船尾へ行った。そこには船の進行の度を計る装置があった。彼はそれを検べるのだ。

船尾には誰か客がひとり立っていた。しかし印度洋の熱い眠られない夜には、そんな事は別に珍らしくも無い。彼は用をすますとそのままブリッヂへ引返して行った。
　次の朝船ではまた大騒ぎがもち上った。朝食の時になって船の中のどこにも、チルタの姿の見えない事が判ったのだ。然し今度はもう船をまわして見る必要が無かった。夜ふけに水夫が彼を船尾で発見してまもなく投身したものとしたら、船は既に七八十マイルは来ていた訳だから。

　船はついにコロンボへついた。英国の検閲官吏が、上陸客の旅券を検査するために、早速××丸へやってきた。そして例によって、一等のスモーキング・ルームに陣どった。
　今度の事件について、日本の船員たち皆ダナとチルタに心から同情していた。そしてアンダーソンをひどく憎んでいた。それで、事務長はアンダーソンを罪人として官憲に引渡してやろうと考えて、英人の官吏が旅券を検べにかかる前に、先ず航海中の悲劇について語り出した。
　若い事務長は義憤に駆られて一生懸命だ。彼は話しながら昂奮してきた。悲しいことに、英語が思うようにあやつれなかった。彼はあせった。そして二人の犠牲者がどういう種類の人間であるかという事さえ、説明するのを忘れていたものだ。
　オスカー・ワイルドのような顔付をした若い官吏は、葉巻を燻らしながら、鹿爪らしく眉根をよせてみたり、ちょっと書類をいじったりして事務長のしゃべるのをきいていた。おもしろくも無い話だ。ひと通り話が終るのを待って、彼は隠しから小さい手帳を取出した。そして書きこむ用意をしながらぶっきら棒にこう聞いた。
「で、自殺者の国籍は？」
「二人ながらセイロン人で、兄弟です」
「ああ、くろんぼか！」と彼は呟いた。
「何だつまらない！」さすがにそうまでは云わなかった。そして、とにかく何事かを手帳に記入した。そして直ちにつめよせた客を相手に、旅券の検査に取りかかった。
　それだけだ！　そしてアンダーソンは別に検べられさえしなかった。

　次の朝、××丸はコロンボを立った。
　船がしずしずと動きはじめると、どこからともなく小さい丸木舟が幾十となく船のまわりへ漕ぎよせてくる。まるで魔術で現われるようだ。その丸木舟にはそれぞれ土人が黒い肌をあらわに猿股ひとつで乗っている。彼等は客に船の上から海へ金を投げさせて、水中へ飛びこんで行ってそれを拾うのだ。それにしても、どこまで行っても、どこへ行っても、世界には黒奴の仲間が、何とまあ無限に多くいることだ！
　アンダーソンは一等の遊歩場を、例の傲然たる態度でぶらぶらやっている。そして客が海へ金を投げたり、黒人が

水中へ潜って行って見事にそれを拾ったりするのを、蔑すむように眺めているのだ。その時船のま近まで丸木舟を漕ぎよせていた一人の黒人が、アンダーソンの方を見あげて叫んだ。
「金を投げてくれ。」
アンダーソンは気のつかぬふりをしていたが、何と思ったか急に吸いかけの巻煙草を口からとって、その黒人めがけて放りつけた。火のついた巻煙草は、くるくると舞い落ちて、黒人の灰色の縮れた髪にあたった。彼は激怒した。そして下から櫂を振りあげて彼にどなった。
「やい悪魔！ 泥棒！ 人殺し！」
「貴様こそ悪魔だ、化物！」と英人はどなり返した。
そして彼は毒々しく笑った。それから今度はさらに上衣の隠しから、煙草の罐を取出した。彼は大急ぎで中味を抜きとった。そして先の黒奴めがけて力かぎり空罐を放りつけた。罐は漕ぎ手の足を擦って、どぶんと海に沈んだ。
黒奴は火のようになった。それを見て、外の丸木舟の連中も烈しく怒った。彼等は一せいにアンダーソンに向って吠え立て、櫂を振りまわし、拳を振り、あらゆる脅かしの身ぶりをした。殊に火を投げられた最初の黒奴は、もう仕事の事なぞ忘れてしまったようだ。そしてあくまでアンダーソンに追い縋ろうとするように、徐々に速力を早めつつある××丸を追ってきた。その他の丸木舟も一緒につづいた。然し一万トンの船と、哀れな丸木舟とでは、今の場合どうにもならないのだ。
アンダーソンは高い手すりから彼等を見おろして、相変らず横柄な態度で毒々しく笑っていた。それにしても、もう一度くり返して云うが、どこまで行っても、どこへ行っても、世界には黒奴の仲間が、何とまあ無限にうざうざいる事だ！
いきり立った黒奴の群も、ついに追い縋るのを断念しなければならなかった。そして彼等は船を見送りながら、アンダーソンに向けて再び櫂をふりあげ、拳をふりまわし、弾丸のように哮えた。
「覚えてろ、人殺しめ、貴様たちを今にこの足の下に踏みつけてやるぞ！」

牧場を逐われて

鶴田知也

一

私が住みなれた村を出て百姓熊太郎の家に住み込むことになったに就いては話があるが、それが秋の終り、つまり北海道が裸になる頃であった。

どう考えて見てもそれまでの私は、精勤賞ものの忠順無比な牧夫であったのだ。然るにあの慢性胃病患者で基督教徒の牧場主は、それこそ突然私の首を馘った。何故彼はそうしたかと云えば、『どうも気に食わぬ』からであった。それでは話が合わないじゃないか。何故牧場主なる者が、彼の牧夫の忠順無比にも関わらず『気に食わぬ』のか。辻褄の合わぬことと云うものは世の中に珍しい訳でもない。併し此の場合はそうじゃない。と云うのが、私が農民を煽動して『多勢を恃んで』農場事務所に対し『不穏な挙動』に出でさせようとしたからである。話の序に云って終えばその結果は、農場長（彼は基督教徒）と警察署長（彼は真宗信者）との陰謀にまんまとはめられて、（高々それも永年の慣習になっている枯樹の伐採が盗伐の名目で）事々しく十三人の百姓達はあげられた。そして計画通りに丸る二日の後には、一時間半に渉る説諭の後に釈放されたのである。

彼等は勝ち、私達は敗けた。従って私達の農民組合は跡形もなくなった。それればかりか百姓達は宛も野牛の目玉のような目で私を、あたかも見知らぬ通りがかりの男をでも見守るという風に見るようになった。私は見事に恥をかいた。しかしそこには私が恥をかいただけでは治りのつかぬものがあった。旅の門出に拵えた足傷は旅路の甚しい厄だ。その厄いを私は仲間達に負わせたのではあるまいか。そして又それよりも一層（正直な所が）さし迫った事が起った、私は村に居づらくなって終ったじゃないか。私は一人の『怖しい浮浪人』に過ぎなくなった。

私には仲間が失くなった。

物判りがよくて私とは一番気の合っていた金作の目にも、それァ私の思い過ぎだったのかも知れぬが私を旧のようには見て居ない影を認めた。彼は又私が身を入れてする話の間に、苦笑をしたり頭を掻いたりするようになった。白状すれば病みついた鶏のような具合に私は肩を丸めて黙り込んで終ったのである。

或る朝のこと、その朝は又怖しくかららりと晴れ渡ってい

て、金色の日が輝き露の玉が熊笹や色んでいる虎杖や蕗や犬蓬等から次々に燦きながら落ちると云う風だった。でどう考えたって悪いことの方でも今日だけは遠慮して起りはすまいというような気がした。私は口笛を吹きながら朝日のさっと差し込む牛舎で糞だらけの寝藁を掻いていた。すると容態(なり)のひどく小さい意気地なしの牧夫が私を呼びに入って来た。私はこの男が慊いであった。だが他の二人の牧夫だって全く封建的には変りがなかった。彼等は生活に打ちひしがれた男達であり、正直にさえ稼いでいればそれでいいと云うのが彼等の信条であった。『何故貧乏するか？』そんなことには全く興味さえなかったのだ。そこには卑屈、忠僕的傾向、鈍感、その日暮しに甘んずる心等があった。だから若しも、彼等の牧場主が、基督教徒になることを命令するなら、彼等は恐らくは従順に命を奉ずるに相違ないと思われた。

　そして彼等は意識的ではなくても、組合の騒動の折には、確かにスパイを働いたらしい証跡があった。

「旦那がはァ一寸来て呉れとよ。」

「旦那が？」と私はフォークを藁堆みに突き刺して云った。「一態なんだね？　自分で怒鳴(どな)れァ聞こえねえとこでもねえにな。」

　牧夫は咳払いをしてポケットの手を抜き片脚で貧乏揺りをしながら云った。

「直ぐに来て呉れと云いなさったただよ。」

「ヒウ！　今朝が雨降りとでも云った面つきようしてるぜ！」と、私は気軽に牛舎から光の中に出て嘯をした。『好い天気じゃねえか！』

処が、私はひょっと、事務室（と呼ばれている板敷の間）のガラス窓越しに、基督教徒の頭を見つけた時立停った。と同時に探偵のような敏感さで呼びに来た牧夫の口振りと様子にはっと気がついた。『ふふん！　お出なすったな』そこで、別にその必要もなかったのだが、くるりと牛舎へ引返して截断機(ハッシュカッター)の上に載っけて置いた上着を着込み帽子を掴んだ、何のことはない矢張り私は狼狽てていたに違いない。そして一頭だけ残されていた種牛に声を出してお別れを告げた。

「あばよ！　俺は逐んだされたよ。お前達も達者でいろよ！」

　黄色い牧場主は、ガラス越にチラと私を見ると元通りに顔を伏せて椅子をがたがた云わせた。そして私がニスの剝げた朱い卓子の側に立った時、彼はばたんと手にしていた帳簿を閉めて、扨て書架の間からちゃらちゃら紙の封筒をとり出して私の前に置いた。封筒の中の金が音を立てた。基督教徒は咳払いをした。私も咳払いをした。封筒の上には『内訳』が細い字で書いてあった。何故だか自分でも判らなかったが、私は不貞々々しく側の椅子を引寄せて坐りその『内訳』を読んだ。『ふん、すると三ヵ月と二十一日俺ァ此処に居たんだな……』と私は考えた。そして解雇

手当として書き出してある五日分の金高を読んだ。
牧場主は急に思い出しでもしたようにそそくさと卓子の抽斗を引き出したが直ぐそれを押し入れて帳簿を開いた。併しそれも閉めて書架の間に差し込み、今度は立上った。彼はひどく落着きがなかった。私は彼の背中に云った。そして黒い仕事用の中折帽を手にとった。
「はァ、すると五日分てえのがその何ですな？——」
そう云うには云ったものの、我ながら威勢のあがらぬ声であった。
牧場主は帽子を卓子の上に一応置いてそれを又取上げる時唸った。その動物的な乃至は原始的な声は『何も云う必要はない』とか『それにちゃんと書いてある通りだ』という意味のものらしく受取れた。『何だ、このぐずの黄疸奴！』と私は心で怒鳴りはしたが、立上った時迂濶にも、口では甚だ嚇しの効かぬ調子でこう云った。
「それじゃまァ、又御厄介になるような御縁もあるかも、それあ判りませんやね旦那。へっ！」
私が敷居の所でふと振返えったら、牧場主は私の方へ向いていて、眼と眼が石でも打ち合わすようにカチッと合った。それだけだったなら無難で済んだろうに、基督教徒は余計な親切気を起したのだ。それが抑々の間違いの始りであった。それに此方にすれば、すっぱりと首を馘られた上での御親切は、二つ身にされる前にしこたま絞られるのより倍も癪に触るというものだった。
「一寸待ち給え——」と牧場主は云った。恐らくは彼の基督教的に訓練されていない部分の感情を籠めて……。
私は何よりも先ずその巡査風な物の云い振りで、沸いている胸のうちの蒸気が、吹き出る孔をあけられたような気がした。私は引返すと卓子の前に帽子を被ったまま突立った。『今更ら何の用事だ！』すると相手は甚だ張合のない黄色さで黙り込んで椅子に坐った。
「何か御用ですか？」と私はひどく無愛想に云った。
「お前はつい今何とか云ったね？」と相手は顔を上げて云った。
「何か未だ御用ですかと云いましたよ。」『ひゅっ！ 黄色い面だよ！』と私は心で附け加えて云った。
「いやその前にだよ。」と彼は用もないのにペン立を引き寄せながら云った。「その前に何かお前は含んだような事を云うただろう？」
「はァ、云いましたよ。」
「あんな風な言葉は——」と彼は云い澱んだ。
「『俺に使うべき言葉じゃない』ですかね？」と私はにやりと笑おうと努力しつつ云った。「で御用と云うなァ一体何です？ そんな言葉の詮議などどうだっていいじゃないですかい？」
「どうでも良かない。」
「じゃそれが用ですかい？」
「そいつァ何です？ 何か私に貸しでもあるのですかい？

へっ、それァ払えるものなら払いましょうよ。ことによったら私の方で貸しがあるかも――はは！　それァまァいいや。御用の方から承りましょうよ」

　私の気持ちはと云えば、事を強いて荒立てたいというのではなかったけれど、何か荒立つような機会があって呉ればいいとそっと希わないではいられぬ状態ではあった。それにしては第一余り相手が穏かな声と態度なのだ。そこで何うしても彼の穏かな声と態度とのうちに不愉快極まる何かを発見する必要があるらしく見えた。するとどうだろう、彼は少しばかり力の入った声でこう云った。

「私の用というのは他じゃない――」彼はいきなりペン立をひっくり返した。「お前の前途について一言忠告したいと思ったのだ。お前、帽子を脱いだらどんなものだ？」

　私は帽子を脱ぐ代りに左手をズボンのポケットに突込んで答えた。かっとしたのだ。

「私の前途？　旦那その前に、そんなことより自分の黄疸の療治をした方がいいや！」

　彼は突然固くなった。

「私は、君の前途を思うて云うのだ。それに私は黄疸じゃない」

「黄疸なら手当の仕様がありまさァね」

「お前はどうしても真面目に聞いて呉れないんだな？」彼は音を立てて空唾液を飲み込んだ。

「その代り真面目に云ってまさ。あは！」『お前の黄疸面は南瓜と乾物ばかり食らう罰さ！』と私は口のうちで云い添えた。そして『もう遠慮なんぞしやしねえぞ！　俺の前途だ？　へ、猪子才な！　手前等の前途は一態どんなもんだか――』と胸一杯で思った。

「用はそれだけですかい？」

「もう沢山！　お前は可哀そうな人間だなあ。」

「可哀そうな人間だと？」

「ああ、もう出て行って呉れ！」

「俺の方から云やァ、手前等ァ憎い野郎だ！　何奴も此奴も！」

「出て行けったら！」

「一態誰が呼び込んだい？」

「俺が呼び込んだよ！」と彼は卓子を叩いて叫んだ。もう一つの喉で叫んだというような初めて聞いた彼の声であった。「お前の前途を思えばこそ呼び込んだが……。」

「しゃら臭えや、お前の耶蘇教なんぞ豚の餌にもなれァしねえ！　俺の前途？　へ！　首を馘っといて前途もねえもんだ！」

「出て行け、出て行け！　馬鹿者奴！」と彼は立上りざま胸をつき出して叫んだ。

「馬鹿者だ？　手前なんざ地獄行だい？」

「悪党！　貴様は悪党――」

「手前等から悪党呼ばわりされるなァ此方とらの名誉だってえこと、為になられァ、覚えてやがれ！」

調子づいた勢でもっともっとが鳴り散らしている間に、彼の肥え太った妻がグウスベリイの生垣の向うをちらちらと走り過ぎたのを私は認めた。彼女は裏から廻って牧夫達を呼びに行って来たものに相違なかった。『ふん、よかろう!』私は覚悟を決めた。だが、覚悟をきめながら、あの小男の牧夫以外の二人が、牧場の柵の向うにある台地の豆苅に出ていることや、あの小男が彼等を馬で呼びに行ったとしたら五分とたたぬうちに力持の方の牧夫が帰って来られること等を考え合わせた。そして、あの意気地なしのおべっか使いの力持に、よし自分が撲り倒されるにしても、こうなった上はやれるだけはやらねばならぬ義務があると思った。

二

事務室から居間に通ずる板戸がぱっと開いて、血相変えた牧場主の妻が現われて来た。板張りの草履の上に彼女が下りた時、ガラス窓が揺れて音を立てた程であった。彼女は小さかったが確かに二十六七貫匁はあった。腮が三つ以上もある上にそれにほやけが胸の方から伸び上って来ていた。あの界隈で、肥えて腮にほやけのある吝嗇家と云えば知らぬ者がなかった。そして彼女が、結婚前に婦人伝導者だったということも大抵知っていた。併し、彼女があ云う風に血相変えて怒った時にその眼角がどんなにひどいかは恐らく誰も知るまい。それに是非附加えねばならないのは、天の配剤は不思議なもので、そんな激越な状態に居る時の彼女の顔は常態にある時よりも遥かに人間に似ているのであった。余計なことだが、彼女の伝導の結果は、彼女が鹿爪らしい顔つきをすればする程、悪戯が過ぎる神、云い代えれば悪魔の存在を信じさせはしなかったろうかと思われる。彼女はその人間めいた顔を私の胸に押込むためとでも云う風に突っかかって来た。

「お前は、何と云う横着者だね!」と彼女はゴム風船につけた笛みたいな金切声で鳴り出した。「この恩知らず奴、考えてみたらいいよ、一体誰のお蔭なら野たれ死にせず今日まで生きられたのだよ? それに、聞いていれば付上ってさ、横柄な様子ったらあれァしない。お前の前途がどんなものだか大抵知れてるんだ! 野たれ死にか監獄さ。さあどっちでもお前の好きな方へ行ったらいい。」

「奥さん。」と私は彼女の凄しい勢に面喰いながら辛じて云った。「あんたが出て来なさる幕じゃなかった。」

「何だって? 私が出て来る所か所でないか、お前なんぞに指図される私じゃないんだよ!」

「そうかも知れねえな。」

「それが判る位ならさっさと出て行く方が自分の為になるって事位判りそうなもんだ。」

「俺ァ女と喧嘩したこたァねえ……。」

「そんなら何だって旦那に太平楽なんぞ並べるんだよ!」

「それが聞き度えのかね？　奥さん。」
「お前は向うに行って置け」とこの時になってやっと『旦那』はその妻に云った。
「行きませんよ！」と大兵肥満の女はその良人に今度は食ってかかった。「私ァ出て来ましたよ。向うに行っていい時だって知ってますよ。第一貴方が悪いんだ。最初から私は、この男が真面目な男じゃないと云ったじゃありませんか。」
「もういいよ、もういいよ。」と旦那は云った。彼は、この事でどんなにこれ以後虐めつけられるだろう、と考えて居るに相違なかった。
「もういいことがあるもんですか！　この男がこんな男だってことはちゃんと私ァ見抜いてたんです。貴方が私に逆らって為たことで一度だって碌なことはないじゃありませんか！」
「もういいったらいい！」と旦那は元気を出した。
私は窓越しに牧舎に沿うた路の方を見た。夫婦喧嘩なんぞより、その方が此際重要な問題であった。もうあの力持が私を撲り倒す為めに姿を現してもいい頃であった。そうだ、私には全てその喧嘩に勝目を感じなかった。勝目は感じなかったが、それだからと云って放り出す訳にはいかないものを強く感じた。私は『義務』を感じているんだと云うことを信じたかった。それは、勝つ見込の立たぬ喧嘩に対する、香しからぬ意気の沮喪に備える為めでもあったが、それよりも一層香しからぬ他の気持を否定し度いが為であった。他の気持とは、『破れかぶれ』になろうとする打ち勝ち難いものであった。『それァお前のやるべき行為じゃないぜ。』と誰かから云われた場合に『そんなこたァどうだっていいや。』と答え度い気持であった。『俺はそうしたいんだ。』
肥えた妻は黄色い良人をまくし立てた。彼女によると、初端から判っていた横着者を傭い入れたのはそれァ思いやりじゃなくって思い違いだと云うのであった。それも賢い思い違いじゃない。自分はそれを見通して反対した。こんな男に必要なのは忠告ではなくて巡査だ。（彼女は其の凄い目で私を睨んだ）それ位のことは旦那たるものの、当然判っていなければならない筈のものだ。つきつめて云えば以上のことの巧な繰返えしであったが、私はその巧さに驚いたと同時に、こんな女には決して口論の相手になるものでないことを悟った。実際のところが、私はそっと出て行ってしまおうかとも思った位だった。『よし、も三分ばかり待って力持の奴が来なかったら去ってしまおう』と私は決心したのである。

三

それから半時間ばかりの後には私は村の居酒屋に居た。二人の百姓が酒を飲んでいたが、どちらも可成に酔払って

居た。若い方の百姓は全然知らない訳ではなかった。私はどうしても酔えなかった。私は落着きがなかった。そして酔払いの百姓のとりとめのない話が耐えられぬ不快になって来た。私は、馬鈴薯の搾粕で拵えたと云う悪質の焼酎を飲みにかかった。

『何うして俺はあんな風にやっただろう……』と私は半時間ばかり前の出来事を思い出しては『後悔』していた。

『第一、あの力持の奴が到頭帰って来なかったのが判らんし、それがああなる原因だったんだ。』

私は、あの不恰好な牧場主の妻を殴ったのであった。彼女は私に椅子を投りつけた。

「そんな塩梅に、はァ、俺もまあ豪勢に暮したもんだからなも」と年をとった方の百姓は彼の昔の日の生活を自慢し続けていた。「思いついた事ァ何でも為た。なんでも為たよ。鶩を——嘴がこう曲った鶩よ、鳥の鶩よ、あれを飼うたことがあらァな。俺ァ彼奴が好きでなも。卵から孵れて間のない奴に、俺ァ五十両出したよ。今の金にすれァ二百両た云うまいな。」

「山崎さんよ——」と酒屋の女将は煙管を投りながら云った。「それァ、あんたの旦那が飼うとんなはった鶩のことじゃろう？ フフフ！」

そうだ、昔豪勢な暮しをしていたこの百姓は迂潤にも二三日前、そう女将さんに話したのだった。女将にすれば何よりも、自分も落醜れて北海道三界に居酒屋商売をする身分ではあるが、こんな百姓の『家柄』とは『家柄』が違うことを誇らずにいられる訳がない。『お前が七十両の鶩を飼うたなら自分は二百両の虎を飼うたろうよ！』

「俺の旦那が飼うたと？」と百姓は云った。「おう旦那も飼うたよ。じゃが俺も飼うたよ。五十両出してな。旦那のは親じゃった。親で百八十両出した鶩じゃった、あれァ威勢の好い鳥じゃなも！ 日に二十羽づつ生餌を呉れてやる」

『爺さん！ 下らねえこと云うなァ止せやい！』と私は怒鳴ろうとして思い止った。『ええい、嘘っぱちでも気が休まろうってものさ！』

焼酎は私の口と喉と胃の腑を焼くようであった。私は駄菓子を並べてある箱に寄っかかってひどく不機嫌そうに通りを眺めた。そこには狡るそうな眼で此方を注意しながら二羽の大鴉が不細工な歩きぶりで歩いていた。日がカンカン照っていた。私は溜息をついた。私の胸の裏はひどく混雑していた。私は何故あの力持の牧夫が遂に来なかったのかに就いて、或は何故あの牧場主の妻などを殴ったかに就いて、綿々と考えているうちにふと、私が首を馘られたんだということに、全くそれが新しい発見だとでも云う風に思いあたったのである！ それは私の心臓を狽てさせた。私は首を馘られることに不得手ではなかった。その度に私の心臓は私よりも先ず狽てたものであったけれど、今度のような狽て方は初めてであった。それは『どうにかならァ』と云う気持を、起こそうに起こされぬ境涯に、私が在った

からだろう。私には、何処にだって必ずいた仲間が、此処では只った一人もいないじゃないか！　それに、北海道は今や裸になろうとしている。秋の頃、屋根の下に居られる者は幸福だと云ったロシア人の言葉は全く本当だと思った。正直な所、私は孤独をぞっと感じて狽てた。私のこのせんちめんたりずむは或は悪質の焼酎が効いて来た為めだったかも知れない。とは云え、私にして見れば飾気なしのぞっとする事実であったのだ。私は酔払って終おうとあせった。

突然、黙りこくっていた若い方の百姓が声を噛みしめて泣き出した。私は自分以外の者が泣き出したのに吃驚して、手にコップを持ったまま体を歪った。

彼は三十そこそこであった。悪い体格ではなかったが、頭から顔にかけて火傷の痕があり、左脚が跛であった。彼も亦私の仲間の一人だったのだ。彼は、両掌のうちにコップを掴み込んで頭を垂れ、さめざめと泣いた。明かに酔泣きに相違なかった。相違なかったが、その無念そうな声には何か実が籠っていると私には思われ、芯に響いて来るものがあった。私も胸が一ぱいになった。

「どうしたんだい？」と私は声をかけた。

「俺が悪い、俺が悪いのんじゃ……」と彼は頭を上下に振りながら切れ切れに云った。

女将は私に笑いながら目配せと放っとけと云う意味の手真似をした。『いつもの癖だから相手にならん方がいい』と云う風に。

「そんな塩梅じゃもんでなも」と年寄の百姓の方は女将に彼の話をつづけた。「俺ァその女郎を受け出すことにきめたよ一山売れァそれで万事が方のつく位えの話よ、所があんた、その山ちゅうのが木曽の奥でなも、猪や鹿の巣見てえなもんで、俺ァ何遍も猪狩をしたよ。犬が三十頭から勢子が五十何人という騒ぎじゃ。鐘太鼓を叩く、わいわい云う声が山じゅうでする。犬が吠える。兵隊の大演習見てえなもので、あああ、思い出すなも。」

「俺が悪い、俺が悪い……」と若い百姓の方は続けた。そして私の方へ向き直った。「何もかもはァ俺が甲斐性がねえのが悪い……。」

私は焼酎の瓶とコップとを持って立上ったが脚がすっかり酔払っているのを知った。

「何だって泣くんだね？」と私はかっと頭へ上って来る酔を感じながら百姓の横へ潰れ込んだ。「泣きてえこたァそらァ数あらァね！　え？　しっかりしね。さァ一緒に飲もうじゃねえか！」

「俺が悪いのんじゃ、俺ァ甲斐性がねえのんじゃ。あんた聞いて呉れるかね？」

「さァ、一杯やんな。え？　大将！」と全く酔払った口振りの自分を微かに意識しながら私は云った。「お前の話をそれァ聞きもしようよ。だが、俺の胸のうちだって変りァねえ！　あああ止そう。もう止そう。さっぱりと止して

さァお前、飲めよう――。」.
「それァ兄さん！」と年寄の百姓は私の酒の方へやって来て云った。「考えれァ俺だて昔ァこれで豪勢にァ暮しもしたが、今じゃ泣き度え胸を耐えとるのよ。なァ松さん、泣くなよ。兄さんの酒を飲んでからりと心を変えたがええ。」
「勿体ねえ、勿体ねえ――」と若い百姓は歔欷げながら云った「山崎さァ、俺ァ甲斐性なしじゃ。じゃが一日だとて稼がいで居った日はねえのんじゃ。俺は片輪よ。俺ァこがいな面ァしとらァな。俺ァおめおめ生きとりてえた思わん。一日でも生きとりてえた思わんよ……」
「俺だてそう思いもするよ。」と年寄の百姓は私へ向いてイヒヒと笑って見せた。「なァ兄さん。じゃと云うて死ぬのも楽じゃねえ！　それより何もかも思い出されん程飲もうじゃないかの？　これァ悪い思案でもねいわや？」
「そうさ。松さん、なァ矢張り俺等ァ兄弟同志よ！」と私は立上って怒鳴った。「飲みねえ！　山崎の爺さん。松さん。飲みねえってことよ。へっ！　女将さん、変な顔しなさんなよ。俺ァ只ったえい前首を馘られました。馘られましたがほら、あんたに損をして貰おうたァ云わねえ！　これだけあれァもう三本や四本貰うてもいいだろうな？　へっ！　いきなり御機嫌が斜と来なすった。俺等をそう安く見積って頂き度くはねえぜ！」
「何のそんなことあるもんかいな。」と女将は棚から焼酎の瓶を下して立上って云った。愚劣極まる女であった。「あんたどないしたのや、どないして首きられたん？」
「どないも糞もねえ、いきなりぼすっとやりやがった！　あの黄疸奴！　あ奴等のやることァざっとそんなものよ。どうするか見てやがれ、その暁にァ目に物見せて呉れらァな！　おい、松さん泣くな。しっかりしねえ。泣き度くねえ百姓なんて居やしねえ！　え？　泣く代りに噛みついて呉れるんだ！　爺さん、昔がどうあったろうとどうでもいいじゃねえかな。云うだけ野暮だ。俺等ァ皆一緒になって極道者達を××さねァなんねえんだ。考えて見ねえ。え？　俺等ァ組合を打っ潰ぶされっちまったじゃねえか。組合を拵えることァならねえなんて法律はねえ。俺だって知ってらァな。いけねえのが、畜生！　法律が俺等のものでねえってことなんだ。彼奴等にすれァ、組合を拵えるなァ法律に合ってるんだが打っ壊すのも奴等の勝手よ。そうなれァ此方とらはどうしたらいいんだい？　外見や伊達で組合を拵える訳じゃねえ。馬鹿にして貰うまいよ、俺等だって物が云い度えし、云わずに辛抱能きる訳のもんかい。畜生奴！　それがよ、へっ！　奴等の気に食わぬことだからって気に食わぬことなら俺等の方にゃざらにあらァ。はばかりながら、誰にも彼にも気に入るような工合にしようってえのは、それァ閑のある人間の目算よ。第一、奴等が俺等を×××り俺等が奴等から牛見てえに×××られてるなァ文句なしの事じゃァねえか。松公！　飲みねえったら、え？　泣くなよ。泣くなってことよ。泣きてえのはお互いよ、辛

抱できねえのを辛抱するんだ、泣く代りに腹一ぱいに噛みついて呉れるんだ！　な、皆一緒になってばくっと噛みついて呉れるんだ。奴等ァ皆共謀になってやがるんだから、俺達も一緒にならねァなんねえ。爺さんしっかりしねえ。お前が駄法螺ァ吹くなァ量見違いだ！　吹き度くもあろうがそんなこたァ薩張りと止したがいいんだ！　はァ飲みねえ、飲みねえったらよ！　俺等ァ兄弟同志なんだからなァ！」

「うん、兄弟同志よ。違いない。おっとこぼれるじゃねえきゃも。」と年寄は私の注ぐ酒を受けながら云った。「お前さんは怖しうよう演説がうめえぞ。俺だてもそっと若い時にゃうまかったものよ。松さ、泣かいで兄さん酒を貰うたらよかべ！　やれやれ結構な酒だでなも。」

「俺だけがどうしてこう運が悪いかなァ？」と若い百姓は一層甚しく泣き入りながら聞きとれぬ位いに切れ切れに云った。「牛ァ牛で三遍も交尾料とられる。やっと子が入ったかと思うたら流産して終う。馬鈴薯はロット病で目もあてられんし、玉蜀黍ァ『親爺』(注、熊の事)が半分がた荒した。惨いことにはァ、親父の目病みァ手遅れじゃと云うじゃねいか……。俺ァ一遍でも罪作った覚えはねえ。俺ァそんな覚えはねえ。それに、事務所は年貢を収めんと差押えするちうことじゃねいか。俺ァ一日だて生きて居りとうはねい……。」

「くよくよしたって何になるんでえ！　松公飲みねえったら！」と私は怒鳴りながら若い百姓を抱いた。「俺だって泣き度えこたァあらァな。よ、元気を出して呉んねえ。俺等に駄法螺を吹かせたり、泣かせたりするなァ外じゃねえ皆奴等の仕業なんだ。」

「事務所のやり口ァそれァ面白くねえ。」と年寄はこぼれ酒を掌で拭っては頭にぬりながら云った。「俺ァそんなことはせなんだ。俺ァ十何町歩てえ水田を持っとった昔ァ、嘘じゃあれせん、俺ァ昔豪勢にやっとった時分にゃ小作人共に一遍でも無理を云うたことたなかったよ。不作の時にゃ――あれが明治三十何年だったか――二年そうだなァ一年は半分、後の年ァ丸るっと年貢を免してやったもんでも。そうすれァ百姓も恩に着て横着な真似は能くせんからの。」

それから後を、私はよく憶えていなかった。只だ、年寄の百姓に対して何か乱暴を働いたような、薄い記憶があった。後に知ったのであるが、私からコップを投げつけられたのは酒屋の女将であって、何でも彼女はへまな口を私に叩いたらしいと云うのであった。

四

金作が、私の解雇されたのを知ったのがもう日暮であった。彼は教会を訪ねて若いメソジスト派の牧師と一緒に、私を捜ねに出掛けた。深い霧の中を牧舎用の安全ランプをともして二人は大約二時間も歩き廻ったのだそうな。私は

路傍の草叢の中に、人事不省のまま横になっていたのである。

金作は、泡を口から吹き出している私を背負って彼の家へ向った。その途中、私はいくらか正気にかえって（金作自身が後に私に話した所によると）百姓達が如何に物判りが悪いかとか、牧場主夫妻をその儘にゃ生かして置かぬとか、百姓達に対する恨み言だの牧夫達が意気地のないことだの其他様々な言を云ったのだそうな。そして、負ぶっているのが金作だということを知ってからは、殆ど手のつけようもない暴れ方をした。その果てが金作の肩から胸から腹に至るまで鼻持のならぬものを吐きかけた。

私は丸る二日の間床に就いた。焼酎がこたえたのだった。いゝゝもみくしゃにされでもしたような体を持て余しながら、私は手篤い金作夫婦の介抱に実の所涙を流した。涙を流しながら、体の良くなり次第何処かへ行かなければならない我身の境涯を想うて新しい涙をさめざめと流した。それは恩人に対する感謝の涙から我身の不運に対する悲しみの涙となり更らに、押え難い憤激の涙に変って行った。無念で無念でたまらなかった。

希望は微かだった。高い城壁を素手で打叩いているような気もした。しかし、我々はよし城壁は素手では決して破壊されぬものだと証明されようと矢張り叩きつづけるに違いないんだ！　そうだとも、我々は何もかもを作ったじゃないか。希望の為めよりもむしろ一層切実な必要の故には、城壁が何等の用を果たさないことを彼等に知らしめる新しい力――××用具を作り出さずに居るものか！　等と私は夢の中でも考えて歯軋みをしては目を覚ました。

私が床を離れた日の夜はひどく冷めたかった。霜が降りるに相違なかった。金作夫婦と私とは榾の燃え上る炉を囲んで玉蜀黍を食っていた。

「金作さん、それから主婦さん。」私は私の決心していることを初めた。「御恩は一生忘れませんよ。御恩がえしもせずに去っちまうのは残念でなりませんがね……。」

金作は黙って腕を組んだ。私の云おうとする所を知っていたのであろう。どうすることも事実彼にはできなかったのだ。

「私があんたの所へ御世話になってるなァ全く心苦しいんでさ。私ァよく知ってまさ、とに角この村にお別れしなきゃなりませんや、それが誰にも都合が良いんです。」

金作は頭を両掌で抱えて黙り込んでいた。私は今にも涙が出そうだった。

「私等のやったことは見事に失策った。無理もねえんだ。だが、私はどうしたって自分のやったことが、成程一番いい方法だったとは思やしないが、一番悪い方法だったたァ考えられねえんです。北海道にも間もなく方々で組合が出来て来るでしょうよ。出来て来るとも！　その時になったら、その時節が来たら、金作さん、しっかりやって下さい。」

「済みません――」と金作は云った。彼が何故そう云った

かは判らなかったけれど私にはそれが悦しかった。
　金作の女房が思いついた考えによって、私は金作の叔父熊太郎の家で兎に角にもこの冬は越すことになった。私にして見れば、漫然と函館の方へ向けて歩いて行けば何とかなるだろう、と考えて居たのだから、そうなればこの上もなかった。
　金作の叔父熊太郎と云うのは、好人物で未だ若く、色んな書物を読んでいる面白い物の判った男だと云うことであった。彼が決して私を失望させないだろうことを、金作はどうして自分が早くその事に思いつかなかったかを不思議がりながら繰返したものである。

五

　村を出る前日の午後、私は教会堂へ出掛けた。若い牧師は花園に居た。彼は移植鏝を手にして球根類を掘出していた。
「やァ、今日は。体はどう？」と彼は土のついた指で眼鏡を触りながら云った。「今晩あたり御見舞に行って見ようと思ってたよ。さァ、お上り。紅茶でも入れよう。ほんとに体は何ともないかね？」
「先晩はどうも御手数をかけました。体なんて、もうなんでもありませんや。」
「そうかね？　ふん。それァよかった。一寸待って下さい。こいつをすぐ始末して終うから、一つ二つ三つ四つ――。こうしてこの中へ収って置けばもういいんだ。もうぢき雪が来るからね。さァこれで済んだ。お上んなさい。あっちから上って開けて頂戴。扉が一寸痛んでるから心持持ち上げるようにして開けて下さい。僕は手を洗って来なけれァならない。おほん！」と上等の言葉と雑な言葉とをちゃんぽんに使う若い牧師は絶えず葉を散しているポプラの根がたに唾液を吐いた。
　私は牧師館の方へ斜に庭を横切って歩いた。ひっそりとしていた。歩きながら小さい教会堂を仰いだ。教会堂はひどく荒れていて、ペンキなどは色の見分けがつかず乾いた沼地のように表皮がめくれていた。
　私には色々の感慨が湧いた。私がこの村に入った時は友人武藤と二人だった。(彼は私を裏切り恩人金作の金を拐帯して『内地』へ飛んで終った。)私達は村の見下ろせる峠の上から、肩を触れ合いながらこの会堂の十字架の上に鴉が二羽拠っているのを遥かに眺たが、武藤は俄かに会堂を見て震え出したのだった。彼は自分の罪業が恐しかったのだ。私は彼の不甲斐なさに愛想を尽かして撲りつけた。――私には神はなかったのだ。自らの罪業に怖れをなすなんてそれァ不甲斐ない、云わば最も愚劣なせんちめんたりずむだと思われた。従って『罪』からの救いを力説する牧師に侮蔑を感ずるのは当然のことだった。『なんだってそんなことに一生懸命になれるんだ！　正気の沙汰じゃない。』

が、武藤は、牧師と神に何等かの意義を感じ、同時に我々の如き浮浪者に対して彼等が可成に有要なものなのを見透していた。私達は、この小さい古ぼけた教会の若い牧師によって仕事に有りつくという導きを受けたのであった。私は牧夫になり武藤は金作の所に住込んで働いた。最も信頼する者から投げ捨てられ最も軽侮する者から慰められるというのは別に珍しいことでもなかった。これからも度々そうだろう。(ああ、そんなことは併しどうだっていい!)

『只だ、俺には此の若い牧師は妙な人間だと思われるまでだ』と私は心で呟きながらキイキイ鳴る扉を開いた。百姓達の検挙騒動の時には、若い牧師は身を入れて奔走して呉れたのだ。『悪い人間じゃない。事によったら本当に善い人間だろう。尤も善い人間は賢い人間だとは限らないが、此処の坊さんは馬鹿じゃない。多分物事を余り考え過ぎるうちに――武藤みたいに――余計な方へ道がそれて罪業が気にかかるようになったんだろう。それにしてはここの牧師はちっともくよくよした風がないのはどうしたことだ。おまけに爺見たいな眼鏡のかけ方をし、俺より幾つも年上じゃないのに五十位いの人間でなければやらない話振りをするんだ。どうだっていいや。世の中にはこんな人間も居るんだな。』

私は牧師の書斎に通った。武藤が教えて呉れた和蘭人ゴッホの描いたと云う『向日葵』と、死んだ基督の首だけ書いた版画(これは見方によっては眼が開いたり閉じたりする)が壁にかかっていた。その下には英語のだの日本語のだの書物のぎっしりつまった書架があり、部屋の真中の机の上にも書物がうず高く積まれていた。壁紙は古ぼけて雨漏りの痕があった。

「や、失礼、さァ椅子にかけ給え。」と牧師は、眼鏡をいじりながら入って来て云った。「今、すぐ紅茶を入れるから。さ、かけて下さい。ふん。先晩は馬鹿に酔っていなさったね。随分飲んだんだろう。はははは! ちっとも覚えていないかね? 少しは覚えているだろう?」

「覚えていませんなァ。」と私は苦笑してゴールデンバットをポケットから取出しながら云った。「金作さんに、何か汚いものをかけたんだそうですな。」

「うん。僕も二つ三つ殴られた。あははは!」牧師は、今度は眼鏡を外して硝子にはァと息を吹きかけて拭い出した。「所で、君は――おう燐寸だね。燐寸が要るんだね。一寸待ち給え、火鉢を此方へ持って来よう。今お婆さんが川まで洗濯に行ってるんで、いやなに、一寸待ち給え。」

家中を震動させながら牧師は火鉢と紅茶道具を持って来た。そして云った。

「君は、あそこで大分元気を出したそうだね。あの肥えた奥さんと何でも……?」

「私ァ生れて初めて女を殴りましたっけ。」

「あの奥さんも仲々のやり手だからなァ。ふふふ! 椅子を投げつけられたってね。で、どうして山田さん(牧場主)

は君を逐ん出したのだね？」
「どうしてって、まあ気に入らねえんでしょう。」
「気に入らないで逐ん出されちゃ敵わないな。ふん。で困ったな、金作君とこは忙しくて人手が足りないだろうからこの冬だけなりと置いて貰ったらどうだね？　何だったら僕んとこへ来るか。」
「誰の為めにも、私の居るなァよくねえらしいんです。」
「まァそうらしいな。だが、君誰も恨んだらいけないよ。」と牧師はリプトン紅茶をさらさらと湯沸しに入れながら云った。「時代だね。東京なぞから見れば、五十年から、いや、もっと後れてるんだからね。辛抱強くなけれァならないんだね。辛抱が大事さ。で僕は思うんだが、ほら、君、煙草の灰が落ちそうだよ——どうも君は東京へ帰った方がいいと思うよ。」
「私ァ一先ず金作さんの叔父御の所へ厄介になることになりましたよ。」
「ほう、あの熊太郎君とこだね？」
「×××村のね。面白い物判りのいい人だそうですね？　御存じですかね？」
「知ってる知ってる。」と牧師は云った。
「さァ熱いうちにお召り。熊太郎君は矢張り基督教徒でね。一寸風変りな面白い青年だよ。それァいい、君とはきっと話が合うよ。あんな百姓がどんどん出るといいんだがな。それァいい。ふん、それァいい。あの人ん所へか——それァ全くよかったよ。」
「基督教徒てのは一態——」と私は紅茶をすすり、矢張り基督教徒である所の牧場主夫妻だの農場長だのを思い出しながら尋ねた。
「どう云うんですかね。妙な質問だが、貴方はその先生でしょう。早い話がね。」
「うん、そんなもんだね。だが、生徒でもあるね。」彼は解らぬことを云って笑い出した。それは子供のようにあどけない笑いであった。
　だが結局私には彼がそして彼の言葉が解らなかった。彼は私の問いを避けているのじゃなかったけれど進んで説明しようとはしなかった。私が、『色んな流儀があるんだね？』と云ったのに対しては『そうだね』と答え、『貴方達はちっと物事を余計な所まで考え過ぎるのじゃないかと思う。』と云ったのに対して若い牧師は、莞爾しながら『そうらしい所もあるが、宗教の必要な人間も世の中には居るんだ。むしろ皆が必要だと云い度いんだが。云々』と云う風に答えたのみであった。
　結局私には基督教徒なるものが我々の味方であるか敵であるか、或はそれ以外の何物であるか、正直な所皆目解らなかった。従って、私が近く世話になる人物、百姓熊太郎も全然想像を許さぬ存在であった。彼も亦この若い牧師のような何処か人を食った所のある男なのだろうか？　しかし、そんな百姓があると云うようなことがそれこそ私には

思いもよらないことだったのだ。

六

私は朝早く、金作の家を出た。町までは殆んど六哩あり、そこから金作の好人物の叔父の住んでいるアイヌ名の村までは、汽車で一時間程かかるのであった。『何か良いことでもあるだろう』と云うような気持がちっとも浮んで来なかった。私は肩を丸めて歩いた。『なあに、気を太くしているんだ。』と私は私に云い聞かせたりしたが、未練があった。私は栃の樹が崖の上から路の上に被ぶさっている曲り角に来た時、村を振返ってみた。私は涙を流した。

山地から野原へ出た。一望の畑であった。方々で百姓達の動くのが見えた。燕麦や小麦は殆んど刈りとられ玉蜀黍は未だ早かった。沼地でもあるらしい、狐色にくすぶっている川柳の叢林の上を、夥しい鴨の群が輪を画いて翔んでいた。二十年前にはこの野原一面が山毛欅や桂や楢等の森林であったとどうして想像できるだろうか。そしてそこには熊や鹿が栄えていたのだ。野の果てには太平洋が石炭のように黒く光っていた。遠くから見れば百姓達は如何にも『楽しい』労働をしているように見えた。景色だってそうだ。そこには何等の搾取も貧困もないもののように美しく眺められた。

私が最後の坂を下っている時、坂の上から呼びとめるものがあった。

「やあ、金作さんじゃねえですかい？　どうしました？」

「追っつきましたな」と金作は栗毛の馬を下りながら云った。腹の大きい牝馬は泡を噛み出していた。「なに一寸用事がうまく出来たものですからね。それからね、あんたの出なさったすぐ後に牧師さんが見えてね、残念がっていましたよ。でこの手紙を書いてね、持っていって呉れと云われましたよ。これです。多分此処らで追いつくだろうと思ってましたよ。」

手紙には只だ一句だけ『壮健で闘い給え！』と書いてあり、一円紙幣が入っていた。私には意味が判らなかった。

「不思議な人だなァ、あの坊さんは。」

「善い人ですよ。」と金作は答えた。

私達は歩きながら、私が金作達の村に来てからの面白かった思い出を感傷的に話した。

「ああ、そうです！」と突然金作は私の肩を叩いて云った。「面白いことを聞きましたよ！」

私が牧場主夫妻と喧嘩している時、あの力持の牧夫達が私をおっぽり出しにやって来なかったには訳があるというのであった。どんな訳が？

「力持はこう云ったそうですて、『俺ァ巡査じゃねえんだからな』ってね。三人の奴等は話し合って行かなかったって訳でさ、ははは！」

私はお話にならぬ程ぎくりとして立停った。と同時に顔

をパッと真赫にして終った。とり返しのつかぬ大失策をした！　という気がした。私は大急ぎであの三人の牧夫達をいちいち思い出した。『云うに云われぬ事情』が彼等を打ちひしいでいた。そうだそれが彼等にあった！　併し私は全く新しい解釈を今更らしくこの『事情』に関して持たねばならぬのを知った。それは彼等を私達仲間から離れさせるものではなくて、それこそ私達をやがては固く一つに結えつける『事情』、じゃなかったか！

私は何時か、まるで小学生みたいな風に、金作の肩に腕をまわしていた。そして金作の話をまるで聞きとりもせずに無闇に背き散らしながら野原の長い長い道を歩いて行った。（一九二八・四・一六）

生ける人形抄

片岡鉄兵

一

このビルディングの中では、
忙しい事それ自身が快楽だ。

七階、エレベエタアから廊下へ、そして瀬木は歩き出した。

その時、瀬木はふと感じた。

廊下を踏む靴さき、それを腰に感じる、若々しい、軽快な感覚だ。近代の事務員らしい、新鮮な歩き方。「忙しい事それ自身が快楽だ」とでもくり返すように鳴る靴から、「すこしおれの歩き方は妙だ」肩さきにまで伝わってくるリズムだ。

瀬木は、意識してさっさと歩いた。快く気取って歩いた。彼がこのビルディングの一室に勤めだしてから、まだそ

んなに時は経っていない。たった二ヵ月前までは、ある政党の、院外団員として地方で働いていた瀬木が、もうこんなに特殊な歩き方をしている！　だがこれは何も瀬木ひとりに限ったことではない。それは丸の内の、避け難い一の風土病であった、歩き方が、廊下でこのように変ってくるという徴候は。

瀬木は、やがて事務所――繁本興信所のドア口まで来た。ドアのとっ手をつかもうとした瞬間に、そのドアがスウッと、向う側から開いて、中から一人の若い女が、

「あら――御免なさいまし」

出て来た拍子に、瀬木の身体に突き当りかけたが、そのまま彼女は廊下を向うへ曲って行ってしまった。

「成程ね」

瀬木はそこへ突立ったまま、思わずつぶやいた。断髪で洋装で、所謂モダンな奴の見本だと思った。それから彼はニヤリとして、事務室の中に入って行った。

「唯今」

勢いよくいって、広くもない事務室を一わたり見まわしたが、七階の外光を贅沢に取りいれているという他に、これという取柄もない事務室は、相変らずだらけきっている。三四人の同僚が、向うの机の所から、ニヤリニヤリしながら、こっちを見ていた。

「何が可笑しいんだい？」

「まだ気がつかないかね」

壮士風に紋付の羽織を着た富田が、意味ありそうにいった。

「何が？」

「そら、それだよ」

富田が、瀬木の立っている背後の白い壁を指さした。その帽子かけを見ろというのだ。

「ふむ」

瀬木は瞠目した。外套や帽子が、重なり合うようにぶらさがっている中に、見なれぬ婦人帽と、シイル擬いの婦人外套とが、ぷんぷんとにおい渡るかのように鮮かに浮き出ていた。瀬木はすぐ、さっき扉の所ですれちがった女を想いだしたが、

「あれ、どうしたんだい？」

「社長が、今日からお雇いの邦文タイピストさ」

事務卓の上で将棋をさしていた山野が答えた。

「チェッ、邦文タイピスト！　そんなものに用があるのかね、ここに」

「有るとも、有るとも、大有りさ！」

富田がいったので、みんなはドッと笑った。そこへ、さき程の女――邦文タイピストがしとやかに扉をあけて、戻って来た。

瀬木はつかつかと彼女の方へ近寄って行った。

二

いつの間に備えつけたのか、タイプライタァを置いた机の前に、キチンと腰かけた彼女の傍らに立つと、瀬木はいった。

「貴女ですか、今度、入社なすったのは？」

「はァ……？」

彼女は疑わしい眼つきと、落ちついた微笑とを等分に現しながら、瀬木を見あげた。

「たれも紹介してくれそうもありませんから、名刺を差しあげるのですが、あしからず」

瀬木は名刺をさしだした。

「瀬木という者です。今までは僕がこの社で一等新参でした。その光栄を、今日からあなたへお譲りするわけです。どうぞ宜しく」

「わたしこそ」

「わたし」を小さく、「こそ」を大きく発言して、彼女は頭をさげた。

「細川弘子と申しますの」

向うの方で、山野や富田が「巧くやってやがら」といってるのが聞えたが、瀬木はかまわずに話をつづけた。

「少しお話して下さいませんか。僕は田舎から出て来たばかりで、東京のモダン・ガアルの方とお話がしてみたいんですが」

「まァ、わたしがモダン・ガアルですって？」

「そうでしょう。だって、そうですよ。何といっても、貴女のようなのがモダン・ガアルでないはずはないですからな」

「そうですかしら。じゃ、あなたのつけて下さったレッテルを有難くお受けすることにしますわ」

「僕がつけたレッテル！」と瀬木は愉快そうに叫んだ。

「貴女はにせ物を売ることになれてらっしゃるようですのね、中味も分らないものに、そんなレッテルなんか張って」

「中味がどうだか、味わせてくれますか？」

乱暴な攻撃だ。細川弘子嬢はむっとした顔を急にそらすと同時に肩をスッとそびやかした。

「怒らないで下さい。僕は永いこと田舎にいて、淑女らしい人と交際もなし、つい田舎芸者にいうような言葉が出てしまうんです」

けれども彼女は答えなかった。

「怒ったのですか？」

「ふふ」

彼女は笑ったが、矢張り顔を外らしたまま答えなかった。

「さぞ、僕を軽蔑したでしょうね」

あきらめたようにいって瀬木はしばらく彼女の肩やえりあし――いや、田舎芸者でないことに、彼女にはえりあしなんか無いのだ――きれいに青々と剃ったうしろくびを見おろしていたが、相変らず彼女が黙っているので、とうとう彼は、富田たちのところへ帰って来た。

「どうだ、巧くやったか？」

富田が豪傑笑いと一緒に瀬木の背中をたたいた。将棋をさしていた三木や山野も盤面から眼を放して、ニヤリとして見せた。
「いや、すっかり振られちゃった。それはそうと、社長はまだか知ら？」
「社長――まだ来ないよ。なるべく遅く来てもらわんと、将棋が困る。持久戦だからな」
と、三木が盤面に眼を戻しながら答えた。
「お手は？」
「桂に歩が三つ」
「桂に歩が三つ――と。桂に歩が……」
瀬木は将棋に興味がないので、欠伸しながら、窓の方へ寄って行った。
退屈すると窓のところへ立って丸之内の空や電車通りや青っぽい下界の植物を眺めるのが彼の癖だった。退屈すると――だが、彼が入社してから、この事務所で、曽て退屈しない日というものがあったろうか？　それほど閑散で仕事のない、それは「興信所」だった。

三

瀬木は、地方院外団員だった関係からある代議士の紹介で最近入社したばかりであるが、まだこの社へ入って一度も仕事らしいものをあてがわれた事はなかった。瀬木ばかりではない。看板は正しく「繁本興信所事務室」であるが、一体ここで、どういう興信所らしい事務が取られているというのであろう。外からここへ入って来たものは、余りにビジネス・ライクでないのに驚くであろう。申しわけばかりの事務卓に、椅子、古風な男を寄せ集めたような四五人の社員たち――中には壮士風に紋付を羽織ったのなどがいて、雑談したり、将棋をさしたりしている。
このビルディングの中では、忙しい事それ自身が快楽だ。
然し、ここの事務室ばかりは別天地のように見えた。唯、今日から入社したという細川弘子だけが、ビルディングの事務員らしい存在だった。いや、まだもう一つある。瀬木大助の廊下を歩く時の歩き方がある。その瀬木さえ、廊下から、一歩室内に入るともう気持が違ってしまうのだ。
その証拠に、瀬木は今日も退屈して、窓から外を眺めている。鉄筋コンクリートの七階で、快活な忙しさがないということは、一つの不幸であった。
三月、春ちかい空は水色によどんでいた。お城の森から斜に展がる馬場先の芝生、どこかの巨大なアンテナ、屋根。日が降りそそいでいる。ここは日比谷に近い。
瀬木のような男にとって、日比谷に近い所に居るということは、その事だけで既に昂奮に価した。彼は今年三十四五になるが、余り年をとらないうちに一度代議士にならなければ生れたかいがないという人生観を持つ男だった。永

らくいた田舎を引払って、東京で下宿生活を始めたのも、よくよく覚悟するところがあったからだ。地方の院外団として、この数年来辣腕を振ってもうけたこともうけたけれど、それは多く遊蕩につかってしまった。のみならず人々はますます自分を三百代言的に見るという傾向があって、故郷ではなかなか出世させてくれそうもなかった。

そこで彼は東京に出て来た。東京というところは、三百代言と紳士とが、同意語で通用する大都会だった。

今、瀬木が七階の窓から見おろす大通りを、自動車と電車とが、縦に横に速力の線を無数に引いている。

「今に見ろ、己だって、この大通りを自動車で、日比谷へ走らすのだ」

空想。瀬木は空想のほとんどない男であるが、代議士になる夢については、子供のように昂奮したり、英雄的な気分になったりするのだ。ああ、ほんとに代議士になりさえしたら！　そしたら、あとは何でもない、金もうけも、その他のいろいろ好い事も、瀬木の腕にとっては少しも困難なことではないように思われた。彼は、兎に角一度代議士にならせてもらいたいのだ、決して陣笠では終らないという自信を持っていた。

ふと室内を顧みると、富田や三木たちは相変らず、将棋盤をかこんでいる。そこで瀬木の視線は、颯爽として、部屋の向うの隅にまで伸びた。

部屋の向うの隅には細川弘子が、用もないタイプライタアの前で、矢張り退屈していた。そして彼女は、瀬木と顔が合うと、ニッコリした。

瀬木も笑った。

彼女は、片手をあごの下まで持ちあげて、その指のさきでそっと、おいでおいでをして見せた。

瀬木は「いやいや」と首を横に振って見せた。

四

ある日、瀬木が自分を今の興信所に紹介してくれた先輩の青原代議士を訪れると、代議士は「君を一度御馳走してやろうと思ってたのだ」といって、彼をある待合につれて行ってくれた。

芸者が二三人来たが、田舎で遊びなれた瀬木には、面白くも何ともなかった。妓たちは徒らに綺麗で品がよくて、お行儀がよくて、そして無口だった。

しかし入れかわり立ちかわり、来たかと思うとすぐ又他所のお座敷に行ってしまう妓たちの中に一人の中年増は、酒も飲めるし、口もよくきいた。ふと、彼女は杯を代議士に返しながらこんな事をいった

「近頃、古本さんは、どうしてらっしゃいますの？」

「古本君に、何かい、用事でもあるのかい？」

「ええ、あるいは岡ぼれかも知れない——なァんて」

この下らない会話が、突然瀬木の気持を緊張させた。と

いうのは「古本」という固有名詞は、彼にとって聞き捨てのならないものだったからだ。
青原代議士と芸者との会話はまだつづいて行った。
「君が岡ぼれしてることを知らせてやったら、奴さん、有頂天になるぜ」
「そうあって欲しいわ。嘘ですわ、ほんとは、いつも御一緒だったおつれさんですもの、近頃おめにかからないので……」
「いいよ、いいよ、そんなテレ隠しはいわなくっても――そのうち、うんとおごらせてやるから」
「あら、お察しが利きますのね、前祝いに、一つ頂きますわ」と杯をうけて、「こちら、先刻からずいぶんおとなしくしてらっしゃいますこと」と、瀬木の方に言葉を移して来た。
古本、古本！　この固有名詞に瀬木の注意力が鋭く集中されるのには理由があった。それは最近、繁本興信所の社長の繁本氏が、彼一流の敏感さで探知した玉屋銀行という三流乃至四流どころの銀行の危いらしいという話に関連するのだ。つまり、玉屋銀行の頭取が古本という人なのだが、もしも、先程からの会話に出て来る古本なる人物が、玉屋銀行の古本氏だとしたなら――これは重大なる発見の端緒とならざるを得ない。
中年増の芸者が自分の方へ言葉を向けて来たのを機会に、瀬木は自分の発すべき言葉を咄嗟に選んで云った。

「古本さんを手玉にとって、玉屋銀行をつぶそうなんて心がけの好い女傑の前では、おとなしくせざるを得ないよ」
そういって、チラと瀬木は青原代議士の顔いろをうかがった。心なしか、代議士の顔が、ふと青ざめたように思われた。
「もう結構ですわ」
飲みかけた酒を、杯のふちにぷっと吹きだすように笑って、芸者はぬれた唇をハンケチでふいた。
瀬木の頭は急速に回転した。青原代議士と古本と――これはどう考えても、一緒に待合遊びをする取合せでは有り得ない。有り得ないものが、有った。この事は、そこに特殊な事情が伏在するのを意味するのだ。
その特殊な事情を考えると、青原代議士と古本氏との交遊は、頗る有り得ることになるのであった。否、これほど明白に、有り得ることは少いといってもいいのだ。
では、その特殊な事情とは何か？
代議士と銀行家。
不良銀行、不良貸出。
瀬木の頭には、もう結論が出来ていた。

五

青原代議士と別れて待合を出た時はまだ早かった。
「これから社長を訪問したって遅くはあるまい」

自動車の中で思いつくと、瀬木は運転手に郊外の××住宅地へゆくように命じた。いよいよ働く時が来たという感動で、彼の胸はふくれ上っていた。無名の瀬木大助が、この大都会を舞台として立上るための第一歩の瀬踏みを、今彼は踏もうとしているのだ――春ちかい夜の雨が、おだやかに降る街を、自動車は泥水をはね飛ばしながら、走って行った。

「それにしても、今夜は好い御馳走に有りついたものだ。お上品な芸者たち、遊ばせ言葉の待合の女中――そんなお酌で酒がうまいものか！　おれの飛びついた御馳走というのは、古本のうわさだ。色男め。芸者に食われる前に、おれに食われてしまえ！」

だが、彼は同時に青原代議士をも食おうとしていることに気がついた。先輩でもあるし、恩人でもある青原氏を。と考えると、瀬木も好い気持はしなかった。好い気持のしないことは、あまり深くは考えないのが瀬木の癖だった。

「恩人を売る――それは悪い事だ、だが、悪い事をしないで出世した奴が、この世の中に何人いるか？　おれは悪い事をする。何故なら、おれは出世しなければならないから」

それが瀬木の物の考え方であった。彼はどうしても出世しなければならなかった。もし人間が出世しなかったなら、現代では、悪人以上に辱しめられ、圧迫されるのだ。

自動車は暗い濠端から、九段下の電車交叉路に出ると、猛烈に一つ弾みを打って、そのまま明るい飯田町を走って行った。

雨にぬれた窓から、街の燈が桃色にうるおって見える。もうやがて春だ。春から来る連想は、瀬木にとっては、桜でもなければ、恋愛でもなかった。春には、今年は臨時議会がある、その議会を背景にして、あるいは大芝居が打てるかも知れない。彼の連想は、そのように散文的なものだった。

自動車は、やがて郊外の住宅地に着いた。繁本社長の玄関を訪れると、「これから寝ようとしている所だが、二十分位ならお目にかかっても好い」という女中の取次ぎだった。

繁本社長は、やせた五十男で、坊主頭をしていた。長い顔に、ひげがない。鼻の下はいつもつるつる光っていた。恐らく毛根さえないのだろう。それで、蛸というよりは烏賊という感じだった。

「何か急用かね」

どてらのままで応接室に出て来た繁本氏はひどく不機嫌な顔をしていた。人が寝ようとしているのに――一家の主人はよくそうした表情を持って深夜の訪問者を迎えるものである。自分の不機嫌ばかりではない、奥さんの不機嫌まで委任されたという顔で。

「実は、至急なお話で」

「ふむ」

「玉屋銀行ですな、彼奴は、いよいよやりますぜ」

「尻を割るのは、分ってるさ」
「そこです。不良貸出しの相手が面白いのです」
いつの間にか、社長の顔から、不機嫌な皺が一本とれ、二本無くなっていた。今は細君の不機嫌を委任された義務も忘れて、繁本氏の顔は明るく緊張して来ていた。

六

「この玉屋銀行を種に、一つ大芝居を打ってやりたいものですね。それで御意見を伺いに来たのです」
「君に腹案があるのか」
「さァ。もっと調査をして見ないと、ハッキリ決めるわけにもゆきませんでしょうが、ここで、玉屋銀行の預金者たちを煽動して、取付を早くやらせてしまうのですね。それとも、銀行の方をまず脅しにかけるか、社長の御意見を伺いたいのです」
「それは脅しにかけるのが簡単で好いではないか。取付なんかさせて、銀行を参らせてしまっては、こっちは一文にもならない」
「そんな事はないでしょう」と瀬木はなるべく謙遜した態度を崩さないでいった、「まず銀行を絶望に陥らせておいて、自由自在に小づきまわしてやるという手もあります」
「それもあるが、君の腹案では、たとえばどうしようというのだ」

社長は経験家だから、部下に訊くのではない、部下を試験してるという態度で、そっと探りをいれた。
その手にかかって、秘策をここでさずけてしまったら、瀬木は立役の位置を社長に奪われてしまって虻蜂とらずになってしまうと考えた。そこで、話はなるべく具体的に亘らないで、ごく一般論的に、含蓄を持って腹案を述べなければならなかった。
「つまり、青原代議士の政党と、その位置とを考えて頂きたいのです。青原代議士には不動産もなければ、もちろん動産だって決ったものはありはしない。ところが、今度の選挙で五人の子分と一緒に当選している。その費用が、全部玉屋銀行の不良貸だしによるものとすれば、玉屋と青原氏との間は切っても切れぬもの といわなければなりません」
「それで？」と試験官は冷静な顔の中に一抹の狡猾さを浮べながら耳を傾けた。
「こっちは預金者を煽動して取付をやらせる。銀行は尻を割る。その間に、青原氏の手を経て、銀行の古本頭取と連絡を取る。つまり、乗取り策の第一歩ですが——いや、それとも、X伯爵の銀行に合併の話を持込むのも好いではありませんか」
「X伯爵なら、おれが弱味を押えているから、何とでも動かすことは出来るが、然し、不良銀行と合併させたって、こっちにもうけがどれ位あるかね」

「不良銀行とおっしゃいますが、合併の名で乗取るのは善良銀行では不可能ですからね」
「それはそうだ」
「預金者大会に、どうせこのままでは預金は戻らない事をよく承知させるんですよ。そして、何割かを十ヵ年の年賦で払戻すという条件を承認させる。その条件でX伯爵の銀行へ玉屋銀行を事実上乗取らせる」
「ハハハハハ。君は駄目だよ。そんな事いったって空想にすぎない。第一、おれたちが事件の渦中にいり込むのには、玉屋も古本も、まるで他人なんだからな」
繁本社長はあざけるように哄笑した。
「社長、そんなに遠慮深くては困りますよ。どしどし実行に移れば事は必ず運びますからね。X伯爵から玉屋へ働きかけるようになすって下さい。仕事はそれからですよ」
瞬間、社長と部下とは顔を見合せた。
「そうだ。遠慮深くては何も仕事は出来ない」としばらくして社長はつぶやくようにいった。
「図々しくあれ、これが我々の実践道徳の基準です」
「君も図々しいことにかけては、スッカリ玄人なんだね」
「ハハハ、社長のお仕込みですよ」
瀬木は吸いさしの煙草を灰皿に突き込みながら、ぴょこんと頭をさげた。

七

「まァ然し、取らぬたぬきの皮算用はやめて、活動を開始することとしよう」
社長はやがて思慮ぶかい顔に返っていった。そして、かるく欠伸して見せた。もう用事がなくなったので、夫人から託された不機嫌の委任状を思いだしたかのようだった。
「では、今晩は失礼させて頂きましょう。明日から、会社あげての大活動ですね」
「たのむよ」
「忙しいのは結構です。三木や山野も、事務所で将棋ばかりさしている苦衷から解放されるんですから、大喜びでしょう」
「将棋は止めないといかんね」
社長は社長らしい事を云って、もう一度欠伸をして見せた。
「では」と瀬木は立上った。
社長の宅を辞して外に出ると、来た時の自動車はかえしてあったので、彼は省線の停車場まで、ひとりで歩いてゆく事にした。丁度、雨があがったばかりの空には、まばらな星さえ見えている。春はちかいといえ、郊外の夜路の空気は、瀬木の昂奮した頰にもつめたすぎる感じだった。
然し、瀬木は次第に、何か腹立たしいようなものを感じ始めていた。
玉屋銀行の蹉跌、これは瀬木に活動の舞台を与えてくれた。だが、そのために、これから狂奔しようという瀬木自

身は何なのであろう？　郊外の街の泥濘を、あえぐように渡り歩く惨めな自分に対して、瀬木は激しい反省を加え始めた。
何物か、黒い魔の手が、自分を操ってゆくのだ？
自分は、その魔の手と握手することで、立身出世をはかるのだ。玉屋銀行を破産させたものは何であるか？　これも魔の手だ。不良貸だしの金の行方は、あの青原代議士の手を経て、幾人かの政党候補者の選挙費用となった。青原代議士は、かくて議会内に幾人かの子分を持つ勢力家たる位置を失わなかった。そしてその結果は？　玉屋銀行の蹉跌となった。何千人かの無産預金者の窮乏となるのだ。
何千人かの無産者から剝奪する事で、幾人かの代議士に成る議会内の勢力が結成され得た。
彼らが、国政を議するのだ。いい換えるなら、彼らによって国政が議せられる限り、この国に剝奪され、窮乏する者は永久に絶えないであろう。
そして、瀬木は？
「おれは然し、立身出世しなければならないのだ」
瀬木の自己反省の、これが結論だった。瀬木にとって、この結論は不可避なものだったに違いない。大義名分のままに進んで行って栄達が得られる社会でない事を、彼はよく知っていた。
「おれは損をしてはならないのだ。短い一生を、虐められ通しで終ってはならないのだ。おれは虐める者に味方しても、虐められる者になってはならない」
そして、昔から、正しい路を踏む者は聖人といわれる。聖人とはこの世の中で損をする者を嘲笑して悪漢共が奉る尊称だった。

（一九二八年六月—七月「東京日日」）

疵だらけのお秋 （四幕）

三好十郎

人間

お秋（26）
その弟（16）
沢子（22）
秦　（中年の仲仕）
阪井（片腕の仲仕）
初子（24）
町田（25）
杉山（36）
女将
客達
仲仕達

場

或る港の酒場

一　沢子の室

（六畳。それに続いて向って左の隅に三畳。おそい午後。まだ電燈がつかない。三畳の方は殆んど真暗である。
六畳に沢子が寝ている。
三畳の暗がりにお秋の弟が机に坐って封筒張りをしている。――紙の音がパサパサ聞える。
間――）

沢子　（身じろぎをして、三畳の方へ襖越しに）恵ちゃん。

弟　――（答無し。紙の音）

沢子　恵ちゃん。――恵ちゃん。まだお仕事は済まないの？（弱々しく）――そんなに、あんまり詰めてすると、また、眼が痛み出してよ。――ねえ。少し休んだらどう？

弟　――（答無し。紙の音）

沢子　――まだ姉さんは帰って来ないの？

弟　――（答無し。紙の音）

沢子　（返事をされない事には馴れているらしく）――また、秋ちゃん、鑑札を取上げるとか何とか言って、おどかされているんだわ。――ほんとに、秋ちゃんはいつも苦労の絶間が無いわねえ。――苦労を

弟　一人でしょっているんだわ。――ほんとに、――。
　　――（答無し。紙の音）

　　（間）

沢子　ねえ、恵ちゃん。あんたは、いい姉さんを持って
　仕合せだわねえ。私なんぞ、あるにはあるけど――
　（間）ねえ、もう、お師匠さんとこへ出かける時間
　じゃないの？

弟　――（答無し）

沢子　早く切り上げて行かないと、また姉さんに叱られ
　てよ。よ、恵ちゃん。私はね――（続けようとする
　が、奥の梯子段を昇って来る足音に、言葉を切る）

（奥から女将の声）

声　沢ちゃん。

沢子　――――

声　何を話しているの？……大分元気そうだねえ。
　どう、身体の工合は？

沢子　ええ……。

声　いつまでも、グズグズじゃ私の方も困るんだがね
　え。どうとかもう……。

沢子　ええ、それは、よく解っています。いますけど――
　――腰がまだ痛んで――。

声　いえさ。無理をしろとは言やあしないさ、しかし
　ねえ、お前が休んでから、もう一週間だからねえ。
　それに、なんだよ、ここんとこ桟橋じゃあんなに船
　が立てこんでいて、あの連中今日明日にも下船する
　とかしないとか騒いでいるんだろう。あんな、スト
　ライキだなんて言っても、何にもなりゃしない事は
　わかっているさ。先の時だってそうだったものね。
　しかし私達にして見りゃ、こんな時に稼いどかなけ
　りゃ、冥利が悪いと言うもんだよ。それで――。

沢子　本当でしょうか、下船すると言うのは？

声　本当にも嘘にも浜じゃまるで火事場の騒ぎだよ。
　おまけに、浜仲仕の組合でも一緒にストライキをお
　っぱじめるんだとさ。何が何だか馬鹿げたお話だけ
　ど、なんしろそうなると九百人からの仲仕が暇にな
　るんだから、そうなるとお前、私の店だって――。

沢子　ごめんなさい、おかみさん。それは、出ろと言わ
　れれば明日からでも――。

声　何を言っているんだよ、私ゃ無理にとは言ってい
　ないんですよ。だけどさ、いくら何だって私んとこ
　だって、それぞれの都合があるんだから――。

沢子　ええ、わかっていますわ。

声　だから、なりたけ早いとこ快くなってくれなくっ
　ちゃ――。

沢子　ええ。おかみさん、なんなら、じゃ、私、今晩か
　らだって、私、貰いますから。

声　いえさ、私ゃ何も催促しているんじゃ無いんだよ。
　初子はあんな事になるし、秋ちゃん一人じゃ手がた

沢子　りないから、つい、言うんだよ――。だからさ、別に急ぎゃしないやね、とにかく早く快くなっておくれよ。（降りて行く足音）

弟　ええ、――ええ。

沢子　恵ちゃん。

弟　（短い間）

畜生！　畜生が！（低い呪う様な声）

畜生が！　とにかくだって！　急ぎゃしないと言やぁがるんだ。無理はさせないと言やがるんだ。――畜生が！　無理をさせようとしているんだ。せき立てているんじゃ無いか。

沢子　何を言っているのよ？

弟　沢ちゃん、お前、明日の晩になれば病気がよくなるのかい？

沢子　だって、おかみさんが、あんなに言うんだもの。

弟　彼奴は畜生だ、だにだ。

沢子　そんな事、大きな声で言ってはいけないわ。恵ちゃんだって、まあ厄介になっているんだから、もしも――。

弟　（泣く様に）そうだ、厄介になっている。

沢子　――それに、どうせ、私の身体は、いつまで休んでいたって、スッカリよくなる身体じゃ無いしね。私ゃつくづく――ほんとに――（声を立てないで泣く）

弟　（短い間）

沢子　沢ちゃん、お前、泣いているの？

弟　いいえ、――泣いちゃいないのよ。泣いちゃいないのよ。

沢子　――工場であんな事にならなきゃ、よかったんだ。俺の眼がこんなにならなきゃよかったんだ。そしたら俺が。

弟　ほんとにねえ。

沢子　そしたら俺が、皆をどうにでもしてやってたんだ。姉さんだって、こんな――。

弟　しかし、恵ちゃんの眼が開いてるたって、仕様が無かったのよ。――つまりが金なんだから、金には勝てないもの。

沢子　――どうにも仕様が無い？――そうは思わないんだ。俺、そうは思わないんだ。――そりゃ金は無いけど、眼が見えていたら、俺、殺してやるんだ。――あの畜生だとか、皆の処へ来る水兵だとか職工だとか、書生だとか、船の奴等なんぞ、みんな、打殺してやれたんだ。――俺あ、何もかも知っている。

弟　――――

沢子　姉さんは俺を一人前のあんまにしてやるために、夜になるとお師匠さんとこへ行かせるんだけど、だけど、それだけのためじゃ無いんだ。（間）姉さんは自分達が何をしているかを、俺に聞かせたく無い

んだよ。俺に知らせたく無いんだ。――しかし俺はみんな知っている。――知らないでいい事まで知っているんだ。――俺が人の肩につかまってあんまをしている時に、姉さんや沢ちゃん達が何をさせられているか、俺は知っているんだ。すると、俺は人の肩なんぞもんでいられない。――肩の骨をへし折るほど強くもんでやるんだよ。――その内にへし折ってやるんだ。

沢子　そんな事してはいけないわ。秋ちゃんが心配してよ。秋ちゃんに心配させまいと思ったらそんな事しないで、早くおとなしく勉強しなきゃ駄目よ。――それに恵ちゃんが、どんなにくやしがったって、おいそれとは、どうにもならない事だもの。

弟　そうだ、どうにもならない――だから俺は。（眼を押える）

沢子　それよりも、早く立派なあんまさんになることよ そしたら姉さんだってこんな所にいないでもよくなるわねえ。

弟　世間の奴は、みんな畜生だ。俺と姉さんを置いてきぼりにしたおやじとおふくろが第一畜生だよ。畜生！　畜生！

沢子　そんな、それは恵ちゃんにはまだ解らないわ。どんな訳があったかも知れない。――私にだって国には子がいる。――もう三つになっているわ。それに母親がこんななんだから。（寂しく笑う）

弟　何と言う名だよ？

沢子　忘れてしまったわ。――いいえ、忘れてしまおうとしているの。だから、言わないで頂戴もう――。

弟　逢いたいかい？

沢子　（寂しく笑って）無いわ。いいえ、逢いたく無いわ。――逢わない方がいいわ。

弟　その子も、俺の様に封筒張りをしているね？

沢子　さあね、しかしまだそんな事出来ないから――。

弟　いいや、きっと封筒を張ってるよ。

（短い間）

沢子　しかし恵ちゃんは、秋ちゃんの様にいい姉さんを持って、まだ、どんなに仕合せだか解らない。

弟　――姉さんは夜おそくなって一人で泣いている事があるよ。隠しているんだけど、俺にゃわかるんだ。――姉さんに今の様な事をさせないためなら、俺ら死んだって関わないんだ。ああ、何でも無いよ。

（足音をさせないで職工服の秦が六畳の方へ入って来る。包と弁当箱を下げている。）

弟　姉さんは、俺らのために、こんな事をしているんだ。俺にゃ、いくら一生懸命になっても一日十銭より封筒は張れないんだ。――畜生！　世間の奴等！　畜生！　肩を、へし折ってやるんだ。畜生！　（荒く立上って、三畳の左隅の障子を開けて出て行く）

秦　子　どうしたと言うんだい？
沢　あなた、又来てくれたの。
秦　子　どうしたんだい？
沢　恵ちゃんよ。秋ちゃんの弟の。
秦　それはわかっているんだけど、何をあんなに怒っているんだね？
沢　子　眼が見えないし、あの子も可哀そうなのよ。
秦　――しかし別に今に始まった事じゃ無いんだし。――お秋さん居ないの？
沢　子　ええ、昨日の臨検騒ぎで警察へ行ったっきり、まだ帰って来ないわ。――なにね、先刻おかみさんが来て、私に嫌味を言ったもんだから、それから恵ちゃんが――。
秦　子　ええ、早く出てくれなくちゃ困ると言うのよ。嫌味てえと、また――。
沢　子　その身体でか？
秦　子　私、もうどうなったっていいから明日からでも貰うつもりでいるわ。
沢　そんなお前、無茶な――。
秦　子　かまわないわ。――もう私なんぞ、こんなにひびの入った身上だし。
沢　そいつぁ、やけと言うもんだ。
秦　子　やけだって何だっていいじゃ無いの。――それに寝ていれば、食べるものだってロクロク持って来てくれないんだもの。――もう四日前から秋ちゃんがおごって呉れるものだけだわ、食べるものは。
秦　そうか――。
（間）
沢　――ああ、こないだ話していたの、持って来たよ。
秦　子　なあに？
沢　（包を出して）これさ、薬だよ。薬屋でそう言ったら、向うの奴、ニヤニヤ笑っていやがった。（寂しく）ははは。十日分も買って来りゃよかったんだが、手が廻らなくて、これは三日分だ。無くなったら又此の次にするよ。（弱々しく）しかし、食うものも食わないじゃ、薬だって効くめえ――。
秦　子　――（泣き出している）
沢　だけど、まあ、その内にゃ何とかなるよ。何を泣くんだね。困るなあ。泣く事は何も無いじゃねえか、え？　おい。（短い間）
秦　子　（自分の気持とは反対の語調で）新さん、私、そんなもの要らないよ。
沢　え？
秦　子　そんな薬なんぞ要らないよ。
沢　どうしてだよ。まあ？　急に又何を言うんだ？　お前の身体を心配すりゃこそ――。
秦　子　（強いて）ほっといておくれ、お前さん、そんな金がよくまあ在るね。――（泣声）お前さんにゃ、

秦　妻や子は可愛く無いの？　妻子の事は考えないの？　なんだって、なんだって又、私みたいなこんな――。私ゃ知っているよ。あんな気立のいいおかみさんや子供をかつえさしといて、私に、私に薬を買って来る金が、よく在ったねえ。要らないよ、私ゃ。

沢　子　そ、そんな事を言ったたって――。

秦　私ゃこんないけない女だよ。こんな、腐った様な女のどこがよくって、お前さん、妻子をうっちゃっといてやって来るの？　たかが平職工の取る金位でさ――。

沢　子　（気色ばんで）なに、なんだって！（しかし再び気弱くしょげる）

秦　そうじゃ無いか。そんな、そんな余分の金が在ったら、おかみさんに、ちったあお米の苦労位させなきゃいいじゃ無いか。私が妬いてこんな事言うんじゃ無い事は、お前さんも知っているね。――私しゃ、お前の気が知れないよ。帰っておくれ、家へ帰っておくれ、帰っておくれってば！（声を出して泣く）

（永い間）

秦　――（独言の様に沈んだ調子で）そりゃ、知っているよ。俺が一番よく知っている。――内の奴あ、可哀そうな奴だ。子供だって可哀そうだ。そりゃ知っていら。――お前と俺とは去年、此処でヒョイと知り合いになったばかりの仲だ。――奴等あ俺のかかあや子供だ。それは知っているよ。しかし、仕方が無えんだ。俺の気が弱いせいだから、仕方が無えんだ。――

（間）

沢　子　新さん。（やさしい）

秦　――？

沢　子　お前さん、お前さんは――。

秦　何だよ？

沢　子　私が、もし、一緒に死んで呉れと言ったら。

秦　え？

沢　子　いえ、もし、死んで呉れと言ったら、どうするの？

秦　どうする？

沢　子　どうするの？（間）

秦　――一緒に死ぬよ。――死なあ。

沢　子　おかみさんや子供は？

秦　可哀そうだ。可哀そうだけど。

沢　子　（気を変えて）お前さんは、馬鹿だねえ。冗談だよ。

秦　（相手の調子に釣られて弱く、薄笑いと共に）馬鹿よりも、いくじ無しの方だろう。

（間――二人ともヂッとしている）

（六畳だけに電燈がパッとつく）

秦　ああ、電燈が来やがった。（あたりを見廻わす）

沢子　もう帰らなきゃ、本当に悪くは無いの。
秦　ああ、そろそろ帰るよ。（沢子に蒲団を着せてやる）お秋さんは馬鹿におそいねえ。
沢子　もう直きだろ。
秦　この薬は飲んでくれ。
沢子　せっかくだから貰うわ。しかし今度から、そんな事するのは止してよ。——なあに、私、別に大した事は無いんだから。（女将に向って何か言いながら昇って来るお秋の声）
声　——ええ、ようござんすわ、おかみさん、私からよくそう言いますから。——沢ちゃん、今帰ってよ、どうなの、身体の工合は？
沢子　お帰んなさい。——ありがと、大分いいわ、それで——。
お秋　（障子を開ける。勝気らしい、それで非常にやさしい表情をしている）あれ、秦さん来ているのね。
秦　（弁解する様に）いや、ほんのチョイと先刻、病気だって言うから、どうしているんだろうと思ってね。どれ、ボツボツ帰るかな——。
お秋　ま、いいわ。そんなに私を怖がらなくたって、何も取って食おうたぁ言やしないから。
秦　なに、お秋さんからなら取って食われたって、構やぁしないけど、どうも——。
お秋　あんな事を言ってるよ。私の居ない時をねらってチョクチョク此処へ来ている癖に。ね、沢ちゃん。
沢子　（微笑）どうだか。——それで秋ちゃん、どうだったの、警察の方は？
お秋　なあに、何でも無いのさ。初めっから別にどうしようと思ってした事じゃ無いんだもの。あの部長なんぞ、私の背中を撫ぜたりしてね、俺が今度行っても、あげて呉れるかなんて言うのよ。——人を馬鹿にしてるわ。
沢子　——済まないわねえ、いつも秋ちゃんにばかり苦労をさせて。
お秋　何を言っているのよ。それがあんたの癖よ。これ位の事、私ゃ苦労とも何とも思ってやしないわ。あたり前の事だわ。
沢子　済みません——。
お秋　ま、何を言うんだねえ。——（三畳の方を顧みて）恵一はもう出かけたか知ら。
秦　さっき、何か怒って出て行った。
お秋　怒って？
沢子　なに、私と少し話をしていたばかりよ。
お秋　（心配を押し包んで）あの子はとても怒りんぼだからね。眼が見えないもんだから、ひがみもあるのよ。
秦　眼は両方ともまるで見えないの？
お秋　ええ。——見えないと言っても、眼はあんなに開

沢子　いているから、はたから見ると盲だとは思われない位よ。しかし時に依ると、物の形だけ極くボンヤリと見える時もあると言っているんだけど、どうだか。そんな事を言って秋ちゃんに安心させたがっているのよ。——姉さんのためなら、どんな事でも、何でもする、と言ってたわ。

お秋　(寂しさを押しかくし笑って)そんな事を言ったって、盲の子供に何が出来るもんか。

秦　先に工場へ行ってたってねえ?

お秋　ええ、その頃はよかったんだけど、生れつき弱い奴だし、それに、何ですか、工場であんまり細い仕事をさせられて眼を悪くしちゃってね。——しかしま、もう後二年もすれば相当のあんまさんになるって言うんだから。

沢子　そうなったら、いいわね。秋ちゃんもそうなれば——。

お秋　どうだか。あぶないもんだわ。

沢子　秋ちゃんも、それから恵ちゃんも、仕合せだわねえ。——私なんざ——。

お秋　また?　又、そんなに泣き出すの。泣虫——。私達姉弟にくらべて、お前さんがどう不仕合せだって言うの?　もう後、たった一年で何もかも気楽になるんじゃ無いの。そりゃ、そりゃこうしてこんな所にいるのは、地獄にいる様なものさ。だけど、そんな泣言を言えば、それがどうなると言うの?　地獄は地獄さ。それがどうしたって言うの?　泣虫!

秦　そうだ、そうだ、そんな今更言って見たって——。

お秋　それよりも早く、身体を治してさ、ピンとしてりゃ、そんな——。

秦　そうだよ。人間、苦しいことを言えば、きりは無えんだから。俺なんぞも、これで、お前——。

お秋　そんな事言っても、(咎めると言うよりはなだめる様に)新さん、ノコノコ沢ちゃんに通って来るんだからね。小さいのは、達者?

秦　こいつぁいけねえ?　藪蛇だ。もう帰る、帰るよ。あやまった。

(三人弱々しく笑う)

お秋　(しんみり)おかみさんもだけど、小さいのにはよくしてやらなきゃ駄目よ。親に捨てられたが最後、子供はどうなるか知れないんだから。——私達姉弟がいい見せしめだわ。

沢子　——私も早く帰って呉れと、先刻から言っているんだけど——。

(秦、しょげている)

お秋　私にゃわからないわ、新さん、私、変な事を言う様だけど、あんた、家を持っている身体で、どうしてそんなにこんな所にばっかりやって来るの?

秦　そんな、俺だって、そう始終やって来るんじゃ無えよ。

お秋　だってさ、そうじゃ無いの？　あんたが妻子が有りながら、沢ちゃんの所へ来るのも、度々言うけどそんな気持も、私だって解っちゃいるのよ。そりゃ人間には、自分がこうと思っても、そうならない事もあるもんだわ。――だけど、つまりが、それは間違いだわ。

秦　そりゃ俺だって――。

お秋　知っているなら、どうしてそうしないの？　しかし、私はそう思うわ、物事はやって見なきゃならないのよ。やって見なきゃ、出来るか出来ないか、わからないのよ。

秦　わかった、わかったよ。

沢子　この人はいくじ無しよ。

秦　いくじ無しだ。そう言われりゃ。――考えて見りゃ家の奴等が可哀そうだ。そう思ってはいるんだけど――。今度の騒ぎだってそうだ。俺にはどうしなけりゃならんかは、よくわかるんだ。それで何も出来ない。黙って見ていることしか出来ない。――俺と言う男はそうした人間なんだ。

お秋　………………。

秦　そうだから仕方が無えんだよ。

お秋　そうした人間だって、ああした人間になれない事は無いわ。その時が来れば。

秦　（ボンヤリと）そうさ、――時が来ればよくわかるんだ。（間）俺には今度の阪井さんの言うことは本当だ。船の連中だって仲仕の方だって同じだ。連中がせっかくああやってストライキを始めたのを、それを仲仕の方じゃ応援もしてやらねえで、あべこべに撲るなんて間違ってらあ。

沢子　随分けが人が出たってね。

秦　ああ、そん中の三四人はウッカリすると死ぬかも知れねえ。――みんなが阪井さんの言う事を聞かねえんだ。あの剛腹な、ウインチに片腕もぎ取られても笑っていた阪井さんが、泣いていたのを俺は見た。秦君、俺ももう手を引くよって言った。

お秋　手を引くって、なんだって又――。

秦　もう、あいそが尽きたんだろ、尽きもするわね。

（短い間）

お秋　本当にもう帰ったらどう？

沢子　お願いだから、帰って、私、苦しくなるから。

秦　あ、帰るよ。――（立上る）大事にして呉れ。（出て行く）

（間）――（お秋は今秦の言ったことをザーッと考えこんでいる）

お秋　（気を変えて）沢ちゃん、あんた、泣いてるんじゃ無い？

沢子　――いいえ。
お秋　（薬包を見て）　これ何？
沢子　――新さんが持って来て呉れたのよ。
お秋　薬なのね。――私にはようく解るわ。本当に、あんたも新さんも――。（語調を変えて）馬鹿だよ。
沢子　秋ちゃん、私ゃ、私ゃ、もう――。
お秋　ほら、ほら、もう始まった。私ゃ聞かないわよ。おのろけなら、もう沢山。
沢子　――秋ちゃん、――あんたは私には、本当の姉さんの様に思える。秋ちゃんが居なかったら私、もうとっくに死んでしまっているわ。
お秋　（わざと嘲る様に）　何を馬鹿々々しい！　私は、そんな、愁歎場は大嫌いだわよ。いい加減そんなメソメソした事は聞き飽きてよ。初ちゃんの時にも散散っぱら見せつけられている上にさ――。
沢子　初ちゃんだって、そりゃ、秋ちゃんをお母さんの様に頼りにしていたわ。
お秋　まあま、お母さんだなんて、可哀そうに私をいくつだと思っているの。
沢子　だって、そうだわ。秋ちゃんがあんなに骨を折ってあげたからこそ、町田さんと一緒になれたし、それに。
お秋　もう沢山。――しかし初ちゃんと言えばどうしているんだろう。

沢子　あれから一度も手紙も来ないの？
お秋　それは、私が手紙のやりとりなんかしないと言っといたからね。ああやって、やっとこんな泥水の中から逃げ出せたんだもの、もうそんな泥水の事なんぞ、こっから先だって思い出しちゃいけないんだわ。
沢子　うまく行ってるかしらん。――杉山さんとはスッカリ手は切れたの？
お秋　そりゃ、もう、とっくに切れてるわ。――そうさ、うまくやってるのよ、きっと。町田さんはあんなんだし、初ちゃんは断髪だし、モダンボーイにモダンガールとやらで、よろしくやっているのよ。
沢子　うらやましいわねえ。
お秋　うらやましいわ。
沢子　それと言うのも――。
お秋　黙れ！　ははは、これは阪井さんの真似よ。（右手を突出して）そんなこつ言うのは黙れ！（二人笑う）
沢子　阪井さんと言えば、今秦さんが、騒ぎから手を引くと言っていたと言ったけど、阪井さんが居なければ、組合の方では困ると言うじゃ無いの。本当かしら？
お秋　何が？
沢子　手を引くと言うこと。
お秋　私にゃよく解らないわ。
沢子　近頃阪井さん来ないの、秋ちゃんとこ。

お秋　時々来るにゃ来るけど、あのだんまり屋が——たまに何か言うと、黙れ！（右手を突出す）（二人笑う）

声　（階下から呼ぶ女将の声）秋ちゃん！　秋ちゃん！　何よしているの？　秋ちゃん！

沢子　おかみさんが呼んでいるわ。

お秋　お客が来たんだわ。なに、少し放っときゃいいんだ。

声　秋ちゃん！　何を又グズグズしているの、少し下にも来てお呉れよ。私一人じゃ手が足りなくて困っているんだから。

お秋　（障子から顔だけ奥へ突出して）はい、はい、今行きます。はいはいじゃ無いよ。御病人の看病は後にしてお くれよ。この忙しいのに！

声

お秋　わかってるわ。私、直ぐに仕度をしますから。

声　病気々々って、何が病気だか本当に知れやしないよ。まるでお嬢様みたいに思っているんだからね。（二階まではハッキリ聞えないが、まだグズグズ言う）

沢子　秋ちゃん、私、今晩から起きるわ。その方がいいわ。一人か二人のお客だったら——。

お秋　何を馬鹿を言ってるの！　そんな事言うと私が承知しないわよ。（階下へ）おかみさん、沢ちゃんはまだ駄目よ。私が沢ちゃんの分まで引受けます。（沢子に）なあに平気よ。それ位のこと、この私に出来ないと思って？　ところで、さ、戦闘準備だ。あんたの鏡台貸してね。さ、忙しいぞ。

沢子　ええ、いいとも。——済まないわねえ。

お秋　チッ、又言ってるよ。（安っぽい赤の長襦袢を見せ半ば肌脱ぎになって、鏡台に向って化粧しながら）——私なんざ、お上手でいらっしゃるからね。沢ちゃん見たいに、へまはしないのよ。——一体あんたはお客に少し親切過ぎるのよ。——だから病気なんかになるんだわ。——白粉が濃過ぎたかな。どう？

沢子　いいえ、それ位で丁度いいわ。——あんたの肌はいつも綺麗だわねえ。どうしてそうなんだろう。

お秋　私なんざ若いくせに——。そりゃ、クヨクヨ物を考えないからよ。

沢子　私、時々、あんたに抱かれて寝たいわ。——あんたの肌を見ていると、私、小さい時に別れたお母さんを思い出すんだもの。

お秋　私が男なら、沢ちゃん、惚れて？

沢子　ええ、惚れるわ。死んでもいいわ。

声　（階下から女将）秋ちゃん！　秋ちゃん！

お秋　今、行きます——！（帯をしめ直す）——沢ちゃん、あんた、あの、秦さんと何か約束でもしたんじゃ無

い？

沢子　いいえ、どうして？

お秋　なに、それなら、それでいいんだけど。――さあ
これでよしと。今晩はね、私、少し勇ましくやるか
らね、あんた、聞かない振りをしていて頂戴。（出
て行く）

（階下の酒場で、数人の人が酒を飲んで騒いでいる物
音）

（遠くで、汽船の汽笛の響）、

（沢子は頭を枕に伏せてヂッとしている）

（同じ二階の何処かで二三人の人の足音。廊下のギチ
ギチ鳴る音）

（男の酔った声と、お秋の声）

声　惚れて通えばって言うじゃ無えか――な、な、――
横須賀くんだりから来たんだぜ――。

声　だからさ、うれしいと言っているんじゃ無いの――

声　痛え！　畜生、その手だ。――その手でたぐり寄
せられる奴だ。――ひとつ、ヌクヌクと、てめえを
抱きてえばっかりに、だ。――どっちだい？

声　こっちよ。――それ、そんなに薄情なんだからね
――。そんな事言っていても、お前さん、直ぐ眠っ
てしまう奴さ。――

（シーンとする）

（六畳の障子が奥から開いて、頬に傷跡のある杉山の
顔だけがヌッと出る。何かを捜す様に室の中をヂロヂ
ロ見廻した後、引込む）

（階下の騒ぎ）

（汽笛の音）

（再び奥から覗く杉山の顔。ズッと室へ入って来る）

杉山　おい。

沢子　え？　あ、杉山さん。

杉山　沢ちゃんだったか。――おい、何処にいるんだい
なには？

沢子　何が？

杉山　早く言ってくれよ、知らない振りをしたって駄目
だぜ、何処に隠してあるんだい。

沢子　何を言っているんだか、私にゃ解らないわ。

杉山　白っぱくれるなよ。俺は知っているんだぜ、何も
かも。

沢子　だって、あんた、何の事だか――。

杉山　まだそんな事を言うのか、俺は――。

（足音がして、少し乱れた着物をして、手に何か持ち
ながら、お秋が入って来る）

お秋　ああ、やっと寝ちまやがった。――沢ちゃん、
あんた、これ食べない（手に持ったものを置こうと
して、杉山を見る）おや！

杉山　お秋さん、久し振りだなあ。相変らず全盛だね。

お秋　ま、杉山さん。（間）ほんとに久し振りねえ。ど

うしたの？　あれ以来、スッカリお見限りね。現金なもんだわ。

杉山　そうでも無いさ。

お秋　そして今夜は？　どうして又？

杉山　わかっているじゃ無いか。

お秋　しかし、沢ちゃんは駄目だし、私だけよ。こんなお婆さん。

杉山　そんな事じゃ無えさ。

お秋　だってお前さん――。

杉山　何を言ってやがるんだ。――白っぱくれるのもいい加減にしなよ。

お秋　おやおや、何の事なの一体？

杉山　その手を食うか！　初子を出しなよ。初子を返してくれ。（ドッかり坐る）返してくれるまで俺は此処で待っているよ。

お秋　え、初ちゃん？　変だねえ。初ちゃんはあの時、チャンとあんな話になって町田さんとこに居るんじゃ無いの？　お前さんだって今更――。

杉山　へ、何を言ってやがるんだ。――初子は町田んとこにゃ昨日から居ないんだ。此処にいるんだ。此処に来ているんだ。それを知らねえと思っているのか

お秋　へえ？　どうしてまた、そんな？

杉山　どうしてもこうしても無いよ。文句を言わずに出してくれよ。

お秋　町田さんと喧嘩でもしたの？

杉山　そんな事、俺は知らんよ。

お秋　だって、変じゃないか。

杉山　変でも、何でも、彼奴、昨日町田んとこを飛出したなぁ本当なんだ。

お秋　しかし初ちゃんは此の家にゃ来ていないわよ。私達、そんな話を聞かないんだもの、ねえ沢ちゃん。

杉山　（信じない）何を言ってやがるんだ。

お秋　しかし、ねえ杉山さん。よしんば、初ちゃんが此処に来ていたって、あんたとはスッパリになっているんだし、何もそんなに言う事は無いじゃないの？

杉山　彼奴は俺んとこへ来たがっているんだ。綺麗に出してくれりゃ、だから、文句は無いんだ。

お秋　そんな無茶を言ったって、――杉山さん、お前さん、あれからも初ちゃんや町田さんとこへチョイチョイ行ったんだね？――そして又金でも出さしていたんじゃ無いの？　そうじゃ無いの？

杉山　――そんな事、俺が知るもんかね。

（短い間）

お秋　――そんな事だろうと思っていたわ。――しかし本当に此処には来ていないのよ。あれ以来一度だって来やしないわ。おかみさんに訊ねたって、コックさんに聞いたっていいわよ。

杉山　みんなグルになっていやがるんだ。そんな手に乗

るかい！
お秋　そんな、人が本当に言う事をいつまでも疑るんだったら、どうするの？
杉山　どうするって？　そうさ、此処で待っているんだ。一日でも二日でも一ヵ月でも此処に坐って待つよ。俺は彼奴を取返さねえじゃ置かないんだ。
お秋　お前さんも変な人だわねえ。思い切りの悪い。――お前さん、お前さんだって浜では相当鳴らした――
杉山　大きなお世話だ。だからどうしたって言うんだ？――だから俺ゃ、変に隠し立てをすりゃ、何でもやるぜ。初子だって町田だって、変に立廻りゃ唯じゃ置かねえんだ。人を馬鹿にしやがって！
（間）
お秋　――じゃ、此処に待っているがいいわ。私は嘘を言っているんじゃ無いんだから。
杉山　嘘をつきゃ、お前だって、俺は――。
お秋　そう。――大変だわねえ。――沢ちゃん、これ食べない、おいしいのよ。
沢子　ええ、ありがと。
お秋　お食べよ。
声　（階下から男の酔った）秋ちゃん！　秋ちゃん！　おーい、秋ちゃん、何をしているんだ？　秋ちゃん！
お秋　杉山さん、本当にあんた待ってるの？
杉山　ああ、お邪魔をさして貰うよ。

お秋　じゃ勝手になさいな。別に邪魔にもならないわ。
（出て、階下へ去る）
（間）
（杉山、沢子をヂロヂロ見ている）
（汽笛の音）
杉山　――沢ちゃん、お前どっか悪いのか？
沢子　ええ――。
杉山　お客は取らずか？
沢子　ええ――。
（間）
杉山　綺麗だなあ、お前は。
沢子　――そっちに居て下さい。
杉山　――寂しいだろう？
沢子　――。何をするの？　何をするの？
杉山　ま、そう言うなよ。何も別に、おめえ――。いいじゃないか。――そう言うなよ。
沢子　何をするの？　私、おかみさんを呼んでよ。秋ちゃんを呼んでよ。秋ちゃん――。
杉山　そう言うなよ。俺、何もしやあしないじゃ無いか別に何も――。（煙草を出して火をつける）
（階下の騒ぎ）

――幕――

二 階下の酒場

（少し淋しい位に広い。所々に置いてある安物の椅子テーブル。右奥に階段の昇り口）
（四五人のお客とお秋――今まで食い酔ってワイワイ騒いでいたのがヒョイと静かになった所）
（正面の入口の所の外――舞台奥――からヒシヒシと詰めかけて入ろうとする十人ばかりの仲仕達）

客一　何だ、何だ？
客二　どうしたってんだい？
お秋　どうしたの、まあおはいんなさいよ。どうしたんですよ。
仲仕二　出せよ。おいお秋、出せよ、そんな白ばくれなくたって！
仲仕四　早く出せよ、出して呉れよ。
仲仕五　電報だ。電報が来たんだ。本部から来たんだ。早く出してくれ。阪井さんが居なきゃ、どうにもならないんだ。
仲仕六　秋ぺえ、早く呼んで来てくれ。
お秋　どうしたのさ？　何を出すの？
仲仕一　阪井だよ。阪井を出してくれ。
お秋　阪井さん？　阪井さんがどうかしたの？
仲仕二　今、阪井がいなければ、どうにもならないんだ。あの男でなければ誰にもどうにも出来ない事が起きたんだ。
お秋　阪井さんは合宿の方にいるんじゃ無いの？
仲仕一　じゃ此処には来ていないのかい？
お秋　来ていないのかって、阪井さんは一昨日来たっきり此処へは来やしないのよ。あんた達にわからないものが、私にわかる筈は無いじゃないの。
仲仕五六　うそつけえ！　色女！
お秋　ま、何を言っているのよ、本当よ、阪井さんは此処にゃ来てはいないわ。うそだと思ったら二階に行って捜したっていいわ。
仲仕一　そうか、そいつは困ったなあ。何処に行っちまったんだろう。なあにね、今朝だ、みんな浜のあれで気が立っているんだろう。阪井が止せと言っても聞かないで、船の連中と喧嘩をしちまったんだ。そのほかにも阪井の言う事に耳をくれなかったものだから、阪井が合宿を出て行っちまったんだ。なんでも朝鮮の方へ行くんだとか言ったそうだけど。
お秋　え、朝鮮へ！
仲仕一　しかし、船はみんな動かねえんだし、まだ立っちまう訳は無えんだけれど――とにかく、こいつあ困ったなあ。
仲仕二　困ったってお前、彼奴が居なけりゃ、おさまりが附かねえんだ。ほかを捜そうじゃ無えか。早くしね

えと大変なことになっちまわあ。

仲仕一　そうだ。じゃ行くか。――でねお秋さん、後でもし阪井が此処へやって来たら、そう言ってくんねえか。俺達が捜していたってね。組合の方へ直ぐ来てくれって。山三の親父も待っているってね。そう言ってくれ、頼むぜ。

お　秋　ええ、言っとくわ。言っとくにゃ言っとくけど、まあ一杯休んで行ったら。

仲仕一　そうしちゃ居られないんだ。じゃ頼んだよ。

（仲仕達立去る）

客　一　どうしたんだい。一体？

客　二　なあに、浜の方の騒ぎさ、それ、方々の船の連中が、いよいよストライキであらかた下船しちまったろう。あれさ。

客　一　だってお前、そりゃ船の連中だろう。今のは仲仕組合のもんだぜ。どうしたんだね。話がわからねえじゃないか。

客　三　それはね、船が動かなくなりゃ仲仕の仕事が無くなる、船でストライキなんかやって貰っちゃ五百人からの仲仕は飯の食い上げだってんでね、切りくずしで夢中になっているんですよ。それが嵩じて仲仕が海員協会へなぐり込みをやったんだ。

お　秋　けが人が随分出たってねえ。

客　三　そうだよ、協会にいる山海丸に乗っている男を私は一人知っているがね、そいつも側杖を食って（頭の横を押えて）ここんとこをやられてね。なにしろ表から見たが、玄関のとこのはめ板が真赤になっていらあ。

客　二　そいつぁしかし解らねえ話じゃないか、仲仕だって労働者じゃ無いか。船の連中がせっかくここまでこぎつけたものを、なにも。

客　一　それよ、――だけど一番大事なのは誰にしても自分の鼻の下だからな、無理も無えて。

客　三　いや、そりゃ組合の中にだって、ちったあ骨の固い者はいますよ。現に、仲仕の方もストライキに入って一所にやらなきゃいかんと言い張った連中もいたそうですよ。片腕の、それ、何と言った、今の連中が言った、なあお秋んべ、そうだ阪井なんて男は、そう言ったんだそうだけど、なにしろ、仲仕の方は昔からのしきたりで親方がいたり何かして、うまく行かないんだそうだ。――それもそうかい。

客　一　だが、これが、どうも世の中が段々おだやかで無くなって来たなあ。

客　二　止そう、そんな話。酒がうまく無えや、秋ちゃんもう一杯。

お　秋　まだ？

客　二　まだ？　じょ、じょ冗談を。まだやっと三杯だ。何を言ってるんでえ……。

お　（身体のガッシリした、左腕の無い阪井が冷たい沈んだ顔をして、黙って入って来る）
秋　あ、阪井さん、今、あの――。
（客達が阪井を見る――阪井黙って左側の椅子にかける）――（間）
お秋　どうしたの？
阪井　…………（黙ってお秋を見る）
お秋　たった今さっき、合宿の人達が大勢で見えて、あんたを捜していたわよ。――そう言ってくれって、あんたが帰らなきゃ困るって、山三の親方なども来ているって。
阪井　そうかね――。
お秋　どうしたの？　身体の加減でもいけないの？
阪井　いや。
客一　おい、お秋ちゃん、勘定だ。
お秋　はい、ありがとう。（客一の方へ行く）もうお帰り？
客一　又来るよ、今夜はこれからまだ山の手の方に用事があるんだ。
お秋　そう、いいわね。いい人んとこ？
客一　冗談言うなよ、それどころかい。あばよ。（出て行く）
お秋　左様なら、又どうぞ。（間）
阪井　おい、酒をくれ。

お秋　酒？　あんた、酒を飲むの？　飲んでもいいの？
阪井　（左肩を押て）ここ痛みゃしないの？
お秋　大丈夫だよ。なあに。
客二　そう――（酒を棚から下ろし、注ぐ）
お秋　お秋ちゃん、もう何時だい？（言いながら阪井の方を覗う様に注意している）
お秋　そうね、（奥へ向いて）おかみさん、今何時です、おかみさん（返事無し）おや、居ないのかしら、――（奥へ入る）
客二　（阪井に）阪井さんと言うんでしたね。
阪井　…………（相手を見ている）
客二　どんな風なんです浜の方は。
阪井　…………（黙って酒を飲む）
客二　あんた、朝鮮へ行くと言うのは本当ですかね？　いつ行くんですか？
阪井　（相手を見て苦笑をする）
お秋　（出て来ながら）お湯かな、お湯へ行ったんだわ。あの今九時少し廻ったばかり。
客二　九時過ぎだって？　そいつあいけねえ、此処へ置いとくぜ。
お秋　あら、あんた、二階へ上って行くんじゃ無かったの。
客二　そうしちゃ居られないんだ。又今度だよ。どうも世間がこうザワザワしていたんじゃ、これでユック

り遊んでも居られないや。じゃ。（出て行く）

お　秋　変だわねえ――。

阪　井　今のは何と言う人だい？

お　秋　さあ、二三度来たばかりの人で、名前は知らないわ。

阪　井　そうか……。

（客の中の一人はテーブルに寄ったまま酔って居ぎたなく眠っている。その他の客は、以下劇の進行中に目立たない動作をして出て行く）

お　秋　阪井さん。

阪　井　――（顔を上げる）

お　秋　あんた朝鮮へ行くんだって。

阪　井　――ああ。

お　秋　（手に持っていた何かをガタンと床に取落す。それを拾い上げて）そう――。どうして朝鮮なぞへ行くの。

阪　井　どうして？

お　秋　朝鮮に知った人でもあるの？

阪　井　そんなもなぁ居ない――。

（前に出た仲仕の中の一と二と三が急いでドヤドヤ入って来る）

仲仕一　あ、居た、居た、居た！　おい阪井君大概いい加減にしてくれ。捜したって無かったぜ。

仲仕二　のんきだなあ、俺達がこんなに心配しているのに御本尊はこんな所で酒をくらっている。早く合宿へ戻ってくれよ、よ。

阪　井　どうしたんだい？

仲仕一　阪井君、そりゃ、君の気持は俺達にもよく解るんだ。君が手を引くと言った時にゃ、だから、俺達としては何とも言えなかったんだ。しかし、君事情が今の様になりゃ。

仲仕三　船はもう大概空家同然だ。協会の方からもよろしく頼むと言って来ているんだ。今俺達がフンバラなきゃ、何もかもオジャンだ。船の連中はまだ解雇されていないけど、船主側の方でいつなんどき解雇してもいい様に、船員をかり集めている。そのかり集め方を俺達の組合へ頼んで来ていやがる。船が動かなきゃ荷役の方でも困るだろうから、よろしくお願いしますと言やがるんだ。糞くらえ！

仲仕一　だからよ、今俺達がガンバラなきゃ、船の連中のストライキを俺達が破ることになるんだ。

阪　井　――俺は初めからそう言った。

仲仕一　それがさ、あん時迄は俺達にはよく解らなかった。然し君に煮湯を呑ましたなぁ俺達じゃ無かった。

阪　井　それは知っているよ。そんな事は、どうでもいいさ。

仲仕二　じゃ来てくれるね。早く来てくれ。俺達十人ばかりで、組合の方にやっと三百人ばかりの連中をかき

集めたんだ。今ワイワイ言っている。何か喋ってくれ。奴等にどしょう骨を入れてやるのはお前で無きゃ出来ねえんだ。

阪　井　そんな事を言うな。今俺にはそんな元気は無い。今奴等の顔を見たって俺には何も言えやあしない。

仲仕三　そ、そ、そ、そんなお前、そんないこじにならなくたって。

阪　井　いこじになっているんじゃ無いよ。俺は去年、この片手がウインチに、あんな事で喰い取られた時から、自分一人のいこじな根性なんか捨てている。――そんなこっちゃ無いんだ。

仲仕一　しっかりしてくれ、しっかりしてくれ、君が、君がそんな風だったら、俺達はどうなるんだ。それを考えてくれ！　君は、君って男は、自分一人の阪井じゃ無えんだ。俺達の阪井だ。

阪　井　――今になって君等はそう言うんだ。――俺の気持がこんなに押しつぶれっちまってから。――じゃ言おう、この前の時も俺達は負けた。あん時、俺はたった一人の妹を取られた。妹は俺をうらんで死んだ。勘弁してくれと俺が何度言っても、黙って石の様に何も言わないで、俺を睨んだまま死んだ。あん時の顔が、あん時の妹の顔が――二三日前から、組合の連中の顔から俺を覗くんだ。俺をジッと見るんだ、――俺はそう思った。これでおしまいだ。俺は奴等に何も言う資格が無い。誰かがその内に奴等の目をさましてくれる。しかし、それは俺じゃ無い。俺は途中からどっかへ落っこちる人間だ。沢山の俺みたいな人間が落っこちて、その後に来る奴が本当に皆の役に立つんだ。それは俺じゃ無い――。

仲仕一　だからよ、ただそう言ってくれりゃいいんだ。俺の妹は俺をうらんで、俺を睨みながら死んだ。皆な自分の身内の者をそんな目に合わさない様にしっかりしろって、そう言ってくれ。一時おくれりゃ一時の負けだ。丸二や山東や丸菱じゃもう買収を始めているんだぜ。奴等只でさえ腰がフラフラしているんだ。

仲仕二　じれってえな。おい阪井君、君は。

（一人の仲仕が戸を突き飛ばす様にして入って来る）

仲　仕　おい大変だ、早く来てくれ、本部に手が廻ってもう帰ろうとしている連中が随分いる！　今、ワイワイ騒いでいる。早く来てくれ、手が足りねえんだ。

仲仕一　よし、じゃ丸菱の親爺に口を利かせるな、行こうおい、阪井君来てくれ。君が来てくれなけりゃ――

阪　井　俺なんかを頼りにしないで、やってくれ。

仲仕二　ま、ま、まだ言っている！　そんなお前、そんなお前――。

仲仕一　とにかく、阪井、誰が何と言ったって君が来て喋ってくれないじゃ、皆は何ともならないんだ。考え

阪井　直してくれ。俺達は先へ行くから、放っとけねえんだから、頼むぜ、頼んだぜ。
（仲仕達急いで出て行く）（間）
阪井　（それまでヂッと隅の椅子から自分を見詰めていたお秋に）――もう一杯。
（お秋黙って立って酒を注ぐ）（短い間）
お秋　阪井さん、あんた本当に行かないの？
阪井　――何が？
お秋　――私ゃ、今迄そんなあんただとは思っていなかった。（短い間）
阪井　俺だって。――ま、そんな事はもう言ってくれるな。――何だが馬鹿に気が滅入っていけねえんだ。こんな男だろうよ。
お秋　弟なんぞは、あんたのことを、いつも何て言っているか。――だのにあんたは、皆をおいてきぼりにして朝鮮へ行くと言っている――。
阪井　俺はこんな片わだ。そして一人ぽっちだ。
お秋　一人ぽっち？――そう一人ぽっち。（下を向いて）私はこんな淫売だから――。
阪井　なに？　何だって？――それがどうしたんだい。俺は自分の言ったことは忘れやしないよ。俺がシャンとして働ける様になれば、お前を女房にすると言った。今でもそう思っている。
お秋　まっぴら。

阪井　なに？
お秋　まっぴらだわ。私はいつまでも淫売で結構。
阪井　そうか――まあ、いい。
（表――即ち舞台奥を何か罵り騒ぎながら走り過ぎて行く多勢の人の足音、その音に、唯一人残って眠っていた客が目をさましてキョロキョロするが、再び眠り込む）
お秋　おや、どうしたんだろう？（戸を開けようとする）――（同時に、二階から階段に音を立てて杉山が降りて来て、階段の昇り口に立ったまま）
杉山　おい、お秋さん。
お秋　（戸に手をかけたまま）え？
杉山　いい加減にもう出してくれてもいいじゃねえか。
お秋　くどいわねえ、居ないと言ったら居ないのよ。
杉山　そんな事を言ったって、彼奴が町田んとこに居なくなりゃ、来るとこは、此処より外に無いじゃねえか。よ、そんな意地の悪いことを言わないで、チョイとでいいから逢わしてくれよ。
お秋　あんたもくどいのね。居ないものは何と言ったって居る筈が無いわ。――よしんば、居るにしたって、あんたがそんなに初ちゃんの尻を追廻すことなんぞありはしないじゃ無いの。
杉山　わからねえ奴だなあ。俺が彼奴を捜すなあ捜す訳があっての事だ。よし、そんな事を言やぁ、初子が

俺の前に姿を現わすまで、二階でお邪魔をするぜ。

お秋　ええ、ええ、そうしてりゃいいわ。

杉山　後で引退ってくれっちったって俺は知らんよ。いいな。

お秋　（返事をせず）（杉山再び二階に上る）

阪井　どうしたんだよ。今のは？

お秋　なあに、例のお初ちゃんさ、あの人を追廻している人なの。

阪井　だってお前、お初ちゃんは、あん時チャンと話がきまって、何とか言った、あの――。

お秋　町田さんところで、一緒に暮していたんだわ。それを今の人が未だにしょっちゅう、うるさくするもんだから、町田さんの家を昨日飛出したって言うのよ。

阪井　へえ。（間）

お秋　阪井さん、あんた組合の方へは行かないの？

阪井　行かない。行ったって今の俺にゃ。――今夜此処へ泊めて貰いたいと思っているんだ。合宿へは行きたくねえから。

お秋　ええ、それはいいけど。

阪井　なに、ホンの寝るだけだ。商売の邪魔はしない。恵ちゃんの部屋だっていい。

お秋　いいのよ、そんなこと、居たいだけ居ていいわ。

阪井　恵ちゃんはまだ帰らないのか？

お秋　ええ、まだ。

阪井　ほんとにお前も大変だなあ。

お秋　（いろんな意味の怒りを一緒にして顔を引きしめて）なんなの？

阪井　え？　何んだよ？　どうしたんだよ？　（短い間――お秋はその間に元の様になる）

（阪井二階へ行こうとして立上る）

（お秋は阪井を見る）

お秋　あんたの死んだ妹さんは、あんたをうらんで死んだ。睨んで死んだわね。

阪井　――？

（暫く見合ったまま立っていたが、阪井の方から階段口の方へ歩き出す）

――幕――

三　同じ場所

（夜更）

（客は去ってしまってガランとしている）

（四十に近い女将が何かブツブツ言いながら、店と奥との間を出たり入ったりして後仕舞をしている）

（右奥に見えている階段に音がして、四十四五の小役人風の男が降りて来る。それに続いて、疲れたお秋が降りて来る。少し酔っている）

女将　あら、もうお帰りですか？
男　（少してれて）　ああもう大部おそいだろうね？
女将　（柱の時計を見上げ）　十一時五十分キッカリですよ。
男　そいつは、ボヤボヤしていると、赤電車を捉えそくなっちまう。じゃ、左様なら。（外へ出て行く）
女将　（お秋に）——あの？
お秋　ええ、二階にいただいてあるわ。
女将　そう。では左様なら、又どうぞ——。あれ、どんな人なんだね？
お秋　さあ。どっかの役人か何かしているんでしょ。私きらい。しつっこくって——。
女将　そうさねえ、年寄はみんなそうだよ。は、は、は。
（間）
お秋　旦那は今夜は見えませんの？
女将　おやおや、年寄と言ったら直ぐそれだからねえ、秋ちゃんには、かなわないよ。——しかしあの人が見てくれなきゃ、此の内は立って行かないんだからね。仕方が無いさ。——来ているのは宵の内から来ているんだよ。
お秋　あんな事を言って。——じゃ、おかみさん、奥へ行ったらいいわ。後じまいは私がしますから。
女将　そうかい、じゃ頼むわ。お前が本当にシャンとしていてくれるから、どれだけ助かるか知れないよ。

初子はあんな事になるし、沢子は臥っているし、私ゃもうね——。お前の年が明ける時にゃ、相当のことはするからね、私だっていつもイライラしているから、恵ちゃんにだって、つい口ぎたない事を言ったりするけど、そりゃ——。
お秋　ええ、ええ。——私は、つとめる分をつとめるだけですわ。
女将　恵ちゃんはまだ帰らないのかい？
お秋　ええ。
女将　丁度いいわね、では。お前に後じまいをして貰えば。——杉山さん、もう帰ったの？
お秋　まだ沢ちゃんの部屋にいます。
女将　どうしたんだね？
お秋　又、金でも貰いに来たんでしょ。放っときゃいいわ。どうでも帰らないと言ったら、私が何とかしますから。
女将　じゃ頼むよ。あんないけない奴だし、——それに始終匕首を持っていると言うんじゃ無いの。なんしろ昨日の今日だからね。又、しょびかれたりしたんじゃ始まらないからね。いいね？
お秋　ええ。
女将　じゃ、戸締りはいつもの様にね。頼んだよ。（奥へ立去る）
（お秋奥へ消える女将を見送り、床の上にペッと唾を

吐く）
（外への出口へ行き、道を覗き、誰も来ないのを見て扉一枚だけを残して入口を締る。窓を閉す）
（チョッと立止ってから、売場へ行き、棚から酒瓶とコップを取って、注ぎ、飲む）
（たもとの中に煙草を捜す。無いので、舌打をして、ストーヴの下の辺を捜して、客の吸差しの煙草を拾い火をつけて、ふかす）
（眠そうな遠い汽笛の音）
（お秋、椅子に掛け、テーブルに肘を突く）
（間）
（外でコトコト音がする）
（お秋の弟が杖を突いて来る）

お秋　ああ、恵ちゃん、今夜おそかったね。

弟　姉さん、此処にいたのかい、姉さん――（お秋に寄って肩にさわる）此処にいたのかい。（安心した様に微笑）

お秋　寒かっただろう？

弟　なあに、寒かあ無いよ。――今夜もまた締出しを食うかと思った。

お秋　お前、おなかは？　いいの？

弟　ああ、空きゃしない。お師匠さんとこで、おさつをよばれた。うまかった。姉さんにも持って来ようかと思ったんだが、そんな事出来ないもんだから。

お秋　私ゃいらないわ。どうだったの今夜は？

弟　十人以上もんだ。お師匠さんが褒めてくれた。

お秋　そりゃよかったねえ。

弟　うまくなったぜ。姉さん、うまくなったぜ。肩はこっていないの？　もんでやろうか？　え？　もんでやろうか？

お秋　いいよ、私。こっちゃいないから。（涙をふく）

弟　この分でミッシリやったら、あと、半年もやったら、試験が受けられるんだとさ。もっと、それには、解剖をやらなきゃならないんだと。――しかし俺、解剖だってもう少しは知っているんだぜ。ね、姉さん、（肩を押えて）此処んとこの、この骨は、何と言うんだか知っているかい？　知らない、知らないだろう？　これは肩胛骨って言うんだ、それから――

お秋　痛いよ、恵ちゃん、そんなに掴むと痛いよ。

弟　ああ、痛い位だろう。（笑う）初めは、こんなに力が入らなかったんだ。――来年になれば、俺が働くよ。

お秋　そうなれば、姉さん、どんなに嬉しいか知れないよ。

弟　そうなれば――姉さんの事、手の先だって外の奴に触らせやしないんだ。――今夜はもう店はしまうの？

お秋　ああ、だから、恵ちゃんも早く二階へ行っておや

すみ。

弟　だって、まだ誰かいるんだろう。お客がいるんだろう！

お秋　誰も居やぁしないよ。

弟　嘘言ってら。（見物席を指して）いるんだろう。その辺にまだ誰かいるんだろう。

お秋　（見物席を見て微笑）誰もいやしないよ。

弟　そうかい。俺にはまだ居る様な気がするんだけど――。俺にはしょっちゅうそんな気がするんだよ。誰も彼もが、姉さんを摑まえそうな気がするんだ。姉さんにさわりそうな気がするんだ。姉さんを、さらって行きそうな気がするんだ。――（見物席を指して）その辺に沢山、そんな男がいる様な気がするんだ。

お秋　（再び見物席を見て微笑）何を言っているんだよ

弟　姉さんは、いろんな匂いがするよ。恐ろしく沢山な匂いがするよ。――いろんな匂いがするよ。

お秋　馬鹿だねえ。そんな事言っていないで、早く寝たらいい。

弟　しかし、来年になったら――畜生どもに――。そうなったら姉さんは、あの人と一緒になる。

お秋　（二階をチラリと見て）なにがさ？

弟　白っぱくれたって俺は知ってる。阪井さんはメッタにやって来ない。しかし、姉さんは待っているんだ。知っているよ。――そうなったら俺は、阪井さんを兄さんと言うよ。兄さんと言うよ。

お秋　（目の見えぬ弟を淋しそうにヂッと見て）阪井さんなら二階に来てるよ。

弟　なんだって？　阪井さんが！　どこにいるの！

（この頃、便所に立ったらしい阪井が右手階段のあたりの便所口から、階段へ行こうとして出る。何と思ったかそこに立ったままお秋の方をヂッと見て立っている。この幕の終るまでそこに立ってヂッと見ている）

お秋　お前の部屋にいるかも知れないよ。

弟　しかし今頃どうして来たんだ。組合の方がいそがしいんじゃ無いのか。俺、今夜あの前を通ったぜ、大変な騒ぎだ。ワーッワーッって、なんか喧嘩でもやっているらしかった。俺あすこに立ちどまって、やれやれ、しっかりやって、金を持って、いろんな匂いのする奴等をたたきつぶしてやれと思った。俺も目さえ開いていたら。――どうしたんだよ、阪井さん？

お秋　どうしたんだか、私ゃ知らない。

弟　変じゃ無いか。――どうも変だな。――姉さん、浜の方は凄いぜ。見えはしないけど、今に浜はひっくり返るよ。

お秋　――そんな事はもういいから早く二階へおいで。もうお休み。

弟　寝るよ。ああ寝るよ。姉さんは？
お秋　私ゃ、戸締りをしなきゃならないから——。阪井さんがお前の所に寝るなら、少し蒲団を分けておやり。
弟　いいとも、だけど変だな。ああ寝るよ。姉さんも早くおやすみ。（階段の方へゴトゴト行く）姉さん、姉さんはあの人に惚れているよ。そして、そうで無いふりをしているんだ。俺知っているんだ。（二階へ消える）
（お秋煙草を吸う。——吸い止めてザッとなり、テーブルに顔を伏せ、急にガックリして声を出さずに泣く）
（永い間）
（隅に立った阪井がお秋を見詰めている）
（時計が十二時を打つ）
（入口の扉が開いて、神経質らしい洋服の町田が少しキョトキョトしながら入って来る）
お秋　おや、あんた町田さんじゃなくって！
町田　あ、お秋さん、今晩は——（四辺を見廻す）あのつい来ようと思っていながら——
お秋　——。
町田　おの時のお礼もロクロク言わずにいたし、来なくちゃいけないと思っちゃいたんだが、ね——。
お秋　それなら、もういいのよ。お礼なんて、そんな、それ私は自分のしたいことをしただけなんだから、それに、あんた達、こんな所へ来ない方がいいのよ。
町田　いや、そう言われると——。どうも、いろいろ忙しいし、それで——。
（短い間）
お秋　——じゃ本当だったのね？
町田　なにが？
お秋　いいえ、——もうね、（二階を眼で差して）日暮頃から、杉山が来ているのよ。
町田　え、それじゃ、それじゃ——。
お秋　私は多分、又小使銭取りの嘘だろうと思っていたわ。どうしたの全体？
町田　本当なんだ。昨日夜だ。僕が働きに行った留守に居なくなったんだ。僕は、また、戸崎の方にいる親戚へでも行ったかと思って。——そんな事が前に二三度あったのでね。——そいで今日昼頃まで待っていたんだけど帰って来ないんで、——きまりが悪かったけど戸崎へ出かけていったところが、来ていないと言うんだろう。（間）——来ているんだろう？
お秋　それが、いないのよ。
町田　ええ、いない？　来ていない？　そりゃ、大変だ。もしかすると、こいつぁ、もしかすると——。
お秋　一体全体どうしたのよ？
町田　どうしたと言って、お秋さん、僕は、どうしていいか解らないんだ。

お秋　もっとあんた、落着かなきゃ駄目よ。男のくせに何をワクワクするんです。――一体、初ちゃん、どうしたって言うの？

町田　それが、初子は可哀そうなんだ。彼奴は考えて考え詰めたあげくの事に相違無いんだ。

お秋　喧嘩でもしたの？

町田　馬鹿な、そんな事じゃ無いんだよ。――事が違うんだ。――彼奴まだ此処に来ていないとすると――秋ちゃん、どうしたらいいだろう。お願いだから考えてくれないか。僕には何もかもわからなくなった。どうも――。

お秋　だからさ、何がどうしたんだか、言って見なきゃ解らないじゃ無いの。

町田　あの杉山だよ。杉山がこんな事になさしてしまったんだよ。あの杉山だよ。杉山が金をゆすったり、恐迫したりするもんだから、初子は僕んとこに居れなくなったんだ。

お秋　だって町田さん、そんな筈は無いじゃ無いの？あの時、杉山さんは手切れまで取っているんじゃないの？

町田　そんなもの何にもなりゃしなかったんだよ。――そりゃ一カ月ばかりは、僕等んとこへは寄りつかなかったさ。――しかしそれからは三日にあげずやって来るんだ。――居すわって動かないんだ。――何と言っても、そのたんびに金をやれば、その時だけは帰るが、次の日になると又来るんだ――。

お秋　だって、あんたんとこ、杉山さん、知らなかった筈じゃないの？

町田　あの男には、そんな事捜す位、何でも無いんだ。――僕達だって、最初の家からもうこれで四度も越しているんだけど、それでも駄目だった。――蛇の様な男だ。――初子は、そのたんびに、どうせ私は杉山から逃れられない運命だからって、泣くんだ。――お秋さん、これを見て呉れ。（紙片を出す）

お秋　――。（黙ってそれを読む）

町田　僕はどうしたらいいんだろう？　ねえ。――僕は出来るかぎりの事はした。――初子と一緒に居れば学資は出せないと親父が言うので、夜になると新聞杜の発送係りに出た。二人で貧乏した。僕はあれを教育しようとまでした。――ね、お秋さん、僕の心がまだ足りなかったんだろうか？

お秋　――ええ、足りなかったのよ。

町田　え、そう思うのかい？　どうしてなんだ、どうしてなんだい？

お秋　――そうだと思うわ。――初ちゃんは、私と同じ者だったのよ。まあ、そうね、淫売だったのよ。それをあんたが外へ連れ出したんだわ。

町田　それは知っている、しかし、僕はかまわないんだ。僕は僕の妻にしようと思ったんだ。

お秋　そしてね、淫売を普通の女になす事は、普通の女を淫売になすことよりも、むずかしいのよ。——そうだわ、あんたの心が足りなかったんだわ。——ご覧なさい、何と書いてあるの、（読む）私はやっぱり浜の極道な女です。そんな女です。杉山はそれを知っています。あなたは私のことを忘れて、お父さんの内へ帰って下さい。——私には、初ちゃんの気持がよくわかるわ。

町田　じゃ教えてくれ。僕はこれからどうしたらいいんだ？　僕は自分がどんな事になったって、初子と別れては、——とても居れないんだ。

お秋　教えるって、私にそんな事出来やしないわ。

町田　そんな事言わないで、どうか、頼むから、ね、お秋さん——。

お秋　あなたは、初ちゃんを救ってやろうと思っているわね。

町田　初めはそう思っていた。そう思っていると思っていた。——しかし今はそうじゃ無いんだ。——ただ一緒に暮していたいんだ。それだけだ。（間）

お秋　じゃ、あんたも、どうしてもっと極道にならないの。初ちゃんは自分のことを極道な女だって書いているのよ。そう思っているのよ。——だったら、あんたもどうして同じ様に極道な男になってやらないの？

町田　え？　どうも、秋ちゃんの言う事は——。なるよ、そりゃ、なれと言われりゃ、何にでもなる。だけど極道になると言うと、僕、どうしたらいいんだ？

お秋　いいえ、そりゃ、どうするこうすると言う事じゃ無いわ。気持よ、気持のことよ。——一度地獄ん中におっこちた者は、神様の手じゃ上へ昇れないわ。地獄へ落ちた者同士で助け合って、這い上る外に途は無いんだわ。——あんた、もっと、極道な気持にならなきゃ駄目だわ。もっと、もっと、悪徒な、どぎつい気持にならなきゃ。

町田　——。

お秋　わからないの？　私にはハッキリ言えないんだもの。——ねえ、町田さん、かりに、あんたも初ちゃんと同じ様な淫売だと考えてごらんなさい。そして初ちゃんが好きで、どうしても一緒になりたいのよ。だのに邪魔者がいて、どうしても、それが出来ないのよ。杉山がいて邪魔するのよ。そしたら、あんたどうするの？　どんな事をするの？

町田　——。

お秋　いつまでも杉山を恐がって、ビクビクして隠れてばかり居るの？

町田　わかった、お秋さん、わかったよ。ボンヤリわかった様な気がするよ。

お秋　そう。じゃ、それでいいわ。しっかりするのよ。

じゃね、私、杉山さんを此処に呼んで来るから、話をするがいいわ。真正面から、正直に、何も隠さないで話をするのよ。わかって？　どんな事があっても、初ちゃんを取戻すつもりで、真正面を切ってやるのよ。

町田　ああ、大丈夫だ。――だけど、それよりも、僕は初子の事が心配なんだ。あれは、もしかすると――

お秋　大丈夫。私が受合うわ。人間は、そんなに簡単に死んだり出来るもんじゃ無いわ。大丈夫だわよ。

（二階へ去る）

（町田、神経的にその辺を歩き廻る）

（間）

（足音がして杉山とお秋が降りて来る）

（杉山と町田は顔を合せるが。無言。――

杉山は落着いて煙草をふかしている。――

町田は立ったまま、手をブルブル顫わしている。）

（間）

町田　――杉山さん。

杉山　――。

町田　――僕は今更――。

（間）

僕は今更、あなたに――。

杉山　なんだね？

（間）

町田　――初子がいなくなったんだ。

杉山　知ってるよ。

町田　それで、お願いがあるんだ。

杉山　――？

（間。お秋は立って二人を見ている）

町田　――僕は初子に、惚れている。

杉山　（黙ってニヤリとする）

町田　だから、――お願いがあるんだ。

杉山　変な事を言うなよ。

町田　僕が惚れていることは、あんただって知っていますね。

杉山　俺だって、惚れているよ。

（永い間）

町田　しかし、あなたは、初子で無くても済むんだ。――初子は苦しがっているんですよ。死ぬかもわからない――。

杉山　どうしたんだよ、それが？

町田　杉山さん、僕は一生恩に着る。恩に着るから、お願いだ、私に初子をスッカリ下さい。お願いします。

（間）

杉山　いやだと、俺が言ったら――。

お秋　杉山さん、お前さん――。

杉山　黙っていてくれ。俺はそんな男なんだ。

町田　――無理にも僕に下さい。お願いです。今更思い

切ろうとしても、出来ないんだから――。僕は、そのためなら、もう、命を投出しているんです。死んでもいいんです。それに免じて――。

杉山　死んでもいい？

町田　ええ、かまいません。

杉山　馬鹿言ってら。

町田　冗談じゃありません。お願いです。

杉山　本当だな？　死んでもいいんだな？

町田　だから、初子の事を思い切って下さい。

杉山　じゃ、外へ出たまい。一緒に外に出よう。外に出て話をつけようじゃないか。

町田　外へ？　どうするんです？

杉山　外へ出て、二人で話を附けようと言うんだよ。

（町田、助けを乞う様に、お秋を見る）

（お秋、黙って表情を変えぬ）

杉山　出ようじゃ無いか。

町田　ええ、そりゃ、行きますけど――。

（再びお秋を見るが、お秋は黙っている）

杉山　行けないのか？

町田　行きますよ。

（杉山、扉を押して外に去る。町田も続いて消える。少し足がヨロヨロしている）

（お秋、二人の去った扉をヂッと見詰めている、――間）

声　（二階の口から弟の）姉さん、姉さん、姉さん、姉さん！　姉さん！　阪井さんは居ないぜ。

お秋　――。

声　姉さん、何をしているんだよ？　まだ寝ないの？　どこにいるんだい、阪井さんは？

お秋　――。

（足音、弟が降りて来る）

弟　何をしているの？　姉さん？　何処にいるんだい？

お秋　恵ちゃん、まだ寝ないのかい？

弟　姉さんこそ、何をしているんだよ？　阪井さんは二階にはいないぜ、此処にいるんだろう？

お秋　いいえ、此処には居ないよ、どっか便所にでもいるんだろ？　（阪井動かない）

弟　はは、隠してら。はずかしいもんだから隠してら。

お秋　何を言ってるんだよ、子供のくせに。早く行っておやすみ。

弟　姉さんは？

お秋　（立上って、扉を閉める）私も寝るよ。さあ、――沢ちゃんは？

弟　沢ちゃんは、何だか又下腹が痛いって苦しがっているよ。阪井さんは？

お秋　いけないねえ。じゃ、行って見よう。阪井さんは二階の納戸か便所だろ。心配しないでいいよ。

（弟の手を取ってやって、一緒に階段を昇りながら）

弟　それ、用心しないと、踏みはずすわよ、又、転げ落ちるわ、こないだの様に。いいかい。
大丈夫だったら。――姉さんの手は今夜ひどく冷たいねえ。
（二人階上へ消える、阪井動かず）
（電燈だけ明るい）
（間）
（扉の外（舞台奥）に三四の足音）
声　おい開けてくれ！　開けてくれ！　おかみさん、お秋ちゃん！　開けてくれ！　阪井君を出してくれ。阪井君を迎えに来たんだ！　開けてくれ！（扉を叩く音）
他の声　阪井、君が来てくれなきゃ、どうにもならねえんだ。君が来てくれなきゃ、俺達はおしまいだ。開けてくれ！（叩く音）おかみさん、秋んべ、おい、おい、おい！
（阪井は動かないで立っている）
女将（奥で眠そうな声）はーい、どなた、どなた、もう寝ましたから、明日にして――。
声　何を言ってやがるんだ。そんな段じゃ無えや。早く開けてくれ。（扉を叩く音）
――幕――

四　お秋の室

（六畳。（一）の沢子の室と同じ感じ。ただ（一）ではその左に三畳の間が続いていたのが、今度は右方にある。朝。
左手の窓から陽が差しこんでいる。
襖で立切った三畳は矢張薄暗い。そこに坐って封筒を張っている弟の姿がボンヤリと見える。紙の音の断続。その側にザッと正面を向いて坐っている阪井の姿。
六畳の方にはお秋と初子が抱き合って立っている。初子は顔をお秋の肩に埋めて、すがり付く様にしている。初子はたった今、外から入って来たらしい様子。少し取散した着物。断髪。短い間）
初子　――秋ちゃん。――秋ちゃん。――あたし、帰って来たわ。――あたしは、やっぱり、此処の人間だったのよ。――此処の人間だったのよ。――帰って来たわ。
お秋　――随分、心配していたのよ。馬鹿な真似でもしやぁしないかと思って、心配していたのよ。
初子　しようとまでしたんだけど、出来なかったわ――戸崎の内まで行ったんだけど、内の前まで行ったんだけど、どうしても入れない。――そいで、大川へ出たの。――大川の縁で、それから桟橋の方でも一

晩中ウロウロしていたの。――身を投げようと思って、水のわきまで行った。――それでも出来なかったわ。――そして、帰って来たわ。

お秋　ま、ま、いいわ。いいから、お坐り。

初子　ええ、ありがと。ええ、ありがと。

お秋　もう泣いちゃいやだわよ。いいの。

初子　泣かないわ。

お秋　さあ、坐らない、ね。

（二人坐る）

（短い間）

一体どうしたって言うの？――私、ゆうべ、町田さんと杉山さんが見えたんで、そりゃビックリしたのよ。だって、まるで思いもかけなかったんだもの？

初子　え、二人が来ているの？

お秋　いいえ、今、此処に居る訳じゃ無いわ。ゆうべ来て、二人とも初ちゃんを戻して呉れって言うのよ。

初子　杉山さんは、七首かなんか持っていなかった？

お秋　七首？　どうしたのさ？　じゃ、そんな――。

初子　ええ、それで、私達を以前から、おどしつけていたのよ。

お秋　そう、そんなに――。だけど、そんな事、何でもありゃしないわ。子供だましだわ。

初子　ええ、そりゃ私だって、今更、まさか子供じゃあるまいし、そんな物、こわくも何ともありゃしないんだけど――、それから、それ位のことで町田さんの家を出て来たんじゃないんだけど――。

お秋　どうしたのさ？　あんな、――あんなにまで無理をして一緒になった、あんた達がさ、――どうしてまた？――。大体、町田さんから聞いたには聞いたんだけど――。

初子　あの人は可哀そうよ。実家とは私のためにあんな事になるし。――それに、あんな身体で夜まで働きに行くんだもの。――あたし、それを思うと――。

お秋　――だって、そりゃ、好きな女と一緒に暮すために、町田さんが自分ですることだもの、あたりまえだわ。あたりまえとは言えないまでも、とにかく、それはそれでいいじゃないの。――それっぽっちのために、初ちゃんが、なにも――。

初子　ええ、それは、そんな訳から私、出て来たんじゃ無いわ。――あの人が可哀そうに思えたからって、それだけじゃ無いわ。それだけなら、私、飛び出したりしやしないわ。かえって傍にいるわ。――そうじゃ無いわ。それよりも、杉山が、それこそ、しょっちゅう内へ来るの。――どんなに引越しても、直ぐに捜し出してやって来るの。まるで蛇よ。

お秋　ええ、聞いた。

初子　そのたんびに、町田が苦労するの。私だって、どんな嫌な目に逢ったか知れやしない。――しかし、

それだけなら、いいのよ。あれから、六ヵ月余りもそれを辛抱したんだけど、それだけなら、私、一生でも辛抱出来たんだわ。――しかし、私考えたのよ。――私はもともと、そう、秋ちゃんと同じ様な、沢ちゃんと同じ様な女だわ。そんな女なんだわ。身を持くずした、仕様のない女だわ。――杉山が、私に町田さんと一緒になってからまでも、私に附きまとうのは、それは、勿論、杉山が仕方の無い悪で、金を取るためなのは解りきっているんだけど、しかしねえ――。

お秋　――。

初子　しかし。――私考えたわ。もしかすると、私だって同じ様な、杉山と同じ位な、いけない女じゃ無いだろうか。だからこそ、杉山が私にどこまでも、附きまとうて来るんじゃ無いだろうか。――それに、杉山だって、一言目には金々と言っているんだけど、心の底では少しは私のことを本当に思っているんじゃ無いだろうか。――そう思ったのよ。――そう思うと、私には、自分の正体がハッキリ解った様な気がしたの。私はやっぱり、いくら一生懸命になっていい人間になろうとしても、駄目だ。町田さんといつまでも一緒に居れる様に立派な女になろうと思っても駄目。――やっぱり、此処に、元の巣に戻って来る女なんだわ。それが一番自分の性に合っているのよ。そう思ったら私、悲しくって悲しくって――。（間）そこへ四五日前から杉山が宿り込みでゆするのよ。ああ言えば、こう言うし、どんな事をしても出て行かないの。私、何もかもわからなくなったんだわ。――杉山も町田さんも居なくなったチョッとの間に出て来たわ。――ねえ、秋ちゃん、私、これからどうしていいの？

お秋　――。

初子　言って頂戴。私、秋ちゃんの言う通りにするわ。どんな事でも秋ちゃんの言う通りになるわ。言って頂戴。――大川に身を投げなかったのも、命が惜しくなったためじゃ無いのよ。秋ちゃんや沢ちゃんに一目逢いたかったんだわ。

お秋　初ちゃん、――私にもわからないわ。

初子　そんな事言わないで、言って頂戴。私、秋ちゃんの言う通りにするから、言って頂戴。

お秋　又、泣くの？

初子　泣いちゃいないわ。ね、頼むから。

お秋　私にばかり、そんな事言わないで、初ちゃん、お前さん、お前さんは、どうしようと思っているの？

初子　それが解らないから、お頼みしているのよ。ねえ、私、どうすればいいの？

お秋　（振切る様に、少し邪慳に）そんな、そんな、私が神様じゃあるまいし、私にだってわかりゃしない

のよ。

（間）

弟　姉さん！　――姉さん！

お秋　（三畳に坐ったまま）――だから俺は言ったんだ。恵ちゃん、お前は黙っておいで！

弟　奴等はみんなを玩具にしやがるんだ。玩具にしたあげくに、おっぽり出しやがるんだ。みんなを、どうにでも出来るもんだと思い込んでいやがるんだ。畜生が！　畜生が！

お秋　黙っておいでと言ったら！

弟　だってそうじゃ無いか！　此方が命がけになっているのに、向うはどうして命がけにならないんだ。畜生！　俺の眼が開いていたら、俺の眼が開いていたら！　阪井さん！　阪井さん！　阪井さん！

（阪井は何とも返事をしない）

お秋　お黙りと言ったら黙らないの？　子供はこんな事考えなくていいんだよ。

（短い間）

初子　（突伏している）――秋ちゃん、――私はみじめだわねえ。――私達はみじめだわねえ。ほんとに。――秋ちゃん、それからね、私、もう唯の身体じゃ無いのよ。

お秋　え？

初子　来年の四月――四月には――。だけど、それが――

お秋　――？

初子　それが、秋ちゃん、――私にもわからないのよ。――あさましいわ。

お秋　――？

初子　本当に、あさましい――。

お秋　何がさ？　どうしてなの？

初子　私、恥かしい。――だって私にはどうする事も出来ないんだもの。仕方が無かったんだもの。――杉山がおどかして、無理に、とうとう――。

（間）

弟　（顔と手を見物席の方へ突き出してわめく）畜生め！　そいつだけじゃ無いんだぞ！　お前達の子だ！　そこに居る一人々々のお前達の子だ！　お前達の責任だ！　見ろ、お前達は、みんなして、こんな所に、こんな隅っこに、親父のわからない子供を生みつけるんだ。そして知らん顔をして見ているんだ。知らん顔をして見ているんだ。――あさましいのは此方じゃ無いんだ。あさましいのはお前達だ。お前達が恥知らずで畜生だから、こんなことになるんだ！　阪井さん！　阪井さん、どうかしてくれ！　なぜ黙っているの、阪井さん、どうかしてくれ！　ち、ち、畜生めが！（阪井は矢張動かないで坐っている）

お秋　恵ちゃん、お前子供のくせに何を言っているの！

弟　お黙り。
　――だって、そうじゃ無いか。杉山って奴は畜生だけど、彼奴一人じゃ無いんだ。杉山の様な奴は、杉山のほかに沢山いるんだ。どれだけでも居るんだ。
お秋　黙っておいでったら！（初子に）――それは町田さんのだわよ。
初子　ええ、そうは思っているんだけど――。
お秋　そう思っていなきゃいけないわ。そうなんだものそれで初ちゃん、私の言う通りにするの？
初子　ええ、――どんな事でも。
お秋　――ここに戻って来ることでも？
初子　戻って来るわ。もう私――。
お秋　そのままでも？
初子　ええ。
お秋　子供が生れたら――そうなれば、いよいよ、誰の子かわからないのよ。
初子　――しかたが無いわ。
お秋　生れたら、女の子だったら、又、私達と同じ様な此処の女になるのよ。
初子　あきらめるわ。――仕方が無いんだもの。
お秋　きっと出来るのね？
初子　ええ。――（泣く）
（間）
弟　畜生！　いつまで続くんだ！　いつまで続くんだ！　いつになったら、おしまいになるんだ！　何のためにこんなに、おしまいにならないんだ！
お秋　あ！（耳を澄ます。階下で男の声で何か怒鳴る音――）
（お秋、立って、出て行く――階段の足音）
（間）
弟　（尚も坐ったまま）初ちゃん！　初ちゃん！
初子　――（突伏している）
弟　初ちゃん、帰って来たねえ。
初子　（頭を上げて）ええ。――恵ちゃん。眼はいいの？
弟　初ちゃん、お前、どうしてあの男を、杉山と言う男を、刺し殺してやらなかったんだ。どうして刺し殺してやらなかったんだ？　どうして、黙って――。
初子　恵ちゃん、怒らないで頂戴。私がいけない女なのよ。いくじの無い女なんだわ。
弟　だって、悪いなあ、初ちゃんじゃ無いんだ。奴等が間違っているんだ。――俺にもハッキリとはわからないんだけど、だけど、悪いなあ奴等なんだ。奴等が悪いんだ。おぼえているがいいんだ。明日になったら、あさってになったら、その次の日になったら、又その次の日になったら、その時にゃ、――どうするかおぼえているがいいんだ。
初子　沢ちゃんはどうしているの？
弟　まだ寝ている。まだ寝ている。くたびれているん

初　子　だよ。
弟　病気だってね？
初　子　病気だ。——あたりまえだ。病気になるなあ、あたりまえだ。ここに居れば。——（足音——お秋が入って来る）
お　秋　初ちゃん。
初　子　誰か来たの？
お　秋　杉山が来ているわ。
初　子　一人で？
お　秋　そうだわ。
初　子　そして、どうだって言うの？
お　秋　お前さん、私の言う通りにするのね？
初　子　ええ、それは。
お　秋　するわねえ？
初　子　するわ。何でもするわ。
（お秋再び降りて行く）
（沢子入って来る）
初　子　ああ、沢ちゃん！
沢　子　初ちゃん！
初　子　あんた、病気だって言うんじゃ無いの。そんな、起きてもかまわないの？
沢　子　なあに、いいのよ。——私、先刻から、あんたが来ていることは知っていたんだけど。——何でも聞いて知っているわ。——あんたもいろいろ苦しいわねえ。
初　子　生れついているんだわねえ。——どうせ、どうなってもみじめな人間だわ。
（間）
秦さんまだ通って来るの？
沢　子　ええ。——
（間）
（足音——お秋と杉山が上って来る）
杉　山　（言いながら入って来る）嘘をつきねえ。嘘だ。そんな馬鹿なことがあってたまるか。そんな馬鹿な——（坐っている初子をヂッと見る）
お　秋　嘘だか本当だか、初ちゃんに聞いて見ればいいわ
杉　山　本当かい、おい、おい？
初　子　本当よ。
お　秋　ね、見るがいい。そして、それはお前さんの子だわよ。
杉　山　なにい？
お　秋　それに違い無いのよ。それに違い無いと初ちゃんが言っているのよ。
杉　山　何を言ってやがるんだ。町田がいるじゃ無いか。——そんな、おい、俺を甘く見て貰うまいぜ。
お　秋　お前さんは、そんなやくざだよ。自分のことを悪徒だと思って、悪徒づらしたって、私にゃわかっているんだよ。ただ何でも無いやくざだよ。——人を

杉　山　おどしつけたり、嫌味を並べたりする外に何も出来ないんだ。——お前さんは以前から、資本家がどうのこうのってえらそうな事を言っているんだけど、それがどうしたの？　そう言っているお前さんが、全体何をしたの？　何をしているの？——お前さんは、やくざなんだよ。

杉　山　何を言っているんだ。俺はしようとさえ思えば何でも出来るんだ。ただ、しないでいるだけだ。——俺がやくざなら、手前達は、ど淫売だ。

お　秋　それがどうしたの？　そうだよ。それでいいじゃないか。——それがどうしたって言うの？　これを見るがいい——。（着物を脱いで裸になろうとする）

沢　子　まあ、秋ちゃん、秋ちゃん！

初　子　秋ちゃん！

お　秋　見たきゃ見せてやるわ。私は淫売だよ。しかし、それをして自分で食っているのよ。自分の身体で食っているのよ。そうしなきゃ食えないからだわ——それがどうしたって言うの？

弟　（三畳に坐ったまま）畜生が！　畜生が！　ち、ち、ち、畜生が！

お　秋　（杉山、どうしたのか、急にうなだれる）何でも出来るんだって、何が出来るの？　何がお前さんに出来るの？

杉　山　（虚勢で）おお、何でも出来らあな。

お　秋　じゃ、初ちゃんのお腹の子は俺のだと言ってごらん。言ってごらん。

杉　山　べらぼうめ、（力無く）そんな、そんな、ペテンにかかってたまるか。笑わせやがらあ。

お　秋　じゃ、お前さんには、初ちゃんを追かけ廻したりする資格は無いのよ。——それから町田さんをゆすったりする資格は無いのよ。——そして、杉山さんお前町田さんをどうしたの？

杉　山　どうもしやしねえよ。

お　秋　——（間）杉山さん、（非常に真率に）お前さんこんな事をしていて、本当に、恥かしくは無いの？何でも出来ると言っている口の下から、初ちゃんなどを追廻しているのを恥かしいとは思わないの？

杉　山　——何を言ってやがるんだ。

お　秋　そうじゃ無いの？　お前さんには、する仕事と言ってはそれだけしきゃ無いの？　——ねえ、私達はこんな女なのよ。人が嫌って後指を差す様な女なのよ。誰もまともには相手にして呉れない女なのよ。

杉　山　それがどうしたって言うんだよ。

お　秋　どうもしないんだけど、話をしているんだわ。——そんな女なのよ。私だって初ちゃんだって沢ちゃんだって、——それから外にも、まだどれだけでも沢山いるわ。そしてね、杉山さん、それは、私達がこんな女であるのは、私達が好きこのんでなったんだ

と、お前さん思っているの？――私達はこんなにならないで、外のどんな立派にだってなれていたのを、ただ、私達が、自分でなりたがったから、こんなになったのだと思っているの？

（間）

　お前さんが、自分のする事もロクロクしないで、追廻して、いじめているのは、そんな女なのよ。そんな女だわ。――見たかったら見せてあげるわ。疵だらけで、みじめで、弱い、自分の命を少しずつ切りきざんで、やっとの事で生きている女だわ。――世間では私共のことを何とでも言うがいいのよ――私は世間から、いろいろ世話をやかれて助けて貰いたいとは思っていないわ。そんなこと言っているんじゃ無いのよ。私達がいなくなれば、誰かが又私達になるんだもの。――私達はただくじを引いただけよ。そして仕方が無いと思っているのよ。――しかし杉山さん。私達はお前さんの敵なの？　お前さんは私達の敵なの？

杉山　――誰が敵だと言ったい？

お秋　――初ちゃんは、やっと少しばかり、ほんの少しばかり、仕合せになろうと思ったのよ。――そして一生懸命になっているのを、お前さんは、どんな目に合せたのよ？――初ちゃんは身を投げて死のうとまでしたんだわ。

（間）

杉山　――俺は初子が好きなんだ。

お秋　好きなら好きの様に、じゃ、どうしてしてしないの？好きなくせに、どうして憎んでいる様にやって行くの？――私にはわかるのよ。お前さんはやくざだよ。やくざは、どんな事にでも嘘を言うんだわ。自分にだって嘘を言うんだわ。私は正直に言っているのよ――。

（間）

杉山　（力無く、しかし言葉だけは強く）へ、説教か。

お秋　私の言っていることが説教なの？　説教だと思うの？――杉山さん、説教をして私達に聞かして呉れるのは、本当は、お前さんでなきゃならぬ筈じゃないの？（永い間）
――沢ちゃん、あんたまだ寝ていなきゃいけないんじゃない？

沢子　ええ。

お秋　また、そんな、駄目よ。

沢子　寝るわ。（立上って去る）（間）

杉山　俺、もう、帰らあ。

お秋　え？　それで、さ、どうするの？

杉山　どうするって何だい？

お秋　初ちゃんをどうするの？

杉山　（虚勢で）べ、べらぼうめ、そんな自分の子でも

無えものをおっつけられてたまるか。

杉山　じゃ、初ちゃんを追かけ廻したり、これからしないの？

お秋　そんな事、俺が知るもんか。——だけどもねえ、お秋さん、俺だって男だぜ。どんな事だって、する時になりゃするぜ。——見ていねえ。俺がどんな事をするか、永い眼で見ていねえ。

杉山　見ているわ。——その時になったら、その時になったら——。

お秋　その時になったら？

杉山　私達は、あんたの事を、やくざでは無かったと思うわ。（短い間）

お秋　じゃ初子、さようならだ。（去る。——足音。——階段の中途から階下へ転げ落ちる響）

杉山　（立って奥の廊下に出て）どうしたの？　どうしたの杉山さん？　どこもけがはしなかったの？　大丈夫なの？（答無し）

お秋　（お秋室に戻る）（間）

初子　初ちゃん、もうこれでいいのよ。

お秋　だって私、こわいわ。

初子　何がさ！

お秋　だって、何をするか解らないと言っていたんじゃ無いの。

お秋　それは大丈夫。あれは町田さんや初ちゃんの事じゃ無いのよ。大丈夫だわ。（間）あの人だって本当は悪い人間じゃ無いんだわ。（間）ね、初ちゃん、あんたは、町田さんを本当に思っているのよ。そうなのよ。（間）

弟　姉さん！　姉さん！　下に誰か来ているぜ。え、姉さん！　俺にゃ聞えるんだ、誰か来ているぜ。

お秋　多分おかみさんでも起きたんだろう。

弟　そうじゃ無いんだ。おかみさんとは違うよ。

お秋　——。

（阪井がスッと立上る。しばらくザッと立っている。又坐る）（短い間）（青い顔をした町田が顔を出す）

町田　お秋さん、いるの？　お秋さ——（初子を見て）あ初子、此処にいたのか！

初子　——。

町田　捜していたよ。どんなに捜して居たか知れないよ。どうしたんだ？　どうしてまた——。

お秋　町田さん、あんた今、杉山と逢わなかった？

町田　ああ、そこで逢った。何だか下を向いて歩いていて、僕に気が付かなかったらしい。——ゆうべね、あれから、僕、ひどい目に逢ったよ。——彼奴又短刀まで出した。金を出せと言うんだ。出せと言ったって此方にもありゃしない。仕方が無いから、友達の所を駆けずり廻ってやっと——。それよりも、此処で彼奴どんな事を言ったの？　又、乱暴したんだ

ろう？——もっと早く来りゃよかった。やっと三十円ばかり拵えて、持って来たんだ。

お秋　もういいのよ。

町田　いいって、どうしたんだよ。初子、どうしたんだよ？

お秋　それよりも、町田さん、初ちゃん、子供が出来たのよ。

町田　え、なに、何だって？

お秋　子供が生れるんだわ。

町田　そりゃ、本当かい？　本当かい、初子？

初子　ええ。

お秋　そしてねえ、町田さん、それが、あんたの子供だかどうだか、わからないのよ。

町田　そんな事があるもんか。——僕の子だよ。

お秋　誰の子だか解らないよ。

町田　馬鹿な！　何を言っているんだよ。僕の子だよ。無論僕の子だよ。——そうか。

お秋　じゃあんたの子だわ。

町田　何を言ってるんだねえ。——そうか。よかった、変なことにならなくってよかった。——ああ本当によかった。お秋さん、ありがとう、ありがとうございました。ほんとに何と言っていいか——。

初子　秋ちゃん、ほんとにありがとう。

お秋　——赤ん坊は町田さんの子供だわ。子供なんてものは、私、そう思うわ、俺の子だと考える人の子だわ。自分の子だと思う人のものだわ。

町田　何だよ？

お秋　いいえ、何でも無いわ。

初子　もし赤ん坊が生れて大きくなったら、そう聞かしてやるわ。秋ちゃんのことを——。

お秋　そんな事、ごめんよ、私。——初ちゃん、これからも、ねえ——私何と言ったらいいだろう。チョイと言い方がわからないんだけど、——地びたばっかり見ちゃいけないのよ。いつも地獄の方ばかり見てはいけないわ。——世の中には面白い事はいくらもあるものよ。——杉山さんなぞを怖がる気持が此方にあるから、おどかされもするんだわ。

初子　わかったわ、秋ちゃん、わかったわ。

お秋　ではもうお帰り、早く帰って頂戴。——そして、初ちゃん、これから、どんな事があっても、町田さんを離れるんじゃないのよ。此処へ戻って来ちゃいけないのよ。私を思い出してはいけないのよ。——ね、こんな所に来ちゃいけないのよ。杉山はもう大丈夫だわ。

弟　畜生！　こんな所に来ちゃいけないんだ。誰も来ちゃいけないんだ。これから、誰一人だって来ちゃいけないんだ。

町田　どうしたんだい？

お秋　なあに、あれは何でも無いわ。――さあ、早く家へ帰って頂戴。

初子　だって秋ちゃん――。

お秋　まだこの上に何を言う事があるの？　早くお帰りよ。早く、さ。

町田　じゃ、お秋さん、僕あ、何と言っていいかわからないんだけど――。

初子　じゃ、秋ちゃん、あんた身体に気をつけてね、私これで帰るわ――。（二人お辞儀して立上る）じゃ――。

お秋　もう、来ちゃいけないわよ。
（二人去る）（お秋ボンヤリと坐っている）（間）

阪井　（三畳に坐ったまま）おい、秋ちゃん――

お秋　なに？　どうしたの？

阪井　お前は先刻疵だらけだと言ったね。

お秋　え？　え、そうよ。見せてあげたっていいわ。疵だらけだわ。（微笑して）疵だらけになって、やって来たんだわ。生きて来たんだわ。なあに、これからだって――。

阪井　――（低く唸る）

お秋　どうしたの？　工合でも悪いの？――どうしたのさ？（立とうとする）

阪井　よし！　行ってやる！　行く！（立上る）なあになあに、なあに！

お秋　どうして？　どうしたの？　どこへ行くの？　まさか――。

阪井　俺を笑ってくれ。お前は俺を笑ってくれ。俺みたいな人間はお前から笑われなきゃいけないんだ。俺は本部の連中の所へ行くんだ。

お秋　ま、行くの？　行ってくれるの？

阪井　俺にはお前と言う女が今やっとわかった。行くよ。なあに、たとえ俺が死んだって、死んだって、俺達は勝って見せる。

お秋　（立って三畳の方へ出て）そう、勝って、帰って来て頂戴。どこまでも、どんなことがあっても――私達は待っている。

阪井　待っていてくれ！　喋って喋って喋りまくって、切りくずしなんか叩き伏せてやるんだ。待っていろ、勝ったら連れに来るから待っていろ。畜生！
（走る様にして出て行く）

弟　（腕を振り廻して）ああ、ああ、ああ！　行った行った、勝て！　阪井さん勝て！
（お秋ヂッとして涙ぐんでいる）
（遠くの方から非常に多勢の人間の騒いでいる声が聞えて来る）（間）（窓の下の空地から男の声が呼ぶ）
（お秋窓の方へ立つ、空地を見下して）

お秋　おや、秦さん、どうしたの？　本部から来たんだって？　阪井さん？　阪井さんは、たった今行ったって？

秦の声　のよ、ええ本部へ――。

に、俺阪井さんを迎いに来たんだ。――今みんなが――へ行く所なんだ。スッカリ騒ぎがひどくなって――の奴等がやって来た――から押して行くんだ。もデモだ。なに、俺も今日から本部に詰めていた。もうボヤボヤして居られなくなった。頼むよ、沢ちゃんとこへも暫く来れねえ、頼むよ――。

お秋　それがいいわ。大丈夫。しっかりやって頂戴。

（人々の騒音が次第に近づく）

秦の声　来た、来た、来た！　見えるか秋ちゃん、阪井さんが皆の中で何か言っている。さよならだ。

お秋　そう、此処からは見えないけど――。

（人々の騒音が次第に近くなり、暫くして町角をでも曲ったらしく、ワッワッと言いながら今度は段々遠くなる――お秋と弟はヂッとそれを聞いている）（間）

弟　やってるね、やってるね姉さん！　俺も行きたいなあ！

お秋　（微笑して）何を言っているんだよ、盲のくせに――。（フイと気を変えて）さあ、もうそろそろお湯でも使っとかなきゃ、間に合わないぞ。

弟　姉さん！

お秋　あいよ。

弟　姉さんは、もうお化粧をするのかい？

お秋　だって、もうおっつけ、お昼だよ。

弟　今日は止せよ。今日は止しておくれよ。

お秋　だって、お客が来るんだからね。

弟　――姉さんは、いつでもお化粧をするんだね――お客だ！　貴様達だ！（薄暗い中で、見物席に向って、紙を切るためのナイフを手に持って突出しているのがギラギラ見える）貴様達だ！

声　（階下から女将の）秋ちゃん！　秋ちゃん！　何をしているんだよ！　秋ちゃん！　サッサとして呉れなきゃ困るじゃないの！　お客さんが見えているのよ、秋ちゃん！

お秋　はあい！　恵ちゃん、又、馬鹿を言っているわね。

弟　畜生が！　畜生が！　外道奴！

お秋　そんな――（微笑）そんな物騒なことを言うあんまさんなんて、あるもんじゃ無いわ。――そんなあんまに誰も肩なんかもましてくれやしないわよ。

（短い間）

弟　――姉さん、俺が一人前になったら、そしたら、姉さんは黙ってりゃいいんだ。俺が稼ぐ。それに、あの人もやって来てくれる。――くそ！　やれ、やっつけろ！　阪井さんは、こわい様な人だけど、本当はやさしい人だ。――その時にゃあの人の事を俺は兄さんと言うんだ。

お秋　（微笑）――又言ってるよ。馬鹿だねえ。

声　（階下から女将）秋ちゃん！　お客さんだよ、秋ちゃんてばさ。

お秋　はーい。さあ忙しいぞ。

弟　そうなったら、あん畜生！　そうなったら、俺、姉さんの肩をもんでやるよ。ね、姉さん。

お秋　ああ――そうなったら――もんで貰うわ。（身じまいをする）

弟　そうなったら、――そうなったら。

（お秋、手廻りのものを片附けながら、静かに微笑している）

お秋　そんな事をグズグズ言っていないで、仕事をおしよ。（階下へ）はーい、ただ今。

（やがて三畳の紙の音）（間）

――幕――　（一九二八、六）

（一九二八年八月―一一月「戦旗」）

豪雨

立野信之

一

おれ達の兵卒仲間にこんなのがいた。

T川通いの蒸汽船の火夫で、文字はろくすっぽ読めないが身体ですることなら何でも生真面目にやって退ける――並木伊平ってのが、そいつの名前だ。いや、こんなのは並木一人ではない。実に多くウヨウヨといたもんだ。

入隊当時の俺達は、ホンの寄集めの数にすぎない。百姓には執拗な土と肥料の色がしみ込んで居り、海からやって来た奴は潮と太陽の匂いを放っている。工場の中から出て来た奴は、その青白い額越し上官を見る癖を持っている。店員には化粧品の香りが附纒ってい、その上悪いことには商人口調で、上官の質問に答えた。そこで、軍隊は個々の兵卒を新らしい組織数とする為めに、言語と動作の矯正から訓練しはじめる。

た。
　朝、四角な営庭には一面にかびのような霜が密生してい
　俺達は営庭へ引出される。監視人は、少尉一（教官）、下士五、上等兵一〇、——俺達はグルグル廻りをはじめる。操人形の様に高々と歩調をとり、いつも同一線上を行進する。歩く練習なのだ。之を見た者は、恐らく囚人の運動を連想することが出来る。なぜなら、グルグル廻りをやっている俺達のこころは、囚人のようにみじめであったから……。
　と、一人ずつ列から呼び出される。兵卒上りの少尉が、ひどく端折った口調で号令をその兵の足元に投げつける。
「駈け足！」
　その兵は拳を固めて胸のところに持って行き、間違いなしに左足から踏出すことに懸命な注意を払って駈け出す。二十米突を駈けると、教官の位置から八歩手前に止る。急に止ろうとして、その兵はギゴチなくふらふらッと前のめりになる。と、礫のように号令が飛ぶ。
「やり直し、元へッ！」
　赤くなって、再びその兵は元の位置から人力車夫の空駈けを始める。そして再び、八歩手前に止る……手を下す……敬礼……と、また花火が爆発する。
「手の下し様がいけない。やり直し！」
　次には、
「敬礼がいけない。やり直し！」
　その次には、
「眼をつぶった。やり直し！」
「溜息をついた。やり直し！」
　——で何回目かにようやく自分の官姓名を呼称する。有りったけの声で、動作と同様ハッキリと節度をつけてやる。ところが、それまでには、俺達は精力を消耗しつくしている。脚の筋はけいれんを起し、のぼせ上った眼は一つの形をその儘に映す気力を失っている。そればかりではない、肝心なことは、屈辱で胸が詰っているんだ。糞！で、怒鳴る。
「りく……ぐん……ほッ……」
「もう一ぺん。やり直し！」
「……陸軍……歩ッ……へッ……」
「いかん！」
「……陸、軍、歩兵ッ……」
「駄目々々！」
　少尉は手をふって、兵を元の位置に返してしまう。
　ところで並木伊平は、駈け方がすこぶる不味かった。変に腰を落し、脚を彎曲させて船べりをかけるような恰好で走る。……教官はいい名詞を投げつけた。
「猿！」
　全く並木の恰好は、ゴリラが立ちあがったようだった。奴は垂れ下った赤い頬を火達磨のように脹らませ、帽子の縁から流れ出る汗を嘗めずりながら、懸命に駈ける。何回

かの駈け通しと何回かの呼称のやり直しの後、ようやく官姓名を怒鳴った。奴は野方図もなく大かい声でやって退ける。

「陸軍歩兵……二等卒……並木……伊平ッ！」ところが、奴はウマク行った呼称の尻に、妙なものをぶら下げて了った。「……で、あるまし……！」

教官は噴き出す代りに、眼を怒らせた。

「もう一度！」

で、再び並木は野方図もない声で――だが、おずおずとやり出した。

「陸軍歩兵ッ……二等卒……並木、伊平……」此処で、奴は額越しにそっと教官の顔を盗み見た。「……で、あるまし！……！」

「何か、そのあるましは？」

「はア？」

「……あ、り、ま、す、なのか？」

「そうであるまし！」

教官は短い口髯を噛み、手をふって並木を元の列に返した。

鎖の様な列の中にいて、俺達は自分の感情を殺す為めに頤を引きつり、胸を張り、眼を前の奴のぼんの窪に突き刺し、高々と歩調を執って歩いた。兵列の歩調を監視する為めに、所々に案山子のように立っている下士が、周章て手を口に持って行った。その白い手の間から、涌上る息が音を立てた。

「ぷふッ…………」

急に、下士は、固い表情に顔を硬ばらせると、鎖の列に向って怒鳴った。

「もっと節度をつけて手を振るんだ！」

歩きながら俺達は、少しでもだらしなく笑おうとした下士を、横目で憎悪した――何を笑いやがるんだ、金条（きんすじ）を肩へ載っける前の手前は、あんなふうじゃなかったとでも云うのか、間抜けめッ!!

その動作はひどく鈍く、その上物言いは舌足らずだったが、その代償を、並木は身体でやって退けていた。どんな場合に置かれても彼奴は真面目で押し通した。それだから、軍隊生活の単調さに倦んだ二年兵の、下士の、或る時は将校のさえもの、気紛れのお対手をさせられた。二年兵が、到る所で並木を呼びつけ、下士を真似た。

「並木。ちょっと来い！」

「はッ。」何で呼びつけられるのか分らないで、奴はあたふたと近付いて行った。

「貴様、お袋の子か？」

「はア？」奴は白い泡の浮んでいる眼をパチクリさせ、やがてゴクリと唾を嚥み込んで答える。「そうであるまし……。」

別の二年兵が彼を捕えて訊ねた。

「並木、貴様は馬車曳か――？」

面食って一層早く眼をしばたたき、困ったような表情で顔を曇らせ、やがて答える。
「蒸汽の火夫でし！」
「何だって？　ハッキリ云うんだ！」
「蒸汽船の火夫であるまし！」
「本当か？」
「はい、ふんとであるまし！」
中隊から風紀衛兵が出ると、初年兵は勤務兵の弁当運びをやらなければならない。之はイヤな役目だった。なぜって、この勤務兵には二年兵の無頼漢が多く、弁当運びの初年兵は絶えずおどかされた。並木の戦友はよく衛兵に当った。だから並木は始終、弁当運びで苦労しなければならなかった。
なんだって、並木の戦友は始終、衛兵に当ったか。そいつは簡単な理由だ。彼の戦友は愛すべき呑み助であった。木工卒で、物置小舎に似た工場でいつも昼寝して居り、日曜日には一つ星の真新らしい肩章のついた第二装乙軍衣袴を着込んで外出としゃれた。が、いつも夕食ラッパと一緒に営門坂を蟹のように拡って上ってくる。
勤務は神聖だ、と軍隊は教育した。「名誉」でさえあると。それだのに勤務は——例えば炊事、機関庫、中隊、大隊その他の当番卒、衛兵、倉庫や土工の使役等々は、多くの場合は懲罰の手段であった。殊に風紀衛兵は辛い勤務なので、その手段として有効である。謂ば勤務兵は、名誉ある懲罰兵であった。彼等は屈辱で感情が歪められている。だから、自分より無力な初年兵をいじめつけて、それで幾分自分を紛らわす。
そこへ付け込んで、他の奴が自分のいやな仕事を奴に押しつける。
「並木……持ってって呉れ、な！」
並木は引受けた二三人分の飯盒をぶらさげ、営門坂を下って行く。営兵所は営門の脇にあった。入って行くと、二年兵はいきなり号令でおどかした。
「敬礼ッ！」とそいつは並木を将校に見立て直立敬礼した。
すると、並木は困った。彼はすっかり面喰っちまい、飯盒をぶら下げた右手を慌てて軍帽のへりに持って行こうとした。その面喰った様子は退屈し切っている衛兵に、からかう機会を与えた。
「そんな時にはな、これ初年兵！」瞼に傷痕のある二年が、教えた。「左手で敬礼するんだ。左手で……貴様、要領が悪いぞ！」
並木は邪魔物を左手へ移し、改めて敬礼すると、固くなって云った。
「瀬沼古兵殿と林上等兵殿の弁当を持って参りました！」
「瀬沼？」面の小さな唇の赤い小柄な兵が云った。「糞門に立ってるから持ってってやれ！」
並木は持って行こうとした。すると、弾薬盒に手を置い

て黙って見ていた上等兵が扉口を指し、突然怒鳴った。
「内へ入れとくんだ。馬鹿！」
或る時は、また敬礼の仕方が悪いといって不動の姿勢を執らせられた。
「気をつけ！」そいつは下手な号令をかけた。「廻れ右！」
尻を突出し、胸を張って並木は各個教練の時のように、節度をつけてやった。
「前へ進め！」
彼は歩調を取って歩き出した。バクバクな営内靴は足を上げる度に落ちようとした。そいつを落すまいとして、坂を高々と歩調とって上るのは、あらゆる困難なことに負けを取らない。そしてその様は、あらゆる滑稽な仕草を凌駕した。と、後から号令が追いかける。
「駈け足！」
並木は一目散に坂を駈け上った。

二

第一期の検閲が終った。
俺達は新らしい兵卒階級であった。屈辱と――ビンタと銃の台尻とが、俺達を一人前の兵卒階級に組織した。俺達は、実弾を手渡されれば、六百米の距離で間違いなしに人間の胸板を撃ち抜くことが出来、闇の密林を忍びやかに前進して敵の前哨線の位置を偵察し、犬の様に自分の歩いて行った道を迷わずに帰って来ることも出来た。
それだのに俺達は、牛馬よりもみじめな位置に蠢めいていた。教官が正しく合理付けた。
「お前達は軍隊の最下層階級である。だからお前達以外の者は、一人残らず上官だ！」
そこで到る所で、敬礼、敬礼、敬礼、敬礼……二年兵も亦上官であった。で、俺達は入営すると三日目から、自分達の分身であるにすぎない二年兵の食器を洗ってやり、汚れたシャツや猿又を自分の寝台の下にかくして、「起床」一時間前に毛布の状袋を抜け出して、古兵共の快い朝の熟睡を妨げないようにと、あらゆる努力をはらってこっそり二挺の銃を磨くことを覚えた。そして、押しつけられた初年兵の仕事の過多は、俺の睡眠時間をさえ削り減らさせた。若しもこんな状態が初年兵にとって当然だとしたら、この上何を云うことがあろう……。
俺達の仲間から、優秀な奴の引っこぬきが始った。上等兵候補者である。
班では二年兵がおよそのところを云った。
「俺ア班じゃ、五人候班（上等兵候補者）が出るなア……殊によると六人かも知れねえ。去年は六人出た……」
それから又云った。
「あの野郎は横着だが、何しろ頭が有るかんな。」
その二年兵は喇叭手で、漁師であった。
二年兵共は勝手な評価をつけて、自分で楽しんだ。決し

て名前は指摘しなかったけれども、あいつが誰であるかは誰にもすぐ知れた。が二年兵は態々秘密にすることによって、自慰的なあるものを感じ合った。そして奴等はうそぶいた。「分ってるさ。そんなこたア！」
次の時には、恐らく誰が考えたって候班に入れそうもないボンヤリな奴を捕えて、結局は自分への慰さめにすぎないような慰め言を他愛もなく喋っちまう。
「一般兵の方が何ちたって楽でいいよ！」
すると、言われた初年兵は急にドギマギと赤くなり、そっと自分の寝台をはなれた。
或る日、一人の二年兵が晴天の霹靂のようなことを齎らして来た。その兵は中隊事務室から飛び上り飛び上り喚きながら駈け込んで来た。
「号外……号外……天下の一大事だア！」
寝台の上に抱き合って寝転んでいた上等兵と一等卒の二年兵が飛び起きてた。
「何だ何だ！」
それから、真赤になって暴れ廻っている号外兵を二人で捕つかまえ、寝台の上に放り上げると、両方から寄って手足をおさえつけた。
「野郎、中味を吐き出せ！」
四本の万力のよう腕の下で、小柄な二年兵は身をもがき呻めきを挙げた。次第に阻まって行く息の下で、奴は早口に中味を吐き出した。

「並木伊平……じょッ……上等兵、候補……者と……なあるッ……放せ！」
締めつけていた手が放れると、奴はゴム仕掛けのように寝台から飛び退いた。そして銃架の影で濡れた睫毛をこすると、溜息をついた。
首の短い赤ら顔の二年兵が、寝台の上から鎌首を擡げて呟いた。
「並木が？　うへえッ、でんすんばすら（電信柱）に花が咲くぞ、これ！」
当の並木伊平は、班の何処にも見えなかった。彼は点呼が終ると間もなく、呼びに来た中隊当番に連れられて、特務曹長の室に行ったのだ。特務は士官勤務をとっていた。号外屋の二年兵は特務の当番卒だった。彼が靴磨きと毛布ゆるめの用を兼ねて這入って行くと、素裸の特務の前に並木が首垂れていたというのだ。そして、上等兵候補者の中に加えたから一層ふんばつしてやらなければならん、という特務の宣言に並木はすこぶる弱りきっていた。しばらくはブルブルふるえて口も利けないでいた。やがて、唾を嚥込むとおずおずと云った。
「……並木、つとまりません！」
すると特務は待ってたように爆発した。
「馬鹿！　つとまらんとは何事だ。貴様は軍人ではないのか！」
「はい、軍人であるまし！」

「じゃ、やれんことはない！」
「……特務曹長殿、並木は字が読めないでし！」
「字が読めん？」特務は一寸面喰った。が、酒が彼を裁断家にした。「よろしい。字は読めんでもよろし。戦争の役には立つ！　肝心なことは貴様が、やり通すという軍人精神を常に持っていることだ。」
並木は長い間黙り込んで俯向いた眼をチロチロ動かし、口なめずりをし、胯にあてた指先きで、軍袴の破れた縫目を弄っていた。が、やがて吃りながら云った。
「それじゃ……並木……や、やって見まし……！」
云って了うと並木は真っ赤になった。
靴を磨きながら見ていた号外兵は堪らなくなって飛び出して来たのだ。奴はポケットから特務私用の靴掃毛を取り出すと、頭の上に高々と差し上げて喚き立てた。
「……や、やってみまし……と来やがったぜ！」
並木が汗ばんでボンヤリと這入って来た。
「来たッ！」と隅っこの奴が叫んだ。「胴上げッ！」
寝台の上に這い上って甲羅をならべていた海獣共は一斉に寝台を飛び下りると、いきなり並木に飛びかかった。乱抗のような腕の中で、並木は身もだえ、手足を宙に泳がせた。二三度、並木の身体は宙に舞い上り、落ちた。
「並木上等兵……ばんざあいッ！」
並木は寝台の上に放り出された。鉄の寝台が二吋ほど凹んだ。と、割れ返る拍手と哄笑の中を、並木は真ッ赤になってコソコソと逃げ出した。
俺達は自分の寝台のまわりをウロつきながら、笑えない気持でその光景に眼をやった。
おれ達は、ハッキリと覚えてる。——並木が戦友の食器を洗面所で洗ったという、たったそれだけの理由で、週番上等兵から跛を引く程蹴あげられたことを。襦袢(シャツ)の汚れをよく洗わないで（洗っても落ちないのだ）修理に出したといって、縫工卒はいきなりビンタを喰わした挙句、その襦袢の破れ目に首を突込ませて、四つん這いにして各班を這い廻らせたことを……それから……否、止めよう。若し一々書き上げたら、原稿紙数百枚を使用しなければならないだろう。……それらの私刑(リンチ)は、並木ばかりでなく、俺達初年兵全部に通ずることであった。——全く、俺があいつで無えってことは言えないこった。——俺達は辱しめられている兵卒である。
消燈後、私は暗闇の遊歩地で並木と落ち合った。俺達はホンの少しばかりかくれた秘密を楽しもうという魂胆だった。点呼前に買って置いた大福を食う為めに、並木が私を誘ったのだ。私は別に酒と味噌パンとを崖の下にかくして置いた。秘密の個所は手探りですぐ知れた。
俺達は椎の根元に蹲って、大福を食い酒を呑んだ。地肌からは虫けらの匂いがしていた。並木が息をはずませて云った。
「俺あ、どうしてん、候班に這入りたかあねえんだけんど、

……止めると、倘辛れえそうだな……？」

びんから切りまでおどおどしている並木を感じて、私はいらいらした。何か云ってやりたい衝動を覚えた。が、結局は云ったところでどうなる、という気がして、私は押黙ったまま立ち去った。私が洗面所で水を呑むと、並木も呑んだ。二人は別な階段からこっそりと這い上り、寝床に潜り込んだ。

三

候班が編成され、特別教育が開始された。彼等は「起床」一時前に寝台を抜け出し、洗濯をし、四足の靴と二挺の銃を磨いた。朝の点呼には銃剣術の防具をつけて出た。点呼から朝食ラッパまで、重い防具と木銃に操られてヘトヘトになった。間稽古を終えて、ガタガタと階段をかけ上ると上側の干乾びたメシに飛びついた。が、過激な労働は肉体に熱を植え付けた。熱は不味いメシを拒んだ。それで水と一緒にメシを胃袋に流し込むと、放り出されてある飯ビッや臭い残飯バケッを持って炊事場へ飛んで行った。炊事場には週番上等兵が頑張っていて、蠅の糞程の汚れも容赦しなかった。幾度も洗い直させた。

濡れそぼって帰って来ると、すぐ整列だ。遅れると、連隊の周囲を早駈け競争させられた。演習中にはひっ切りなしに候班集れ！　そんなことで上等兵になれるか貴様!!

並木は銃剣術が何より不味かった。彼奴は脚を彎曲させ変に腰を落して、妙な音声を発しながら、よろめいて突きかかって行く。で、教官の伍長は木銃を逆手にふり挙げて嚇した。

「もっと思い切って突進するんだ。思い切って……」

それから自分の左胸を叩いて云った。

「此処をねらうんだ。突けッ！」

「ひやあーッ！」

並木は懸命に突きかかった。が、木銃の先は致命部に触れないで斜に肩を越えて流れた。再びやった。が、外れた。三度、四度、五度、六度……十度……並木の声は切れぎれになり、面の鉄棒から見える顔は青ざめ、一度より一度、力が抜けて行き、倒れてしまいそうに思われた。

「何をやってるか、貴様はッ！」

よろよろと突きかかって来る木銃の先きを、伍長は素早く外らした。はずみを食って並木は、泳ぎ出した。と、木銃の台尻が呻りを生じて並木の腰に打ち下された。並木は腹這いにつんのめり、重い面はコンクリートの堅い地面を噛んだ。

「見ろ！」重い飯ビッの片方を持った合棒の兵が囁いた。

「ひでえことしやがる！」

俺たちは飯運びの列の中にいて、通りすがりに倒れた並木を見た。並木は仲々起き上らなかった。多分起き上れないだろう。が、俺達は勿論起しに行くことも出来ない、ば

かりでなく立止って見ることとさえ出来ない。
俺達は二階へ駈け上った。そして窓から、並木が起き上るかどうかを見ていた。二年兵が憎悪の言葉を吐いた。
「あいつはくっちゃみ(蝮)だ!」
私は、並木が腰骨を挫いたであろうことを確信した、左もなくば頭を堅い地に叩きつけたので脳震盪を起したであろうことを。そしてひそかに、そうであることを希った。なぜなら、そうであれば伍長は処罰されるだろう。奴を懲りさせるいい機会だ……!?
が、この消極的な私の考えはすぐ消えようとした。並木が長いことかかって自分の力で身を起しはじめたからだ。が、私は並木から眼を外らさねばならなかった。二年兵が突然私の耳を引っぱった。
「何を見ているんだ、印度人めッ!」
朝食後私は、イヤな飯ビッ納めをずらかる為めに、便所の中へ入った。ゆっくりと糞便することは快かった。私は可成り永い時間を同じ恰好で過した。が、食器納めを完全にずらかる為めにはもっと長い時間が必要だった。で、私は楽書を読みはじめた。
「特務曹長オボエテロ——ワラノの人形に五寸釘——」
「宮地中尉は助平で、いつも当番卒のお××をねらっている。気を付けろ」
「嗚呼、思イハ父母在マス郷里ニ……」
「軍隊は泥棒の養セイ所也!!」
「×営か——死か?」
多くは鉛筆や爪で書いてあった。私はいつの間にか声を出して読んでいたのだ。
「高木!」
突然、隣の内部から呼声がした。
私は肝をつぶして、自分の声を噤んだ。身動きもせずにいた。と、再び
「高木じゃねえかア……?」
私はホッとした。並木だった。私は汚れた板壁に向って云った。
「……びっくりさせやがって、畜生め! どうした!」
「なぐられてな……腰が疼んで動けねえや……高木、こっちにも書えてあるぞ……、な、オレハアイツヲコロシテシニタイって……」
私はなぜか、それは並木が書いたにちがいない、と思った。で、何日かの後に、ふと思いついて入ると、それらしい文字が片仮名で判り難く書かれていた。今でも私は、それが並木の手になるものだ、という気がしてならない。
だとすると、並木はM伍長を×そうとまで考えただろうか。或は考えた、否、考えずには居られなかっただろう、が、×すことも出来ないで、彼は×されて了ったのだ。
並木はその日演習に出る前に、事務室へ入って行った。彼は特務曹長の前に立った。そして、どうしても上等兵候補教育はつとまらないので、止めさせて呉れるように願い

出た。すると特務は軍隊流な眼つきでジロジロとやり、訊ねた。
「何処が悪いか、貴様？」
「はあ？」並木はぼんやりと答えた。「――何処も悪くありません」
「そんならつとまらんことは無い！」
「銃剣術が出来ないであるまし……それで……」
彼は口籠った。すると、急に特曹の白い手が胸板に伸びて来た。
「彼方へ行け。うるさい!!」
彼は胸を突かれてよろめいた。最早、取りつく術も無かった。彼は事務室を出た。
その日の午後、斜陽と埃を浴びて演習から帰ると、伍長はふれ渡した。
「候班は夕食後、間稽古に集合！」
すると、息もつけない多忙が候補者達を捕えはじめた。彼等は二十日鼠のようにめまぐるしく駈けずり廻り一つの仕事から他の仕事へ飛びついて行った。
私は並木を呼び止めた。
「出るんか？」
並木はぼんやりと答えた。
「出なきゃなるめえ！……」
そして彼は重い古ぼけた面を抱いて降りて行った。間もなく私も使役に引き出された。営門坂の道路掃除である。

その仕事を終えて帰ったのは、もう電燈のつく頃だった。だのに、候班はまだ木銃で鞭打たれ、悲鳴をあげていた。
「やあーッ……やあーッ……やあーッ……」
中隊の入口で、同年兵の一人が、私に告げた。
「並木が死にかかってる！」
私は板金張の階段を一足飛びに駈け上つた。寝台の前に兵隊がたかっていた。私は近付き、他兵の肩から覗き込んだ。悲鳴に似た呻き声が私の心臓を硬ばらせた。並木は寝台の上に手足をおさえられて、激しく身もだえしていた。
「あッ……いたッ……たッ……あッ……！」
顔の丸い二年兵が硬い表情でぼんやりと云った。
「腹が痛いって、あがって来たんだぜ？」
軍医がやって来た。それまで纏っていた防具が、取り除かれた。その時には最早並木は弱っていた。赤かった彼の顔には、蒼い斑点が見え出した。
軍医は白い手で腹を撫でながら、M伍長に向って訊ねた。
「どうしたのか？」
伍長は青ざめた顔をあげて答えた。――俺のせいじゃない……？
「分りません。稽古中に突然腹痛を訴えて出たのであります！」
「馬鹿。そんなぼんやりで教官が出来ると思うか。腹を突かれたんだ、腹を！」
そしてすぐ担架で病院へ運ぶように、中隊付の看護卒に

命ずると、そそくさと出て行った。出がけに軍医は営庭の鳥の群れを指さして伍長をたしなめた。
「あれには誰かついてるか？」
「はッ！」
伍長は軍医の前を駈抜けて行った。
並木は担架に載せられると、又一しきり激しく苦悩しはじめた。が、その苦悩さえも永くはつゞかなかった。もう気力が失われているのだ。そして次第に息が切れて無くなりそうであった。
病人は営庭を横切って行った。
病院に着くと、腹部の切開手術が行われた。三等軍医正の小柄な副院長が執刀した。
並木の戦友が青ざめて帰って来た。みんなが彼を取巻いて様子を訊ねた。彼は白ちゃけた唇をふるわして話した。
「腸に二銭銅貨位の穴が二つも開いてたそうだ。その穴に夕めしに食った芋の皮がへばりついていたって、看護が云ってたよ。」
戦友は公用証を持って、電報を打ちに出かけた。
消燈後、二年兵の喇叭卒が近寄って来て、私に囁いた。
「並木の野郎……助かるめえな？」
「助かるもんか！」
私は強く云うと、一寸テレた。二年兵に向って同僚のようなぞんざいな口の利き方をしたもんだ……。
俺達の間で、誰が加害者であるかが問題となった。並木の対手になったのは三四名あった。が、誰も下突はやらなかったと主張した。事実初年兵には下突はウマク出来ない時期だった。ただ有力なのは、M伍長が稽古最中に、並木の不味い突進の仕方に怒って、腹部を強たか突いた。という説である。が、云い掛りになるのを怖れて、誰もハッキリ主張しようとしなかった。

四

九日の間、並木は生きていた。その間中、中風でヨロヨロな彼の父親が、椅子に腰かけて意識のない病人を見戌っていた。
四日目に、私は並木の病室へ行った。特務曹長が、並木の父親を呼んで来いと命じたのだ。私が用件を告げると、父親は濁った眼でちらり病人を見、それから黙って腰を上げた。が、うまく起てないで父親は私の肩に骨ばった掌を置いた。
「中風が出まして……」父親は力のない声で訴えた。「自分の脚が、自分で自由にならねえでござんす……はい。」
父親は憔悴し切っていた。丈が高く骨組は立派だが、その骨組を包んでいる皮膚は醜くたるんでいた。
私は特務曹長の官僚的な態度を呪った。――なぜこんな病人を中隊へ呼びつけなければならないのか。父親は何か悪いことをしたのであるか？　だが、私は別なことを不幸

な父親に話しかけた。
「……飛んだことになりましたなア！」
　父親は黙って頭を下げた。それから垂れ下る鼻汁をすすり上げた。
　五日目の晩に、父親は電報を受取った。父親は字が読めないので、看護卒が読んでやった。それにはこう書いてあった。
「コド　モウマレタワルイシラス」
　読んでやった看護卒が訊ねた。
「誰が子供を生んだんです？」
　父親は唇をふるわせて云った。
「儂の嫂……でがすよ……」
　看護卒はそっと室を出た。そして兵舎へ入ると仲間の一人を起した。
「代って呉れ。俺ゃ彼処にゃ居られねえ。」
　起された兵が、ボンヤリと病室に這入って行くと、父親は寝台の上に片胡坐をかいて首垂れていた。
　看護卒が眠たげな鼻声で訊ねた。
「電報が来たそうですね。」
　父親が吃驚して顔を上げた。が、すぐ眼を外らした。暫くすると父親は深く溜息をついた。それからすり切れそうな声で云った。
「子供は……死んでも……構いましねえ。これさえ助かればと思ってるでがす……これ打捨っては儂がにゃ戻れましねえだよ。」
　夜明けに二度目の電報がとどいた。子供が死んだのだ。父親は黙って肯いた。
　並木は釣龍の下で乾いた口を嘗めずっていた。そしてぼそぼそとうわ言を云い続けた。時には正気に返って看護卒に告げた。
「早く治って外泊に行きてえな！」
　七日目から容態が少しずつ悪くなって行った。夜中に彼は大声をあげて父親を驚かした。
「石が……石がなア……重てえぞ……畜生……！」
　そして奴はうんうんと呻き続けた。
　朝になると彼は父親を見つめて云った。
「俺を……こん眼に逢わせやがった……俺ぁ知ってるぞ……
……仇を討ってやるべえ……あいつ……」
　それからすぐ意識が朦朧としはじめた。昼近く、奴は洞ろな眼をあけた。そして細い垢だらけな腕を眼の上でゆらゆら動かし乍ら、呟いた。
「……何にも見えねえ……」
　次の朝――連隊は耐熱行軍に出発した。中隊では十二名残留した。その中に私も、並木の戦友も居た。その朝、並木の戦友は班内で大声をあげた。奴の眼には涙が光っていた。
「戦友が死にそうだってのん、演習に出ろなんて……糞野郎！」

特務曹長が来て、「残るんだ」と告げた。彼は黙って班内を歩きはじめた。が、間もなく外被を引っかけると、私をそそのかして、病院に出掛けた。
外は暴風雨になりそうな豪雨だった。
四角な営庭には外被を纏い背嚢にくくられた兵卒がギッシリ詰っていた。号令が、雨の音に妨げられてよく通らなかった。それでもラッパが鳴り出すと、兵卒の鎖は重々しい音を立てて、行進を開始しはじめた。
――ざッ、ざッ、ざッ、ざッ…………
その鎖の音が営門の外に消えた瞬間に、並木伊平は死んだ。(一九二八年九月)

(一九二八年一〇月「戦旗」)

一九二八年三月十五日

小林多喜二

一

お恵には、それはそう中々慣れきることとの出来ない事だった。何度も――何度やってきても、お恵は初めてのように驚かされたし、ビクビクしたし、周章てた。そして、又その度に夫の龍吉に云われもした。然し女には、それはどうしても強過ぎる打撃だった。
――組合の人達が集って、議題を論議し合っているときお恵がお茶を持って階段を上って行くと、夫の声で、「婦の意識の訓練となると、手こずるッて……。」そう云っているのを一度ならず聞いた。
「革命は台所から――これは動かせない公式だからなあ。小川さん、甘い、甘い。」
「実際、俺の婦シャッポだ。」
「ワイフとの理論闘争になると、負けるんだなあ。」と、そ

して、皆にひやかされた。
夫は声を出して、自分で自分の身体を抱えこむように、恐縮した。
朝、龍吉が歯を磨いていた。側で、お恵が台所の流しに置いてある洗面器にお湯を入れてやっていた。
「ローザって知ってるか。」夫が楊子で、口をモグモグさせながら、フト思い出して訊いた。
「ローザア？」
「ローザさ。」
「レーニンなら知ってるけど……。」
龍吉はひくく「お前は馬鹿だ。」と云った。
お恵はそういうことをちっとも知ろうと思い、又はそうするために努めた事さえ無かった。それ等は覚えられもしないし、覚えたって、どうにもならない気がした。「レーニン」とか「マルクス」とか、それは子供の幸子から知らされた位だった。一旦それを覚えると、自家にくる組合の工藤さんとか、阪西さんとか、鈴本さんとか、夫などが口ぐせのように「レーニン」とか「マルクス」とか云っているのに気付いた。何かの拍子に、だから、お恵が、「マルクスは労働者の神様みたいな人なんだッてね」と、夫に云ったとき、夫が、へえ！　という顔付でお恵を見て、「何処から聞いてきた。」と賞められても、そう嬉しい気は別にしなかった。
然しお恵は、夫や組合の人達や、又その人達のする事に悪意は持っていなかった。初め、然し、お恵は薄汚い、そ れに何処かに凄味をもった組合の人達を見ると、おじけついた。その印象がそうすぐ近付けないものを、しばらくお恵の気持の中に残した。けれども変にニヤニヤしたり、馬鹿丁寧であったりする学校の先生（夫の同僚）などよりは一緒に話し合っていて気持よかった。物事にそう拘りがなく、ネチネチしていなかった。かえって、子供らしくて、お恵などをキャッキャッと笑わせたり、初めモジモジしながら、御飯を御馳走になってゆくと、次ぎからは自分達の方から「御飯」を催促したりした。風呂賃をねだったり、煙草銭をもらったりする。然し、それが如何にも単純な、飾らない気持からされた。だんだんお恵はみんなに好意を持ちだしていた。
港一帯にゼネラル・ストライキがあった時、お恵は外で色々「恐ろしい噂」を聞いた。あの工藤さんや、鈴本さんなどの指導しているストライキが、その「恐ろしい」ストライキである事が、どうしても初め分らない、と思った。「誰にとって、一体あのストライキが恐ろしいッて云うんだ。金持にかい、貧乏人にかい。」
夫にそう云われた。が、腹からその理窟が分りかねた。
「理窟でないよ。」
新聞には、毎日のように大きな活字で、ストライキの事が出た。O市全市を真暗にして、金持の家々を焼打ちするだろうとか、警官と衝突して検束されたとか、（そういう中に

渡や工藤がいたりした。）このストライキは全市の呪いであるとか……。お恵は夫の龍吉までが、殆んど組合の事務所に泊りっきりでストライキの中に入っている事を思い、思わず眉をひそめた。龍吉が、寝不足のはれぼったい青い、険をもった顔をして帰ってきたとき、「いいんですか？」ときいた。

「途中スパイに尾行（つけ）られたのを、今、うまくまいて来たんだ。」

そして、すぐ蒲団にくるまった。「五時になったら起してくれ。」

お恵はその枕もとに、しばらく坐っていた。お恵はこんな場合、何時でも夫のしていることを言葉に出してまで云った事がなかった。然し、やっぱり、そんなに苦しんで、何もかも犠牲にしてやって、それが一体どの位の役に立つんだろう。皆が興奮すると叫ぶような、そんな社会――プロレタリアの社会が、そうそう来そうにも思えない、お恵はひょいひょい考えた。幸子もいる、本当のところ、あんまり飛んでもない事をしてもらいたくなかった。夫のしている事が、ワザワザ食えなくなるようにする事であるとしか思えなく、女らしい不服が起きてくる事もあった。

然しお恵は組合の人達の色々な話や労働者の悲惨な生活を知り、労働者達は苦しい、苦しくてたまらないんだ、だから彼等は理窟なしに自分達の生活を搾りあげている金持に「こん畜生！」という気になるのだ。組合の人達はそれを指導し、その闘争を拡大してゆく、お恵にはそういう事も分ってきた。夫達のしている事が、それがお恵には何時見込のつくことか分らない事だとしても、非常に「大きな」「偉い」事をしているのだ、という一種の「誇り」に似た気持さえ覚えてきた。

龍吉は三度目の検束で、学校が首になり、小間物屋でどうにか暮して行かなければならなくなった。その時――何時か来る、その漠然とした気持は持っていたとしても、お恵は何かで不意になぐられたようなめまいを感じた。然しそのことにこだわって、クドクド云わない程になっていた。

龍吉は勤めという引っかかわりが無くなると、運動の方へもっと積極的に入りこんで行った。それからスパイがよく家へやって来るようになった。お恵は店先をウロウロしている見なれない男を見ると、寒気を感じた。それだけなら、だが、まだよかった。そういう男が標札を見ながら家へ入ってくると、「一寸警察まで来てくれ。」そう云って、龍吉を引張ってゆくことがあった。夫が二人位の私服に守られて家を出てゆく、それは見て居れない情景だった。行ってしまってからは、変に物淋しいガランドウな気持が何時までも残った。お恵は人より心臓が弱いのか、そういうことのあった時は、何時までもドキついた鼓動がとまらなかった。お恵は胸を押えたまま、紙のように白くなった顔をして、家の中をウロウロした。

――それは全くお恵には、そう中々慣れきれる事の出来

ないことだった。何度も——何度やってきても、お恵は初めてのように驚かされたし、ビクビクしたし、周章てた。そして又その度に夫に云われたりした。然し女には、それはどうしても強過ぎる打撃だった。お恵にはそうだった。

三月十五日の未明に、寝ている処を起され、家の中をすっかり捜索されて、お互にものも云わせないで、夫が五六人の裁判所と警察の人に連れて行かれたとき、お恵はかえってぼんやりしてしまって、何時までも寝床の上に坐ったままでいた。思わず、ワッと泣きだしたのは、それから余ッ程経ってからだった。

その朝、幸子はオヤッと思って、何かの物音で眼をさました。幸子はパッチリ開いた眼で、無意識に家のなかを見廻してみた。何時だろう、朝だろうかと思った。何故って次の室からは五、六人の人達の何かザワついている音が聞えてきていた。真夜中なら、そんな筈はない。だが、まだ電燈が明るくついている。朝ではない。どうしたんだろう。畳の上をひっきりなしに、ミシミシ誰か歩いている音がする。

「次の室も調べる。」襖のそばで知らない人の声がした。

「寝る処ですから、何んにもありません。」お母さんが殊更に低くしている声だった。

「調べてもらったっていいよ。」父だった。

「幸ちゃんが眼でも覚すと……。」

幸子には所々しかはっきり聞えなかった。彼女は人が入って来たら、眠っている振りをしていなければならないのだ、と思った。

棚からものを下したり、新聞紙がガサガサいったり、畳を起すような音がしたり、タンスの引出しを一つ一つ——七つまで開けている。それで全部だった。幸子はそれを心で数えていた。すると、台所の方では戸棚を開けている。幸子は身体のずウと底の方からザワザワと寒気がしてきた。そうなると、身体をどう曲げても、どう向きを変えても、その寒気がとまらず、身体が顫わさってきた。ひょいとすると、歯と歯が小刻みにカタカタと鳴った。びっくりして顎に力を入れて、それをとめた。父と母の一言も云うのが聞えない。どうしているんだろう。何か云っているのは、よその人ばかりだった。

自分の家には、何時も沢山の人達がくる、然し今来ている人達はそういう人達とは、まるッきり異った恐ろしい人達であると直感を感じた。

襖が開いた。急にまばゆい光が巾広く、斜めに射しこんだ。幸子は周章てて眼をとじた。心臓の鼓動が急にドキドキし出した。が、寝がえりを打つ振りをして、幸子は薄眼をあけて見た。母が胸の上に手をくみながら、自分の寝顔を見ていた。血の気のない不気味なさえ顔をしている。父は少し離れて、よその人達の探す手先を見ていた。電燈の下っているすぐ横にいるせいか、父の顔が妙にいかつく見

えた。
　知らない人は五人いた。一人はひげを生やした一番そのうちで上の人らしく、大きな黒い折かばんを持って、探している人達に何か云った。云われた人達は、するとその通りにした。巡査が二人いた。あとの二人は普通の服を着ていた。――お父さんは何をしたんだろう。この人達はそして何をしようとしているんだろう。よその人は幸子の学校道具に手をかけたり、本を一冊々々倒さに振ったりした。色々な遊び道具を畳の上へ無遠慮に開けた。幸子は妙に感情がたかぶってきた。そして、それが眼の底へジクリ、ジクリと涙をにじませてきた。
「それは子供のばかりです……。」
　母が立ったまま、低い声で云った。よその人達は生返事を口の中で分らなくして、然しやめなかった。
　一通りの取調べが終ると、皆は一度室の中をグルグル見廻して、出て行った。襖が閉った。――室が暗くなった。幸子は危くワッと泣きだす処だった。
　父と折かばんが始め低く何か云っていた。だんだん声が高くなってきて、何を話しているか幸子にも聞えてきた。
「とにかく来て下さい。」折かばんが云っている。
「とにかくじゃ分らないよ。」
「ここで云う必要がないんだ。来て貰えばいいんだ。」だんだん言葉がぞんざいになって行った。
「理由は？」
「分らん。」
「じゃ、行く必要は認めない。」
「認めようが、認めまいが、こっちは……。」
「そんな不法な、無茶な話があるか。」
「何が無茶だ。来れば分るッて云ってるじゃないか。」
「何時もの手だ。」
「手でも何んでもいい。――とにかく来て貰うんだ。」
　父が急に口をつむんでしまった。と、力一杯に襖が開いて、父が入って来た。後から母がついてきた。五人は次の間に立って、こっちを向いている。
「ズボン。」
　父は怒った声で母に云った。母は黙ってズボンを出してやった。父はズボンに片足を入れた。然し、もう片足を入れるのに、何度も中心を失ってよろけ、しくじった。父の頬が興奮からピクピク動いていた。父はシャツを着たり、ネックタイを結んだりするのにつッかかったり、まごついたりして――殊に、ネックタイが中々結べなかった。それを見て、母が側から手を出した。
「いいいい！」父は邪険にそれを払った。父は妙に周章てていた。
　母はオロオロした様子で父に何か話しかけた。
「お互に話してもらっては困る。」次の間から、折かばんがピタリと釘を打った。
　又幸子の寝ている室が暗くなった。ドヤドヤと沢山の足

音が乱れて、土間に降りたっている。――表の戸が開いた。一寸そこで足音が澱むと、何か話声が聞えた。幸子はたまらなくなって、寝巻のまま起き上った。ブル、ブルンと一瞬間で頭から足の爪先まで寒気がきた。襖を細目に開けて覗いた。――父は上り端に腰を下して、かがんで靴の紐を結んでいた。よその人は土間につッ立っている。母はやっぱり胸に手をあてたまま、柱に自分の体を支えて、青白い顔をしている。変な沈黙だった。

不図――不図幸子は分った気がした。それもすっかり分った気がした。「レーニンだ!」と思った。これ等のことが皆レーニンから来ていることだ、それに気付いた。色々な本の沢山ある父の勉強室に、何枚も貼りつけられている写真のレーニンの顔が、アリアリと幸子に見えた。それはあの頭の禿げた学校の吉田と云う小使さんと、そっくりの顔だった。そして、それに――組合の人達がくる度に、父と一緒に色々な歌をうたった。幸子は然し、子供の歌に対する敏感さから、その当の誰よりも早く「赤旗の歌」や、「メーデイの歌」を覚えてしまった。幸子は学校でも家でも、「からたちの唄」や「カナリヤの歌」なぞと一緒に、その歌を意味も分らずに、何処ででも歌った。それで、何度も幸子は組合の人から頭を撫でてもらった。――父は決して悪い人ではないし、悪いこともする筈がない。幸子には、だから、それは矢張り「レーニン」と「赤旗の歌」のせいだとしか思えない気がした。――そうだ、確かにそれしかない。

父が立ち上った。幸子は火事の夜のように、歯をカタカタいわせていた。皆外へ出た。母の青い顔がその時動いた。唇も何か云うように動いたようだった。が、言葉が出なかった。出たかも知れないが、幸子には聞えなかった。母の、身体を支えている柱の手先に、力が入っているのが分った――父は一寸帽子をかぶり直し、母の顔を見た。それからチョッキのボタンの一つかかっていたのを外し、それを又かけ直した。落付きなく又母の顔を見た。――父の身体が半分戸の外へ出た。

「幸を気付けろ……。」

かすれた乾いた声で云うと、父は無理に出したような咳をした。

母は後から続いて外へ出た。

幸子は寝床へ走り入ると、うつ伏せになって、そのまま枕に顔をあてて泣きだした。幸子は泣きながら、急に父を連れて行ったよその人が憎くなった。「憎いのはあいつ等だ。あいつ等だ。」と思った。そう思うと、なお泣かさった。幸子は恐ろしさに顫えながら、何度も「お父さん」「お父さん」と父を呼びながら、心一杯に泣いた。

二

空気が空間を充しているそのままの形で、青白く凍えて

しまっているようだった。何んの音もしないし、人影もなかった。――夜が更けていた。ジリジリと寒気が骨まで透みこんでくる。午前三時だった。
カリカリに雪が凍っている道に、五、六人の足音が急にした。それは薄暗い小路からだった。静まりかえっている街に、その足音が案外高く響きかえった。電柱に裸の電燈がともっている少し広い道に、足音が出てきた。――顎紐をかけた警官だった。サアベルの音がしないように、片手でそれを握っていた。
ドカドカッと、靴のまま（！）警官が合同労働組合の二階に、一斉にかけ上った！
組合員は一時間程前に寝たばかりだった。十五日は反動的なサアベル内閣の打閣演説会を開くことに決めていた。その晩は、全員を動員して宣伝ビラを市内中に貼らせたり館の交渉をしたり、それに常任委員会があったり――ようやく二時になって、一先ず片付いたのだった。そこをやられた。
七、八人の組合員は、いきなり掛蒲団を剝ぎとられると、靴で蹴られて跳ね起きた。皆が丸太棒のようにムックリと起き上ると、見当を失って身体をよろつかせ、うろうろした。
鈴本は、しまった！　と思った。彼は実は、或いはと思っていた。言論の自由は完全に奪われている、そこへもってきて、無理にねじ込んで、御本尊――田中内閣の打閣運動をやろうとする、警察がその当日になって、中止々々で弁士を将棋倒しにするのは分り切っているし、覚悟はしていたが、その前に或いは（野郎達のことだ！）総検束でもしないか、よくやりたがる手だ、そう思っていた、それが来たんだ、そう瞬間、鈴本は思った。
「組合のドンキ」で通っている阪西が、猿又一つで、
「何んかあるのか。」と、顔なじみのスパイに訊いた。
「分らんよ。」
「分らん？　馬鹿にするなよ。――睡いんだぜ。」
続いて上ってきた私服が片ッ端から、書類を調べ始めた。
「貴様等、こんな処にゴロゴロしてるから碌なことをしねえ事になるんだ。」
巡査が、横着な恰好に構えている「関羽」そっくりの鈴本をじろり、じろり見ながら、毒ッぽい調子で皆に聞えるように、はき出した。鈴本はそんなものにかかってはいられなかった。
「働いてみろ、つまらん考えなんか無くなるから。」
――独りでしゃべろ、誰が相手になっていられる！
「一つ世話して貰いたいもんです。」
阪西は何時もの人の好い笑い声をして、茶を入れた――組合の連中は阪西を足りない事にしていた。何処へもって行っても、つぶしがきかないし、仕事がルーズだった。然しその人のよさが憎めない魅力をもっていた。
その時、渡が周章てて階段をかけ降りようとした。が、

巡査がすぐ前に立ってしまった。
「何処へ行くんだ。」
鈴本はその渡の態度を見て、おや、と思った。渡はその態度ばかりでなしに、顔の色がちっとも無かった。普段若手として、実際には何時でも一番先頭に立って働いているがっしりした、「鉄板」みたいな渡が、――渡らしくない！ 鈴本は変な予感を渡に対して感じた。
皆は前と後と両側を巡査に守られながら、階段をゾロゾロ降りた。然し渡を除くと皆元気だった。こういう事には慣れていた。一つ、二つ平手が飛んだ。
普段何かすると、すぐ「我々は戦闘的でなければならない。」と、誰れ彼れの差別なく振りまわして歩く斎藤は、然し矢張り一番元気だった。彼が鈴本のところへ寄ってくると、
「明日の演説会に差支えるから、頑張ろう。」
「うん、やる必要がある。」
斎藤が、そして何か云おうとした。
「オイオイッ！」いきなり斎藤の後首に警官が手をかけると、こずき廻すようにして、鈴本から離して別な方へ引張って行った。

民衆の旗、赤旗は……
前の方で、誰か突然歌い出した。――ビシリ、という平手の音がした。
「何んだ、この野郎！」身体でもって、つッかかって行く声だった。サアベルでなぐりつける音が、平手打ちの音に交って聞えた。
皆は前と後と、すっかり腕をつなぎ合わせていた。ワザと強く足ぶみをして歩いた。
「うるせえッよ！」斎藤が、小さい身体一杯に叫んで、立ち止ってしまった。「おい、皆、わけも分らないで引ッ張られてゆくのは反対だ。なアッ！ 一つ訊くんだ。」
「んだ、んだ！」皆それに賛成した。
鈴本は渡だけに眼をつけていた。何時でもこういう時には、弾んだバネのように一緒にはじけ上る渡が、棒杭の様につッ立っている。――警官は小さい斎藤のまわりをぐるりと取捲いてしまった。外の組合員は、警官の肩と肩の間に自分の肩を楔形に割り込ませようとした。その身体と身体のモミ合いが、そこに小さい渦巻を起した。
「馬鹿野郎、理由を云れ！」
「行けば分る。」――ここでも、これだ。
「行けば分るで、一々臭え処さ引張られて行ってたまるか。」
「人権蹂躙だ！」後からも叫んだ。
警官の一人が斎藤をなぐりつけたらしかった。人の輪が急に大きく揺れた。握りこぶしを固めた組合員が輪の外から、それを乗り越そうとあせった。それで急に騒ぎが大き

くなった。
「貴様等は！……貴様等は！」口を何かで抑えられて無理に出している斎藤の声が、切れ、切れに聞えた。――「貴様等が、いくらこったら事したって、この運動が……な、無くなるとでも……畜生、無くなるとでも思ってるのか！糞ッ！」
皆は興奮して、ワッと声をあげた。
何かに気をとられた形でいた渡が、この時肩幅の広い、がっしりした身体で、その渦の中へ割り込んで行った。それを見ると、鈴本は、何んでもなかったのか、そう思ってホッとした。
「正当な理由が無えうち、俺達この全部の力にかけて、行くことと反対だ！」かすれた、底のある低い声で云った。渡の低い声は皆に対して何時も不思議に大きな力を持っていた。
渦巻から離れて立っていた石田は、空元気を出して騒いでいる組合員を、何時ものように苦々しく思い、だまって見ていた。石田は騒ぐ時と、そうでない時――そうあってはならない時がある、と思っている。この事をよくわきまえて、そうする事は、何も非戦闘的なことであるとは思えなかった。斎藤などは、石田には狂犬病患者であるとしか考えられなかった。石田はこの運動をしているものに、時に「斎藤型」の多いのを知っている。それ等を見ると、石田は何時でも顔をそむけた。それ等には「小児病」と、人間らしい侮蔑語を使うのさえ勿体なかった。「こんな時にそれが何んになる。フン、勇敢な無産階級の闘士だ。」――石田は自分の周囲に唾をはくと、靴の爪先でそれを床にこすりつけた。
渡が出て、皆の結束ががっしりした。――と、その時、入口からもう七、八人の巡査がどやどやッと突入してきた。それで、結束はその力で一もみにもみ潰されてしまった。皆は大きな渦巻になって、表へ、入口の戸をメリメリさせ、もみ出た。
戸の外からは、剃刀の刃のような寒気がすべり込んできた。夜明けに近く、冷えるにいいだけ冷えきった、零下二十度の空気だった。それに皆は寝起きのすぐの身体なので、その寒さが殊にブルンブルンとこたえた。皆は顎と肩に力を入れて、ふるえをこらえた。
夜はまだ薄明りもしていなかった。雪を含んだ暗い空の下で、街は地の底からジーンと静まりかえっていた。歩くと、雪道は何かものでも毀れる時のようにカリッカリッと鳴った。垢でベタベタになっているシャツをコールテン地の服の下に着ていた石田や斎藤は、直接に膚へ寒さを感じた。皮膚全体が痛んできた。そして、しばらくすると、手先や爪先が感覚なく、しびれてくるのを覚えた。
皆は一人々々警官に腕を組まれて外へ出た。
一週間程前に組合に入ったばかりの、まだ二十にならない柴田は始めっから一言も、ものを云えず、変にひきつッ

た顔をしていた。彼は皆がどなる時、それでも、それについて自分でもそうしようと努めた。が、半分乾きかけた粘土のようになっている頬は、ピクピクと動いたきり、いうことをきかなかった。彼は、何時でもこういう事には、これから打ち当る、だから早く慣れきってしまって置かなければならない、そう思っていた。今、然し始めての柴田には、やっぱりそれはドシンと体当りに当ってきた。彼はひとたまりもなく、投げだされた形だった。彼は寒さからではなしに、身体がふるえ、ふるえ——歯のカタカタするのを、どうしても止められなかった。

　皆は灰色の一かたまりにかたまって、街の通りを、通りから通りへ歩いて行った。寒さを防ぐために、お互に身体をすり合わせ、足にワザと力を入れて踏んだ。ひっそりしている通りに、二十人の歩く靴音がザック、ザック……と響いて行った。

　組合の者達は妙にグッと押しだまっていた。そうしているうちに、皆には然し、不思議に一つの同じ気持が動いて行った。インクに浸された紙のように、みるみるそれが皆の気持の隅から隅まで浸してゆくように思われた。一つの集団が、同じ方向へ、同じように動いて行くとき、そのあらゆる差別を押しつぶし、押しのけて必ず出てくる、たった一つの気持だった。「関羽」の鈴本も、渡も、「ドンキ」の阪西も、斎藤も、石田も、又新米の柴田も、その他のそれぞれの差別を持ち、それ故に又その各自の存在をもっている四、五人の組合員も、たった一つの集団の意識の中に——同じ方向を持った、同じ色彩の、調子の、強度の意識の中に、グッ、グッと入り込んでしまっていた。「それ」は何時でも、こういう時に起る不思議な——だが、然しそれこそ無くてはかなわない、「それ」があればこそ、プロレタリアの「鉄」の団結が可能である——気持だった。がこの気持はただ単純に、それぞれの差別を否定するというものではなしに、その差別自身が一定の高度にまで強調された時、必然にアウフヘーベンされる（だから、それに依ってかえって強固になる）——従って、没個人的な、大きな掌でグッと一掴みにされた気持だった。

　今、この九人の組合員は、九人という一つ、一つの数ではなしに、それ自身何かたった一つのタンクに変っていた。彼等は互に腕と腕をガッシリ組合わせ、肩と肩をくっつけ、暗い然し鋭い眼で前方を見据え、——それは恰かも、彼等のたった一つの目標に向って——「革命」に向って、前進しているかの如く、見えた。

三

　お恵は夫があんな風にして連れて行かれてから、何処かガランとした家の中にいる事が、たまらなかった。自家(うち)へ時々やって来る組合の書記の工藤の家へ行ってみようと思った。それに、組合の人達の様子や、今度のことの内容や

その範囲なども知りたかった。然し工藤もやっぱり検束されていた。

——工藤の家へ、警官が踏みこんだ時は、家の中は真暗だった。警官は、「オイ、起きろッ！」と云いながら、電燈のつる下っているあたりを、手さぐりした。三人いる子供が眼をさまして、大きな声で一度に泣き出した。電燈の位置をさがしている警官は「保名」でも踊る時のような手付きをして、空を探していた。と、闇の中でパチン、パチンとスゥイッチをひねる音がした。

「どうしたんだ、ええ？」

「電燈はつかんよ。」

それまで何も云わないでいた工藤は、警官の周章てているのとは反対に、憎いほど落付いた声で云った。

工藤の家は電燈料が滞って、二ヵ月も前から電燈のスゥイッチが切られてしまっていた。然し、と云って、ローソクを買う金も、ランプにする金もなかった。夜になると、子供を隣の家に遊ばせにやったり、妻のお由は組合に出掛けたりして、六十日も暗闇の中で過していた。「明るい電燈、明るい家庭。」暗い電燈さえ無い彼等には、そんなものは糞喰えだった。

「逃げないから大丈夫。」そう云って、工藤が笑った。

お由は泣いている子供に、「誰でもないよ。何時も来る人さ、何んでもない、さ、泣くんでない。」と云っていた。子供は一人ずつ泣きやんで行った。工藤の子供達は巡査などに慣れてさえいた。組合の人達は、冗談半分だけれども、お由が自分の子供等に正しい「階級教育」をほどこしているというので評判をたてていた。が、お由は勿論自分では何か理窟があって、そうしているのではなかった。——

お由は秋田のドン百姓の末娘に生れた。彼女は小学校を二年でやめると、十四の春まで地主の家へ子守にやられた。そこでお由は意地の悪い、気むずかしい背中の子供と、所きらわず殴りつける男の主人と、その主人よりもっと残忍な女主人にいじめられ、こずき廻された。五年の間、一日の休みもなくコキ使われた。そして、ようやく其処から自家へ帰ってくると、畑へ出された。一日中蝦のように腰を二つに折り、そのために血が頭に下って来て、頰とまぶたが充血して腫れ上った。十七の時、隣り村の工藤に嫁入した。が、その次の次の日から(!)——丁度秋の穫入れが終った頃なので——工藤と二人で近所の土工部屋のトロッコ押しに出掛けて行かなければならなかった。雑巾切れのように疲れきって帰ってくると、家の仕事は、そして山のように溜っていた。お由は打ちのめされた人のように、クラックラッする身体でトロッコと台所の間を往き来した。ジリジリ焼けつく日中に、トロッコを押しながら、始めての夫婦生活の疲労と月経から気を失って、仰向けにひッ倒れた事があった。

子供が生れてから、生活は尻上りに、やけに苦しくなってきた。そんな時になって、どうすればいいか分らなくな

った工藤は、自分とお由とで行李を一つずつ背負って、暗くなってから村を出てしまった。暗い、吹雪いた、山の鳴る夜だった。そして北海道へ渡ってきた。
小樽で二人は或る鉄工場に入った。が、北海道と内地とは、人が云うほどの大した異いはなかった。ここも矢張りお由達には住みいい処ではなかった。では、何処へ行けばよかったろう。だが、何処へ行くところがある！　プロレタリアは何処へ行ったって、締木で鰊粕か大豆粕のように搾り取られるのだ。――お由の手は、自分の身体には不釣合に大きく蟹のはさみのように、両肩にブラ下っていた。樹の根のようにザラザラして、汚れが真黒に染み込んでいた。それは、もう、一生とれっこが無い程しみていた。子供が背中をかゆがると、お由は爪でなくて、そのザラザラした掌で何時も掻いてやった。子供はそれでそうされるのを、非常に気持よがった。
お由はその長い間の自分の生涯で、身をもって「憎くて、憎くてたまらない人間を」、ハッキリと知っていた。殊に夫が組合に入り、運動をするようになってから、それ等のことが、もっとはっきりした形でお由の頭に入ってきた。
工藤はそれから仕事には無論つけなくなった。組合の仕事で一週間も家へ帰れない事が何度もある。お由は自分で――自分一人で働いて、子供のことまでしてゆかなければならなかった。が、今までとは異った気持で、お由は仕事が出来た。お由は浜へ出て石炭担ぎや、倉庫で澱粉や雑穀の袋縫いをしたり、輸出青豌豆の手撰工場へ行ったり、どんな仕事もした。末の子が腹にいた時、十ヵ月の大きな腹をして、炭俵を皆に交って、艀から倉庫へ担いだ。見廻りに来た巡査も、それには驚いて、親方が叱られた事さえあった。
家の障子は骨ばかりになった。寒い風が吹き込むようになっても、しかし障子紙など買う金がなかったので、組合から「無産者新聞」や「労働農民新聞」の古いのを貰ってきて、それを貼った。煽動的なストライキの記事とか、大きな「火」のような見出しが斜めになったり、倒さになったり、半分隠れたりして貼られた。お由は暇な時、ボツリボツリそれを読んでいた。子供の「これ何ァに、あれ何ァに」を利用して、それを読んできかせた。家の壁には選挙の時に使い余ったポスター、ビラ、雑誌の広告などをべたべた貼りつけた。渡や鈴木が工藤の家にやってくると、「ほオー！」と、何度もグルグル見廻って歩いて、「我等の家」だなんて云って、喜んだ。
………工藤は起き上ると、身仕度をした。身仕度をしながら、工藤は今度は長くなると思った。そうなれば、一銭も残っていない一家がその間、どうして暮して行くか、それが重く、じめじめと心にのしかかってきた。これは、こんな場合、何時でも同じように感ずる心持だった。然し何度感じようが、鬼のようなプロレタリア解放運動の闘士だとしても、この事だけは何処まで行こうが慣れっこになれるものでは断じてない、陰鬱な気持だった。組合で皆と

一緒に興奮している時はいい、然しそうでない時、子供や妻の生活を思い、やり切れなく胸をしめつけられた。プロレタリアの運動は笑談にも呑気なものではなかった。全く！

お由は手伝って、用意をしてやると、

「じゃ、行っといで。」と云った。

「ウム。」

「今度は何んだの。当てがある？」

彼は黙っていた。が、

「どうだ、やって行けるか。長くなるかも知れないど。」

「後？――大丈夫。」

お由は何時もの明るい、元気のいい調子で云った。

漠然ではあるが、何んのことか分っている一番上の子供が、

「お父、行ってお出で。」と云った。

「こんな家へ来ると、とてもたまったもんでない。」警官が驚いた。「まるで当りまえのことみたいに、一家そろって行ってお出で、だと！」

「こんな事で一々泣いたりほえたりしていた日にゃ、俺達の運動なんか出来るもんでないよ。」

工藤は暗い、ジメジメさを取り除くために、毒っぽく云い返した。

「この野郎、要らねえ事をしゃべると、たたきのめすぞ。」

警官が変に息をはずませて、どなった。

「気をつけて。」

「ウム。」

彼は妻に何か云い残して行きたいと思った。然し口の重い彼は、どう云っていいか一寸分らなかった。妻が又苦労するのか、と思うと、（勿論それは自分の妻だけではないが）、膝のあたりから、妙に力の抜ける感じがした。

「本当、どうにかやって行けるから。」

お由は夫の顔を見て、もう一度そう云った。夫はだまって、うなずいた。

戸がしまった。お由は皆の外を歩く足音を、しばらく立って聞いていた。

自分達の社会が来る迄、こんな事が何百遍あったとしても、足りない事をお由は知っていた。そういう社会を来させるために、自分達は次に来る者達の「踏台」になってさらし首にならなければならないかも知れない。蟻の大軍が移住をする時、前方に渡らなければならない河があると先頭の方の蟻がドシドシ川に入って、重なり合って溺死し後から来る者をその自分達の屍を橋に渡してやる、ということを聞いた事があった。その先頭の蟻こそ自分達でなければならない、組合の若い人達がよくその話をした。そしてそれこそ必要なことだった。

「まだ、まだねえ！」

そうお由はお恵に云った。

お恵は半ば暗い顔をしながら、然し興奮してお由にうなずいてみせた。

今度の検挙が案外広い範囲に渡っていることをお恵はお由から知らされた。××鉄工場の職工が仕事場から、ナッパ服のまま連れて行かれたり、浜の自由労働者や倉庫の労働者が毎日五人、十人と取調べに引かれたり、学生も確か二、三人は入っていた。

四

龍吉の家で毎火曜の晩開かれる研究会に来ていた会社員の佐多も、それから二日遅れて警察へ引張られて行った。

佐多は龍吉達に時々自分の家のことをこぼしていた――家には、佐多だけを頼りにしている母親が一人しかいなかった。その母は、自分の息子が運動の方へ入ってゆくのを「身震い」して悲んでいた。母親は彼を高商まであげるのに八年間も、身体を使って、使って、使い切らしてしまった。彼はまるで母親の身体を少しずつ食って生きてきたのだった。然し母親は、佐多が学校を出て、銀行員か会社員になったら、自分は息子の月給を自慢をしたり、長い一日をのん気にお茶を飲みながら、近所の人と話し込んだり、一年に一回位は内地の郷里に遊びに行ったり、ボーナスが入ったら、温泉にもたまに行けるようになるだろう。……今までのように、毎月の払いにオドオドしたり、言訳をしたり、質屋へ通ったり、差押えをされたりしなくてもすむ。それはまるで、お湯から上ってきて、襦袢一枚で縁側に横になるような、この上ない幸福なことに思われた。母親は長い、長い(――実際それは長過ぎた気がした。)苦しさの中で、ただ、それ等の事ばかりを考え、予想し、それだけの理由で苦しさに堪えてきた。

毎日会社に通う。――月末にちゃんちゃんと月給が入ってくる。――何んとそれは美しい、静かな生活ではないか!

佐多が学校を出て、就職がきまり、最初の月給を「袋のまま」受取ったとき、母親はそれを膝の上にのせたままじいッとしていた。が、しばらくすると母親の身体が、見えない程小刻みに、顫えてきた。母親は何度も、何度も袋を自分の額に押しあてた。佐多は矢張り変な興奮と、逆に「有りふれて、古い、古い。」と思いながら、二階に上った。一寸すると、下で仏壇の鈴(りん)のなる音がした。

晩飯まで本を読んで、下りてくると、食卓には何時もより御馳走があった。仏壇にはローソクが明るくついて、袋がのっている。「お父さんに上げておいたよ。」と母が云った。

それまではよかった。

母親は、今までなかった色々の写真が、佐多の二階の室にだんだん貼られてきたのに気を使いだした。

「これは何んという人?」

母親は佐多の机のすぐ前の壁にかかっているアイヌのような、ひげにうずまった――ひげの中から顔が出ている、

のを指差した。佐多は曖昧にふくみ笑った。
「お前、別に何んでもないかい。」
何所から聞いてくるか、然しハッキリではなく、こんな云い方をすることもあった。表紙の真赤な本が殖えて来たのにも気づいていた。労農党××支部、そう言う裏印を押した手紙がくると、母親は独りで周章てて、自分の懐にしまい込んだ。佐多が帰ってくると、何か秘密な恐ろしいものでもあるように、それを出して渡した。「お前、その、主義者だか、なんだかになったんでないだろうねえ。」
佐多は、母親がだんだん浮かないような顔をする日が多くなり、夜など朝まで寝がえりをうって、眠れずにいるのを知った。会社から帰ってくると、仏壇の前に坐って、泣いているのも、何度も見た。それが皆自分のことからであ る、とハッキリ思った。特別な事情で育てられてきた佐多には、そういう母親を見ることは心臓に鶴嘴を打ち込まれる気がした。龍吉やお恵は随分佐多から、この事では相談されたことがあった。
佐多が二階にいると、時々母が上ってきた。その回数がだんだん多くなってきた。母親はその度に同じことをボソボソ云った。——お前一人がどうしようが、どうにもなるものじゃない、若しもの事があり、食えなくなったらどうする、お前は世間の人達の恐れているようなそんな事をする人間ではなかった筈だ。キット何んかに憑かれているんだ、お母さんは毎日お前のために神様や、死んだお父さんにお祈りしている。……佐多はイライラしてくると、
「お母さんには分らないんだ。」と、半分泣かさっている声で、どなった。
「それより、お母さんにはお前の心が分らないよ。」母は肩をすぼめて、弱々しく云った。
佐多は面倒になると、母を残して二階をドンドン降りてしまった。降りても然し、佐多の気持はなごまなかった。俺をこんなに意気地なくするのは母だ、「母親なんて案外大きな俺たちの敵なのだ。」彼は興奮した心で考えた。
その後で、もう一度そういう事があった。佐多はムッとして立ち上ると、
「分った、分った、分ったよ! もういい、沢山だ!」いきなり叫んだ。「もうやめたよ。お母さんのいうように、やめるよ。いいんだろう。やめたらいいんだろう。やめるよ、やめるよ! うるさい!」
彼は母をつッ飛ばすようにして表へ出てしまった。外へ出てしまうと、然し逆な気持が帰ってきた。
「お母さんには分らないんだ。」
佐多は十六日に、仲間から龍吉の方や組合に大検挙のあった事をきいた。然しその仲間も、それが何んのことでやられたのか見当がついていなかった。佐多は家へ帰ると、色々な書類を纏めて近所の家へ預け、整理してしまった。その日は何んでもなかった。彼はホッとする一方、組合へ出掛けて行って、様子をみてみようと思った。そこへ前の

仲間が来て、組合や党の事務所には私服が沢山入りこんでいて危いことを知らせてくれた。そして組合にウッカリ来る者は、それが関係のあるものであろうと、無かろうと、引張ってゆく。組合の小さい小林が十五日の午後、何気なく組合に行くと、私服がドカドカと出てきて、いきなり小林をつかまえた。小林はハッとして、咄嗟に、俺は印刷屋の掛取りだ、掛を取りに来たんだ、と云ったら、今誰も居ないから駄目、駄目、と云ってつッ返されてきた。彼は勿論その足で、組合員の家を廻って、注意するように云った。仲間はそんな事を話した。彼は行かないでよかった、と思った。

然し検束のために、警官がやって来たのは、十七日の夜、佐多が夕刊を読んでいた処だった。佐多はイザとなったとき、自分でも案外な覚悟と落着きが出来ていた。

彼は活動写真や古い芝居で、よく「腰をぬかす」滑稽な身振りを見て笑った。然し！ 彼が外套を取りに行った二階から下りてきた時だった。彼は室の片隅の方にぺったりへたばったまま、手と足だけをバタバタやっている母親を見たのだった！ 唇がワナワナ動いて、何か一生懸命ものを云おうとしているらしく、然し何も云えず、サッと凄い程血の気の無くなった顔がこわばって、眼だけがグルグル動いている。手と足は何かにつかまろうとしているように振っている。然し母親の身体はちっとも動かないではないか。佐多は障子を半分開きかけたそのままの恰好で、丸太棒のように立ちすくんでしまった。

佐多は三人の警官に守られながら外へ出た。彼は道々母のことを考え、警官に見られないように、独りで長い間泣いていた。

お恵は工藤の家からの帰り、市の一番賑かな花園町大通を歩いてきた。まだ暮れたばかりの夜だった。そんなに寒気（しばれ）がきびしくなかった。街には何時ものように、沢山の人が歩いていたし、鈴をつけた馬橇、自動車、乗合自動車はしきりなしに往ったり来たりしていた。明るい店のショウ・ウインドゥに、新婚らしい二人連れが顔を近く寄せて何か話していた。――温かそうなコートや角巻の女、厚い駱駝のオーヴァに身体をフカフカと包んだ男、用達しの小僧、大きな空の弁当箱をさげたナッパ服、子供……それ等が皆、肩と肩を擦り合わせ、話し合い、急ぎ足であったりブラブラであったり、歩いている。お恵は不思議な気持がしてくるのを覚えた。今、この同じ××の市で、あんなに大きな事件が起き上っている。然し、それと此処は何んという無関係であろう。それでいいのだろうか。あの何十人――何百人かの人達が、全く自分等の身体を投げてかかっている、誰でものためでない、無産大衆のためにやっているその事が、こんなに無関係であっていいと云うのだろうか――お恵は分らなくなった。ここには、そのちょッぴりした余波さえ来ていない気がした。政府が新聞に差止めし

ているズルい方法のためがあったかも知れない。ずるい方法だ！　然しどの顔も、どの態度もみな明るく、満足し、皆てんでの行先きに急いでいるように思われた。
　夫達は誰のためにやっているのだ。お恵は変に淋しい物足りなさを感じた。夫達がだまされている！　馬鹿な、何を云う！　然し、暗い気持は馬虻のように、しつこくお恵の身体にまつわって離れなかった。

五

　十五日の夜明、警察署からは帽子の顎紐をかけた警官が何人も周章てた様子で、出たり入ったりしていた。それが何度も何度も繰返された。空色に車体を塗った自動車も時々横付けにされた。自動車がバタバタと機関の音をさせると、警察のドアーが勢よく開いて、片手で剣をおさえた警官が走って出てきた。自動車は一きわ高い爆音をあげて、そこから直ぐ下り坂になっている処を、雪道の窪みにタイヤを落して、車体をゆすりながら、すべり下りて、直ぐ見えなくなった。一寸すると戻ってきて、別な人を乗せると又出た。
　留置場は一杯になっていた。
　先きに入れられた者等は、扉の錠がガチャガチャし出すと、今まで勝手にしゃべり散らしていたのを、ぴたりやめて其処だけに目を注いで――待った。入ってきたのが、渡、鈴本、斎藤、阪西達だと分ると、思わず一緒に歓声をあげた。警備に当っている巡査が鶏冠のように赤くなって、背のびをしながら怒鳴ったが、ちっとも効きめがなかった。一緒にされた十四、五人は皆何時も顔を合わせ、第一線に立って闘争してきたものばかりだった。
　彼等は、それぞれ自分の相手に、興奮してこの不法行為に就いて、大声で論議をし合った。そして彼等は、皆が一緒になったという事から、それに恃んで、無茶苦茶な乱暴をしたい衝動にかられた。
　斎藤は、いきなり身体をマリのように縮めると、ものも云わずに、板壁に身体全部で打ち当って行った。唇をギュッとかんで、顔を真赤にして力みながら、闘牛のように首を少しまげて、それを繰り返した。
「チェッ！」
　駄目だと分ると、今度は馬のように後足で蹴り出した。皆も真似をして、てんでに、板壁をたたいたり、蹴ったりした。石田は（彼だけ）腕ぐみをして、時々独り言をしながら、室の中央を歩いていた。
　又扉が開いた。然し今度は鈴本と渡が呼び出されて行った。「どうしたんだ。」――皆は頭株の二人がいなくなると変に気抜けしてきた。そして、壁をたたくものが、一人やめ、二人やめ、だんだんやめてしまった。

石田は、壁の隅ッこに両足を投げ出したまま眼をつぶっている龍吉に、気付いた。彼は、小川さんも！　と思うと今度の事はとてつもなく大変な事である気がした。と、同時に、その親しさから、何処か頼りある気持にされた。

「小川さん。」石田は寄って行った。

龍吉は顔をあげた。

「今度の何んです。」

「ウン、俺にも分らないんだよ。今、渡君にでも聞こうと思ってたんだ。」

「今日やる倒閣――。」

「そうかとも思ってるんだ――が。そうなら今日一日でいいわけだ――が……。」

皆が二人を取巻いてきた。何等理由もきかせず、犬の子か猫の子を処置するように、引張ってきて、ブチ込んだことに対して憤慨した。龍吉もそれはそうだった。

「ねえ、法律にはこう決めてあるんだよ。日出前、日没後に於ては、生命とか身体とか財産に対して、危害切迫せりと認むる時だ、又はさ、賭博、密淫売の現行ありと認むる時でなかったら、そこに住んでいる人の意に反してだ――どうだ、いいか――現居住者の意に反して、邸宅に入ることを得ず、ってあるんだ。それを何んだ、夜中の寝込みを襲って！　それに理由も云わずに検束するなんて！　警察はこんな事をする処だよ。」

労働者達は一心に聞いていた。そして、畜生、野郎、と叫んで、足ぶみをした。

龍吉は興奮していた。「所が、どうだ、憲法にはこうあるんだ。憲法にだぜ。――日本臣民は、だ、法律によるに非ずして逮捕、監禁、審問、処罰を受くることなし。俺達はところがどうだ、ちァあんと正式の法律の手続をふんで、一度だって、その逮捕、監禁、審問を受けたことがあったとでも云うのだ。――このゴマカシと嘘八百！」

こう云われて、皆は今の場合――現実に、その不当な仕打のワナにかかって、身もだえをしている場合、それらの事がムシ歯の神経に直接に触られるように、全身にこたえて行った。

「おい、そこの扉を皆でブチ割って、理由を聞きに行こうじゃないか。」

「やろう！」他の者も興奮して、それに同意した。「ひでえ騒ぎ、たたき起してやるべえ！」

「駄目、駄目。」龍吉が頭を振った。

「どうしてだい!?」

斎藤は組合などでもよくする癖で、肩につッかかるように龍吉に向って行った。

「こう入ってしまえば、何をしたって無駄さ。逆に、かえってひでえ目に会うが落ちさ。――万事、俺達の運動は、外で、大衆の支持で！　五人、十人の偉そうな乱暴と狂躁は何んにもならないんだ。俺達が夢にも忘れてはならない原則にもどるよ。」

「そ、そんなことで、じっとしてられるか！　それこそ偉そうな理窟だ、理窟だ！」
石田は側で、相変らずだなア、と思った。巡査が四人入って来た。
皆はギョッとして、そのままの恰好に、じいッとしていた。顔一面ザラザラしたひげの、背の低い、がっしりした身体つきの巡査が、留置場の中をグルグル見廻してから、
「貴様等、ここは警察だ位のことは分ってるんだろうな。何んだこのやかましさは！」
一人々々の肩をグイグイ押しのめした。斎藤の処へ来たとき、彼はひょいと肩を引いた。はずみを食らって、巡査の手と身体が調子よく前にヨロヨロと泳いだ。と、巡査は「この野郎！」と不気味な声で云うと、いきなり、斎藤の身体に自分の体をすり寄せた。斎藤の身体は空に半円を描いて、龍吉の横の羽目板に「ズスン」と鈍い音をたてて、投げつけられていた。
巡査はせわしく肩で息をして、少しかすれた声で「皆、覚えておけ、少しでも騒いだりすると覚悟が要るんだぞ！」と云った。
後から入って来た巡査は、紙を見て、一人々々名前を呼んで、その者だけを廊下に出るように云った。ブッブッ云いながら、呼ばれた者は小さい潜り戸を、蹲みながら出て行った。あとに六人残った。
倒れた斎藤が横になったまま、身体を尺取虫のようにして起き上ろうとしていた処を、先の巡査は靴のまま、続けて二度蹴った。
しばらくして、又別な巡査が入ってきて、中にいる六人に一人ずつ附添って、話も出来ないようにしてしまった。
龍吉は高く取り付けてある小さい窓の下に坐った。汚く濁った電燈の光が、皆の輪廓をぼかして、動いているのは影だけでもあるような雰囲気だった。それが五分経ち――十分経って行くうちに、初め黄色ッぽい光だった電燈が、へんに薄れて行くようで――一帯が青白くなり、そしてだんだんするうちに、室の中が深い海底(うなぞこ)でもあるような色に変ってゆくのが分った。何処か一部分だけがズキズキする頭で、龍吉は夜が明けかかっているのだな、と思っていた。夜明けらしい、底に滲みこんでくる寒気が、ジリジリときた。寝足りない短い生あくびが室の隅っこから、それから飛びとびに起きた。龍吉も顔をしかめたまま、生あくびをした。が、そうしても何かカスのようなものが頭と胸にごみごみと不快に残った。
構内は静かになった。凍え切った静かさだった。時々廊下を靴をはいて、小走りにゆくコッコッという音がした。足音が止んで扉を開ける、それが氷でも砕ける響のように聞えた。ドタドタと足響が乱れて、誰か腕をとられながら何か云い争うようにして前を通ってゆくのもあった。それが終ると、然し、もとの夜明けらしい何処か変態的な静けさにかえった。誰か、やっぱり短い生あくびをして、表を

いた。

巡査も寝不足の、はれぼったい、ぼんやりした顔をして通り過ぎて行った。

「もう夜明けだ。夜が明けるよ。」

ボソボソした調子で、片隅からそう云うのが聞えた。

「睡むてえ。寝せてけないのか。」

龍吉は板壁に身体を寄りかからせて、眼をつぶっていた。身体も神経も妙に疲れきっていた。じっと、そうしていると、船にでも乗っているように、自分の身体が静かに巾大きく、揺れているように感じた。彼は検束された時、何時でもそうする癖をつけていたように、取りとめのないことの空想や、想像や、思い出に疲れてくると、一度読んだ事のある重要な本の復習や、そこから出てくる問題を頭の中で理論的に筋道をつけて考えることに決めていた。又組合や党などで論争された自分の考えなどについて、もう一度始めから清算してみることにしていた。それを始めた。

龍吉は、この前の研究会の時、マルクスの価値説とオーストリア学派の限界効用説に就いて起った議論を、自分が考え、又読んだことのある本の中から材料を探してきて、もう一度考え直そう、そう思っていた……。

彼はすっかりアワを食っていた。ズボンをはきながら、のめったり、よろめいたり、自分ながらそういう自分に不快になるのを感じさえした。然し、彼は襖一重隣の室で自分を待っている巡査の、カチャカチャするサアベルの音が

幸子の耳に聞える、今にも聞える、そう思って、ハラハラしていた。彼はその音が幸子に聞えれば、幸子の「心」にひびが入ることを知っていた。

「お父さんはねえ、学校の人と一緒に旅行へ行くんだよ。」

幸子が黒い大きな眼をパッチリ、つぶらに開いて、彼を見上げる。

「おみやに何もってきて？」

彼はグッとこたえた。が「うんうん、いいもの、どっさり。」

と、幸子が襖の方へ、くるりと頭を向けた。彼はいきなり両手で自分の頭を押えた。ピーン、陶器の割れるその音を、彼はたしかにきいた。彼は、アッと、内にこもった叫声をあげて、かけ寄ると、急いで幸子の懐を開けてみた。乾葡萄をつけたような二つの乳房の間に、陶器の皿のような心がついている――見ると、髪の毛のようなひびが、そこに入っているではないか！　あっ、あっ、あっ、あっ……

…龍吉は続け様にむせたような叫び声をあげた……。

眼を開けると、室の中はけぶったような青白い夜明けの光が、はっきり入ってきていた。皆は疲労しているような恰好で、大きな頭を胸にうずめたり、身体を半分横にしたり、ぼんやり洞ろな眼差しを板壁の中位の処に浮かばしていたり、していた。龍吉は軽くゴツンゴツンと板壁に自分の頭を打ちつけてみた。頭の左側の一部分が、やはり、そこだけズキ、ズキしていた。彼は今うつつに見た夢が、不

気味な実感の余韻を何時までも心に残していることを感じた。

然し、龍吉は今では自分でもそうと分る程、こういう処にたたき込まれた時のおきまりの感傷的な絶望感から逃れ得ていた。それは誰でもが囚われる——そして、それは或る場合、当人を事実全く気狂いのようにしてしまうかも知れない——堪え難い、ハケロのない陰鬱な圧迫だった。このためにだけでも、何人もこの運動から、身を引いて行った人のあることを龍吉は見て来ていた。龍吉だっても、勿論そこを危い綱渡りのように通ってきた。そして一回、一回不当な残虐な弾圧を受ければ、受けるその度毎に、今までに彼のうちに多分に残されていた末梢神経がドシドシすり減らされて行った。ムシ歯に這い出ている神経のように一寸したことにでもピリピリくる彼の（軽蔑の意味でのデリケートな）心がだんだん鋼鉄のように鍛えられて行くのを感じた。それは、然し龍吉にとっては、文字通り「連続した拷問」の生活だった。龍吉のように、「インテリゲンチャ」の過去を持ったものが、この運動に真実に、頭からではなしに、「身体をもって」入り込もうとする時、それは然し当然の過程として課せられなければならない「訓練」であった。それは又、そして、単純な道ではあり得なかった。——髪の毛をひッつかんで引きずり廻されるような、ジグザックな、しかも胸突八丁だった。

龍吉は、インテリゲンチャはその階級的中間性の故に、結局中ぶらりんで、農村と工場からの健康な足音に対しては没落することしか出来ないものであり、或はその運動に合流して行ったところで、やっぱり其処には、どこか脣合の決して合わないところがあり、又その知識の故に、ブルジョワ文化に対しては強いなり、淡いなり、又はこっそりと、未練と色気を抱き勝ちであり、——そして、ひっくるめて云って、インテリゲンチャはそういう事を、あまりに強く、度々、意識するために「自己催眠」的に、俺は駄目だ、とし、結局何ごとも出来ないし、しない事になるのを彼は知っていた。自分が、とどのつまり何んにもしない、という事に一生懸命理窟をつける、そんな事は馬鹿げ切ったことでしかない、と思った。そういう事を本気に、憑かれたように考えることは危険であり、そのために、この時間さえ贅沢にも消費することは、どうしたって正しい事ではない、と思った。彼は、自分達は胸突八丁を一つ、一つの足場を探し、踏みしめて登って行きさえすれば、結局何かを「している」事になるのではないか、そう思うと、青白く考えこんでばかりいる彼等が不思議でならなかった。

頭の中でばかり考え込んでいれば、それは室の中に迷いこんだ小鳥のように、四つの壁に頭がつッかえるのは分り切ったことではないか。考えるのはもう沢山だ。お前達は「理窟」が小うるさく多過ぎる。理窟で家の出来たためしが無いんだ！

龍吉は今では警察に留置されることには、無意識に近く

なれた。東京からの同志たちは監獄（今では、ただ言葉だけ上品に― 云いかえられて刑務所）に行ったり、検束されることを、ブルジョワの口吻を借りて「別荘行き」と云っていた。いくら無産階級先鋒の闘士だって嬉々として別荘行きはしなかったが、一般人の生活にとっては可成りの重大事件でなければならない監獄行きを、そう云える程の気楽さにまでなれていた。自分達の運動で、何時でもクョクョ監獄に拘っていたのでは、クサメ一つさえ気儘に出来ないではないか。この運動は道楽なスポーツではないんだ。

――龍吉は妙に、然し心にしみこんで来る幸子のことを頭から払い落そうとするように、大きくあくびをした。片隅で斎藤が余程長く伸びている髪を、やけに両手の指を熊手のようにして逆にかきあげた。

交代の時間が来て、一人に一人ずつ付いていた巡査が出て行った。時々龍吉の家にくるので知っている須田巡査が出て行きしなに彼へ、

「ねえ、小川君、実際こんなことがあるとたまらないよ。――非番も何もあったもんでない。身体が参るよ。」――そう言ったのに、変な実感があった。

彼は、人をふんだり、蹴ったりする巡査らしくない親しみを感じ、ひょっとすると、それが彼の素地であるかも知れないものを其処に見た気がして、意外に思った。

「実際、ご苦労さんだ。」

皮肉でなく、そう云わさった。

斎藤は「ご苦労――お。」と、ブッ切ら棒に捨科白のように巡査の後に投げつけた。

外の巡査が皆出てしまうと、須田巡査が、

「何か自家にことづけが無いか。」と、ひくく訊いた。

龍吉は一寸何も云えずに、思わず須田の顔を見た。

「いいや、別に――有難う……。」

須田は頭でうなずいて出て行った。少し前こごみな官服の円い肩が、妙に貧相に見えた。

「あ――あ、煙草飲みたいなア。」誰かが独言のように云った。

「もう、夜が明けるぞ……。」

六

龍吉と一緒の室にいた斎藤が便所に行く途中、廊下の突き当りの留置場の前で、

「おい」――その留置場の中にいる誰かに呼ばれた、と思った。

斎藤は足をとどめた。

「おい」――声が渡だった。小さい窓へ、内から顔をあてているのが、そう云えば渡だった。

「渡か、俺だ。――何んだ、独りか？」

「独りだ。皆元気か。」何時もの、高くない底のある声だ

った。
「元気だ。――うむ、独りか。」 独り、というのが斎藤の胸に来た。
少し遅れて附いてきた巡査が寄ってきたので、
「元気でいれ。」と云って、歩き出した。
歩きながら、何故か、これは危いぞ、と思った。室に帰ってから、斎藤はその事を龍吉に云った。龍吉はだまったまま、それが何時もの癖である下唇をかんだ。
石田は、渡とは便所で会った。言葉を交すことは出来なかったが、がっしり落付いた、何時もの鋼のように固い、しっかりした彼の表情を見た。
「おい、バンクロフトって知ってるか。」 石田が斎藤にきいた。
「バンクロフト? 知らない。コンムュニストか。」
「活動役者だよ。」
「そんな、ぜいたくもの覚えてるかい。」
石田は渡に会ったとき、ひょいと「暗黒街」という活動写真で見た、巨賊に扮したバンクロフトを思い出した。渡――バンクロフト、それが不思議なほど、ピッタリ一緒に石田の頭に焼付いた。
渡は、自分が独房に入れられたとき、(最初組合に踏込まれたときと同じように、) 自分等が主になっている非合法的な運動が発覚した、と思った。瞬間、やっぱり顔から血がスウと引けてゆくのが自分でも分った。彼にとっては、然し、それはそれっきりの事だった。すぐ何時もの彼に帰っていた。そして殊に独房にどっかり坐ったとき、遠い旅行から久し振りで自家に帰って来た人のような、広々とくつろいだ気持を覚えた。――渡でも誰でも、朝眼をぱっちり開ける、と待っていたとばかりに、運動が彼をひッつかんでしまう。ビラを持って走り廻る。工場の仲間や市内の支部を廻って、報告を聞き、相談をし、指令を与える。中央からのレポートがくる。それが一々その地の情勢に応じて、色々の形で実行に移されなければならない。委員会が開かれる。石投げのような喧嘩腰の討論が続く。謄写版。組合員の教育、演説会、――準備、ビラ、奔走、演説、検束……彼等の身体は廻転機にでも引っかかったように、引きずり廻される。それは一日の例外もなしに、打ッ続けに何処まで行っても限りのない循環小数のように続く。――もう沢山だ! そう云いたくなる位だ。そしてそのあらゆる間、絶え間なく彼等の心は、張り切り得る最高の限度に常に張り切ッていなければならなかった。然し「別荘」はその気持に中休みを入れさせてくれる効果を持っている。だから「別荘行き」には皮肉な意味を除けば、ブルジョワの使う「休息」そういう言葉通りの意味も含まっていた。然し誰もこの後の方の事を口には出して云わなかった。そんなことを云えば、一言のもとに非戦闘的だとされることを皆はこっそり知っていたからだった。

渡は、足を二本前に投げ出して、それを股から膝、脛、足首――それから次には逆に、揉んだり、首や肩を自分の掌刀でたたいたり、深呼吸をするように大きく、ゆっくり、あくびをしたりした。ふと、渡は、自分は今までゆっくりあくびさえした事のなかった事を思い出した。そして独りで可笑しくなって、笑い出した。

四、五日前から鈴本の歌っていたのを聞きながら、何時の間にか覚えた、「夜でも、昼でも牢屋は暗い。」の歌を小声で、楽しむように、一つ一つ味いながら、うたって、小さい独房の中を歩いてみた。渡の頭には、何も残っていない。そう云ってよかった。然し時々今日全国的に開かれる反動内閣打開演説会が出来なくなった事と、自分達の運動が一寸の間でも中断される残念さがジリジリ帰ってきた。が正直に云って――又不思議に、今、渡には、それらの事は眠りに落ちようとする間際に、ひょい、ひょいと聯絡もなく、淡く浮んだり、消えたりする不気味なもののようでしかなかった。

渡は口笛を吹いて歩きながら、板壁を指でたたいてみたり、さすってみたりした。彼は実になごやかな気持だった。監獄に入れられて沈んだり憂鬱になったりする、そういう気持はちっとも渡は知らなかった。彼には始めから、そんな事には縁がなかった。女学生のようにデリケートな、上品な神経などは持合わせていなかった。然しもっと重大な事は、自分達は正しい歴史的な使命を勇敢にやっているからこそ、監獄にたたき込まれるんだ、と云う事が、渡の場合、苦しい、苦しいから跳ね返す、跳ね返さずにはいられないその気持と理窟なしに一致していた。彼は、自分の主義主張がコブのように自分の気儘な行動をしばりつけているような窮屈さや、それに対する絶えない良心の苛責などは嘗て感じなかった。渡は、自分ではちっとも、何も犠牲を払っているとは思っていないし、社会的正義のために俺はしているんだぞ、とも思っていない。生のままの「憎い、憎い！」そう思う彼の感情から、少しの無理もなくやっていた。これは彼の底からの気持と云ってよかった。それに彼はがんばりの意志を持っていた。裏も表もなく、ムキ出しにされていた彼の、その「がんばり」はある時には大黒柱のように頼りにされたが、別な場合には他の組合員の狂犬のような反感をムラムラッとひき起すこともなくはなかった。色々な点で渡と似ていた工藤は、然し彼のように何時でも一本調子に「意思」をムキ出しにはしなかった。だから彼は渡のそばにいなければならない「エンゲルス」だ、と皆にひやかし半分に云われていた。――渡には「二つの気持」ということがなかった。一つの気持がすることを、他の気持が思いかえしたり、思いめぐらしてクヨクヨすることが決してなかった。この事が外から見て、或は「鋼のような意志」に見えたかも知れなかった。彼は何時でもズバズバとやってのけていた。

彼は前へすぐ下る髪を、頭を振って、うるさげに払いあ

げながら、一人いる留置場を歩き廻った。彼の長くない太い足は柔道をやる人のように外に曲っていた。それで彼の上体はかえって土台のしっかりしたものに乗っている、と云う感じを与えた。彼は一歩々々踵に力を入れて、ゆっくり歩く癖があった。彼の靴は一番先きに、踵の外側だけが癖の悪い人に使われた墨のように斜めに減った。彼は歩きながら同志の者だちはどうしているだろうと思った。誰かこういう弾圧に恐怖を抱くものがあっては、その事が一番彼の考えを占めた。若しも長びくようだったら、それがもっと工合悪くなる。彼はそれに対する策略を考えてみた。

壁には爪や、鉛筆のようなもので、色々な落書がしてあった。退屈になると、渡は丹念にそれを拾い、拾い読んだ。何処にも書かれる男と女の生殖器が大きく二つも三つもあった。

「俺は泥棒ですよ、ハイ。」「ここの署長は剣難死亡の相あり――骨相家。」「火事、火事、火、火。(これが未来派のような字体で。)」「不良青年とは、もっとも人生を真剣に渡る人のことでなくして何んぞや。呵々。」「社会主義者よ、何んとかしてくれ。」「お前が社会主義者になれ。」男と女の生殖器を向い合わせて書いてある下に「人生の悲喜劇は一本に始って、一本に終るか。嗚呼。」「私は飯が食えないんです。」「署長よ。御身の令嬢には有名な虫が喰ッついている。」「何んでえ、こったら処。誰がおっかながるものか。」「労働者よ、強くなれ。」「ここに入ってくるあらゆる人に告ぐ。落書はみっともないから止しにしよう。」「糞でも喰え。」「不当にも自由を束縛されたものにとって、落書は唯だ一つののびのびと解放された楽天地だ。ここに入ってくるあらゆる人に告ぐ、大いに落書をし給え。」「労働者がこの頃生意気になりました。」「この野郎、もう一度云ってみろ、たたき殺してやるぞ。労働者。」「巡査さん、山田町の吉田キヨと云う人妻は、男を三人持っていて、サック持参で一日置きに廻って歩いてるそうだ。探査を望む」、「お前もその一人か。」「妻と子あり、飢えている。俺はこの社会を憎む。」「ウン、大いに憎め。」「働け。」「働け？働いて楽になる世の中だか考えてから云え、馬鹿野郎。」「社会主義万歳。」……

渡は何時でも入ってくる度に、何か書いてゆくことにしていた。今までに、決めて何度もそうしていた。

「俺はとうとう巡査の厄介になったよ。悲しい男。」「巡査の娘で、生活苦のために一回三円で淫売をしているものが小樽に八人いる。穴知り生。」

渡はそう書かれている次の空いている壁に、爪で深く傷をつけながら丹念に落書を始めた。熱中すると、知らないうちに余程の時間を消すことが出来た。それは画でも書いているような気持で出来る愉快な仕事だった。成るべく長く書こうと思った。彼は肩先きに力を入れて仕事にとりかかった。熱中したときの癖で、何時の間にか彼は舌を横に出して、一生懸命一字々々刻んで行った。

おい、皆聞け！
この留置場は俺達貧乏人だけをやッつけるためにあるものなんだ。
警察とは、城のような塀で囲んだ大きな庭をもっている金持が、金をたんまりつかませて傭っておく番犬のようなものなんだ。
金持が一度だって、警察に引張られて来た事があるか。
だが、いや全く、だが、俺たちはクヨクヨしている暇に力を合わせて、碌でもない金持と手先きの官憲と、そしてこの碌でもない政治を打ッ壊すことをしなければならないのだ。
クヨクヨしたって涙を損するだけだ。
メソメソしたんじゃ何時まで経ったって、俺だちはやッつけられるだけだ。
おい、兄弟！
第一番先きに手を握ろう。しっかり手を握ることだ。
警察の生くらサアベルで俺だちの団結が、たたき切れると思ったら、たたき切ってみろ！
俺だち労働者は、働いて、働いて、前へつんのめる位働いて、しかも貧乏している。こんなベラ棒なことがあるか。
働くものの世界――労働者と百姓の世界。利子で食い、人の頭をはねて遊んで食う金持をタタきのめしてしまった世界。
俺だちはその社会を建てるのだ。
おい、手を出せ。
しっかり握ろう。
おい、お前も！　おい、お前もだ。
皆、皆！

かなり長い時間それにかかった。渡は読み返してみて満足を感じた。口笛を吹きながら、コールテンのズボンに手をつッこんで、離れてみたり、近寄ってみたりした。
夜が明けていた。電燈が消えると然し、眼が慣れない間、室の中が急に暗くなった。壁の落書も見えなくなった。青白い、明け方の光が窓の四角に区切られて、下の方へ三、四十度の角度で入ってきていた。渡は急に大きく放屁した。それから歩きながらも、力を入れて、何度も続けて放屁した。渡は痔が悪かったので、屁はいくらでも出た。そしてそれが自分でも嫌になるほど、しつこく臭かった。「えッ糞、えッ糞！」渡はその度に、片足を一寸浮かして放屁した。
八時頃かも知れなかった。入口の鍵がガチャガチャ鳴った。戸が開いて、腰に剣を吊していない巡査が指先の分れている靴下に草履を引っかけて入ってきた。
「出るんだ。」
「動物園の獣じゃないよ。」

「馬鹿。」
「帰してくれるのかい、有難いなあ。」
「取調べだよ。」
そう云ったが、急に「臭い、臭い！」と、廊下に飛び出てしまった。
渡はそれと分ると、大きな声を出して笑いだした。おかしくて、おかしくてたまらなかった。身体を一杯にくねらして、笑いこけてしまった。こんな事が何故こうおかしいのか分らなかったが、おかしくて、おかしくて、たまらなかった。

七

十五日一日のうちに、又五、六人の労働者が連れられて来た。その室が狭くなると、皆は演武場の広場に移された。室の半分は畳で、半分は板敷だった。室の三方が殆んど全部硝子窓なので、明るい外光が、薄暗い所から出て来た皆の目を、初めまばゆくさした。お互に顔を見知っている者も多かったので、ストーヴを囲むと色々な話が出た。監視の巡査は四人程ついた。巡査も股を広げて、ストーヴに寄った。
初め、それでも皆は巡査に気兼ねをして、だまっていた。が退屈してくると、巡査の方を見ながら、話が切れ、切れに出た。叱られたら何時でも直ぐ止められる心構えをしながら。巡査は然し、かえってそういう話に同意をしたり、うながしたりした。巡査も退屈していた。
日暮れになると、皆表に出された。裏口から一列に並んで外へ出ると、警察構内を半廻りして、表口から又入れられた。盥廻しをされてしまったのだった。急に皆の顔が不安になった。どうしたんだと云い合った。今度の検束が何か別な原因からだ、という直感が皆にきた。実の入っていない塩っ辛い汁で、粘気がなくてボロボロした真黒い麦飯を食ってしまってから、皆は又ストーヴに寄った。が、ちっとも話がはずんでゆかなかった。
八時過ぎに、工藤が呼ばれて出て行った。皆はギョッとして、工藤の後姿を見送った。
夜が更けてくると、ブスブス煙っているような安石炭のストーヴでは、背の方にゾクゾクと寒さが滲みこんできた。龍吉は丹前を持ち出しに薄暗い隅の方へ行った。あとから石田がついてきた。
「小川さん、俺こんな事皆の前で云ってええか分らないで黙っていたんだけど。」と低い声で云った。
龍吉は胃がまた痛み出してきたのを、眉のあたりに力を入れて、我慢しながら、
「うん！」と、ききかえした。
演武場の外を、誰かが足音をカリッ、カリッとさせて歩いていた。

——少し前だった。石田が洗面所に行った。別々の室に入れられている皆が、お互に顔だけでも見合わされ——又運よく行って、話でも出来るのは、実は一つしかないために共同に使われている洗面所だった。皆が其処へ行くときは、それでその機会をうまくつかめるように、心で望んでいた。石田が入ってゆくと、正面の板壁に下げてある横に長い鏡の前で、こっちへは後を向けた肩巾の広い、厚い男が顔を洗っていた。その時は、石田は何かうっかり外のことを考えていたかも知れなかった。その男の側まで行って彼は——と、その時ひょいと、その男が顔をあげた。石田が何気なく投げていた視線と、それがかっちり合った。
「あッ!」石田はたしかに声をあげた。頭から足へ、何か目にもとまらない速さで、スウッと走った。彼は、自分の体が紙ッ片のように軽くなったのを感じた。彼は片手を洗面所の枠に支えると、反射的に片手で自分の眼から頬をなでた。顔!! ——それが顔だろうか? 腐れた茄子のようにブシ色に腫れ上った、文字通り「お岩」の顔、そして、それが渡ではないか!
「やられたよ。」自分で自分の顔を指さすような恰好で、笑ってみせた。笑顔!
石田は一言も云えず、そのままでいた。心臓の下あたりがくすぐったくなるように、ふるえてきた。
「然し、ちっとも参らない。」
「うん……。」

「皆に恐怖病にとッつかれないようにって頼むでえ。」
その時は、それだけしか云える機会がなかった。
「キット大きな事だって思うんだ。」石田が怒ったように、低い声で云った。
「うむ。……心当りがない事もないが。然し、大切なことは矢張り恐怖病だ。」龍吉はストーヴの廻りにいる仲間や巡査の方に眼をやりながら云った。
「それァそうだ。然し警察へ来てまで空元気を出して、乱暴を働かなけァ闘士でないなんて考えも、やめさせなけァ駄目だ。警察に来ておとなしくしているというのは、何も恐怖病にとッつかれているという事ではないんだと思う。」
「そうだ。うん。」
「斎藤なんぞ。」そう云って、ストーヴのそばで何か手振りをしながらしゃべっている斎藤を見ながら、「此前だ、警察へ引っぱられてきて、一番罪が軽かったら、それを恥かしく思って首でも吊らなかったら、そんな奴は無産階級の闘士でないなんて云い出したもんだ!」
「……うん、いや、その気持も運動をしている者がキット幾分はもつ……何んて云うか、センチメンタリズムだよ。同志に済まないって気がするもんだからな、そんな場合。然し、勿論それァ機会ある毎に直して行かなけァならない事だよ。」
石田は相手を見て、何か言葉をはさもうとした、然しやめると、考える顔をした。

「それは然し、案外面倒な方法だと思うんだ。そいつをあまり真正面から小児病だとか、なんとか云い出すと、処が肝心要めの情熱そのものを根っからプッつり引っこ抜いてしまう事にならないとも限らないからなあ。勿論それァ、その二つのものは別物だけどさ。」

石田は自分の爪先を見ながら、その辺を歩き出した。

「大切なことは、その情熱をそのまま正しい道の方へ流し込んでやるッて事らしいよ。——情熱は何んと云ったって矢張り一番大きな、根本的なものだと思うんだ。」龍吉は何かを考えて、フト言葉を切った。「革命的理論なくして、革命的行動はあり得ないッて言葉があるさ、君も知ってる有名な奴さ。けれども、それはそれだけじゃ本当は足りないと、俺は思ってるんだ。その言葉の底に当然のものとして省略されてる大物は、何と云ったって情熱だよ。」

「線香花火の熱情はあやまるよ。牛が、何がなんであろうと、然し決してやめる事なく、のそりのそり歩いてゆく、それが殊に俺達の執拗な長い間の努力の要る運動に必要な情熱じゃないか、と思うんだ。」

「そうだ。情熱は然し、人によって色々異った形で出るものだよ。俺だちの運動は二、三人の気の合った仲間ばかりで出来るものじゃないのだから、その点、大きな気持——それ等をグッと引きしめる一段と高い気持に、それを結びつけることによって、それ等の差異をなるべく溶合するように気をつけなければならない、と思うんだ。——それァどうしたって個人的に云って不愉快なこともあるさ。だが勿論そんなことに拘わるのは嘘だよ。俺だって渡のある方面では嫌なところがある。渡ばかりじゃない。然し、決してそれで分離することはしないよ。それじゃ組織体としての俺達の運動は出来ないんだから。」

「うん、うん。」

「これから色々な困難な事に打ち当るさ。そうすればキットこんな事で、案外重大な裂目を引き起さないとも限らないんだ。俺達はもっともっとこういう隠れている、何んでもないような事に本気で、気をつけて行かなければならないと思ってるよ。」

「うん、うん。」石田は口の中で何遍もうなずいた。

二人がストーヴに寄ってゆくと、皆は巡査と一緒に猥談をやっていた。どういうわけで引張られてきたかちっとも分らないと云っていた労働者は二、三人いた。それ等は始めからオドオドして、側から見ていられない程くしゃんとしていた。が、時々その猥談に口をはさんだり、笑っていた。話がと切れて、一寸皆がだまる事があると、走り雲の落して行く影のように、彼等の顔が瞬間暗くなった。

斎藤が手振りで話していたのは、女の陰部のことだった。それが口達者なので、皆を引きつけていた。話し終ると、「ねえ、石山さん、煙草一本。」

一生懸命に聞いていた頭の毛の薄い、肥った巡査に手を出した。

石山巡査は、下品にえへ、えへへへへと笑いながら、上着の内隠しから、くしゃくしゃにもまれて折れそうになっているバットを一本出して、斎藤に渡してくれた。
「有難え、有難え。もう一席もッと微細なところをやるかな。」
こすい眼付きで、相手をちらっと見て笑った。斎藤はそれを掌の上で丹念に直して、それからそれに唾を塗って、なるべく遅くまで残るように濡らした。
「いや、勿体ない。これは後でゆっくりとやる。」そして耳に煙草をはさんだ。
「……早く何んとかしてくれないかな。」
片隅で誰か独言した。
「う。」皆はその言葉でひょいと又、自分の心に懐中電燈でもつきつけられたように思った。
「浜の現場から引っぱられて来たんで、家でどッたらに心配してるかッて思ってよ。俺働かねば嬶も餓鬼も食っていけねえんだ。」
「俺らもよ。」
「……こんな運動こりこりした。おッかねえ。」――変に実感をこめて、そう云ったのは相当前から組合にいる労働者だった。
「どうしてよ！」斎藤が口を入れた。
斎藤に云われて、その労働者は口をつむんでしまった。
斎藤は怒った調子を明から様に出して、「うん？」と、うながした。
「いいいい。」石田が巡査の方を眼くばせして、斎藤の後を突ッついた。
その木村という労働者は長く組合にいたが表立っては別に何もしてきていなかった。彼は何時でも云っていた。――それは、あまり彼の出ている倉庫の仕事が苦しかった。ところが労働組合がそういう労働者の待遇を直して呉れるためにある、という事を知った。それで彼が入ってきたのだった。が、警察に引張られなければならないようでは、とても彼は困ると思ったし、それにそんな「悪い事」までする事とは、どうしても彼には分らなかった。恐ろしいとも思った。そんな事でなしに、うまくやって行くのが労働組合だと思っていた。彼は思い違いをしていた。彼は、これでは、何時かやめなければならない、と考えた。彼は結局後から押されるようにして、今まで知らず知らずの間に押されてきていた。何かものにつまずけば、すぐそれが動機になって、軌道から外へ転げ落ちる形のままだった。彼は組合の仕事も、ちっとも積極的でなしに、人形のように、割り当てられた事だけしかしなかった。
総選挙の時だった。敵候補方のポスターを剝ぎ取ったという事で、労農党から誰か警察に犠牲になって行く必要が起きた。渡が木村に頼んで、色々注意を話してきかせた。
「少しなぐられるかも知らないけれども、我慢してくれよ。」と云った。

「嫌だ！」
一言でそう云い切った。
そんな答をちっとも予期していなかった渡が、「ええ？」と反射的に云ったきり、かえって黙ったまま木村の顔を見た。
「俺ァそったら事して、一日でも二日でも警察さ引ッ張られてみれ、飯食えなくなるよ。嫌だ！」
「君は俺達の運動という事が分らないんだな。」
「お前え達幹部みたいに、警察さ引ッ張られて行けば、それだけ名前が出て偉くなったり、名誉になったりすんのと違んだ。」
渡は息をグッとのんだまま、すぐ何か云えず、黙った。そこにいた龍吉は「これァ悪い空気だ。」と思った。組合の幹部と平組合員が「こんな事で」にらみ合っていては困る、と思った。
「今のところ、まァ別の人に行って貰うことにしてもいいさ。」
龍吉は是非そう云わなければならなかった。――この木村にとって、今度の事は、だから、「手をひく」いい動機だった。ここから出たら、さっぱりとやめようと思っていた。そう決めていた。
「意気地のない野郎だ。」
斎藤はズウッと前にあった、その木村のことを思い出していた。彼はワザと横を向いた。

「木村君、やっぱり組合員は組合員らしくするんだなァ。殊にこういう事になれば、俺達がしっかりしなけァ困る時だ、と思うんだ。」
龍吉はストーヴの温かさで、かゆくなった前股のあたりをさすりながら云った。木村は然し黙っていた。龍吉はフト、文字通り戦闘的だと云われている左翼組合に、案外こういうもの等が数の上ででも中枢をなしていることは、そう軽々しく考え捨てることの出来ない事だと思った。
木村の紹介で、最近組合に入った柴田は両膝をかかえて皆を見ていた。彼は木村と同じ蒲団に寝るので、彼が心底からぐしゃんと参っていることを聞かされて知っていた。柴田自身も、然し、初め参ったとは思った。殊に組合で寝こみを襲われた時血の気がなくなった。然し勿論こんなことは堪え切って行かなければならない事だと、普段から思っていた。自分で、そういう点では殊に至らない、つまらないものであると思っていたから、彼は人一倍一生懸命になった。彼はだから渡や工藤や斎藤、龍吉――そういう人達の一挙一動に細かい注意を払って、自分の態度に「意識的に過ぎる」とさえ思える程鞭を加えてきていた。今度の事件は、そして、色々な人間に対する厳重なフルイであった。ドシドシ眼の前で網の目から落ちて行く同志を見るのは、可なり淋しいことだった。然しそれは或は必要な過程であるかも知れなかった。――柴田は、俺はいくら後から来た若造だって、畜生、落ちてはなるまいぞ、と思った。

ストーヴの廻りの話がこの事で一寸渦を巻いて澱んだ。が、誰が話しだすとなく、女の話が又出ていった。

八時になると、畳の方へ床を敷いて、二人ずつ寝た。「眠れさえすれば」眠るのが、たった一つの自由な楽しみだった。

何人もが一緒に帯を解いたり、足袋を脱いだりする音がゴソゴソ起った。

「早く寝て夢を見るんだ。」口に出して云うものがいる。

「留置場の夢か、たまらない。」

「糞。」

相手がクスクス笑った。宿屋に着いた修学旅行の生徒のように、一しきりザワめいた。巡査が時々「シッ」「シッ」と云った。

何十人かのあかのついた鮎のような夜具の襟が、ひんやりと気持わるく頬に触った。

「あ――あ、極楽だ。」襟で口を抑えられたボソボソした声だった。

「地獄の極楽か。」

飛んでもなく離れた方から、「い――――い夢見たい。」

「寝ろ寝ろ。」

「女でも抱いたつもりでか。」

「こんな処で、それを云う奴があるか。」

「ああ抱きたい。」

「馬鹿だな、誰だい。」

「何が馬鹿だ……。」

「寝ろ寝ろ。」

そんな言葉が時々間を置いて、思い思いにあっち、こっちから起った。それがだんだん緩く、途切れ勝ちになって行った。二十分もすると、思い出したように、寝言らしい言葉が出る位になってしまった。――そして静かになった。

演武場の外は、淋しい暗がりの多い通りだった。それであまり人通りはなかったが、時々下駄が寒気のひどい雪道をギュンギュンならして通って行くのが、今度は耳についてきた。署内で、誰かが遠くで呼んでいる声が、それがそれより馬鹿に遠くからという風に聞えた。

「眠れるか。」

龍吉は眠れないので、一緒に寝ている斎藤にそっと言葉をかけてみた。斎藤は動かなかった。眠っていた。もう眠ったのかと思うと、それが如何にも斎藤らしかったので、彼は独りで微笑ましくなった。龍吉はズキン、ズキンと底から(そうひどくはなかったが)痛んでくる胃を、片手で揉むように押しながら、色々なことを考えていた。……

「オイオイ。」――誰だ、と思った。今こんな面倒な頁を読んでいるのにと思うと、ムラムラッと癪にさわった。「オイオイ。」ぐいと肩をつかまれた。糞ッ! 振りかえろうとして龍吉は眼をさました。非常に眠かった。その瞬間、ダブった写真のように、夢と現実の境をつけるのに、彼はしばらく眼をみはった。そうだ、すぐ眼の前に汚い、鬚だ

起していた。
らけの大きな巡査の顔があった。
「オイオイ、起きるんだ。取調べだ。」
ギョッとすると、龍吉は自分でも分らずに、身体を半分起していた。
寝ぼけた処を引張って行く何時もの彼等の手だった。ガジャガジャと、静かな四囲に不吉な鍵の音をさして、巡査のあとから龍吉はついて出た。
三十分程した。凄い程すっかり顔色のなくなった工藤が巡査につれられて帰ってきた。が、演武場に置いておいた荷物を纏めると、すぐ巡査にうながされて出て行った。彼はその時、何か云おうとするように皆の寝ている所を見廻した。が、身体を廻すと、ズングリな後を見せて出て行った。――がじゃんと鍵が下りた。二人の、歩調の合っていない足音が廊下に何時までも聞えていた。
寝がえりを打つ音や、嘆息や、発音の分らない寝言などが、泥沼に出るメタン瓦斯のようにブツブツ起った。

八

警察署は、一週間のうちに労働運動者、労働者、関係のインテリゲンチャを二百人も、無茶苦茶に、豚のようにかりたてた。差入れにきた全然運動とは無関係の弟を、そのまま引きずりこんで「なぐりつけ」一週間も帰さなかった。だが、こんな事はエピソードの百分の一にも過ぎない。

取調べが始った。
渡に対しては、この共産党事件がなくても、警察では是が「非でも」やっつけなければならない、と思っていた。合法的な党、組合の運動に楔のように無理にねじこんで、渡を引っこ抜こうとした。普段から、していた。そういう中を彼は、然し文字通りまるで豹のように飛びまわっていた。そこをつかまえたのだから「この野郎、半殺しにしてやれる」と喜んだ。
渡は、一言も取調べに対しては口を開かなかった。「どうぞ、勝手に。」と云った。
「どういう意味だ。」司法主任と特高がだんだんアワを食い出した。
「どういう意味ででも。」
「拷問するぞ。」
「仕方がないよ。」
「天野屋気取りをして、後で青くなるな。」
「貴方達も案外眼がきかないんだな。俺が拷問されたから云うとか、半殺しにされたからどうとか、そんな条件付きの男かどうか位は、もう分っていてもよさそうだよ。」
彼等は「本気」にアワを食ってきた。「渡なら」と思うと、そうでありそうで内心困ったことだと思った。何故か？　彼等が若し、この共産党の「元兇」から一言も「聞取書」が取れないとなると、(が、何しろ元兇だから、一寸

殺せはしないが、）逆に、自分達の「生」首の方が危なかった。――何より、それだった。
渡は裸にされると、いきなりものも云わないで、後から竹刀でたたきつけられた。力一杯になぐりつけるので、竹刀がビュ、ビュッとうなって、その度に先がしのり返った。彼はウン、ウンと、身体の外面に力を出して、それに堪えた。それが三十分も続いた時、彼は床の上へ、火にかざしたするめのようにひねくりかえっていた。最後の一撃(?)がウムと身体にこたえた。彼は毒を食った犬のように手と足を硬直さして、空へのばした。ブルブルっと、けいれんした。そして次に彼は気を失っていた。
然し渡は長い間の拷問の経験から、丁度気合術師が平気で腕に針を通したり、焼火箸をつかんだりするそれと同じことを会得した。だから、拷問だ！　その緊張――それが知らず知らずの間に知った気合だかも知れない――がくると、割合にそれが堪えなかった。
ここでは、石川五右衛門や天野屋利兵衛の、あの残虐な拷問は、何百年か前の昔話では決してなかった。それは、そのまま今だった。然し勿論こういうことはある。――刑法百三十五条「被告人に対しては丁寧親切を旨とし、其利益となるべき事実を陳述する機会を与うべし。」(!!)
水をかけると、息をふきかえした。今度は誘い出すような戦法でやってきた。
「いくら拷問したって、貴方達の腹が減る位だよ。――断然何も云わないから。」
「皆もうこっちでは分ってるんだ。云えばそれだけ軽くなるんだぜ。」
「分ってれば、それでいいよ。俺の罪まで心配してもらわなくたって。」
「渡君、困るなあ、それじゃ。」
「俺の方もさ。――俺ァ拷問には免疫なんだから。」
後に三、四人拷問係（！）が立っていた。
「この野郎！」一人が渡の後から腕をまわしてよこして、首をしめにかかった。「この野郎一人で、小樽がうるさくて仕方がねエんだ。」
それで渡はもう一度気を失った。
渡は警察に来る度に、こういうものを「お巡りさん」と云って、町では人達の、「安寧」と「幸福」と「正義」を守って下さる偉い人のように思われていることを考えて、何時でも苦笑した。ブルジョワ的教育法の根本は――方法論は「錯覚法」だった。内と外をうまくすりかえて普及させる事には、つくづく感心させる程、上手でもあったし、手ぬかりもなかった。
「おい、いいか、いくらお前が拷問が免疫になったって、東京からは若し何んならブッ殺したっていいッて云ってきているんだ。」
「それァいい事をきいた。そうか。――殺されたっていいよ。それで無産階級の運動が無くなるとでも云うんなら、

俺も考えるが、どうしてどうして後から後からと。その点じゃ、さらさら心残りなんか無いんだから。」
次に渡は裸にされて、爪先と床の間が二、三寸位離れる程度に吊し上げられた。
「おい、いい加減にどうだ。」
下から柔道三段の巡査が、ブランと下った渡の足を自分の手の甲で軽くたたいた。
「加減もんでたまるかい。」
「馬鹿だなア。今度のは新式だぞ。」
「何んでもいい。」
「ウフン。」
渡は、だが、今度のにはこたえた。それは畳屋の使う太い針を身体に刺す。一刺しされる度に、彼は強烈な電気に触れたように、自分の身体が句読点位にギユンと瞬間縮まる、と思った。彼は吊されている身体をくねらし、くねらし、口をギュッとくいしばり、大声で叫んだ。
「殺せ、殺せ——え、殺せ——え!!」
それは竹刀、平手、鉄棒、細引でなぐられるよりひどく堪えた。
渡は、拷問されている時にこそ、始めて理窟抜きの「憎い——ッ!」という資本家に対する火のような反抗が起った。拷問こそ、無産階級が資本家から受けている圧迫、搾取の形そのままの現れである、と思った。渡は自分の「闘志」に変に自信が無くなり、右顧左顧を始めたと思われるとき、何時でも拷問をされて帰ってくると、渡は自分でも分まいがする程拷問をされて帰ってくると、ムチムチと湧くのを意識した。その感情こそは、殊に渡達の場合、マルクスやレーニンの理論を知って「正義的」な気持から運動に入ってきたインテリゲンチャや学生などの夢にも持てないものだ、と思った。「理論から本当の憎悪が虱のように湧くかい!」
渡と龍吉はこの事で何時でも大論争をやった。
針の一刺毎に、渡の身体は跳ね上った。
「えッ、何んだって神経なんてありゃがるんだ。」
渡は歯を食いしばったまま、ガクリと自分の頭が前へ折れたことを、意識の何処かで意識したと思った。——「覚えてろ!」それが終いの言葉だった。渡は三度死んだ。
息を三度目にふき返した。渡は自分の身体が紙ッ片のように不安定になって居り、そして意識の上に一枚皮が張ったようにボンヤリしているのを感じた。そうなれば、然しもう「どうとも勝手」だった。意識がそういう風に変調を来たしてくれれば、それは打撃に対しては麻酔剤のような効果を持つからだった。
主任が警察で作った共産党の系図を出して、「もう、こんなになってるんだ。」と云って、彼の表情を読もうとした。
「ホウ、偉いもんだ。成程——。」酔払ったように云った。
「おい、そう感心して貰っても困るんだ。」

係はもう殆んど手を焼きつくしていた。
終いに、警官は無茶苦茶になぐったり、下に金の打ってある靴で蹴ったりした。それを一時間も続け様に続けた。渡の身体は芋俵のように好き勝手に転がされた。彼の顔は「お岩」になった。そして三時間ブッ続けの拷問が終って渡は監房の中へ豚の臓物のように放りこまれた。彼は次の朝まで、そのまま動けずにうなっていた。

続けて工藤が調べられた。
工藤は割合に素直な調子で取調べに応じた。そういう事では空元気を出さなかった。色々その場、その場で方法を伸縮さして、うまく適応するように自分をコントロールしてゆくことが出来た。
工藤に対する拷問は大体渡に対するのと同じだった。ただ、彼がいきなり飛び上ったのは、彼を素足のまま立たして置いて、後から靴の爪先で力一杯かかとを蹴ることだった。それは頭の先までジーンときた。彼は取調室を、それをされて二回も三回もグルグル廻った。足首から下は擂木のようにしびれてしまった。かかとから出た血が室の中に円を描いた。工藤は金切声（彼の声は何時もそうだった。）をあげながら、痩馬のように跳ね上った。彼は終いにへなへなに坐り込んでしまった。
それが終ると、両手の掌を上に向けて、テーブルの上に置かせ、力一杯そこへ鉛筆をつきたてた。それからよくやる指に鉛筆をはさんで締める。——これ等を続け様にやると、その代り代りにくる強烈な刺戟で神経が極度の疲労におち入って、一時的な「痴呆状態」（！）になってしまう。弾機がもどって、ものにたえ性がなく、うかつな「どうでもいい」気持になってしまう。そこをつかまえて、警察は都合のいい白状をさせるのだった。
そのすぐ後で取調べられた鈴本の場合なども、同じ手だった。彼は或る意味で云えば、もっと危い拷問をうけた。彼はなぐられも、蹴られもしなかったが、ただ八回も（八回も！）続け様に窒息させられた事だった。初めから終りまで警察医が（！）彼の手首を握って、脈搏をしらべていた。首を締められて気絶する。すぐ息をふき返えさせ、一分も時間を置かずに又窒息させ、息をふきかえさせ、又……。それを八回続けた。八回目には鈴本はすっかり酔払いったた人のように、フラ、フラになっていた。彼は自分の頭があるのか、無いのかしびれ切って分らなかった。ただ主任も特高も拷問係の巡査も、室も器具も、表現派のように解体したり、構成されて映った。そういう朦朧とした意識のまま、丁度大人に肩をフンづかまれて、ゆすぶられる子供のように、取調べを進められた。鈴本は、これは危いぞ、と思った。が、自分が一つ一つの取調べにどう答えているか、自分で分らなかった。
佐多が入れられた留置場には色々なことで引張られてき

ている四、五人がいた。それは留置場の一番端の並びにあって、取調室がすこし離れてその斜め前にあった。
彼は警察につれてこられたとき、自分達は偉大な歴史的使命を真に勇敢にやろうとしていたために、こうされるのだ、と繰り返し、繰り返し思って、自分に納得を与えようとした。然し彼の気持はそれとはまるっきり逆に心から参ってしまっていた。そして留置場に入ったとき、彼は自分の一生が取返しがつかなく暗くなった、と思った。崖の方へ突進して行く自動車を、もうどうにも運転出来ず、アッと思って、手で顔を覆う、その瞬間に似た気持を感じた。その殆んど絶対的な気持の前には、彼が今まで読んだレーニンもマルクスも無かった。「取りかえしがつかない、取りかえしがつかない。」それだけが昆布巻のように、彼の全部を幾重にも包んでしまった。
それに、この塵芥箱の中そのままの留置場は、彼のその絶望的な気持を二乗にも、三乗にも暗くした。室は昼も朝も晩も、それにけじめなく始終薄暗く、何処かジメジメして、雑巾切れのような畳が中央に二枚敷かさっていた。が、それを引き起したら、その下から蛆や虫や腐ってムレたゴミなどがウジョウジョ出る感じだった。空気が動かずムンとして、便所臭い匂いがしていた。吸えば滓でも残りそうな、胸のむかつく、腐った溝水のような空気だった。
彼は銀行に勤めている関係上、何時も裏からではあったが、真に革命的な理論をつかんで、皆と同じように実践に参加していたが、その色々な環境と生活から来る腐合いから云って、低い生活水準にいる労働者とはやっぱりちがわざるを得なかった。普段はそれが分らずにいた。勿論彼さえ務めていれば、それからくる事はちっとも運動の邪魔にならなかった。――留置場の空気が、二日もしないうちにその上品な彼の身体にグッとこたえてきた。彼は時々胸が悪くなって、ゲエ、ゲエといった。然しかえすのでもなかった。自家にいれば、毎朝行くことになっている便所にも行かなくなった。粗食と運動不足がすぐ身体に変調を来たさした。四日目の朝、無理に便所に立った。然し三十分もふんばっていて、カラカラに乾いた鼠の尻尾程の糞が三切れほどしか出なかった。
留置場の中では、彼は一人ぽつんと島のように離れていた。彼には、どうしても、彼等がこういう処に入っていて自由に、気楽に（そうに見えた。）お互が色々なことを話し合ったりする事が分らなかった。佐多は然し、じっとしている事がすぐ苦しくなりだした。今度は彼は立ち上ると、室の中を無意味に歩き出した。が、ひょいと板壁に寄りかかると、そのまま何時までも考えこんでしまった。自分よりはきっともっと悲しんでいるだろう母を思った。母の云った「小じんまりとした、然し幸福な生活」が出来たのではなかったか、それを自分が踏みにじった、そしてこれからの長い生涯、自分は監獄と苦闘！　その間を如何に休みなく、つんのめされ、フラフラになり、暗く暮して行かな

ければならないか、彼にはその一生がアリアリと見える気がした。要らない「おせっかい」を俺はしてしまった、とさえ思った。彼は水を一杯に含んだ海綿のように、心から感傷的に溺れていた。

三十年間「コソ泥」をしてきたと云う眼の鋭い六十に近い男が、

「可哀相に、お前さんのような人の来る処じゃないのに。」

と彼に云った。

思わず、その言葉に彼は胸がふッとあつくなり、危く泣かされる処だった。彼はしかもそういう気持を押えるのではなしに、かえって、こっちからメソメソと溺れ、甘えかかって行く処さえあった。そうでなければ、たまらなかった。

初めての——しかも突然にきた、彼には強過ぎる刺戟に少し慣れてくると、佐多はその考えから少しずつ抜け出て来ることが出来るようになった。少しの犠牲もなくて、自分達の運動が出来る筈がなかった。自分ではちっとも何もせず、一足飛びに直ぐ（キット他の誰かがしてくれた）革命の成就してしまった世界のことだけを考えて、興奮している者にはこういう経験こそ、いいいましめだ。——そこまで佐多は自分で考え得られる余裕を取りもどしていた。他事（よそごと）だ、余計なおせっかいさえしなければ、自分達は小じんまりと暮せるんだという中間階級につきものの意識が何時でも表へ出てくる。労働者がこの運動をするのは、自分が苦しいからするので、それは誰のためのものでもない。自分のためのものだ。処が佐多達からは何時でも何か「他人のため」というそれが、鎖を離れたがる犬のように、油断を心に許せば直ぐひょい、ひょいと出たがる気持だった。——その、何時でも前から危険に思い、思い来たそれに危うく陥りかけていたのを知り、佐多はその冒瀆な自分に驚いた。

けれども、佐多は、それはしっかりそういう考えになれたのではなかった。一日毎に——又一日のうちにも、彼にはこの逆な二つの気持が代る代る起った。彼はその度に憂鬱になったり、快活になったりした。恐ろしく長い、しかも何もする事なく、たった一室の中にだけいなければならない彼には、その事より他に考えることが無かった。

夜、十二時を過ぎていた頃かも知れなかった。佐多は隣に寝ていた「不良少年」に身体をゆすられて起された。

「ホラ……ホラ聞えないか？」暗がりで、変にひそめた声が、彼のすぐ横でした。

佐多は始め何の事か分らなかった。

「じっとしてれ。」

二人は息をしばらくとめた。全身が耳だけになった。深夜らしくジィン、ジィン、ジーンと耳のなる音がする。佐多はだんたん睡気から離れてきた。

「聞えるだろう。」

遠くで剣術をやっているような竹刀の音（たしかに竹刀

の音だった。）が彼の耳に入ってきた。それだけでなしに、そしてその合間に何か肉声らしい音も交ってきこえた。それは然しはっきり分らなかった。

「ホラ、ホラ……ホラ、なあ。」その音が高まる度に、不良少年がそう注意した。

「何んだろう。」佐多も声をひそめて、彼にきいた。

「拷問さ。」

「……!?」いきなり咽喉へ鉄棒が入ったと思った。

「もっとよく聞いてみれ。いいか、ホラ、ホラ、あれァやられてる奴のしぼり上げる声さ、なあ。」

佐多には、それが何んと云っているか分らなかったが、一度きいたら、心にそのまま沁み込んで、きっと一生忘れる事が出来ないような悲痛な叫び声だった。彼はじいッとそれに耳をすましているうちに、夜不気味な半鐘の音をききながら、火事を見ている時のように、身体が顫わさってきた。「歯の根」がどうしても合わなかった。彼は知らない間に、片手でぎっしり敷布団の端を握っていた。

「分る、分るよ！　な、殺せ――え、殺せ――えッて、云ってるらしい。」

「殺せ――えッて？」

「ん、よく聞いてみれ。」

二人は又じっと息を殺して、きいた。叫び声は遠くからヴァイオリンの一番高い音の細い鋭さをもって、針先のように二人の鼓膜をついた。殺せ――え、殺せ――えッ！

そうだ、確かにそう云っている。

「なア、なア。」

「…………」

佐多は耳を両手で覆うと、汗くさいベト、ベトした布団に顔を伏せてしまった。彼の耳は、そして又彼の脳髄の奥は、然しその叫声をまだ聞いていた。しばらくして、それが止んだ。取調室の戸が開いたのが聞えてきた。二人は小さい窓に顔をよせて廊下を見た。片方が引きずられている乱れた足音がして、二人が前の方へやってくるのが見えた。薄暗い電燈では、それが誰か分らなかった。うん、うん、うんという声と、それを抑える低い、が強い息声が静まりかえっている廊下にきこえた。彼等の前を通るとき、巡査の声で、

「お前は少し強情だ。」

そう云うのが聞えた。

佐多はその夜、どうしても眠れず、ズキズキ痛む頭で起きてしまった。

彼は「拷問」それを考えると、考えただけで背の肉がケイレンを起すように痛んだ。膝頭がひとりでにがくついて、へなへなと坐りこんでしまいたくさえなるのを感じた。すぐ咽喉が乾いてたまらなかった。

それから二日ばかりした。佐多は立番の巡査に起された。来た！　と思った。立ち上るには立ち上った。然し彼の身体は丸太棒のように、自分の意志では動かなかった。

彼は、巡査に何か云おうとした。然し彼の顎ががくりと下って、思わず「あふは、あふは、あふは……」赤子がするような発音が出た。

巡査は分らない顔をして、今までフウ、フウとはいていた煙草の煙の輪をとめて「どうした？」と云った。

龍吉の取調べは——初め、彼が学校に出ていたとき、三回程検挙された事があった。けれども、その時は彼から見れば、こっちがかえって恐縮するようなのだった。「お前」とか「貴様」そう云いはしなかった。「貴方」だった。それに彼等が龍吉からかえって色々な事を教わる、という態度さえあった。それが、然し、龍吉が学校を出て運動の「表」へ出かかるようになってから、だんだん変って行った。「貴方」と「お前」をどまついて混用したり、又露骨に今までの態度を変えた。然しそれでもインテリゲンチャである彼には、渡とか鈴本とか工藤などに対するのとはちがって、ずウッと丁寧であった。それには、龍吉は苦笑した。渡は、「小川さんはねえ、警察で一度ウンとこさなぐられたら、もっと凄く有望になるんだがな。」と云ったことがあった。渡はこういう事では、何時でもズパズパ云った。

「君より感受性が鋭敏だから、結局同じことさ。」

彼は今までにただ一寸したおどかしの程度に平手しか食っていなかった。が、今度の事件では渡などと殆んど同じに警察から龍吉がにらまれた。それが「凄く」彼に打ち当ってきた。

取調室の天井を渡っている梁に滑車がついていて、それの両方にロープが下がっていた。龍吉はその一端に両足を結びつけられると、逆さに吊し上げられた。それから「どうつき」のように床に頭をどしんどしんと打ちつけた。その度に堰口を破った滝のように、血が頭一杯にあふれる程下がった。彼の頭、顔は文字通り火の玉になった。眼は真赤にふくれ上がって、飛び出した。

「助けてくれ！」彼が叫んだ。

それが終ると、熱湯に手をつっこませた。

龍吉は警察で非道い拷問をされた結果「殺された」幾人もの同志を知っていた。直接には自分の周囲に、それから新聞や雑誌で。それ等が惨めな死体になって引渡されるとき、警察では、その男が「自殺」したとか、きまってそう云った。「そんな筈」の絶対にない事が分っていても、然しそれでは何処へ訴えてよかったか？——裁判所？ だが、外見はどうあろうと、それだって警察とすっかりグルになってるではないか。警察の内では何をされても、だからどうにも出来なかった。これは面白い事ではないか。

「これが今度の大立物さ。」拷問係が云っている。彼はグラグラする頭で、そういうのを聞いていた。

次に、龍吉は着物をぬがされて、三本一緒にした細引でなぐりつけられた。身体全体がビリンと縮んだ。そして、

その端が胸の方へ反動で力一杯まくれこんで、肉に食いこんだ。それがかえってこたえた。彼のメリヤスの冬シャツがズタズタに細かく切れてしまった。——彼が半分以上も自分のでなくなっている身体を、ようやく巡査の肩に半ば保たせて、よろめきながら廊下を帰ってゆくとき、彼が一度も「拷問」を受けた事のなかった前に、それを考え、恐れ、その惨酷さに心から惨めにされていた事が、然し実際になってみたとき、ちっともそうではなかった事を知った。自分がその当事者にいよいよなり、そしてそれが今自分に加えられると——思ったとき、不思議な「抗力？」が人間の身体にあった事を知った。殺してくれ、殺してくれと云う、然し本当のところ、その瞬間残酷だとか、苦しいとか、そういう事はちっとも働かなかった。云えば、それは「極度」に、そうだ極度に張り切った緊張だった、「中々死ぬもんでない。」これはそのまま本当だった。龍吉はそう思った。然し彼がゴロツキの浮浪人や乞食などの入っている留置場に入れられたとき、——入れられた、とフト意識したとき、それッ切り彼は気を失ってしまった。

次の朝、龍吉はひどい熱を出した。付添の年のふけた巡査が額を濡れた手拭で冷やしてくれた。始終寝言をしていた。一日して、それが直った。ゴロツキの浮浪人が、

「お前えさんのウワ言は中々どうして。」

龍吉はギョッとして、相手に皆云わせず、「何んか、何んか？」とせきこんだ。彼は付添の巡査のいる処で、飛んでもない事を云ってしまったのではないか、とギクリとした。外国では、取調べに、ウワ言をする液体の注射をしてそれに乗じて証言を取る、そういう馬鹿げた方法さえ行われている事を、龍吉は何か本で読んで知っていた。

「ねえ、中々死ぬもんか。——一寸すると、又中々死ぬもんか、さ。何んだか知らないが、何十回もそれッばかりウワ言を言っていたよ。」

龍吉は肩に力を入れて、思わず息を殺していたが、ホッとすると、急に不自然に大声で笑い出した。が「痛た、痛た、痛た……。」と、笑声が身体に響いて、思わず叫んだ。

演武場では、斎藤が拷問されたので気が狂いかけていると云っていた。それは、斎藤が取調べられて「お定まり」の拷問が始まろうとしたとき、突然「ワッ!!」と立ち上ると、彼は室の中を手と足と胴を一杯に振って、「ワアー——、ワアー——、ワアー——ッ!!」と大声で叫びながら走り出した。巡査等は始め気をとられて、棒杭のようにつッ立っていた。皆は変な不気味を感じた。拷問、それが頭に来た瞬間、カアッとのぼせたのだ、気が狂ったのだ、——そう思うと、誰も手が出せなかった。

「嘘だ。やれッ！」

司法主任が鉛筆を逆に持って、聴取書の上にキリキリともみこみながら、低い、冷たい声で云った。巡査等は、不器用な、舞台の兵卒のように、あばれ馬のように狂ってい

る斎藤を取りかこんだ。――なぐりつけた。一度なぐると然し皆は普通の「拷問意識」に帰っていた。誰かが斎藤の顔の真中を、竹刀で横なぐりに叩きつけたらしかった。花火でも散るように「見事」に鼻血があふれ飛んだ。見るうちに着物の前が真赤に染ってしまった。彼はワァ――、ワァ――と、(が、何処かに変な空虚をもった) 叫声をあげて、跳ねとんでいた。彼の顔も真赤になった。血の中からあげた、そのままの顔だった。

「これァ今駄目だ。」司法主任が「やめた、やめた。――この次だ。」と云った。

そして後で証拠の尾をつかまれぬように、巡査は血のドロドロについた着物を取りあげてしまった。

斎藤はそのまま十日も取調べをうけなかった。そのうち三日程演武場にいて、監房へ移されて行った。が、拷問があってから、斎藤は今までよりは眼に見えて、もっと元気になった。然しその元気に何処か普通でない――自然でない処があった。何か話しかけて行っても、うっかりしている事が多く、めずらしく静かにしている時には、独りでブツブツ云っていた。

沢山の労働者が次から次へと、現場着のまま連れられてきた。毎日――打ッ続けに十日も二十日も、その大検挙が続いた。非番の巡査は例外なしに一日五十銭で狩り出された。そして朝から真夜中まで、身体がコンニャクのようになる程馳けずり廻された。過労のために、巡査は附添の方に廻ると、すぐ居眠りをした。そして又自分達が検挙してきた者達に向ってさえ、巡査の生活の苦しさを洩らした。彼等によって拷問をされたり、又如何に彼等が反動的なものであるかという事を色々な機会にハッキリ知らされている者等にとって、そういう巡査を見せつけられることは「意外」な事だった。いや、そうだ、矢張り「そこ」では一致しているのだ。ただ、彼等は色々な方法で目隠しをされ、その上催眠術の中に、うまうまと落されているのだった。では、どうすればよかったか？　誰が一体その目隠しを取り除けてやり、彼等の催眠術を覚してやらなければならないのだ？　――これァ案外そう俺達の敵ではなかったぞ、龍吉も他の人達と同じようにそう思った。

終いには、検挙された人の方で、酷き使われている巡査が可哀相で見ていられない位になった。どんなボロ工場だって、そんなに「しぼり」はしなかった。

「もう、どうでもいいから、とにかく決ってくれればいいと思うよ。」頭の毛の薄い巡査が、青いトゲトゲした顔をして龍吉に云った。「ねえ、君。これで子供の顔を二十日も――ええ、二十日だよ――二十日も見ないんだから、冗談じゃないよ。」

「いや、本当に恐縮ですな。」

「非番に出ると――いや、引張り出されると、五十銭だ。それじゃ昼と晩飯で無くなって、結局ただで働かせられて

る事になるんだ、——実際は飯代に足りないんだよ。人を馬鹿にしている。」
「ねえ、水戸部さん（龍吉は名を知っていた）貴方にこんな事を云うのはどうか、と思うんですが、僕等のやっていることって云うのは、つまり皆んなそこから来ているんですよ。」
水戸部巡査は急に声をひそめた。「そこだよ。俺達だって、本当のところ君等のやっている事がどんな事か位は、ちァんと分ってるんだが……。」
龍吉は笑談のように、「そのがが要らないんだがなあ。」「うん。」巡査はしばらく考え込むように、じっとしていた。「……何んしろ、見かけによらない非道い生活さ。ねは苦笑してうなずいてみせた。）昨日さ、どうにもこうにも身体が続かないと思って、附添をしながら思い切って寝てしまったんだよ。いい塩梅だと思っていると、又検挙命令さ。がっかりしてしまった。それでもイヤイヤ四人で出掛けた。ところが、途中でストライキをやろうッて話が出たんだよ。」「へえ。——。巡査のストライキ。」然し巡査が案外真面目な顔で云うのを見て、彼はフトその笑談を止めた。
「ストライキなら、その道の先生が沢山いるんだから、教われぱいい。それに今度の事件は全国的で、何処もかしこも、てんてこ舞をしてるんだから、やったら外れッこなく万々歳だ、という事になったんだ。」
龍吉はその話にグイグイ魅力を感じてきた。
「そのうちでは、ただ俺は署長をたたきのめして、ウ、ウーンと思う存分手と足をのばして、一度——たった一度でいいから、グッすり寝こんでみたい、と云うのがあったり、署長の野郎の元気のいいのは、今度の事件で市内の大地主や大金持から特に応援費として、たんまり懐に入れてるからだとか……。」
龍吉は聞耳をたてた。
「偉いことになったんだ。皆は、嫌になった、と云って、ワザと、ブラブラ歩いた。それから何処かへ行って一休みして行こうや、という事になって、ついでにＨ派出所へ寄って漫談をやらかしてしまったよ」
「それで？」
「それだけだけどさ。」
「………。」
「内密だけど、腹をわって見れば、どの巡査だって皆同じさ。ただねえ、ただ巡査だっていうんで、それに長い間の巡査生活で根性が心からひねくれて、中々おいそれと行かないだけさ。」
龍吉は明らかに興奮していた。これ等のことこそ重大な事だ、と思った。彼は、今初めて見るように、水戸部巡査を見ていた。蜜柑箱を立てた台に、廊下の方を向いて腰を下している、厚い幅の広い、然し円く前こごみになってい

る肩の巡査は、彼には、手をぎっしり握りしめてやりたい親しみをもって見えた。頭のフケか、ホコリの目立つ肩章のある古洋服の肩を叩いて、「おい、ねえ君。」そう云いたい衝動を、彼は心一杯にワクワクと感じていた。

九

龍吉が演武場から隔離される二、三日前の事だった。それより四五日前に、取調べの結果隔離されて監房一号に行っていた労働者で、彼が組合で知り合っていた木下というのがいた。夜の十時頃、それが巡査と一緒に演武場に入ってきた。そして二人で、彼がそこに残して行った持物を纒めにかかった。龍吉が眼を覚した。

「オ。」龍吉が低く声をかけた。

木下は龍吉の方を見ると、頭をかすかに振ったようだった。――「札幌廻しだ。」木下が低くそう云った。

龍吉は「う？」と云ったきり、いきなり何かに心臓をグッと一握りにされた、と思った。札幌廻り、というのは十中八、九もう観念しなければならない事を意味していたからだった。

演武場を出るときは、髪を長くのばしていたのを知っていた龍吉は、彼が地膚の青いのが分るほど短く刈っていたのに気付いた。「頭は？」

木下はフト暗い顔をした。

「あんまり、グングンやられるんで刈ってしまった。」

持物が纒ってしまうと、巡査が木下をうながした。出しなに、木下は然し、何かためらったように巡査に云っている。すると、巡査は龍吉の所へきて、面倒臭そうな調子で、

「木下が、煙草があったら君から貰ってくれないかって云ってるんだが。」と云った。

そうだ！　気付いた。――組合でも、木下は煙草だけは皆から一本、二本と集めて、何時でも甘そうにのんでいた。札幌へ護送される木下のために、せめて煙草だけでも贈ることが出来ることを龍吉は喜んだ。それが何よりだった。彼は、まるで、周章てた人のように、自分の持物の所へ走って、急いでバットの箱を取り出した。所が、何んという事だ、一箇しかない、しかも、それが軽いじゃないか！意地の悪い時には、悪いものだ。三本！　たった三本しか入っていなかった。彼は飛んでもない悪いことをした子供のように、

「君、三本しか無いんだ。」済まなさを心一杯に感じながら云った。

「いい、いい！　本当に沢山！　有難う、有難う！」木下は子供が頂戴々々をするときのように両手を半ば重ねて出した。

「一本で沢山だ！」

側に立っていた巡査が、いきなり二本取りあげてしまった。瞬間二人は、二人とものも云えずぼんやりした。

「のませてやる事すら、過ぎた事なんだぜ！」
何が「ぜ」だ！　龍吉は身体が底からブルブル顫わさってくる興奮を感じた。然し、
「お願いです、僅か三本です。それに木下君は特に煙草……。」
みんな云わせなかった。「誰が、僅か三本だッて云うんだ。」
木下は石のような固い表情をして、黙っていた。たった一本のバットをのせたきりになっている彼の掌が分らない程に顫えていた。——二人が出て行ってしまってから、龍吉は木下の気持を考え、半分自分でも泣きながら、巡査の返してよこしたバットを粉々にむしっていってしまった。
「えッ糞、えッ糞、糞ッ！　糞ッ！　糞ッ！　糞ッ！」

三日になり、四日になり、十日になると、然しこれは、そんな風に単純に算えてしまう事が出来ない長さ——無限の長さのように思われた。渡や工藤や鈴本などは、それでも、そういう場所の「退屈」に少しは慣れていた。然し又たとい同じように慣れていないとしても、龍吉や佐多にくらべて、太い、荒い神経を持っていたので、よりそれには堪え得た。殊に佐多は惨めに参ってしまっていた。
佐多の入っていた処は渡のところから、そう離れてはいなかった。夜になり、佐多は身体の置き処もなく、話もなく、イライラするのにも中毒して、半分「バカ」になったように放心していると、幾つにも扉をさえぎられた向うから、低く、

夜でも　昼でーエも
牢屋は暗い。
いつでも鬼めが
窓からのぞく。

歌うのが聞えてきた。渡が歌うのだった。立番の巡査もそう渡には干渉しなくなっているらしかった。

のぞことままよ、
自由はとらわれ、
鎖はとけず。

一番後の「鎖はとけず。」の一連に、渡らしい底のある力を入れて歌っているのが分った。そこだけを何度も、必ず繰り返して歌った。彼には渡の気持が直接に胸にくる気がした。
佐多には、それが何時でも待たれる楽しみだった。きまって夕暮だった。佐多は何時もなら、そんな歌は彼がよく軽蔑して云う言葉で「民衆芸術」と片付けてしまったものだった。それがガラリと変ってしまった。然し又歌でなくても、外を歩く人の単純なカラカラという音、雪道のギュ

ンギュンとなる音、そういうものにも、よく聞いてみて複雑な階調のあるのを初めて知ったり、何処からか分らないボソボソした話声に不思議な音楽的なデリケートなニュアンスを感じたりした。天井に雪が降る微かにサラサラする音に一時間も――二時間も聞き入った。すると、それに色々な幻想が入り交り、彼の心を退屈から救ってくれた。彼は、何も要らなかった。「音」が欲しかった。彼の心が少しでも動くことがあるとすれば、それは「音」に対してだけだった。一緒にいる不良少年の女をひっかける話や、浮浪者の惨めな生活などは、何時もまだ「生物」である証拠として、動くことがあるとすれば――それは「音」に対してだけだった。一緒にいる不良少年の女をひっかける話や、浮浪者の惨めな生活などは、何時もならキット佐多の興味をひいた。が、それは二、三日すると、もう嫌になってしまっていた。

小樽の一つの名物として、「広告屋」がいた。それは市内商店の依頼を受けると、道化の恰好をして、辻々に立ち、滑稽な調子で、その広告の口上を云う。それに太鼓や笛が加わる。――それが一度留置場の外の近所でやった。拍子木が凍えた空気にヒビでも入るように、透徹した響を伝えると、道化た調子の口上が聞えた。

スワッ!! それは文字通り「スワッ!!」だった。留置場の中の全部は「城取り」でもするように、小さい、四角な高い処につけてある窓に向って殺到した。遅れたものは、前のものの背に反動をつけて飛び乗った。そして、その後へも同じように外のものが。――「音」には佐多ばかりではなかったのだ!

彼は夜、何遍も母の夢を見た。殊に母が面会に来た日の夜、ウツラウツラ寝ると母の夢を見、又眠ると母の夢を見……それが朝まで何回も続いた。

「お前、やせたねえ。顔色がよくないよ。」

面会に来た母が彼の顔を見ると、見ただけで息をつまらしてそう云った。

「お前が早く出て来てくれるようにって、仏様に毎日お願いしてるよ。」母が皺くちゃの汚れたハンカチを出して、顔を覆った。母の「仏様」と云うのは、死んだ父の事だった。綺麗好きな母が、こんなにハンカチを汚していることが彼の胸を突いた。母は然し、何時ものようにワケの分らない事をクドクド云って、すすり上げた。彼は外方を向いていた。その合間に、彼の着物の襟の折れているのを、手をのべて直してくれた。彼はぎこちなく首を曲げて、じっとしていた。母の匂いを直接に顔に感じた。

留置場に帰って、母の差入れてくれたものを解いてみた。色々なものの中に交って、紫色した小さい角瓶の眼薬が出てきた。佐多が家にいたとき、何時でも眠る前に眼薬を差す習慣があった。

「やっぱりお母アさ。面会はお母アか?」隣りで、着物を解くのを見ていた不良少年が、それを見て口を入れた。

「俺にだって、お母アはいるんだよ。」

佐多はそれから四、五日して警察を出された。

彼は、自分でも自分が分らない気持で外へ出た。――だ

が、確かに、それは外だった。明るい雪に「輝いている」外にちがいなかった。彼は外へ出た瞬間目まいを感じた。とにかく「外」だ！〇〇の家がある。××屋がある。××橋がある。どれも皆見覚えがある、空、そして電信柱、犬！　犬までが本当にいる、子供、人、「自由」に歩いている人達、何より自由に！

　ああ、とうとうこの世の中に帰ってきた！

　彼は其処を通っている人に、男でも、女でも、子供にでも何か話しかけ、笑いかけ、走り廻りたい衝動を感じた。それはそして少しの誇張さえもされていない気持だった。彼は自分の胸をワクワクと揺すって、底から出てくる喜びをどうする事も出来なかった。「とうとう、とうとう出て来た！」——彼は思わず泣きだした。泣きだすと、後から後からと心臓の鼓動のように、ドキを打って涙があふれてきた。彼は、道を歩いている人が立ち止って彼の方を不審に見ているのもかまわずに、声を出して、しゃくりあげた。彼は何も考えなかった。自分以外の誰のことも、何も！そんな余裕がなかった。

「とうとう出た！　とうとう!!」

　——佐多が出たという事が一人から一人へ、各監房にいる者に伝わって行った。

　渡は別にどういう感じもそれに対しては起さなかった。何も好きこのんで監房にたたき込まれている必要はないのだから、よかったとは思った。彼は佐多をあまり知らなかった。同じ運動にいても、会社員——インテリゲンチャというものからくるものと、矢張り膚が合わなかった。別にイヤではなかった。無関心でいた、と云ってよかった。

　然し工藤は、龍吉などと同じように、こういうインテリゲンチャがどしどし運動の中に入ってきて、自分達の持ってない色々の方面の知識で、ともすれば経験の少ない向う見ずな一本調子になり易い自分達の運動に、厚さと深さを加えなければならない、と思っていた。勿論佐多などには、それらしい多くの欠点はあるにしても、裏にいてもらって、その都度——彼でなければならない役に、役立って貰えればよかった。殊に工藤は、この方面にはまだまだ自分達が沢山の事をしなければならないもののある事を考えていた。

× ×

　取調べは官憲の気狂いじみた方法で、ここには書き切れない（それだけで一冊の本をなすかも知れない）色々な残虐な挿話を作って、ドシドシ進んで行った。そして「事実」の確定したものは、札幌の裁判所へ順繰りに送られて予審へ廻された。

　護送される前に、それぞれの取調べに当った司法主任や特高は自腹（？）を切って、皆に丼や寿司などを取り寄せ

て御馳走した。自分も一緒に食いながら、急に、接木をしたような親しみを皆に見せた。
「とにかくさ、」――話のついでに（ついでに!?）軽くはさんだ。「とにかく、ここで取調べられた時に云った通りの事を云えばいいのさ。話が違ったりすると、結局君等の不真面目な態度が問題になって、不利だからなあ……。」
そして世間話をしながら、又何気ない調子で、その同じ事を繰り返した。
「こんなに奢っていいのか。」意味をちァんと知っている渡や工藤や鈴本はひやかした。
「分った。分った。何も云わない。その通りさ。」笑談半分に何度もうなずいて見せた。
初めての斎藤や石田は、変な顔をして御馳走をうけた。変だなあ、そうは思うが、それが特高や主任の「手」であることは分らなかった。彼等は、自分達の手で作りあげた取調書が予審でガラリと覆えるようなことがあると、「首」が危くなったり、「覚え」が目出度なくなり、昇進や出世に大きく関係したからだった。その事情をすっかりつかんでいる渡などは、逆に利用して、札幌へ行く途中、附添の特高にねだって、停車場で弁当や饅頭を買ってもらった。
「可哀相に、あまりせびるなよ。」特高の方で、そんな風に言い出すようになった。
四月二十日までには小樽警察に抑留されていた全部が札幌へ護送されて行ってしまった。急に署内がガランとした。壁の落書だけが、人の居ない室に目立った。皆を入れて置いた壁には申し合わせたように、次の文句が殆んどちがいなく、入念に刻みこまれていた。

三月十五日を忘れるな！
共産党　万歳！

三月十五日を銘記せよ。
日本共産党万歳！
一九二八・三・一五！
田中反動内閣を殺せ！

共産党　万歳
労働農民党　万歳
万国の労働者　団結せよ
三月十五日を覚えてろ。
三月十五日を忘れるな
労働者と農民の政府を作れ。

日本共産党　万歳！

（一九二八・八・一七）

（一九二八年一一・一二月「戦旗」）

朽ちゆく望楼

間宮茂輔

一

瀬田野源助は、人々の凝視をあびて、ひっそりとつめたく横たわっていた。痩せひからびて木彫の面のようにみえる顔に、やがて来る死の影を漂わせ、蒲団にうずもれた褐色の骨張ったからだは人間というよりも血の枯れきった木乃伊をおもわせた。六十年の生涯をつうじて、かつて一度も華やかな青春をもたなかったように曝されてきた男の臨終にふさわしく、窓の外では東風が吹きすさび、空と海とを塗りつぶした闇をかすめて霧が飛んでいた。

中山の船は倉橋島へ……

太田の船は濃美島へ……

二艘の船は、源助のために医師を迎えようとして浪の騒ぐ黄昏の海を八丁艪立てて漕ぎ出して行ったが、一艘もまだ戻って来なかった。そしていまはもはや夜というよりもあかつきに近い時刻であった。あきらめ切った感傷が、深い疲労と共に、人々を唖のように黙らせた。

島の沖に渦をまいて、早瀬の瀬戸へおちてゆく夜の潮が遠くで闇をゆすっていた。源助が微に身動きするたびに人人をかすめる不安のいろが、物の気はいといえばいえた。雑木の梢がざわざわとゆれ、風が悲鳴に似た声をたてて吹いている。と、遠い海をゆく汽船のたえだえな汽笛の音がわびしく聴えてきた。

「夜が明けるぜよ……」

ぽつりと、誰かがそう云った。

「白鳳丸の汽笛かいな、あれや？」

「そうらしいのう」

低い囁きが、静かな波のようにひろがっていった。

「どれ……」

そういって腰をうかせ、窓ガラスに顔をよせて、くらい空を仰ぐ者がいた。

「源助は陰気な男じゃったけに……」

洋燈の芯をひきあげながら、独言のようにそういったのは島司の名村であった。

「死ぬる時なと、せめて明るうしてやらんことには……」

「油をつごか？」

名村の言葉をうけて一人の若者が起ちそうにした。人々はその時、不意に自分たちへ振向けられている太田屋の嶮しい顔を見た。

「頼むけに、静かにしておくれい！」
それは鋭く震えた声であった。
「俺ァあきらめ切れんのじゃ。俺ァ源助を、死なせともない殺しともないで胸がいっぱいなんじゃ……」
ひっそりと鎮りかえった人々の間を、しめっぽい動揺が波紋のようにひろがっていった。
実際、先刻から誰よりも深い哀愁に捉えられているようにみえたのは太田屋であった。酒乱と好色と、時に貪慾そのもののような太田屋の、逞しい胸や肉塊のような顔から悵然とした寂しみが漂い出ている。共に辛酸を嘗めてきた女房の通夜の晩に、桑畑の闇に酔って娘をおいかけた太田屋だ。彼の今夜のように弱々しく沈んだ姿をまだ誰も見た者はなかった。
太田屋の胸には、源助と手を携えて乗っ切ってきた荒い風浪の幾星霜が、今宵、源助の死を眼前にしてまざまざと描き出されるようであった。さびれきった太田屋の身代を今日在るまでに建て直してきた長い辛苦が、深い実感で回顧され、そこに太田屋は、名沖師源助の姿をひしひしと思い泛べているのだ。
それは空と海を相手の一篇の苦闘史であるといえたし、暴風雨としけを相手の血みどろな生活記録でもあった。幾度かの暴風雨に船は砕かれ、網は破られ、船具一切を流失し、そのたびに疲憊のどん底から這い起きてきた太田屋であった。長期の不漁に際会するごとに、家倉を抵当に辛うじて没落を免れてきた太田屋でもある。その太田屋を今日の全盛においた者は誰であったか？　云うまでもなく、太田屋一家の必死な奮闘にも拠った。しかし沖師として瀬田野源助が㊅の網にいなかったら……太田屋はそうおもい、太田屋今日の繁栄の蔭にうずもれて死んでゆく源助が狂おしいまでに不憫におもわれた。
「……」
太田屋は逞しい腕をくみ、じっと俯向いていたが、やがて激しい言葉が彼の厚ぼったい唇を衝いて出た。
「俺ァ源助が不憫で不憫でならんのじゃ」
人々の動揺する中で、太田屋の潮がれた声がだんだんと歔欷を帯びはじめた。
「きいとくれい！　此奴ァな、太田屋のために女房ももたず働いてくれたんじゃ。金をくれてやろう云うてもいらんいいよった。家を建ってやろう云うても、要らん云いよった。酒も飲まなんだ、情婦一人もたなんだ。あけてもくれても、網のことばっかり海のことばっかり、太田屋のことばっかり思うて……おもうて……」
肉にうずもれた太田屋の両眼からとめ度のない涙があふれ出ていた。人々は俯向いてみな洟をすすった。
「源助よう！　われァ情無い死ざまをしてくれるのう…」
太田屋は顔中を皺にしていいつづけた。
「気が狂うて死ぬとは何事じゃい……早よう死んで極楽へ行てくれ！　われの、そのような顔みとるのが俺ァ辛らい

んじゃ。われの葬式は、太田屋の身代のある限りで豪勢にだいてやるぞよう……おおともい！　この島初っての葬式でよ、大きな大きな石の墓を建ってやるともいな……」

言い終ると太田屋は、源助の枕元に身を伏せて、化石したようにうごかなくなってしまった。人々は、太田屋自身が源助と同じように狂うのではないかとおもい、うすら寒い不安を感じた。

沖で鷗が鴉のように啼くのがきこえた。感激の後の疲労が、人々をまた唖のように沈黙させた。と、見えた時、

「弁解は置きなんせい！」

鋭い声で、この重苦しい沈黙を破った者があった。はっきり敵意のこもったその声が室中の人間をぎょっとふりかえらせた。そして人々はそこに、皮肉に笑っている魚仲買人の高橋伝次郎を発見した。

いうまでもなく太田屋は、身を起して伝次郎を睨むようにしていたが、

「俺ァわけがあっていうのじゃ」

相手の再び憎々しげに言う言葉の終らぬまえに太田屋のたくましい腕が飛んだ。支える者がいて拳は届かなかったが、それで一座は総立ちになった。義眼の村医ひとりが、臨終の源助を庇うように、人々の尻を両手で押しのけていた。

「いうてみい！」

太田屋は蒼ざめて声を震わせた。

「おお、いうともい！」

高橋はかねて期していたように見えた。太田屋の怒号を前にして、おちつきはらった、しかし鋭い声で云い始めた。

「この家はこれァ何んじゃ！　これが太田屋の源助の家かいな。ふん、死人に弁解みたようなこというて、それがどうなるんじゃい！　太田屋の身代は源助あっての身代じゃろが、せめて家らしい家を建ってやったとて、何んで罰が当るもんか！」

「じゃけに俺ァ何度も何度も、源に……」

太田屋は人々の腕を振きって相手に飛びかかろうと身悶えした。それを周囲の者が抱きとめていた。

「高橋！　われは場所柄ちうものを弁えんのか」

島司の名村はそう叫んで、伝次郎の頬を激しく打った。

「皆な気いつけろよ！　うかうかせると俺らどうなるか知れやせんぞ。源助がよい見本よ」

高橋は名村に打たれながらも、平然としてそういうと、席を蹴って出ていった。

鎮まってきた殺気の中で、洋燈の焔が油煙をたててゆれていた。

「みな坐っておくれい」

太田屋は、自分から先にどっかと坐り、そして呻くような声で、

「俺ァ今夜は何もいわん……」

と呟いた。

人々の心持は、しかしこの意外な出来事によって完全に乱されていた。高橋伝次郎の投げた石は池の中心に落ちていた。人々は瞬間、臨終の源助を忘れ、この峠の上に源助が奇妙な家を建てた当時のことを新しく蘇がえらせた。

峠……そう島の人間は呼び慣わしている。

東海岸「地蔵山」の急斜面を一直線に滑って来る道と、西海岸「榎山」の山肌を段畑にそうて起伏して来る道とがまじわり、そこから南海岸の田の浦へ通うダラダラ坂と、北岸の、波止場を中心にひろがった村の方角へ下りる坂道とが左右にわかれ、曖昧な十字路を形成していた。どの方角からきた者もそこの雑木林で一服する習慣と、それにふさわしい地勢とが自然に峠と云う名称を生み出したものであった。峠の頂上にたつと、島をかこむ海の大半が一眸にして眺められる……。

半歳前に源助は、この峠の上にみすぼらしい奇妙な形の家を建てたのであった。

それは背の高い、一室ぎりのいわば望楼のような家であった。幾本かの丸太を地上に打込み、その上に床板を張り、梯子段を登って室にはいるように作られてある。そればかりでなく、室の南北に窓をあけ、雨戸を用いずに硝子張にした事が村人を驚かせた。

「源助は、峠の上に、燈明台を建てる気かも知れんぞいな……」

住み馴れた太田屋の借家から僅かな家財道具を運びこみ、源助が峠の家に移った夜、その望楼のような家の窓をもれて、洋燈の光が一筋の帯のように射すのが見えた。

しかしこの望楼式の掘立小屋が、源助の余生を送るべき最後の住居だということが知れわたった時、太田屋に対する非難の声が初めてわき起って来たのだ。そしてこれは、島の事実上の主権者である太田屋に対する最初の非難でもあった。太田屋の源助か、源助の太田屋か……とそういわれて来た源助の生涯を傾けての忠勤に対して、それはあまりに貧しい家だったからである。

或朝、峠の上の望楼からは、どこの島方でも魚群の見えたときに吹き鳴らす法螺貝の音が聴えてきた。そして太田屋の家の屋根で打振られる赤い旗を見た村人は、その時になって漸く源助の意を悟ったのであった。

沖に出るのをやめた源助は、その南北に窓を持つ望楼のような家にいて、朝に夕に海を眺めていたのだ。海の上では千里眼じゃ――そう云われた細い三角眼をすえて、沖を通る魚群を一匹も見逃すまいとしていたのだ。

「源爺は偉い男じゃのう」

「そうともいな……」

法螺の音が、島の静寂を破って響いて来ると、太田屋では若者を屋根に登らせてそれに答える一方、網が担ぎ出され、波止場は船出のさけびで充満した。源助の隠退を知ってひそかに喜んでいた附近の島の網船も、これでは手が出

せなかった。H湾内の隅々には、依然として(太)の大漁旗が勝誇ったようにひるがえりつづけた。
源助は時おり、杖をついて峠から村へ下りて来た。瘦せた源助は、けれど幸福そうにみえた。村人はいつか太田屋に対する非難をきれいに忘れた。源助自身が幸福そうな姿をしているのに、自分らが太田屋を罵る必要はどこにもないと気がついたからである。そして、それは全くその通りであった。
そして今日という日が来たのである。
この七八日、漁のなかった太田屋では、源助の吹き鳴らす法螺の音に躍り上った。
「大漁じゃ、大漁じゃ！」
「不漁の後は大漁が定じゃ！」
若者たちにまじって太田屋も昂奮していた。波止場の石垣の上に突立って、鉢巻の額に汗をおぼえつつ太田屋は、船の者を叱咤していた。
「網の尻は轆轤に結ぶんじゃ！」
「手の空いた奴ァ碇を引揚げろい！」
「えい、舳を突張らんかァ！」
怒号の隙に太田屋は、ふと何気なく、自分の家の屋根を仰いだ。源助の法螺に答えるために旗を振っている若者の脚が疲れきってよろよろしているのを彼は認めた。
「源の奴、旗が見えんのかいな」
今朝のような事は一度もなかった。曇天の黄昏でも、二三振りさえすれば、安心したように源助はぴったりと吹きやめた。
「やい、仙に代って誰か屋根に這い上れい！」
太田屋は叫んだ。竹と云う倔強なのが仙に代った。そして勢よく旗を振りはじめた。
法螺の音は、しかし、それでもやまなかった。
「…………」
太田屋はじっと耳を澄すようにしていた。すると太田屋には、思いなしか貝の音が、次第に低くそしてだんだん哀しい音色に変って来るようにおもわれた。仙に代った竹も同じように疲れてきた。
「誰か峠まで走って来い」
太田屋の声に応じて
「よし来た！」
新というのが船から石垣に飛びうつり、太田屋の横をすり抜けて一散に走り出した。
波止場の石垣の上には忽ち人が群れ集った。そして太田屋を取巻き、同じように不安の色をうかべて、峠の方角の空を仰いでいた。法螺貝の音が、にぶい余韻の底に奇妙な哀調を帯びはじめたのは、新の姿が船霊明神の森のうしろから、峠へかかる急坂にひょっくり現われる頃であった。人々は間もなく同じ急坂の灌木の間を、鞠のように駈け下りて来る若者の姿を認めた。
太田屋は波止場の石垣から船霊明神の石段下まで走り出

て、新を抱きとめ、
「どうした！」
新は激しく呼吸をきらせながら、
「源爺が、倒れて、血を吐いとる……」
そう答えて尻餅ついた。
太田屋を先頭に十人あまりがせいせい呼吸を切らせて峠を登り、源助の小屋にはいっていった時、源助は北側の窓下に仰向きに倒れ、それでもまだ法螺貝を低くかなしく吹きならしていた。人々は先ず源助の唇から流れだしている血の色をみて心をつめたくした。
「源！　われアどうしたというんじゃ」
太田屋は源助を抱き起して、子供が玩具を離さぬように、しっかりと握りしめている法螺の貝をもぎ取った。
源助はすでに、自分を抱き起してくれた者が誰であるかも解らぬらしかった。濁った視線を宙に漂わせ、唇をおのかせて、蜘蛛の巣でも払うような手つきをしていたが、
「魚が……魚が……海一杯に、おそろしい面しやがって、わんわと押し寄せて来る……」
そう叫び出して、太田屋の手から法螺の貝を奪いかえそうとし始めた。
それは重苦しい、陰惨な、譬えようもなく暗い一日であった。望楼のようなこの硝子張の室の中で、幻の恐怖に襲われて狂い廻る老人を、人々はただ茫然と眺めているきりであった。三度目の吐血の後で源助がぐったり動かなくなる頃、梅雨季の味気ない闇が空の外に忍び寄ってきた。夜が来て、生温い東風が雨を誘うと、霧のような糠雨が飄々と飛びはじめた。
それは又、この島創って曽てなかったような異常な夜であるといえた。
「源爺が死んだとよ」
「おお！　死んだかいな……」
源助の死が伝えられると、村人はみな起きでて、一軒の家から一人ずつの人間が、提燈をともして峠へと集ってきた。風と霧とを袖にかばいながら列をつくって、坂道を登って来る提燈が眺の闇の中で狐火のように明滅した。
源助の家の窓下は無数の提燈にうずめられ、真昼のようにあかるく輝いた。菩提寺から僧が来ると間もなく、鉦の音が哀しい余韻を震わせて窓からもれてきた。提燈を提げた人々はいっせいに地にうずくまり、僧の誦経に和する声がわき上って来た。
沖に漁火も見えぬような闇をそめて、風と霧の飄々と飛ぶ六月の夜の白みわたるまで、峠の上は提燈の光がゆらゆらしていた。

二

黒髪島の南端を迂廻して、油のように凪いだ海を、西へ舳を向けようとしていた㈹の船は、俗称鯛ノ磯という暗礁

の北寄りを早瀬の瀬戸へおちてゆく鰆の大群を発見した。
「鰆じゃ」
「鰆じゃ」
「鰆じゃ」
舳が早瀬の方角に向きかわる間ももどかしがるように若者たちは勇み立った。それより先に幾艘かの小船は、魚群を瀬戸の落口の手前で喰いとめるために、大船の船腹からはなれて矢のように散った。その後から網を積んだ大船が、舳を揃えてゆうゆうと滑り出した。
鰆は聾だとされていて、それゆえ掛声が許されていた。この二十日あまりの不漁に元気をなくしていた若者たちは、船脚の加わるにつれて堰をきったように声を湧きたたせた。見るみる黒髪の西岸をとおりすぎた。

えっサッサッサッ
サッサッサ……
えっサッサッサッ
サッサッサ

親船の櫓の上に仁王立ちとなっている太田屋は、数日来のうつうつした感情があと形もなく消え、いつか若者たちの健康な昂奮に巻きこまれている自分を発見した。源助の死後、自分から櫓に立って以来、不運つづきの後の今日である。潮の色のまっ蒼に変るまでに群れた鰆の大群を網一杯に追いこんだ光景を想像し、太田屋の胸はしめつけられて来るようだ。二十日の損が何んだ！　一日百両で二千両……わっはっは、たった二千両の損だったのか……。
「漕いだ、漕いだ、漕いだア！　ええい、漕いで漕いで、漕ぎまくれい！」
黒髪の北鼻が切れると、濃美島の低い山の背が現われて来た。この二つの島の間を抜けて、樺島の東海岸を洗い、倉橋島の方角へ落ちるのが早瀬であった。
太田屋は櫓の両枠を砕けんばかりに摑み、半身を乗出して海面を睨めていたが、やがてつめていた呼吸を、怒号と共に吐き出した。
「網を入れろっ！」
その声の終らぬ前に二杯の大船はスウと左右にわかれて船脚がぐっと鈍った。網が入ったのだ。と、魚群を網に追いこむために五艘の小船は、船縁を叩きながら潮に逆らって、円形の網の中に突進して来た。網がシバリ終えられると太田屋は、ホッとして汗を拭いた。
裸一貫の若者たちは、艪から手を離すと同時にぶっ倒れて、たくましい胸を荒々しく呼吸させていた。水をあびたように流れる汗が、赤銅色の肌をぬれぬれと黒光らせている。小船の中老たちは馴れきった風で鉈豆のわを吹いた。
北寄りの夕東風が、安芸宮島の沖からそよそよと吹きよせて来るころ、網々を手繰りよせる轆轤が廻され始めた。古風な哀調を帯びて鹿の鳴くような音響をたてる轆轤の廻

転につれて、潮を含んだ太綱が引揚げられ、その後から網の粗目が現われて来た。それからが勝負であった。轆轤をすてた網子たちは背中を弓のように彎曲させ、掌に唾を吐いて立った。
「どうじゃ！　重いか！　軽いか！」
掛声の急調子に速まるに従って袋が船べり近くひき寄せられて来た。
「そこまで引き揚げて、重いか軽いかわからんのか！」
太田屋は再び叫んだ。誰も答える者はなかった。
「魚は逃げたらしいのう」
返事のできない若者たちに代って、次男の善太が父親の顔を仰いでいった。
「落潮の魚は脚が速いけに……」
小船から気の毒そうにいう者があった。
太田屋はひき寄せられた袋の中に、白っぽく詰った海月にまじって、二十尾ほどの小鯖と逃げ遅れた僅かな鰆の泳いでいるのをながめた。
「運が悪いんじゃ……」
がっかりした顔のいろを人々に悟らせまいとして太田屋は空を仰いだ。夕暮の澄みきった蒼空に星があわく輝いている。太田屋は人知れぬ嘆息を空に向ってもらした。
若者たちは、網を洗う元気もないようにみえた。疲れきったものうさで、彼らはやっと網を洗いおえた。そして舳を西に向けて、ぐったりとした調子で漕ぎ出した。

たそがれの海には浪が立っていた。船は鯛ノ磯の暗礁を左にみて、力なく帆をあげた。
船が帆走しはじめると、太田屋は暗い顔して櫓からおりて来た。若者たちは親方の不機嫌をおそれて、帆柱の蔭や舳の闇に寄りかたまっていた。
「佐助よう！」
太田屋は、胴の間にひとり坐ってじっと視線を宙に浮かせていたが、舵を握っている佐助に振向き、低い声で呼んだ。
「へえ」
佐助は頬被りを脱いで目をぱしぱしやった。
「源助は偉い沖師じゃったのう」
「へえ」
「源助にくらべれば俺なぞ赤ん坊よ……」
蒼茫とした空の下に、岩国沿岸の燈火が漁火のようにちらちらと明滅している。
横風をうけて、二艘の太船と五杯の小船とは、右に傾きながら薄暮の海を駛っていた。昨日と同じく、一昨日と同じように、ぐったりと疲れて……。
「お仕舞いなんしたか」
そういって佐助は、太田屋の勝手口の戸をあけた。白い胸をあらわにだして乳をしぼっていた善太の嫁は、ふと顔をあげて、

「佐助やんか」

といった。佐助の後から芳造と清左衛門とが土間にはいって来た。

「乳があまって苦しいようなじゃ……」

善太の嫁は肌をいれた。

暗い土間に、提燈をさげて、三人はだまって立っていた。

「親方は奥ですよ」

若い嫁は男たちの顔を眺めながら、

「提燈を消しなんせ……」と笑った。

「へえ」

ぷっぷっと三人は提燈をふっ消し、そして黙って家に上った。

「縁側からゆきなんせ」

若い嫁の言葉をうしろにきいて、三人の男は暗い表情で縁をわたっていった。

太田屋は奥の座敷でひとり酒を飲んでいたが、はいって来た佐助らを見ると嬉しそうに顔をくずして、

「飲みに来たんか」といった。

「酒どころの話じゃがうせんない」

芳造、佐助、清左衛門の順に坐りながら、佐助が先ずそういった。

「何のこっじゃ！」

太田屋は酒に充血した目で佐助をみた。

「へえ……」

佐助はいい渋って洟をすすった。

「いわにァ解らんじゃないか」

「へえ……」

同じように煮えきらない返事をして、しかし佐助はついに腹を決めたらしく、

「網の者が騒いどるんで……」

そういった。太田屋は握っていた盃をおいて、瞬間、顔の色を変えたようであった。

「俺らはまァ年役でがんすけに」

佐助の苦しい立場を救うように芳造がその後をつづけた。

「口の酸うなるほど云うてきかせたんでがんすが、奴等ァ何んぼいうても承知しねえんでがんす」

太田屋は激しく膝をゆすっていたが、

「騒いどるのは西の奴らか」と、憤怒の声を立てた。

「へえ」

「わかっとる。それがわからんでかい！　畜生め、高橋の尻押しじゃろが」

源助の臨終の夜、憎悪と敵意をこめて、自分を罵った高橋伝次郎の顔が、瞬間、太田屋の心の中にくっきりと描き出された。

「ようし！　払うてやる、きれいさっぱり払うてやる。佐助！　帳を持って来い……」

太田屋の声はふるえていた。

「それア親方、わしは不賛成じゃ」
それまでだまっていた清左衛門が親方をさえぎった。
「この不漁に、盆節季というじゃなし、五日や十日勘定がのびたところで、親代々恩のある太田屋に刃向うて来るとは何事じゃい。俺はその精神が気に喰わんのじゃ」
「そうともいな！」
芳造がそれを受けた。
「俺は腹が煮えかえるようじゃ。親方！ 俺ア騒ぐ者は騒がせるがええと思うんじゃ。騒いで干乾しになるか漁のあるまで我慢するか、二つに一ツの返事をきくがええと思うんじゃ」
太田屋は激しく頭をふった。
「いいや、俺ア払うてやる！ きれいに払うた上で、いう事をいうてやる」
酔って血のうずく頭の中で、暴風のように暗い憤怒が駈けめぐっていた。
「佐助！ 帳を読み上げい！」
太田屋はよろよろと違棚の前まで歩いていって、算盤を取り出してきた。佐助は自分の家へ飛んでかえった。
「俺アな、こいでも、島のためにはずいぶんとつくして来とるつもりじゃ。明神の石段は誰が寄進した、波止の石垣は誰が築いた。学校の教場を建増したな誰じゃった……俺アそないな事を噯気にもだいたことはないつもりじゃ」
芳造と清左衛門は面を伏せていた。

「第一この島の人間は、わしの家の網をはなれて食うてゆけるのか！ わしア情ない気がするぞよ。このわしに敵対して明日の日から、奴らはどうして生計を立ってゆく気か……」
佐助が帳を抱えてはいってきた。
「さァ読みあげてくんろ！ 勘定が千両あってもわしア払うてみせる」
太田屋の性格を知っている三人は、最早やとめなかった。
佐助は低い声で読みはじめた。

大船二杯		六十八人
小船五杯		十五人
締めて		八十三人
内	二升取	十五人
	一升取	卅八人
	八合取	十五人
	五合取	八人
	三合取	七人

「米はいま何んぼじゃ」
「廿八九銭でがしょう」
芳造がそう答えた。
太田屋は、それに船運賃を加算して、卅銭勘定で弾き出した。そして——
「控えてくろ」
と佐助にいった。

一日合計　卅五円八十三銭也
十五日合計　三百八十七円四十七銭也
「それに船雑用は？」
「へえ」
再び佐助が読み上げた。
米　代　金　百七十円五十銭也
薪　代　金　九円八十銭也
船　修　繕　十　一　円也
艪修繕三本　八円五十銭也
太田屋は太い指でパチリと百単位の桁に六をおいて、
「六百両で釣銭が来るんじゃ。明日の朝、善太を広島の銀行へだいてやるで、明後日いっぱいにはきれいに払うてやるというてくれ」
三人の帰っていった後、太田屋は残っていた酒をことごとく飲み干した。それから座布団を枕にして、倒れるように仰向きに横たわり、天井の隅を凝視めた。
太田屋の酔った頭には、末世のような寂しさがくらい憤怒の底でうず巻いていた。それはしかし、激怒の後にきた寂寥というよりも、彼自身の人生観上に蒙った手痛い侮辱に似ている。実際、今夜の出来事は、太田屋幾十年の生涯にかつて一度としてなかった、譬えるものもないほど不快な出来事であった。太田屋の胸には、わり切れない、そして紛らす術のない感情がふつふつと沸き上っているのであった。

「芳！」
太田屋は大の字に倒れたままで善太の嫁を呼んだ。返事がなかった。
「梅！」
続いて彼は三男の嫁の名を呼んだ。
「お梅！　酒を持って来い」
しかしお梅の返事も聴えなかった。
「糞！　どうなとせい！」
太田屋は荒々しくいい放って起き上った。

明神の森にそうた片側道の闇を、やがて太田屋は、東の外れの方角へと歩いていた。
森がつきると、小さな土橋が崩れかかっている。その先は、榎山の北側の裾まで一面の桑畑で、人家もまばらにあたりは闇であった。
太田屋は、がさがさと桑の枝を掻きわけながら、追われている獣のように荒々しい呼吸をもらした。すると、間もなく、藁葺の屋根がくろぐろと浮きだしてきた。太田屋は立どまって朦朧とした酔眼を見ひらき、空を仰ぐようにして小頸をかしげた。
「くそ、どうなとなれ」
太田屋は、それを、吐だすようにいった。そして破れた竹垣にそうて裏へとまわった。
勝手口の障子の穴をもれて燈火が射している。太田屋は

がらりと障子をあけた。
女の白い顔がふりかえった。
太田屋は潜戸の桟をゴトリと落して、
「俺じゃに……」
と、低くいった。女は何やら叫び声を立てたようである。
「俺じゃに……」
太田屋はまた喘ぐようにいって、勝手の板敷から部屋にはいって来た。女は膝の上で縫いかけていた衣類をまるめて、白い顔を太田屋に向けている。
「……」
よろよろと近寄って来て太田屋は、この女はお春じゃないな――とおもった。しかし次の瞬間には、女の顔が馴染のお春そっくりに見え、太田屋はまたどうともなれと心に呟いた。

三

高橋伝次郎の計画は着々と進行していた。この世故に長じた、一種狡猾な敏感さをもった移民上りの魚仲買は、ねらっていた機会の到来を鷹のような鋭さで摑むのであった。
太田屋の網船が、近海での不漁を一挙に挽回しようとして、遠く周防灘へ出漁した留守に、彼はどこからか一隻の発動船を購入して来た。そして翌日から彼は発動船に乗込んで、縦横無尽に近海を駛りまわった。

「どうじゃろうか、高橋の稼ぐことといの」
「ほんによ……」
伝次郎はしかし、商売の魚を買いあつめに飛びまわっているのではなかった。彼は岩国新港で大船二艘を買い、それを抵当に、同じ新港の高利貸大倉から金を借りた。
何くわぬ顔して島に戻って来た彼は、更にその翌日、備前方面へ商売にゆくと称して島を出発し、附近の島々を虱つぶしに探し歩いたあげく、四日目の夜になって倉橋島のある網元から中古のシバリ網一張を轆轤附で譲受けることにまんまと成功した。彼はこの網も抵当にして五日市の金貸しから高利の金を借り、先に新港で購入した古船二杯を発動船で曳いて濃美島の造船所に運びこんだ。そして最後に彼は、購入したばかりの発動船を売払い、船修繕の費用と初漁までの雑用に当てる計算を立て、六日目の朝になってひょっくりと島に舞い戻ってきた。
或日、船霊明神下の広場――太田屋の屋敷と斜に対き合った――の一隅に墨の香も新しい高札が建てられた。

来ル十日新網船卸シ仕候ニ就キ左ニ従業員募集候也
一 船子 二十人
一 網子 六十人
一 小船 六杯
追而、給金ノ儀ハ日給（三円、二円、一円）十日払ヒ現金制度ニテ半季ニ就キ利益歩合配当ノ事。労資協同一致シテ稼業精励ノ旨ニテ奮テ応募願上候

㊂ 高橋伝次郎

明神下の広場に群れた人々は、この高札をまぶしいような感じで読んだ。従業員、現金制度、利益歩合、労資協同一致……移民上りの伝次郎が、蘊蓄を傾けたそれらの文字が、人々に取っていかに目新しく、いかに輝やかしい魅力だったかは想像の外であった。雑誌や新聞の上で、遠くゆめのように考え、他人事として考えていたことが自分達の眼前に金色の光をおびて現われて来たのだ。人々は終日、新網の制度について昂奮して語り合った後、夜が来ると間もなく、女達さえまじって、西の高橋の家に集って来た。八畳と六畳の座敷は忽ち人間で埋ったので、伝次郎は庭へ蓆を敷かせておくれて来た人々を迎えた。ランプが足りなくなって娘が隣家へ走った。

「鏡を抜くけに手を貸してくれ」

時を見計って伝次郎は、縁にすえて在った四斗樽のこもを解いた。女房が茶碗をくばって歩く後から、近所の娘達が肴を運びまわった。

人々の顔の赭らんで来るころ、伝次郎は立ち上った。

「飲みながら聴いとって下んせい」

彼は人々を眺めまわした。

「諸君はどう思うか知らんが、俺ァ太田屋のやり口が癪にさわるんじゃ。考えてみなんせい！　太田屋にとっちゃ神様同然の源助を、掘立小屋一つ建って追っ放す太田屋じゃないか。人を牛馬とこき使ってよ、払う金は五合じゃ一升じゃ……その五合三合さえ、漁がないとて払い渋る太田屋じゃ、世界どこの国へ行たって、そんな無茶な話があろうかえ……」

彼は言葉を切って、女房が柄杓でついだ酒を茶碗に受け、ぐうとあおった。

「佐助を見なされ、芳造はどうじゃ。餓鬼の時分から太田屋の網で働いてよ、網じゃ頭か章魚の頭かは知らんけいど、五十六十の齢になって満足にめしも食えんのは、諸君！　制度というものが悪いからじゃ」

拍手する者、声をあげる者で、狭い高橋の家は震動する騒ぎであった。

「さ、そこでこの高橋が、アメリカで習って来た制度を実地に応用して新網を起そういう腹のうちはわかって貰えると思うんじゃ！　太田屋を敵に廻して、どうのと云うのじゃない。太田屋は太田屋、俺たちは俺たちで立派な網をつくるんじゃ！　無理にはたのまん、高橋を男にしてやろうおもう者だけ新網に入ってくれ。俺ァお前たちの身を考えて、我れを犠牲にしとるんじゃ……」

酔った顔が波のように動揺した。伝次郎の前には盃や茶碗が山のように集って来た。

「おお！　お前は西の仙太ぢゃな、よし来た、盃じゃ……おお！　お前は明神裏の権十じゃな、よし来た、盃じゃ……」

彼は雨のように降って来る盃を片っ端から受けてかえし

た。固めの盃が終ると人々は唄い出した。
「皆なきいてくれ！　太田屋は獣だぞ、奴ァ酒の勢で宗吉の女房に無態な真似をしくさったンだ」
伝次郎が叫び出した。
「ほんまか！」
「何んで俺が嘘言つくかい！　太田屋はな、馴染のお春のとことまちがえて宗吉とこへはいりこんだんじゃ、するとと宗吉が留守だったもンで、そいで無茶なことやったんじゃい、うそと思うなら宗吉に訊ねてみい！」
庭の隅で酒をのんでいた当の宗吉が、そのとき、真蒼な顔で立ち上った。
「俺ァな、女房は離縁した。太田の網も抜けた、俺ァ口惜しいぞう、口惜しいぞう……俺ァいつか、あの老耄に思い知らせてやる気でいるんじゃ」
船卸しの当日は晴れた日であった。高橋の尻押しで太田屋の周防行に加わらなかった西の若者と、明神裏の大半が加入して頭数を揃えた㊅の船は、満船飾を風にひるがえして三丁浜を漕ぎ出した。
親船の櫓の上に立って、新しい手拭を頸に巻きつけた高橋伝次郎は、酒にあからんだ顔を海風に吹かせて昂然と哄笑した。
梅雨期の去った或日、太田屋の船は周防灘を引揚げてきた。岩国沖の甲島の西端を切れると、陽炎の立った海のはてに、見馴れた島の姿が浮き出して見えた。
「戻って来たぞう！」
「榎山の一本杉が見えっぞう！」
苫をかけた船は、どこともなく陰気に、そして船脚ものろくみえた。四週間あまりの海上生活に、人が疲れているように船もまた深い疲労に喘いでいるようである。大船と子船とが、ひっそりと寄りそって、艪の音にも元気なく漕ぎ戻って来る光景は、明るい空と躍く海の間にあって、何か悄然と痛々しかった。
田ノ浦の下を過ぎる時、太田屋は疲れた表情で、峠の上の小屋を仰いだ。
「源助は偉い沖師じゃったのう……」
以前にも佐助にいった言葉が、再び風のように心を掠めた。が、何もいいはしなかった。
田ノ浦を東へ廻ると、死人鼻が海に突き出ている。太田屋は目を閉じたい気持であった。死人鼻の墓地が見える。白張の提燈が揺れている。源助の臨終の枕元でいった言葉——大きな石の墓を建ってやる……が胸をしめつけるような苦痛で憶いかえされる。源助の墓どころか、ははは……源助の墓どころか……
「波止が近いんじゃ、苫をはいで、声をあげんかい！」
太田屋は胸の苦痛を声にして激しく叫んだ。苫は剝がれ、若者たちは掛声をあげて漕ぎ出した。三丁浜を過ぎ、波止の石垣が見え初めた。

「小船はちったちったァ！」
大船の横に寄りそうていた小船が左右にちった。波止の沖で半円を描いた大船は舳をならべて、それでも元気よく石垣内へ滑り込んでいった。
と、不意に——殆ど故意とも思えるように——波止場の内から大きな船が漕ぎ出されて来た。
「無茶すなァ」
太田屋の怒号をはじきかえして、
「出船を先にするのが漁師の掟じゃ、どん盲目船め！」
そう罵りかえしたのはおもいがけなく高橋伝次郎だ。
船は互に避けあって衝突は免れたが、狭い波止の入口で船縁をすれずれにならんだ船の上で、太田屋と伝次郎はじっと睨み合った。
鰹方の若者は獲物を握った。
陸にも石垣の上にも人が群れ集った。
陽も曇るような殺気が充満していった。
島司の名村の馳せつけるのがいま一分おくれたら血を流しあったかも知れなかった。急を知って馳けつけて来た名村は、石垣を伝うて船に下りるひまもないと見て海に飛びこみ、高橋の船に泳ぎつくと、物もいわずに伝次郎の頬桁を蹴りすえた。
「貴様は太田に喧嘩を売る気か！」
それから太田屋の船に飛び移って、櫓に駈け登り、
「よしよし！　俺しには解っとる、何もかも解っとる…」

と、そういった。太田屋は一言もいわず、名村の肩越しに、蒼ざめた頬をふるわせて高橋を睨みつけていた。
「船を着けんかい！　何処でもええけに早よう船を着けんかい！」
名村は艪を離して獲物を握っている若者たちを叱りとばした。
船が着くと、太田屋は黙々として陸に上り、群がった人々に顔を見られぬように俯向いて船霊明神の石段下まで歩いていった。そこで頭を下げ、暫く手を合せてから家の門をくぐった。
善太の嫁と清吉の嫁がそれぞれの子供を抱いて、家の入口に出迎えていた。
「お帰りなしたか……」
「お戻りなしたか」
二人の嫁は目を伏せて挨拶した。太田屋はだまって軽くうなずき、善太の児の頭を撫で、清吉の児の鼻をつまみ、ちょいと笑顔を見せた後で、奥へはいった。
「高橋！」
そう呼ぶ声をきいて伝次郎は、ふっと目をさました。枕から頭を持ちあげて、じっと耳を澄すようにしていると、
「高橋！」
低い声でまた呼ぶのが聴える。
「来たな……」

とっさにそう思い、注意深く起き上ってランプを点すと、跫音を忍ばせ板敷のあいだを横切って土間におりた。

「ちょいと起きてくれんか」

彼は土間の一隅に太い樫の棒を探し当て、それを握りしめて雨戸の内側から、

「だ、だれじゃ！」と呶鳴った。

「わしじゃ、太田じゃ……」

雨戸の外できこえる声は、おもいがけなく静かな調子であったが、それでも高橋は雨戸を開けはしなかった。

「何んの用か知らんが、話なら明日にしてくれ」彼は云った。

「夜ふけにすまんが、お前と二人で話をしようおもうて来たんじゃ。心配ないけに、ここを開けておくれんか」

「わしァ睡むたいんじゃ」と、伝次郎は冷たく突っぱねた。

外ではやや長いあいだ、声も気配も起らなかったが、やがて太田屋の声がした。

「高橋！」

「何んじゃい」

「他じゃないがの……お前の商売を、どうのというんじゃないが、新網を作るならつくるで何故その前に、わしに相談してくれなんだのじゃ。この狭い島の内に、網が二つでうまくゆくとお前はおもうのか？　血で血を洗うことになりゃせんかとわしは心配なのじゃ」

伝次郎は雨戸をあけた。

月が射していた。月の光をあびて、太田屋が佇っている。寝間着の浴衣に細い帯をしめ、しょんぼりと一人で佇っていた。

「高橋！　お前は何か考え違いをしとらんか、わしの留守をねろうて、この島をひっ掻きまわしてそれで何んとする気か？　シバリ網は五百や千の端銭じゃとてものことやれんのじゃ……それに海の稼業はバクチも同然じゃ、儲かるものとはかぎらんのぞよ。その時になって網の者を路頭に迷わさんだけの覚悟がお前にあるのか」

高橋は黙ってきいていたが、不意に刺すような冷笑を浮かべると、

「どうなろうとわしはわしじゃ！　よけいな心配はせんでおくれい！」

そういって雨戸を閉めてしまった。

その後も、太田屋は長いあいだ、高橋の家の前に佇んでいたようであったが、やがて東の方へ去る跫音が深夜の静けさの中に消えてしまうと、高橋はランプを吹き消して、「ふん」と独り勝誇った嘲笑をもらした。

四

誰も予想しなかったことが、ふいにわき起ってきた。

高橋の新網が二番抵当に入ったという噂のひろまって間もなく、この島に一つの株式会社が創立された。いりこ製

造販売株式会社というのがそれであった。資本金一万円、株主全部が本土の小実業家ばかりの中に、明神裏の永井幸作ひとりが加わっていた。

永井幸作は——この島で太田屋と肩をならべる分限者であった。太田屋が海の上に勢を張っているのにひきかえて、永井幸作は島随一の地主だった。高橋の網の出資者、新港の大倉という高利貸小実業家に口説かれて、幸作はふと乗気になった。梅雨期から晩秋にかけ、この近海に充満する鰯を獲って素干にする——昔からのいりこ作りを企業化して大々的に売り出そうというのである。幸作は田ノ浦の水田と、榎山の松山と、東の桑畑の半分を抵当にして株を買い、取締役の一人に名をつらねた。

船が新造され、鰯網が購入された。田ノ浦と三丁浜と、北海岸の石山下の白浜に小屋が急設され、築土の釜に大きな鉄鍋が仕掛けられた。

次に起って来るものは人間の争奪でなければならなかった。太田と高橋の網に大部分の男を取られている島には、老人と女より他に残っていないからであった。網から浜へ鰯を運びあげて、それを鍋でサッと煮て砂地に莚を敷いて干す……この仕事は女の腕でも出来ることなので、乳呑児をもたぬものは女房でも狩り出された。しかし網を曳く男を雇いいれる段になって、会社側は意外な障礙を発見した。というのは、盛夏の不漁を見越した高橋伝次郎が、機敏にもいりこ製造の仕事に割り込んで来ているのを発見したからである。船も網も僅かに装置を改めて、死人鼻の西海岸の狭い砂浜に鰯小屋を建てた伝次郎は、会社側の狼狽を冷笑するように鰯を獲りはじめた。

会社側に残された手段は唯一つしかなかった。それを現象としていうならば、すなわち賃銀の暴騰であった。男五円、女三円……未曽有の賃銀を餌に、会社側は先ず明神下から東一帯にかけての、太田屋の地盤に肉薄した。長い不漁つづきに喘いでいた人々は、太田屋に対する恩義をわすれてゆめのような賃銀に目を眩らまされてしまった。

「会社では五円だすそうな……」

皮肉なことには、すでにもう仕事をはじめた高橋組からも抜毛のように脱退者を生じた。伝次郎はやむなく濃美島と倉橋島からそれぞれ二十人ばかりの男を雇いいれて崩れかけた陣容を立て直した。

梅雨期にわいた鰯は、島の近海に群れて孑孑のように泳いでいた。鯛や鰆を追うことから較べると、金魚を掬うより雑作なかった。

島は鰯に蔽われたようになった。

浜という浜は女たちの嬌声に満ち、築土の釜から湯気がもうもうと立昇った。

峠の源助小屋——いつからか誰もみなそう呼んでいた——からランプの光が洩れはじめた。それを発見したのは佐助であった。縁に立って佐助は小頸をかしげた。

――深夜、血みどろな源助の姿がガラス窓に映るとか、風にまじって法螺の音が細々と哀しくきこえて来るとか、そういう噂が伝えられ、近寄る者もなく建ちぐされてゆく源助小屋にランプの光をみたのだ。善良な佐助は誰にも告げず峠へ登っていった。雑草を掻きわけて小屋に近づき、佐助は足音を忍ばせて梯子段を上った。

次の瞬間、佐助はハッとして立竦んだ。佐助は見てはならないものを見てしまったのであった。音をたてぬように小屋を下りた佐助はだまって峠から村へ帰って来たが、間もなく佐助は、浜の鰯小屋へ夜番に通う娘たちに取って、源助の望楼が絶好の遊び場になっているのを知った。

鰯が獲れ、いりこがどしどし製造されるに従って、しかしこの島の文化は急激な変化をみせ出した。

まず各都市の海産物問屋と島とのあいだに往復される商業上の電報が、のん気な、風をたよりの郵便船に五馬力の発動機を据えつけさせた。と、郵便船の時間短縮を聞いた商人たちが、続々として島へ渡ってくるようになった。呉服屋、洋服屋、時計屋、菓子屋……殆どすべての種類の商人と商品とが、島をめがけて押し寄せてきた。賃銀の暴騰によって夢のような金のころがりこむ島人は、旅商人のロ一ズ物を選択もなく貪り買った。

商人につづいて、浪花節、活動写真、仁輪加、芝居の旅芸人が島に渡って来た。興行はいつでも満員の盛況であった。明神下の広場に半永久的な興行小屋が建てられた。

若者たちは鳥打帽をかぶり、娘たちは白粉を塗って、互いにふざけちらした。島全体が風船玉のようにふわふわうかれ立って、ぐらぐらと中心を失うたように見えた。小学校の男校長と女校長（二人しかいない夫婦者の先生を島ではそう呼んでいた）の顔が日々に暗くなって、菩提寺の真面目な坊主の顔は痩せた。

新しい月を眼前にすると、人々は無意識に一箇月の収支を胸算用しながらふりかえった。ゆめのような金はどこへ消えたのか、人々はそこに一文の金も残っていないのに加えて、商人に対する多額の借金を発見せねばならなかった。人々はみな一様に小頸をひねりながら、それぞれの胸に訊ねてみた。

「はて、おかしや、あいだけの銭はどこへ行てしもうた？」

五

太田屋は、この状態をよそにみて黙々と働きつづけていた。芳造、佐助、清左衛門の他に僅かに踏みとどまっている数人の若者を相手に太田屋は、大きなシバリ網をちぢめて鯛網に改造することを思い立っていた。

「わしも太田屋じゃ、ろそみたような鰯をひいて泡沫銭は儲けられん！」

思い立った最初、太田屋は一言そういった。

波止の突堤下から北岸の石山鼻までは、島で最も広い砂浜だったが、潮がみちると一面水に浸かるので、いりこ製造にも占領されていなかった。太田屋は干潮時を見計っては佐助たちと一諸に網を担ぎ出して低い砂丘の傾斜にひろげた。
陽をあびて黙々と働く人の影が砂におちて、あたりはひっそりとしていた。太田屋は時おり手を休めて煙管のわをふき、目をあげて海の涯を眺めた。濃美島の低い山の背が蒼空の下を走って、その南下に、黒髪島の削いだような山がみえる。左手は安芸宮島のこんもりと深い森が耀く海に浮いていた。
「みんなきいとくれい」
或日、太田屋はそういい出した。佐助たちは太田屋の周囲に集ってきた。
「お前たちは驚くかも知れんがの、わしァ善太と清吉を南米へでも出いてやろうと思うんじゃ」
誰も答える者はなかった。みな俯向いたり横を向いたりしていた。
「わしも早や六十じゃ、な！　先は知れたものよ。太田の家を背負うて立つなァ彼奴らじゃが、先立つものは結局ところ金よ。そんで旅費の都合の出来るあいだに二人を稼ぎに出そう思うのじゃ」
太田屋は出稼ぎ中にハワイで死んだ長男の郷一を思い出していたらしかった。
「はっはっは、心配すなァ！　なんぼ不人情でもこのわしの世話ぐらいする者は島にも居ろうじゃないか……」
太田屋は佐助らの表情を読み取ると、そういって笑顔を見せた。
準備の終った翌日から太田屋一家は海へ出た。
鯛網は古風な悠長さをもっていた。魚の通路や寄り場の潮下に網を張り、ほとほとほと……船べりを叩くと、耳の鋭いそして敏感な鯛は、この音響に驚いてまず密集する。そして潮の流れに添うて遁れようとして網に入って来る。魚の性癖を利用した鯛網の悠長さには、どこやら古代めいた暢びやかさがあった。
獲った魚は沖で仲買に売り金は殆ど平等に分配した。足掻きもがいて、血で血を洗うような慾望の沸騰する中にあって、このちんまりとした鯛網だけが、静かな営みを平和に持ちつづけていった。
「晩に待っとるぞ」
沖から戻って来て、船や網の始末をおえると、太田屋はきまって佐助らへ声をかけるのであった。
新鮮な魚を肴に、気の合った佐助たちと飲んで眠るのが太田屋の唯一の愉しみなのだ。嘗ての太田屋は飲めば酔い痴れて兇暴と淫蕩の限りを極めたものであったが、今ではそういう事も全く見られなくなった。ただ、太田屋の酒量はぐっと増していた。ぐびりぐびりと盃をはなさず飲むの

である。いわば寂しい暴飲かも知れなかった。そうして、この暴飲が最後の頂上に達する日が遂に来た。
それは善太と清吉の旅券が下付され、倉橋と大竹から来ている二人の嫁がそれぞれ実家に帰ることに決った晩……いい換えれば太田屋一家の事実上の離散の前夜であった。
「頼むけに飲ましてくんろ。今夜だけは思い切り飲ましておくれい……」
あまりの暴飲に太田屋の手から盃を取上げた佐助をおし倒して、太田屋は煽りつづけた。
翌朝、太田屋は辛うじて寝床を離れたけれど、脚に力がなく、腰が抜けたようになり、佐助の肩にすがってやっと波止場へ出て来た。
晴れた日の朝であった。真夏の近い海には鷗が群れ、東南風が吹いていた。太田屋は石垣の上に佇んで伜たちを見送った。「わしは大丈夫じゃ、五年や十年はまだ大丈夫じゃ。お前たちは、じゃけに、何も考えんと働けよ。苦しい算段してわしに金送るような真似はするな……」
その後で実家にかえる嫁たちには、
「孫を頼んだぞよ。家の者によろしういうておくれい。お前らもな、便があったら遊びに来うよ……」
と、それぞれ優しくいった。兄弟たちは窮屈な背広姿で俯向いていた。ことばに現わすにはあまりに複雑な別離の心持を、彼らは硬ばった頬に漂わせた。兄弟の出発を知って、餞別を持って波止場に駈けつけて来る者もあった。

二艘の船は静かに石垣を離れた。
「佐助爺！」
善太は船が出ると佐助を呼び、
「親爺をたのんだぞ」
一言、そういった。
「これが泣かずにいられようかの……」
石垣の上にうずくまって泣いている女たちの中から、そういう声がきこえた。
「この寂しい見送りをみいされ！　これが太田屋の後継の船立ちかよ！」
太田屋はじっと竦んでしまったように佇っていた。涙を見せまいとしてか、遠い空へ向けている顔の色がびっくりするほど蒼ざめてみえた。
二艘の船は沖に出て帆を巻き上げ、それから左右にわかれた。それぞれの妻を実家へ送り届けるために……。
「佐助よ！」太田屋の低くかすれた声がした。
「善太らは早や去たか！」
「……」
船も人も帆もまだ近々と眺められるのに——佐助はそう思い、太田屋の顔をふり仰いだ。
「わしァ目が霞んだようで、何もかも茫としとるが……」
太田屋はそういって眼瞼を擦すった。
佐助は驚いて家に抱え込み、床を延べて寝かせた。
「飲み過しじゃ、直き快うなるわ」

濡れ手拭を頭にのせて太田屋はいった。
義眼の村医は、一見して太田屋を中風と診断した。

六

盆を前にひかえて、島全体にみなぎり渡って来た昂奮はおどろくばかりであった。西の若者たちによって仁輪加の催しが発表され、東ではそれに対抗して相撲の計画を青年団の掲示場に掲げた。明神裏の森から夜毎に盆踊の太鼓の音がもれ、若い男女はふざけ合った。

売込みの旅芝居が郵便船で渡って来た。一座は村に一軒の旅館に陣取って、夜が来ると白粉を塗って三々伍々と歩きまわった。

娘たちの林檎のように耀いていた頰に血のにごりが見え澄んでいた瞳が曇ってきた。

浪花節の一行と共に来た五人の女は、興行が終えても島を去らなかった。石山鼻の傾斜面に、倉橋から来ていた石工の家が無住のままに建腐れになっている。女たちはその家に陣取って夜が来ると三味線を弾いた。村から石山鼻へ通う磯通の闇を、男たちは安香水の匂いをぷんぷんさせて毎晩のように通っていった。

人々は、竹の杖にすがった太田屋が、明神の石段をやすみ休みに登ってゆく姿を見かけた。たくましく肥満していた体に際立った衰えがみえ、皺の深くなった横顔に紫いろの浮腫が気味悪かった。油壺をさげて喘ぎあえぎ登って行く後姿につめたい影が漂うていた。

太田屋は三十段の石段を喘ぎ登ると、拝殿に向って頭を下げ、その後で、人々から忘れられた石燈籠に火を点すのであった。皺に埋れた太田屋の顔は、燈籠の火を映して味気ないわびしさを泛べている。通りすがった人は顔を背向けて去った。

沖では腐るように鰯がとれた。浜という浜は素干しの匂いにおおわれ、蠅がわんわと群れた。小屋は製品に充満し、夜番の娘たちは浜小屋に蝸を釣ってねむった。そして待たれた盆勘定の日が来た。

高橋の組では夜の八時に賃銀を払い渡した。

人々は賃銀明細書と現金とを対照させて、胸算用とはまるで違った稼ぎ高を発見すると、

「親方！　わしァ二十日働いとるんじゃ」

濃美から来ている男たちによって口火が点じられた。帰りかけた者もひっかえして来て伝次郎を取囲んだ。

「静かにせい！　騒がずに俺のいうことをきいてくれい！」

彼はこの騒ぎを鎮める手段として彼自身の弁舌を利用しようとした。

「相場が下ったんじゃ。日本国中のいりこの相場がスッテンコロリンと下ったんじゃ」

人々はその瞬間、茫然と煙に巻かれたように見えた。無

数の顔が、雑多な表情をうかべて無言で動揺していた。が、その沈黙の破れたとき、人々の表情とことばの上には明らかな怒りが現われていた。
「わしらは最初から一定の賃銀で雇われて来たんじゃ、相場が上ろうと下ろうと、わしらの知った事かい！」
「そうじゃ、日給の日割計算が最初からの契約じゃ！　歩合は要らん、賃銀だけはまともに払うてくれにゃ盆が越せん！」
伝次郎は最早や何もいわなかった。黙って俯向いていた。そういう伝次郎の脳裡を掠めて、幾枚かの借金証文がひらひらと舞っている。網は二番抵当に、船は三番抵当に、そして彼自身の家までが数日前に担保に取られていた。シバリ網といりこ製造と……この二つの、彼の生涯を賭けた仕事によって、彼の得たものは幾枚かの借金証書だけであった。
岩国新港の高利貸大倉の、狡猾な卑しい顔が、自分を見てニタニタ嘲笑しているような気がする。彼はしかし、やがてヤケ糞みたいな顔をあげて、血走った瞳を人々に向けた。
「わしゃそいでも力かぎりのことアしたつもりなんじゃ、気に入らんければ蹴るなと叩くなとしてくれ、どうなと気のすむようにやってくれ……」
同じ時刻に、永井幸作方でも、これ以上に深刻な光景が展開していた。この名義だけの取締役は、会社内部の事情は何一つ知らなかった。温良平凡な幸作は、それだけで――名義だけで満足してもいた。彼の重要な仕事といえば、雇人の労働日数と、いりこ叺の数量と雑費の明細とを十五日ごとに報告する。すると新港の事務所から現金を送って来る。彼はそれを村の者に支払う……それだけであった。いりこの売捌き方、利益の処分、その他の仕事はすべて新港で行われていた。幸作は、従って、人々を督励して鰯をとりいりこを製造し、どしどし新港へ送り出せばそれでよかった。と、今朝であった。幸作は送金受取りのために波止場に出て、郵便船の着くのを待っていた。そしてやがて彼の受取った物は一通の書面だけであった。差出人は大倉を筆頭に、五日市の木村、広島の松本、宮島の宗谷の順に重役の名が連署され、いりこ相場の下落と製品過剰の関係、倉敷料及び製品の傷みから来る損失……そういう、幸作にはほとんど理解外の報告が、むずかしい数字と共に認められてある。しかし幸作にも最後の幾行かの文言はそれを理解することが出来た。従而、当分の間、損失見越しの営業方針にて、賃銀総額五百円の節約励行の事となり、十五日勘定を廃し自今月勘定と相定度、株主一同協議の結果……幸作は茫然とそれを読んだ。
「ひょんなことになったの……」
気の弱い温良な幸作は、終日家に閉じこもっていりこ場にも姿を現わさなかった。夜になって人々が半月分の労銀をもらいに集って来た時、彼は悄然と二階から下りて、

「これを読んで下され」と、面目なげに会社からの洋罫紙の書面を人々の前に差出すと、そのまま面を伏せてしまった。

他島の人間のまじっていなかったのと、この島でも淳朴な東の人間が大部分を占めていた事と、そして幸作のしょんぼりした姿があまりに痛々しく見えたために、高橋方に於けるような騒ぎはひき起さなかったが、永井方を出て、期せずして明神下の広場へと流れてゆく人々の姿は沈みきって寂しかった。

明神の森から子供たちの鳴らす太鼓の音がひびいて来ていた。月が濃美の山の背に昇ってだんだん冴え渡って来るようである。沖をゆく発動船の響が遠くきこえた。

屋根のない芝居舞台に腰かけて空を仰いでいる者があった。明神の石段を何か囁きながら登ってゆく一組があり、口笛を吹いて歩きまわっている若者もあった。男も女もみな沈みこんで、後五日で盆が来るとは見えないのであった。

広場の左隅に太田屋の黒い頑丈な門が斜に月を浴びていた。門につづいた高い船板塀の内はひっそりとしていた。人々は黙々とそれを眺めた。彼等の心が、目と共に、すぐさま実感の中に働きかけてゆく習慣を持っていたならば、彼らの今宵の感想は、彼らに或る反省を与えたかも知れなかった。

人々の寂しさは、盆の二日を、飲んで踊って過せないつまらなさにのみあった。そうでない者もしょせん、眼前のやりくり算段におもい沈んでいるだけであった。じっさい彼らは中心を失うているのだ。かつて太田家を中心としてこの島に営まれていた生活の根はどこへ行ったのか、その生活の根は枯れたのか、腐ったのか、枯れたとすれば誰が枯らし腐ったとすれば何ものが腐敗させたのだろうか……彼らは、高橋方を出て来た連中と一緒になって、夜の更けるまで、明神下の広場に群れていた。

盆が来た。

寂しくひっそりと過ぎてゆくかにみえた盆の二日は、しかし反動的といえるほどの狂騒と猥雑に終始した。彼らは飲んで踊った。踊って飲んだ。芝居は満員であった。女の嬌声と、男の酔態と、子供の狂躁と、三味と太鼓と唄声が島全体を蔽いつくした。家に籠っている娘達は終夜まんじりともできなかった。新しい情事があっちでもこっちでも噂の種をまきちらした。その中に高橋伝次郎も加えられていた。彼は西の三丁浜の砂上に酔い倒れて、

「ざまみろ！　太田の中風腰抜け奴……」

そんなことを呶鳴りちらしていた。盆の最後の日の高橋の酔態は、秋風の立つ頃まで、人々の記憶から消えなかった。

七

盆を境にして、島は、凋落と貧困のどん底へと転落して

いった。人々は反動的な狂騒の後に来た寂寥のうちに、疲労しきった肉体を見出し、荒み切った心を感じねばならなかった。彼らは、再び働き出す勇気を失うたようにさえみえた。

ヌヌのように群をなして泳ぎまわっていた鰯の群は、いつの間にか成長して、広い海へ出てゆくために近海から姿を消していった。網は洗われて砂浜にひろげられ、鰯小屋は多量の製品を貯蔵したままで釘づけにされた。雨露に曝された築土の釜は一雨ごとに亀裂の皺をつくってぼろぼろと崩れていった。

中国山脈から吹き下ろして来る朝の北風とたそがれの西風とが、秋も更けたことを告げるようになった。ひいやりと肌寒い風がふと人々の心にしみ通った。女たちは手拭を吹流しにして畑に出ていった。峡々に開墾された稲田を刈る人の姿が点々と見える。秋から春にかけてこの島に来る半農生活の種が蒔かれた。芋畑の雑草は抜きすてられ、大根の種が蒔かれた。秋から春にかけてこの島に来る半農生活が、それでもものうい調子で営まれ出したのであった。

或日、髭をはやした官吏の一行がこの島に上陸した。田ノ浦と死人鼻の中間、地蔵山の山裾が海に突入している地点——俗称地蔵の小松原と呼ばれている岬の端に燈台が建設されるという噂がパッとひろがった。その噂が事実となって現われてきたのは、官吏の一行が上陸してから数日経った或る午後であった。航路をはずれた、そして暗礁の多いこの島の沖に、船体を白く塗った燈台巡回船が姿を現わしたのだ。

子供らは見馴れぬ汽船を迎えて万歳を叫んだ。巡回船の船腹からは夥しい工事材料が吐き出され、徴発された五艘の大船が、それを満載して漕ぎ戻って来た。

地蔵の小松原は、海抜五十尺ほどの、岬とも呼べぬような一突端にすぎなかったが、痩せた島特有の、切って削いだような絶壁であった。官吏たちは幾度かの協議をへて、工事材料は陸路運搬することに決定した。

村から峠へかかる急な坂道は二倍の広さにひろげられ、地蔵山の横腹に幅二間の道路が新設された。多数の若者が雇われ、牛が徴発された。そして明日から運搬を開始するという前日、官吏の一行は名村を案内者として道路の下検分を行った。

名村の家の仮事務所を出た一行は、秋晴れの峠に登ってうすい汗をふいた。

「名村君！」

「へえ」

官吏たちはすぐ源助小屋を発見した。

「あの小屋は何かね、人が住んで居らんようじゃないか？」

名村はともかくそう返事をした。

「持主は誰か知らんが、無住ならば一時取壊して貰いたい。必要があれば後で弁償してもよいのだからね！」

源助小屋は地蔵山寄りの雑草の中に建っていた。山腹にひらかれた運搬道路は、小松原から一直線に山肌を貫いて

来て、小屋の前でやや大きく迂曲し、峠の下り口へ接続している。小屋の前で迂曲した道の真下は、田ノ浦の砂浜まで急傾斜の断崖なので、名村は官吏の注意を受けるまでもなく通路の危険に気づいていた。が、名村には、小屋の取壊し方を太田屋に交渉するのが心苦しかった。そしてひそかにこの小屋が、官吏たちの目を逃れてくれるようにと願っていたのだ。

「取壊すのは雑作ござんせんが」名村は臆病らしい調子でそういった。

「相談する者も居りますけに……」

「ははァ」

官吏の一人は無雑作にうなずいて、

「それではすぐにも相談していただきましょうか。あまり過大な条件は困るから、そのへんはひとつ君に委せて…」

検分の終ったのは午後であった。家に戻って来た名村はしかし容易に腰をあげようとはしないで、女房を相手に茶を飲みながら暗い顔をして煙草ばかりふかしていた。

薄暮の暗くさびれた庭を前にして、縁に莚を敷き、衰えた横顔をみせて太田屋はひとり坐っていた。木戸を静かに押してはいると名村は、

「ちっとは快うなった按配かいの?」

そう声をかけて近寄っていった。太田屋は驚いたように振向き、そこに名村を認めると、

「お前か、よう来ておくれた」

と、嬉しそうにいった。名村は、その表情と声に人恋しい太田屋の心持を感じ、微に胸をひき締められていくような気がした。

たそがれの光が、そういう太田屋の、肉のだぶだぶにゆるんだ顔の上に味気なくただようていた。名村は視線をおとして縁の端に腰をおろした。

「佐助らの話では……」

と、太田屋はすぐ話しかけた。

「小松原に燈明台が建つそうなが、お前は忙しかろうのう、よう来ておくれた」

人間に餓えている者のうれしさが太田屋の声には籠っているのである。

「役目じゃで、忙しいのは仕方ないが」

名村は言葉をとぎらせて、煙草の吸殻を掌にうけ、太田屋を見かえした。

「困った事が出来たのよ……」

「ふむ」

太田屋は脚を組み直した。浮腫(むくみ)のきた上半身や顔にくらべて、それは萎えたように痩せっこけた脚であった。

「気を悪るうせんときいとくれいよ」名村はためらい勝ちにいい出した。

「源助の家な、あれを取壊してくれいと、お役人からの話なのじゃが……」

太田屋は庭へ向けた顔をふっと暗くした。

「というのはな……」
名村は太田屋の横顔を見いみいつづけた。
「小松原は、知ってのような崖っ鼻じゃけに、海からの運搬は出来んのよ。な、そいで峠越しに工事の材料を運ぶにゃ決ったが、石材じゃ木材じゃちうて大きな荷を搬ぶのじゃけい、源助の家が邪魔になるのよ」
ランプのない縁端に初夜の闇がただよい、味気ない文色のなかで、太田屋は一塊の肉のように身動きしないでいる。名村は当惑した表情をうかべて、庭の、水のかれた泉水のあたりに視線を向けていた。
「済まんが、ランプをともしておくれい」
やがて太田屋はそういった。名村は救われたようにたち上って太田屋のうしろに吊ってあるランプを点した。
太田屋は俯向いて、名村の座に戻るのを待っていたが、
「今の話じゃが」と、静かにいった。
「ふん」名村はそれを低い声でうけた。
「わしア不承知じゃぞ。わしアこの頃、善太や清吉の戻って来るまでのあいだ、峠へ行てあの家でひとり暮そうかと考えとったのじゃ。というのも、名村よう！　わしア源助のことを憶わぬ日はないのよ。源が健在で生きとってくれたらとおもわぬ日はないのよ……」
「解っとるともいな。お前の心持はわしはようく知っとる」
名村のいうのを遮って太田屋は、
「まア聴いとくれい！」

そういった。ふっと名村の心に触れて来るものがあった。で、名村は口をつぐんだ。
「わしは毎日こうやって坐ったぎりで、漁師は漁師なりに考えとるんじゃ。考えとるとな、無学文盲なわしではあるが、そうじゃったと思い当って来たのよ……他でもないが、源助は太田屋のために神様みたような人間じゃったばかりでなうて、この島のためにも神様同然の人間じゃったのよ。名村よう！　お前には解るかの、そこのところがよ？」
「解らいでか……」
名村にもわかる気がした。
「ほんまにわかるのか？」
念をおすように、かさねてそういった太田屋の語気に、名村は微な冷笑を感じた。
「その源助とわしとは餓鬼の時分からの友達でよ、しかもあいつが死んだのは、名村よう！　お前は笑うか知れんけいど太田屋のために死んだのぞよ」
太田屋はかすれた声に激しい熱情をこめていいつづけるのだ。
「わしア近頃になって、それがハッキリとわかって来たんじゃ。な！　あの前後はつづけての不漁じゃった。源助は、おのれが沖に出られんだけに、それが苦になった。苦になったあげく海一杯に魚が押し寄せて来たらとそればかり思い詰めて、それで気がふれたのぞよ。源助は力いっぱい法螺を吹き鳴らいて、わしを喜ばせたかったのぞよ……

わしアその心根をおもうと泣けてくるんじゃ。わしアひとりでここに坐っとってもな、源助があの峠の家におって、朝に夕に海を眺めとる姿が心に浮ぶんじゃ。そうしてよ、いまにも法螺貝の音がきこえてくるような気がするんじゃ。あの家が跡形なく取壊されては、わしア何一つない人間になるのぞよ……」

冷たい風のようなものを感じて、名村は、ランプの光の届かぬくらい庭の隅へ顔を向けた。

二人は言葉をとぎらせて、長いこと縁に坐っていた。空に月の昇ってくる気はいが漂い、夜空を流れる雲がみえた。

「役人衆へはわしがなんとか話してみるとしようよ、じゃけにお前も安心して、養生しなんせ」

名村が縁を下りて庭に立ったとき、

「たのむぞ、そうしておくれい……」

太田屋は低く云って頭を下げた。

八

一年経って、小松原の燈台は竣工した。塔長三十尺、光達距離八浬、紅白廻転式の六等燈台が、磯馴れ松の緑の梢を背景に、新鮮な白堊の姿で建った。

島の人々は相かわらず黙々と働きつづけていた。太田屋は死んだ。高橋伝次郎は夜逃げした。そして永井幸作は今では一介の小作農でしかなかった。竣工した燈台の光芒も、半世紀おくれてこの島を蔽うた闇をたやすく払いのける術を持たぬようにみえた。

名村の懸命な庇護によって、取壊しの運命を辛くも免れた源助小屋は、無住の侘しさの中ですでにもう蝕みくされて来ていた。軒は傾き、屋根瓦はずり落ちた。名村は人を雇って傾く軒を丸太で支えさせた。

榎山の中腹から眺めると、望楼のような源助小屋は、地蔵山寄りの雑草の中に、腰の曲った老人が杖を突いてしょんぼり思案に暮れているようにみえる。

鉄

岩藤雪夫

一

河向うは赤煉瓦建てのS紡績だ。

暗く鉄鋲みたいに並んだ二階の窓から、女工達の白い顔がちらちらする。何かの合図のように手を揚げたりするのが遠くから判る。

其の眺めを横切って河岸の運転台に据付けられた黒塗り起重機が吋太との鎖をがらがらと鳴らしながらいかめしい腕を振っている。起重機の影の下を赤腰巻やお襁褓を乾した伝馬船が油をぎらぎら浮べた河水を上下している。河に添って堤の燃えるような若草が青々と伸びていた。凡てが鉄垢の滲んだ工場の窓硝子から見える風景だった。

若い職工達は女工の白い顔を盗見しては「籠の鳥」を唄ったり、片手ハンマアで仕事台を叩いたりして喚めきたてた。

朝も早ようから弁当箱下げて
通う女工さんのいじらしさ
娘時代を綿の中
夜は死んだようになって眠る

と一人が唄うと機械と同じ位な声で皆が叫び合った。

「思わせ振りをしたって河向うまで聞えるもんかい……」

「同情申上げた所だろう、奴さんとしたら。」

「チエッ！　お嬢さん育ちでもあるまいし、同情じゃ浮ばれねえとよ……」

職場は海鳴りに似て唸っていた。それを縫って太く甲高い響きや絞め殺されるような叫び声が流れた。ベルトが風を切ったり鍛冶場の大ハンマアが鉄を打ったり、穿盤ハンマアが鋲附けしたり旋盤が鎮鑰を削ったりする音だ。

菱形のブリキ屋根の下の空気は一様に紫ずみ鉄の匂いとマシン油と煤煙の香が立罩めて人間は其の中で影絵のように動いていた。

際立って赤く輝いているのは鍛冶場の溶炉の下で大きな花瓣のように燃えている火だ。職工達は肱を折り腰を曲げ足をふん張って機械と競争でもするかのように気忙しく営営と働いている。彼等の顔面の皺は太く、肩は部厚な箱みたいに張って指先は蛙の吸盤のように円くかたく膨れていた。そして十人の内二人位までは節の千切れた指を一本位ずつ持っていた。

並列した波型の屋根の一端からそそり立つ煙突は不平ら

しく絶えず真黒な煙をキリキリと吐き出した。

私も仕事台に寄りかかりながらぐうたらに鑢の尻を押していた。

「幾ら早く仕上げたって」と私は腹の中で考えていた。

「規定の歩合の外一文にだってなるわけじゃない。」

一体に労働者という者は何故か自分の手がける機械は育てる子供のように可愛く大切に思うものだ。そして鏨や鑢を握っている間だけは凡ての労働者の呪いを忘れて働けるのだ。然し今日に限って私はぐうたらに、厚ぼったい胴を万力合に凭せかけては休み休み働いていた。

一カ月程前、鉄道省の管理局から新機械『貨車掛計量器』の製造を引受けて以来、此のK製鉄所は昼夜兼行で仕事を続けていた。今日が其の組立仕上げ日だった。

一カ月に渡る毎日の十四時間ずつの労働に職工達の金銭への慾望はともかくも、体の方がおしゃかになりかけていた。ハンマアを握る腕にも鑢を押す腰にも力が見えない。鋳物場の少年見習工は足の火傷を手当する暇もなく蒼白い面で重そうな体を焼け砂の上に働かしていた。

だから皆、空ら元気でも出そうとして、騒ぎ合っているのだ。未だ連日の疲労から、ぶっ倒れて歯車に喰われたり蒸汽鉄槌の下でお煎餅にされたりしないだけましだった。

会社としては期日に仕上げれば鉄道省から懸賞金が貰えるので今日一日と職工達に最後のあふりをかけていた。

「未だか、午後三時仕上げだぞ！」時どき職工長が現場に廻って来ては憎まれ口をたたいて歩いた。「チェッ、何ちう荒い鑢目だ、早く油目をかけて仕上げちまえ、糞！どいちの仕事はのろくて臭せえや！」

聾者でひねくれ屋の彼は職工を怒鳴りつけるのを天職と心得ているらしい。其の癖、叱られた職工達が丁寧に頭を下げる口の中で「このげじげじ野郎」というのには思いもつかず、深刻らしい面をして許して呉れる男だ。

細身の背広にナッパを着た彼は赤靴を鳴らして現場現場を怒鳴って歩いていた。

「何でこんな貨車掛なんか」と物識りらしく云う職工もいた。

「考えて見れあ、鉄道の貨物係がいらなくなるんじゃねえか結局、こんな機械沢山出来れあ……」

「そうよ、失業者が殖えるばっかりだ。」

私はじりじりして独りで癪にさわっていた。第一鑢が切れなかった。嘗めて見ると甘味のある焼きのいい鑢だが材料の鍛鉄の質が悪いのかのりが悪かった。

「チッ！」と向う側の仕事台の黄色い軍隊靴をはいたのが天狗鼻の先に上唇を持ち上げて睨んだ。「今日締切りの受取り仕事だぜボヤボヤするなよ、頭が痛いか、尻が痛いか知らねえが。」

渡り職工として方々の工場を歩いて来て如何なる機械でも手がけた仕事があると不断から威張っている色黒男だ。

「うるせえやい！　手前の仕事でもしゃっぽにするない」

と私は一言だけ答え、「三時の組立に間に合や文句はあるめえ。」

——一に愛嬌二には押し——の例え通り職場内の人間づき合いは六カ敷いのだ。一言も余計な言葉は吐けないのだ。

鑢の切れが悪いばかりではない。——姉の離縁——私はそれっぱかりに気を取られて、じりじりしていた傾きもあった。隣り職場の鍛冶場の溶炉(ホド)の前を見た。

荒木は首よりも太い腕節で三十封の大ハンマアを握って火造りをしている。姉の離縁話を聴かされた時の彼の顔を想像して見る。眼尻のつった広い額に太い線を浮べて、同志を失った時と同じような面をして又筋肉の盛り上った腕を組んで考えこむだろう。二三日口もきかないだろう。

それは彼より私の方が参る事だ。

「自分を捨てて他所へ嫁に行った女が、離縁されて帰って来た。」それは苦が笑いをせねばならぬ現実だ。しかも其理由を知ったら荒木は何と云うだろう。

親方の鉄鎚を打つ音に合わせて彼は水車のように大ハンマアを振り廻している。

一昨夜だった。九時までの残業を終えて帰った私を前に据えて祖母は背を円くして泣いた。

「えらいこっちゃ、えらいこっちゃ！」歯のないために風のような声だった。「浅が離縁されるんぞを、三つになる子までであるに……」

「離縁！　姉さんが」と私は飲みかけた茶をぐっと喉に落した。「何故？」

「離縁、離縁、離縁じゃぞ、ほんまに離縁じゃぞ！」と又祖母は醤油の染みた前掛で顔を押えてしゃくり上げた。

「何とまあ業の深い一家じゃ……」

「いや、おばあ落附いて！」と私は打伏した祖母の肩を押上げ周章て国訛りを出した。

「何故だか云ってつかさい……」

「何故と、何故とは何んじゃ、それあこっちゃのいうこっちゃ、今日、曽我部から人が来よって申渡して帰ったぞな、浅はそんな女でないぞな。」

「うん、だから何故だと聞くんだ。」

「何故もくそもかな、間男したとは何たらこっちゃ、ほんまに……虫けらでも仲よく暮しとるに、人間は何でこげん争いごとばかするんじゃ、喧嘩別ればかりするんじゃ、仏様はこんなつもりで世の中を造らはったのでないぞな。」

「……」私の舌もまごついた。「間男って、誰とです、対手は誰です……」

「誰とか、嫁入前の情夫とな……」

姉の嫁入前の恋人なら荒木勢一だった。が彼はそんな事をする男ではない筈だ。この二月、二十年振りで帰郷した私への話では「僕は浅ちゃんの為にも浅ちゃん一家の為にも紡績職長の所へ嫁に行くのを賛成したんです、浅ちゃんもそうしたいと云ってました。おばあや、親爺さんの生活

の事を考えた上の事です」と云っていた。で私は姉と荒木勢一をドストエフスキイの「貧しき人々」の中の可憐な二人の主人公に例えて見たりした位なのだ。
「いや、おばあ、それは、何かの間違いだろう……」
「間違いとも、間違いとも、儂の子や孫にそげんな者はおらん筈じゃ、新(父)じゃとて正直もんじゃけんに幸徳ちう奴にだまされて陣笠にされたんじゃ、じゃが、離縁はほんまじゃ、ほんまじゃぞ、ほんまにけったいなほんまじゃ！」
口には出さなかったが、姉が離縁されて帰れば、今までのように曽我部から毎月の仕送りがなくなる、私一人の稼ぎではとても病人をかかえた一家が立って行かれない。それが祖母の一番の苦しみらしかった。
その夜祖母は晩くまで奥の間の動けない父の枕元で何かブツブツ云っていた。
翌日工場を休んだ私は、姉を見染めたS紡績の職長、曽我部を彼の工場に訪問した。私は姉の為にとりなしに行ったのではない、単に理由だけを訊ねに行ったのだ。
応接間の肱掛椅子にすっぽりと沈んだ職長は伸びかけた顎髭を抜き抜き云った。
「子供も怪しいです。確証と君は云うんですが、手紙の往復さえしていました。それが万事を立証しています。何なら見せますがね。」
愛してもいない男の子を生んだ上にこの冤罪、私はもう一本気に考えて終った。
「よろしい、それが事実なら、いや、何うでもよろしい、引き取りましょう、子供も……」
私はそう返事をして帰って来たのだ。今日当りは姉が身がらを引き取って帰っている筈だ。ぐうたらに鑪の尻を押している私の頭に姉と荒木が絡み付いて離れなかった。勿論今は此の事件が一切合切事実であったってかまわない。それを何うこう云う私ではない、が一方荒木を信じたくもあった。
昼休みになると職工達は皆ボイラア場へ来て体を暖めたり、読書したりしていた。
荒木は鍛冶屋職工としては珍らしく澄んだ瞳をしばたかせながら私の傍の石油箱に腰掛けて左の目尻をぱちつかせていた。
「何うかしたのかい、ボンヤリして、今夜は研究会なのに、体でも悪いと困るなあ。」
彼は組合せた両の指をピシピシ鳴らした。
「組織も此処まで進んでいるんだから元気でいて呉れなけりぁ……」
「碌なこたねえや」私は彼の言葉に係りなくそっぽを向いて居た。「家庭生活までかき廻しやがる……」
「ふふ、家の問題かい？」荒木は靴をとんとん床にぶつけて云った。「親爺さんでも悪くなったんだね……」
私は荒木の焼焦げの跡を縫ったつぎだらけの仕事着の股の辺りを見つめて居た。

「そうだなあ、君の親爺さんも寝ついてから長いことになるからなあ、然し考えれあ、俺は正直な所云うが、君ん所の親爺は子供泣かせさ、腹を割って見れあ、早く死んで呉れた方がと、自分の親だったら俺あ思うかも知れないね。」

「余り痛い事を云うなよ」と私は掌の筋に喰い込んだ鉄粉をよじっていた。「俺の親爺も可愛そうな人間さ、運動から没落してやけになったんだから……だが俺はそんな事を今考えているんじゃないよ……」

「ふふ、外れたかい的が、違ってもいいさ、君が変に悒欝にさえならなければ、東京の細君の事でも考えてたんだろう。」

私には荒木に姉の事件を告げる勇気が起きなかった。同志の生活を少しでも乱したくなかった。

十二時半から又機械が唸り出すと、皆職場へ心臓を向けた。足の長いがっしりした骨組の荒木の後を見ると姉の話をぶちまけて彼を苦るしめてやりたいようにも思った。

——今夜の研究会の帰り途に話してやろう——自分の万力台まで帰った時私はそう決心した。

二

スピンドル油をつめる眞鍮製の三個のスプリングピストンそれが私の責任仕事だった。三時近くには各部の責任仕事が終ったらしく、職工連は職場の中をぶらつき初めた。

「うまく能きたかね？」

「ああ、磨り合わせが何うしてもぴったりゆかなかった。」

「そうさ、子供を創くるんだって思い通りには行かねえんだ。まして御対手様が鉄だからなあ、俺なんざあ、鉄鋲の孔が少し狂ったから鏨で攻めてごまかしちゃったよ。」

皆息子の安否でも尋ねるように慰め合っていた。其他の骨組仕事も小物仕上げも殆ど前後して終った。

四時頃になると、ヨイショッ！　ヨイショッ！　と掛声をかけて、それぞれの責任機部を担いで組立部屋へ集まった。七十呎四方の組立部屋の一隅には技師長や職工長や数名の技手が卓子に設計図を拡げて待っていた。

「能きたな、能きたな。」

技師長は皺の多い額ごしにけわしい目で一々機部を検査した。

鉄粉や油にまみれた職工達の顔には仕上げた後の興奮が表われていた。彼等はシャベルのような腕をぶら下げたまま黙って自分の仕上げた機部の側に立った。

「よし、組立てろ！」

全機部が整った頃技師長はそう命じた。

職工長が部屋の中央の大乗盤（鉄の台）に中心を取り初めた。

私達は技手の命令に従って基礎部分から順次、高い天井の鉄梁に取附けたチェンブロックの力で釣り上げては設計図面通りに組立て初めた。幅七呎、長さ十二呎の機械だっ

た。私達は、自分の創った機部が組合わされる度にひやひやした。面や、雌螺旋の孔がうまく合わなかったりするのは自分の子供が馬鹿だったり不具だったりする程に辛いからだ。

「チッ！　よしよし、水平もうまく出たぞ。」

機部が重なる度に手を叩いたり舌打したりして喜んだ。

「ざま見ろ、うまく能きやがった。」

皆の眼には強い緊張と喜びが溢れていた。

一カ月に渡る苦るしみに依って創り上げた一つの機械だ。全注意は機械に向けられていた。凡ての労働者は常に苛げられ、酷使と搾取に悩まされて来た。そして何んな職場の何んな瞬間に於てもその苦悩を忘れる事が能きないのだ。「今に、どうにかして此の重い鎖を断ち切らなければ……」と。

意識的な労働者は菴を担ぎつつも、赤土のトロッコを押しながらも、海の上でボイラアに石炭を抛り込みながらも、この呪いを忘れられないのだ。だが、鉄筋屋が大きなビルデングを造り上げ、土方が厖大な堤防を築き上げた後で自分らの圧迫者に対する呪咀をも忘れて製作物に目を上げて感ずるあの喜び、あの目の光にも似たと同じ者を今機械に対して覚えたのだ。それは凡ての理論を抜きにした労働者のみの持ち得る生産の歓喜の情に相違ない。

刻々に真黒な匂い新らしい鉄材が組立てられて行く、私は斯うした新機軸の機械がどしどし製造されて行く事が労働者に如何なる影響を及ぼすかを知っている。失業軍に吾吾を追いこむのだ。又此の形の極端な発達が遂げられた暁には自分のやっている組合運動さえが無力化されて終う事も解る。

然しこの生産の喜びは嘘ではない。

唯この喜びが真実に労働者の生産の喜びになる時代、苦悩の生産のでない喜びの生産の日が欲しいのだ。その日のためにそして現実のこの矛盾のためにも戦わねばならないのだ。

私がその事を簡単に小声で語ると荒木はむっつりして答えた。

「生産の喜び、ふん君はしゃれた言葉を使うな、実際、今は無駄な生産さ……」

「ボールト締め！」大体の組立てを終ると技師長はそう一同に命じた。動脈の黒く膨くれた腕にスッパナアを握って私達はボルトを固く締めた。

機械は設計通り、がっしりと大乗盤に据ってそびえていた。私達は鉄の面を撫でたりさすったりした。

「此の機械はここまでは地に沈むのだ。」と技師長は二吋厚みの広い鉄板の取附いた所を指して説明した。「此の鉄板の上に二条のレールを備えつける。一車一車の積載噸数が上部のそれは時計て此の上を走る。貨物列車が荷を満載しの、目盛のように噸数が刻んであるだろう。あそこへ針で示される。列車と云うものはな」技師長は腕組みをして靴

の爪先をひくひく動かしていた。「連結の中央に一番重量のある奴を置いて、前後に比較的、軽いのを置くと安全率が多いのだ。な、それに此の機械が完成されて全国的に使用され初めた時には、鉄道省では実に五十分の一の使用人を減ずる事が能きる、実に国家経済の大利益というものだな、解ったか。」

「うう、成程！」と先刻私を罵った兵隊靴とその仲間の四人が感心してうなずいていた。

「よし、で、試運転は明日、わしが出勤してからだ、そう、午前十時、と常務立会いの上でだ、やあ御苦労！」

技師長は技手等を連れて青ペンキ塗りの事務所へ引き上げて行った。

「万歳！」

「万歳！」

少年工達は火傷の足を引ずって喜んでいた。

私達も元気に仕事場へ帰ろうとしていた。「チェッ！」と又兵隊靴の仲間がこそこそと呟いた。「珍らしくもねえじゃねえか、こんな位な機械位、ヘッ！ 見せてやりてえや、横須賀の海軍工廠でもほんとに、四十糎からの大砲のズブ焼きが見られらあ、何んでい！ こんな物が出来たからって嬉しがりやがって、チャンチャラ可笑しいや。」

「お話しにならないや。」と他のが云った。

「山育ちの職人はからだらしのないものさ、少しは日本だって渡って見なきあね……」ともう一人のが又云った。

荒木はにが笑いをしていた。

職場へ帰って各自が万力（バイス）で油を拭いたり旋盤（バンコ）や穿孔機（ボールバン）を掃除し終る頃、終業汽笛の鳴る三十分程前になると皆風呂場へ集る。風呂から上る頃五時の汽笛が高い煙突の下で、河向うのS紡績と呼応して鳴り渡る。

夕暮が西の方からそろそろ爬って来るとくすんだ顔の人間が街を急ぎ足に歩き初める。S紡績の鉄鋲（リベット）に似た窓にもぼうと心細い灯が光り出す。町の東の城山の上では宵の明星が光り出す。

夕暮の街を歩く人間はそんなものは見ようともしない。頭を上げて歩くものは数える位しか居ないのだ。

帰途、何時ものように荒木勢一と連れ立っていた。二人の後を二番ボイラアの火夫天神林爺さんとその助手の少年火夫金窪が胴長のナッパを着て歩いて来た。皆の手や腰には空ら弁当がなっていた。

「困ったものだ」と荒木が云った。

「困る？ 心配しなくってもいいよ、俺の事は。」と私は云った。

「君の事じゃないよ、放浪だよ。あの四人の仕上師共さ、ヒネクレ者の……」

「ああ、あれか」と私はうなずいた。「本当だ、労働者の生一本な気持をちっとも持っていないんだなあ。」

「そうだ、あんな誇りを持った人間が一番厄介だからねえ。」そして荒木は少年火夫金窪を省りみた。「おい、金窪

君、君もよく注意し給え。」と今日の組立部の情況を大体語った。「ああいう人達は一番危険なんだよ、我々の運動の上で組織の害になるんだ、純粋の喜びを知らない代りに、怒りの感情も率直じゃないんだからね……」
少年は明っきり解り兼ねるらしく、唯軽く首を傾けていた。
「そうですのう、たしかにな」と天神林爺さんが空弁当をカラカラ鳴らした。
「たしかに儂共でさえ、ボイラアの具合がよけれあ一日気持がええですからな、何故そんな小理屈をこくか一寸わからんですな。」
「でもね、天神林さん。」少年は鼻声で云った。「苦しいよ、ボイラア番は、あんたが時々喘息で休むと一人でボイラアのスチイムをピンピン揚げなきゃならないから、蒸気鉄鎚の使い方の激しい時にはこっちがボイラアになって終いたい位だよ。」
「済まん、済まん、よくわかるで」爺さんは鳥打帽子の上から頭を叩いた。「ほんまに済まん、儂にも覚えがある、でけるだけ休まんようにするけんな、一人はつらいもんじゃ。」爺さんは続けた、「一人はつらいもんじゃ、例えにしてからじゃ、儂でもお前でもじゃ、こうして荒木さん達が一緒にいて呉れるで研究会でも行けるというものじゃ、一人は苦しいもんじゃ、ほんまに済まんな、悪い火夫についたもんじゃな……」

そして四人は笑い合った。
私達は今夜も研究会に出席しようとしているのだ。此の町の○鉄工組合は最近まで殆んど組合主義的指導理論の下に歩いて来ていたのだが、去年の三月第五十議会で普通選挙法が通過して以来、殊に五月に神戸で「日本労働組合評議会」が創立され、荒木が其の一員として活躍し初めた関係上、著しく方向転換の傾向が役員の間に現われて来ていた。又、東京の労働者は既に去年のメーデーには「ソヴェートロシアを承認せよ！」との旗を掲げて示威を敢行していた。然し無産政党が創立されていない以上何うしようもなかった。唯荒木や天神林の指導に従って、討論会が時どき続けられて来ていた。それが去年の十二月、結成後数時間にして結党禁止を食った「農民労働党」に激発され、超えて今年の三月三日大阪に於ける「労働農民党」の結党がいやが上にも政治的進出の熱を高めさせた。それでも種々なる傾向の組合員がいる為に、容易に議論の終結を得ず隔日位に研究会が続けられていた。
私達「無産政党支持派」は理論的にひた押しに進もうとしていた。非支持派は組合の伝統と、東京から帰ったばかりの私なんかに先んじられるのが不愉快さに、感情的に拒否していた。私達は途中相談した結果「どうしても今夜は決を取って終おう、それには無記名投票にして採決する方法が最善の道だ」という事に決定した。
組合本部へ着いてみると大半は集って雑談をしていた。

玄関は乱雑に古下駄やゴム長靴が脱いであった。赤い鼻緒も見えた。私が角で立小便をしている内に荒木や天神林達が先に入って行った。

「やあ、荒木勢一、色男……」と誰かが頓狂に怒鳴るのが聞えた。「巻島の浅ちゃんを離婚させたのは誰だい……?」

続いて荒木のさびた声がした。

私は闇に白い小便を見つめながらハッとした。不用意な言葉を吐く人間もいるものだ、他の苦るしみを興がるのは人間の通有性ではあるが……。私はフッと鼻で息をして家の中へ静かに入った。奥の間の床の壁には共産党宣言の抜萃が白紙に大きく書き並べられてある。

プロレタリアの失うものは鉄鎖のみだ
全世界を獲得せねばならぬ。
万国の労働者、団結せよ。

傍の襖紙にも誰かの言葉が書いてあった。

「今に飢餓は労働者の呪咀でなくなり、怠惰者に対する刑罰となるだろう。」

それは赤インキで誌したものだ。

私が入って行くと、急に空気が氷ったように静かになった。束髪に赤い造花を押した女工を交えた組合員が車座に坐っていた。車座の中央に荒木が俯向いて立っていた。天神林の赤い目が私の顔を見ていた。私は黙って坐ってから云った。

「荒木、坐れよ、立っていないで……」

すると荒木は大股で玄関に飛んで靴をつっかけて暴ら暴らしく外へ出て行って終った。「何うしたんだい。」と私は白ら白らしくも口を突いて出そうになったのをぐっと抑えた。私は天井を眺めた。

S紡績の機械部の裏地実という途上で女さえ見れば揶揄わずにはいられない剽軽男が何処かで姉の噂を耳にして此処で荒木に皮肉ったらしいのだ。

「どうもはや」裏地は腰を上げかけた。「僕が悪かった。つい調子に乗って饒舌って終った、余計な事を、呼び戻して来よう。」

「止せ! 来るものか。」私は強く手を振った。

「可愛そうな事を云ったもんだ。第一君はその噂の真偽も知らないんだろう?」

「実に実に、僕は巻島宇一君に対しても」と裏地は自分の平首を叩き叩き幾度も頭を下げた。「君の姉さんの事を、あんな事を云って申訳がない……」

私は答えなかった。彼は恥しそうに黙り込んで終った。

三十分程経つと、

「よう……」とか、

「今晩は、おそくなった!」とか云いながら組合員が威勢よく集って来た。

議長が選挙され討議に入った。何時どんな事が如何なる結果をもたらすか解らないものだ。人間は矢張り感傷的な動物だった。裏地の与えた一度の白けた雰囲気は、私の提

案した『無記名投票採決法』を余りの議論もなく採用せしめた程効力があった。

そして投票開けの結果は政党支持派の勝利に帰した。反対派だった旋盤工の伊庭能雄というのが不愉快らしく額をしかめていた。

「俺は」と彼は体をゆすりゆすり云った。「少数派で負けたが政治運動は好かないんだ。いや性に合わないんだ。組合運動がお留守になりあしないかという掛念もあるんだ。是はつまり政治運動は、組合の産業別整理後にやらかす仕事じゃないのかな……、原則としては俺達は……」

「止めろ！　伊庭能雄！」と突然出宮という太っちょ旋盤工の一人が云った。「又、お前は、原則、原則、原則って云やがる。何時でもお前はずっと初めから考え出すからあかん。当面しなければならない仕事だ。能きる範囲でやって行こうじゃないか、性に合わぬや、虫が好かぬで運動がやれるか……うん……」そして彼は立ち上って演説を初めた。

「諸君！　私は今夜の決議を全組合員〇鉄工組合全員に代って喜ぶものであります。省るならば、我々の運動は今まで工場の門から一歩も外へ出ていなかった。言換えれば資本主義政治を認めていたものであり、無産階級の政治には無関心であったのだ。即ち我々は単に経済上職業上の行動のみに動いて来たに過ぎない。が然し諸君！　我々は目覚めたのだ。経済上の範囲ばかりでなく、政治の舞台でも資本家階級と闘うことになったのだ。今までと雖も決して資本家と政治の上で戦っていなかったとは云えない。或る程度では闘って来た。がそれは我々の政治上の目的と云うよりも、唯経済的問題に限られていたと云った方が本当だった。資本家政治をぶっつぶすというより逆に彼等の政治を利用して経済上職業上の利益をとっ獲かまえて来たに過ぎないのだ。我々は資本家共と政治の上で戦いはしたものの決して奴等の政治と戦ったのではなかった。我々は資本主義政治の外に自分の政治を創ろうとしたのではなく、却って資本家の政治に従って来たと云っても間違いはないのだ。此の形の無産階級運動は、小っぽけな議会主義だったのだ。諸君！　日本に於ける無産階級運動には此の現れが未だ明っきりしていない、とは云え我々が最大の注意を払わねばならないのは、此の点にある。即ち外国に於て此の例が殊に甚だしい。我々の位置、日本労働者の位置こそ丁度此処に在るのだ。全労働者が『議会主義』の力が何にもならない事を悟った時、全無産階級は初めて資本主義の正体を明確に見たのだ。政治、それは真なる政治ではなくって『資本家だけの政治』である事が解ったのだ。其処で、我々は今の政治を排斥する。認めないのだ！　だから我々の兄弟の或る者は一切の政治運動に参加する事を承知しなかった。一切の政治運動を排斥した。けれども諸君！」出宮は此処で二つばかり足踏みをし鼻筋に縮緬皺をよせて言葉に力を入れた。

「此の方向こそ最も我々が考えなければならん所だ。我々

は政治を否定した。政治運動に参加することを拒んだ。だが是れこそ此の為にこそ、無産階級運動は初めて、無産階級独自の政治運動に入り得たのである。何となればです。諸君！　資本主義政治から逃げ出そうとする我々の目的は、即ち無産階級的性質を持っていたからである。唯一時、一切の政治運動を排斥し一切の政治運動に参加しない事が我々の最良の立場だと考えたからである。

然し諸君！　我々の『労働農民党』は結成されたのだ。我々が過去に資本家政治の力を借りて我々の利益を得ようとしたのは大きな誤りであった。我々は我々の政治を持たねば、獲得しなければならん。即ち我々が『労働農民党』それ自身が大衆の要求を完全に代表している限りに於て、我々は此の党を支持し、以て資本家共の政治に対抗する事を誓うものであります。

一切の我々の運動は、最早本当の意味で、最後の革命的の意味に於て強力なる政治闘争を展開しなければならないのであります。これこそ、この今夜の決議こそ我々の解放を一歩進めたものと云わずして何と云いましょう。いささか以て今夜の決議を祝う次第であります……」

嵐のような拍手があった。

次に小野田と云う停車場前の運送店の息子が立った。彼は私立大学出の私達の理論的指導者だった。

「僕等のこの政治的進出に際して一応、心得て置かねばならない事は、一般大衆的無産政党と共産党と各経済闘争団体との関係であります。諸君は決して此の無産政党が一つの色のあるものだと決定してはならないのです。日本は、いや日本程、この都市プロレタリアートと農村プロレタリアートとの握手の出来難い国はないのです。それは日本の地主は封建的地主であると共に、近代ブルジョア化しつつあるからであります。故にこの我等の支持する無産政党は今後相当の年月の間に、単に共同戦線党であるという意味に於いて、凡ゆる無産団体をも包含せねばならぬのであります。若し此の見地を誤るならば恐らく日本の無産階級運動は十年も或はもっと後戻りせねばならないかも知れません！　そして現在の日本の無産階級運動の任務は只、組織へ、組織へと主要なる努力を払わねばならない事を忘れてはならないのであります……」

と彼は、共産党と大衆党との役割を、労働組合との関係を詳細に論述して呉れた。

「反支持派」に小異論が出たが大体に於て異議なく散会した。

三

外は月のかすれた水蒸気の多い六月の夜だった。

組合を出て町を貫流する鴨川の堤に添って行くと堤に斜に突出した松の大木の影に荒木が腕組をしてぽつんと立っていた。

「何うしたんだ。」と私は側へ寄って行った。
「うん。」荒木は地を睨みつけて私の前を動かなかった。
「歩いて少し話したい事があるんだが……」
「よし、歩こう」と私は明っきり答えた。
二人は城山の方へ歩き出した。河の面には街の赤い灯がちらちらと映じていた。堤の下からは川瀬の音が冷たく聞えた。
「ね、姉が曽我部の家を離縁されたんだ。」と私は彼の顔を見ないようにして云い出した。
「今夜当りは帰っているかも知れないが。」
「俺は、今夜、先刻、S紡績の裏地に聞いた。」荒木はズボンのポケットに両手を突込んで、小石を蹴り蹴り歩いていた。
「浅ちゃんの離縁話が、何か俺に関係でもあるらしく聞えたが、俺が責任を持たねばならないような理由があるのか云って呉れ！」
「関係がか、うん、君は手紙の往復をしていたらしいね、その事で実は一昨日、姉の嫁いだ曽我部の所へ行って来たのだ。」
「それで？……」
「それで、離縁と明っきり確定したのさ。」
「そうだ。事実だ。手紙のやりとりをしていたのは事実だ。長い事だよ。それは……」
「長い事だ、と君は認めるね、姉が結婚した当時かららしいね、いや、それは別だ、第一、今歳三歳になる子供、あの子まで疑われているんだぞ……」
「子が、子が、子供までが……」と荒木は両手をポケットに入れたまま苦しそうに途上で体を一廻転した。「それだ！　俺の云いたいのは、今夜、云いたいのは、俺は断言する。手紙のやりとりは認める、だが子供の事なんか、そんな関係は絶対にないと俺は断言する。」
城山の下まで来た。二人の前に灰色の石段が伸びていた。石段を昇りつめて終うまで二人は黙っていた。城山の上から眺めると町並は平和に睡っているように思われた。
「子供時分とはすっかり変って終った。」と私は独りつぶやいた。「田や、畠は埋められちゃった。百姓が子供を工場へ出したり花莚の内職をしなきゃ食って行かれなくなったのも無理はないなあ！」
「夜の底だけに平和があらあ……」
と荒木は感傷的に呟いた。
「おい荒木！」と私は一昨日から考えていた事を思い切って口に出した。
「君は姉と結婚してやって呉れないか？」
「何、何？　何だって、結婚？」と彼は暴ら暴らしく私の方へ向きなおって云った。「君は、君は、君までが俺を疑っているのか……、何んだというんだ、それは何という意味だ？」
「いや、姉と結婚してやって呉れというのさ、若し今も君

が姉を愛しているならば……」
「馬鹿！　馬鹿！　巻島宇市の馬鹿！」と荒木は左の目尻をぱちつかせ乍ら私の鼻先に拳骨を突き出した。
「馬鹿！　愛して居る事と、それとは問題が違うぞ、よく考えて見て呉れ……」
「姉は可愛そうな女だ。姉を救って呉れるのは君より外にいないのだ、荒木……」
「俺の子じゃない」と荒木は急に語調を強めた。「俺の子じゃない！　絶対に俺の子じゃない……」
彼は体をゆすりゆすり大股に、腐れかけた城山の石段を降りて行った。私は友のがっしりした後姿を昼間とは別人のように寂しく見た。
――労働者には真実な恋さえ出来ないんだ。荒木も姉も不幸な人間だ――少女時代からの極度の貧困と、迫害――（私達一家はTから流れて来た為に昔は渡り者、渡り者と馬鹿扱いにされていた）――その為に自分を主張する事を何処かへ置き忘れて来て終った。弱い性格の姉、何時も他人の顔色ばかり窺って生きて来た気の毒な姉、自分の一家は確かに不幸だ、だが自分達が不幸だと思う、その意識が既に一つの不幸ではないか。自分の場合はともかくも姉は確かに不幸だった。死にかけたアルコール中毒の父と祖母とを養いつつ少女時代を過ごした上、漸く得た恋を捨てて他の男と結婚させられて終ったのだ。
当時、東京に居た私の元に寄こした姉の手紙を未だ記憶している。
……荒木勢一は、私のため、父やばばのためにも私と紡績職長との結婚を祝って呉れます。勢一は可愛そうな男です。でも、荒木は私が他の男と一緒になったからって、弱ったり参ったりしない男です。私は自分がきりょうよく生れた事が、うっかりしている間に自分を思わない方へ引っぱって行くのにびっくりしています。ばばと父のめんどうは曽我部（私が嫁ぐ家の名です）が見て呉れます……。
私はじっと姉の事を考えて見た。鼻筋の細い意志的強さの薄い女だった。あの姉の子が誰の子だか、恐らくそれを知っているのはその母親だけだろう。
「絶対に僕の子じゃない。」と荒木は云った。
彼は体をゆすりゆすり歩いて行く、石段の下まで行くと荒木は広い額を向けなおして云った。
「巻島！　君がそんな事をいうのは、浅ちゃんを殺す事だぞ！」
そして彼はくるりと体を浮かして闇の中に消えた。私は誰を信じてよいのか解らなかった。私はペッと唾液を町の空に吐きかけて城山を降り始めた。私達は涙を濺ぐのを止めて汗を流さなければならない。
私は或る女運動家が獄裡で――日頃愛していながら要求されても遂に肉体を与えなかった恋人の事を思い出してその悔恨の情よりも未練の情に泣いた――話を思いながら歩

いた。
空の星は水色にひくひく動いていた。何も彼も私とは関係がないように思われた。
家の方へ体を向けたが何時になく私の膝こぶしは重かった。
家には姉が子を連れて帰っているだろう。十年近くもアル中で寝ている父は、例の通り何かわけの判らぬ事を一人でつぶやいているだろう。父の看病をしていた事を盾に取って、長らく放浪生活に身を崩した私には一言も物を云わせない一刻で熱心な浄土宗信者の祖母がいる。私とは絶えず対立している腹異いのアナアキストの妹がいる。久し振りで帰郷したが即刻上京せねばならぬのを踏み止まって工場に入ったのもこの一人の妹を正しいマルキストの道へ導く可き兄としての義務を感じたからだ。
二月、畸形児として生れて二十四時間で死んだ子供の骨を埋めに故郷へ帰った私を迎えて流石に祖母は嬉し気に云った。
「おおよそ、人間ちう者はな、苦しい時と悲しい時には故郷へ帰るものぞな。見いこの新もそうじゃ」背の円るい祖母は枯れた指で寝ている父を指さした。「重子もそうじゃ、何時までも儂を苦しめるもんではないぞな……」祖母は又骨張った手で物を抑えるようにした。「皆々、これは儂の信心からじゃ、有難や、有難や、ナアーミダー、ナアーミダー、一つお礼にお勤めでもしようかい。」
そして祖母は古い黒塗りの仏壇に燈明を灯ぼして木魚を叩き始めた。
其間に私と妹とは病の父の枕元で争った。「兄さんは」と妹が顎を前に伸ばして云い出した。「コムニストになったんですってね」「何故だ」と私は此の問いに驚いた。「何故そんなことを訊くんだ？」
「妾はアナアキストだから、そして比処に寝ている父も、兄さんのとは違う私の母もアナアキストだったから……」
「そして……」
「コムニストを憎むのよ」
「僕もか……」
「勿論よ」と妹は人示指で十文字に唇を抑えた。
「君も変ったなあ」と私は五六年前に逢った少女時代の妹を思い浮べながら云った。「君が十五の時、始めて父の同志の家で逢った時はまだほんのねんねだったが……」
「ええそう、あれから五年たつわ」
「うむ、五年たつ、父や母がアナアキストだったからって君がアナになる必要があるのかい？、誰が君をアナアキストにしたんだい？」
「必要？　誰が？　いいえ誰も、私がそうなったまでよ……」
私は妹が三人ものアナアキストと同棲していた事を知っている。皆、市井の不良少年と大した相異のない人だった事も。そしてそれらの人達は皆気の毒な運命と歪んだ性格

を通して社会を見、個人主義的な虚無的な物の見方を持っていたのだ。

「多分、君と同棲した多くの不良少年共がそうしたんだろう」

私もアナアキズム理論の持つ魅力を知っている。女がそれに捲き込まれて行くのも決して無理がないと思う。

「誰と同棲しようと大きなお世話。」と妹は目に角を立てた。

「大勢、男をだましてね……」

「ええ、私が彼をだまし、彼が私をだます、人間は永久の欺瞞よ……」

「そうか、ではなぜ故郷にぶらぶらしているんだ、祖母の手伝いもしないで？」

「色々の御質問ね、激しい生活に飽きたから自分の世界の中にしばらく入っていようと思ってさ。」

「けちな主観だね、アナアキストの主観はそんな小っぽけな感傷主義かい？」

「そんな物の云い方をすると」妹は怒りかけた。「私怒ってよ、で兄さん達は？」

「まあ待て……」と私は睡っている父の顔面のかすかな動きに気附いて妹を制した。「父の前では止そう又此の次にして呉れ、そ、そんな議論は、僕が悪るかった。」

「いいえ。」と妹は膝をゆすぶった。「兄さん達は、資本家共を殺せて、そんな偉らそうな事をいうなら、そしてあの妻子共を？」

「馬鹿！」私は少し呆れて小声で云った。「そんな事は今論ずる事じゃない！」

「意気地なし、ふんた方は人道主義から一歩も出ていないじゃないの！　軽蔑してやるわ！」

「それだけか君達が僕等に云う事は、自分が観念的に満足すればいいのか？　小っぽけな主観の中に閉じこもっていれば満足なのか。」

「コムニストは理論やね、エゴイズムのない人間いないでしょう。人間のエゴイズムを兄さんは否定するの？」

「人間は雑多な感情を持っているさ、だが運動に個人主義を持ち出したらお終いさ、僕らはとっくにそんな感情からは卒業したよ。」

「えらそうにね、欲するように生きたら」

「その為めの闘争だ！」

「ふん、闘争……コムニストが……」

「君らの闘争は××××や、××ばかりだろう、対手を御覧！　そして日本の労働者の組織状態を見て御覧！」

「こらッ！……」と突然、父がかすれた喉をしぼって枕をごそごそさせながら兄妹の方に黄色い目を向けた。

「お前等は何だ、何ちうんだ。うむ、ああ、この俺に死ねとでも云うのか？　うん、死ねちうのか、……うん死んでやるとも、死んでやる、うん……」

祖母が仏壇の前からよちよち戻って来て私達兄妹を叱っ

た。
　二人が茶の間に引き込んでからも、祖母に何か泣事を云っている父のかすれ声が、長い間聞えていたのを未だ覚えている。妹は又人示指で唇を縦に抑えて笑っていた。
「みんな儂に死ねと云いよる……」
「死ねとも死ねとも、清々するわい！」
「ふふふ……。死んでやる、死んでやる。」と父と祖母が争っていた。
「おばあ」と私は声をかけた。「親爺を余りおこらせんと。」
「泣くのが病じゃけん、新は楽しみに泣いとるんじゃ！」
「楽しみに？」
「そうよ、たんまに泣かすがかなめじゃ、十年も寝とるけんな。」
　祖母の父への愛は私達には量られない程深いものだった「ふふッ！」と妹はふくみ笑いをした。「おとっつぁんもお終いだわ。」
　すると祖母は鋭くそれを叱った。
「男のような心の娘じゃ、儂は新の業が深いけんに苦しむのが当り前じゃというのぞ。――苦しんで何になる――重子はそういう腹で笑っとるんじゃろうが、おどれが、おどれが。」
　父は何時までも虫のように泣いていた。
「……おばあ、おいは死にたくないぞな、ああ、おけらになってもいい、おぐらもちになってもええで生きていたいぞなおばあ……」気味悪い声だった。
　妹は其外にこういう事を信じていた。
「抑々、マルキシズムは一つの逆道だ。猶太の反逆児が創り上げた一つの世界攪乱戦術だ。猶太人は凡ゆる人種から長い世紀に渡って奴隷視されて来た。マルキシズムはその人種に対する怨恨を晴らす為の戦術に過ぎないのだ。だからこの世界攪乱戦術は思想方面ばかりでなく、文学上にも表われている。ゾラ、モオパッサン、ヴェルハーレン、等々皆、一つの計画の下に行われた世界堕落策だ。そして彼等は皆猶太人だった。マルクスもエンゲルスもレーニンも皆猶太人だ。畢竟マルキシズムは邪道に過ぎないのだ。」と。一笑に附すべき考え方だった。然し妹は事実そう信じていた。
　凡ゆる家の事がまるで膝こぶしに引きかかっているように足が重い。家の近くまで来ると姉が帰っているらしく、赤子の喚めき声がもれて来た。
　無気味な念仏も聞えた。それは祖母の声ではなく、彼女の長い寂寥生活の相手になっている禿鷹のように赤肌のむけた老いぼれ鸚鵡の真似念仏だった。祖母の読経の声音を聴き覚えた鸚鵡は時を嫌らわず念仏を唱えるので家中、近隣中の憎まれ者になっていた。
――ナマミダ――
――ナマミダ――
と鸚鵡は熱心に唱えている。
　祖母は祖母で又、離縁されて戻った姉を前に据えて、私

達の母の死や、妹の母の死や、父の悲運や、姉の問題を引き合いにして、「巻島の家は業が深いけんな」などと愚痴を並べて信心の必要をながながと口説いている事だろう。

四

家に入ると奥の間で子供をあやす祖母の風のような声がしていた。

腹の減っていた私は何よりも先に茶の間の食膳に向って生ま冷えの汁で晩い夕食を取った。妹は火鉢の横手に腹這いになって手紙を書いていた。

「姉さんが帰って来たね」と私は訊ねた。「何んな様子だい？……」

「あの人はね、人間が愛だけで生きて行けると思ってたらしいわね！」

「うん、で、元気かい？」

「子供ね、何処かへ遣るんですって、隆介さんの所へだか。」

私はふと自分の死んだ子供の事を思い出して姉の手で育てるように忠告しようと思った。

そして飯を急いだ。妹は首を傾げ一心にペンを走らせている。

「重子、東京へか」と私は飯を片頬にふくらまして云った。

「東京の君達の仲間は今度の『労働農民党』には大分反対運動をしているらしいね。」

「勿論よ、命令や、法則ばかりで人間を縛ろうとする政治には根本的に反対……」と妹はペン軸で耳をほじった。

「規則や命令がなくっても人間は食いたくなれあ働くものよ、必要と能力に応じて……」

「まあ、君とは議論しないが、去年か今年の正月か発会した『黒色青年連盟』は発会式の夜銀座通りを破壊したっ切り何もしないじゃないか。」

「へッ、私達の同志が何を計画しているか兄さんなどに解るものですか。」妹は扇形に開いた足首をばたばたさせた。

「組合運動や、政治運動もまあいいとして、兄さん達は、人間の持つ愛や憎しみ、個性、そうした問題をどう仕末するつもりなの？」

「そうさね。」

「考えていないでしょう。」と妹は顎を伸ばした。

「うん、先ず僕等のしなけれあならない問題から……」

「ロシアじゃ、ピオネールとか何とかって少年時代から共産主義的な教育をしているというけれ共、日本だって小学校時代から皇室中心主義的な軍国主義的な、教育をしているわよ、それにどれだけの相違があるんでしょう？　結局人間を一つの型の中に嵌め込んで終うのね、退屈な……人間の夢は余りする事に較べて大き過ぎるわ、自分をコッコッみがき上げるのが一番……」

こうした議論になると私も少し困った。どんな石ころのようになったって、そこを通らねば向うへ行きつけないな

ら何んな所でも突き進んで行かねばならない。とそれだけは云える。

「俺も退屈だ。」と私は云うより外になかった。

「お前のような話を聞いていると退屈になる。センチメンタリストは没落するさ。」

妹は私を鼻であしらいながら足をばたばたさせて山の唄を歌った。

娘なるなよ工夫の嬶あ、岩がどんとくれあ若後家よ

食事を終って奥の病間へ行った。姉は一人ではしゃいでいた。話の尾り毎に「ホホ」と笑っては、掌の背で唇を抑えた。三歳になる姉の子は祖母の使う独りあんまを戯って母親に添って遊んでいた。祖母は猫背になって孫の遊ぶ手元を眺め乍ら「業が深い業が深い」と尖った顋をゆすった。

「姉さん暫らく」私は父の布団の足元に坐って軽く挨拶を述べた。「明雄は元気ですね。」「まあ、いいえ、是でも乳児脚気の気があって弱くて困るの毎年病んでね、ああ、先日はうちの会社へ来て呉れたってねホホ……。御苦労様、でもとうとう出て来ました。こうなるのが当り前じゃないのか知らって気もするのよ、少しの間居さしてつかさいね、私もどうにかしますけんな……」

案外に落着いて見える姉の態度だった。

「心配しないでいて下さい。僕がいるから、然し子供が可愛そうですね。」

「そうそう」と姉は片手を子供の頭にのせた。

「あんたに相談しようと思うてたが、隆介さんの家へ呉れようと思うてな、男の子を欲しがってるけんなホホ……」

隆介というのは巻島の家とは遠縁に当る人の家の子供のない中年者夫婦だった。

「大体、子供は親の手で育てる可きが本当だと思うし、私もそれに賛成だが、然し姉さん手離せますか。」

「思いの外よ」と姉は笑った。「平気で手離せそうなの！人間もこうなると度胸の者ね、丁度あっこへ嫁に行った時と同じ気持ね、簡単にやれるらしい気がするの！」

「明っきりしてますね。」私は結婚によって変化した肉身の性格をしみじみと眺めた。「それ程までに姉さんが機械的になっていようとは思わなかった。変りましたね、昔とは、姉さんも苦しんで来たからなあ！」

「変ったでしょ。人間て、やっぱり、それぞれ生きる道を見出す者よ、ね、そう思わない？」

姉は苦しかった結婚生活から自己の哲学を掘り当てたらしい。私は少しほっとした。

「業じゃ、業じゃ、巫女のいうた通りじゃ」と祖母は鑑紙のような手で孫の明雄の頭を撫でた。「巻島の家は何かに呪われているよ……」

「馬鹿らしい、おばあ！」と姉は暗い顔をした。

「いいや、確かじゃ、新を見よ、幸徳たらちふ奴の陣笠しよった罰でこのていじゃ、宇市の子は不具で死によるお前は戻された。この子は他へやられる。重子は不良じゃ。そ

れになんぼいうても又、宇市めが新の真似しよって工場の中で何かこそこそしよるんぞな……」
「それあ、おばあ！」と姉は白目の勝った瞳を輝かせた。
「世の中は、何んぼ何んちうても、御時勢や、一、二、三ちう具合に行きますよ。」
「何んやら、お前のいう事判らへん。」と祖母は因業に猫鬚に似た皺のある口から白い歯茎を出した。「お前ら何んちうてもあかん。年老りは生きて来たけんな、餅の数よけいに喰うた者の云う事は、たしかじゃぞな！　意気地こそないが……」
「なにもそんなに云わないでも」と姉は、伏目になって子供を抱きよせた。「おばあ、何も私は悪い事した覚えなんか少しもあらへんのじゃけん。」
私は一言もなく、姉の心を考え、父の土色をした痙攣する頬の筋肉を見つめて暗い気持でいた。
「いんや、いんや。もう業じゃ、深い業じゃよ。」
片手を物でも抑えるように動かし乍らそう云い切った祖母は仏壇へにじり寄った。
私はそっと立って茶の間へ帰った。未だ寝そべったまま新聞を読んでいた妹は顔を上げて人示指で十文字にした唇の端を曲げた。
「兄さんの馬鹿！　ばばに勝手な事ばかり云われて一言もなしなの？」
「業だとさ。」と私は火鉢の前に胡座をかいた。

「お経が初まるわよ、見てらっしゃい！」と妹は頬杖の片手を振った、「あの禿げ鸚鵡と一緒に始めるわよ……」
無気味な静けさが家の中にこめた。鉄瓶の湯の沸ぎる音だけが際立って耳に響いた。
間もなく木魚の音が聞え出した。祖母の――ナムアミダブーナムアミダブ――という痰のかかった声もし始めた。
「寝ようよ。」と私は妹に申込んだ。
「も少し、今に禿げ鸚鵡の奴も鳴き出すから……」妹は私の申込みをよそ事のように聞いていた。「あれでいいのね。あれでいいのよ、珠数でもつまぐっていればそれでいいのよ、ばばはあれで救われているのね。」
「ケッ！　何が救われてるだい！」
私は立って自分の布団を敷いた。
「寝た。寝た。」そう云い云い私は布団にもぐった。「明日になりゃ、又陽が昇らあ。」
と妹は体を起して私に云った。
「兄さん、日が暮れて、夜が明けて、又、ね、兄さん、人間はそれでよかあなくって。生きる事が歴史を作る事でしょ。」
「うるさい、寝ちまえ！」
私は静かに瞳を閉じて東京の妻の事を思って見た。産後の貧血から救世軍施療病院に入院した彼女は、讃美歌と祈禱を強いられながら暮らしている事だろう。
最初は妹をマルキストとする可く暫く故郷に止まる予算

だったのが、今は工場の組織の方が大切な仕事になって終っていた。東京の各組合は政治的進出によってすばらしい活気を呈しているに違いない。そしてO鉄工組合、半ばサンヂカリストに似た人達許りで組織せられていたK製鉄所のO鉄工組合をより正しい左翼に歩調を向けさせねばならない。又能きるなら姉の元勤めていた紡績へも組織の手を伸ばしたい。レーニンが云った「彼等に一杯の暖かき牛乳を与えよ！」あの態度でゆっくりと仕事をしたい。東京へ帰るのはそれからだ。故郷へ畸形児の骨を埋めに帰った私が久し振りでのうのうと手足を伸ばしている事だろと妻は思っているに違いない。

それ所か、私の周囲は、悒鬱と封建的残存物とアナアキイとで息がつまりそうだ。田舎の窒息しそうな空気にはたまらなくなる。昔放浪時代には一度こんな事があったように覚えている。心の大胆さが消えて終い、沈黙がちに、考える事にも歩く事にも飽きて、まるでのろまな人間か、盲人のように心がしなびていた時代があった。今とはちがって秩序のない生き方をしていた時だ。

一日も早く東京へ帰りたい念にかられる事がある。だがそれは廻避ではないか。私も父のような——変形的没落——をしないように注意せねばならない。あんな風になるんではたまらない。実際、今、アル中で寝たっ切りの父が昔あの赤旗事件の夜神田の錦輝館へ四歳の私を肩車にのせて連れて行って呉れた人だとは、何うしても思えない。ひどい衰え方だ。皆酒からだ。私は父の二の舞いをしてはならない。「一体、日本人はちっぽけ過ぎる」と私は時々思う。それは体軀の事ではない。——腹が細そ過ぎる。どっしり根を張ったものを持っていない。いつもふらふらしている。妹もそうだ。祖母もそうだ。祖母は明日に向ってあげる悲鳴にもなれていた。姉だってそうらしい、私がそうだ。胃の弱い人間が大食して苦しんでいるようなものだ。其処へ行くとロシア人などは大きい。一見ぽかんとしてぼやけて見えるが大きい太い者を持っている。だからあれ程の事業を完成し得たのだ。

私達がロシアの先輩の轍を学ぼうとするのに少しも不思議はない筈だ。

祖母の読経は未だ終らない。奥の間の縁側に釣った鳥籠から禿げた鸚鵡の棒のような真似声が始まり出した。父の呟きも聞える。妹は未だ寝ないらしい。

道路を距てた堤下の鴨川から、ぎいぎいと艪の軋みが聞える。川下から鉄材を運んで来た舟らしい。

私は心の中で静かに痩せた妻を抱いて眼を閉じた。妻の足はいつも冷たかった。

私は小声で好きなエセーニンの詩を歌った。

　月は舌、空はくろがね、
　母は故郷に
　俺はボルシェビキー

ただしくコムニストとして生きる事はどんな辛らい人生

を生きるよりも困難な事だ。

五

時折、電光がした。

生まぬるい風が吹いて、夏が来ていた。

縁側の風鈴が風を受けては思いだしたようにかすかに鳴った。

「人間は五十年生きれあ元金を取り戻したようなものです。五十過ぎたら後は利子で生きて行かなきゃ申訳がありません。このまま死んでは虫けらと変りはありませんよ。」と彼女は病床の夫に風を送る団扇の手を休めた。

「どうせ子供があるわけのものではなし、貧乏世帯に貰い子したたって揃って苦しむばかりでしょう！　持って生れた病とは云いながら、喘息持ちの労働者なんて意気地のないものですね。」

弾ずみそうな肉の締った体を手拭地の大柄浴衣で包んで彼女は横座りに夫の様子を見下ろしていた。電燈の囲りを一匹の黒い火取虫がぐるぐる廻っていた。三日前から工場を休んでいる天神林は狭い縁側に面した六畳の真中に寝苦が笑いをしていた。

「いや、巻島さん！」と彼は嗄枯声で云った。

「亭主よりも二三倍も気が強くってね、此の女がいなければあ私もとっくにおいぼれていたかも知れませんよ。喘息持ちの事ですからな、ははあ、何時も私の尻ばかりひっぱたきやがって……」

「女房大明神ですね！」と見舞いに来た私も笑わずにはいられなかった。「ヒステリーやがむしゃらは困るが、要領よく亭主の尻をひっぱたくのなら異議なしだ。」

「心から甘い亭主も困りますがね、うちのように女房のいう事をきく人は有難いものですよ……」

彼女は虫を追い払い乍ら真面目に云った。

事実、彼の妻の泣き事を聞いた事がなかった。「考えるより働け」の主義らしかった。天神林はよく喘息のために工場を休んだ。一ヵ月に十日も休めば家の台所経済が苦しくなる。其の為に「和服御仕立」の看板を出していたし愈々窮ると単身工場へ出かけて会計から借金して来る女だった。又彼女は常に残りの飯粒で糊を造って置いて呉れたり、窓に乾して焼飯のようなものを創って保存していた。或る時はそれが焙られ砂糖にまぶされて、研究会の夜の茶菓子となり、公休日などのビラ貼りやポスタア貼りの忙しい日の同志の腹を肥やした。私はよく彼女と他の同志の妻、殊に裏地や倉戸の女房と比較して見る事がある。

裏地の妻は、組合で五月頃から催している巡回研究会が自分の家で行われる時は機嫌が悪るかった。多くは活動写真などを見物に行って留守だった。妻は夫を「おっちょこちょい」と呼んでいた。

「僕んとこの嬶は」と裏地は平首を叩いては云い云いした。

「僕が組合に加入している事を僕が職工である事よりも、もっと嫌っているんだ。」

又冬の夜のビラ撒きや会合で体を冷やして帰る彼は、先に寝ている妻君にひどく虐待されるそうだ。

「ねえ、巻島さん」と倉戸の妻も私に尋ねた事があった。「今に組合が会社と職工の中に入って、お金儲けの能きる時が来ないものやろかい。」

そして日永の時は郵便配達と他家の妻君達の噂話して亭主の帰宅を忘れて終う化粧好きな女だった。

天神林の妻は自分の家の研究会の夜は台所で明日の朝の仕度をしながら黙って皆の討論を聞いている女だった。と云って私は裏地や倉戸の妻に決して悪意を持ってはいなかった。天神林の妻の方が稀有なのであった。

「若い時から変り者でしたよ。」と又天神林は云い足した。「私が組合運動をしようと、組織のために勤め先を転々しようと一度も文句を云った事がありませんよ。おどかされるのは、溜息でもついた時ですね。と云って馬鹿じゃないんですね。矢っ張りてめえが小さい時から苦労して来てるから、腹ん中にそんな風なしこりでも出来ているんですね！」

「そうですね。」其時私は、誰かが云った――生活が意識を決定する――という言葉を思い出していた。「そうですよ。苦しんで来た人でなけりゃ解りませんよ。僕の姉もそうだすっかり変っちまった。」

「まあ、忘れていた。浅ちゃんは元気？」と彼女は又団扇で夫を煽ぎ始めた。

「すっかり変っちまってね、嫁入前はから意気地のない女でしたが。」姉の浅江は小さい時から、天神林の妻には世話になっていた。裁縫、料理等まで教えられ、嫁入の時は殆ど彼女の厄介になったらしい。「今度は、矢っ張り向うへ行ってからの苦労や、離縁問題でそうなったんだろうが、とても押しが強くなってね。子供も遠縁の親戚へ呉れちまって平気で毎日妹と花札なんか引いてますよ。」

「まあ、気強い！」と彼女は微笑んだ。

「あんたん所も大変だなあ。」と天神林は咳をした。「おい、いいよもう煽うがないでも。ねえ、巻島さん、あんた一人の稼ぎだから。」

彼のいう通り私の家の生活は、少しづつ押しつめられていた。嫁の離縁が、精神的にも経済的にも二重に一家の生活を暗くさせていた。遊んでいる妹がいる上に曽我部からは仕送りが絶えたのと姉が一人殖えたのに原因があった。祖母は向け所のない憤りと不平を昔馴染の鸚鵡に向けて毎日ブツブツ云っている。父へ煎じて飲ますオカメ草(薬草)さえ採りに行かなくなったので姉が代りにしている。父は布団の衿の汚れを気にして「臭い臭い」と小言を続けていた。

「ぜえたくぞな、布団よりお前の方が臭いぞな。」と祖母は十年来に珍らしく父を叱ったりした。姉が帰った為でも

あろうが祖母は物臭そうに仏壇の前に背を円くへばりついて動かなくなった。
「妾も働かなけれぁ、あかん」と姉は寝しなによく云った。
「ねえ重ちゃん、二人で働こうよ！」
「どっちでも、私かまわないわ。」
妹は何処までもぐずだった。私は口を閉じて姉妹の行動を見守っているより他に仕様のない立場にいた。
「重公が働くって力んでますから、仕事の口さえ有りぁ、まあじきに楽になりますよ、S紡績へでも入れればね…」と私は話を転換させた。「所でと、Sといや、あすこの組織はうまく行ってますかね？」
「あすこは出宮と裏地の部署だがどうだかな。未だ報告はないし、あの位の工場に組織を持たないなんて嘘ですよ。どしどし喰い込もうじゃありませんか、そうだあんたん所の重ちゃんがS紡績へ入られれば好都合だがなあ……」
「何うして。重公が？　何うだかな、あいつは、出鱈目だから……」
「出鱈目と云っても、何に未だからきし子供ですからね、若しあんたが真面目になって相手になっているなら、あんたは若い……そう云っちゃなんですが。」と天神林は女房を顎で指した。「若い内はとかく何も解らずに色々の事をやりますよ。こいつがね、一昨日工場の三番ボイラアの別見の所へ「体が悪いから休む」って言附けを頼みに行ったらあすこの我鬼奴、朝っぱらから寝床ん中で大声で××の歌を呶鳴っていたというじゃありませんか、ね、そこで、こいつが「何の歌」って聞いたと思いなさい。「工場の歌だい」と来たもんだ。「工場の歌」とね、得てして子供の中はそうしたものですよ。」「そう、私もそう思うのよ。」と彼女も云った。「あんたが色々と妹さんの話をするけんど年をとれあよくなりますよ、吃度。」
それから私達はS紡績へビラを持ち込む準備や、大体の時日、方法等を相談し、又政治的進出による研究会の研究題目の変更等に就いても党の支部確立と共に語り合った。
「この六月の末に寝込むのも楽じゃありませんね」帰りがけに私は云った。「早くなおって出勤してやって下さい、金窪の奴、又スチームが昇らないってみんなからあふられてテンテコ舞いしていますよ。」
「早く丈夫になりたい。」と、彼は妻に相談するように云った。
「さよなら、プロレタリアは病気で死んでは恥だよ。」
「そうですとも」と彼女は玄関まで私を送り出した。「役目を果たさずには死なせませんよ。」
帰途、荒木を訪問すると、彼は下宿の二階でナッパも脱がずに天井と睨めっこをしていた。
「おい、何か面白い話でもあるのかい？」姉の事件以来鋭く神経を昂らせているので私は当り触りのない話を持ちかけた。
「どんな計画にふけってるんだい。」

「馬鹿になる事が一番面白いだろうよ。」と彼は見向きもしないで左の目尻を悚わせた。「俺は忘れる事を考えているのさ。人間が自分でやらかした事を片っ端から忘れて行ったら面白かろうと思ってさ。」
「又、イライラしているな、よくそれで大ハンマアを振り廻しているな。」
「君には馬車馬の幸福さが解るまいよ。無茶苦茶に働いている時が一番さ。」
「馬車馬の幸福? 君は平気でいるらしく見えるが案外過敏だね。」と私は石炭臭い彼の側に俯向きに寝ころび乍ら云った。
「そんな事ばかりに思い耽っていて又昔のルンペンに逆戻りするなよ。」
「目隠しをされて走るのは馬車馬ばかりじゃないや、皆、目隠しされて平気でいやがる。」
「君もだ。余り先の方ばかり見て困っているんだろう。なあ君。」私は頭垢を畳に落しては吹き飛ばした。「俺が云ったように姉と一緒になってやって呉れないか。あいつも何処かへ勤めたいって云っているよ。」
「俺も男だよ!」
彼は指の節をパシパシ鳴らした。
「ええ?」
「俺は男だというんだ。」と彼は力んだ。「そんなに簡単にあいかないよ。人間て奴は。」
「そうかな、俺はそういう問題は簡単に片附けたい方だ。」
「君は又、余りさっぱりし過ぎるよ。組合の議事討論の場合でもそうだ。——面倒臭い、こうすれあいいじゃないか——って君は調子だろう。処が二人の人間の問題だ。自分だけの問題じゃないからね。」
「うん、それあそうだな。」
「うん、そうだなじゃないよ。今後は浅ちゃんの事を絶対に云わないで呉れ。」
「よし云うまい。革命が来ても云うまい。然し考え込んで心配させるなよ。」
「一人で気を廻すのはそちらの勝手さ。」彼はくすっと笑った。「俺は今、面白い事を考えていたんだよ。地球の遠心力に就いてさ、振り廻している大ハンマアをおっ放したように地球の遠心力に乗っかって飛んで行ったら何処まで行けるかって事をさ。」
「夢みたいな事だな!」
「俺達の生活は暗すぎるからなあ。それあ理論の上からならプロレタリアの未来は見通しがつくが。夢、君は夢と云ったな。そうさ夢みたいな話さ、だが人間は夢を見る余暇位は欲しいよ。」
「実現させる事が出来る夢ならね。」
「遠心力だよ」と起きた彼はぶよぶよと凹む渋色の畳に坐った。「遠心力で飛んで行っちまうのさ。ね、地球の引力の外に出たらもう落ちて来ないぜ。」

そして又彼は横になって指を鳴らし始めた。
私はまじまじと彼の額から鼻梁へ走る太い線を見つめていた。暫らく沈黙が続いた。古畳がいやにむんと鼻に来て私は窓に顔を向けた。鴨川を上る石炭舟の艪の音がかすかに耳に入って来た。
「それよりか、おい未だ知るまい！」と彼は特別に左の目を大きくして私の方を向いた。
「面白くなって来たんだぞ。『貨車掛計量器』が又注文だ。一体あの機械は満鉄でもう使っているんだそうだ。それに多少の改良を加えた奴が此の間工場へ注文に来た奴さ。所がだ。問題は進展するよ。愈々内地使用の皮切りに当県下で使わせて見る事になったんだ。でだ、鉄道省O管理局の乗務員が『計量器』使用反対運動を起しかけているんだ。官業だよ。相手が……」
「で、俺達の工場では注文が来ても造るなというのか。」
「馬鹿、馬鹿、馬鹿だね、巻島字市は。」彼は舌打ちをした。
「ブルジョア社会では、俺達にそんな器用な真似はさせないよ。注文が来たら勿論作るのさ。」
「待てよ。だが俺は八時間労働制を実施しろってのとは少し違うぞ。製造反対運動位は不可能じゃないぞ。」
「八時間労働制と現在の日本の情勢とを云っているんじゃないよ。鉄工場はKばかりではないんだ。馬鹿！『計量器』使用反対てのは、馘首される鉄道従業員の『不当解雇反対』の事だい。それをきっかけに官業へ手を伸ばそうて段取りよ。」
「あ、そうか。」
「何がそうかだ。木人参！これでも面白くないか。」
「う、確かに面白い、誰に聞いたいそれを」と私は頭を掻いた。「もっと詳細は……」
「裏の鉄道へ出てるのに聞いたんだ。具体的に何処まで進んでいるか、まあ、相手が官業だからどの程度までに計画をすすめ得ているかは考えものだが。」
「面白いや、確かに遠心力の一件より愉快だ。何とかしよう緊急、組合幹事会召集だ。今も天神林を見舞いに行って打合せして来たんだが、それにもう二つばかり仕事があるんだよ。」
私は先刻の相談を報告した。
「然し此の問題の方が先だ。調査委員を挙て着手だ。」
「忙しくなるなあ！党支部、鉄道、S紡績、何うだい。それに又工場へは大物の注文が来て見ろ！たまらねえや。」
「こぼすなよ、俺は暇な人生はいやだよ、機械みたいに廻っていたいんだ。その内に酔っ払って死んじまうだろう……」
「おい荒木、君は誰のために運動をしているんだ」此頃の言動の片鱗に現われる彼の投げやりの一面を心配して私は激しく云った。「近頃悪い傾向が見えるぞ！」
「あんまり御無理な御部屋さまあ——」と彼は歌って自分の胸をこんこん叩いた。「何と云おうと思われようとさ俺

は此の心臓の要求する方向に働くさ！」
「所がだ。心臓って奴はとんでもない時にまごつきやがって信用がおけない。」
「違うよ、違うよ、運動よりか俺のは生きて行く上の問題だ。まま、止めた止めたそんな話は……」
と彼は向うを向いて終った。
私は知っている。彼は決して姉を憎んではいないのだ。今でも姉と結婚したい要求があるに違いないのだが彼の持つ人一倍強い潔癖性がそれを許さないらしい。私は彼の此頃の虚無的な言語を一概に否定する気にはなれない。
勿論階級的正義を捨ててはならないが、そんな小さな自己への正義感から、腹からの欲求を抑える事は馬鹿々々しい。
彼は自分で自分を苛じめ過ぎているようだ。
「君は不正直だ。」と私は云った。
「何だって！」
「いや、余り考えるなというんだ。」私は周章てていた。
「君は卑怯だ。それこそ生きるためには心臓の方向のままに進んだらいいだろう。君は姉を愛しているに違いない……
…」
「馬鹿、馬鹿野郎！　巻島宇市の馬鹿！」と彼は起き上って呶鳴りつけた。「まだうるさくそんな問題に就ていやに絡みつきやがる。帰れ、帰れったら帰れ！」
「そうか、じゃ」と私は彼に逆らわないように下宿の二階から下りた。「早く忘れちまえよ！」
「馬鹿！　巻島宇市！……」
と彼は未だ私が玄関で靴をはく時も呶鳴っていた。
矢張り、三年前に若かった彼が、一寸いい気持にひたりたくて姉と別れたのは間違っていたのだ。そう思い乍ら家に帰った。
「遅かったね。」と縫い物をしていた姉は白粉気のない面を上げて私の胸のあたりを見て云った。「研究会！」
「荒木に逢って来たよ。」
姉は急がしそうに目ばたきをして居住いをなおした。
「あいつ、此頃、自暴気味になってやがる。」
「あの人は弱虫よ」姉はつんとして云った。
「男らしくもあらへんわ！」
「姉さんが子供を隆介さんの所へ遣って終った程にさっぱりしていればね。でもあいつ今だに姉さんを思ってるんだよ。」
「そうやろか、なら一度位逢いに来たってね、ホホ」
と姉は掌の甲で唇を抑えた。
「結婚したら！」
と私は姉の眉を見て云った。
「誰と？」
「姉さんと荒木とさ。」
「なんぼ何んでもね。私が結婚したいとは云えへんやろ」
「そうやろか。」と私も笑った。

夕食が済んでから「S紡績で働かないか」と私がすすめたら、重子は思いの外に快く承知して呉れた。
「そして組織の手助けをして呉れると有難いがな。」
と附け加えた。
「駄目よ。慾ばり兄さん！」
とそれだけは引受けなかった。
夏の近づいたせいか寝苦しい夜が続いた。父の襁褓に染みた大小便の匂いが家中に拡がって臭かった。よく姉は夜中に
「乳が張って困るわ！　痛くって。」
と云っては黄色い生ま暖かそうな乳を茶碗に絞っていた。
彼女には脚気の気があったのだ。

※

天神林の喘息も治らないで七月になった。
黒鋼を焼くような日が続いた。
再び『貨車掛計量器』の注文を受けた工場は生活の弱腰をたたいて職工をあふり出した。
又皆は残業をし始めた。
然し私と別見と倉戸だけは殆ど残業をしなかった。党の支部創立の準備や鉄道官舎附近へビラ貼りや宣伝に忙しかった。毎夜遅くまで組合につめた。

祖母は残業して帰らないと機嫌が悪かった。台所仕事をしながら独りで「どれあ、どれあ」と縁側の鸚鵡に当てつけていた。
倉戸も妻君には受けがよくなかった。
「折角、工場の風呂を浴びて帰ってもさ」と彼はお人好しらしく云い云いした。「組合の仕事をして戻ると汗びっしょりだろう。女房の奴、臭い臭いって側へもよせくさらない。もっとも夏ではあるし、くたびれているから、そんなにべたべたくっついて寝たくはないがね！」
「ふん！」と別見は倉戸のこぼす毎にあざ嘲った。「甘いからよ、俺の嬶なんかすげえもんさ。湯を沸かして麦湯まで拵えて待ってらあ、三ッ指こそつかないが……」
「君ん所の女房は変りもんさ、あんなのあ蒟蒻のわらんじをはいて探してもいないよ、あの時のお前の嬶の喚き声は今でも耳に残っていらあ！」
倉戸は別見の嬶の昔話をよくした。
一年許り以前まで別見与助は箸にも棒にもつかぬ家庭の暴君だった。朝、束ねた髪形の半日と保たぬ程に毎日妻君を殴っていた。神経質の彼は箸の上げ下しに茶碗の竝べ方に、又は障子の桟を中指の腹で撫でて見ては塵が積っていると云って妻君をこづき廻していた。
「工場へ来てあんなにおとなしい男が何故家へ帰るとあんな風に狂い犬になるんだろうかなあ。」
「なあにあんな人間もいるのさ、蔭弁慶だよ」

と友人達は噂し合っていた。
其の別見与助の妻君が一年前のある日、組合本部へが鳴り込んだと云うのだ。
「組合の大将に会わしてくんろ！」
別見の妻は四歳の女児の手を引っぱって組合の玄関で呶鳴った。
「ちょっくらでいい逢わしてくんろ！　組合の大将はいないかの……」
「色狂いが来た！」と組合本部につめかけていた若い連中は、さんばら髪の帯もしどろに前をはだけた女を見て云った。
「組合長もえらい女に手を出したものだ。」
「大将に会わしてくんろ！」
彼女は膨れぼったい充血した瞳を据えて玄関から動こうとしなかった。女の子は母親の破れかけた片袖の影から涙に汚れた顔を現してきょろきょろしていた。
居合した天神林が出て見ると知り合いの別見の女房だという事が解った。理由を訊ねると、
「余り亭主が自分を虐待するから意見して呉れ！」というのだ。
「夫婦喧嘩は犬も喰わねえ！」
皆はそう云って止めたが天神林は意見役を引き受けて出かけた。
「夫婦が喧嘩をしますると此子が段々といじけて終いますで……」と彼女は水洟をすすりすすり泣いて訴えた。「年頃にでもなって此子に家でも飛び出されたらあたしゃ生きていられません、組合ちう所は会社と違うて職工さん許りだて、あたしゃ職工の女房ですけん、お願に参りましてん、組合の大将あんた組合の大将かな、えらく老いぼれとるが……」
別見の家の途中で彼女はそんな事を天神林に云ったりした。仲裁に行って別見与助に逢った天神林の報告はこうだった。
「あの男も正直もんさ、工場やお他人様の中で受けた癪の塊りを拳骨にして嬶に喰わせるんだからたまらねえ。」
それが機会で天神林と仲のよくなった別見与助は遂に組合に加入した。そして運動を始めた彼は今は絶対に妻君をなぐらなくなった。
「あたしゃ、物事の理ごとは知りまへんが」と其後別見の妻は組合に顔を出す度に礼を云った。「亭主をあんなにおとなしくして呉れましたんで組合が好きになりました。あたしゃ、ならず者の亭主はみんな組合に入れたがよか事と思うが、どんなもんでしょう。そうせれあ日本中で、こうつと百人や千人の女房衆が幸福になれるちう訳け合いのもんでさあ！」
別見は今はよい闘士であった。
「女房の指し金で組合に加入した男なんてものは一寸日本にゃいなかろうよ！」と倉戸が謄写版のローラアを押しな

がら冷やかした。
「ふふ、ふふ」
そんな時別見は何時も彼が物事を考える時にするように部屋の中を行ったり来たりして笑っていた。
私達はそんな冗談を投げ合いつつ仕事を進めて行った。姉が脚気を起して床に就いて以来、時々私は組合に泊ったり天神林の家に泊ったりして三日に一度位しか帰宅しなかった。家にいると陰気で仕方がなかった。父は肉のたるんだ土色の皮膚をして寝臭い空気を家の中に漂わせていじけ込んでいた。姉は黄色く膨れ上った顔面をてらてらさせて布団の下から無ざまに立膝をして乾いた口を開け放しで寝ほほけていた。重子はS紡績に勤めて以来、軽薄な縞襟巻きの不良少年達と毎晩町の盛り場を歩き廻っては一時頃でなければ戻らなかった。
「どれあの重子奴！」
と祖母はそれを私が罪人ででもあるかのように怒った。
「お前がする事は何でも真似しよる、お前があくたれじゃけんぞ！」
時とすると、其の不良少年達が遊びに来る事もあった。
「へえ、僕が××です、どうぞお心安く。」という男もいた。
「僕は未だ、童貞なんですから……」
私は妹がこんなうすっぺらな連中と交際しているのに驚いた。私はむしろ、多少陰険な位の男が好きだ。
私は後で妹に忠告する代りに不良少年達の悪口をついた
「一度でいいからああいう人達と交際して御覧！兄さん。」と妹は答えるのだった。「一概に悪いとばかり云えない事よ。あの人達は、実に張りのある、緊張した生活をしているわ。例えばさ、夜店の街を歩くとするわね、何か珍らしい材料はないかって、鵜の目、鷹の目よ。とてもぴんと張り切った気持で生きているの！　それがどんな時でも、所でもよ、生き生きした生活よ。それあ、悪いとか善いとか云えば問題は別だけど……」と彼女は赤くうるんだ唇に人示指を当てた。「ね、こんな事もあったのよ。Y製麺所の重役の妾腹の息子がいるの、おっ母さんてのは女中か何かですってね、その子供がね家の中にくすぶっていて、本妻や本妻の子供達に毒づかれるより街へ出てさ、自由に……」妹は此処で顋を伸ばして笑った。「いやだね、自由なんて分りあしないわね。とにかくその少年は面白く与太り始めたのさ。誰が誘惑したのか知らないけれ共、所が家の人に見つかっちゃって二階に監禁されたというわけなの！　ね可愛そうでしょ。家庭になんか幸福はないわね。それを皆で垣根越しに覗きに行ったけど、とてもその目の色ったらないのよ、口惜しそうな目附をして街を歩いている人間を睨みつけてるの……二階の小窓からね、今年十六の少年よ、どう可愛そうだと思わない、不良少年達のあこがれって先ずこんな幻想的なやつよ、素敵でしょう！」
私達には興味のない、縁もゆかりもない彼等の生活だった。と云ってそれを笑い捨てるには何か動かせない物があ

るらしかった。
　不良共が帰って終ってから私は三畳の室の中で、妹をしばぎ倒した。
「この腐った錆鉄奴！」と私は妹の束髪を掴んで畳にすりつけた。片方の手で所嫌わずなぐった。「馬鹿！　貴様はプチブルよりまだ悪い、宗教より運動の邪魔だ……このくそ！　くそ！」
　妹は私のなすが儘に押さえつけられて冷然と泣いた。
「兄さん怒ってもいいわ、いくら怒られてもいいわ、だけどね」と彼女は潤んだ瞳を上げて見返した。「私がどんな事をしても嗤わないでね、嗤っちゃ厭よ。私も生きているものの一人だと思って頂戴！」
　それは私が初めて見る妹のしおらしい瞳だった。私はなぐるのを止めた。
「馬鹿！　ババのナムアミダブツより尚悪いや。」私は向うへ突き飛ばした。「勝手に泣け！」
　やはり、私には妹の生活を理論だけで変革させることは不可能だ。只、私の実践が若し妹を感激させ得れば彼女の心の構え方も変って来るだろう。如何に勇敢に運動するかと云う事が、妹をよりよく導き得るならどんなにでも私は戦おうと思う……
　職場にいて少年時代から馴らされた鉄の匂いを吸い機械の音を聞いている時が一番愉快だった。
　直径五呎の交流発動機に引っぱられて唸っている一呎幅の調帯は、仕上部と旋盤部の天井を貫通する二吋太の主動軸の滑車にかかる。メンシャフトに取附けた大小のプレーは、又別なベルトによって並行する中次軸のプレーに廻転を伝える。廻転数は機械の種類に従いフォロワアプレーの直径によって変化させられて行く旋盤、穿削機、鑿孔機、平鑿盤、ユニバーサルミーリング、平削機等がそれぞれの機能を働かしながら鉄片や鎮鍮に悲鳴をあげさせて廻転している。
　紫ずんだ空気の中で金剛砂がこまかい火華を散らして鉄片を削っている。鍛冶場には三カ所に赤い三角形の火が送風器に吹かれて唸っていた。
　溶爐の周囲には数人の先手が大ハンマアを振り振り小物の火造りだ。これらの発する雑多な音響の内で最も強いのは、方一呎の大ハンマアを打下ろす縦型蒸汽鉄槌の打撃音だ。其の一打音毎に真赤に赤熱めた大鉄塊が自由に打ち伸ばされ設計通りに形創られて行く。ドッス、ドッス、其響きは工場外の往還にさえピリピリと響く位だ。そして廃汽は屋根からシュッシュッと空へ打ち上げられている。凡ての機械は触れて冷たい鉄製ばかりだ。そしてその機構に故障のない限りは充分に職能を果たしている。がそれを使用する人間は鉄製ではなかった。
　機械だって油が断れれば焼けて来るように人間も疲労すれば眠くなる。歯車に指を喰われて不具者になったり、ナッパの袖をベルトに巻き込まれて砕き肉にされたりする

のは残業の時に多いのだ。

――あれを御覧よ、たらりたらりと生ま血がたれる、めぐる機械の歯車の間にはさまる労働者、死んで終うまで絞られる……サクシュッ……――

という歌は決して冗談ではなかった。

現に三台目のスチームハンマアの開閉弁ハンドルを左手で握っている中年男の安藤良はその一人だ。彼は数年前に右手をスチームハンマアで砕かれて終ったのだ。

「足元の油で体が滑ってハッとして夢中で手を上げようとしたらさ」と彼は擂古木みたいな右手を見せて当時の気持を語った事がある。「湿った瓦煎餅のように、鉄敷へペッちゃりと掌の平が密着いててね、つぶされた骨が桃色の肉の中に白く葉っぱの筋みたいに見えるのさ……そのまま倒れちまったがね！」

肉体を粉砕にするばかりではなく、そんな目に逢った人間は精神まで歪形にされていた。最初こそ皆が安藤良に同情していたが会合や寄合の度に彼が擂古木になった右手の節を示してはさも大功名でも果した風に語るもので、段々と憎まれ始めた。

「何だい、手前がボヤボヤしていたもんでつぶされたんじゃあねえか、カッポレ奴！」

などと云われ出した。そして遂に彼がそれを語らなくなった頃、彼の心は完全に腕と同じようになって終った。

工場の誰とも余り話をしなくなった彼にも只一人の意怙地男の不具者（性的不能者）須美熊吉とだけは仲がよかった。痩せこけた須美は「メカ一」という仇名を持っていた。彼が二十歳頃、S紡績の或る女工と工場裏の納屋で密会していた時、巡廻に来た守衛に「コラッー」と大喝を食ってからの事だ。それから後彼は若い癖に性的不能者になって終った。

少年見習工達は彼を「メカ一、チョンチョンの十」と云っては野次った。それは「助平」の意味だった。

「どれあ、どれあ！」と彼は怒鳴って少年工を追い廻した。

「おいが悪いのでなか、殺したら会社は立って行かん事を知るまい、子供ら奴！」

「メカ一、メカ一」と少年は逃げ廻った。

この二人は休み時間などに顔を合わせると何時も遠い東京の話や、鳥や猫や犬の話ばかりしていた。人間の話はしなかった。

蒸し暑い日ばかり続いた。頭から流れる汗は額を通って鼻先からポタポタ落ちたり腭から胸に流れたりした。

二番ボイラアの火夫見習の金窪は、天神林に休まれてからは毎日、スチイムハンマアの鍛冶屋連におどかされていた。

「やい金の字、しっかり蒸気を昴げろ！」と安藤良が意地悪く毒づいたりした。「五十馬力位のボイラアが自由にならねえなら、茶碗の中へ身投げしちまえ！　河向うのSへ行って見ろ、紡績のボイラアなんかと来たら、手前ら見た

いに一銭蒸気の炭くべとはわけが違うぞ、折角赤熱めた鉄が火造り能きないうちにみんな冷めちゃうじゃねえか、スットコドッコイ奴！」
金窪は口惜し涙と汗を一緒くたに流してボイラアに体をぶつけるようにして石炭を投げ込んでいた。
私が行って見ると彼は一人でブリブリ呟いていた。
「見てろ！　鍛冶屋の摺古木奴！　今に安全弁ももろに吹き飛ばしてやるから。」
「無茶苦茶をするなよ、安全弁を吹かしたって初まるまいから。」
「癪にさわらあ、臀曲り摺古木奴！　先刻も来て、文句を云った上に俺の前で屁をたれやがって、『屁はお尻の塵払い』なんてからかって行きやがった。」
「……ほこりのちり払いか……」と私は圧力計を見て笑った。「ピンピン昂ってらあ、もう少しだよ……要領よく働いていりゃいいよ。勝手にあふりやがるんだから！」
「専務のお髯までが来て時々、小言を云やがるんですよ、『スチイムが昂らなきあ仕事が進まない』って。」
「もう少しの我慢さ、天神林の爺さんも間もなく出て来るだろうよ。」
そう云って私は職場へ帰った。
五十馬力の汽鑵の圧力を上げるには十五歳の少年の力では不足だった。二番ボイラアに無関係の鍛冶屋連までが仕事の手順が狂うと云って怒り出した。午後二時頃には鍛冶屋の若い先手連が集って金窪少年を助け、圧力計を昂げてやった。ゲージの針は百封度近くまで廻転した。
「ヘッ！　ざっとこんなもんだい。な、炭はこう、パッと先広にまくんだ。」と若い先手連は炉口を覗き覗き云った。
「夜まで是れを下げたら承知しないぞ。」
皆威張り散らして帰った。
スチイムハンマアはドッスドッスと調子よく働きだした
三時の十分間休憩時には私が援けて鑵換えや投炭をした。
「何故、此のボイラアはこんなに云う事をきかないのか知らん。」
「水垢がたまってるのさ、掃除もしないから。」
「チェッ！　始めっから皆が来て手助けして呉れあいいのに、おどかしてばかりいるもんで周章てて終わあ。」
彼は汗の光った額を袖で拭いてはこぼした。
「さあ後二時間だ。」と私は彼を励ました。「鑵鳴りなんかさせないようにしっかりやれよ。」
金窪は注水器のハンドルを握りながら嬉しそうにうなずいていた。
四時半、私は他の残業連中に失敬して、もう風呂に入る準備をして万力に油を引き、炉や直角計を片附けていた。
「おい巻島！」と兵隊靴の一人が、鑢にブラッシを当てながら鼻よりも尖った口を開いた。
「お前は家族が沢山あるちう癖に、毎日々々定時間で帰りゃがるな……」

「もっと稼ぎたいがね、おばあの奴と交替に夜は、寝てる親爺の看病をしなければあならないんだ。」
「病気！　老病かい」
「いんや、アル中ですよ……」
「何んだって、アル中だ。有難い病さ、アル中にならら俺もなって見たいや……」
　と彼は突然、鉄粉だらけの手を耳に近づけた。
「オヤ、やい！　オヤ、やい！　罐鳴りだい。二番ボイラアだろう屹度、あの金窪の餓鬼、蒸汽を昂げ過ぎやがったな、オンボロボイラアを。」
　硝子窓を慄わせてバウバウと幅広い唸りが聞えた。
　あんな旧式の水管式汽罐を罐鳴りさせるなどはよくよくの事だ。
「仕様がないなあ！　子供は。」私は仕事台を離れようとした。と石炭倉庫の横手から、金窪が襤褸を握って飛んで来た。
「鉄蹄！　鉄蹄！」と彼は私の前に停って叫んだ。「安全弁に鉄蹄！」
　金窪の瞳の跡を追って見ると、彼が一心に溶炉の赤い三角の火を見つめている事が判った。
「どうしたい？　ヒョッ子！」と誰かが云った。「そのあわてた態は？　鉄蹄は町鍛冶屋へ行けあるよ！」
「違うんだい、鉄蹄だよ！」
　彼の声は悲し気だった。

「鉄蹄を、専務が安全弁に鉄蹄をかけたんだよ、幾らでも蒸汽が昂るって、……」
　と金窪は抗議するように腰を曲げた。
「畜生！　破裂すらあ、そんな事をするから罐鳴りだ。まぬけ専務奴！」
　一人が鑵を投げだして罐場へ走った。
「もうボイラアの頭は」と金窪はゴクリと喉を鳴らして罐場の方を指さした。「ぶるぶる慄えているんだよ」
　二人許りの仕上工も走った。
「馬鹿！　何故炉蓋を外さないんだ」
「怖いんだよ」
「馬鹿！　行け！」兵隊靴が呶鳴りつけた。
　金窪も踵を返して一直線に飛んだ。そして彼の姿が石炭倉庫の横手を曲って罐場の入口へ入るか入らない間に工場の頑丈な屋体骨をゆるがして轟然たる鉄片の破裂する音と共に綿のような蒸汽と赤い火が顔前の空に衝き上げた。
　私達は本能的に後ろ向きになって両耳に二本の指を突っこんだ。
　二番ボイラアが破裂したのだ。
　職場を捨てた職工達が口々に喚きながら虫のように集った。青ペンキ塗りの事務所から専務や技師長が赤ん坊みたいに口を開けて両腕を高く揚げながら走って来た。辺りには靄のように蒸汽が吹いていた。
　蒸汽が風に吹かれて晴れかかると、壊れた赤煉瓦や耐火

煉瓦の破片の下に数人の人間の頭や、白く膨れた手足がつんと伸びているのが見え初めた。
私は反射的な冷たい気持でじっとそれを見つめていた。

七

翌々日の午後三時職工達は事務所の掲示板の前に集って騒いでいた。

告

七月×日の第二番汽罐破裂、汽罐室崩壊ニヨル見習火夫金窪龍平、仕上工富坂甚三郎、輪尻作次、三名ノ火傷圧死ハ、当汽罐室主任火夫、天神林幾松ノ怠慢欠勤ノ結果ニヨルモノニシテ本工場トシテハイササカモ其ノ責ヲ負ウベキ理由ナキモ、特別会議ノ上工場法施行令第九条ニヨリ右三名ノ遺族ニハ左ノ扶助料ヲ支給ス。

金窪　龍平――日給二百日分
富坂甚三郎――日給三百六十日分
　　　　　　葬祭料二十日分
輪尻　作次――日給三百六十日分
　　　　　　葬祭料二十日分

尚

天神林幾松ハ工場法施行令第七条ニヨリ解雇スルモノトス

七月×日　　庶務課

「おい巻島」と荒木は指をパシパシ鳴らして掲示板の文字を目で示した。「やりやがるな！」
「うん、乙なごまかし方をするな。」
私も腹の中で苦が笑いをしていた。
「三百六十日分と十二日分、エエト、エエト、エエト。」と或る者は上目使いに胸算用をしていた。
「奴等は二円五十銭位だったから、月七十五円としても、エエト、十カ月に二ヵ月で九百円か素敵だな、随分助からあ。」
「ほんとに助からあ！　一生に一度でいいから九百円て金を持って見たいな。」
「よしやがれ、俺様達が何う跪まずいたって、不具者になるか、奴等みたいに死ななきあ、とれっこないや。」
「笑わせやがる」と又他のが云った。「手前ら工場法なんてのがそもそも、俺達が生きて金を取れるようになんか出来てやしないんだぜ！　昔の御殿様が云ったように労働者は生かさず殺さずって寸法と同じさ！」
倉戸や別見も来て掲示板を眺めていた。
「おい！」と倉戸も小さく息を吐いた。
「うむ！」と荒木と別見が眼を輝かした。
「やんなこったし、儂等は細く長く生きなあかん、何時又生れて来るか解らんやし、なんぼ貰うても生命を召しあげ

られたらおしまいや」一人の道具番の爺さんは後手をし乍ら帰って行った。「やんなこったしやんなこったし！」其の爺さんの後姿を眺めて荒木がズボンのポケットの中で両腕をゴシゴシすり合わせてささやいた。
「今夜、集れ、全組合員召集だ用意しろ！」
私達は首で返事をした。
「馬鹿々々しい……」一同が職場へ引き揚げる時安藤が愚痴った。「儂なんざ腕一本で、たった三十日分しか貰わなかった。へッ、老いぼれた飼い殺し犬みたいなもんだ。」
「労働者はみんな飼い殺しさ、今の世の中では。」
「そんな事があるかい、儂だけだ。こんなになったのは儂だけだい、畜生！」と安藤は摺古木のようになった右手の先を一方の手で握りしめた。「何処へ行ったってもう働けないんだ。儂だけが飼い殺しだい！」
彼はつぶされた腕で腰を叩いてぷりぷり怒って帰った。
私は鑢の尻を押しながら、一昨日からの事件を考えてみた。
ボイラア破裂の原因は専務が物識り顔に安全弁の腕に鉄蹄を掛けた事にある。五十馬力設計以上の重量をかければ蒸汽が充満した場合にボイラアが破裂するのはきまった事だ。それを天神林に罪を担わせての不当解雇だ。死んだ三人には、殊に金窪に日給二百日分切りと二人には一年分だ。十六歳以下の少年に一日十四時間からの労働をさせて置いて何が工場法施行令だ。

三人の死体を崩れた煉瓦の下から引き出した時、急報に依って彼等の家族達がはせつけた。死体は打撲傷と千二百度の蒸汽の熱で赤と白のだんだら模様に膨れ上っていた。富坂と輪尻の妻が声も立て得ずに倒れるように、夫の顔に縋りついた。すると死骸の頬の皮と頭髪がずるずると水のように脱け落ちた。そして初めて二人の妻は声をあげて泣いた。周囲には火葬場に似た臭気が漂っていた。後から来た金窪の兄だけは黙然と腕組みをして弟の面を見つめて動かなかった。
「いや誠に、当方も不注意でしたが」と職長は自分が聾なもので大声で話しかけた。「とにかく火夫の天神林という奴が怠けて欠勤していたものですから、いやはや、とんだ事になりまして……」
二人の妻にも如何に天神林が、重大な罪人であるかを語った。二人の妻はぶよぶよになった夫の体の上に顔をふせて何時までも動こうとしなかった。
「それそれ、何んだ、見世物ではない」と又職長は其時見物に来ていた私達を呶鳴りつけた。「早く行って仕事をせんか、日限のある仕事を何だ、一分でもすっぽらかしては大損だ。」
職工達は皆意味は異っていただろうが、それぞれの反感を面に浴べて職場に帰った。恐らく其時から私も荒木も別見にしろ此の事件を契機としての計画を立てていたのだ。
私達四人は工場内の組合員に宣伝して歩いた。

「どんなに晩くなっても組合へ集まって呉れ、此の事件に対して態度を定めなければならないから……」と。
そして私達は定時間で帰った。帰途私は色々と計画しながら歩いた。
家の玄関へ入ると突然妹が出て来て云った。
「姉さんが工場へ行かなかった？」
「飯だ！　飯だ」
「姉さんだわよ、姉さんが行かなかった？」
「飯だ。病人が何故外へなんか出たんだ？」
「この手紙を見てごらん。」と重子は浅草紙に書いた走り書を突きつけた。「姉さんは家出よ、屹度……」
無表情のまま私がその手紙を読もうとした時、祖母が奥の間から顔を出して云った。
「儂は知らんぞな、儂は知らんぞな。浅が家出も宇市お前があかんからじゃ。夜業さえして帰って呉れたら家の暮しも曽我部から仕送りを貰うていた時と大きな変りは無いのじゃ、お前が組合ちう奴に一生懸命で家の暮しの事を関わんさかいに浅は苦しうなったのだ、病人じゃけんそんな気を起すも当り前じゃ、お前はどれあ、このどれあ……」
祖母は光った白髪を乱して障子から出した首を動かしていた。私は祖母の声を上の空に姉の文面に目を走らせた。
私は組合というものが何んなものかはっきり知らん。あんたが組合に熱心になっている事もよく解らん。あんたのしている組合のやり方が私をこんなに不幸にしたのだ。曽我部は、あんたがS紡績の女工を組合へ引き入れたんで、私を離縁にしたらしいのじゃ。私は荒木と手紙のやりとりをしておったが、唯それだけのものじゃ、少しもけったいな事もあらへん。しかし、あんなうたがいをかけられたんで云いわけする事も出来んで離縁されたんじゃ。
おとは十年も寝とる、おばばはもうろくしとる、あんたが働いても、重子は不良で少しもうちに金を入れやへん。私は病気でいるが寝てもいられん。今日、うちを出る、自分が何うなるかもわからんが心配せんでもええ。私はあきらめる、人間ちう者は生れた時にもう一生の約束がでけとるもんじゃ、私のことは心配せんで呉れ、さいなら

宇市様　　　　　　　　浅江

乱暴な文字で書いてあった。
放浪ばかり続けていた私に代って祖母や父の生活を長い間守っていて呉れた姉を思うと、私の心はたじろぎそうだった。姉の離縁の原因が、手紙の通りであったとしたら、私は何と云っても相当の責任を持たねばならない。「無産階級運動の為だ」とは云い条、骨肉の上に惹きた此の問題にはそう明っきりと云い切れぬ弱さを感ずる。
「何処へ行ったのかなあ！」と私は茶の間へ入った。「隆介の所じゃないか、事によると」「儂がひるま行ったが居

らへんぞな。」と祖母は奥の間の父の枕元で背を円くして云った。「朝十一時頃家を出たんじゃ、儂はすぐいんで見たのじゃ、……そっと外から覗いて見たが居らなんだぞ。」

食膳の前に坐って茶を一杯のみ乾した私は、もう冷淡にも明日の会社との交渉技術に就いて考えていた。

「この事件をどう解決するかによって私は兄さんを無条件に信用するわよ」と妹は笑った。

「何う?」

肉親への愛と運動、それは理論的には瞭きり云い得ても実際問題になると足を掬われるような形だった。私は自分に怒った。

「糞! 貴様、俺をからかうのか」私は食べかけた飯を膳の上にぶちまけて妹を睨んだ。「動物! 貴様は何だ! この駄々っ子奴!」「怒鳴っても平気よ、こんな場合こそ兄さん達の機械論が何処まで生活に適しているかが解るのよ!」と妹は冷たい目で笑っていた。「弁解しなくてもいいのよ、兄さん達は人間に飽きそうもない事ばかり考えてるのね、現在の人間の歩く方向へ一緒に行く、その事が人間を救う事に結局なるんでしょう!」

「馬鹿、貴様のような、成りそこないのアナキスト奴! ……が。」と又私は自分自身にでも呶鳴りつけるように唸った。「何も争う事はないぞな、争う事はないぞな。」祖母は題目交りに嘆いた。「黙っとれ、儂は考えた。世の中は黙っとるに限る。」

妹は散乱した飯粒を拾おうともしないで、例の如く唇に指を当てて笑っていた。私は苛ら立ちかける自分を抑えて玄関に出た。

遠くから盆踊りの笛の音が流れた。

「糞!」と私は格子戸に倒れかかりながら靴をはいた。

「何がクソさ、何処へ行くの兄さん?」

「組合へだ。もっと重大な事がある。」

私は駈出した。そして自分も祖母のように「黙っとれ、黙っとれ」と呟いていた。

荒木の下宿へ立寄ると彼は夕食中だった。

「早くしろ、荒木!」

私はプリプリ荒木をせき立てた。

「馬鹿! 巻島宇市」と彼は二階で叫んだ。「腹を拵えてからの闘いだ……」

彼を待っている間に街を眺めた。盆を十日前に控えた町には、毎夜、踊と太鼓の練習が続けられていた。太い皮太鼓の音と、艶めかしい娘達の唄声が裏通りの広場から流れていた。農村の青年や娘達と、祖母と妹との距離、そんな事を私は考えて荒木を待っていた。

荒木は口笛を吹き吹き大股に歩いた。小柄な私は彼の後から急ぎ足に従った。

「おい巻島、運動って辛いもんだな。」と彼は言った。「何んな場合でも感情だけじゃ動けないんだからなあ、金窪があんな風にして殺された場合にもさ、昔の俺なら我無しゃ

らに事務所へでも撲りこむ所だが、先ず此の問題を、如何にして組織拡大に利用しようかって事をのみ考えなきゃならないんだからね。」
「淋しい時があるよ」と私は答えた。「と云って自然発生的な人達には、又感情的な形式で煽動して行かなければあならないんだからね……」
「淋しい？　困るなそれでも。プロレタリア運動は、恐らくもっと自分を殺さなければあ、六カ敷いよ、屹度、俺はそう思うんだ……」
二人はそんな話をしつつ組合へ着いた。
倉戸、別見、Ｓの裏地、出宮、小野田等も来ていた。天神林も病を押して出席していた。裏地達に連れられた三名のＳの外勤女工の顔も見えた。
別見を議長に荒木の報告があって議事に入った。
「議長！」と荒木は発言を求めて語り出した。
「只今報告したように、此の問題の原因は専務の出しゃばり行為によるものでありますが、我々は是をより広い意味から解釈して見なければならないと思います、即ち工場法を無視した少年工の過剰労働、又は罪名を転化しての天神林君の不当解雇、金窪君その他の二人に対する遺族扶助料の支払方法の欺瞞……等、我々は是を機会に他の凡ての労働条件の改善要求を投げつけて立たねばならないと思います。」
「そうだ。我々の生命は九百円、千円で購われるものではない。」
「金と生命と取り換っこなんぞ御免だ。」
「異議なし。」
「議長、争議対策！」
「異議なし、議事進行！」
万場一致で要求提出を可決して対策に入り、労働条件改善の嘆願書と要求書を作製した。

嘆　願　書

一、天神林幾松ヲ復職セシムル事。
一、金窪龍平、富坂甚三郎、輪尻作次ノ三人ノ遺族ニ日給七百三十日分ノ扶助料ヲ支給スル事。
一、不当解雇絶対反対。
一、残業歩合ヲ一時間ニ就キ二歩ニ値上ゲノ事。
一、熟練工ノ日給ヲ三割値上ゲノ事。
見習職工ノ日給ヲ五割値上ゲノ事。
一、少年見習工ニ対シテ工場法ヲ厳密ニ適用スル事。
七月×日ノ第二番汽罐爆発ハ、主任火夫、天神林幾松ノ過失ニアラズシテ、専務取締役×××ガ無謀ニモ汽罐ノ安全弁ノ天秤ニ鉄蹄ヲ掛ケタルガ故ニ生ジタル事件ナリ。然ルニ会社ハ此ノ罪ヲ天神林幾松ニ転化セントスル欺瞞的言辞ヲ流布シテ社会ヲアザムカントシ又彼ヲ不当解雇ニ処セントシテイル。
且ツ、三人ノ死者ノ遺族ニ対シテハ僅々日給三百六十日分ノ扶助料ヲ与エテ事件ヲ内済ニセントシツツア

リ。吾々ハ斯ノ如キ工場法ヲ無視シ、惨虐ヲ恣ニスル会社ニ対シテハ断乎トシテ抗争スルモノデアル。
右決議ス。

七月×日

O—鉄工組合

K——製鉄所分会

ビラも其夜の中に謄写版刷にした。

全従業員諸君ニ告グ!!

金窪、富坂、輪尻三君ノ遺族ヲ救エ!
天神林幾松君ヲ復職サセロ!
熟練工ハ日給ノ三割値上ゲヲ
見習工ハ日給ノ五割値上ゲヲ　要求シロ!
残業歩合ヲ値上ゲサセロ!
不当解雇絶対反対!
全従業員諸君!　結束シテ闘エ!
今日ノ職場従業員大会ヘ集レ!

午後十時過ぎると、続々と組合員が集って来た。明日の工場内の従業員大会の打合せが終ると各自が地域を受持って従業員の戸別訪問に出かけた。

組合本部では荒木や天神林や別見が闘争計画に額を集めて、宣伝隊、各職場班隊の組織の対策に密議を凝らしていた。

八

翌朝、組合本部へ立寄った組合員は各自ビラを懐にして工場の門をくぐった。

七月の空は爽やかに晴れて、工場を囲む灌木の葉は一様に尖端を並べて渡る風にゆさゆさと揺れた。鴨川添いに纜やった伝馬船の舳に燃える朝餉の火は横様に倒れて、濁った河面に絡みついた。船頭は艫に立って、黄色い小便を流していた。

河向うのS紡績の窓からは、お侠んな女工達の澄んだ歌声が聞えた。

昨夜の計画通り、巡視の来ない午前八時から十時までの間にビラが撒かれた。十人の宣伝員は各職場を廻って嘆願書の捺印を採って歩いた。

「うら、やんだあよ!」

と逃げる百姓上りの男もいた。そんな職工は半ば強迫的に捺印させられた。

「よし待っていた。」とビラを見て待っていた男もいた。

「頼むぞ、大将、ぶっ倒れるまでやるけんな。」

全員の捺印が終るまで頑張ったのは仕上部の四人の兵隊靴職人だった。が最後には全従業員の圧力に押されて加盟して終った。

仕上部、旋盤部、鍛冶部、鋳物場、汽鑵部の二百十二

人、雑役夫四人、合計二百十六人が、おどされすかされして完全に捺印した。

午前十一時半、荒木と別見が嘆願書を持って事務所へ出かけた。同時に全従業員は旋盤部職場に集合して演説会を開いた。

倉戸が第一番に大型平削機（プレーナー）の平台（プラット）に登りベルトに掴りながら唸り初めた。吠えるような拍手が赤黒い腕の先から流れた。一同の顔は窓からさす七月の陽を受けて鉄錆色に輝いた。

「同志諸君！　団結の力を、団結の力を信じろ！　この諸君の腕を組んだ力で奴等、資本家と闘うんだ。いいか、一カ月五十円や六十円の金で一升三十三銭の米を食って親子三人を養って行けるのか。家賃と米代、それを差引いたら何れ丈け残るというんだ。ロクな物を食えず、ロクな着物も着られあしないじゃないか。俺達はやり切れないから此の闘いをやり通さなけれあならん。日給三割値上げだ。諸君！　団結のみが俺達の力だ。」

「そうだ。三割値上げだ。」

「俺は誓うぞ。」

と所々に筋肉のこちこちした黒い腕が揚がり拍手が起った。第二には鋳物場の青年が鑿孔機（ボールバン）に片足をかけて叫んだ。

「万場の従業員、諸君！　七月×日を忘れるな。吾々の兄弟三人が第二汽鑵場で殺された日だ。二百日分、三百六十五日分、吾々はそんなけちな扶助料でごまかされあしないんだ。働く者を失くなした遺族を何うして呉れるんだ。俺達はそんな目くされ金と、一つ切りしかない生命とを取り換えっこ出来ないんだ。遺族の一生涯を保証しろ！　俺はそう要求する。健康保険は会社の全額負担にしてだ。それも要求しろ！　諸君、人事じゃないぞ、何時俺達にあの三人のような運命が廻って来るか知れないんだ。俺達は此の此の」と彼はこの腕を叩いて声を張り揚げた。「この鉄を鍛える腕で奴等を一つぶしにしてやらなけれあならないんだ。」

又拍手やハンマアを打ち合わせる音がした。

「みなさん！」と第三番目に黄色い声の十五歳の別見火夫の助手が仕上乗盤の上で両足をふん張った。

「こないだ死んだ金窪君は私とは一番仲のよい友達でした。二人は今に腕のいい火夫になって船に乗って外国へ行こうと相談していたんです。所が専務が何も知らない癖にして未だ慣れない金窪君を馬鹿にして『蒸気が昂るようにしてやる』って、安全弁（セフティ）の腕に鉄蹄をかけちゃったんです。そして金窪君は死にました。会社は天神林さんが悪いんだって云ったもんで金窪君の内の人達は、天神林さんの事を怨んでいて、僕が何んて言っても信用しないんです。僕はどうしたって会社がどれ程嘘つきであるかって事をこの時にこそ白状させて金窪君の両親に教えてやり、天神林さんが又一緒に働けるようにして上げたいんです。」

「いよう、子供えらいぞ！」

と又拍手が鳴り渡った。

彼が乗盤から降りると諏訪田という鍛冶屋が飛び上って石炭焼けのした顔をぺろりと撫で下ろして喋り出した。

「皆さーん、私は会社の一つの罪状をお知らせしたいと思うてここに立ったものであります。あの——第二汽鑵室は破壊されました。そして三人の兄弟が殺されました、然し皆さん損をしたのはあの三人の兄弟だけであったのであります。あの古ボイラアに保険をつけて置いた会社は壊れた為に反って保険金が入って今度は一層立派な汽鑵室を作るんだそうです。私はこの事だけをお知らせして皆さんが是を機会として共に共に力限り会社と闘われん事をお願いするものであります。」

「異議なし。」

「死ぬまでやるぞ。」

第四番目に又平削器に登ったのは仕上部の脇坂という二十四歳になる闘士だった。彼も拍手を以て迎えられた。

「同志よ、吾々の代表は今、あのペンキ塗の事務所で力強く交渉している、吾々は吾々の代表をあくまで後援する意味に於てこれから労働歌を歌う事を同志諸君に計るものであります……」

「歌え、歌え。」

「大賛成だ。」

そして脇坂の音頭取りで一同が労働歌を唄い出した。太い歌声は高い菱形の屋根にはね上っては窓から流れ出た。対岸のS紡績の窓から女工達の顔が幾つも重なって現われた。私達は一層声を張り揚げ踵で床を叩いて叫んだ。

第一回を唄い終って、第二回目にうつろうとした時だった。荒木と別見が昂奮して戻って来た。

「結果を報告しろ！」と私は群集の中から叫んだ。

荒木は走って大乗盤に躍り上り嘆願書を振りまくって呶鳴った。

「兄弟！　横暴なる資本家は遂に吾等の嘆願書をさえも受けつけないのだ。次の手段はサボだ。諸君！　午後からサボ敢行だ。充分結束してやって呉れ！」

「よし、サボだ。」と群集は叫んだ。

「涼しい顔をして始めろ！」

「散会！」

間もなく昼食時間が来た。

正午から悉々怠業に入った。

凡ゆる工作器はベルトとギアを交換して廻転を最小限度に落した。ボイラアは圧力を下げ、鍛冶部は造風機の廻転を下して風力を弱め、熔炉の熱を低くした。鋳物場では折角型入れをした鋳物を再び坩堝の中に投げ込んで溶かして終った。

私が事務所へ怠業の宣告を与えに行った。

工場長も職工長も黙りこくって面も向けなかった。私は云うだけの事を言い切ると職場へ帰って目の潰れた古鑢で仕事をし始めた。

職場の中はしんとしていた。唯まのびのした機械の音と空調子なモータアだけが唸っていた。時々誰かがワーッと呶鳴ったりした。
怠業は午後四時まで続いた。
四時五分前頃、小使が事務所からといって私を呼びに来た。
「行って来るぞ！」
「妥協するなよ。」と私の後から皆が叫んだ。
工場長は大卓子に両肱をついて待っていた。
「さあかけ給え」彼は椅子を指示して語り出した。「今、当製鉄所は鉄道省から日限に限りある注文を受けているのだから、今度だけは君等の相談にのるから怠業を停めさして欲しい……」
「うむ、今日、相談しますか」
「いや、今日はもう晩いし専務も帰られたから明日の午前中にしよう。私の一存でもゆかん……」
「明日、何時頃会見して呉れますか？」
「午前十時……」
「よし、確実に約束しましたよ。」
私は職場に戻って一同に報告した。忽ちに怠業は打ち切り、其日は一人も残業をせずに帰った。夜、各職場班の代表者は組合本部に集って対策を練った。明日のビラが刷られた。

嘆願書条項ノ容レラレナイトキハ無期怠業ダ。
午前十時ノ解答ヲ待テ！
代表者ヲ支持セヨ！
不当解雇絶対反対！

翌日、午前中にビラは全工場内に配布され、私達は午前十時迄は普通に仕事をした。
十時になると荒木と私と別見が事務所へ出かけた。すると事務所の入口の掲示板に又告知が出ていた。別見と荒木の解雇通告と昨日の四時間怠業中の賃銀は仕払わずとの掲示だ。
私達は会社の卑怯な態度に憤慨して工場長室へ崩れ込んだ。工場長は、深い肱掛椅子に腰を下ろしてうそぶいていた。荒木は目尻を慄わせて工場長の前に立って呶鳴った。
「馬鹿野郎！　昨日の約束は何うしたんだ。」
「あんな解雇なんか誰が認めるもんか！」
「いや、君等は」と工場長は言った。「勝手に怠業をして事務所への集団攻撃をやったのだ。昨夜の重役会議の決定だから私には解らん……」
「勝手にしやがれ――俺の方も勝手にしてやるから……」
三人は職場へ戻ると直ちに従業員大会を召集し、別見を議長にして緊急対策を講じた。
結局、三日間の怠業を決定して二人の起草委員が選ばれ、怠業決議文が起草され、荒木がその決議文を会社につ

きつけて又正午から怠業に入った。
昨日は、工作機械其の他の廻転数を下ろしただけであったが、今日からは正味定時間の十分の一しか働かない申合せの怠業だった。
時々、鬢の職工長や小使や倉庫番爺さんが窓から覗きに来てはせっかちに逃げて行った。
昨日とは違って、今日は騒いだり歌ったりはねたり角力をとったり、皆各職場を飛んで歩いたりした。職場班長は絶えず集って闘争組織を協議した。加盟員の結束は益々強固になりつつあるように見えた。
其夜、組合に催された幹事会は、嘆願条項中に、一、争議中の日給全額支給の事。一、臨時職工制度を撤廃する事一、衛生設備の完備。一、会社は健康保険料を全額負担する事。の四条目を加えて要求書を作成した。
十一時頃、二日振りで家に帰ると隆介の家に貰われた朋雄が奥の間の父の側に寝ていた。妹と祖母と隆介の妻とが子供をとり捲いて何か語り合っていた。
「どれあの宇市!」
祖母は光った白髪を乱して私にが鳴った。
「この宇市奴、お前のする事あ、外道じゃ、浅は死によったぞ、そうじゃ死んだに違いないわい!」
「姉さんが死んだ、姉さんは死ねるような人じゃありませんよ。」と私は隆介の妻に目で挨拶しながら云った。「何うして死んだなどと又いうんです。」

「兄さん」妹が横から膀を伸ばした。「朋雄がそういうんだから間違いないでしょう。」
「ええい、重は黙っとれ」祖母は朋雄の瘦せた頭を撫でて言った。「業の深い人間ばかりじゃ、お前は子供のいう事を嘘と思うかい、先ずそれから聞かしてつかさいの。」
私は耳が狂ったのかと思って頭を左右に振って見た。
「何が何だか僕にはさっぱり解らん」と私は妹に尋ねた。
「どうしたというんだい、一体全体?」
「当り前よ」重子は唇を曲げて笑った。「未だ何も云やしないわ。」
そして隆介の妻の話によれば、二日前から朋雄が夜泣きして仕方がない。乳児脚気からの発熱の為とのみ思っていたらそうでもないらしい。一泣き済むと真夜中も構わず独り言を云ったり、嬉しそうに大声で笑ったりするというのだ。
「どうした朋坊!」と昨晩隆介の妻が尋ねた。
「ねんねよ、晩いから……」
「ううん、母ちゃんが。」と朋雄は枕を外ずして頭を廻らして一方を指示したという事だ。
「私達夫婦は一晩まんじりともええ寝ませんでした。」と彼女は言った。
今日などは昼間でも独り言独り笑いを始めたそうだ。
「朋坊、母ちゃんが来ているの。」と彼女が恐る恐る訊ねると、

示した。

「ううん、母ちゃんそこにいる。」と子供は又室の隅を指

「真く驚いて終いました」と彼女は蒼白な面をした。「何か変った事でもと案じて夕方から急いで車を走らせて来たのです。案の上浅江さんが家出したという事です。」彼女は苦し気に肩をゆすった。「何しろ四方も解らぬ子供がそう云うのですからね、幾ら熱があるからと云って、こんな話は特別です、それに噂話の例も聞いた事もありましてね。」

私は自分を囲む社会が急に乳色に濁って行くようにさえ感ぜられた。

「それあ熱の性でしょう。」私はそこで故意に嘲る調子を見せた。「子供がまぼろし位見たからって、何も死んだと断定する事は能きませんよ。」

「何ぞな、死んだ母親が残した子供の所に来る事は昔のならわしじゃ」と祖母は題目の一くさりを唱えてから、風のように泣き出した。「どれあの宇市奴！　お前が悪いけんこげん事になりおったのじゃ」

私は茫然と眼を瞠った。

「捜索願を出して頂戴！」

と妹は言った。

「お前が自分で行って来い！」

そう云い捨てて私は茶の間に入って布団を敷いた。「俺はとても忙しいんだ。口頭で警察へ申出ればいいんだからお前行って来いよ。頼むから……」

私は寝て終った。

私は家に就いて考えた。厚い壁や板塀に繞まれて吾々を個人主義的な堕落に引落す危険性を持った家に就いて考えた。家に家族に対する小さな愛は吾々には跪きだと思う。若し其愛が深ければ深いだけ外に向って働かなければならない。自分の経験を人間生活の絶対の信条としている祖母を、又自分一箇だけを粉飾する事しか考えていない妹を私は憎む。姉にだって心の中ばかりの模索で、生活を動かそうとしない点には反感を持つ。正直な所、あの遺書の文面が事実なら何故反逆を企てないのだろう、其れも私には不愉快だった。曾我部には溢れるような呪咀を持つが、もう私には姉を引戻す努力を積極的に感じなかった。

奥の間の話は長い間絶えなかった。祖母に叱られでもしたのか今夜は無気味な禿げ鸚鵡の声もしない。

皮太鼓の音が又鳴り始めた。

九

朝、工場の鉄門に大型の貼紙があった。

荒木勢一、別見与助、倉戸孝、巻島宇市以下此の運動の中心人物二十八名の馘首発表の掲示だった。

鉄門の中では腭紐をかけた警官が五名程陣取って工場長立合で一人々々入場職工の氏名と首実見をしていた。入場を許されない馘首者が門前を行ったり来たりしていた。電

柱の蔭に一塊り、板塀の下に一塊りと、しゃがみ込んで散在していた。入場を許されない私達二十人の者は他の同志の集るのを待っていた。

始業汽笛の鳴る五分間余り前に荒木は組合青年部の鬼丸捨吉と一緒に小石を蹴り蹴り歩いて来た。

私達は彼の行動に注意していた。

「やったな、予定の行動を……」

と鉄門の五六間前に立停った彼は鬼丸の首をかかえて何か耳打ちした。鬼丸は腕組みしてうなずいた。そして荒木は鬼丸の脊をどすんと叩いた。馘首組でない彼は日本晴れの顔をしてくぐり鉄門をくぐった。

――組合に引上げろ――八時に又此処へ集まれ――荒木の指令が次々に伝えられた。

組合本部へ引上げると、

「職場で演説会を開かせた上全従業員を工場外へ連れ出すんだ。」と荒木は熱い調子で言った。「八時に鬼丸の指導で実行される筈だ。警官が入っているから鬼丸一人では出来ないが未だ五人位の指導力のある人間は残っている。全従業員が庭へ出た所で、吾々が鉄門の外から演説だ。外へ引き出す。それから要求書提出と、解ったね、今日は無条件で俺の戦術を採用して呉れ、緊急の場合だから……」

二十七人全部異議なかった。

八時を待った。七時半になると私達は別々に十間位ずつの間隔を置いて工場を指して出発した。別見、倉戸、荒木私という順序だった。

工場近くに来るとワーッワーッという喚声が空を渡って響いた。職場大会が開かれているらしい。別見や私達は側の溝を飛んで横丁から様子を見ていた。

と、鉄門の傍のくぐり門から作業服を乱した鬼丸が二人の警官に引ずられて出て来た。

――検束しやがるんだな――と別見が言った。

「未だ、出るな出るな」

と倉戸が私達を制えた。

又、ワーッ、ワーッと鯨の声が前より一層激しく乱調子な跫音と共に聞えた。

「スパイは何人来ていた。」

「五人だ。」

「では、後三人いるな、待て！」

と又一人が検束されて出て来た、二人の警官は暴れる吉置をずるずる引ずって行った。吉置の格好は陸上で死にかけた海老のようだった。

佩剣の打ち合う音がけわしくした。鯨の声は段々、足音や、器物を叩く音に混ってけたたましく響き出した。

「よし、警官は一人だ」と別見が拳骨を斜に振り落した。

「そら行け！」

四人は一斉に走った。後から二十四人の者が砂塵を立てて続いた。

工場の閉ざされた鉄門の外から中を眺めると、庭に出た

職工達が崩れを打って騒いでいた。正面の材料倉庫の窓に立って青年部の宮武が演説していた。彼の体を振り腕を動かす様子は解るが、その言葉は職工達の喚き合う声に消されて聞きとれない。只、時々拍手と喚声が空を衝いて上った。他の二人の同志は薪に点火した松明を振り廻して工場の内外を何か口きたなく罵りながら飛び廻っていた。恐怖病にとらわれた労働者達を牽制しているらしい。

一人の官憲と工場長と職長が、演説者と松明の二人を獲えようとしてあせっている。群集がワーッ、ワーッと崩れを打ってはそれを距らせ遮っている。

荒木が靴のまま鉄門を登り初めた。私と別見がそれに続いた。

「全従業員諸君!」別見が先ず呶鳴った。「外へ出ろ! 組合本部へ集れ!」

「街頭へ! 街頭へ!」と荒木が続けた。「要求書をたたきつけてすぐに争議だ! 手を組んで組合本部へ!」

「宮武!」と私も叫んだ。「腕を組ませろ! 大衆を組合本部へ!」

私達門外の連中は何時の間にか警戒を忘れて鉄門に鈴鳴りにしがみついて唸っていた。

と私達は背後に重々しい跫音とけわしい佩剣の音を聞いた。顧ると十間程先に二十人近くの警官の白服が砂を蹴り上げて七月の陽の中をひた押しに寄せて来るのが瞳にうつった。

「来たぞ、ガラクタ共が!」

と誰かが叫んだ。

「総検されるな!」

そして私達鉄門の上の四人が同志の頭の上に飛び下りた時は既に完全に官憲の包囲の中に在った。

警官は最初荒木と別見と倉戸と私を抑えて引き抜こうとした。同志がそれをさえぎろうとした。門前で激しい闘いが展かれた。其時、工場内の同志二百名がワッショ! ワッショ! と腕を組んで往還に押し出し始めた。二十八人と二十人の摑み合いを中心に二百名の同志がそれを包囲した。同志達は肉弾で私達四人を奪還しようとしてもみ初めた。ワッショ! ワッショ! と四十八人の人間を包んで体当りにもみ出した。私達は警官の羽搔締めのまま土の上を転げ旋った。一人に三四人ずつからみ着いた官憲は容易に私達を離さなかった。

ワッショ! ワッショ! と尚ももんだ。

私達の顔から四肢の上をかけて靴や板草履が無数に渡ったり、同志が重なったり倒れたりした。

「散れ! 組合へ!」

私と荒木は、靴にふまれ頭から目鼻に砂をかぶりながら夢中になって叫んだ。

「散れ! 組合へ行け!」

「同志を取り返せ!」

「とられるな!」

と、皆絶叫してはもみあげた。
「散れ！　組合本部へ」
尚も私達は呶鳴った。
同志は浪のように返しては寄せ、寄せてはもみしていたが、如何にしても私達を奪還出来なかった。其内に人間の数が段々と減少して行った。
「怪しからん沙汰だ。」
と白服を泥まみれにした警官が云い出した頃、私達はやっと地上から引き起された。見るともう荒木と別見以外の同志は一人もいなかった。あたりにはむせっぽい砂煙が朦朦と渦巻いていた。荒木と別見は顔や腕に血をにじませて抑えられていた。倉戸はうまく奪還されたらしく三人だけが残された。
警官連も相当に手足顔面に負傷しているのがあった。私のナッパも袖が千切れている。
三人は冷たく眼を見合って腹の中で笑った。
野次馬連中が遠巻きにして騒いでいた。
七月の太陽がじりじり頭の上から照りつけた。
工場の二本の煙突を見ると煙を吐いていない。鉄門の中では、工場長や技師長が巻煙草を白い指に挟んで何か立話をしていた。
「歩け！」
と警官が私達を小突いた。
三人は罪人のように追われて歩き出した。

私を抑えている一人の警官は耳から血を流し肩から胸を赤黒く汚していた。
裂け目から砂が入った私の唇はなめてもなめてもちくちく痛んだ。

――塀のない無暗に広い監獄の中の小さなこの監獄よ――それは同志草山が昔、運動のために六年の刑に処せられた時牢獄の中で歌ったものだ。
真実に労働者にとっては此の人生はただ広い牢獄に等しい。人間並に生きようとすれば生き血を絞られる。黙っていれば殺される。反逆すれば牢獄の道を辿らねばならぬ。何れにしても碌な事はない。（理論はともかく）生命の続く限り資本家の屋体骨に沢山の戦を入れてから死にたい！
と私は恐らく久し振りに留置場の中でのうのうと眠りながらそう考えたものだ。
五人は別々の留置場で十日間の拘留に処せられた。
同志の差入れる紙や手拭の中次をして呉れる一人の若い巡査がいた。
或晩当直の彼が云った。
「未だ早い、未だ早い。」と細い目を輝かせた。「未だ早い、僕等が君達と握手するのは恐らく何年先の事か、然し君等の熱心な献身的な態度に、恐らく心の中では頭を下げている巡査もいるんだ。どんなに理屈を知らぬ巡査でも必ず君等に頭を下げずにはいられなくなる時が来るに相違な

いと思う、その時が、来たら握手出来る時だろう……」

そして彼は私達の留置場の金網の前を幾度も思案深かそうに行きつ戻りつした。

「人間が悪いのか、制度が悪いのか……」

「社会制度が悪るいのさ。」と荒木が隣りから答えた。

「では、人間は憎まないんだね、では何故君等は人間と激しい争いを起すんだ。人間なんかうっちゃらかして置いたら何うなるんだ。」

「ほうり出して置いたって」と私がそれに答えた。「資本主義社会は必然に崩れるのさ、唯、僕等は兄弟の為めに一日も早くその時代を近づける為めに争うのさ。」

私達はそんな会話を続けている内に彼と親しくなって終った。

彼は組合の情勢の大体を報告して呉れた。会社は私達や鬼丸や吉置が検束された後、戸別訪問によって組合員の結束の切崩し運動を初めたらしく、争議団は段々と人が減りつつあるという事だ。

私達位がいなくてもS紡績の重地や倉戸や出宮がいるから多少安心していたのに、と私は一人でじりじり心を焼いていた。だが全世界に地質的の変化でも起きない限り時日は公平に進む可き筈だ。私は言葉通り、十日間の過ぎるのを千秋の思いで待ち暮した。

十日目が来た。

釈放される朝、特高主任は私達五人に云った。

「いや、御苦労……」と彼はニヤニヤ嘲った。「君達は、都会の東京などの労働者と田舎の労働者との区別を知らんね。田舎の労働者は君達が思ってるような者じゃないよ。買い被り過ぎてるよ、ここいらの奴ぁ、徳川時代と同じだからね、野卑で、出鱈目で、助平と来ているからね……」

私達はそんな話を聴く必要も義務も感じなかった。返事もせずに規定の午前九時に警察署の石門を出た。

控室には別見の妻だけが子供を連れて迎えに来ていた。

「駄目だ、駄目だ。真直に組合へ行ってくんろ！　皆、切り崩しだ。」と櫛巻の彼女は私達の後から追附いて来た。

「倉戸はんの嬶が悪いけんだ、倉戸はん嬶に丸められて、争議を会社に売りよった……」

「何っ！　倉戸が売った。」私は信じられずに聞き返した。

「倉戸が、俺は信じられない」と荒木は腕組みしたまま体をぐるりと廻した。

「ほんまや」別見の妻は黄色い歯を出して罵った。「誠にした二十八人には一文だって手当払わんと会社は云いよりますで……倉戸はん許りか、安藤ちう不具と須美ちう人とえらく給料とってる仕上の渡り職人の四人がグルになりよって裏切ったんじゃ、天神林はんが寝とらにゃこげんな事もなからんに……」と彼女は邪険に子供の手をぐいぐい引張って立て続けに語った。

別見の妻の語る所を綜合して見ると、会社は切崩しの理由として、一、争闘に参加した者には今迄の勤続手当を丁

消しにする。二、健康保険に加入していて、争議に参加すると法律上詐欺罪になる、の二つを挙げて口説いて廻ったらしい。
そんな方面の予備智識に乏しい労働者達がまんまと其手に乗って終ったのは決して無理ではないが、自分等の戦術も不用意だらけであった事が明っきり解る。
此の争議は余り突発的であり××的に指導した。組合本部の方針が各職場に徹底していなかった。それは各班の有力な闘士を争議団本部や宣伝隊に編入し過ぎていたからだ。
この戦術上の誤りに就いての意見も、一同略、一致していた。
「おい！　みんな」と別見が子供を抱き上げて言った。「再組織だ。今度の誤謬は今迄の組合主義戦術を捨て切れなかったからだ……」
「そうだ。誰も文句いうな、再組織への努力だ。」
皆、黙々として組合本部へ足を向けた。
辻々には、私達の留守中の争闘の跡を忍ばせるビラや筆書ポスターが貼られてあった。
組合本部では残った二十五人の内の十七人がふん張っていた。
壁や襖にはビラやポスタアが一杯だった。汚れた布団も引放しで、鬚を伸ばした同志達は憔悴して寝ほおけていた。
父の肩車に乗った別見の子は元気よく『工場の唄』を歌って家に帰った。

一〇

帰宅してからの祖母の不機嫌は甚しいものだった。
「どれあの宇市！　お前など死ねよかし。」
と事毎に私にがなりつけた。
「意気地なしね」と妹も私を嘲っていた。「組合も半崩しにされて後始末は……」
姉の行衛は未だ解らなかった。私は石仏のように無言でそれらの非難を受けた。毎日仕事を探し乍ら組合本部へつめた。第二段の争議準備にかかっていた。
倉戸も謝罪して又参加を申込んだ。組合でも彼を許した。矢張り同志は段々と集まった。然し、今度は、四人の黄色い兵隊靴のルンペンと不具者の安藤良と須美は誘わなかった。
家へ戻って三日目だった。私達は組合本部で、謄写版刷に熱中していた。午後二時。一人の男が躍り込んで来て叫んだ。
「巻島さんいるかな、巻島さん！」
絆纏を着た土臭い男は、城山の方を指示して周章てていた。
「巻島さんはいるかな！　お前さん所の姉さんが、河下の

堰にかかっとるがな……」
私はギクリと心臓をしゃっちょこ張らせてふり向いた。途端、荒木が風のように素足のまま表へ飛び出した。私も其の男と彼を追った。荒木は乾いた初夏の川添の街道をひた走りに走った。
川下の堰の上には烏みたいに見物人が集っていた。其処まで夢中で走った荒木も孤に被われて爪の白ちゃけた水膨れの足を見ると金棒のようにつつ立って終った。
「荒木、待て!」
私は自分の周章てさ加減を言い訳けするように彼に言った。
検死の官憲と町役場の男に申出て、私は姉の死顔と逢った。白粉が吹いたように、姉の顔は青く膨れて艶々していた。私は落付いてじっと見た。
魚の腐った臭味が鼻に来た。不思議に泣けもしない自分だった。何の感慨もなかった。只、朋雄が姉の幻影を見たと云う事に何て解釈を加えていいのか、それをのみ姉の死顔を見つめながら考えていた。
「君の家の人だね。」と官憲は手帖に色々と私の答弁を記入した。
友人や荒木と姉の死骸を戸板にのせて家に帰ったのは夕刻の五時頃だった。
「俺は矢張り間違っていた」と途中で荒木は云った。「たしかに間違ってた。」

「チエッ」私の腹の中はひどく不愉快だった「よせ、今頃になって……」
二人は別々な事を考えながら帰った。
妹は蒼い顔して黙っていた。
祖母は姉の死体を見るや否や、狂気になって光った白髪を乱して泣いた。
「どれあの宇市奴! 浅江を殺したな……ええい、何遍、御題目を唱えたか知れんぞな、のう浅江。」祖母は姉の顔を覗いたり死体の周囲をぐるぐると廻った。
「一寸、大丈夫?」と妹は私を指で突いた。
荒木も落つかずにおろおろしていた。
祖母は突然、奥の間へ走って黒塗りの仏壇に両手をかけて揺すり始めた。
「この胸こその悪い仏奴! この胸こその悪い世の中たらどうじゃい! 人間が居らんけれあ、うぬなぞ誰がおがむものかいな。」仏壇の位牌はがらがらと父の枕元に落ちた。祖母はそれを足蹴にした。「儂は何処に住めばよいぞの、儂に何処へ行けちうぞな。この仏奴! うぬは木偶の棒じゃ、うぬはゴミタメにでも住めよかし、蛆虫にでもなめられろ……」
「何ぞ、何ぞ。」と父は祖母を仰ぎ見て嗄枯れ声を放った。
「おお、ばばどうしたぞな」
私達は顔を見合せて立竦んでいた。
さんざん毒づいた祖母は最後におーっと泣いて台所へ出

て外へふらふらと歩き出した。
「おい、行って見ろ」私は妹に命じた。「隆介の所へ行くのだ、屹度、お前、報告がてら行って来て呉れ！」
「ふん」妹は膀を伸ばしてそう言ったまま祖母の後を追った。
　其夜、禿げ鸚鵡の奴は幾ら叱ってもナーミダーナーミダーと唱えて停めなかった。癪を起した私が籠から追い出したがもう飛ぶ力のない彼女は庭の隅に行って何時までも鳴き止まなかった。
　祖母は隆介の家に泊めた、と言って妹は暗くなって帰って来た。荒木もその夜は私の家に泊って通夜をして呉れた。
「兄さん」と妹が涙をためて言った。「争議は負ける、姉さんは死ぬ、ばばは半狂いになる、兄さんそれで平気、馬鹿兄さん、爆発してらっしゃい。」
「何だと」
「工場を壊してらっしゃい、姉さんの仇敵を殺してらっしゃい……」
「馬鹿、それが出来れば、女の英雄主義奴！　何を俺が苦しむ必要がある、そうすれば何うなるというんだ。」
「救われないわ……」
「何……」
「傀儡よ……」
「何」
「傀儡よ、コムニストは、あんたみたいなケチな反省なんか人間を救わないわよ。」
「この馬鹿、貴様も気狂いになれ」と私は拳を振り上げかけた。「ニヒリスト、地獄へでも行け……」
「好きな所なら何処でも極楽よ、地獄でも何処でも……」
　私は立ち上りかけた。荒木がそれを停めた。私は頭を振り振り表へ出た。
　夜は暗く晴れていた。
　私は何処までも気がすむまで歩き抜こうとして進み出した。
　陶酔させる、自分を忘れさせる乱闘、爆発、酔うような死、虚無的な幻想――私にもその憧憬がないとは言えない。私は私の内心をにがい誘惑の走るのを覚える。
　――反省は人間を救わない――と妹は云った。一個人を中心として動く思想、反省、私達にはそれが許されないのだ。
　私は何時の間にか城山に来ていた。荒木が云ったように「夜の底にだけ平和がある」如く街は静かだ。然し此の街は私に何を与えたか。
　プーシキンは荒野で四ッの翼を持った天使に燃える心臓をえぐり出されて、赤い石炭を抛り込まれたという。私は私の故郷で破裂しなければおさまらない憤激を与えられた。で妹が云ったように私が此処で爆発をし、殺戮を敢てするとする、私の心臓はそれを欲しているかも知れない、戦慄しながら欲しているようだ。が、私が死んだと云って

何うなるというんだ。組合は、党は………。私には生きてせねばならぬ仕事が山程ある。やがて、幾千万の憤怒に鋳込まれた心臓の集団が立ち上がる時が来るだろう。其時私の体が必要であるなら、私は死のう。私は私が党と組合の傀儡である事を誇る。

一人で昂奮した私は夜の町を晩くまで歩き廻って二時過ぎてから家に帰った。

姉の死体の臭気と父の大小便の匂いとで家の中は居たたまれない程だ。

其中に妹と荒木は無言の行をしていた。

姉の葬式は二日後と定めた。

翌日夕刻、私と荒木と別見は、K製鉄所内の分会再組織の相談に天神林を訪問する為に、鴨川堤の下の川端を川上に向って歩いていた。油の浮いた河面には石炭を積んだ伝馬船（ゴダイキ）が慌しそうに上下している。

堤の草は燃えるような緑を吹いて長々と川の両側に明るく伸びていた。

対岸の赤煉瓦建のS紡績の鉄餅みたいな窓には、相変らず白い女工の顔が見え隠れしていた。

Kの起重機（クレン）がガラガラと動くのが怪物のように遠くから見えた。

荒木は口笛を吹き吹き大股に歩いていた。

K製鉄所の堤下まで来た。黒塗りの鋼鉄製クレンの吋太との鎖（チェン）が土台のエンジンホイルに捲かれてギシギシ軋んでいた。

堤上の工場からは機械の唸りが響いて堤の砂を少しずつ落し続けた。

ドッスドッス——蒸気鉄槌（スチームハンマア）の打撃音が腹の底に伝わって来た。Kは目下鉄道省の注文で又、残業の立てつづけらしい。

三人は一列に川添の路を進んだ。

「おい、巻島！」先頭の荒木が言った。「どうだい、生産の喜びって奴は、はは……」

私は苦笑して頭を掻いた。三人は声を揚げて笑った。路を外れて細い坂を上ると、ぶっ違いの突当りが、天神林の古い家だ。

窓にはぼんやり灯が見える。

天神林夫婦は又元気に笑っているだろう。（一九二九年二月一九日）

（一九二九年三月「文芸戦線」）

鉄の話

―縄を誰の首にかけるか？―

中野重治

一　鉄が福井県から出て来た

この春温泉村の芦原で水道敷設の問題がおこり、地主が村会を占領したとき鉄らはそれを包囲して逆に占領した。地主等は叩きつけられて、ぎうと言った。しかし火の見の梯子に登った鉄らは何とか罪で福井の監獄に六ヵ月叩き込まれた。公判で求刑された刑期よりも未決の方が長かった。鉄は控訴した足で東京へ出て来た。

俺達は久しぶりで一しょに飯を食い話した。話しているうちに俺は鉄がすばらしく立派な字を書くのを思い出した。俺は鉄を昔から知ってたが、奴がこんなうまい字を書くとは未決から来た手紙を見るまで知らなんだ。

俺は感心して言った。

「お前は恐しく立派な字を書くんだな！」

鉄が笑いながら答えた。

「そうさお前。これで御前揮毫をやったことがあるんだ。」

しかし急にしかめっ面で吐きすてた、「ふん、御前揮毫か……。」

二　そして鉄が話し始めた

俺が小学校の五年生の時だからもう十五年になる。皇太子殿下の行啓があるというんで、大騒ぎが持ちあがった。「堂様――俺の方ではお宮のことを堂様という。その堂様の改築じゃ。」

「村道の修繕じゃ。」

「記念樹の植えつけじゃ。」

「何じゃ。」

「かんじゃ。」

それも麦秋で大忙しの最中だ。そんなら俺達の村が行啓の道すじに当ってるんか？　ちっとも当っちゃ居ない。キクノゴモンの車のお通りになるのは、郡役所のある町で、村から行くには一里半歩いて四里汽車に乗る。

こないだの御大典の時も佐賀県東松浦郡のある村で御大典記念村社改築の騒ぎが持ち上った。年貢も納められず税金も出し切れない百姓に、一戸最低二円の強制寄附をやらせようというのだからたまったもんでない。しかし相手は何しろ御大典だ。村長と村会と各部落の有力者とおまけに警察だ。

ところでその村に幾つかの共同風呂場がある。その共同風呂場の羽目板に、一夜のうちにベタベタとポスターが貼りついた。

「村社の改築も悪くなかろう。しかし、娘や牛の身の代金で建てたのでは神様がお喜びなさるまい。」

村長も村会も警察もあったもんでない。村社改築案めさばさばと流れやがった。ウガヤフキアエズノミコトがさぞ安心したことだろう。

ところで十五年も昔の俺の村だ。首の太い若手の連中が二三尺も積った雪の峠をこえて座談会にまわって呉れてる今とわけが違う。

堂様も改築するし村道を修繕する。吸われて嘗められてしゃぶられたのだ。だから行啓直前の村一帯と来たら、出の悪い井戸ポンプみたいにギシギシきしむだけで水は一滴も出やせん。そういうまん中へもって来てこの俺の頭にすばらしい名誉がおっかぶさって来た。「郡下何千の学童のうちから選ばれて御前揮毫の栄をになう」ことになったのだ。

親父とお袋とは、怖しさで慄えあがった。それからさかんな喧嘩をおっぱじめた。

お袋は主張するのだ。

「そんな要らんつきあいはせんでもいい。」

親父がそれを叱りとばす。

「並みのつきあいでないと言うが分らんか！」

「そんなら何じゃ？」

「天子様の前で字を書いて御上覧に入れるんじゃ。」

俺が横から口を出す。

「天子様でねえ、皇太子殿下じゃ。」

「皇太子殿下た何様のこっちゃ？」

「天子様のお息子さんじゃ。」

「別に違わん。」そして親父は更に勢いづいてお袋に怒鳴りつける、「分ったか、この役立たず！」

だがお袋は黙って居るわけに行かぬ。

「そっでも川田の檀那の話でや、下駄も買わんならんし、袴も買わんならんし、シャッポも買わんならん。正月の下駄も買うてやれなんだを、袴やシャッポをどこで買ういの？」

かわいそうなお袋はしかし更にその上を発見した。お袋は泣き声を上げた。

「そうじゃ、まだ汽車賃が要る！」

要るにしかしお袋は負けた。要らんつきあいも時世時節で仕方がない。ただ二人とも次の点で一致した。

「なんせ話が板野先生と川田の檀那から出てるんでそれが心配じゃ。」

三　先ず板野先生から始める

板野先生というのは俺の受け持ちの女先生で実に厭な奴だった。

こないだ御大典で殺された三重の大沢君も小学校の先生だったそうだが、先生にも色々ある。
この女先生から俺はさかんにしっぺを喰った。はじめて喰ったのは今でも覚えている。
ある日板野先生が命令した。
「ラリルレロを書きなさい。」
俺は一分たたぬうちに紙石盤の上に見事な一行を書いてのけた。右隣りの（俺は列の端で右隣りしかなかった）洟たらしはどうかというと、奴の石盤はまだまっ黒だ。そのうち奴さんはやっとこさと書いた。
「ラリルレロ」
俺は気が気でない。今に板野先生が「さあ手をおろして」と言う。草履を曳きずりながら列の間を覗き込みに来る。これには間違いがない。俺は左の眼を教壇に向け、右の眼を右隣りの小僧に向けて、つぶし声で教えた。
「馬鹿、レのハネはあっちじゃが……。」
それが「エノアネワアッチジャ」というふうに響いたのだから、俺はたまげたしその小僧はまごついた。俺の左の眼が教壇に向いてる筈もない。揚句がしっぺだ。
そのしっぺがまた非常に利いていた。先生がつかつかと降りて来て手を振りあげたとき俺はもう観念していた。それでもこれほど痛いとは思わなかった。その痛さが実に侮辱的に感じられた。
ジーンと来た頭の中で俺は誓った。

「泣くな、ドス女郎！」
この「ドス女郎」には後に復讐した。四年生になって（四年生まで女先生が五年生までついて来ることは普通ない。俺の時はこの板野先生が五年生までついて来た。山の中の学校で教師が足りなかったのだろう）ある日読本の中に「塩梅」という言葉が出て来た。たまたま川田の檀那が参観に来ていた。俺の組に川田の次男がいたのだ。
先生が訊ねた。
「アンバイ……というのはどういうことでしょう？……誰か？」
誰も手をあげなかった。
「アンバイ？　そんなこた馬鹿でも知ってるわい。」
学校というのは何でしょう？　それは物を習う所です。
風というのは何でしょう？　それは吹くものです。しかしアンバイ？「聞かんでもいいこっちゃ。」
とうとう先生が教えた。
「塩梅というのは塩加減ということです。」
塩加減！　俺達は呆れ返った。
「先生ッ。」
俺が手をあげた。
「そんなら、家の病気で寝ているあんちゃんは塩加減が悪いんですかいね？」
洟たらしどもがこの話を家へ持って帰って字の読めないお袋に訊ねた。

「ほんとに塩加減てことかいの？」
「大方そうじゃろぞいや。」
それが飛んでもないことになった。
まず俺が級長を御免になって川田の二男坊が代った。(俺は三年生からずっと級長をして居た。) それはしかし、川田の次男坊はエコヒイキなしに二番ではあったのだから何でもない。何でもあったのは次のことだ。
「川田の檀那が何でサンカンに来たか、お前知ってるかえ？」
「知らんで！　嫁見に来たんじゃが。」
「何で先生を嫁に貰うか、知ってるかえ？」
「知らんで！　嫁に貰うったって先生なら雑用が要らん。月給は家へ持って帰る……。」
洟ったらしどもはお袋やなんかから聞きかじったことをろくにわけも分らずに喋り散らしただけだったが、それが本当だった。生徒の大喜びの噂は、次男坊、板野先生、川田の耳へつつ抜けに聞えた。板野先生の縁談（早稲田大学を卒業した川田の長男との）は何とか纒ったが、俺の家に対する川田の虐め方はそれ以来ずっと手厳しくなった。

四　だが川田の話に移ろう

川田というのは俺の村の大地主で、よくあるように地主であると同時に唯一の地主だ。村全部が彼の小作人で、自作農でも川田の田を一枚も作ってないというのは一人もない。こういう地主がどんなことをやるかお前も知ってるだろう。
俺の村へ電燈が来たのも、軽便鉄道がついたのも、耕地整理をやったのも、村道を県道にしたのも、村民の反対を無視して小学校を移転さしたのもみんな川田のためだ。明治維新の時こいつは金を出して士族を買った。だから村でこいつだけ平民でない。その外に彼は県会議員で、信用組合の組合長で、バクチを打つという評判のある根本という男を倉番頭にしている。この男が、また川田の倉番頭であると同時に県の任命した米の審査員なのだから世話はない。
この川田というのは以前鴛淵姓を名のって居た。それが五六年前に川田と改姓したのにはこういうわけがある。
「むかし南北朝の時代に南朝の遺臣に川田というのがあった。朝敵に敗れて俺の村に土着したが、北朝の方から逃れるために姓を鴛淵と改めた。現在の川田村という名称はそこから出ている。（俺の村は川田村という。）今や大正の御代となり本来の姓に立ち返るべき時となった。ここに今日以後鴛淵家は川田姓を名のる。」
これが粘板岩か何かに刻まれて川田の持ち山に堂々と建ってるのだから、呆れ返ってものが言えねえ。
ちょうど行啓のあった前年の暮れだ。
お歳暮の日の夜で、俺の家のような家ではどこも咳一つしなかった。お歳暮に川田は小作人一統を集めて夕飯を食

わせる。その夜小作人一統は怖しさで縮み上る。その席へ川田の檀那が出て来て挨拶をするのだが、その模様で年貢米の率を測るのが小作人達のならわしなのだ。
暗い手ランプの下で、俺とお袋とは莚綑を綯っていた。土座の隅（川田以外に畳のしいてある家はめったにない。大抵の家は土間のたたきの上に藁と籾がらとを三寸位の厚さに敷いて、その上に莚を敷いて寝起きして居た。「畳敷き」「板の間」に対してそれが「土座」だ。）に山形に積んであるのは川田へ納める御上納の米で自分のものではない。納戸寄りの妻戸の下には「塩梅の悪い」兄貴が三年越しに寝ている。この兄貴は評判の孝行息子だったが、ちょうど、三年前の耕地整理の時、冬稼ぎのトロッコ押しに出てトロがトンボして胸を怪我した。そこへ風邪を引き、それが肺炎になり、それがこじれて寝ついてからは癇癪ばかり起していた。医者にも見せられず（医者はたまに川田へ来るだけだ。）売薬なぞ効く筈もなし、ずいぶん俺の好きな兄貴だったが見るも厭なほど衰弱していた。
親父はなかなか帰らなかった。莚綑が一段落ついたのでお袋は臼を立てて豆挽きの用意にかかった。
「遅いのお。」
「遅いなあ。」
その時カチャ カチャッという下駄の音がしたかと思うと、何か大声で怒鳴り散らしながらベロベロに酔っぱらって親父がのめり込んで来た。

「わっ等が意気地がないんじゃ！」
近所の男どもが「まあまあ」と抑えておよその話をした。
酒になってから檀那が出て例年通りお説教を始めた。何かのきっかけで、話が「家の嫁女」の板野先生（勿論今では川田先生になって居たが）に移り、何時かの学校の話が出てひどく厭味に俺の親父に当って来た。無理な話と思ったが、小作人のことでみんな黙っていた。そのうち川田が「何とか彼とかあ……」といって怒鳴りつけたひと言で親父が顔を上げた。
「何じゃ。檀那々々と奉ってれやいい気になって。御維新のとき、人の田地田畑を書き換えて士族になったを村のもんが知らんと思ってるんか？……」
座敷中起ち上った。誰かが箱お膳を包んで押し出してやらなかったらどうなったかも知れなかった。ぷんぷんして、それでも納得して出て行った。足元が危いので誰か傍へ寄ると、「要らんことせんな！……」と握り拳をあげたので、その男は敷台の所でハラハラしながら見ていた。
案の条五間も歩かぬうちに、親父はしたたかにけつまずいた。すると親父は俄かにくるりと向き直って、出たばかしの川田の家へ逆に駆け込み、玄関先きに立ちはだかりさま、血相かえて怒鳴りつけた。
「敷石の笏谷までなめてけっかる！」
声と一しょに箱お膳が風呂敷ごと飛んで、拭き込んだ帯戸がつぼの残りものでべっとりとよごれた。

その時親父はもう薪小舎から薪割りを担ぎ出していた。親父は薪割りを提げて声を立てて逃げ腰になったものもいた。親父は薪割りを提げてさっきけつまずいた所まで歩き、振り上げて置いて叩きつけた。
「ええちきしょ!」
笏谷石が微塵になって飛んだ。
聞き終るとお袋は泣き出した。
「まあ、どうする積りじゃろ!」
年貢納め前でたださえ陰気な家の中が翌日からすっかり滅入ってしまった。
「ああ、ああ、檀那衆と小米とは昔から仇同士じゃ。どんな目に仇を取られるやも知れんぞね。ああ、ああ、ああ、あの米もどうなるやら。もう何しても駄目じゃ。」
親父が恐ろしい剣幕で叱り飛ばした。
「黙らんかい、あほう!」
兄貴は物も言わぬし、俺はおどおどと、莚縄を綯った。別にどうもなかった。

五 そしてサギッチョが来た

サギッチョというのは子供の祭で、村中から新藁を集めて堂様の庭にコヅミを作り、男の子は自分の書いた紙幟を男竹の先に、女郎(めろう)の子は三角の紙袋を女竹の先に結いつけ、それをコヅミにつき挿して、村中のものが寄り集まってそのコヅミに火をつける。紙幟は燃え、三角袋は破れて封じてある色紙が散り、そこで男の子は手があがり、女郎の子は針仕事が上手になるというのだ。
俺は大人どもが順々に幟の字を褒めるのを聞いていた。中折紙五枚つぎの俺の幟に来た。
「うまいもんじゃなあ!」
「うまいもんじゃ。」
「鉄が書いたんかいな。ほんとに?」
「さあな?」
「兄貴坊が書いたかも知れんぞ?」
「さあな?」
「ふん……。」
何かひとこと言ってやろうと俺は腰を上げた。その鼻先へ、例の根本の親父がやって来ていきなり囁いた。
「字はうまけれど、あの紙は何じゃい?」
俺の紙幟は井戸漉しの木綿袋みたいに黄色だった。俺はすごすごと家へ帰った。

六 年が明けて年貢米の節期の日が来た

「根本の親父に米の検査を頼んで来いや。」
「あい。」
根本の親父が「居たかいのお?」とはいって来た時は親父もお袋も留守だった。

「根本か？　なりたけ丸を頼むぞの。」
兄貴も今日は愛想がよかった、丸は一等のハンコだ。
根本は積んだ俵の腹へぞくりとサスを入れてそれを明りへ持って行き、指で揉んで見たり口に入れて噛んで見たりしたが、やがてサスを元の腰に挿すと黙って尻を上げた。
兄貴が心元なげに訊いた。
「どういうもんじゃろか？」
根本の親父が答えた。
「不合格じゃ。」
「不合格？　そんなこたなかろ。」兄貴は兄貴にも似合わぬお追従顔をして見せた。「今年や乾しも唐箕も十分に掛けたんじゃが。」
「そんなにもこんなにも、これでやあんた三角も捺せんぞね。」
「根本！」
あわれな兄貴は痩せたからだで蒲団から這いずり出た。俺が「あんちゃん」と言ったが無駄だった。
「お前わしの家に何か恨でもあるんか？」
「面白いことを言うもんじゃね、また。恨みも何もわしゃ無いぞね。」
「何も無いにこれが不合格てのは何じゃ？」
「不合格は不合格じゃ、仕方がない。」
暫く睨み合ってから兄貴が言った。
「サギッチョのとき鉄の轍の悪口言うたのはあれや何のこっちゃ？」
「サギッチョはサギッチョ。そんなこと言う位ならこんなメンザイみたいなもの作らにゃええ。」
「メンザイ？」
兄貴はよろよろと立ち上った。俺がしがみついた。メンザイというのは、鶏に食わせる屑米のことだ。
「メンザイたあ非道いこと言うのお。」
根本が帰った後で俺が兄貴に言った。
「もういい。それよりか水を一ぱい呉れ。」
兄貴は横になってからも暫く肩で息をしていた。

七　さて幾ら不合格でも外に米は無い

親父とお袋とは川田の門をくぐった。
不合格は知っていたが、いさかいの顛末は兄貴が黙ってたので二人とも知らなかった。で、またメンザイを引き合に出してさんざん搾られた揚句の果てに宣告された。
「そんなわけで、不合格の米は小作米として受け取るわけに行かんのじゃがのお。」
お袋がべそを掻きそうになった。
「そんな無理なこと言わずに受け取って呉んなさいのれ。去年までやそんなこと無かったでないかいね？」
「去年まで無かったが間違うていたんじゃ。言うて見りゃ

一人前の米でないんじゃでのお。」
「それでもこれやこなたの田で出来た米じゃが……。」
「それを不合格にしたのはお前さまの方が悪いんじゃ。」
それを無理矢理頼んで――お袋があのガサガサの手の平をさぞこすり合せたことだろう――持って来た米だけは取って貰うことにした。
「そんなら一つ書いたもんを一枚入れて貰おうかのお？」
「書いたもん？」
「つまり不合格の米はなみの米と見るわけに行かん。そうかというて頭から受け取らんとなればこれも無理のかかる話で、とに角貰うことは貰う。そこで差引き勘定幾ら幾らというものを来年の借銭にまわすという証文を一本入れてお貰い申したいんじゃ。」
古い手さ。この頃の地主はずっと近代的にやる。二人は持って来た米に借金の証文をつけて置いて来た。
お袋は途中姉の家へ寄った。姉が貰い泣き始めた。
「お前とこもか？　わしとこも一札入れた。」そして恐しさに堪えぬもののように嘆いた、「今に村にいられんようになるぞね。」
お袋は馬鹿のようになった。
「いよいよ川田の檀那に仇を取られるんじゃ。地主と小作とはさき先までの仇同士じゃ。これは仇討たれの手始めじゃ。先々どうなるやら。村に居られんようになると姉さんも言うた。天保の饑饉みたいにならにゃええが。あの時や野原の草の芽まで取って食べたげな。ああ、ああ、年に一度の鉄の下駄も買うてはやれず、豆糟や油糟の代はどうして払うんじゃろ？」
そのあくる日兄貴がふいに死んだ。
「三枝、家から呼びに来たぞ。」
先生に言われて学校の玄関に出ると隣の親父が待っていた。
「兄ちゃんが急に容態がわるなったんじゃ。」
俺が家に着いた時兄貴は死んでいた。
熱が出て、衰弱し切った心臓が堪えられなかったのだ。
こういう板野先生（川田先生だがみんな板野先生と言っていた。）と川田の檀那とから出た話だからお袋や親父の心配したも無理がない。二言目には川田の檀那が「大変な名誉でわしまで鼻が高い。」というのでなおさら気味が悪かったのだろう。
俺は毎日居残って「義勇公ニ奉ジ」と稽古した。

八　いよいよ御前揮毫の日になった

俺は兄貴の葬式の費用をふた親がどこで工面したか知らない。もちろん俺はあわれな親父とお袋とが、どこをどうして、新しい帽子、新しい袴、新しい下駄を工面したか知らない。とに角俺はそれらを身につけていた。汽車賃まで握っていた。かわいそうな親父、かわいそうなお袋。実際

だ。

俺は、彼等がそれをどこで工面したか今もって知らないのだ。

おまけに、明日の朝という前の晩に親父が飛んでもないことを言い出した。

「おみね、おみきを一ぱい買うて来い！」

お袋はまっ蒼になってすくんだ。

「おみきを買うて来いと言うが分らんか！」

お袋が酢の空瓶を下げてコソコソと出て行った。

朝になった。

俺は川田の檀那と校長とにつき添われて停車場へ歩き出した。（校長のことは一ぺんも言わなかったが、こいつはただ馬鹿だ。）

川田の檀那と校長と切りに何か言いかけた。俺の耳に一つもはいらなかった。俺は出征兵士みたいに沈んでいた。

大たい俺は、その日どんな風に時が経過したか少しも知らないのだ。

場所は郡役所の二階だったが、どこをどうして郡役所へ行ったのやら、会場がどんなだったやら、どんな人が居たのやら一つも知らない。

俺の眼の前には死んだ兄貴の顔がぶら下っていた。親父とお袋との伸び上ってる顔が見えた。お仏壇の兄貴の位牌に供えたおみきの盃が見えた。入り口の下駄箱の中に脱いで来たおろしたての下駄が見えた。それから大きな白い紙に黒々と染め出された「義勇公ニ奉ジ」が見えた。要するに俺はのぼせ上っていた。

とうとう俺は席を進み出た。

俺は大きなテーブルに向って進んだ。

幅の広い紙が延べられて、傍に非常に大きな硯と非常に太い筆とがあった。

俺は何べんとなく敬礼した。

俺は筆を取ってドップリと墨を含ませた。

俺は慄える腕を上げた。

「義………」

しかし筆が紙につかなかった。どうしてつけれるか？

白い紙の上にありありと浮き上った「義勇公ニ奉ジ」という薄い鉛筆の二重文字をどうして見ずに済ませるか。

死んだ兄貴の顔。親父とお袋の顔。おみきの盃、新しい下駄・シャッポ・袴。「義勇公ニ奉ジ」の毎日々々の稽古。そして最後にこの二重文字。この鉛筆の下書き。この極悪の侮辱。この最劣等のペテン。

俺はぶったおれた。

あとがどうなったか俺は知らない。要するに俺は家に帰った。

九　その結果がどうなったか？

早く切り上げよう。

その結果、お袋の姉、俺の伯母さんの予言が的中した。

「今に村にいられんようになるぞね。」俺の一家は村にいられぬようになった。

行啓があった、俺が御前揮毫の栄をになない、字を書く代りにぶったおれた、そしてそのために川田が県会議員を止め、校長が交迭しなければならなくなった――しかしそれが俺の一家に何の関係があるのだ！

お袋は毎日泣いた。伯母さんが泣きに来た。親父はすっかりせいが落ちた。

色んな人が来た。村に止まる方法を講じたのだろう。そしてそんな努力に何の甲斐があったろう。

「借金は棒引き。その代りには俺達が村を出て行く。」

これが一切の結論だ。それが極った時お袋が首を吊った。そんなことはしかしどうでもいい。首を吊ろうと吊らなかろうと、墓場まで捨てて行かねばならぬことに変りはない。

出発の日が来た。村中の人が見送りに来た。根本の顔も見えた。

俺達は汽車に乗り込んだ。みんな顔をさしつけた。で、何の言うことがあるか？　すべて泣かれていたし嘆かれていた……。

ただ稲葉の甚九郎さんという、九十一になる爺さんが、親父の手頸を摑みながら恐ろしい皺枯れ声で言った。

「おみねさんは縄を懸ける首を間違えたんじゃ！」

俺達は長い汽車に乗り、海峡を越え、北海道に渡った。

それから二年のち、上川郡鷹栖村近文二線七号で親父は死んだ。上川地方といえば北海道でも寒いところだ。俺は十四で完全に街頭に出た。そしてそんなこともどうでもいい。

十　今や十五年が過ぎた

十五年がただ過ぎる筈はない。

雪がどんなに積ろうとも、それを踏んで行ったカンジキの跡は消えぬ。それは、峠を越えて川田村一円に渡って居る。それは農村組織者の文字通りの足跡だ。その足跡の網の目はそのままに農村組織の網の目だ。

こないだ議会で拷問致死の問題が出た時、内務大臣の望月が「あれは病気で死んだのだ。」とぬかした。そして浅原健三のダラ作が「へえそうですか。」と引き退った。

俺の兄貴は心臓マヒで死んだ。お袋は首を吊って、親父は老衰で死んだ。しかし俺は「へえそうですか。」と引き退るわけに行かぬ。

俺は俺達が村を駈り出される糸口となった俺の御前揮毫を思い出す。

郡役所の二階で俺はぶっ倒れた。俺は負けた。だが何時まで負けて居るわけには行かぬ。

俺は稲葉の甚九郎爺さんのあの怖しい皺枯れ声を思い出す。

「おみねさんは縄を懸ける首を間違えたんじゃ。」
そして俺は首を間違えるわけに行かぬ。
縄を誰の首にかけるか？
縄を奴と奴の眷族の首にかけろ！
それを正確にやるのだ。
何なら「病気で」殺してやってもいい。

（一九二九年三月「戦旗」）

II

評論

プロレタリヤ・レアリズムへの道

蔵原惟人

一

プロレタリヤ・レアリズムを問題とするにあたって、我々はそれをブルジョア・レアリズムとの対比のうちに見てゆきたいと思う。

一般にレアリズムとはなんであるか？　芸術論上におけるレアリズムとはイデアリズムに対立するものであって、ひとしく現実にたいする芸術家の態度から生れてくる。もしも芸術家が現実にたいする先験的な観念をもってこれに望み、このイデーにしたがって現実を改造し、そしてそれを描きだしたならば、そこに生れてくる芸術はイデアリズムの芸術である。これに反して芸術家が現実にたいするになんら先験的な主観的な観念をもたずにして、現実を現実としてそれを客観的に描きだそうとするならば、そこにはレアリズムの芸術が生れてくるであろう。したがってその特徴は、イデアリズムの芸術は主観的、空想的、観念的、抽象的であり、レアリズムの芸術は客観的、現実的、実在的、具体的である。そしてごく一般的にいうならば、イデアリズムは没落しつつある階級の芸術態度であるにたいしてレアリズムは勃興しつつある階級の芸術態度であるということができる。

以上は芸術上におけるレアリズム一般についていったのであって、この意味においては、ポリクリトスもプラキシテレスも、クールベーもドーミエも、モネもセザンヌも、フローベルもゾラも、トルストイも、ドストイエフスキイも、また西鶴も広重も、ともにレアリストであるといわなければならない。しかしながらひとしく現実にたいして客観的ならんとするこのレアリズムの態度も、歴史の現実においては、その時代の社会的状態およびその芸術家の属する階級の特殊性に規定されて、それぞれ、古典的、封建的および近代的レアリズムを形成した。古典的、封建的レアリズムについては、ここに問題としない。我々はいま直接に必要であるところのこの最後のもの――すなわち近代的レアリズムの問題に移ってゆこう。そしてそれとともに我々の問題の対象を文学の領域に限定したいと思う。

近代的レアリズム、いいかえればブルジョア・レアリズムは、自然主義とともに発生していると見ることができる。自然主義の文学は、人も知るごとく、十九世紀の六十年代に、フランスにおいて、フローベル、ゴンクール兄弟、ゾラ、ドーデー、モーパッサンなどを中心として勃興し、やがてドイツ、イギリス、ロシヤ、日本などにおよ

び、十九世紀の後半（フランス、ドイツ、イギリス）および二十世紀初頭（ロシヤ、日本）などにおける文学の主潮となった。文学上の自然主義は、いずれの国においても、ロマンチシズムの反動としておこったと見られている。しかしそれはけっしてロマンチシズムに飽きたから自然主義が勃興したというふうな意味における反動ではない。総じて文学上の大きい流派の交代の裏には、常にその時代における階級的対立が隠れていることを見逃してはならない。十九世紀文学のロマンチシズムから自然主義への転換の背後にも、没落しつつある地主階級と、勃興しつつある近代的ブルジョアジーとの階級闘争があったのである。

ロマンチシズムは没落しつつある地主階級の文学であった。そして没落しゆく階級のイデオロギーの常として、それは空想的、観念的、伝統的であった。これにたいして自然主義文学は、現実への復帰、因習の打破、個性の解放をそのモットーとしてあらわれてきた。それは当時における新興ブルジョアジーのイデオロギーとまったくその軌を一にしていたものであるとともに、それはまたあらゆる新興階級のイデオロギーとも共通のものを有していた。

さてこうして近代的ブルジョアジーの文学である自然主義はレアリズムをもって出発した。彼らは、あらゆる新興階級の文学と同様に、現実を現実として、なんらの粉飾なく客観的に描きだそうと努めた。しかもブルジョアジーの歴史的限界性は、客観的たらんとする彼らの努力にもかかわらず、そのレアリズムに一定の限定をあたえたのである。それはなんであるか？

人類史上におけるブルジョアジーの使命は「個人の解放」にあった。そしてブルジョアジーをしてこの歴史的使命を遂行しえしめたものは、いうまでもなく、その社会的地位およびその生活原則であったのであるが、その同じ社会的地位、精神的生活、その同じ生活原則がまたブルジョアジーの物質的、精神的生活を通じての決定的原則であったのである。

自然主義文学もまたその出発点をこの個人のうちに有している。しかも社会から切離された個別的個人のうちに有していた。彼らは個人のうちに永遠にして絶対的なるものを求めて、「人間の生物的本性」——をえた。したがって彼らにとっては、人間の生活とは、ひっきょうするに、人間の本能の生活にほかならない。これは当時における生物学、生理学の発達に影響されたもので、哲学上における形而上学的唯物論に相呼応するものであるが、自然主義の作家たちの多くは実にこの観点からあらゆる生活を見、それを描写していった。したがって彼らにあっては人間の本能に直接の関係を有しない社会生活のごときは、まったくこの視野の外にあった。我々はただ、フローベルの「ボヴリー夫人」、モーパッサンの「女の一生」、「美貌の友」、アルツィバーシェフの「サーニン」など、自然主義文学の代表的作品を思いだせば足りる。

そこではあらゆる人間の生活が人間の生物的本性、人間

の性格、遺伝などに還元されている。いいかえれば彼れらの生活――現実にたいする認識の態度があくまでも非社会的、個人的である。そこには社会生活の個人にたいする支配もなければ、社会組織の個人にたいする圧迫も見られない。そこではすべての力点が個人におかれている。それと同時に彼らの題材もまた人間の個人的生活に限定されている。――ここにブルジョア・レアリズムのこゆべからざる限界があったのである。

しかしこの限界の内においては、これらの作家たちはあくまでも客観的な、あくまでも没主観的な態度を取ろうとした。

「生物学が生物を試験するように、小説もまた事実を実験し、解剖し、報告する」とゾラはいった。フローベルもまたこれと同じことを次のようにいっている。――

「人間を取りあつかうのに、マストドンや鰐魚にたいするようにしなければならない。一つのものに角があり、他のものに顎骨があるからといって憤慨してよいであろうか？　彼らを指示し彼らを剝製にし、彼らをアルコールの壜に詰める――それだけの話だ。しかしそれにたいして道徳的判決をくだしてはならない。まず君たちが誰であるのか、君たち、小さい蟾蜍？」と。

そして実際、この限りにおいて、彼らは客観的たりえた。しかし彼らが自然科学者の客観性をみずから要求していながら、社会科学者の客観性を有していなかったというそのことのうちに、彼らのレアリズムが社会をその全体性において描きえなかった最も根本的な原因が存しているのである。

二

しかしながらこのレアリズムとならんで近代文学のうちには他のレアリズムが存在しているのを我々は見る。それは或る作品におけるゾラ、ハウプトマン、イプセン、ドストイエフスキイなどによって代表されるものである。

このレアリズムのフローベル、モーパッサンなどのそれと異るところは、後者が徹頭徹尾個人に出発して個人に終っているのにたいして、これは、その終局においては個人主義的観点を有しておりながら、ともかくも、一応は社会的立場を取っているところに存する。そしてあたかも前のそれがブルジョアジーの立場を反映しているごとく、これはまたより多く小ブルジョアジーの立場を反映している。我々はこれを小ブルジョア・レアリズムと名づけることができる。

資本主義社会における小ブルジョアジーの位置は、周知のごとく、ブルジョアジーとプロレタリアートとの中間に位しており、そしてそれは資本主義の発達とともに経済的、政治的にますます圧迫されてゆく運命にある。しかも彼らは純粋にブルジョアジーの立場にもたちえず、また積

極的にプロレタリアートの立場にも移ってゆくことができずして、たえずその思想その行動においてこの二つの階級の中間に動揺しつつある。したがって彼らの立場は、経済的、政治的にはより多く階級協調的であり、思想的、道徳的には、博愛、正義、人道などの加担者たらんとする。――この彼らの社会生活はまた彼らの文学にも反映して、ここに我々のいうところの小ブルジョア・レアリズムなるものが生れてきたのである。

我々はこの例としてゾラの「ジェルミナール」をとって見よう。この興味ある小説は炭坑夫の罷業を題材として描いたものであって、この題材を社会的、経済的方面にとったということは、それ自身について見るならば、前のフロ－ベル、モーパッサンなどの作品にたいして一つの大きなプラスでなければならない。しかし社会の現象をその個人的方面からではなくして、その社会的方面から描きだそうとするそれ自身としては正しいゾラの努力も、この作者の中間階級的立場のゆえにその題材の正しい歴史的客観的把握を許さなかった。すなわち作者はこの炭坑夫の罷業を革命的プロレタリアートの観点から書くことなしに、それを階級協調的な立場から描いた。――小説は、罷業が敗北して、それが改良主義者の手に渡されたということによって終っている。なるほど、敗北して、改良主義者の手に渡された罷業を、かくのごときものとしてそのまま描いたということのうちには、なんら非難すべきことはない。それはレアリストとしての作者当然の態度でなければならない。しかしゾラがかくのごとき材料をえらび、そしてそれをあたかも階級協調主義の勝利であるか
のごとくに描いたということのうちには、彼の小ブルジョア的な主観が多分に存していることを見逃してはならない。事実ゾラは彼の作品が革命的であるというブルジョアジーの側からの非難に答えて、彼の作品はけっして「革命的なもの」でなくて、同情と正義に訴える博愛主義的なもの」であると弁解している。彼が世界における最初のプロレタリアート独裁の試みであった巴里コンミューンにたいして否定的態度をとったことも争いえない事実である。

ハウプトマンの「織匠」は多くの点においてゾラの「ジェルミナール」と共通なものを有している。この作もまた前の作品と同様に、その題材において社会的経済的であり、ともに資本家にたいする労働者の反抗を描いている。そして芸術的価値からいっても自然主義文学の優れたものの一つに数えられる。この作は一八九四年ベルリンで演ぜられてから三年のあいだに二百回以上の演出を見、長いことヨーロッパのプロレタリヤにとってみずからの旗であるかのごとく考えられていた。そしてじっさいヨーロッパの多くの都市においては一時この作の演出が差しとめられ、帝政ロシヤにおいてはその飜訳が禁じられ、日本においては昭和の今日にいたるまでその演出を見ることができないでいる。しかも我々はこの作においてもまた「ジェルミナ

ール」におけるゾラと同じような小ブルジョア的立場を明らかに看取することができるのである。

まず第一に、我々は、ハウプトマンが、労働と資本との格闘を描くにあたって、近代的労働者の罷業を題材とするかわりに四十年代における職人的労働者を取りだしてきたという事実に注目しなければならない。四十年代の職人とはなんであるか？　それは近代的意味におけるプロレタリアートではなくして、封建的生活と封建的イデオロギーとを多分にもっている小所有者、小ブルジョア的要素であった。みずから小ブルジョア・イデオロギーの代表者であるハウプトマンがとくにこの「労働者」のうちにみずからの戯曲の題材をもとめたのもけっして偶然ではないのである。

はたしてハウプトマンもまた彼の作品が「社会主義的」であるという非難に答えて、「自分がこの戯曲において希望したことはけっして労働者を叛乱に導くことではなくて、企業家の反省をうながすということであった」という意味のことをいっている。そしてこの「織匠」につづいて十六世紀における農民の叛乱を描いた「フロリアン・ガイエル」その他ののち、社会的モチーフは永久に彼の作品から去ってしまったのである。

我々は、この最も代表的な二つの「社会文学」についてのべたのちに、イブセンやドストイエフスキイなどの作品に立ちどまる必要はないと思う。彼らのレアリズムにおける小ブルジョア的立場（イブセン「人形の家」「民衆の敵」ドストイエフスキイ「罪と罰」その他）については、我々はここに語るまでもなく読者のすでに看取されうるところであると思うからである。

さて以上はもっぱらヨーロッパの文学についていったのであるが、ひるがえっていま我々がわが国の自然主義文学について見るに、我々はそこにもまた、いままで漠然と自然主義の名をもって呼ばれていた文学のうちに、明らかに二つの型のレアリズムを発見するのである。すなわち一つのレアリズムは田山花袋（「蒲団」「少女病」）、徳田秋声（「黴」「爛」）などによって代表されるそれであり、他は島崎藤村（「破戒」）によって代表されるそれである。この二つはもちろんぜんぜん切りはなして考えることはできないのであるが、それでもこの二つのレアリズムを区別することのできなかったところに、これまでの批評家の自然主義文学にたいする認識不足の原因があったように我々には思われる。だがこのことについては他の機会にこれを書くことにしよう。

三

近代文学における二つのレアリズムについて述べたのちに、我々は我々に最も直接な関係を有する、第三のレアリズム――我々がいうところのプロレタリヤ・レアリズムの

問題に移ってゆこう。——プロレタリヤ作家はその現実を描きだすにあたっていかなる態度をとるべきであるか？

プロレタリヤ作家の現実にたいする態度はあくまでも客観的、現実的でなければならない。彼はあらゆる主観的構成から離れて現実を見、それを描きださなければならない。そしてこの意味において彼はレアリストでなければならないし、また擡頭しつつある階級の立場にたつものとして、彼こそは現在におけるレアリズムの唯一の継承者たりうるのである。しからば、プロレタリアートのレアリズムは、ブルジョアおよび小ブルジョアのレアリズムといかなる点において異っているか？

ブルジョア・レアリズムは、前にのべたごとく、抽象的なる「人間の本性」から出発する。しかし現実において、抽象的なる、社会から切り離されたる「人間」はありえないし、またその「本性」なるものもその社会、その時代——一言をもっていえばその環境から引きはなして考えた場合には、それはひっきょう一つの抽象であって、現実ではない。ここに彼らの現実にたいする認識の不足があったとともに、ここにまた彼らのレアリストとしての限界があった。すなわち彼らは人間の個人的本能的生活はこれを描くことができたのであるが、それを全体的なる社会生活の一部として描くことをえなかった。そして彼らが「最初に出あった酒売の男と最初に出あった小間物屋の女店員との恋愛関係」を繰りかえして書くようになったとき、彼らのレアリズムはまったくその価値を失ってしまったのである。

プロレタリヤ作家はこの自然科学的レアリズムを克服して個人的にたいするに社会的観点を獲得しなければならない。いいかえれば、我々は社会的問題をも「個人の本性」に帰せんとする認識の方法に対抗して、あらゆる個人的問題をも社会的観点から見てゆくという方法を強調しなければならない。

しかしながら同じく社会的立場をとるもののうちでも小ブルジョア作家とプロレタリヤ作家とはおのずからその観点を異にしている。小ブルジョア・レアリストは、これは前にのべたごとく、あらゆる生活の問題の解決を抽象的なる正義・人道に求めており、その社会的立場は階級協調的である。しかし社会発展の推進力が階級と階級との協調にあるのではなくして、その公然たるまたは隠然たる闘争にあるのであることは、すでに過去の歴史の進行そのものが、これを証明するところであり、したがってこの観点から社会の問題を見ることは、それは自己の主観的構成をもってそれを見ることであって、この社会を客観的に、その歴史的発展において見るゆえんではない。はたしてこの立場にたつ作家たちは、のちにブルジョアジーとプロレタリアートとの階級闘争が激化するとともに、あるいは反動的ブルジョアジーの立場に、あるいは革命的プロレタリアートの立場に——そのいずれかの立場に移りゆかざるをえなくなった。そしてそのときから真のレアリストたりうるもの

は、ただ現実をその全体性において、その発展のうちにおいて見るところのプロレタリヤ作家のみとなったのである。

プロレタリヤ作家は何よりもまず明確なる階級的観点を獲得しなければならない。明確なる階級的観点を獲得することはひっきょう戦闘的プロレタリアートの立場にたつことである。ワップ（全聯邦プロレタリヤ作家同盟）の有名な言葉をもっていうならば、彼はプロレタリヤ前衛の「眼をもって」この世界を見、それを描かなければならない。プロレタリヤ作家はこの観点を獲得し、それを強調することによってのみ真のレアリストたりうる。なんとなれば現在において、この世界を真実に、全体性において、その発展のうちにおいて見うるものは、戦闘的プロレタリアート——プロレタリア前衛をおいてほかにないのだから。

この戦闘的プロレタリアートの観点はまたプロレタリヤ作家の作品の主題を決定するであろう。彼はこの現実のうちからプロレタリアートの解放にとって、無用なるもの、偶然なるものを取りさり、それに必要なるもの、必然なるものを取りあげる。かくてあたかもブルジョア・レアリストの作品の主要なる主題が人間の生物的慾望であったように、また小ブルジョア・レアリストのそれが社会的正義、博愛などであったように、プロレタリヤ作家の主要なる主題は、プロレタリアートの階級闘争となるであろう。

しかしながらプロレタリヤ作家はけっして、戦闘的プロレタリアートのみをその題材とするのではない。彼は労働者を描くとともに、農民をも、小市民をも、兵士をも、資本家をも——およそプロレタリアートの解放になんらかの関係を有するありとあらゆるものを描く。ただその場合彼は、その階級的観点から——現在における唯一の客観的観点から——それを描くのである。問題は作家の観点にあるので、かならずしもその題材にあるのではない。——題材は、この観点の許すかぎりにおいて、現代生活のあらゆる方面を包容してこそ望ましいのだ。したがって「格闘におけるプロレタリヤのみが対象たりうる」という見解は我々の陣営内においてすみやかに清算されなければならない。

以上我々はプロレタリヤ・レアリズムがブルジョア・レアリズムといかに異るかを見た。しからばプロレタリヤ作家は過去のレアリズムから何を継承するか？ 我々はまず過去のレアリズムからその現実にたいする客観的態度を継承する。ここで客観的態度というのはけっして現実——生活にたいする無差別的冷淡的態度をいうのではない。それはまた超階級的たらんとする態度をいうのでもない。それは現実を現実として、なんら主観的構成なしに、主観的粉飾なしに描こうとする態度をいうのである。そしてこの態度こそは過去のわが国のプロレタリヤ文学の多くのものに欠けていたところであり、そしてそのゆえにいま我々がとくに強調しなければならないところであるのだ。これまでのわが国のプロレタリヤ文学を見るに、我々はしばしばそ

こに描かれた現実が作者の主観によってゆがめられ、粉飾されているのを見る。しかしかくのごときはただにレアリストの態度でないばかりでなく、一般に優れたる芸術家の態度ではない。我々にとって重要なのは、現実を我々の主観によって、ゆがめたり粉飾したりすることではなくして、我々の主観――プロレタリアートの階級的主観――に相応するものを現実のうちに発見することにあるのだ――かくしてのみ初めて我々は我々の文学をして真実にプロレタリアートの階級闘争に役だたせうる。

すなわち、第一に、プロレタリヤ前衛の「眼をもって」世界を見ること、第二に、厳正なるレアリストの態度をもってそれを描くこと――これがプロレタリヤ・レアリズムへの唯一の道である。　――一九二八年四月八日――

――(一九二八年五月「戦旗」)――

いわゆる芸術の大衆化論の誤りについて

中野重治

悪と誤りとはいつも親しげな顔つきで来る。芸術の問題で我々が知らず知らず落ち込む色々の誤りも、非常に屡々この問題に対する我々の心がけの良さ(?)をその原因の一つにして居るようだ。言うまでもなく、問題が解決されるためには心がけがいいだけでは何にもならない。必要なのは力である。力の無さを心がけの良さで補おうとするならそれは間違いだ。間違いを主張するならそれは悪い心がけだ。

ところでこの頃口八釜しく論ぜられて居る芸術の大衆化論は、明かにこの種の誤りに落ち込んで居るばかりでなく、ともすれば心がけの悪さから出発してさえ居るように思われる。芸術を千人のために創ろうとするものは、一応尤もらしいこの芸術大衆化論の面皮を剝いで見ると同時に、それにしてもこんなまやかし物の面皮にレーゾンデートルを与えて居る我々の無力さをも顧みる必要があるだろう。

そこで一体芸術の大衆化とは何であるか。ところが残念なことに、我々の前に居る大衆化論者はその声と数とが大きいだけで、何を言おうとして居るのやら一向に訳が分らないのだ。中に分るのが居る場合でもそれは終に問題の核心――芸術の大衆化とはどんなことなのか。なぜ芸術は大衆化しなければならないのかと言う点には一向触れようともしない。だがこのざわざわという騒音の中から我々はやっとのことで、幾らか筋道のとおる二三の声を聞きつけることが出来る。

第一の声は言うのだ。

「芸術は今日から新しい通俗的な足場に移らなければならない。作者の身辺雑記を綴って居て高級芸術家面をするとは何のことか。復活やレ・ミゼラブルを見てその素晴らしい大衆性と通俗性とを考えるがいい。第一芸術を受け入れる当の民衆が何時までも短篇小説の類に我慢して居ると思うのか。明日は大衆のものだ。大衆は通俗を喜ぶ。我々は明日へ、通俗に向って進む。今日芸術的な芸術に磨きをかけて通俗作家をさげすむものは明日泣きべそをかくがいい。」

一握りの作家は、これを実行する。大衆の気に入るために彼等は外の一切を捨てて顧みない。彼等の特徴は、そのたわいもないカラクリ仕掛けの怪奇と足の裏を嘗める卑猥とで大衆をつつきまわしながら、一方ではその作品のイデーが既存の最も卑俗な道徳律に抵触することさえも極端に恐れるところにある。この既存の道徳律のうちで彼等が一番恐れるものは、君主と臣民との、官憲と人民との、国家と国民との、言い換えれば支配階級と被支配階級との古い関係に対する疑惑、不信、否定に関するものだ。我々は非常に屢々、彼等がただこの点に触れまいがためだけに怪奇と卑猥と汗を流して煽情するのを見て居る。若しこういう芸術が大衆に与えられるなら、それは製絲工場内で、役付きの男工が女工の脱走を防ぐために性的関係を利用するのと違わない。男工は、女工をその弱味につけ込んで資本家と労働者との古い関係の中に閉じ込めることによって資本家からのおこぼれを慷に入れる。芸術家は、大衆をその弱味につけ込んで支配階級と被支配階級との古い関係の中に閉じ込めることによって支配階級からの落穂を拾う。二人ともそれぞれ資本家と支配階級との保護と奨励との下でその仕事をする。ただ男工は万に一つ女工を愛して居るかも知れない。だが芸術家は金輪際大衆を愛して居ない。で、この芸術家は骨の髄まで牛太郎である。

だが牛太郎が漂客を愛するということが絶対にあり得ないだろうか。事実大衆は独りよがりの私小説的芸術を受け入れない。大衆の求めるものは凡庸な作家の頭の中で捏っち上げられた、はかない心理の推移ではない。それは大衆自身の姿、大衆自身の生きた生活だ。ところで作家が剣と美人とを、豪傑とロマンスを与えるならば（それが十八世紀的な姿で与えられるか二十世紀的な姿で与えられるかは別として）、大衆は彼等に特有の無邪気な笑いと泪とで群れて来る。で、作家は大衆にその欲するところのものを与えたわけではないか。

だがこの牛太郎は間違って居る。みじめに牛太郎に擽せられた男は、実は彼を石子詰めにしたこの世の中で彼の分身を探して居たのだ。人身売買を肯定して、彼を石子詰めにし彼の分身を閉め出したこの世界秩序をこの上丈夫にしようとして居たのではない。大衆芸術のまわりに大衆がそんなにも群れて来るなら、それは大衆の中にそんなにも笑

いが殺され、その代りにはそんなにも沢山の泪が溜って居たからだ。何も彼等が、安い笑いと泪とで不安と悲哀とをごま化され、それ故明日もこの芸術のまわりに群れて来、それを繰り返して牛太郎への貢ものを永遠化そうとして居たわけではない。

牛太郎は間違って居る。大衆が牛太郎のいわゆる芸術的な芸術を受けつけないのはそれが芸術的であるからではない。牛太郎なぞが芸術に関して大衆を余り見くびらぬがいい。反対にそれは、昨日の芸術が今日死んだからだ。今日大衆はその生活がまことの姿で描かれることを求めて居る。生活のまことの姿は階級関係の上に現れる。生活をまことの姿で描くことは芸術に取って最後の言葉だ。大衆の求めて居るのは芸術の芸術、諸王の王なのだ。

だが我々は暇をつぶし過ぎた。このような意味で大衆化論を振り廻わす牛太郎等（彼等を名ざすことが我々に出来る）が、どの一人を取って見てもブルジョア芸術家の屑の成れの果だったことを、彼等のどの一人でも、ブルジョア的に芸術的な芸術さえも創れなかった手合いばかりだったことを、我々はもっと早く思い出す方がよかったのだ。我我は暇をつぶし過ぎた。「復活とレ・ミゼラブルとを見ろ。」この曳かれ者の小唄は幾分か態裁がいい。で、羇もじゃの二人の老人が墓の中でさぞ大きなクサメをしたことだろう。

そこで別のもっと真面目な声を聞くことにする。

「我々は我々の芸術をひろく無産大衆の間にばら撒くことを欲する。我々はプロレタリアの芸術家なのだから。だが我々のあらゆる努力が予期どおりに酬いられたかどうか。我々がいつも眼の前に置いて居る労農大衆のどれだけの部分が我々の差し出した贈り物を受取ったか。正直のところ――我々は大胆率直に認めなければならない――大衆はそれを殆ど受け入れて居ない。その代りに彼等は探偵小説と宮本武蔵とを読む。我々が大きな犠牲を払って銭勘定の上で損をしながらやる芝居を見に来ないで浅草に行く。何時どこで我々の目的は達せられるのだ。一体我々の芸術は、それが大衆からモーリス・ルブランや三上於菟吉を逐い出した時レーニンの遺言を守ったことになるのだが、そのためになぜ今まで我々はブルジョア大衆芸術からその面白さを習わなかったのか。その面白さに於てブルジョア大衆芸術に拮抗しそれを凌駕する時はじめて、我々の芸術は文字どおり大衆を社会主義の方へアヂる事が出来るのだ。ほかの一切は手元にある。今は面白さがあればいい。」

我々はこの立派な心がけの前にシャッポをぬぐ。我々はシャッポを脇の下に挾んで彼が何をするかを観察する。今や彼は遍歴を始める。まずデューマからは事件を、ショーからは地口を、ツルゲネフからはインテリゲンチャ男女のほのかな愛情を、ドストエフスキーからは複雑な病理学を、モルナールからはテズマを、シュニッラーからはエロチークを、ワイルドからはグロテスクを、ディフォーからはフ

アンタスチークを、オー・ヘンリーからはチョークを、そして銀座からはステッキとフラッパーとセーラー・パンツとを。こうして彼は彼の遍歴から帰って来る。「余は社会主義のバルザックだ。余は面白かろうが……。」で、我々は心中に悲しみながらシャッポを元通りに冠らなければならない。

一体芸術に取って面白さとは何であろう。だがその前に我々は、我々がどんな場合にも芸術上のプログラムと政治上のプログラムとをとり換えないように注意しなければならない。芸術上のそれにともすればすり換えられる危険のある政治上のプログラムは言うまでもなくプロレット・クルトの問題だ。我々はどんな対策を持って無際限なブルジョア的読物等々の洪水を堰きとめるか。我々はある労働者が彼の工場で調査した一つの統計表を持って居る。その労働者は、その工場が印刷産業に属して居る関係から、他の産業部門の労働者よりも高い読書力を持って居る。だが彼の調査によれば、労働者百人の日常の読物（新聞を除く）の六十プロセントが講談社系に所属する。何等かの意味で社会主義的と名づけられる雑誌は僅かに一プロセントに過ぎない。これに対して我々は何をしなければならないか。更にこの百人を頼って居る恐らく五百人の家族成員、就中次のジェネレーションを形づくる子供の群をどうするか。勿論我々はこれに対抗しなければならない。我々は日本の労働者に取って、十の荒木又右衛門よりも一つの「世間を身慄いさせた十日間」が遥かに魅力のあることを知って居る。従って我々は、従来余り顧みられなかったこの方面に新しい力を向ける必要がある。そのためには、労働者農民の中から生れるもろもろの通信と通信員とが特色ある要素を供給するだろう。厖大な資本家的商品生産方法によるブルジョア的読物の洪水的生産にどこまで我々が対抗して行けるかを今予測することは出来ない。それは困難な、けれどもやらなければならない仕事の一つだ。更にこのことは、無産大衆が市場に対して持つ購買力、彼等が資本家地主から自由に持つ時間、そして彼等が狭められ歪められたブルジョア教化機関から得て居る芸術的教養の、或いは単に文字上の能力等々の特定の制限なぞに関連して、触手をひろく芸術の中に伸ばしながら、しかしそれ自身はプロレタリアートの政治的プログラムの上に立つ問題である。我我は、特殊の出版、移動劇場の動員、芸術的ジュルナールの編集その他でこの点に関して全力を搾らなければならないが、同時に常に、全プロレット・クルトの問題と芸術自身の問題とを区別することを弁えて居なければならない。

で、一体、芸術に取って面白さとは何であろうか。ある芸術作品の芸術的価値とそれの面白さとは全くの別物であろうか。若しそうならば我々は、優れた芸術的価値を大衆のものとするためにそれの橋渡しとして面白さを探して来る芸術家にお辞儀しなければなるまい。だが面白さは芸術に取ってよりむしろ大衆に取っての問題だ。だからこそ面白

さによる芸術大衆化論者の前で一応我々は脱帽したのだ。そこで大衆に取っては何が一番面白いか。言うまでもなくそれは大衆自身だ。そしてこの大衆とはこの世に現存するところのものだ。それは――我々はつつましく日本だけに就いて物言おう――空っぽの胃の腑と霞んだ眼とでただ独り人間の魂を護り続けて居るもの、この世の存続と発展とのために生産の仕事を引き受けて居るもの、白髪と皺とのなかにすべての悲しみを埋葬して背中を曲げて消えるもの、貧乏と病気と苦痛と悲哀とにまみれて、けれども次のように叫ぶもの、「そんな世の中が来るのなら、わたしゃ今ここで息を引き取っても惜しかないよ」（ジェルミナール）、そしてその「いい世の中」を沈痛と快活とのすべての色あやを以って現実にたぐり寄せて居るところのものだ。

アメリカ雑誌の笑話や正木不如丘の愁嘆場が何のかかわりがあるか。いっそ一と思いに殺して貰いたいような怪我人に向って、この心がけのいい医者は、寄席芸人の薄羽織で日時計がこぼす砂のように、社会主義をちょろちょろと教え込もうとするのだ。この心がけのいい医者は、心がけのいい有馬頼寧のように、或いは田中義一のようにさえ間違って居る。鳥渡ばかりどきどきさせるピストルや、鳥渡ばかり撲る甘い言葉や、鳥渡ばかり重苦しさを和げるウィットや、そんな吝臭いものを大衆は求めて居はしない。そんなものを面白がるのは、人が立ち止まれば屹度自分も立ち止るところの、「何か面白いことはないかな」と考えながらしょっ中ぶらついて居るところの、消費性プチブルの通行人根性なのだ。我々の大衆の求めて居るものは、若しそれをしも面白さと言えるなら、あらゆる人間の上皮とあま皮とを剝いて剝き出しにした生活の露わな姿に外ならない。ウィットや地口でさえもただここに近づく時にだけ人の足を止める。時空の如何に拘らず、大衆の求めるところのものは芸術のヒマラヤなのだ。この高峰の持つ雪渓と山襞とだけが、それをある時刻には紅く他の時刻には紫に染めなす陽の光だけが、そこに棲息し徘徊する鳥獣魚介とそこに繁茂するあらゆる種類の蘚苔類と森林とだけが、それを取り巻いて起伏する支脈の宏大な展望だけが、ヒマラヤの面白さの真骨頂、大衆を正当に息詰まらせる芸術の魅力なのだ。これ等の魅力はただヒマラヤに求められて愛宕山には求められない。そしてヒマラヤの雪を愛宕山に移すならそれは溶け去らずには居られない。

大衆のために面白さを盛ろうとするものは心がけのいい、けれども藪医者に過ぎない。それは甘草だけを処方する代診に過ぎない。甘草は舌の先に甘いだろうが病人は死ぬる。

なぜこの医者等は切りに甘草を嚙まそうとするのだろう。我々が考え落してならない事は、芸術と薬との本質的な差だ。たとえ名医でも苦い薬を甘くして飲ませることをする。だが芸術は味つけなしの時が一番うまい。伝説の歌謡と岩壁の牛とから流れて来た芸術の本流を見るものにそ

れは納得されて居る。対象をその客観性において捕える時すぐれた芸術が生れる。その時はじめて、在るがままに描かれたものがそれの道行きを訴える。芸術家がその小さな成心で対象に臨むなら対象はその客観性において捕えようがない。そこに生れるものは捻じ曲げられた芸術であり、そこに示された道は袋小路である。若し芸術家に対象をその客観性において捕まえる力があるならば、彼はわき見をしずにその方へ行くだろう。復活はトルストイがこの道を次のように進んだ時に成功したのだ。

「朝から昼にかけては夜の歓楽のあとを受けて深い睡眠が続く。三時から四時ごろやっと汚ならしい寝床から労れ切ったように起きる。暴飲のあとの曹達水と珈琲、化粧着や下着や寝巻のままの室内漫歩……そうなると、音楽に、舞踏に、菓子に、酒に、煙草に、姦淫に、そして青年だろうが、中年だろうが、子供臭いのだろうが、よいよいの老人だろうが、独身者だろうが、女房持だろうが、商人だろうが、番頭だろうが、構わない。アルメニヤ人、ユダヤ人、韃靼人、金持、貧乏人、健康者、病弱者、よっぱらい、しらふの者、乱暴者、やさ男、軍人、官吏、大学生、中学生、ありとあらゆる階級、年齢、性質の者に身を任す——それからまた呶鳴る。ふざける、喧嘩する。そして、酒、煙草、音楽、舞踊と、夕方から夜明けまで騒ぎぬいて、更にまた、菓子、酒、酒、煙草と来る。朝になって漸く自由な体となって深い睡眠に入る。これが毎日毎週休みなしに繰返される。ただ一週の終りに目は国家の施設たる警察署へ行く。そこで官職にある官吏であり医師である男が、時には真面目に厳格に、時にはふざけ半分に、人間にばかりか動物にさえその犯行を防ぐべく特に天から賦与された羞恥の念を無視しながら、それ等の女を検黴して、彼女等がかくて過去一週間にその相手と行った犯罪の続行に対して許可を与えるのである。かくてまた同様の一週間が繰返される。かくてまた同様な一日々々が繰返される。夏でも冬でも、平日でも祭日でも。」

だがこの老人は、彼が坊主と一しょにお寺の鐘を鳴らした時失敗した。レ・ミゼラブルでユーゴーは、一八三二年六月五日から六日にかけてパリのバリケードに現れた浮浪少年と共和の老人とをあるがままに捕えた時、(だからそこで我々の前にユーゴーが消えてパリの身慄いそのものが残った時)、その偉大さで我々を曳きずり廻わし、しかし彼が彼の観念哲学をお説教し始めた時、我々は彼から正当に去ったのだ。トルストイもユーゴーも、クロポトキンがゴーゴリに就いて言ったところの、「現実主義的描写による理想主義的描写」が出来なくなった時、おずおずとお説教の中へ逃げ込み、そしてその芸術の魅力をなし崩しに亡くなしたのだ。代診が甘草ばかりを処方するのは彼に薬を盛る力がないからである。プロレタリアの芸術家が面白さを云々するのは、彼が対象へその客観性において喰い入る力を持たないからである。

芸術に取ってその面白さは芸術的価値そのままの中にある。それ以外のものは附け焼刃でテズマに過ぎない。芸術的価値は、その芸術の人間生活の真への喰い込みの深浅(生活の真は階級関係から離れてはない)、それの表現の素朴さとこちたさによって決定される。心がけのいいプロレタリアの芸術家はそこへ進めばいい。彼の芸術を大衆が面白がらないなら、面白さを人真似するのでなしに芸術の源泉である大衆の生活を探ればいい。彼がそれをせず、その人真似の面白さに安物の裏打ちをするなら、それは彼が、そうするより外になす術を知らないことだけを示すものだ。若し彼がこのことを理解しないなら、彼は終に骨の髄まで代診であり、そして牛太郎と同様の代診であり、大衆を大衆の名でぶらぶらするプチブルの通行人根性に売り渡すものである。

彼が大胆率直に認めなければならなかったのは、彼の芸術が大衆に容れられないという現象だけであったのではなかった。況んやプチブルの通行人根性におもねる面白さの密輸人によって客引きをすることへの逃避ではなお更なかった。その現象の原因、彼が人心をゆする客観世界の芸術的把握に無力にも喰い下がれなかったことをこそ、最も大胆率直に認めなければならなかったのだ。

無力をごま化さないがいい。

一切のプチブル的通行人根性を目宛ての客引き根性を洗い流すがいい。

その時はじめて我々は、雷霆のはためくトレドの町を描いたグレコとなることが出来るだろう。その時はじめて大衆が、「そうだ、それが俺らの求める面白さだ。詩人よ、お前は俺らのものだ。」と言うだろう。

ちなみに、我々がここに芸術大衆化論の誤りを検べたことは一つのほまれであろう、だが同時に、それを我々が検べなければならなかったということは一つの恥である。

(一九二八年六月「戦旗」)

芸術運動当面の緊急問題

蔵原惟人

一

わが国のプロレタリヤ芸術運動は、その長い発達の道程に於いて今、一つの重大なるモメントを経過しつつあるように思われる。

最近二年間に於けるわが芸術運動は、主としてその組織の為の運動であった。それは一面に於いては、小ブルジョ

ア芸術運動をプロレタリヤ芸術運動に転換せしめる為の闘争であり、他面に於いては、プロレタリアートがその芸術運動を展開する為の最も合理的な組織を作り出す運動であった。そしてこの地盤の上に幾多の分裂と合同とが行われたのである。成程この分裂と合同とは多くの誤謬と違算とによって附き纒われた。だがそれは全体として必然な過程であり、芸術運動が小ブルジョア的なるものからプロレタリア的なるものにまで成長する為には必ず一度は通らなければならない道程であった。

しかし本年四月、全日本無産者芸術連盟の創立と共に、芸術運動に於けるプロレタリヤ的方向は与えられ、芸術運動を此の如き方向へ展開してゆく為の組織は、(勿論過渡的形態としてではあるが)一部完成されるに到った。ここに於いて我々は直ちに新しき創造的段階にその第一歩を踏み出すべきであった。しかも現実に於いては我々の運動は何等新しい進展を見せなかったのみか、返って後戻りしたかの観さえ呈した。それは何によって生じたのであるか？

それは我々の陣営内に於ける一部の同志達が、プロレタリヤ芸術運動の新しき段階の意義を理解し得ず、或はまたそれを薄々知っておりながらも、この新しき段階に於ける自己の混乱した姿を想像してその決定的な第一歩を踏み出すことを躊躇逡巡し、それによって意識的無意識的に我々の運動を過ぎ去った段階の古い殻の中に閉じ込めようと努力した結果に他ならない。

併しながら、若しも我々が今この第一歩を踏み出さないならば、若しも我々が古い組織的時代の殻の中にのみ閉じこもって、新しい創造的時代へとその第一歩を踏み出さないならば、我々の運動は形骸をのみそなえて実質なきものとして、啻に無産階級運動全般にとって無用なものとなるばかりでなく、却ってそれは有害なものとさえなり了るであろう。――我々はあらゆる困難を排してかくの如き誤った傾向と闘争しなければならない。

二

我々は芸術運動の新しき段階に対する完全なる無理解と、我々の運動を古い殻の中に押戻そうとする努力とを、本誌前月号に載せられた鹿地亘君の論文「小市民性の跳梁に抗して」の中に見る。我々はこの論文の批評から始めよう。

先ず鹿地君のいうところを聴こう――

「芸術論(作者は芸術理論と芸術運動理論とを混同している――蔵原)に現れた小市民的傾向とは何か。端的に、所謂「破壊の快味」を捨て、所謂「建設の労苦」に走ろうとする傾向がそれだ。」

「我々の技術が尚未だ完成に遠い――と云うことは明かに一つの不安をそそる要因ではある。だが、若しも我々が、かかる不安に脅されるならば、脅されて不当に完成

を急ぐとするならば、……所謂破壊を捨てて建設に走るならば、瞬間プロレタリヤ芸術はブルジョアジーの虜になるのだ。(!)」

「過去の芸術を我々は分析する。だが、それは我々が過去の芸術から完成された技術を移入するためではなく、プロレタリアートの破壊の対象である所の過去の社会に(現代の社会ではないのか?――蔵原)、如何に過去の芸術が合理的に奉仕していたかを見極める為(!!)に外ならぬ。かかる分析のみ、我々の所謂「破壊の芸術」が、正当に過去の芸術形式を破壊する道が裏付けられるのだ。」

すべてはまことに結構である! だが惜しいことにはこれ等の行を書いた鹿地君は、プロレタリヤ運動の、従ってまた、プロレタリヤ芸術運動のイロハをも理解されていないと云うことである。彼は、我々は革命前期にあっては破壊する為に建設するのであることを、我々が党を建設し組合を建設するのは、やがてこの社会を変革せんが為であるのを知らない。プロレタリヤ芸術の建設はブルジョア芸術とそれを生むブルジョア社会とを破壊する武器となるということを知らないらしい。甚だ遺憾の極みである。

更に聴こう。

「芸術論に現れた小市民的傾向は……宣伝性は芸術性に並行する――という言葉の悪い解釈となって現れ始めている。

「真に芸術が力を持つのは、それが真に芸術であるからだ。――それは正しい。

「然しながら古い形式と技巧とがそれ自身の合理化の為に、かかる抽象的な言葉のかげにかくれて再現することは、苦難を越えて今日の端緒についたプロレタリアートの芸術を根柢から脅すものでしかない。」

「プロレタリアートの激情は、最も率直に最も粗野に、大胆に表明される。プロレタリアート芸術の技術が暗示される点はそこだ。琢き上げられた技術の完成ではなく、露出された意欲の方向と結論とがそれだ。それは過去一切の所謂「芸術性」を無視する。」

「ともあれ、今日漸く端緒につき、その形成の道程を見通した所のプロレタリアートの芸術に、今(変革期において)一つの形式の完成を求めることは幻想である。」

「今、我々の場合に於いても又プロレタリアートの芸術を完成させる者は明日の者の仕事である。我々は今その貴い礎石を苦難の中に築くことを使命づけられている。」

「技術の未熟さを、只その未熟なそれが使命づけられた道に押し通すこと。――そこにこそ明日の完成は原因されるだろう。」

成程現在に於いて百パーセントに展開されたプロレタリヤ芸術があり得ないことは云うを待たない。だがそのことは決して現在に於けるプロレタリヤ芸術は此の如きものに向って努力する必要はないと云うことを意味しはしない。それは決して我々の芸術の未熟の弁護にはならない。否反

対に、此の如きものに向って努力するもののみが、真に芸術をして革命の武器たらしめ、また「明日の芸術の礎石を築く」ものであるのだ。

此処で一寸注意して置かなければならないのは「芸術性」と云うことについてである。鹿地君は古い「芸術性」についてのみいっているが、新しい「芸術性」については何も語っていない。これは彼がマルクス主義的見地から何を「芸術性」と云うかを全然知らないからである。我々が「宣伝性は芸術性と並行する」と云う時、我々は主として そこに描かれた対象の具象化の程度、内容と形式との合致等々、について云っているのである。私は所謂「芸術性」の中に唯小市民性をのみ見て、それに脅かされている鹿地君に向ってマルクス主義芸術学の初歩を勉強することをおすすめする。

三

以上に述べたことは極めて簡単な、鹿地君以外には誰にも分ることであるが、ここにやや複雑な問題が残される。それは我々の芸術の技術が何処から生れて来るかと云うことである。

これに対する鹿地君の意見は次の如くである、

「技術を学ぶことはプロレタリヤ芸術家にとって必要である。だが我々の技術は、過去の社会が築き上げた技術の体系によって置き換えられることは断じて許さない。過去の社会に於ける感情の組織化に奉仕した技術が、如何なる感情の組織化にのみ最も適当に形成されているかは自明である。」

然らば我々の芸術の技術は何処から生れて来るか？ 鹿地君は続いていう——

「我々の技術はプロレタリアートの進む道の中から、プロレタリアートの成長と共に成長する。随って、我々の技術は只プロレタリアートに入り込むことに依って最も合理的に解決される。大衆に入り込むことに依って大衆の意欲を知り、大衆の意欲を知ることに依って大衆に入り込む術を知ることが出来る。」

だが問題は鹿地君が考えている程しかく簡単なものではない。鹿地君がここに結論として与えているものは唯我々の出発点でしかない。若しも彼が、我々が「大衆の意欲を知る」ことから直ちにプロレタリヤ芸術の技術が自然発生的に生れて来ると真面目に考えているならば、彼は愚鈍以上のものである。プロレタリヤ芸術はプロレタリアートの必要によって決定される。しかしそれはそこからは生れて来はしない。我々はそれを生み出さなければならないのである。

然らば如何にして我々はそれを生み出し得るか？

我々は先ず第一に、過去の人類が蓄積した芸術的技術をプロレタリヤの見地から批判的に受入れなければならな

い。我々は敢ていおう――過去の遺産なくして、プロレタリヤ芸術はあり得ない、と。それは決してプロレタリヤ芸術が例えばブルジョア芸術に屈伏したことを意味しはしない。反対にそれは前者が後者を克服する所以でもあるのだ、――あたかもブルジョア軍隊からその技術を学んだ赤軍がこの前者を克服するように。

芸術はイデオロギーであると共に技術である。内容であると共に形式である。そして形式が内容に決定されることが事実であるとするならば、その形式が内容から自然発生的に生れて来ないことも事実だ。芸術作品の形式は新しき内容に決定されたる過去の形式の発展としてのみ発生する。――これがマルクス主義的見地から見た唯一の正しい芸術発達の法則であるのだ。これをしも理解せずして何の芸術運動であろうか。

四

我々の批判は更に本誌前々号に於ける中野重治君の論文「いわゆる芸術の大衆化論の誤りについて」に移されねばならぬ。

この論文はそれがブルジョア大衆芸術について書かれている限りに於いては正しい。しかしそれがプロレタリヤ的大衆芸術について語られる時全然誤っている。特に現代のプロレタリヤ芸術が大衆から隔離されていて、大衆的なプロレタリヤ芸術が要求されている今日、この様な論文が書かれることは極めて不適当である。いわんやこの論文にも多くの理論的実践的誤謬が含まれているに於いておやだ。

この論文の主旨を押し進めると、「最も芸術的なるものが最も大衆的であり、然も大衆的なるものが最も芸術的である」と云うことになる。これは抽象的議論としては決して間違いではない。抽象的にはそうならなければならない。また我々が階級のない、階級的支配のない共産主義社会に飛躍し得た暁にはそうなるであろう。しかし我々は決して抽象的社会、或いは未来の社会を今問題の対象としているのではない。我々は階級社会の芸術を、しかも資本主義社会のプロレタリヤ芸術を問題としているのだ。その限りに於いてこの論文に於いて中野君が書いていることは純然たる理想論　観念論でしかない。

現代日本の現実的プロレタリアートにとって、「大衆の求めているのは芸術の芸術、諸王の王なのだ」と云い、「我々の大衆の求めて居るのは、若しそれをしも面白さと云えるなら、あらゆる人間の上皮とあま皮とを剝いて剝き出した生活の露わな姿に外ならない」と云い、また「日本の労働者にとって十の荒木又右衛門よりも一つの「世界を身慄いさせた十日間」が遙かに魅力がある」と云うような言葉が、どれ程の客観性を持って適用されるかということは極めて疑問である。一般に階級社会に於いては、種々なる社会的原因により、「最も芸術的なるものが最も大衆的

である」と云う命題は必ずしも成立しない。我々が現在、プロレタリヤ的見地から見て最も高い芸術であると云い得るものを作り得たとしても、それは恐らく百万のプロレタリアートの中せいぜい五万か十万のものにしか迎えられ得ないであろう。しかも一方に於いて我々の芸術運動の上にはこの九十万乃至九十五万のプロレタリアートをアヂテートし、それをイデオロギー的に教養すべき重大な任務が置かれている。我々はこの矛盾を如何に解決すべきか――ここにこそ我々の現実的な問題が置かれてあるのだ。

しかしこのことは勿論現代の我々の芸術が非大衆的であるということの弁解にはならない。現在の我々の芸術は啻に五万十万とのみでなく、僅かに三千四千の読者、観衆――しかも主としてインテリゲンチャのそれにしか迎えられていない状態にある。これは明かに我々の芸術に罪があるのだ。我々の芸術は更に更に大衆化されなければならない。そしてこれが為には、中野君がその論文の中に於いて主張し、私が既に半年前(「前衛」一月号に於いて)に力説したところの、大衆の生活を客観的に描き出すことが要求される。

だが大衆の生活を唯単に客観的に描き出したから直ちにそれが大衆的芸術たり得ると考えたならばそれは大いなる誤りである。我々は更に、「大衆に理解され、大衆に愛され、而も大衆の感情と思想と意志とを結合して高め」得る如き、芸術的形式を生み出さなければならない。そしてこれが為に我々から要求されることは次の如くである。

一、芸術発達のマルクス主義的研究を進めて、そこから現在及び将来に於けるプロレタリヤ芸術の方向を見定めること。

二、過去に於いて大衆を捉えた芸術の形式を研究し、それを批判的に受入れること。

三、ソヴェート連邦及びその他の国に於いて確立されつつあるプロレタリヤ芸術を研究し、そしてそこから現在の我々に必要なるものを摂取すること。

これ等の事が、常に大衆に接触し、そしてそれによって常にきょう正されつつ進められなければならないことは云を俟たない。しかし大衆に接触してさえいればそこからプロレタリヤ的芸術的形式が自然に生れて来るというが如き幻想は我々のあくまで打破しなければならないところである。

五

併しながら前節に於いて我々が述べた所は、あくまでプロレタリヤ芸術確立の為の方向であって、此の如き芸術は必ずしも今直ちに、広汎なる大衆のアヂ・プロには役立たない。我々はこの芸術運動と並んで大衆の直接的アヂ・プロの為の芸術運動――それがもし芸術運動といい得べくんば――を遂行して行かなければならない。

この二つの運動は全然切離して考えることは出来ないとはいえ、明かに異った範疇に属している。然るに我々はこれまで理論的には一応この二つを区別して置きながら、実践的にはそれを混同して来た。そしてそれを混同していたということの中にこそ、我々の運動を停滞させていた一つの重要なる原因が存していたのである。我々は今芸術運動の新しき段階にその第一歩を踏み出すに当って、このことをはっきりと認識してかからなければならない。

芸術を利用しての大衆の直接的アヂ・プロの運動はプロレタリヤ芸術の確立ということをその直接の目的としない。ここに於いては我々は我々の見地からゆるされる限りに於いて過去のあらゆる芸術的形式と様式とを利用し得るし、また利用しなければならない。それはそれが必要な場合には浪花節や都々逸や或いはまた封建的な大衆文学ですらの形式をも利用しなければならない。だがそこから直ちにプロレタリヤ芸術の形式が生れると考えるならば愚の到りである。

尤も我々はこの領域に於いてもこれら封建的ブルジョア的形式を、徐々にプロレタリヤ的形式に替えて行かなければならない。それは我々がプロレタリヤ芸術確立の闘争の途上に於いて克ち得た成果をこの領域に応用することによって為し得る。また一方に於いて、この領域は我々の芸術が真に大衆的たり得る為の一つの重要な試煉所でもある。だから我々は大衆の直接的アヂ・プロの為の芸術的形式が来るべきプロレタリヤ芸術の一要素たり得ないとは云わない。我々が前にこの二つは全然区別して考えられないといった所以はここに存する。しかし、だからといってこの二つの運動を現在に於いて無批判的に混同してしまうことは、それは決して我々の芸術運動を最も有効に展開してゆく所以ではない。

同じことはまた我々の機関誌「戦旗」についても云い得る。我々は今まで機関誌「戦旗」を、「大衆化」せんとし、それを広く工場、農村の広汎なる未組織大衆の中に「持込」まんとして、失敗した。失敗は当然である。我々が誤っていたのだ。我々は過去に於いて、「戦旗」は同時に芸術運動の指導機関であり、また広汎なる大衆のアヂ・プロの機関であり得ると考えていた。それは間違いである。我々は今、この芸術運動の指導機関と大衆のアヂ・プロの機関とを断然区別しなければならない。

このことから生れて来る実践的結論は何か？ それは極めて簡単である。我々は我々の機関誌「戦旗」を真に芸術運動の指導機関たらしむべく努力すると共に、広く工場、職場、農村等に持込み得べき大衆的絵入雑誌の創刊に向ってあらゆる努力をなさなければならない。

プロレタリヤ芸術運動の指導機関には次のものが載せられる。

一、プロレタリヤ芸術作品の発表。

二、プロレタリヤ及びブルジョア作品の批評。

三、プロレタリヤ芸術運動の理論及びその実践的指示。
四、マルクス主義芸術理論の研究。（ブルジョア芸術理論の批判をも含む。）
五、過去の芸術史の研究。
これに反して大衆的アヂ・プロの雑誌には、写真、漫画、ポスター、絵入物語、読物及び大衆的な小説、詩等々が掲載される。
そしてこの二つのものが確立した時にのみ、初めて我々の芸術運動は真に新しい段階にその第一歩を踏み出したと云い得るのである。
（同じことはわが劇場、美術展、音楽会、等々にも云い得るが、ここでそれに停り得ないのは残念である。）

以上に私が主張したことは、芸術運動の古い殻の中に閉じこもろうとするものにとっては、一つの突飛なる飛躍のように思われるかも知れない。しかしこれ等のすべては、建設期にあるソヴェート連邦については既に云わないとしても、変革前期にあるドイツ、フランス、イギリス等の先進国に於いては既に部分的には実行されていることであって、決して突飛なことでも新しいことでもない、ということを附加えて置きたい。（一九二八年七月八日）

（一九二八年八月「戦旗」）

戦線統一から具体的な活動へ
——一九二九年に於ける我々の任務——

山田清三郎

一

一九二八年は、芸術戦線統一の年であり、全般としての芸術運動の、全国的進出の年でもあった。今や、従来四分五裂せる芸術戦線の統一は成り、その戦線の規模の如きも、明らかに、全国的に拡大、普遍化さるるに至った。
一九二九年に課せられた我々の任務、ソハかかる地盤の上に、さらに文学、演劇、美術、映画、音楽の各部門を通しての、夫々独自の、強力なる具体的活動を、積み重ねて行くことでなければならない。

二

一九二八年四月、その光輝ある創立大会を挙げた我全日本無産者芸術連盟が、芸術戦線統一のために、いかに重大

な役割を果して来たかということは、具体的な事実そのものが、何より明白、雄弁にこれを証明するであろう。
即ち、一方、当初若干の懸念を以て見られていた、合同旧四団体をして、真にゆるぎなき渾一体ならしむると共に、他方、各その大部分の旧日本無産派文芸連盟員、旧プロレタリア映画連盟員の、各その母体の解散を通しての、我連盟への獲得、ならびに、中央及全国各地の諸無産者的芸術グループの、我影響下への惹きつけ、等々の如き、その動かすことのできない顕著な現われにほかならないのだ。

五

我全日本無産者芸術連盟結成の意義が、当時、孤立分散せる芸術戦線をして、強固な統一に導く点にあったことは、既に一般に知られ、我々の脳裡にも深く刻まれていたところである。
即ち、一九二八年三月、我連盟をして正式に成立せしめた、旧日本プロレタリア芸術連盟、旧前衛芸術家同盟の合同に関する声明には、明かに、次の如き行が強調されている。
「第一回合同協議会以後三カ月、わが労農階級に対して下された「三月の暴圧」の中にこの仕事を完成した。わが全無産者芸術運動の統一的展開のための槓杆は始めて強固に結成されたのである。」
我連盟結成以来、我々の撓みなき闘争が、「三・一五」事件以来、飛躍的に高まり来れる支配階級の反動的攻勢と、我陣営内における日和見主義的要素（労芸）の妨害にも拘らず、よく当面我々の上に課せられていた、芸術戦線収拾の任務を、具体的、現実的に果し来った事実は、何人と雖も、これを否定することはできないであろう。
今や、我々はこの統一された戦線の上に、さらに実際の仕事、即ち、各専門部門を通じて夫々独自の、具体的な芸術活動そのものを、強力に押し進めて行かなければならない時の来たことを、知らねばならないのである。
この際、最近（十一月三十日）開かれた、連盟東京支部大会が、その本部常任委員会諮問にかかるところの、連盟再組織案を、全幅的に支持し、協賛することを可決したのは、真に、意義あることといわなければならない。
今ここに、その再組織原案の概要を示せば、次の如くである。

A

文学、演劇、美術、映画、音楽の各専門部門を通じて、夫々独自の、縦断的全国団体を組織すること。
各独立団体の組織形態は、夫々の特殊事情を考慮して、最も適応的になされなければならないことはいうまでもない。

B

て、中央に全無産者芸術団体協議会を組織すること。

全無産者芸術団体協議会は、常に各独立団体相互間の緊密な連絡を執ると共に、芸術運動全般の統一的展開を期すること。

C

全無産者芸術団体協議会は、その任務遂行のための具体的方法の一つとして、機関雑誌を発行すること。

協議会は、その機関雑誌及その他の出版物の持込組織として、別に出版所を持ち、出版所は、可及的全国に支社を設け、機関誌読者会は、この出版所並びにその支社を中心に組織さるべきこと。

D

各独立団体は、必要に応じて、常時的或は随時的に、地域的協議会をもつこと。

地域的協議会は、各独立団体の地域的活動を相互に補助し、それのより強力なる展開を期すること。

四

この各専門部を通じての、夫々独自の、全国団体を組織するということは、連盟結成当初既に、我々の間に、問題となった事であり、現に、創立大会にも、その組織原案の一つとして、この種の案の提出を見たのは、尚我々の記憶に新たなるところであろう。

同時に大会が、この案を以て、これこそ我々の、当然採らなければならないところの芸術運動――芸術団体の本来的な組織として、支持し、協賛した事実をも、また忘るることはないであろう。

にも拘らず、当時大会が、熱切、且つ慎重な討議を戦わした結果、現在の如き、地方別的支部単位の組織を採択しなければならなかったゆえんのものは、一に、芸術戦線統一の急に迫られていた結果にほかならなかったのである。

さらに、私をして忌憚なくいわしむれば、嘗て我々が、芸術運動において犯し来ったところの重大な誤謬と、過失の具体的な現われ――即ち、無意味に分散対立せる芸術戦線をして、いかにしても、速かに収拾統一するの必要があったからにほかならなかったのである。

今や、この方面における我々の仕事は、一応の結末を劃すに至った。連盟現在の組織が、新たなる見地から、充分批判、究明されなければならないのは、いうまでもないことであろう。

五

我全日本無産者芸術連盟結成以来、我々が、芸術戦線統一のために、いかに重大な任務を、果して来たかということについては、既に述べたところの如くである。一

方、我々は同時に、具体的な芸術活動そのものの展開の、甚だ不充分であったことをも、認めなければならないのである。

なるほど、そこには、各部門を通じて、夫々若干宛の、進出のあったことは、否むことはできないであろう。文学における二三のすぐれた作品の現われたこと、演劇におけるる移動劇場、美術における移動美術展、プロレタリア美術展収穫等の如き、即ちその具体的な現われとして、数うることができるであろう。

しかし乍ら、全体的にいって、我々の具体的な芸術活動が、厖大な全国的組織をもち、質的にも、また量的にも、我国プロレタリア芸術家の、その殆んど大部分を擁擁、網羅せる我連盟の実際の力に比して、寧ろ、あまりにいうに足りなかったことをも、とうてい、これを蔽うことはできないのだ。

それなら、その原因はどこにあるか。我々は、（連盟自身に関するかぎりにおいて）主としてこれを、連盟現在の、組織上の行詰りのうちに、見出さないではいられないのである。

六

次に我々は、このことについて、若干触るるところがなければならない。

主として、芸術戦線統一のために、その力点を置いた、連盟現在の組織が、当初負わされた任務を終り、その必要性を失うに従って、組織運用上の種々なる苦心にも拘らず、肝心の具体的な芸術活動そのものの活潑なる展開、進出のために、次第に、桎梏と矛盾を形成し来ったのも、また、避け難い必然でもあったのであろう。

我々は、あまりにも我連盟の、統制的方面を偏重した結果、連盟員個々の自由をして、肉体的にも、精神的にも、あまりに連盟中心に、拘束し、束縛し、彼等をして常に、連盟自体の中に、閉じ込めて置くようなことはなかったであろうか。

我々は、この疑いにたいして、否！　と答うるの、愚かなる大胆さを有しないことを、寧ろよろこびとしなければならないとおもう。

事実、我々は、我々自身、即ち連盟員の、組織と、統制と、訓練ということとの、あまりに形式化に落ち込んだ結果、全連盟員の、芸術家的、技術家的エネルギーをして、常に、寧ろ他の方面——即ち、具体的な芸術活動そのものとは、多くの場合、寧ろ触るるところの少い、数多き集会、その他の雑多な仕事のために、費消せしむるの奇観を招きつつあったことは、竟に否むことはできないのである。

連盟現在の組織——本部に中央（常任）委員会があり、各支部には、夫々執行委員会があって、すべてのことが、

これ等の極めて頻繁な、常例会議における、決議と、指令関係を中心として、決定し、展開される——が、一方、極めて慌しくとり行われた、合同旧各団体のゆるぎなき結合を固めると共に、他方、なお分散せる芸術戦線を収拾統一するためには、また余儀なき過渡的形態であったことは、既に知るが如くである。

我々は同時に、この組織によって、我々が払い来ったところの、具体的な芸術活動上における、犠牲の大いさをも、決して見逃してはならないのである。

更に、これを具体的にいうなら、連盟今日までの組織は、全体的にいって、(一)常に我々連盟員の生活単位をして、我々、プロレタリアートの芸術家として、当然、確固と根を下ろしていなければならないところの、全無産階級の一構成メンバーたるの点よりも、寧ろより多く、連盟自体のうちに置かしめ、その結果、口に芸術の大衆化を強調し乍らも、真に、大衆を把握し得るが如き、すぐれた芸術を生み出すことを、直接、間接妨げ、(二)文学、美術、演劇等々の各部門が、地域的に切り離された、夫々の支部の、単なる一専門部として形成されていた結果、これ等、各部門別ごとの独自の活動並びに、それの全国的な、統一的展開を、著しき拘束のうちに閉じ込めて来たのであった。

今や、かかる過渡的な組織を通じて果し来った、我々の任務は、既に終ったのである。かくて、我々は、速かに、具体的な芸術活動そのものを中心とした、本来的な組織形態へと躍進しなければならなくなったのである。

次に、我々は、本文第三章に摘記した、新たなる再組織原案について、簡単に、考察して見たいと思う。

七

およそ、我々の芸術運動が、文学、演劇、美術、音楽、映画等々、各部門を通じての、夫々独自の、活潑なる活動の展開なくして、真に、強力なる遂行を期し得ないということは、あらためて、説くまでもないことであろう。連盟再組織原案は、かかる意味において、明かに、極めて適応的な組織であるということができると思う。

そのことは、従来の地域別的支部単位を全然廃して、各専門部門別に、夫々独立の、全国組織をもつという一点によって、あまりに明白であろう。即ち、我々は、この独立団体を中心に、従来、著しく束縛されていた、各専門部門別的の、夫々独自の、専門的活動を、極めて自由に、極めて活潑に、潑溂と展開することができるからである。

次に、かくして組織された、各独立団体が、夫々代表者を選出して、中央に、全無産者芸術団体をもつということも、見逃すことのできない、重要な一点であろう。

即ちここでは、各団体の夫々の闘争の経験がもち寄られて、芸術運動全般の統一的展開のための方針や、種々なる

方法が議せられる。而して、ここで議せられたすべてのことは、さらに、各団体にもちかえられ、各団体の夫々の特殊性に応じて、最も適応的に摂取される。かくて、これ等の独立団体は、その相互に、極めて緊密な有機的連関を保ちつつ、全体としての芸術運動を、その交互関係において、充分強力に押し進めて行くことができるからである。

協議会が、機関誌をもつ必要については、あらためて、いうを要しないであろう。

尚ここで注意しなければならないことは、協議会が、機関誌及その他の出版物の持ち込み組織として、別に出版所をもち、機関誌の読者会が、この出版所並びに、それの全国的な支社を中心として組織されるという点を、明かにしたことである。

これは、この再組織案のもつ、新たなる特長の一つであって、我々は、これによって、従来、屢々誤謬と混乱を重ねて来た、読者会組織についての一定の基準を、始めて明確に把握することができたのである。

地域別的協議会の必要については、これまた、説明を用しないであろう。

八

かく見来れば、今回中央常任委員会が諮問し、東京支部大会が全幅的に支持し、賛成せるところの連盟再組織原案が、いかに我々の芸術運動——芸術団体の組織として、現在のそれに比して、進歩的意義を有するかは、あまりに明白であろう。

近く（十二月下旬）開かれる筈の、連盟第二回大会が、中央常任委員会の名によって提出されるところのこの再組織案を、誇と、歓びを以て、可決するであろうことは想察するに難くはないのである。

九

一九二八年は、芸術戦線統一の年であった。

一九二九年においては、我々は新たなる組織を通じて、この打ち布かれた統一戦線の上に、さらに、文学、美術、演劇、映画、音楽の各部門を通じて、夫々独自の、具体的な芸術活動を、猛烈に展開して行かなければならないのである。（一九二八・一二・五）

（一九二九年一月「戦旗」）

形式主義文学説を排す

勝本清一郎

最近あっちこっちで形式主義文学論と云ったものを見受ける。これは主として、もとの所謂新感覚派の作家達のグループから提出されたものであって、これによって彼等はマルクス主義文学説に対立しようと云うのである。

曽て彼等は自然主義系の諸々の文芸観に対して、其自身その最末端に於ける位置から、新感覚主義と名づけられた議論で反抗した。今度は系統を異にする新興のプロレタリア文学に対して、自分達の立場を保守せんが為に形式主義文学論なるものを案出したのである。従って今度は彼等は、新感覚主義者ではなくても、もともと同系統に属し利害関係を同じくする新自然主義者達からの荷担をも得ている。たとえば修正的賛助者犬養健氏である。氏は昨年十二月十六―二十日の東京朝日新聞に発表した「形式主義文学論の修正」の冒頭で、「僕のよき友、横光利一、中河与一、池谷信三郎の諸君」と云って所属の陣営を明かにし、マルクス主義者の一群に向っては「文学に於ける形式についての鈍感者、怠け者、否定者」と罵倒している。

所がそれらの形式主義者達のそれぞれの意見は、少し吟味して見ると、みんなてんでんばらばらである事が分る。彼等はマルクス主義文学論に対抗しようとする目的だけは共通にしているが、一人々々の戦術がみな別なのだ。つまり誰もが体系的な文学思想から出発していない。これは彼等の重大なる弱味である。目指す聖地は同じくしても、この若き十字軍の戦士達が各々勝手に、勝手な方法で行軍しているのでは、力強い勢力たり得ないであろう。

無論マルクス主義文学論者の間にも、意見の相違はある。しかし我々の間のそれは、一つの共通の基本的体系を中軸としての活潑な論争であって、全体的に見る時にはすでに巨大な世界観的体系が確乎として形成されている事が動かせない事実なのだ。この体系は経済観念、政治観念、倫理観念、科学、哲学、宗教観、芸術、習慣、……等々に亙る複雑な、厖大な組織であり、それによってあらゆる社会現象ならびに自然現象を統一的に把握しようとしている。然るにこの体系に対して、形式主義者達は、単に文学論の範囲内だけで、部分的の勝利を得れば好いとしているらしい。しかもその範囲に於いてさえ体系的思想に達してはいない。彼等は基礎的なものの樹立を全く外にして、単に奇兵的効果のみを策しているに過ぎないのだ。たとえば

横光利一氏と犬養健氏とでは根本的な世界観、社会観、人生観、生活感情などを決して同じくしてはいない。然るにそうした根本的なものの一致へと努力する事はしないで、局部的な文芸上の問題についてだけ、意見の一致をはかろうとしている。この遣り方は議会に於けるブルジョワ政党連合の場合の小策に等しくはないか。そうした方便的なものには一時をしのぐ力しか無い。しかるに我々の議会は無限の会期を有するのだ。かかる議会にあってはそうした一部分的一致主義はあまりに無力であり、無意義である。

形式主義者達よ、卿等が単に文学論だけを製造しようとしている間は、決して我々に勝てないであろう。根幹的な世界観に対しては、別の根幹的な世界観を！　そしてそこから部分的な問題の解決を導いて来なければならぬのだ。少し落ちついて、それによって科学をも政治をも倫理をも組織し得る一つの世界観的体系にまで発展の可能な基礎的なものを持って来てほしい。でなければ、卿等の遣り方は、あたかも、米国と戦おうと云うのにフィリッピンだけを攻めて、得々たろうとするようなものではないか？　しかもそのフィリッピンだけをさえ陥すのに可能な組織的思想をもっていないに於ておや！

少し具体的な検討に這入ろう。

さきに挙げた犬養健氏の「形式主義文学論の修正」――この意見の根本はどう云うものであるかというと、横光利一氏が文学論の範囲から「有無をいわせず立ち退きを命じたところの『内容』の移転先、それからその身許調べについて補足」しようとした修正説なのである。犬養氏は「内容」の身許を調べ、その移転先を考えて、これを「人間活動」の範囲に於て取扱われるべきものと断じた。

「ある作家が人生のある出来事にある視点の角度を向ける。これが作品における『内容』の原型となる。しかるにこの原型をつかむ時には、彼はいまだ『作家活動』を行ってはいない。彼は社会人である。彼の行いつつあるのは『人間活動』である。」

つまり作家は作品を書き出した瞬間――「文字の羅列を開始」した瞬間から始めて「作家活動」に這入るのであって、それ以前の「内容の原型」に関する彼の努力はすべて特に作家としての活動ではない、故に作家が「内容主義者」たり得るのは、彼がまだ作家としての活動を開始しない「日常生活」に於いてだけであって、作家が作家たり始めるやいなや、彼は「形式の魅力のなかに、形式の支配のなかに身を投じ」何処までも「形式主義者」たらざるを得ない、と云うのである。犬養氏が特に「人間活動」と「作家活動」とを区分したのは、この区分によって作家のあらゆる内容的努力をすべて「人間活動」の範囲へと移管してしまい、その管轄内でならばいくらでもその努力に価値を認め、その努力に賛成してもいいが、しかしそれは結局「作家活動」にとっては管轄以外のものになるから芸術論

としては知った事ではないぞ、作品評に於ける点には這入らないぞ、芸術批評家は作品の「形式」についてだけ評価すれば好く、作家も作家たるためには「形式」についての関心を第一とすべし、と云いたかった為である。

しかしこの議論は、曽て永井荷風氏が自然主義文学論と闘った時の論法と全く同じものである。永井氏も犬養氏と同じように「思想結構！ 感想もまたよし」の態度を見せ、即ち内容的努力をも一ト先ず承認して内容主義者の矛先を避け、しかしそう云う努力はすべて作家でなくてもしなければならぬもので、社会人としての任務に属するから、故に作家が作家たるのは「技巧」に腐心する所にある、作家は「技巧」にこそ努力すべし、と云ったのだった。この技術尊重論は、最も素朴な間違っている内容主義論をしか相手にしていない。犬養氏の説といえどもこの程度の繰返しをしているに過ぎない事は甚だ遺憾である。

先ず我々の問題は、「人間活動」と「作家活動」とを以上のような意味で区分する事がこの場合妥当であるかどうか――がその一。よし両者を区分する事が必要であるとしても犬養氏や永井氏のいうような区分線が妥当であるかどうか――がその二。

この第二の点については形式主義者の中でさえその妥当性が疑われた。昨年十二月二十四日の東京朝日新聞に於ける池谷信三郎氏の「作家運動の範囲」がそれについて云っている。

「一人の人間が、創作的意識（もっと軽く、興味といってもよい）をもって、素材を眺めた時、そしてそこに『内面形式』を認識し、筆をとらんとする、その前の、一種の、単なる人間活動と違う色強い、創作的、内面的活動の起った時間においても、尚かつ人は『形式主義者』であってはいけないのか。」

もう少し引用すれば、

「ここに一つの素材がある。人々はそれぞれそれを無心に、あるいは関心をもって眺める。又一人の個人にしても、ある時は無心にある時は関心をもって。そしてもしその関心が、それを表現しようという意識のための関心であったならばその時既に、『彼は形式の魅力の中に、形式の支配のなかに身を投じている』のではないか」

これによっても犬養氏の区分線が妥当でない事が分る。然らば池谷説のようにその区分線を少し移動させさえすれば正しくなるであろうか？

所が、池谷説ではこの区分のくわだての最初の意義が失われてしまう事になるのだ。何故、犬養氏が「人間活動」と「作家活動」とを区分したかと云えば、「作家活動」の中から「内容」に関する活動を追い出してマルクス主義者の社会的見地からの鋭鋒をさける為であった。然るに区分線の移動によって、それが「作家活動」の範囲の中へ戻って来てしまい、追い出せないとなれば、そもそもの区分が無意義になる訳なのである。然るに池谷氏の云うような素

材に対する関心とは、すでに明かに内容的なものではないか。或る作家が一つの素材に対して「それを表現しようという意識のための関心」をもった時には、彼は決して素材と連絡のない、云わば形式一般とでも云うべきものの魅力の中にのみいるのではない。「それを表現しよう」とする「それ」に結びついた形式的魅力——即ち内容と形式との統一的連繫の上にある魅力の中にいるのである。こうなれば作家は「作家活動」の範囲に這入ってからも一面に於いて内容主義者たらざるを得ないと云う事になり、池谷氏の再修正は、犬養氏の立論の根本的ぶちこわしにしかならない事になるのだ。

つまり犬養氏の説は、「人間活動」と「作家活動」との区分線を氏が最初に引いた通りの地点に引いて置かなければ成り立たないのである。所がその地点に引く事が池谷氏の批評の通りに間違っているとすれば、そう云う区分をする事が、そもそも妥当でなかった事になるばかりである。即ち、さっきの第一の問題の答えも「否」である。

一体「人間活動」と「作家活動」とは全然直接的な縁のない場合か、全く縁があって一つになっている場合か、この二つの場合しかあり得ない。区分線の置きどころがない訳である。両者に直接的な関連のない場合とは、犬養氏が或る午後三時にお茶を飲んでおいしいと感じた事が全然「人間活動」に属して、作家的関心に触れていない事があるような場合である。斯く作家犬養氏の経験中にも「人間活動」の範囲内だけに属するもののある事は事実であるが、しかしそう云う始めから、又終りまで、「作家活動」と縁のない「人間活動」をとらえて、同氏が午前十時に「文字の羅列」にふけっている時の「作家活動」と区別して見た所で、今の問題としてはまるで無意義なのである。我々の問題とすべきは、そのお茶を飲んでおいしいと感じた事が作家的関心に触れて、「……おいしかった」と書こうとし、且つ書いた場合、「人間活動」と「作家活動」と前後に区分し得る境界があり得るか否かの点なのだ。しかしこの場合の「おいしかった」はすでにその最初から単なる「人間活動」でなく「作家活動」に外ならない。作家的関心をもってした「人間活動」はすべて「作家活動」に化する。もしこのお茶をのむ途中でちょっと咳をして苦しいと感じ、此の「人間活動」の方は作家的関心にのぼらなかったとするならば、この場合の「苦しい」は「おいしかった」と一連の「人間活動」としては連絡しているが、「作家活動」としての「おいしかった」とは連絡が無意味であり、縁がないものと云わなければならないのだ。

或はこう云う場合も多いかも知れぬ。先ず或る日に「おいしかった」と云う純「人間活動」をした。ところが数日後又は数月後に至って、曽ってのその経験が思いがけなく作家的関心に触れ来り、そこに「内容の原型」の形成、及び、それにつづく、「作家活動」が起ったとする。この場合は一連の経験中に於いて、「内容の原型」の形成及び

「作家活動」に属しない「人間活動」が先行している事になりはしないか？　しかしこの場合の最初の「おいしかった」は、自己の経験でも他人の経験でも好い関係のもので、その後に作家的関心に泛びあがった時の追憶、又は表象としての「おいしかった」が、初めて「内容の原型」の形成、乃至は「作家活動」の素材になっているのである。そしてこの素材と「内容の原型」の形成、乃至は「作家活動」との間には、やはり決して区分線が劃せない。且つ又この場合の素材以前の「おいしかった」と、素材としての「おいしかった」との間に区別を置いて見た所で仕方がないのである。何故なら、この場合、素材以前の「おいしかった」が素材の原因のように見えているが、しかし原因たるかぎりの「おいしかった」は作家的関心に染められて始めて現れて来たものであり、前者と直接的な因果関係がない。前者があれば必ず後者のように素材化された「おいしかった」が導かれてくると云うような関係がそこにはない。後者の中へ取り入れられた前者の影のようなものは、すでに単に前者を原因としたものではなく、「作家活動」の所産である。「作家活動」の所産としての「おいしかった」と「作家活動」以前の「おいしかった」とを滅茶苦茶に混同する事も、亦無意義に区別する事も避けなければならぬのだ。

この問題は、もっと基礎的に見れば、「素材」としての「おいしかった」と、「一般的芸術対象」としての「おいしかった」との区別に関している。あとで其の点へ這入りたい。

所でこの最後の例のような誤謬は、丁度、さきに引用した池谷氏の再修正説などが犯しているのである。池谷氏の説は「人間活動」と「作家活動」との間の区分線の移動説であったが、そして「表現しようという意識のための関心」を「作家活動」の範囲内に移したのであったが、しかしそれに先行して「人間活動」に属する何等かの活動を存在させようとしていたのである。しかし後の「作家活動」に直接的に連絡する活動で、そう呼ばれるべき部分があり得ようか。「素材を眺めた時」をどんなに最初へ遡っても「作家活動」に属していない瞬間はない。或は「作家活動」の原因になっていない全くよその世界としての日常生活の範囲へ飛び込んでしまうばかりである。池谷氏の諸説は、犬養氏の説の再修正として誤まっているばかりでなく、尙、それ自身の意見としても誤謬だったと云える。

かくして犬養氏も、もともと「作家活動」の中に属しているものを仮に「人間活動」の中へ居候させた形にし、さて両者を区別したと云い更に両者の連絡を考えようとしたのだった。犬養氏の説では「人間活動」に於ける努力――たとえば思想的努力――と、「作家活動」に於ける努力――詰り形式的努力――とが連絡させられている。併し之はもともと連絡し切っている一つの活動――作家活動――を名称の上だけで二つに区分して見せた手品から来た事に

過ぎなかったのである。池谷氏の讃辞によれば形式主義派の中でも一番「妥当な整理案」と云われた犬養氏の所説も、根本的誤りを犯している事が之で明かであろう。

更に基礎的な誤謬を指摘する段に進もう。

問題は「素材」と「一般的芸術対象」との間の正当な区別を形式主義者達が知らないという点に関してである。犬養氏について繰り返せばこの混乱は左の如き言葉に表われている。「ここに一つの文芸作品の素材がある。一人の作家、あるいは数人の作家が拾うと拾わぬとを問わずそれは存在する。これはいうところの材料だ。」

しかし素材もしくは、材料は、そう云う意味での自然的存在物であろうか？　この点についての誤解は、中河与一氏が最も明快に展開して見せていてくれるから、我々はそれについて検討して見る事にする。

昨年十一月二十二―四日の東京朝日新聞に於ける「形式主義文学の一端」に曰く、

「(一) 先ず素材がある。(二) 作者がそれに形式を付与する。(三) 内容とは、形式と素材とを通して第三者に触れてくるものである。

素材の選択は作者の方向を示し、形式は作者の能力を示し、内容は作者から切り離れて思惟の対照として社会に放散する。」

これが形式主義者の偉大な文学思想体系なのだ。十一月二十一日の読売新聞に於けるやはり同氏の「形式と内容とは対立しない」からも同様な文句を引いて見よう。

「吾々が筆を取ろうとする時、吾々は先ず素材を感じている。この素材に一つの飛躍――即ち形式を与える事によって作品が出来上る。」「芸術は内容と形式によって出来あがっているものではない。素材と形式によって出来あがっているのである。内容とは第三段に於いて、即ち作品が出来あがってから吾々に訴えてくる活動である。」

中河説の眼目は、作品が出来上る以前に――即ち作者が筆を執る前にも、執りつつある間にも――作者の表象のうちに「内容」なるものは存在する事はない、と云う点にある。もし其処に「内容」が存在すれば、その「内容」こそ「形式」の決定要因となるから、氏等の所謂形式主義――「形式が内容を決定する」――が成り立たないからである。しかし「内容」のかわりに何を置いたか？　即ち「素材」と呼ぶものを置いたのである。氏は「吾々は先ず素材を感じて」と云って「内容」を感ずるとは云わない。そしてこの「素材」を作者の「作家活動」の所産にあらず、作者がそれを「拾おうと拾わぬとを問わず」存在する所の自然的客観的存在物であると云う風に仮定したのだ。こうして置けば成程、「内容」とまぎらう事はないらしい。

しかし、然らばそう云う「作家活動」から独立して存在する自然的存在物なる「素材」が、如何なる過程を経て作品又は「形式」に到達出来るのであるか？　「形式」が出

来上る前には「素材」が単に「自然的存在物」として転がっているに過ぎないとすれば、その「自然的存在物」は、作者が「文字の羅列を開始した瞬間」にでも、突如として、しかし甚だ好都合に、自動的に一定の「形式」にまで姿を現してくれるのであるか？　無論そんな事はあり得ないからそこに何等かの「作家活動」があったとしなければならぬ。所がそこに「作家活動」があったとしては、先きにも云った通りに、文字を羅列すると云う形式主義的「作家活動」以前に、内容的なものの形成に関する内容主義的「作家活動」があった事になり、形式主義説が崩れてしまう。それをふせぐ為には、そう云う内容主義的「作家活動」を仮りに名前だけかえて「人間活動」だと云って見るより仕方がない。しかし若しそれが真に純粋に「人間活動」であったとしたら、その結果が作品——形式の成立——に導かれるとは極らなくなる。時折に作品——形式——が出来る事もある、と云う位の偶然事にそれが成ってしまう。

どうにも解決しようのない迷路の中にいる訳ではないか？　で、中河氏はこの困難を如何に解決したか？　甚だ簡単な方法によってである。「素材に一つの飛躍を与える事によって作品が出来上る」と、即ち中河氏自身が論理を飛躍してしまう事によって、満足してしまったのである。しかし眼をつぶって飛躍したとて、問題は実際的には解決されていない。一体、「素材に飛躍を与える」と云う活動は、「人間活動」に属するのか、それとも「作家活動」に属するのか？　問題は依然としている。そしてどっちに答えても形式主義文学説は成り立たないのである。論者自身がもう一度飛躍して、それはそのどっちでもなく中性的神秘活動である、とでも云ってしまわないかぎり！　我々が真面目であれば、少し戻って次のような二つの問題を究明して見る事から出直さなければならない。

(一)　一体「素材」とは、形式主義者達が不注意にも仮定しているように、「作家活動」から独立して存在する、それを作者が「拾おうと拾わぬとを問わず」存在するような自然的存在物であろうか？

(二)　作者が筆を執る前、又は執りつつある間に、即ち形式以前に、「内容」が存在しないと考える事は、妥当であろうか。

第一の問題から片づけよう。

芸術創作の対象となり得るものは、この宇宙間のあらゆる現象の総べてである。逆に云えば、この宇宙に於けるあらゆる物、人、観念、及びそれらの組み合せが、すべて芸術対象である。つまり芸術対象こそは、「一人の作家あるいは数人の作家が拾おうと拾わぬとを問わずそれは存在する。」しかしそう云う意味での芸術対象——現象が、その儘で或る作品の「素材」たる役割を演じ得ると考えては間違いである。一般的芸術対象——現象が、「素材」たる役割

を演じ得る為には、それがそれ相応な技術の発達によって獲得されていなければならぬのだ。「素材」は決して自然的存在物ではない。「作家活動」によっての所産である。芸術対象と素材とは是非とも区別して理解されなければならぬ。

何故なら、例えば空間に於ける「陰影」と云う現象は、視覚的な芸術対象であるが、そしてこの現象は或る一人の造形美術家もしくは数人の造形美術家が捉えようと捉えないとを問わず、恐らく人類が発生する以前から、自然界に存したものである。が、それにもかかわらずこの現象が絵画や彫刻の「素材」として役立ち始める為には、それを獲得する為の芸術的技術の発達が必要だったのである。「陰影」は紀元前第三、四世紀時代のギリシャにも存した筈であるが、しかし当時の画家や彫刻家の技術がそれを捉える所まで発達していなかったが為に、それはまだ造形芸術の素材とはならず、空間の中に死蔵されていた。ギリシャ彫刻のあらゆる名作やそれと同時代の絵画中に於ける物体が、ことごとく空気の無い空間に孤立している姿をとっているのはその為である。所がレンブラントの絵では「陰影」が漸く素材として獲得されている。それは油絵具と云う芸術用具の発明と、それに伴う技術の発達とによって初めて然るのである。しかしそれでもまだ「黒っぽい陰影」だけが素材になったばかりだ。「紫の陰影」や「緑色の陰影」などが素材になる為には、印象派画家に至っての技術的発達を要した。彫刻ではロダンの技術に至って始めて陰影が素材となったのである。以上のような技術の発達がなかったならば、陰影と云う現象も、其自身を造形芸術の素材にまで提供し得なかったであろう。素材としての陰影はどこまでも技術による「作家活動」の所産なのである。

尚この芸術対象と素材との区別と丁度同じだと云うことによって、一層理解が容易かも知れない。その「労働対象」と「原料」との区別については、マルクスが「資本論」の第一巻に於て次のように論じている。

「労働によって大地との直接の連絡から引き離されるにすぎざる総ての物は、自然的に存在する労働対象である。例えばその生活要素なる水から引き離され捕獲さるべき魚、処女林において伐採さるべき材木、鉱脈から割き取らるべき鉱石がそうである。それに反しもし労働対象が、それ自ら云わばすでにそれ以前の労働によって濾過されているならば、吾々はそれを原料と名づける。例えばすでに鉱脈から割き取られており、これから洗滌されようとしている鉱石がそうである。総ての原料は労働対象である。しかしあらゆる労働対象が原料なのではない。労働対象は、それが労働によって媒介されたる或る変化をすでに閲しているときにのみ、原料である。」(河上、宮川両氏訳)

形式主義者達のあらゆる身勝手な願望にも拘らず、素材は作家活動に於ける技術的濾過物であり、その堆積である

事が明かであろう。
従って先程の第二の問題も、亦おのずから、すでに解決された事になる。作家は文字の羅列を開始する以前に、素材の獲得に於いてすでに作家活動に身を投じている。そして左様にして獲得された素材が「内容」そのものなのである。――この場合の素材と内容との関係は、同一物を外延的に見たのと内延的に見たのとの差異に過ぎない。
卓上の林檎を例としよう。自然的現象としての林檎の存在は、芸術対象である。さてそれが素材として獲得された時の素材としての林檎は一定の技術的段階の触手によって把握された一定の物質的要素の組み合わせである。たとえばテーブル・クロースの緑色との対照関係に於ける色彩、テーブルの機構との力学的関係に於ける意味、空気中に醸されているほのかなる陰影、……等々。そう云う一定の、しかし十分に複雑な、物質関係の組み合せを、客観的存在として見ようとする時は、素材と呼ぶ。が、一方でそれと同じものを主観化の過程に於いて、作者の表象のうちに、観念的に獲得したものとして見ようとする時は、内容と呼ぶ。
右のような二者の関係は、イデオロギイ的芸術に於いて、初めから観念的なものを素材にしているような場合でも同じである。くわしくは説明の要があるまい。――かくして素材と云っても内容と云っても、その実体は作家活動の生産物であるから、やがて作家活動の発展するところ、そこに形式が――作品的実体が導かれてくる。形式以前に内容があり、その内容が形式を決定してくる関係がそこに把握される訳だ。しかも内容は、素材と云う名で云いあらわされた時、最初から技術的形式と相関関係にあった筈のものである事も理解されよう。マルクス主義者は形式と内容との相互影響の事実をも認めつつ、結局の決定的要因を内容だとするのである。
尤もここにちょっとした問題がある。作品以前の内容を、犬養健氏が「内容の原型」と名づけて、作品以後の読者が受けとるべき「内容」と区別している点についてである。中河与一氏の文に「内容とは第三段に於いて、即ち作品が出来上ってから吾々に訴えてくる活動である」とあったのも、「内容」についての解釈は同じである。池谷信三郎氏は「内容の原型」のかわりに、「内面形式」と云う横光利一氏から踏襲したテクニックを使った。横光利一氏は「文芸春秋」昨年十一月号に於ける「文芸時評」中で、内容とは結局、「客観物からなる形式が、読者に与える幻想である」と説いた。
しかし以上の諸氏が何故「内容」を「形式」以後のものとしてのみ解釈したがるのか？　それはそう解釈する事によって「内容」は「形式」以前には存在せず、「形式」によって決定されて現れてくるものであると説きたいからなのだ。しかしこの意見は、さきに論じたように「形式」以

前に属する「内容の原型」又は「内面形式」（池谷説）についての誤解の上に立っているのみならず、「形式」についての誤解からも導かれて来ていると云える。その第一の誤解者が横光利一氏である。

「文学の形式とは文字の羅列である。文字の羅列とは、文字そのものが容積を持った物体であるが故に、客観物の羅列である。」（文芸春秋、一九二八年十一月号）「芸術は六神丸と同様に物質である。」（文芸春秋、一九二九年一月号）

しかしそもそも文芸作品――「文字の羅列」を物質だと考える事は大変な間違いである。

文芸作品は、物と観念と人と云う三つの要素の組み合わせの上に成り立っている。先ず文芸作品は、紙の上にしるされた「文字の羅列」と云う物質的要素を示している。しかしそれらの物質的要素が、言葉の内容としての「観念」と結ばれず、純粋に「形式」として我々に与えられる場合だったら、我々は字だか絵だか分らないインキの線の集合を見るばかりである。そう云う「形式」そのものは、芸術として我々に作用して来るものでは決してないであろう。日本字を無意味な形式としてしか受け取る事の出来ない、日本語をしらない或るフランス人が、横光氏の「風呂と銀行」を眺めた所で、豊富な「幻想」は起らないに違いない。文字とは単に紙の上のインキの線であってはならない。大根や樹木が物質であると云う意味に於いての物質としての文字は、何等文字としての役割を発揮し得ていないない存在物である。文字が文字であり得る為には観念――内容――を現わしていなければならぬ。しかも文字が左様に観念――内容――を現わし得る為には、その文字に関して、一定の社会生活をいとなんでいる人々の組織がなければならぬ。この組織を離れては横光氏の文字の羅列が、僕やまた他の人々に作用し得ないのである。横光氏が珍重しているような「形式」物質説は全くとるに足りないと云える。

又今の場合の観念は、観念だからと云って、何も客観的存在をあやぶまれるような料物でも決してない。物質的要素に関するのと同じ確実さで我々に客観物として与えられるのである。個人々々が文字面を眺めて勝手に幻想した結果が観念なのではない。それは一定の社会的条件の下では、一定の質量として受け取らされるのだ。横光氏の見解のようでは、作家は作品の効果をあらかじめ意識的に支配し得ない事になってしまう。それならば何の為に形式の為に努力するのであるか？　あらゆる努力は無駄であろう。恐るべき作家的虚無思想ではないか。それはこの社会生活に於いて、社会的な組織の客観性を認め得ない所から来る不幸なのだ。

成程、作品の実際的効果が、最初の作者の意図を裏切る場合もある。しかしこの場合は、作者の側か、読者の側か、どっちかに必要な、あらかじめ約束させられなければならぬ条件――社会的客観的規約が、五十パーセント以下

にしか果されていなかった為の失敗なのである。我々の表象に於ける「内容」を読者の観念中に百パーセントに伝え得ないような表現形式があった場合、我々はもっと完全な表現形式へと向って努力して行けばよいので、その為におじけて「予定的内容」を無かった事にして一人で安心しようとしても、「予定的内容」が適当な表現を見出さなかったと言う事実からは逃げられない。雷鳴の時に耳をふさいでも、雷鳴をとめ得た訳ではないのと同じである。第一、芸術に於いては形式のある所、必ず内容的側面の存する事実はいかんともし難い。古代土器のジグザグ模様にさえ内容的側面が認められる。作家が自分の脳中に於ける内容と、読者がうけとるべき内容との百パーセントの一致を目ざして、努力したとしたら、それは賞むべき事ではないか？

尚、諸氏が「内容の原型」と云い「内面形式」などと云いながら、結局その言葉によって「形式」以前に於ける内容の存在を認めつつあるのならば、諸氏の態度は少し名義に拘泥し過ぎているると思う。それこそ余りに形式主義的である。（一九二九・一・一二）

（一九二九年二月「新潮」）

政治的価値と芸術的価値

マルクス主義的文学理論の再吟味

平林初之輔

一

コペルニクスは地動説をとなえたが、それを統一的理論によって説明するためにはニュウトンをまたねばならなかった。ところが今日の小学生は万有引力の公式を知っている。だからコペルニクスよりも二十世紀の小学生の方がすぐれている！

石造建築は木造建築よりも進んだ建築である。某々洋食店は石造建築である。法隆寺は木造建築である。だから、某々洋食店の建築は法隆寺の建築よりもすぐれている！

これ等の論理には矛盾がない。だがこの論理からひき出された判断は、必らずしも私たちを首肯せしめない。その理由は説明するまでもなく、誰でもちょっと考えて見ればわかることである。

ところが、次のような命題にぶつかると問題はそれ程簡

単ではない。
ダンテの作品にはプロレタリア的イデオロギイが含まれていない。シンクレアの作品はプロレタリア的イデオロギイに貫かれている。だから、ダンテの作品は、芸術的にシンクレアの作品よりも劣っている!
もしダンテがあまりに古すぎるなら、これをトルストイとおきかえても、ユウゴオとおきかえてもストリンドベルヒとおきかえてもよい。
然り! と或る人はこれに賛成して、答えるであろう。芸術作品の価値は、その作品のもつイデオロギイによって決定される。プロレタリアの勝利のために利益をもたらすものにのみ芸術作品の価値がある!
否! とある人は答えるであろう。イデオロギイは芸術作品の全価値を決定する要素ではない。そしてプロレタリアの勝利のために、貢献するということは、芸術本来の性質とは没交渉である!
この二つの見方は、最近マルクス主義文学理論と正統派文学理論とを尖鋭に対立させたのみでなく、マルクス主義文学理論の陣営内に於ても意見の分裂を生ぜしめている問題の焦点である。他の芸術の場合はしばらくおいて、芸術作品の評価基準についての最近の諸議論は、悉くこの問題を中心としてまき起されているように思われる。
かような簡単な問題が、どうして、それ程多くの議論を生むに至ったかは、多くの人々には全く不思議に思われるであろうが、それにも拘らずこれは事実なのである。
私は、この不思議は、マルクス主義作家若しくは批評家は、彼がマルクス主義者であると同時に作家であり批評家であるという二重性のために存するのだと考える。マルクス主義者が文学作品を評価する基準は、あくまでも政治的、教育的の基準であり、作家若しくは批評家が文学作品を評価する基準は、芸術的基準である。この二つの基準を調節し、統一しようとする試みに於て、マルクス主義批評家若しくは作家の、新しい努力が生れ、そこにさまざまな意見の分裂が生れたのである。大衆文学の問題の如きもその一つのあらわれに過ぎない。
マルクス主義は、単なる政治学説でも、経済学説でもなくて一の世界観である。若しそういう言葉を用いてもよいならば一の哲学である。それは、人間界の凡ゆる現象に対して、統一的な解釈、「見方」をもつべきものであることは無論である。だが、この「もつべきものである」ということは、現実に、完成された姿でそれを現在もっているということとはちがう。マルクス主義者の任務は、一の完成された法典を与えられて、凡ての事象を、それに照らして判断してゆく司法官の任務とは全く異って、この法典を日常の闘争を通じて自らつくってゆくことであるのである。文芸作品の評価というような問題については、無論私たちはまだ「原理はもうできあがった。あとはその応用のみである」という風な完全な法典を与えられておらぬし、また

未来永劫そういうものの与えられる気遣いはないであろう。それは単に、すぐれたマルクス主義者には、もっとほかに重大な仕事があるからという理由からばかりではなくて、問題の性質上与えられ得ないのである。

ところが、ここに一群の人々がある。それ等の人々は、この政治的価値と芸術的価値とは二つの直線のように、全く重ね合わせることができると考えるのである。勝本清一郎氏はそれを「社会的価値」という名前で呼んでいる。そして社会的価値は同時に芸術的価値であり、社会的価値のほかに芸術的価値ありと思うのは一の迷妄であるとして、芸術的価値というものを全く解消してしまった。蔵原惟人氏も、この一元観に関する限りに於いては勝本氏と同意見であるように思われた。

註 勝本氏の三田文学に於ける、及び蔵原氏の朝日新聞に於ける論文をさすのであるが、いまそれを参照しているひまがないので、私の読みまちがいであったら、両氏にお詫びする次第であるが、私のこの論文は両氏の議論と独立によまれても些しも理解を妨げるものでない。

マルクス主義は一の世界観であるけれども、最もさしせまった目的としては、組織されたプロレタリアによるブルジョア政権の奪取という政治の一点に、プロレタリアの凡ての力が集中されることを要求する。だから文学、芸術もこの政治的目的を達するための手段とされねばならぬのである。文学作品は、この視角から見たとき、直接間接の宣伝もしくは煽動の手段としてしか意味がない。これは、政治的に全く正しい解釈である。だから、マルクス主義政党の芸術に関するプログラムに於て、芸術作品の価値は、それがプロレタリアの勝利に貢献する程度の大小によって評価されねばならぬと規定されることは甚だ当然である。そして、党は、党員たる作家や批評家に、その趣旨を伝達し、また命令することも当然である。芸術は手段ではないとか、文学は宣伝の道具ではないとかいうことを、芸術や文学の立場から絶叫したって無益である。プロレタリアの解放、勝利ということが絶対だからである。

マルクス主義批評家にとっての作品評価の根本規準は、それ故に純然たる政治的規準である。マルクス主義作家及び批評家はまずこの規準を認めなければならない。彼がどんなにすぐれた批評家であっても、この根本規準を拒絶する刹那に、彼はマルクス主義作家でも批評家でもなくなる。何となれば、彼は芸術家であり、批評家である以前にマルクス主義者でなければならぬからである。芸術的価値は、彼にとっては政治的必要に従属せしめられねばならぬからである。

実際の作品、たとえばチエホフの作品を例にとろう。チエホフがすぐれた作家であったことは、ほとんど異論のない事実である。だが、彼の作品は、革命の擁護という政治的必要からは、好ましからぬ作品であるかも知れぬ。若し

そうである場合には、彼の劇がマルクス主義批評家によって手厳しく非難され、その上演がプロレタリア国家権力によりて禁止されることはあり得る。そしてこの禁止は、政治的に全く正当である。だが、この政治的形勢の変化によりて、国家権力の命令や、政党の決議によって、チエホフの作品の芸術的価値が、一夜のうちに消えてなくなってしまうであろうか？

否！　と私は答える。また誰だってそう答えざるを得ないと私は考える。チエホフの作品でなしに、たとえば、ボオドレエル若しくはエドガア・アラン・ポオの作品を例にとろう。これ等の人々の作品は、プロレタリアの勝利に貢献するような何物をももっていないことは誰しも異存のないところである。それどころか、これ等の人々の作品には、一般に人類の幸福をおしすすめる拍車となるようなものすら何一つ見当らぬ。それにも拘らず、これ等の作家は、芸術的に何等価値のない作家であるといわれるだろうか？　これ等の作家によりて描かれた頽廃性、不健康性は、プロレタリアの闘争のためには無論のこと、一般に人類の向上進歩のためにする反効果をもつものであるのに、私たちが、それ等の作品に、多かれ少なかれ芸術的価値を認めているのは何故であろうか？

ここに一元論をもっては解釈しがたい謎がある。

性急な読者は、私がここで、文芸作品の政治的価値を否定、若しくは減弱しようとする意図を抱いているためにこういう議論をするのだと考えるかも知れない。ところが、私の意図はその反対である。私は文学作品の政治的価値を正しく認識するために、そしてその重要性を立証するために、先ずこれを芸術的価値から引きはなすのである。若しこれを一しょくたにして「社会的価値」という風呂敷の中にひっくるめてしまうことができるならば、プロレタリア文学とかマルクス主義文学とかいうものの特殊性は消滅してしまわねばならぬ。

プロレタリア文学若しくはその別名或はその一部分としてのマルクス主義文学は、政治的規定を与えられた文学である。政治のヘゲモニーのもとにたつ文学である。この事実はあいまいにごまかしたり、糊塗したりしてはならない。芸術や文学から出発して、マルクス主義文学、プロレタリア文学を合理化しようとする企図はきれいさっぱりと拋棄されねばならぬ。マルクス主義は芸術や文学を社会の現象として解釈することはできるが、芸術や文学はマルクス主義から命令され規定されて、政治的闘争の用具となる約束を少しももっていないからである。プロレタリア文学若しくはマルクス主義文学のみがそれをもっているに過ぎないのである。プロレタリア文学は芸術の立場ではなくて政治の立場から、文学論からではなくて政治論から出発してのみ合理化されるのである。

この関係は、ルナチャルスキイの場合ですら、粉飾され、婉曲に言いあらわされ過ぎていると私は思うのである

が、若し、この関係が明白になれば、プロレタリア文学の存在理由が少しでも薄弱になると思うなら、それは甚だしい誤解である。というのは非常に簡単な理由からである。即ち、私たちは、階級と階級とが、抑圧者と被抑圧者という形で対立している社会をそのままにしておいて文学をたのしむよりも、一時文学そのものの発達には、多少の障碍となっても、階級対立を絶滅することを欲するからである。他の一切を犠牲にしても、切迫した政治的必要を満すことを欲するからである。このことはブルジョア文学の発生の場合にも完全にあてはまる。ブルジョア階級が、その覇権へむかって進出したときの行進曲として、政治的文学をもったこと、そしてブルジョア革命のまっ最中には、歴史的に見れば一時文学の衰頽期を現出したこと等が、それを語っている。ブルジョア文学は、愛と平和との中に、静かな朗らかなクラリオネットの音に発育したものと思うのは大間違いで、血と闘いとの中から戦いとられたものである。

そして勃興期のブルジョア階級によって、血によって戦いとられた文学が、国民文学として、成熟期のブルジョア階級の手で、まるで、平和と愛のシムボルのように祭られているのである。ゲエテ、シルレル、ユウゴオ等々がそれである。勃興期のブルジョアジーは、一つの階級でなくて人類を代表していた。その故にこの時期の文学は人類の文学となり、国民の文学となり得たのである。というのはプロレタリアが、階級としてはっきりと対立して来たのは、そしてブルジョアジーがその階級的性質を露骨に示して来たのは、それ以後の出来事だったのだからである。この意味に於いて、勃興期のブルジョア文学は、ブルジョアジーによりも寧ろより多くプロレタリアに属している。（メーリングのレッシング論はこの点で私の主張を裏づけるであろう。）序でに一言しておけば、日本の国民は国民的クラシックの名に値いするような作品をもっておらぬ。紅葉、露伴、逍遥、蘆花、漱石、独歩――これ等の作家のうちで、これこそ近代日本を代表する作家であるといえる人はない。それは偶然日本に天才的作家が現われなかったことにもよるであろうが、いま一つは、日本のブルジョアジーが十分革命的階級としての闘争を経過しないで、封建的勢力と妥協して、その庇護のもとに発達して来たからである。

二

プロレタリアの勝利のために貢献するということが、マルクス主義文学の評価の基礎とならねばならぬことは上述の説明によって明かになったと思うが、マルクス主義文学も、文学である以上それだけでは不十分である。共産党宣言が最もすぐれた芸術品であるとは言えないからである。

そこでこの根本原理に附随する、さまざまな小さい原理

が必要になって来る。たとえば、文学作品はただある政党の綱領を解説するようなものではなくて、新しい何物かを創造していなければならぬとか、或は、或る観念を露骨にあらわした作品はよくない作品であるとかいう種類の小さい原理がそれである。これ等の諸原理はマルクス主義にも、政治にも関係のない、一般に芸術そのもの、若しくは文学そのものに関する原理である。ここに於いてルナチャルスキイのテーゼは、そして一般にマルクス主義的文学の理論体系は、かくの如く二つの部分――政治的部分と芸術的部分とから成立しているのであることがわかる。しかもこの二つの部分はいい加減につきまぜてあるのではなくて、政治的部分が絶対上位に立ち芸術的部分は下位にたつという風に結合されているのである。この結合のしかたをかえることはマルクス主義文学の名に於いては許されないのである。

　このことは多くの実際問題に関連している。たとえば、政治的原理と芸術的原理とを同じ平面に並べて、双方に同じ価値をもたせようと企てるとき、そこに折衷的理論が生れる。ある作家の或る作品は、闘争的精神も、階級的イデオロギイも稀薄であるが、芸術品としては立派な作品であることがあり得る。だがこの場合、如何なる芸術的な価値をもってしても、マルクス主義文学である限り、闘争的精神の欠如の埋め合せにはならぬであろう。第一義的な根本的なものを欠いている限り、それはマルクス主義文学の作品としては低く評価されねばならぬであろう。

　又或るマルクス主義者、たとえばトロッキーが、政治的には全く価値のない詩をつくったとする。河上肇博士が、花か虫かを見て政治と没交渉な俳句を一句詠んだとする。この場合、トロッキーや河上博士がマルクス主義者であるがために、それ等の人の作品が、すべてマルクス主義文学の作品であると考えるのは全くあやまっている。況んや、或る作家が、マルクス主義的芸術団体に加盟したら、その作者の前日までの作品はすべてブルジョア文学作品であったのが、その翌日からとんぼ返りして、悉くマルクス主義的文学作品になるなどと考えるのは全く子供らしい考えかたである。マルクス主義の立場からする文学批評は、常に、先ず政治的見地からされねばならぬであろう。この意味に於いて政治的意識の弛緩は、マルクス主義文学作家にとっては致命的である。「イデオロギイはあやふやになったけれども、技巧に於いてはすぐれて来た」というような評語は、マルクス主義作家にとっては少しも名誉ではない。それは一の芸術家としては、その作家が前進したことを意味するけれども、マルクス主義者としては後退したことを意味するからである。

　だが問題はそれだけでつきるのではない。以上はマルクス主義作品に対するマルクス主義批評の関係について言ったのであるが、マルクス主義批評は、マルクス主義作品ではない。広く一般の文芸作品に対してどんな態度をとるべ

きであるか？

厳密に言えば、非マルクス主義作品の政治的価値は、マルクス主義的評価によれば零であり、反マルクス主義作品の価値は負になるわけである。たとえば「古池や蛙とびこむ水の音」という芭蕉の句はマルクス主義的評価によれば、価値は零であると見なさねばならぬ。然るにすべての作家はマルクス主義者であるとは限らないのであり、マルクス主義の何たるかを全く解しない作家が沢山ある。

この場合、マルクス主義批評家は、厳密にその機能をはたそうと思えば、これ等の作品に対する評価をさし控えねばならぬ。そして厳密には批評家という立場をすてて、分析者としての立場にたたねばならぬ。プレハノフやレーニンの「トルストイ」評には、多分に（全くではないが）分析者としての姿が現われている。若しこの場合に、政治的な尺度をすててしまって、ただの表現や形式の批評だけをするならば、その時、この批評家はマルクス主義的批評をしているのではなくて、ただの文芸批評をしているわけである。

更に一層進んで、反マルクス主義的思想を強くあらわした作品に対しては、マルクス主義批評家は、ただその作品にあらわされた思想と戦い、その誤謬を指摘し、克服することに全力をつくさねばならない。そしてそれ以外のことに関心する必要は少しもない。もしかかる反マルクス主義的作品の美に心ひかれ、その芸術的完成に恍惚とするのあまり、それを賞揚するなら、マルクス主義者はそこに退場して、ただの文芸批評家と交替したと解釈しなければならぬ。

私の説明はあまりに機械的であり、非実際的であったことを私は知っている。だが、それは、私が原則的な理論を説明したのだからに外ならぬ。原則を説明する場合には、最も典型的な、従って最も極端な実例をあげるのが理解に最も都合がよいのだ。

最後に私は、私自身の、所謂「懐疑的」立場を便利上逐条的に明かにして大方の教えを乞うことにしよう。特に私の最も尊敬する蔵原惟人、勝本清一郎の両氏に私は教えを乞いたいのだ。

先ず第一に私は現在のマルクス主義文学理論に対して懐疑的態度をとっているという事を告白しておく。（だが念のためことわっておくが、私は何から何まで真理を疑いたがるスケプチックではないのである。懐疑家という言葉が、スケプチックの訳語になっているので、誤解されることを恐れてこのことを一言しておくのである。）

第二に、私はマルクス主義の一般理論に対しては、私の知るかぎりでは（それは非常に狭いのであるが）懐疑的態度をとっているわけではない。私は、マルクス主義と文学作品の評価との問題に対して懐疑的態度をとっているのである。ここでも私は一言しておきたい。というのはかような新しい、未解決な問題に対して疑いをもつことは一般に

理論家にとって已むを得ないことであり、それは悪いことではなくて、却って望ましいことであり、反対にあまりにはやく不完全なオーソドックスを定立することこそ避くべきことであると私は思うのだ。

第三に私は前に長々しく述べきたった政治的価値と芸術的価値との二元論を脱することができない。尤もここでもことわっておかねばならぬことは、「芸術的価値」という言葉であるが、これを私は神秘的な、先験的なものだとは解してはいない。それは社会的に決定されるものだと信じている。ただマルクス主義イデオロギイや、政治闘争と直接の関係をもたぬと信ずるまでである。

第四に、それにも拘わらず、私は文芸作品を批評するにあたって、私の解釈するような意味の純然たる政治的評価にのみたよるわけにはゆかない。このことはマルクス主義の一般的理論の真実性を認めた上でのことである。マルクス主義の真実性を認めながら、私は非マルクス主義作品のもつ魅力にも打たれる。そしてその魅力に打たれる以上はそれをありのままに告白するより外はない。この点が最も重要なのであるが、若し私の言ったことが真実であるならば、政治的価値と芸術的価値とは遂に「調和」し得ないと私は信ずるのである。両者を統一する芸術理論はあり得ないと信ずるのである。マルクス主義文学理論は両者の統一ではなくて、政治的価値に芸術的価値を従属せしめ、これをそのヘゲモニーのもとにおかんとするものである。両者は力で、権威で結合せしめられるのである。

若しそうであるならば、私は、現在のマルクス主義芸術理論は、一つの政策論であり、政治的であって、芸術論と名づくべきものではないと信ずる。だから、幾分寄木細工的な感ある現在のマルクス主義芸術論を解体して、政治的部分と芸術的部分とに還元しこれを明白に規定しなおす必要があると思うのである。もしマルクス主義芸術論が、完全な芸術論であるならば、ファシズム芸術論も、インピリアリズム芸術論も同じ権利をもって可能なわけである。久野豊彦氏が、マルクスの代りに、ダグラスをひっぱり出して来たことも亦当然認められねばならぬ。そして芸術の評価は、芸術と関係の少い、千差万差の尺度をもって行われねばならないことになる。だが、芸術評価の尺度が観音様の手のように沢山あるということは、芸術作品の評価が不可能だということとかわりがない。

これに反して、マルクス主義者は、政治的尺度によりて芸術作品の対社会、対大衆的効果を評価するものであるとすれば、この問題は至極簡単明瞭に解ける。これは政策論である。だが、人類の幸福のための政策論を、芸術の名によって拒むことはできない。

これを要するに、マルクス主義芸術運動は、芸術に関する定義の塗りかえや、芸術的価値と政治的価値との機械的結合によりて行われるわけには決してゆかない。それは飽くまでも政治のヘゲモニーのもとに行われる運動である。

この関係は政治と芸術との弁証法的統一というようなあいまいな言葉で説明してうっちゃっておくべきものではない。先ず一応両者を区別し、それを当然そうであるべき関係におかねばならぬ。

従って、マルクス主義文学は――少なくもプロレタリアの勝利のために貢献するという意味に於けるマルクス主義文学は――一定の時期において、その特殊性を自然に失ってしまうべきものであることは自然の理である。そのためにマルクス主義文学の価値が減弱するものでないことは、もう一度繰り返していうが、勿論であるけれど。

この問題について「祖国」三月号の拙論を併読されることを読者に希望する。

(一九二九年三月「新潮」)

作品に於ける左翼社会民主主義の暴露

昭和四年一月号新潮所載――平林たい子作

窪川鶴次郎

「労農」一派と日本共産党との対立が最も尖鋭な形に於て表現されている今日、この小説は我々の注目に値するところのものである。

この小説は、議会解散請願運動が取り扱われているところを見れば、恐らく一九二七年(昭和二年)初頭の日本に於ける労働運動から取材したものであろう。当時は未だ今日の如く山川均一派が「労農」一派としても、また左翼社会民主主義者としても、その意識的計画的なグループを形成するまでに至って居なかった。単に、福本氏の理論を指導理論とする左翼陣営から所謂折衷主義として排撃されていたところの、少数の同感者を持つ一片の理論としての存在に過ぎなかった。

作者は、かような、左翼と対立させるには余りに影の薄い従って力の弱いその意図の無意識的な当時の山川一派の理論に、漸く共鳴を持ち始めた人物をして、作品中に生起する現象に対して、今日彼等社会民主主義者の得意とする悪どい計画的な観察を、実に用意周到にデリケートになさしめている。

我々の注目に値する根拠は、実に此処にあるのである。何となれば右に述べたような理論の共鳴者である作中人物の態度は、その主観的な、何ものか正しき道を求めんとするかの如き情緒のヴェールを以て蔽われているからである。即ち作品中の男は、山川氏の当時に於ける理論の姿の如く、如何にも弱々しく、年上の女にでも可愛がられてる男のようだ。

これに反して、男の理論の尻馬に乗った女の毒々しい微

細に亘った観察眼は、今日の左翼社会民主主義者の欺瞞策に通ずるものである。

先ず作品中に於ける男の稀薄な存在を見よ。

「どうしても観念論の様な気がするんだが……」

（一）に於ては、男は先ず、研究会のテキストになっている福本氏のある理論に対して、この程度の疑惑を招いていることが書いてある。

（二）に於ては、

「おくれて発達しつつも、今や世界資本主義の没落に合流せる我国資本主義は最後の断末魔として……」

男は請願運動のビラを読む。果して日本の資本主義は没落に瀕しているのであろうか、それを証明する統計はまだどこからも示されたことがない。これは研究会でも論争の中心になったのであるが、皆、誰も一様に具体的な事実をあげ得ずに抽象的な事を言い合ったに過ぎない。——作者は男自身にも福本主義が分らないことを説明している。

それからこのビラを撒きに出かける時、前述のビラの文句に対してチッと舌打ちをして彼は言うのだ。

「このビラの意味が、そこいらの商人や会社員にわかるだろうか」（傍点は筆者）

然しこれは客観的にはビラ作成に対する研究に過ぎないのであって、決して福本主義とは結びつかない。（尚この場合男の言葉が労働者を第一の念頭に置いて居なかったことは、平林氏の千慮の一失なりや。）

さて諸君！ 請願デーは、警官の人数の方が多かった。まるで大衆と離れた所で、小人数が固っていい気になっているんだからねえ——と帰って来て風邪で寝ている女の枕元に報告することによって、彼は次のように決心するのである。

「一時のジャーナリズムを信じて山川氏の論文などは碌々読みもせずに折衷主義だとか何だとか片附けておいたのは怠慢だった。これからは、ただ批判的になって消極主義を取っているだけでなしに、積極的にどんどんこちらの主張をとおしてやるぞ！」

それから女と手に手を取らんばかりに、

「私達二人は、どんな障害があっても、この極左翼的傾向とたたかって行くことを」誓い合ったのである。

ところが福本主義はどうも観念的だと分ってるだけで、一体この男はどんな主張を押し通そうというのだろう。それから極左翼とは何を指すのか。この作品の何処にもそんなものは示されていない。福本主義は共産党を脱落してしまった山川均と同じく解党派たる点では同じだったではないか。また請願運動のことなら、当時「大衆はわが国の指導力をはるかに乗り越えて前方に進んで行った」のではないか。

以上が非幹部派たる所以の全部なのであるが、これでは非幹部派の非幹部派たる所以は具体的に何処にも示されていない。

この男の存在が、影の薄いこと宜なるかなである。
そこでこの男に配するにこの目付役の女が必要なのである。私は紙数に制限があるし、やり出したら切りがないから、この女のこの小説中に於ける役割に就いては三四の例を挙げて説明するに止めよう。

この女は非常に男を愛している。信頼している。その限りに於ては少しも構わない。その点では、事実この作品はエフェクティヴである。然しその故にこそ、女は男の懐疑を胸に抱いて、反幹部派としての男をいたわっている。そうして勿論崇拝している。作者はこの懐疑を指して、それは確りしているからだ、労働者だからだと説かんばかりの筆法を使っているが、彼はすでにインテリゲントになりおうせ、それ特有の懐疑的情緒の持主であるのだ。次はその一例である。

「こうなればこうなって、そしてこうなって行くという確信がつかない間は、俺は一寸も体を動かせない。とつねづね口癖にしている彼のこの頃の煩悶がよくわかる。それは私の煩悶でもあった。だがしかし、左翼といわれる人々は、皆、何の疑問も持たずにどんどん行動している。それは動揺する自分たちの誤りであるか？」（傍点筆者）

疑問は誰にもある。ただ無為の煩悶と行動とによって決定的に二つの方向を取る。

この男に対する女のいたわり、崇拝は、何を生み出しているか。

「坐っていると誰よりも膝の高い石田が、立つと、学生たちの耳のあたりしか背がなかった。鉄工所の労働で腰が据っている姿勢で両肩が、硬ばった労働服の中で厚い肉をのせて垂れていた。それが殺気立った感であった。」

「労働を知らない学生たちは葱の様に伸びた背丈を持っていた。石田と並ぶと、それは折れそうに高く感じられる。薄い胸にぴったり密着した制服を着ていた」

「センテンスが長い代りにてにをはを省いて棒を沢山使った福本の文章は厝で、暗誦してみると格子の様な素っ気なさがあった。それは学生たちの弱い心臓には合っても、労働者である石田の圧力の強い心臓には何か足りなかった」

「……今川という女が、二人の制服に腕を捕えられて大股に歩いて来る。……彼女は顔から胸のあたりにその視線を受けとめる様にして、ことさらに乳の大きい胸を突出して歩く。この女の日常のヒロイックな行動を知っている私は唾が苦くなって来た様な気持になって石の上にペッと吐いた」

「『議長！』『はい』と勿体ぶって今川が答える」

「そして発言者の言葉が終らないうちに白い肥った、大根の様な腕を上げた」

（読者諸君！　以上の例のうち最後の三つは、女同志一つ留置場に入っている光景であることに注意せよ）

以上の例に於て見る如く、女に取って運動は彼女の排外主義の表現に過ぎないことを、簡単にはっきりと諒解することが出来る。彼女は自分と男に味方しない一切のものに対して排撃の牙を向く。この排外主義は更に女の心のうちに卑屈な陰影を陰花植物の如く育てる。

「あら、このお金は？」

私は手を伸ばして指の先で拾った。日本紙の様にただれた、久しく見た事のない十円紙幣である。

「う」と、

彼は生返事をして、口を開てそこにあった刷物を読んでいる。

「ねえ、このお金は」

私は浅ましく甲高い声で言った。

彼は義務的に刷物から目を離して私の顔を見た。そして私の手にある紙幣に視線が及ぶと、いきなり倒れる屏風の様に膝を曲げた上半身で一尺も畳を隔てている私に飛びかかって来た。

「あっ、そりゃいけないんだよ」

私は倒されながら反射的に、紙幣を握った手を腹の下へ入れた。伸びた顎髯が硬いブラシの様に私の頬をこすった。彼のうろたえ方を見ると、何かあると思った。

掌の紙幣を四本の指で握り、拇指に力を入れて押えて、その上に突伏して動かなかった。二十銭の電車賃にもこまり、米は一二升ずつ新聞包みで買って来る私達に、十円は大金である。

「ねえ、一寸話があるんだよ」

彼は下唇を歪めて、弱身を示すように笑って言った。

私は、自分が浅ましくなって、しめった紙幣をそこの畳に投げ出した。

それから男は病父から送ってくれと頼んで来た（そのことは女も知っているのだ）その金を、女に相談しないで借りて来たことを、狼狽してあやまるのである。なるほど十円はたしかに大金である。然し男はなぜそれを弱身と思い、女はそれをあさましいと感じなければならぬのか。金に対するこのギコチない了解に苦しむ二人の態度は、小説的に言っても一篇のうち失敗しているところであり、女の排外主義の集中的表現である。

僕は平林たい子氏に借問する。あなたは個人主義は大嫌いな筈で、またあなたはプロレタリアはいかなる場合にも自己欺瞞に陥ってはならないと信じていられる筈であった。

あなたはこの小説の中の「私」に御賛成でしょうか。

排外主義の止まり木の上の猿は、自己欺瞞の鉄鎖に繋がれて永遠に客に向って牙を向けることをやめぬであろう。

然し僕は人妻が往々我々に示すあの排他主義の領域にまでは、この小論では決して踏み込まない積りである。即ち「何等能力の無いくせに、恰も他人以上に生活能力を持っているかのような様子をして現れ来る人妻――彼等が示

す、あの排他的な、あの個人崇拝的な、あの——要するに盲目的な野蛮な態度」（文芸春秋昭和三年十二月号所載石浜金作「無駄な入獄」参照）その態度を、この小論に於て指摘する意志は毛頭ないのである。

要するに、この作品中に於ける男の態度をアイマイなものにして、これをダシに使い作者は作品中の女をして微に入り細に亘るデマゴギーの限りを尽す役目をさせるのが、この女に対する隠された意図である。

結論はこうだ。

福本主義の指導理論を実践に於てすでに克服し、日本××××其が政策とスローガンを公然と大衆の前にかかげ強力なる労働者農民の支持を一身に集めて今日の如き飛躍的な進展を見つつあるに対し、未練にも過ぎ去りし福本氏の誤謬を取り上げて今日の左翼に押しつけ、当時福本氏に反対したというただ一つの理由により、己れの誤謬を巧に芸術的に正当化することによって必然に彼等左翼社会民主主義者の今日をも正当化して見せよう——ここに此の小説の意義があるのだ。

（作品中に現れる新聞争議の問題に就いては、「戦旗」十二月号に山部繁夫氏が文戦の岩藤氏に対して一矢酬いているからここには避けた。また政党合同問題は当時のことを詳しく書いて、そのデマゴギーの本質をあばきたいのだが、長くなるからそれも止めにした）（一九二八・一一・一〇）

（一九二九年三月「戦旗」）

平林初之輔氏の所論その他

川口浩

一 平林氏の所論

芸術作品の持つ価値がいかなる性質のものであるかということに関して、昨年以来、多くの批評家等の間に種々の論議が闘わされているときの事である。新潮三月号所載の平林初之輔氏『政治的価値と芸術的価値——マルクス主義文学理論の再吟味』を読むと、その討論参加者は主として同氏及び勝本氏、並びに我が陣営内部では同志蔵原、問題の焦点は、芸術作品の価値とは社会的乃至政治的価値以外の何物でもないか、或はそれ以外は芸術的価値という特殊な価値が存在するかどうかという所にあるらしい。

この問題は原則的には既には一応解決されている問題である。少くとも我々の陣営内部では、芸術作品の価値とは何であるかということに関して、平林氏の如き原則的疑惑

を抱く者はないだろう。芸術作品の持つ価値とは社会的乃至階級的価値以外の何物でもない、所謂『芸術的価値』なるものが独立的に存在するかの如く考えることは誤謬であり、幻想であると。そして、同志蔵原は正当にも、『芸術的価値』という用語法の曖昧さ――我が多くの批評家が『芸術的価値』なる言葉の中に、『その芸術作品の持つ社会的な価値とその作品の芸術性とを混合している』こと――を指摘し、その代りに『芸術性』なる言葉を用い『芸術作品が芸術性を持たなければならないということは、あたかも科学が科学性を持たなければならないということと、同様に、自明なことである。何となれば作品が芸術性を持っていなかったならば、それはまず第一に芸術であることをやめるから。しかし芸術性は、あくまでも芸術性であって、それはそれ自身では価値でも何でもない。それは価値以前である。それは芸術作品を芸術作品たらしめる先行条件ではある。だがある作品が芸術性をもっているということは、それだけではその作品が、価値を持っているということを意味しはしない』と述べている。で、我々にとっては芸術作品の価値を社会的乃至階級的価値と解して何の疑惑も不思議もない。強いて『芸術的価値』なる言葉を取り出してきて、特別に社会的乃至階級的価値と対立させて考えることを必要としない。だから、もしここに問題があるとすれば、それは『政治的価値対芸術的価値』というような原則的問題ではなくて、むしろ附随的な副次的な、個別的な問題なのだ。

所が平林氏はそうは考えない。彼は社会的価値以外に芸術的価値があるというのだ。だが、彼の問題提出の根拠は極めて曖昧である。従って、問題そのものに余り発展性がない。彼はマルクス主義の一般理論、殊にその政治的目的、従って芸術作品の政治的評価の重要性に対する忠実さを告白するに急で、この点に関しては必要以上に口を酸っぱくし、くどいと思われる程要心深く述べているが、一度、彼が何故に芸術的価値の問題を特に問題にせざるをえないかという点になると殆どハッキリしたことを述べて居ない。只、ダンテや、ユウゴオや、ストリンドベルヒや、チエホフや、ボオドレエルや、ポオや、芭蕉を引っぱり出してきて、彼等の作品は、プロレタリアートの解放という観点から見れば、その価値は零であるか負である。然し、それにも拘らず、彼等の作品には『芸術的価値』があるではないか？　と云っているだけだ。これらの作品は疑いもなく芸術であるだろう。即ち、それはイデオロギーの如何に拘らず、芸術性を持つだろう。然しながら、これらの作品は、歴史的――階級的基準によって測られる以外のいかなる価値を持っているのだろうか？　もし彼の所謂芸術的基準で測ったなら、いかなる価値が出て来るか。そしてそれがいかに社会的乃至階級的価値と異るかということを明かにし、芸術的価値とは斯ういうものを指して云うのだとハッキリ云ってくれなければ、社会的価値対芸術的価値の問題は問

題として成立しがたいだろう。それは無用な混乱をさえ惹き起す危険を持っている。

平林氏の提出する問題の出発点の不明瞭さは、右のようだが、更に、彼はこの二元論の上に立脚して、マルクス主義文学の理論体系を二つの部分――政治的部分と芸術的部分とに切り離してしまっている。そして、マルクス主義芸術理論というのは、実は、前者にのみ限られるもので、それは芸術の領域に適用されるマルクス主義の政治論乃至政策論であると称し、後者に関連して考えられる諸々の原理はマルクス主義にも政治にも関係のない、一般に芸術そのもの、もしくは文学そのものに関する共通の原理であるとしている。芸術的部分とは主として芸術の形式に関しているものであろうが、して見れば、彼は、芸術の形式には階級性がないということを主張しているわけである。これではいかに政治が芸術に絶対命令的支配をもつものであると云おうと否その故にこそ、彼は非マルクス主義的な泥沼に片足を踏みこんだことになるではないか。彼が引合に出したルナチャルスキーはそのようには云っていない筈だ。

要するに、平林氏は『マルクス主義の真実性を認めながら』(?)然も氏が個人的に愛される『非マルクス主義的作品のもつ魅力』に打たれて、文字通りの『懐疑』に悩んでいる。デカルト式の懐疑的方法はマルクス主義の方法ではない。勿論、彼は注意深くそのことを断っているとは云え、彼の最近の言動はやはりそのことを裏書しているように思われる。そして、このことは彼の階級的地盤の不確定さをさえ予想せしめるものがある。

問題の後戻りは運動の実践にとっては不利益だ。我々はもっと問題を押し進める必要がある。ここでは、紙面と時間がなくて、これ以上を云うことができないから、平林氏の所論について感じたことだけを述べておく。

二 芸術大衆化の方向

昨年春から今日にかけて、党の大衆化とならんで、芸術大衆化の問題は、我々にとって最も大きな問題であった。局外者からは幾多の横槍が入れられるし、我々自身の間でも種々の脱線や思い違いなどがあって、歩んできた道は実にジッグザックなものだったが、兎に角大した方向違いもせずに、現在の地点まで辿りついている。そして、その最も端的な仕事の成果は、『戦旗』の編集方針の変化発展、労働者農民の間へのその影響力の増大、従って、発行部数の倍加となって現われている。

然し、よく考えて見れば、我々はまだ目ざされた仕事の半分もして居らないのだ。手をつけられた仕事は皆中途半端で終っている。殊に重要なのは、プロレタリア文学に関する考え方とその製作に関してまだ充分の成果が挙げられていないということだ。勿論このことは、そう一朝一夕になしとげられるものではない。然し、そのための努力は充

分なされなければならない。現在の階級闘争がどんな地位に立っているかということを好く考えて、苟くもプロレタリア芸術家と称している者は、自らにいかなる任務を課せられているかということを、より一層ハッキリと自覚する必要がある。

我が国に於ける所謂プロレタリア芸術運動は、最初、自然発生的に急進的インテリゲンチャの芸術運動として、直接的なブルジョアジー対プロレタリアートの闘争の圏外から発生した。仮令、その中に労働者出身のものがいようと、又自らの運動に『プロレタリア』というレッテルを貼ろうと、事実は決してプロレタリアートそのものの運動ではなかったのだ。このことは、他の領域に於ける運動がそうであると同様に、統一的な指導を行う階級的政党が独自的活動を行うに至るまでは、全く已むをえない事柄だったのだ。所が、最近に至って党の確立発展とあらゆる運動の分野に対するその影響力の増大は芸術運動の分野にも決定的な変化を及ぼしてきた。芸術運動も亦、党の大衆化の方向に従って、真実にプロレタリア的な大衆化の方向をとらんとするに至った。だが、現実に於てはまだ、その間に溝（ギャップ）がある。この溝を埋めることこそが現在我々に課せられた最重要の問題なのだ。

所で、我々の芸術は過去に於て多くのブルジョア的な遺産をそのまま無意識の内に受け継いではこなかったろうか？　イデオロギーの方面ではまあそれがなかったと仮定しても好い（事実は決してそうではないのだが）。では、形式の上ではどうか？　ブルジョア芸術家が設定した偏狭な芸術という枠の中に我々の芸術を宛てはめようとしなかったろうか？　彼等の芸術作法に媚びはしなかったろうか？　芸術専門家達の芸術的賞讃を目安にしなかったろうか？　ブルジョア的意味での芸術完成に主な努力を払わなかったろうか？　その他まだいろんな反省がなされるであろうが、要するに、我々は所謂文壇というものの一隅に割拠して対文壇闘争、ブルジョア文壇へのデモ（？）に終ろうとする傾きがなかったであろうか？　多少ともその傾きがあったということは、プロレタリア芸術と称してきたものに対するプロレタリアート自身の不信が、最も端的に物語っている。プロレタリアートの文化水準が低いからだという言葉で、この事実は胡魔化せるものではなかった。もしプロレタリアート一般の文化水準が『芸術』というものに無縁の衆生である程低劣なものだったら、所謂プロレタリア芸術なんていう言葉は一の無意味に終ってしまう。少くとも『プロレタリア芸術家』なんて称している人々は、誰のために、何のために仕事をしているのかわからなくなってしまう。そこで従来の所謂プロレタリア芸術は自分自身を先ず顧る必要があった。芸術大衆化の問題は正しくここから出発した筈だ。

だが、我々の芸術はその後もそう大した発展を見せていない。殊に創作方面にその感が深い。というのは農村や軍

隊の生活は比較的書かれているにしても、それ以外では、演説会や、デモや、留置場や、争議等の尖端的場景は取扱われながら、我々の城塞であり、然もそこにこそ全大衆化の指針が向けらるべき的生活場面であり、プロレタリアートの日常的生活場面であり、然もそこにこそ全大衆化の指針が向けられている工場内部の生活が殆んど描かれていないということだ。（少くとも、創刊号以来の『戦旗』には未だ一つも見られない。）我々にとっては大衆とは工場及び農村以外にはいない筈だ。そして、労働者大衆及び農民大衆という場合ですら、その階級的内容は異っている。況んや天が下に住む一切合財を引っくるめて、それを『衆愚』という風に理解することなどはとんでもない誤りだ。巷に分散している大衆、それは我々の云う意味での大衆ではない。我々はそれを工場或は農村に密集している大衆と解する。殊に工場プロレタリアートの階級的独立性、その××性を最も高度に評価する。一切の階級を一筆に塗りつぶし、それを無産大衆などと称して、ひたすらそのルンペン性に媚びる必要なんかない。我々はプロレタリアートの徹底的な××性を信頼して、そこにこそ大衆化の方向を集中すべきだ。我々の芸術は何より先ず正にそこから彼等の生活・感情の一切をあげて生産さるべきであり、生産された芸術もまた正にそこにこそ浸透せしめらるべきだ。

だが、上記の如き仕事を成就するためには何事にまして、プロレタリア芸術家が、芸術製作という観念の領域に於ける仕事にのみ局蹐することを止めて、実践的闘争に積極的に参加することが必要だ。芸術という観念上の仕事が党の組織事業に結び附くがためには、先ず第一に芸術家が人的にそこに結びつき、プロレタリア的な種々の出版物（非合法、合法を問わず）に最大限度に筆をとることが必要だ。我々は従来屡々『労働者農民の中へ！』の標語を耳にしてきた。だが、右のようにして、所謂プロレタリア芸術家が真実の意味でプロレタリアートの中に吸収されない限り、芸術大衆化の問題はその諸々の処方箋と共に、一片の空語と化し去るであろう。

三　いくつかの作品について

A　岩藤雪夫『鉄』（文戦三月号）

この作品は大いに注目さるべき作品である。それは或る鉄工場に働いている『私』という労働者を中心にして、鉄工場の生活及び彼の家庭生活を描き出したもので、百五十枚に亘ると称せられる労作だ。技巧的に見れば、これだけの長篇に対する作者の腕はまだ充分に熟しておらず、作品の構想、場面の掴み方、人物の取扱方等の点で、不充分不満足の個所が見受けられるが、それにも拘らず、この作品は工場内部に生活している労働者の思想と感情とが極めて現実的に描き出されているという意味で、相当な出来栄えを示している。

このような作品は今迄にも既に多く発表されているのが

当然であるにも拘らず、それが殆んど見られなかったということは、むしろプロレタリア作家の怠慢と云わるべきだ。この作品は、一九二六年、労働農民党が結党され、所謂無産階級運動の方向転換が問題になっていた頃をその時代的背景とし、従って、その時代の評議会の組合運動を反映している。現在では、階級闘争の状勢は当時とは決定的変化を示している。そして、プロレタリア作家は、この中からこそ、なお無数の『鉄』を生み出すべきことを努力せねばならぬ。

それは兎も角、『鉄』という作品は疑いもなく作品としての優れた或るものを持っている。我々はその好さを決して貶下しはしないだろう。然しながら、我々がここで忘れてならないことは、この作品が『文芸戦線』を飾っているということだ。この雑誌は周知の如く、プロレタリア運動の裏切者、左翼社会民主主義者グループの『労農派』の手に握られ、彼等の宣伝煽動のために用いられている。彼等はコミンテルンの権威を簒奪して、自らに向けられた批判は要心深く背後に隠しながら、我が国の左翼が過去に於て犯した誤謬に対する批判のみを振りかざし、現在それらの誤謬を勇敢に清算して献身的に闘争しているコミニストに対して、飽くなき中傷讒誣に狂奔している。このような裏切的行為の援助のために、『鉄』が利用されているということと関連して、我々は雑誌『文芸戦線』の害毒を一層強く思いおこす。『鉄』が好い作品であるだけに、その感が時に深い。

B　三つの反軍国主義的作品

『戦旗』四月号には二つの反軍国主義的作品、壺井の『兵営へ』と明石の『火線』とが並載されている。

『兵営へ』は忌憚なく云えば、この種の作品のマンネリズムから一歩も出ていない。問題の掴み方が公式的である。おまけに叙述が平板冗漫で、構想の点でも作の統一がとれていない。失敗の作品だ。

明石君は四月号の『改造』を見るとその懸賞小説に当選していて、相当腕の優れた作家であろうが、『火線』は余り大した出来栄えを示して居らない。兵士の生活がスケッチ風に描かれているが、その突っ込み方が不充分である。従って、最後の、兵士達が反軍国主義のビラを手にして喊声を挙げる個所が力をもって迫ってこない。

疑いもなく、軍国主義、帝国主義戦争の危険に対する闘争は、現在我々の双肩に負わされた最大の任務だ。だが、この闘争をいかに効果的に遂行するかということは、非常に難しい問題だ。戦争反対という比較的高度な宣伝煽動には、多くの経験と技術とを必要とする。それは単に、創作の技巧のみをもってしては解決され得ない。このことを充分理解し、修練されんことを希望したい。

なお、『新潮』四月号に龍膽寺雄『――地隙にて――』が載っている。『L・砲塁奪取戦』の弾雨の下にあって、一兵卒と伍長とがいかに心理的に憎み合ったかを書いたもの

だ。精細な戦場の描写と相俟って、作者の意図は大体成功しているように思われる。然し、一兵卒が伍長に於て見る『国』の威圧が単にそれだけのものとしてしか書かれていないので、この作品はその全き効果をあげていない。実を云えば、反戦争的なものと名付けて好いかどうかも疑わしいのだ。イデオロギッシュな物の見方の不徹底がその作品の効果をアヤフヤなものにする一の例である。

C、二つの長篇小説

『中央公論』誌上に二つのアンビッシャスな長篇小説が掲載されている。四月から始められた島崎藤村の『夜明け前』と三月から始められた前田河広一郎『支那』とである。

前者は凡らく幕末から現代までに至る近代日本の時代の動きを描こうとしているのだろう。現在の日本のブルジョア文学が島崎氏の如き老大家をしてどれだけの仕事を成し遂げさせるかという意味で、興味をもって眺めらるべき作品である。我々はそれを見ていよう。

後者は五・三〇事件以後の支那の革命運動の推移を描かんとするものらしい。やはり大規模な時代の動きを写さんとする点で、前者と同様な興味が持てる。どれだけ解剖のメスの鋭さが示されるか、そして、どれだけの成果があげられるか？ 同じく完成の暁を待つことにしよう。

いずれにせよ、ジャーナリズムの潮に流されて、片々たる短篇小説が支配している今日、大規模な長篇小説が、しかも対蹠的に出現したということは、注目さるべき現象である。

（一九二九年五月「戦旗」）

谷川氏のマルクス主義文学理論の批判の批判

青野季吉

一

マルクス主義文学理論は、いま、生成の過程にある。世界的共力の下に、建設の途上にある。そこには、まだいくたの矛盾があり、いくたの分析を経ないものがある。それは当然すぎるほど、当然な話である。だからそこでは、どれほど再吟味が行われてもいい訳であるし、どれほど疑問の提出があってもいい訳である。否、それが、マルクス主義文学理論の建設のために、此上なく望ましいことである。

だが、マルクス主義文学理論は、爾く生成の途上にあり、そこにはまだ矛盾や、分析すべきものがあるにしても、その理論の依って立つべき、言葉を換えて言えば、その上にその論理が建築さるべき、礎石――基礎的な見地は、既に確乎として横えられている。それは言うまでもなくマルクス主義の方法に基いて把握された階級芸術観の見地である。プレハーノフの言葉をかりて説明すれば、『社会的意識は社会的存在によって決定される……』されば『あらゆる「イデオロギー」――従って芸術及び所謂美文学も亦――は、与えられたる社会、或は――我々が階級に分たれたる社会を問題にする場合は――与えられたる社会階級の努力及び気分を表現する』(論文集「二十年間」第三版序文)という見地である。

この基礎的な見地は、若し何等かの仕方において之を放棄するとすれば、マルクス主義文学理論の建築は、恰かも砂上に楼閣を築くと同様な結果に陥ってしまうのである。それは明らかに、マルクス主義文学理論の全的の否定である。

私は、この全的否定の企てを谷川徹三氏の『マルクス主義文学理論の一批判』(『思想』再刊号)において観てとることが出来た。爾くこの一文は、マルクス主義文学理論の依って立つ基礎的な見解に肉迫し、それの『誤謬』を指摘したものである。

二

谷川氏のこのアンビシャスな論文の前半は、平林初之輔君の『政治的価値と芸術的価値』に展開された見解を、谷川氏の仕方において肯定するために――諸マルクス主義先進文学理論家の『矛盾』を指摘しつつ――費されて居り、後半にいたってマルクス主義文学理論の基礎的見解を一挙に片付けて、氏自身の芸術観を展開――実はほんの断片的に――している。(平林君の右の論文に展開された見解は、その論旨はともかくとして『芸術的価値』なるものを分離させて来た以上それの本質を説明しなければ徹底しないのは明らかで、谷川氏は恰かも、ここで平林君の役目を引受けたかの観を呈している。否、平林君は谷川氏のために、よきキッカケを与えたと言ってよいかも知れない。『マルクス主義者』の手によってジカに『芸術的価値』が遊離された以上、そのキッカケを捉えて、芸術の超社会性、超階級性、『普遍人間性の要請』を展開して来ることは急坂へ石を転がすよりも容易であり、これ以上、マルクス主義文学理論を覆えす巧妙な遣方は、一寸考え得られないであろう。)そこで谷川氏が、その前半においていかに腐心して『芸術的価値』の独立化をはかっているかを観るのは、興味ある仕事ではあるが、しかし後半の積極的な部分を検討することが遥かに根本的であり、且つ重要であるので、私

はここではただちにその部分に歩み寄ることにする。

それならば谷川氏は、どういう論拠をひっさげて、マルクス主義文学理論の基礎的見解に肉迫しているか？　また氏の芸術観を、どういう論拠によって支えているか？　先ず、それを調べて見よう。

氏は、一切の出発点を氏の芸術享受の実際においている。氏は言う、『われわれは「神曲」をもって単にその時代の或る階級の心理を理解するに資するのみのものとすべきであろうか。それだけでわれわれは満足出来るか。そこにわれわれは、今になおわれわれの心を打つ高い魂の鳴り響くのを感じないか。』と。また云う。『なるほど自然にたいする感情に於て原始人と文明人とはしばしば根本的に異っている。また親子の関係、感情の如きも、社会の組織と制度との相違によって、根本的に異った側面を示す。歌舞伎劇に於ける義理と人情との柵は、われわれに多くの不自然と不合理とを感ぜしめる。しかしそれは結局いずれも側面的事実である。われわれの中には今も原始人の自然にたいする恐怖がある。われわれはギリシャ人がその中に美を感じなかった荒々しい自然の風景にも美を感ずるが、しかしギリシャ人が美とした「泉と緑蔭と牧場」との風景にも美を感ずる。頭では不自然と思い不合理と思う義理人情の柵がしばしばわれわれを泣かしめる。』と。氏はこれによって、実はここではこれだけによって、芸術には変化的側面と不変的側面とがあると説明しているのである。そこでマルクス主義文学理論の基礎的見解にたいする氏の批評は、自ら明白である。その見解は、その変化的側面を明らかにしはするけれども、不変的側面を説明することは出来ない、と氏は非難する。『芸術品を芸術品として』取扱わないで、『単なる歴史的ドキュメント』に終らしめる、と氏は非難するのである。

ところでこの変化的側面と不変的側面の存在は、氏によって次のように解釈され、その帰結として、芸術は最も多く不変的側面に依存するという、氏の芸術観が横えられている。『現在の中には常に過去がふくまれている。一つの時代はそれに先行する時代を離れては考えられない。従って一つの時代にいるということは、何らかの形においてそれに先行する時代を予想している。これを別の方面から言えば、文化の伝統に於てわれわれはいわば意識的連続を保持しているのである。そこには変化的なるもののうちに不変的なものが見られ、不変的なもののうちに変化的なものが見られる。変化的なもの差別的なものを見ないのはうそである。しかし、不変的なもの共通的なものを見ないのもうそである。その不変的共通的な側面において、われわれは普遍人間性の概念を得る。勿論この普遍人間性は一つの仮設である。或は要請である。しかしそれはたとえば「かわらぬ人情」というような言葉が示しているように、相対的の意味では現実に歴史的に顕現する。それはいわば特殊中の普遍である。芸術は実にかかるものに最も多く依存す

るというべきではないだろうか。芸術は、階級的イデオロギーによりも「かわらぬ人情」により多くもとづくというべきではないだろうか。』

谷川氏は、種々の論点に触れて、これを複雑化乃至混雑化しているが、論旨は要するにここに紹介したところに尽きている。私は、仔細に氏の論拠を考えて見ることにしよう。

三

氏の論拠の最も重要な点は、変化的側面の指摘であるが、氏のあげているような理由で、直ちにそれが設定されていいものであろうか？

なるほど我々は「神曲」を読んで、『高い魂の鳴り響く』と言ったすさまじい程度でないにしてもとにかく或る興奮を感ずる。だが、その興奮は「神曲」のつくられた当時の人々のそれによって与えられた興奮と、同じ程度のもの、又は同じ質のものであろうか？　またたとえば我々は、法隆寺の伽藍を見て、或る感に打たれるが、それはその伽藍のつくられた当時の人々がそれによって与えられた感銘と、同じ程度、同じ質のものであろうか？　決してそうでない。第一、我々はその中に、宗教的興奮などは、微塵もこれを覚えないのである。谷川氏は、『われわれの中には今も原始人の自然にたいする恐怖がある』と無雑作に言っているが、我々の自然にたいする恐怖と、原始人のそれとは、決して同一ではない。第一我々のその恐怖は、自然崇拝などをつくり出しては来ないではないか。『泉と緑蔭と牧場』との風景に美を感じ、不自然不合理と思われる義理人情の柵に泣かされるという事実にしてもそうである。我々はギリシャ人と同じ度合、同じ質の美を、そこに感ずるのではないし、封建末期人と同じ程度に、それに泣かされるのではない。

即ち同じ芸術でも、時代が移り、社会が異るにしたがって、その持つ美的価値は異っている。そこには絶対的に言って、何等不変的なものは存しないのである。これはカルヴァートンが『最新精神』に論断している通りである。

我々が、時代を異にし、社会を異にした芸術に、今もなお打たれるという事実が、若し何事かを説明するとすれば、芸術の持つ全価値はこれを分解して見るとそのうちには、比較的早く変化する部分と、比較的遅く変化する部分とがある、と言う事実を語るに過ぎない。たとえばいまの法隆寺の例で言えば、当時の宗教的イデオロギーを反映した部分は、比較的早く変化する部分であるが、その均斉や清楚やの美の部分は、比較的遅く変化する部分である。比較的遅いにしろ、とにかくそれは変化する。だからこの部分は、前の部分にたいして相対的にこそ、不変的と言えば言えないことはないにしても、いかなる意味においても絶対的に不変的側面など言われるものではないのである。

これは我々にとっては、余りにも明白なことである。それだけ谷川氏の不変的側面と変化的側面との指摘は、余りにももろい根拠に立つものと考えざるを得ないのである。

しかし谷川氏の言う不変的側面が、実際不変的側面でないにしても、とにかく時代を異にし、社会を異にした芸術に、今日でも我々が打たれるという動かす可からざる事実は、これをどう解してよいか。その問題はまだ解決されずに残っている。

そしてこの問題の解決こそ、直ちに谷川氏の普遍人間性の概念の検討となるものである。

四

我々は、時代を異にし、社会を異にした芸術に、いまもなお打たれる。だが、そこにも自ら区別がある。いかなる時代、いかなる社会の芸術でも、それが謂ゆる『偉大な』芸術であれば、いまもなお我々はそれに打たれるという訳ではない。例えば、我々は現在、ドストエフスキーの芸術には打たれるが、シャトーブリヤンの芸術には打たれない。明治文学の例で言っても、露伴の芸術には打たれるが、紅葉の芸術には打たれない。だが、これは我々のことで、我々の後に来る人は勿論、我々と同時代の人でも、我々と変るのは言うまでもない。我々に反してこんどはシャトーブリヤンが喜ばれて、ドストエフスキーが斥けられ、紅葉が選びとられて、露伴がすてられるかも知れない。

これで見ても分る通り、我々が時代を異にし、社会を異にした芸術に、ある価値を感ずるのは、我々のおかれた社会的条件からであって、その社会的条件が異るにしたがって、そこに或る価値を感ずる過去の芸術も異って来るのである。

この場合、谷川氏のように、普遍人間性の要請をつくって見たり、『かわらぬ人情』を持ち出して見たって、何ものも証明しはしないのである。たとえば人々が、『泉と緑蔭と牧場』との風景に美を感じなくなる時が来たら、歌舞伎の義理人情の柵に泣かされなくなる時が来たら、どうであろう。しかもそう言う時は来ないと、谷川氏と雖も決して言えはしないであろう。その時には普遍人間性の要請も、『かわらぬ人情』も、何事をも説明しなくなりはしないであろうか。

谷川氏は、その普遍人間性の概念を展開させるために、マルクスの言葉を引用して、これをマルクス主義者に代って説明している。

マルクスは、『経済学批判』の序論に於て『困難は、ギリシャ芸術及び史詩が或る社会的発達状態と結びついているのを理解することに起るのではない。困難は、それらが今も尚われわれに芸術的享楽を与え、且つ或る点では規範として、又及び難い模範として通るのを〔何と解するか〕にある。』と言っている。谷川氏の言うように、これまで

マルクス主義者は、この後の方の困難な問題を解くことを閑却していないまでも、それを回避していたことは、これを認めてもよいと思う。だが、我々は、それにつづくマルクスの示唆的説明にたいする谷川氏の排撃には、承服することが出来ない。

マルクスは、その困難な問題に示唆的解釈を与えてこう言っている。『大人は二度と子供には成れぬ——子供みたいに成りでもせねば。が、子供の純真は彼を喜ばせ、彼は更にその真実をヨリ高い平面に復生産しようと自ら努めないであろうか？　少年性のうちにこそ、どの時代でも、それ自身の特性が自然的真実において蘇りはせぬか？　人類が最も麗しく展開されている人類の社会的少年時代が、二度と還らぬ段階として、なぜ永遠の魅力を発揮してはならぬというのか。育ちの悪い子供があり、早熟的な子供がある。古い民族にはこの範疇に属するものが多い。ギリシャ人は、順当な子供等であった。彼等の芸術が吾々の上にもつ魅力は、それを生い立たせている未発達な社会段階と矛盾するものでない。魅力は寧ろ後者の結果であり、未成熟な社会的諸条件——その下にあの芸術が成り立ち、その下にのみ成り立ち得たところの——が、二度と再び帰らぬことと離れ難く結ばれている。』

マルクスはここでどう言っているのであろうか。ギリシャの芸術が今日なお我々に魅力を持っているのは、それが未発達の社会発達段階の産物だという、正にそのためである。我々の時代の発達段階に達した社会は、最早や再び、その未発達の段階へ復帰することは出来ない。それは恰かも、大人が子供にかえることが出来ないと同様である。その故にこそ、ギリシャの芸術、順当な子供の純真が、我々に魅力を持っているのである。即ち今日の段階に発展している社会的条件が、我々をしてギリシャの芸術に魅力を感ぜさせるのである。さればその魅力は、いかなる意味においても、ギリシャの芸術そのままを、子供の真実そのままを再生産するように、我々を誘うものでなく『ヨリ高い平面に復生産しようと』誘うのである。

このマルクスの示唆的解釈を、谷川氏は『十九世紀初葉に於ける「古典的」と「浪漫的」との対立に於ける「古典的」の概念の把捉の一面を一歩も出ていない。』と簡単に片づけているが、我々には決してそうは考えられない。

これこそ、『社会意識は、社会的存在によって決定される』ことの、一つの精緻な証明に外ならないのである。

五

谷川氏は、『われわれはもっと広い見地に立たなければならぬ』と、余りに尤もな、それ故に無意味な宣言をした後に、曩に書きぬいたような文化伝統論、意識連続論を持ち出し、そこに普遍人間性の要請を立てているのであるが、それはいかにも抽象的な唯心的な遣り方である。

『現在の中には常に過去がふくまれている』ことと『一つの時代はそれに先行する時代を離れて考えられない』こと、従って『文化の伝統において、われわれはいわば意識的連続を保持している』こと、これ位、明白なことはないだろう。谷川氏の口吻によると、マルクス主義はこの『広い見地』を忘却しているかのようであるが、マルクス主義ほどそれを明白に把握しているものはない。ただマルクス主義は、谷川氏の如き唯心論者と異って、それを具体的に、現実的に把握しているのである。資本主義経済は、封建経済の弁証法的発展であり、資本主義経済のうちにも、封建経済は混入している。マルクスは言うに及ばず、およそマルクス主義者でこの時代的連繫、混在を否定するものは一人もない。レーニンのロシア資本主義経済の現実の解剖の最も輝かしい点は、その中に混在する各種の前資本主義的形態を直射的に指摘したところに在るのは、誰でも知っている。既に社会の基礎的組織においてそうである。その『社会的意識が、社会的存在によって決定される』以上、文化の伝統において、意識的連続の否定される理由があろうか？否、マルクス主義は、その意識連続を、ここでも最も具体的に把握している。

この時代的連繫、意識的連続から、どうして谷川氏のように『そこには変化的なるもののうちに不変なものが見られ、不変的なもののうちに変化的なものが見られる。」と、容易に推論し得るのであろうか？ 谷川氏に反してそこに見られるのは、変化的なものばかりである。凡てが変化する。ただ、その変化に、経済と意識とにおいて、遅速の差があるに過ぎない。

谷川氏の語調をかりて言えば、変化の早いものだけを見て変化の緩漫なものを見無いのは、ウソである。また変化が早く、差別が明白なものを見て、変化が緩漫であり、共通的な点のあるものを見ないのもウソである。しかもそれは、独り過去に関してのみ言われることではない。未来に関しても言われる。我々の資本主義社会には、過去の封建経済の残存も立派に認められるが、未来の社会主義経済の萠芽も存在する。したがって過去の封建的意識も存在すれば、未来の社会主義的意識も存在する。過去に関して言われたことは、未来に関しても言い得られるのである。

そこにどうして、また谷川氏の纍の抽象的な前提からして、普遍人間性の要請などがたてられるのであろうか？『仮定』とか『要請』とかとことわったところで、決して救われる訳はないのである。人間性とか、人間の理性とか言った仮定や要請は、いくらでもつくられる。たとえば進歩という事実を説明するために、人間の普遍前進性という仮定や要請をつくって見たって、何等救われるところのないのと一般である。

問題は意識の性質である。社会的意識は社会的存在で決定されるが、その意識が具体的にどう言う形をとって来るかは、意識それ自体の法則にしたがうのである。たとえば

ゴム鞠は一端はずみがついてからは、それ自身の運動の法則にしたがってはずむが、そのゴム鞠が、傾斜面にぶつかるか、平面にぶつかるかは、その法則と何等の関係のないことで、ゴム鞠のはずみは、先ずこれによって決定されるのである。だからゴム鞠のはずみのそれ自体の法則、意識の発現のそれ自体の法則を知ること、それによって、その限りの現象を説明することは毫も差支えないが、それで具体的のゴム鞠のはずみや意識の発現が説明しつくされると思ったら間違いである。

マルクスはこの意識の発現について、『社会的存在によって決定される社会的意識』の発現について、その歴史批判的諸著作において、極めて見事な描写を与え、意識とは具体的に、そう発現するものだと説明している。その輝かしい一例として『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』中に著名な個所を引用しておこう。

『……あらゆる死んだ時代の伝統は、活きているものの頭脳の上に、悪鬼の如くにのし掛る。人間が自己と事物とを変革して、未だかつて無かったものの創造に従事しているかの如く見える、まさに革命的危機の時期に当ってさえも、彼らは何とかして、その御用を勤めさせるために過去の霊魂を呼び起し、その名前と、その鬨の声と、その衣裳とを借ろうとする。こうしてこの時代のついた衣裳と借りものの文句とによって、世界歴史の新しい場面を舞台に上ぼそうとするのである。かようにルーテルは、使徒ポーロに扮装し、一七八九年―一八一四年の革命は、代わるがわる、ローマ共和国と、ローマ帝国との衣裳を着け、そして一八四八年の革命は、或る時には、一七八九年の、或る時には一七九三年―一七九五年の革命的伝説を焼き直おすこと以上には、何ら出ることが出来なかった。同じように、新らしい国語を学びかけた初学者はたえず、その言葉を自国語に引き直おしてみて、初めて意味を取るのであるが、自国語を思い出さないで操つれるようになり、親譲りの言葉を忘れていられるようになって、初めて新しい国語の精神をわがものとして自由にこの国語で思想を言い表わし得るようになる。」

意識は、実際にこう言う仕方で――これはホンの一つの場合だが――発現するものである。この発現の態様だけを見て、ここの例で言えば、ブルジョア革命が、前代の革命的伝統を意識に生かしたと言う様相だけを見て、普遍人間性の要請などをつくって見たところで、何ものをも説明しはしないのである。

意識の説明は部分的には意識の範囲でつくが、それが十分な説明は、意識の範囲ではつかない。そこに何とか無理をしようとすれば、何等かの仮定を設けたり、要請をかまえたりしなければならない。が、およそいかなる現象でも、仮定や要請を設けてなら、説明出来ないものはないであろう。と言うのは、その仮定や要請のうちに、既に説明がかくされているのだからである。

谷川氏の普遍人間性の要請は、それだからその中に不変の美的価値が、あらかじめかくされているのである。それは、現象の説明でもなければ、問題の解決でもあり得ないのである。我々は、決して万有神性の仮定とそこから引出された物神の説明をもって、自然現象の説明とも見なければ解決とも見ないからである。

六

谷川氏のマルクス主義文学理論の基礎的見地にたいする非難は、爾く唯心的な、薄弱な基礎に立っている。

その上、芸術は、与えられた社会階級の努力及び気分を表現する、という見地、その見地から出発した芸術の取扱は、せいぜい解釈学的、歴史批評的な範囲を出でないとする氏の見方は、目的論と必然論とに関する旧い新カント派の見方を一歩も出ずるものではない。これについては、ここで説明している暇がないから、いずれ稿を改めて説く機会があるであろう。

マルクス主義的芸術の全芸術価値から、狭い意味の芸術的価値を遊離して来る以上、そしてその遊離された芸術的価値の本質を、必然にそれだけとして説明しなければならぬ以上、永久不変の美的精神とか、普遍的人間性とか、或はかつて自然主義文学者が不器用にやったように単に人間性とか、そう言ったものを主観的に、形而上学的に担ぎ出して来なければ、その説明は決して徹底しない。谷川氏はその常道を踏んだに過ぎないのである。谷川氏の芸術理論は、だからブルジョア美学の正統の子、それもずいぶんみすぼらしい――粗野な言葉をつかうのを許してもらえば――子だと言っていいのである。

私は最後にレーニンにならって言い添えておこう。マルクス主義的唯物論的文学理論はまだ弱いとは言え、ブルジョア的唯心的文学理論を打ちやぶる程度には十分に強くあると。

（一九二九年六月）

III

詩・詩論・短歌・俳句

坑内(しき)の娘

松田解子

私達は手子(てご)だ
坑夫の掘り出した鉱石を運ぶ
私達は運搬夫　私達はシキの娘だ
私達は暗黒の中を雌鷹のようにやすやすと飛ぶ
監督も　坑夫も　支柱夫も　捲揚機械夫も　奈落にみち
　びく竪坑(たてこう)も恐れはしない
ダイナマイトの唸りは私達の心臓に
輝く未来を告げる声だ。

昨日　十三番坑で君坊が死んだ
私はその血を　その魚肉のように千切れた肉を　そして
　岩塊の重圧にむしり取られた髪の毛を見た
なのに私は泣けなかった
今日　監督や警官や鉱務署員が　神主を連れて来て血の
　あとに祈禱させた
なのに　私は泣けなかった。
私たちは労働者だ
私たちは仲間の死を悲しむ　だが
私たちはその死骸を踏み越えて
進まなければならない
彼女はいつも言っていた
　解ぼう　おらあ死んだって泣くことはいらねえ
　それよか生きてる時はうんと戦ってな
そしてその眼のやさしかったこと
その行動の勇ましかったこと
そう思い出すと涙がわく
けれど私たちは泣いてはいけない
涙を地下足袋に踏みにじって
今日もまっすぐに進まなければならない
このガスカンテラで何もかもを照らして見よう
監督の猛獣のような眼が
どんなに睨みつけようと
私達は手を握ろう

ケージの中　鉱車のかげで　お互いに結びつこう　そし
て
私たちの最初の戦いを宣する日を創ろう
私たちは　今日　鉱石を掘り出す
だが　その日には
タガネで　ダイナマイトで　何を
打ち砕かねばならないかを

はっきり目論(もくろ)んで進もう。

おりゃ朝鮮人だ

金　炳　昊

おりゃー　朝鮮人だ！
国もなければ　金もない
楽しい事って　もちろんないが
哀れをこう涙もかたづけてしまったんだ。

道徳がなんだ！
日鮮融和って　何物だ
おれらはあまりにだまされすぎているんだ。

先代から住みなれた家は何者(どいつ)が
祖先からつたえてきた田畑は何者(どやつ)が
むさぼり取ってしまったんだ！
今は裸一本のこの身が残っているばかりだ。

君等は働けというのか！
君等はわしらが怠けているとでもいうのか
だいたい働く所がないのをどうするんだ！
なつかしい故郷の山川を後にして
北は満州南は日本へと
押流されるヨボたちをどうしようというのか
我と我が身を敵国に運びゆく心持を
君等は知る事が出来ないであろう！

何処へ行くとてあてもなく
ただただ幸(さち)あれかしと願う心が
永住の地好しとあせる心が
今日も今日とて数百の白衣人たちを乗せた
関釜連絡船がボーとなる！
末は場末か炭坑で果てるのじゃけれど。

日本人は俺達の敵じゃ
しかし全日本の無産者はおれらの味方じゃ
おれらをいつくしみ助けてくれるのも
全日本のプロレタリアじゃ
君等の思っていることを我等も思っているし
君等のなさんとすることを
わし等もなし通すであろう！
同志たち手を握ってくれ
そして一仕事しっかり頼むぜ！

檻の中

波立一

昨日は重い空に湿っぽい風だった
鋲どめた　五月祭のビラの傍に
白いウドンゲの花が咲いていたっけ
つゆ時の穽をのがれて咲いていたっけ。

首　うなだれてはこみあげる憤怒を
首　うなだれてはこみあげる憤怒を
奴(うぬ)！
首　うなだれてはこみあげる憤怒
、

今日はうすべり三畳の檻の中
鉄格子と金の網窓にしがみつき
ガラス戸の隙間三寸
高い石塀を越えて
黒雲ちぎれ飛ぶ空模様に
じっと眼(まなこ)を注ぎ
歯を食いしばってほくそ笑んでる。

労働する女たちよ

長谷川進

娘さんよ！　お前はなぜそんなに　のろくさ　物憂(ものう)そう
　に歩いておるか
たった今　終業(ひけ)のポーのなったとき
お前は沢山の仲間――男女工――と摑(つね)り合い　せり合い
やつれてはいたが　その頰に微笑をさえたたえて
あの工場の鉄門を押し開いて流れでた一人ではなかった
　か
お前の軀(からだ)は疲れていた　お前の足は重かった
けれども　お前の顔は嬉しかった
終日しばられていた自分をとりかえした喜び
一つのことをなし終えた快よさ
そういう　ぶっつけ合いたいような嬉しさが　あふれて
　いた
お前は街の娘　青年の恋人　そして何よりも先ず人間の
　衣服を作る織布女工であった
そしてそれこそお前の何よりもの値(ねうち)ではなかったか
大びらに　世間に存在を主張し得る価値(ねうち)ではなかったか
それだのに娘さんよ

お前はなぜそんなに憂うつなのか
お前の　そのふさぎこんだ顔は私を憂うつにする
俺たち凡ての労働する男性を憂うつにする
私は知っておる　よっく知っておる
お前が手の筋の痛む程　足に水気のくるほど　たちづくめに働いても
お前の家にお前を待つものは
永年の激しい労働に荒んだ父の吐くブランの息であり
薄暗い灯の下で　汗もと蚊に泣く末の子を背負った母の内職姿であり
そのヒステリー性の喚きであり
「早よう工場へでたい！」と吐息をつく病みやつれた蒼白い兄であることを
娘さんよ　私にはよっくわかるのだ
お前の一切の哀愁の根が
この　慰めようにも術のない　重なり重なるじめじめした思いである事を
娘さんよ　友よ
私は固くお前の手を握る
そして私はお前に云う
貧困に思い悩む　娘さんよ！
私はお前を　この上なく愛する　お前の悲しみを　悲しみとする労働者だ。
我々が時折　自分の悲哀を　動きのとれないどん底にまで追いつめると云うことは
——だが　なさけないことだ
娘さんよ！　瞳を大きく開け
とじこもり　悶え　しびれる　お前の脳を　多勢の　友達の中へ持ちかえせ
ご覧！
彼処へ行く百号織機の小母さんを　八十号織機の蒼い娘を
そしてこちらへ来るのは授業に急ぐモスリン工場の女工さんだ
あれは苛性で大火傷した石鹸の見習工
それから　あのあすこの寄宿の窓で　右手を左手で抱えておる子供をご覧
あれは手の甲をくじいた第三工場の幼年工だ
それから……
私の娘さんよ
私たちはこう沢山の人々の中で
自分こそは最大不幸者だと嘆く我儘をつっしもう
そして
私達は歩ゆもう　元気で行こう
貧困に悶え苦しむ　堪え忍んで来た娘さんよ！
お前こそ　今この瞬間
困憊と飢と死をみつめる沢山の人々に
心から　両手をさしだし得る人ではなかったか

父母にさえ訴え得ないでむせびなく　あの幼年工を
あふれる愛情でいだきしめ得るものは　お前ではなかったか
そして
彼等を元気づける事は　お前を元気づけることではなかったか
娘さんたちよ！　――労働する女たちよ
勇敢に力強くお前の一歩々々を踏みしめよ
母も妹も学校友達も
お前の知り人はみんな労働者だ
そして　全日本の労働する女――お前の仲間は二百万だ
私たちは知っておる
二百万の愛情にふるえる手が
彼女の夫のため　彼女の息子のため
如何に勇敢であるかという事実をしっておる
娘さんたちよ――労働する女たちよ
お前は只お前の二つの眼でみよ
お前の周囲を　正確にみとどけよ
そこに
機械は誰のために動いておるか
誰が誰のために働いておるか
お前の夫は　お前の息子は誰のために一日十二時間の労働をするか
工場はお前の幸（しあわせ）のために建っておるか

それとも　株主の利益のためにか
お前の夫は　お前と息子を幸にしようと
精根の限りをつくしたため
今は病身とならなかったか
それともまた過労のため　野良犬のようにど鳴りだすようにならなかったか
こぼれるような愛情で
お前をその両腕でいだきしめる彼が
貧困にすさみきって　お前をなぐり殺そうとした事はなかったか
お前の工場はお前を幸福にしたか？
株主のどん慾をみたしたか――どちらか！
お前の工場は働いておるお前たちの意志に従って動いたか？
株主の意志によって働いたか？　――奴隷にしはしなかったか？
娘さんたちよ！　労働者よ
お前たちの工場は　お前たち労働者をはなれて存在し得るだろうか？
原料を運ぶものも
機械を運転するものも
製品を整理するものも　労働者である場合
労働者の団結が工場を左右し得ないだろうか？
労働者の幸福のため以外には歯車の一歯をも刻（きざ）まない工

場となし得ないだろうか・
娘さんたちよ——労働者よ！
お前は奴等の貪慾の奴隷となるために生きておるのか
お前たちの生活を　よりよくするために生きておるのか
どちらか！
——労働する女たちよ
お前はお前の兄弟や恋人や夫や息子が
もうこれ以上働けない　と云う処まで働いておる事を知
　ってておるだろう
そして——お前たちは又
曽つて　重役や株主の奥様やお嬢様のように　贅沢な遊
　びも　金のかかるふざけもしないであろう
そしてお前たちは
お前たちがみじめ過ぎる程みじめな生活をしておると云
　う事は
決してお前達が働きたりないためや贅沢をするためでは
　ないということは
一銭銅貨で二銭の饅頭の買えないということのようには
　っきり知っておるのだ
そして又
このみじめ過ぎる程みじめな生活をしておる労働者の大
　群が
この大日本帝国にびっしりつまって居ると云う事実を知
　っておる

そして又
この日本を進歩せしめておる力こそ
この労働者の大群であると云う山のような事実を見る
そして私たちは最後に
この労働大衆の団結こそ
〇〇をどのようにも置きかえ得る力である
という結論を得るのである。

あらゆる労働する女たちよ
私——労働者——はお前の愛情に祈る
お前の夫を乱暴者とし
お前の正直な息子を気狂いにし
お前を恐しい憂うつにかりたてる
そいつ等に向って起て！

そのとき
労働者はどんなにかお前を愛することか！
お前の幸福はただその中にのみあるのだ。

一九二八・六・八

落馬した兵士

江森盛弥

俺は病院にかつぎこまれた
——三月
赤土の練兵場に霜柱がとけて
砂埃りの中で
並木の桜が花を飾った日に。

——伝令になった俺が
いきなり　胴腹に拍車をあてると
俺の馬は棒立ちに突ったったのだ。

それからは夢中だ
——頭の上に
重い地面が落下した
——砂が唇を埋め
——歯が砕け

誰かが俺を蹴った！
——火のような長靴の一撃に

俺は脅えて起き上った
砂埃りの向こうを
タテ髪を振り乱して
俺の馬は走り去った

——馬を追って走れ！
だが腰は砕けて倒れ
誰かが長靴で再び蹴り
——俺は又倒れ……

そして俺は病院にかつぎ込まれ
打ち棄てられ
そして一週間

——誰一人そばへは来ない
何の色彩もないダダッ広い病室
何の色彩もない冷たい天井
鉄の寝台の列
直っ白な着物を着た仲間は
仰向けに寝たまま
皆んな黙って俺を見ていた

馬蹄に踏みつぶされた頭
——此の事務員はも早や数字を読む事も出来ないのだ

瀬戸物のように砕けた肩骨
――以前は荷役に働いた波止場で
除隊後は乞食をしなければならない彼
皮だけでブラ下っている腕
――そんな腕でハンマーが握れるだろうか！
肉を突き破って折れて出た腿骨
穴だらけの肺
腐った腸
――皆んな労働者と農民の
おお沢山の廃物

打棄てられた廃物どもは
黙って俺を見ていた
――又、新しい廃物が出来た！
新しい廃物――俺は
身動きも出来ない俺は
朝も、昼も、夕方も
厭きる事なく兵営の桜を
砂埃りを被った桜を見ていた

――桜を
俺は此んなにも美しく思った事はなかった満開の桜を
俺は嫌いだったのだ
――癪にさわったのだ！

三月（去年）
――桜を見に行こう
俺の工場の職長が　狸が云った
――弁当は会社から出る

それでケダモノの様に酔っ払って
キモノの前をはだけて
フンドシをブラブラさせて
三味線、安来節、花見踊り
酒の上の喧嘩で
不平も反抗心も
――発散させてしまったのだ

丁度そのころ
あの事件が起った
三月十五日！
――だが、それさえ
何の事だか知らなかった！

そうだ、俺は何も知らなかったのだ！
それればかりではなく
――赤土の練兵場に
風が
辰巻きのように赤黒い砂埃りを巻き起こし日がかげって

――ワッ、ワッ、ワ、ワーッ
突貫のわめき声と一緒に
兵隊の眼のような赤黒い砂埃りが
街の家々を
――俺のアバラ家の
畳を、障子を、井戸端を襲っても
その練兵場が俺達に
――プロレタリアに
どんな因縁があるかも知らなかった

夜
真っ暗な練兵場で
銃剣と、重い、沢山の靴音がして
突然
――ダ、ダ、ダ、ダ、ダーッ
機関銃の響きが
街の家々を震動させる
俺の家で
――赤ん坊が毎晩眼をさましてむずかり床の中で眼をあけて
「敵が攻めて来たの！」
と小学生の弟は聞いた
闇の
真っ暗な練兵場を

士官の鋭い声が響いて
――前面の工場地帯で暴徒が××した!!
号令
――火線の構成！
俺達の眠っている家々に対して
闇の中でハイノーと銃がうごめき
「火線が構成」される

そうだ、弟の云うように
「敵が攻めて来た」のだ！
――だが、その×も俺達の仲間だ
その×の×の俺達も
奴等と同じ仲間ではないか!?

――落馬兵は何処だ
一週間目に酔っぱらいの軍医が来た
――どうなったか！
俺の
崩れた肩に幾重にも
ギリギリと巻きつけられた布を
乱暴な手で引きはがすと
折れたまま肉はかたまり
俺は廃物に
――片輪者になっていたのだ！

病室の仲間は
皆んなが俺から眼をそむける
——やっぱり奴も××にされたんだ！
それがあたりまえなのか？
何故黙っているのか!?
何故叫ばないのか
——働ける軀を俺達にかえせ
——帝国主義××を××へと！

河

森山啓

おお　隅田河は俺達の河だ
濁ってる　重っ苦しい
暮しのように流れる
このまま昼間の喧騒の中を
おお
この河ぎしに来て汗を拭き
暮しと仕事を喋ろうじゃねえか
ねうちと自慢を見せようじゃねえか
おい　すっかり陽に灼けた仲間よ

太陽を見る目に汗が浸まねえか
男の太骨が疼きゃしねえか
おお　過ぎた月日は流れる河へ
ぶち込んでしまうがいい

過ぎた月日は俺達に
苦しかった
ストライキは奴らの踵で踏みつけられ
鷲の眼をした闘士は奪われ
……月日は俺達を傷つけた

今も
工場町は煤と恥で塗りたくられ
坊主は　嘘つきは
鐘をたたく
不仕合わせものがうようよした中で
桐の葉が枯れる公園で
アブレと成れの果てが身を寄せた中で

おお　全く
今も工場町には
太陽が照らねえのさ

だが見ろ

女房はたっしゃだ
俺と来ては
一すじ縄では行かなかった
お前と来ては
二すじ縄でも行くまいよ
なあ　おい
失業の雨でも来るなら来させろ
邪魔っけの縄を投げるなら投げさせろ
俺達は　仕返しを
大仕掛けで　豪勢にやるんだ

おお
隅田河は俺達の河だ
濁ってる　重っ苦しい
暮しのように流れてる
そして暮しの底から
起重機の捲き上げたような闘争が進む

波の逆まく時が来るだろう
俺達の恥も奴等の暴虐も一切合財流す
洪水の日が来るだろう
おお　そして晴れた日にせいせいした岸に。

南葛労働者

荒川は南葛の無産者の
苦悩の夜を流れる静脈
荒川は南葛の労働者の
奮起の朝に波立つ動脈

茫々たるその河原よ！
波はサラサラ時を流し
風は絶え間なく警報をつたえる

風は俺達の胸を切る
風は無残な血潮に沁みている
河畔には、細民と淫売と労働者の大群
クレインは反抗の翼を張り
一群の労働者は語る、哀悼と悲憤を以て犠牲を
黙々たる大群のなかに蘇る先駆者を
河畔に、起き立つ、七人の同志は生けるが如く
風は胸を切る
風は無残な血潮に沁みている

思え、遥かな南のキールンで果てた
彼こそまた南葛の労働者、道を拓いた先駆、細民と淫売

と労働者との町よ！　戦闘の大道に斃れた俺達の戦士

怒れる民衆の血脈の如く鼓て荒川よ！
かつて民衆の朝をうたい
やがて白熱の真昼　戦闘の大火をうたおうとする
波よ！　流れよ！

見ろ！　太陽を浴び　平野に脈うつ　汝荒川は春の血管
そして河畔には先駆者の種子は発芽し、汝荒川は俺達の
　動脈！
鼓て！　黙々たる大群の　苦悩と反抗の心臓より
脈々と打て、春の荒川よ！

敗れて帰る俺達

三好十郎

涙は頬っぺたで乾いた
怒りは胃の底によどんだ
にがいにがい空っぽの胃の底に。
俺等は負けた、おお負けてしもうた。

俺等は負けた！
おお此の歩いて帰る足の重さよ。
憶えて置こうぞ、此の足の重さ
聞いて呉れよ、しょびいて行かれた伜よ
冷めたい監房の壁の側でな
うなだれて帰る親父の足音よ。
お前のおふくろが咳に攻められて寝てる
暗い家まで半里だ。
青い空に赤い旗のヒラヒラなびく
モスコー迄は五千里だ。
拳の指からにじみ出る血を
この焼ける歯で噛みながら帰るぞ！

痛みうずく節々に

それだと言って、兄弟！
俺達のガン張りがたりなかったのか？
俺達の胃の腑が腕っ節よりも弱かったのか？
俺達のピケが手ぬるかったのか？
嘘をつけ！
第二坑の奴等も第三坑の奴等も
しきの暗闇で狼の様に眼を光らせて
命を投げ出して待っていたんだぞ！
後やまも先やまも

汚れ切った体を真裸にして待ってたぞ！
合図のハッパの鳴るのをな！
だけどハッパは鳴らずにボーが鳴った！
おおよ、事務所の方でボーが鳴った！
ダラ幹め、俺達を
坑主に売った合図だったい！
おおよ、そして俺達は負けた
若え奴等はしょびいてかれた
負けたんだ、それっきりだ！
ホエ面(づら)をかくな、グチを言うな。

日が暮れるよ
俺達の地下足袋の先から
音のない坑山(やま)が暮れる

どうしたんだよ、おっかあ
あのボーはどうしたんだよ？
此の子があの時そう言いましたよ
私しゃドッキリしちまって
返事をすることを忘れて
石の上に膝(ひざ)を突いちまった！
私の亭主が去年落盤でくたばった
あすこんとこで、
私も落盤でやられた様に
膝をついてしまいましたよ！
ほんとに、ほんとに、その時
石の下から死んだ亭主が泣きましたよ
私しゃその声を聞きましたよ
四十日もの食うや食わずのストライキが
どうして負けたか教えて下さいよ
ねえ、私なんざヨロケかかった女です
死のうが生きようが何でもねえけど
此の子の腕を見て下さいよ
私の首に巻きつけてる
骨ばかりの此の腕を見て下さいよ
死んだ亭主が此の腕の中から
私の首をしめつけます
ちち畜生、なぜ負けた
なぜ俺の仇(かたき)を打って呉れなかった
そう呻(うめ)いてしめつけます
私しゃ苦しい、ええ
体中の血が一度に青くなればいいに！

青い呪(のろい)に踏みしめる
足の下に舞い上る砂ぼこりも
俺達の眼に見えようか

ただ帰れ、兄弟！

たぎり立つ血を
もう一度氷の様に鉄の様に
核の核まで冷めたくさせて
帰えろうや！　おい！
俺達の背がこんなによ
曲って胸を押しつけても
泣き寝入りに寝入ってしまうの早かんべ！
今日俺達は負けたか？
おお負けた！
明日には明日の日が照って
明日も俺達は負けるか？
おお負けるかも知れねえ。
明後日もその次の日も次の日も
おお負けるかも知れぬ
歯を喰いしばれ、歯を　噛みくだけ！
くそ喰らえ！
しまいまで負けて居ようか！
しまいには負けて居ようか！
一歩々々に憎しみを踏みしめろ、兄弟！
シキの中が暗くて
血の臭いのする間、
よしか
一歩々々憎しみを踏みしめろ、兄弟！　（一九二八・十一）

居残りの夜

高木進二

一

風炉は五尺の青い火を吹き上げ
鎔解炉がトロケた鉄を吐き出し
真赤の鉄管が地響きと共に倒れる。
水蒸気と灰柱があたりをかくし
ベルトとグレンが天井裏でほえたてる。
鉄梃を手に　ハンマを手に、
獅子のような七百の兄弟が働く
俺の工場は地獄の戦場だ。
だが夜は、
まるで魔物のように無気味だ。
時々ゴーと吠える三階のグレンと、
割増のない居残りのベルトの悲鳴と、
隅田川を上るポンポ蒸気の嘲笑だけだ。

二

――糞！　十一時までの居残りだ！
俺あバイトでも研いで来らあ！

あいつはスパナを動かしながら言った
——穴で一ぷくしてなよ！
一月の川風が灰砂を面へたたきつける。
切場の穴で俺は彼奴を待った。
——兄弟！
　朝の四時から夜の十一時まで
　日本一だ
　全くだ……

彼等は三年前から働いていた
そして十五銭上った。
やつはベルトにまかれて左手をへシ折った。
会社は『不注意』だと一文も出さなかった。
彼奴は一円五十銭じゃ食えねえとこぼした。
彼奴は負けた争議のことを話して呉れた。
——俺あ最後まで頑張ったさ、
　裏切りもの奴！　こいつは人間のカスだなあ！
そして彼奴はつぶやいた、
——も、一と騒動起さなきゃすむめえよ。
彼奴は『民衆の旗』を唱って見せた。
そして曲った左手で俺の肩をたたいて笑った
——お、もう一息頑張ろう！
四十インチをかみ込んだダン車が廻わり始めた。
彼奴はハンドルを握って立ち上り、
俺はスイッチをさし込んだ。

三

俺達が不平と不満をぶちまけた穴、
穴の中は極楽だった。
その夜から
彼奴は無産者新聞の読者になった。
その夜、やつはインタナショナルを覚えた。
その夜から、
彼奴は新らしい同志だった。

「三月十五日」に送る

松崎啓次

二十四のこの俺に
ジャンピングの姿勢だ？
火鉢を持てだと？
ころがった丸太棒
ときほぐした竹刀
手あかと汗で黒ずんだ六本の鉛筆
キサマ等のどんな術が
この俺の口をこじあけると思うのだ？

同志等よ！
君を毆ったその竹刀がいま俺を撲つ
君の坐ったその丸太棒に俺はいま坐っている
やぶれたサルマタに血がにじみ
肛門から鼻先へびりびりと
神経がふるえるごとに
笑ってくれるな俺は思わずうめくのだ
だが同志等よ。俺はさびた鉄くずのように
奴等の前に　くずれ落ちはしないぞ！

夜から朝へ、三月の風は傷にしみる。
がらんとした部屋の片隅に
うめきながらも、俺は楽しいのだ。

この屈辱と、この暴虐と、くるしみとを、
まともに、みんな仲間は耐えて来た。
そしてこの俺も耐えている。
そして、これでこそ俺も『同志よ』と呼びかけられるのだ。

同志等よ。君等は機関車。俺等は燃料だ。
この俺達の××とそれに輪をかけた沈黙を燃料として
俺達の機関車は世界を突破するのだ。

見てくれ、同志よ。
二十四のこの俺が、ジャンピングの姿勢で火鉢をかかえたこの態を
ほら、だが、俺は、
うめきながらわらっているだろう。
石ころの様にだまりこくった野郎共を、
にらんで居るだろう。

同志よ。ぐっとそこで車座になって、
そこで会議をつづけるのだ。仕事をつづけるのだ。
俺はここで石ころになる。そして、
俺が石ころのまんまでいる間は君達はそこで完全なのだ。

同志等よ、そうだ。昨日のように
今日も仕事をつづけてくれ。

ああ　石ころのこの俺に
また、鞭の音だ。
いくじなし、もっとがんばれと
同志のベンタツにかわって心地よく野郎共のぶったたく、尻の音だ。

立毛(たちげ)押えに抗して

上村実彦

赤旗はヒラヒラと風になびき
一年間の血みどろの結晶が
のらくら地主奴に
いま奪われようとしている――そら早く刈れ

赤旗はヒラヒラと風になびき
倍加して来る小作百姓の手ん手には
磨ぎすまされた鎌　磨ぎすました鎌

嵐のように押し寄せて来る警官隊の中に
赤だすきの娘さんの
手早い稲刈り
赤旗はヒラヒラと風になびき

ヒューヒューと鳴る鎌
サラサラと刈り取られる稲
犇(ひし)めき合って馳けつける百姓の群々！

赤旗はヒラヒラと風になびき
この意気で俺達の世界をぶっ建てるんだと
ひろびろとした田の中に　刈り取られた田の中に
農民歌は怒濤のごとく
赤旗はヒラヒラと風になびき！

朝のデモ

仁木二郎

――一九二八・一二・二四新労農党結党大会解散命令に抗議す――

「密集しろ」
　熱のこもった低い声が水のように拡がる。
がっきり俺達の腕が組まれ
太く　生命綱(いのちづな)のよりが締まる
街を貫いて
俺たちのうらみと怒りが
冷く暗い十二月の朝空をつき上げる

ばらばらにサーベルの束が崩れ
ぞくぞく
労働者と農民の強い足跡が
歳暮にやつれた街路の上に
抗議のしるしを刻みつけて行く

『両国橋を渡れ』
俺達の足は激しく橋板をふみ鳴らす
おお
隅田河は　ある同志が歌ったように
俺達の河だ
濁ってる、重っ苦しい
暮しのように流れてる
おお
今日　この河を横切って
俺たちのデモが　勝利への行進を急いでいるのだ

今日　あいつらは　結党大会を
たたきつぶした。
だが何で　俺たちの太く　よられた
労働者、農民の生命綱が
たたっ切られよう。

兄弟！

うらみに　首をうなだれるな！
すこしでも　怒りの歩みをゆるめるな！

広場より

――メーデに捧ぐ――

切り飛ばされる鉄片だ
輝いている
燃えている
焼きつける
　俺達の胸に吸いつく鉄片
おお、五月の空の下で
　演壇に叫ぶ同志の熱叫！
　朝の微風を胸に受け
　新しい情熱は　たぎりたつ
広場に
俺達は円陣を作り
俺達の旗　×旗のはためきを護る

俺達の日
俺達の歌
　集団のどよめきは
燃え上る××への熱情だ。
太い　太い意志の渦巻きだ。

がっしりと組合う腕と腕
俺達の肉壁は広場より拡がる
　聞け万国の労働者
　轟き渡るメーデーの
示威者に起る足どりと
未来を告ぐる鬨の声

　俺達の日
　俺達の歌
燃える×旗
渦巻く合唱

おお、国境を越えて叫び交わす
俺達の歌

みなぎる力、突き破る力　俺達の肉壁は続く
俺達の地響(ちひびき)する前進は続く
……我等が歩武の先頭に

　掲げられたる自由旗を
　守れメーデー労働者
　守れメーデー労働者

輝いている
燃えている
俺達の先頭に
俺達の旗、×旗のひらめきが

故渡辺政之輔を悼む

大谷圭三

一九二八年十月七日
波青き基隆港の汽船の上で
輝ける日本労働者階級の指導者
英雄児渡辺政之輔は
鉛の弾丸に脳漿を打ちぬいて
苦難と闘争のその生涯の
最後の帷(とばり)をひきおろした

彼自らの手によって。
（ああ、誰か自らの手によって。）

我等の渡辺政之輔は
荒狂うテロルの中に
イバラの路のなかば
解放の光を見ることなく
自らの顔面を粉砕し
自らの紅の血潮に染まり
熱帯の水煙あがるところに
冷い屍となった
彼自らの手によって
（ああ、誰か自らの手によって。）

オレ達の渡政は死んだのか？
彼自らの手によって？
否　否　千べんも！
少年のその日から
プロレタリアの鉄の訓練に生きて来た彼
物心ついたその日から
血の戦いを経て来た彼
まことのプロレタリア
まことのコンミュニスト
渡政は死んだのか？

彼自らの手によって？
（ああ、誰か彼自らの手によって。）

誰が彼を×したか？
下手人はどいつだ？
怨みの三月十五日
オレ達の血と肉をそぎ
オレ達の前衛を噛みとった
その手　その歯だ

同志よ
カールとローザを虐殺された
ドイツの兄弟の復仇の誓いを思い出せ
オレ達は誓おう！
同志よ
復仇の血に燃えるドイツの兄弟と共に
同志を奪われた
全世界の兄弟と共に
おお　我ら国際プロレタリアートの名の下に
千行の涙を焔とする熱情で
オレ達の渡政の××を誓おう。
ああ、日本労働者階級の
輝ける指導者渡辺政之輔
君が「冷き手より落した重大な任務」は

このオレ達が「拾い上げる！」
渡政は死んでも
その精神は死なないのだ
オレ達自身がその精神なのだ。
同志よ
われら手を握りマナジリを決して
この屍の前に誓おう
××を！
日本労働者階級の××を！
渡政の××万歳
日本×××万歳！

勲章

宮木喜久雄

それは眼に止らない位の小さな新聞記事だ
戦死病歿した六十三人の兵隊に
勲章をくれる記事だ
直接交戦に戦死したものは一番いい××を
流弾にやられたものには少しいい××を
日射病やチブスで死んだものには安い××を呉れるのだ
六十三人の息子が死んだかわりに
百二十六人の両親が　またその兄弟　息子が
勲章一つを貰うのだ。

××一個は何銭かで出来る
有難い年金で米の幾升かは買える
それが苦労して育てて来た息子の××だ
夫をとられた妻の手にこっそり残ったものだ。

やがて無名戦士者の碑に花環が飾られるだろう
その前で小学生たちは
×を×う弔詞を教えこまれ　頭を下げさせられるだろう
雇われた楽隊は悲しみの曲を高々と吹奏するだろう
この時　これらの小さな魂に
×菓×に似た××を貰うためには
このように×ななければならないと　×共が教えこむだろう。

プロレタリアの子守唄

大滝友二

ねんねしな　坊や
おっ母さんがお前を抱きしめて言うことをよくお聞き——
どうしてお父っあんが
今夜お前と一しょに眠れないか？
兄さんの墓場に行ってそのわけをお聞き
貧しい沢山の人達にとっては
ただひとつ呪いでしかない戦争(いくさ)で
いのちを取られた兄さんのうらみが
そのわけを墓場の石に刻みつけたでしょう。
——だが兄さんの墓場は
お前とおっ母さんが寝んねをしているここにある。

ねんねをしな　坊や
あしたの朝おめめが醒めたとき
お父っあんはお前を抱きしめていてお呉れだ
お前は知らないが
なんにもしないのに
お前のお父っあんは日本中のお前のお父っあんの仲間の
　人達と一しょにくくられて
長いこと牢屋につながれている——
どんなに酷くぶたれても
決しておじけたことのないのがお前のお父っあんだ

さあ寝んねをしな　坊や
お乳をたんぶりお飲み
そして早く大きくなって
兄さんやお父っあんの仇(かたき)をとってお呉れ！
お前がどんな鞭うちにも怖れない強い男になって呉れる
　のを
お前のお父っあんは望んでいる
お前の兄さんの墓場は
お前が大きくなって
苦しみにたえられず
戦わねばならぬ何処にでもある。

奴等の仕打ち

岡田頌二郎

「穢多(えた)を穢多といったがどうした」
やつらはキットそうぬかした

だがおい等はふんづまった烈火で
その粗いへしゃげた侮蔑をぶち焼いた
そのノド笛を数えきれぬおい等の手で
なんべんも捩じ伏せた
だが奴等の性根は、奴等の仕打ちの一切とおい等の恥を
　根こそぎつぶさねえ限りたえるこったあねえ
長野や
三重松坂や
いままたおい等の村や
やつ等はいつまでもおい等の表情を酷に掻き上げやがら
あ
やつらの仕打ちの中で、泥をたがやしたり
銅をながしたり、皮桶で鞣されたり
織物工場で一緒に晒されたりする
かわいた貧乏で一ぱいな仲間らは
親身で爪垢ほどもそんな事は言わなかったぞ
おいらもお前らも同じ豆だこの手だといって、反対にい
　く度もおい等のやることを手伝ってくれてらあ

大体こうなんだぞ
みんな聞くんだぞ
なんでもねえのによ
昨日、松本の倅はお役場の倅に
耳たぶを引っぱたかれたぞ

ケモノみたいに下劣に畜生を塗りたくられたぞ
それを、あの皺の太い親爺さんが
おとなしい頭と苦渋面でかけあいに行ったんだ
おやじさんはおとなしいからおい等に知らさずに行った
そいつがどうだ？
やつらはおい等と違った印絆天を呼んで
冷酷にイカクさらした
おい等はタオ村の床屋でそれを聞いたんだ
こいつがどうして暗のルッポにもみ消せる？
暗のルッポは火をつけておい等にじかにからみつかあね
おい等は晩になっておやじさんの家に押しかけた
おやじさんは屈辱でふんづまった胸を
顔面の皺やよれ筋を動かして話したよ
あの眼やにの目になみだ汗をつけてよ
そいつはおい等の怒りをも一つ突き上げずにゃおかなか
った
いくらおいらが無学にしろ、こいつがどうして我慢なる
か
おいらはおいら同志いつものようにかたまらないで居れ
るもんか
押え切れねえ怒りをぶちまけ
そのぶちまけが胸んなかへ火を移さねえで居られるもん
か

むかしおい等の仲間たちは
駐在所とやつらの屋敷の板床を竹槍で疵だらけにした
我慢ならねえ恥を竹槍の先で塗り返した
おぼえとるか　みんなよ
その仲間らの何人が、今年の三月、カンゴクへかっぱら
　われたことはみんな知ってらあね
だが　だからこそ、余計にそいつは
じかにおい等の腹ぞこに通ってるぞ
おい等の恥と怒りはおい等たちのやり方で
おい等たち自身始末するんだぞ
みんなあいつらをぶちのめすための
おい等の眼付と腕っぷしを鋭くしろよ
みんなそいつを焼けついた胸んなかに
いまこそたえず怒りでぶち切れそうな胸んなかに
たまごめするんだぞ!

拷問を耐える歌

田木　繁

お前らの手の皮と俺らの頬の皮とどちらが厚いか
お前らの鉛筆と俺らの指骨とどちらが太いか
お前らの指先と俺らの喉笛とどちらが先に押しつぶれる
か
お前らの竹刀と俺らの腕節とどちらが逞しいか
お前らの金を打ちつけた靴裏と俺らの尻っぺたとどちら
　が堅いか
それをハッキリ呑みこませてやろう

無表情な俺らが
そろそろ焦り出すお前らに
いよいよおし黙る俺らが
いよいよ喚き立てるお前らに
それをハッキリ呑み込ませてやろう。

縊り殺して水をかけ
蹴り殺して水をかけ
蹴殺して水をかけ
それが商売の
それで月給の上る
傷をつけずに殺す術を知っているお前らに
それをハッキリと呑み込ませてやろう。

呑みこませてやろう　はっきりと
鉛筆
革紐
竹刀

鉄棒
指先
手のひら
靴裏の前に
声は立てずに気を失って行く俺らであることを
叫びは洩らさずに息を吹き返して来る俺らであることを
俺らはプロレタリア　俺らは機械　俺らはハガネ　俺ら
は不死身だ

汽車の中で

秀島武

労働者と農民の政府をつくれ！
これこそ俺達の合言葉だ
岡山二千の農民蹶起す
その岡山へ俺は矢のように走る

汽車の窓にはまっかな夕焼
家並はみるみる遠ざかって行く
電線が高く低く波を打って行く
あれは三坑だ！（廃坑になったと聞いている）
すすけた古ぼけた大煙突

ペッショリ崩れた納屋
夕焼の窓から波をうって見える。

六十三人の男女坑夫が
坑(あな)の中で焼け死んだ坑山だ
坑口へ押しかける群衆——
村々の早鐘——
爛れ　ふくれ上った死骸——
号泣——
遠い幾多の追憶を
汽車はつぶての如く引きちぎって走る。

あの白壁の向うに見える藁葺屋根
あそこに俺の
そして　あの水車の傍(わき)の小路
過去の一切の喜びと悲しみとが眠っているのだ
俺は思い出す　俺は思い出す十五の時
そうだ　七年前——村を出た日だ
駅まで送って来れなかった親爺は
線路の側のあの小路に
肥えたごを下して立っていた
皺深い瞼をしばしばさせ
口を半ば開けて
じっとあの小路に立っていた

その時俺は顔が出せなくて
窓の隅ッこに顔を押しつけていた
汽車は物凄い爆音を立てて走る
わき出る幾多の追憶を
綿毛のように引きちぎって行く。

日蔭の落ちて行く山懐(やまふところ)に
俺はチラリと森の梢を見た
親父だ!
おお　前かがみに畑から帰って来る
俺だ!　お父ッあん!　ここだ!
おおお前は俺を見ない
矢のように親爺の姿は
遠く　小さくしぼられて行く
すいついていた長い糸がぱったり切れた
俺はがっかり腰を下した
ホホカムリした親爺の姿が
頭の中をかけ廻った
汽車の汽笛がかすかに頭を貫いた
岡山!　そうだ!
俺は固くコブシを握りしめた。

お父ッあん!
お前は何にも知らないだろう

数年来俺の居所さえ知らない
俺は今　岡山へ向っている
「労働者と農民の政府をつくれ」

お父ッあん!
岡山二千の農民は起ったのだ
今——
世界中のあらゆる労働者と農民とは
××の×をしっかり握った
そしてそれは
弾丸の如く飛ぶこの汽車のように驀進しているのだ
俺は今汽車を下りてお前に会えない
だが　お父ッあん
いや　俺は何も云わないのだ。

野性の花束

佐藤獄夫

野を行け、
赫っと明るい太陽の光をいっぱいに浴みて
清楚な風を呼ぶ灌木の青葉、

ごく質素な雑草、
おおそれらの中にはなんと充実した意志、
真個の平明、のびのびした張（はり）があることか。
優しい緑の葉がくれに
みずみずしい木苺、さくらんぼうの果実（み）、
おお私達は手を染め口をよごして
なんと野蛮な喜びを食べられるであろう。
原生林よ、
とても大きい日本の青天よ、
不規則な樹立、不恰好な原野よ、
おおそこには少しも飾られない整頓さ
動かすことのできない自然の理法、
自由と愛情に満ちた美しさがある、
立派な誰しもが享有できる深い恵みがある。
おお野に行け、喜ばしい讃歌に心もはればれとして行け
おおっぴらな初夏の野を
美しい艶に輝く初夏の野を

寂しい音

平沢貞二郎

裏の井戸端で
今夜も米をといでいる
しゃりしゃりしゃりしゃり
なんと寂しい音か
それでも明日一日は
一家四人が生けるというものだ

一人の少女の死

あすこの道はもう二度と通るまい
あの悲惨な轢死体を見た私はそう決心した
だのに今朝
空にあげられた凧のようにするするとたぐりよせられて
行くのはどうしたわけか

線路はいつものようにキラキラと光っていた
原っぱの砂も家も何事も起らなかったかのように
子供は砂の上で犬を追い廻し
元気のいい鞠の音をぽんぽんさせていた
すべてはケロンとした顔だ
私は涙にゆがむ表情を苦が笑いに換えた
（一人の少女の死

自然は蘗すびが灰になった事よりも軽くあつかってい
る)

夜刈りの思い出

中野重治

わたし等が夜刈りをせなんだろうかよ
わたし等の腰骨が細かったろうかよ

なるほどお前等は裁判所を連れて来た
せっかく丹誠した何町歩というものがみすみす札を立て
　られた
そしてわたし等が見廻わした時
男という男は残らず抜かれて居た
で　それで　わたし等がちっとでも立ちすくんだかよ
夜刈りじゃ
動員じゃ
わたし等の声がお前等の耳に聞えなんだかよ
鋸鎌の目が立って居ず
手甲脚絆で身ごしらえしたわたし等の自転車が
村から村へ稲子のように飛ばなんだかよ

松明は田の畔でぼうぼうと燃えて居た
火どろは天を焦がし
油煙はお前等の女房の慴えた頸首に取りついた
そしてわたし等は
狐色の粳も唐黍色の糯も一株も残さなんだ
草鞋がけの駐在所にも指一本ささせなんだ

そしてお前等は又しても男どもを抜いて行った
痛ましい縄つき姿が村境を出て行ったあの三日の日から
　もうかれこれ半年になる
で　それで　わたし等の所にボロと古タイヤが無かろう
　かよ
一たらしの石油が無かろうかよ
それで拵らえる松明の数が
お前等の屋敷の垂木の数より少なかろうかよ
娘等は息子どもの片われ
女房等は亭主どもの片われ
なんぼお前等が法律を変えて見たところで
町で拷問される男どもの声をわたし等に聞えさすまいと
なんぼ監獄の壁を厚々と塗り上げたところで
それで　お前等が　秋の来るのを止められると思うて居
　るのかよ
秋の来るのを
秋の来るのを

おお、村の檀那衆等よ
あかあかと松明に照らされて
わたし等が夜刈りをせなんだろうかよ
わたし等の腰骨が
細かろうかよ

あいつ安んぜよ

小林園夫

1
くにのこと
かつてあいつは話したことがない。

2
自分の時間というもの
あいつは恐らく持たなかった

3
一番いやな仕事を引受けたあいつ
どんな困難にも歎声を漏らさなかったあいつ

4
機械の如く動いたあいつ
剃刀の如く切れたあいつ

5
追跡の網の目をやぶるひょうの如きあいつ
憎い位大胆不敵なあいつ

6
あいつ、あいつ
畜生！　あいつはようよう捕った

7
怯む俺の心を鞭った
いつもあいつの確信に燃えた眼だった。

8
浮世の幸福をしたう俺の心を叱りつけたものは
あいつの燐のような眼だった

9
俺の心が
ちっぽけな仕事を冒険でふくらんでいる時
黙々としてあいつは百倍の仕事をした

10
たとえ百万のスパイがボウフラの如く湧こうと
最後まで信頼し得るあいつだった

11
たとえ俺の心が信じられなくとも
あいつさえ信頼して居ればよかった

12
畜生！　あいつは捕まった

あいつは帰っては来ない

13

外は霙だ
夜は深い
鉄筋コンクリートの天井を睨んでいるか、独房のあいつ

14

二日のすき腹を一杯の牛めしで暖め合った
あいつと俺だった

15

氷雨の闇を突いて
ぐしょ濡れて
集会へ急いだあいつと俺だった

16

豚小屋から帰るとき
俺はいつもあいつの頑丈な手と
朗らかな笑顔を恋しがった

17

あいつ、あいつ
帰えって来ない、あいつ
生くる日の限り囚われのあいつ
二十九日三度のむし返しが何だ！

18

打たれ、蹴られ、足が立てなくなったあいつ
りんの如きあいつの眼が
檻房の金網から俺に光を射込んだではないか

19

あいつはいない、あいつは帰らない
しかしあいつの吹きこんだ熱、射込んだ光は、
俺の胸に燃え、数千の同志の胸に燃えて
世界を焼く炬火となるだろう

20

あいつ、
あいつ安んぜよ、暁は近い！

〔附記〕 二十九日を三度蒸しかえされて、私は心臓脚気で苦しんでいる。歩けないんだから仕末が悪い。
この詩は檻房でひまにまかせて書いたものだ。
――歩行の出来ぬ入営兵を想像して見給え。
寒さの中に単衣とボロボロの富士絹のワイシャツと毛糸のチョッキで震えている。
――心臓がまた痛む、皆丈夫でいよう――
兵営の街のある旅舎にて

ロボットの手記

幹(ミキ)　愴(ソウ)　太(タ)

いつの日に役だつものか
殺人の
用意のためにみがく銃剣。

一切が
上官という名のもとに
ひきすえられて　黙る、炎天。

ふと眼を　ひらいてみれば
営舎だった
自分はペットの一兵卒だった。

怒鳴られたり　からかわれたりして
十日ぶん
一円五十銭の俸給をもらう。

（歌集「二重人格者」より、昭和三年六月刊）

呪わしき世相

井上義雄

足のない十字徽章の廃兵を
車にのせて
石ケン売る妻。

たれのために
足を失くした、廃兵よ
み国のためと名は美しいが。

（歌集「煉瓦にひしがれた土」より、昭和三年四月刊）

チリメン工場その他

柳田新太郎

烈風を衝きて列は出づ真紅の旗巷塵のなかに高く掲げられ

若き戦士の帽子の破れみやりつつ樹蔭に佇つわが胸にひびきくるもの

重い歩調しかも粛々として続け、銘旗はすでに遠くゆきたり

チリメン工場

蒼しょびれた娘の手で織った絹を裁ち長い振袖がつくられる
青春をすりへらしてささえた製品を仇の飾りにするのは口惜しかろう
おのれの命けづって織った絹だ血痰でべとべとに染めてやれ

（雑誌「詩歌」昭和三年十二月号）

第十回メーデー

矢代東村

どの顔も
みな押えきれぬ不満のいろに
ひしひしと行列から
迫りくるもの。

検束。
また検束。
検束だ。
しかし思え、検束しきれないものをみなが持ってる。

検束するなら
いくらでも検束するがいい。
行列はつづく、
あとから、
あとから。

見ろ！
司会者のあのよれよれのネクタイを、
だが何とひきしまった口だ。
かがやいた眼だ。

今に必ず――
今に必ず――
歩調をあわせて、行列は進む。
この言をきけ。

（雑誌「詩歌」昭和四年六月号）

鎖の一環

南正胤

暴圧の手のおもみじかに感じられるこの新聞の憂欝な匂い

君、君、その一環さえぶち切ればバラバラになる支配の鎖だ

頑丈な支配の鎖の一環へヤスリをあてる音がきこえる

（同上昭和四年二月号）

小作争議

飯田兼次郎

労働者農民党の旗の下にと太々と書きたる旗を地に突き刺せり

手織縞の小作農婦の負い絆纒児がかざしたる争議旗小さし

鉛煮るガスの炎青し外交のとどかぬ隅に人が立っている

（同上）

百姓の味

大鳥居金一郎

屑米もみっちり喰えぬ百姓のいるまえで米の飯がすてられる

百姓が腹いっぱいに飯をくってはたらける日は来そうにもない

はっきりと言ってやりたいまずしさの気持おさえて人と向きいる

（同上）

伊沢信平

旋風の中へ！

聴衆の気勢がぐんぐん高まってゆく場外はいつかぎっしりと警官が張込んでる
奴らに小突き廻されている友の引裂れたシャツを留置場で受取って来た

犠牲者家族慰安会

巡査らがにらむ人なかに犠牲者の子は眉あげて歌いはじめる

五　月　祭

公園の内外に和するときのこえ大旗小旗ゆらめき来る
今日こそとかかげし旗の下をゆく人らうたえり拳ふりふり

浚　渫　船

岡　部　文　夫

たくましい仲間の腕が機械を廻すとき見ろ浚渫機はがっくり上がる
飯も食べないで寝ている俺のすき腹に奉祝の花火がひびきわたった
俺達の不平がみんな書いてあると仲間は無産者新聞をもちこんでくる

廃　兵

戦争の土産がこれだと指のない摺古木の足をつきつけてやれ

パ　ン　だ！

パンだ！　パンだ！　パンを与えろ、失業者の悲しい声が街にきこえる
ビラまいて帰りの路に立ちよった一膳めし屋のあたたかい汁
鐘紡の絹靴下には女工等の涙と血とがしみこんでいる

街頭進出

前川佐美雄

路上

築造工事にたたきこむ生命(いのち)いくばくぞ今日もミキサは廻されいる

ルラは廻るミキサは進む七月の炎天下の工事はいま遮二無二だ

両国橋

両国橋をわたれば我等の会場だ薄暮の街にわきあがる歌

俺たちの生活(くらし)のようにどすぐろい隅田の河だきかさに流せ!

ある集会

とどめがたく胸はとどろく今日の日よ銘旗の高くかかげられたり

永代橋

坪野哲久

あぶれた仲間が今日もうずくまっている永代橋は頑固に出来ていら

東京のどてっ腹だよ隅田川は重っくるしく渦巻き流れる

嗚呼労働葬

渡政の闘志にかがやく祭壇の赤旗よ! もっとひるがえれ

無新二一四号

どうしても泣けてくるのだ山宣の死面(デスマスク)が今日掲げられただ

血みどろになって倒れた渡政よ! 植民地の埠頭は石畳

争議断片

古田富郎

機械の音ぴたりと止んで革命歌うずまきおこる職場のなかに

赤旗が頭上にはためく小ぜり合いわれら腕組み雪崩れ押しかける

せり合いに殴ぐられたのか身の節々痛み覚える留置場のなか

町の夜は更けて静かだこっそりとビラ張りいそぐ争議のビラを

かの男もとうとうしゃべってしまったかと暗い檻房にさびしくねむる

新労農党結党式

相田省二

いけないいけないと思っても独りでに涙が頬をつたう拍手しながら

苦闘八ヵ月の結果だこの中止の連発と拍手のどよめき

サーベルが左右に飛びまわるのを横目で見ながら押してゆくデモだ、デモだ

工場のなか

佐藤英

機械にはさまれて死んだ父の三年忌だどす黒い血がおれによびかける

俺は人夫だ

何匹来たと言われてぐっとこみ上げる怒りおさえて車ひ

きだす

奴　等

開会の時間が迫り奴等はものものしく顎ひもをかける

鉱山から

佐藤栄吉

霙の日だ又してもダイナマイトに傷(や)られたという鉱夫が町へ担がれてゆく

やれこれで明日の朝まで俺の体(からだ)だとどかりと炬燵へよろけこむ父

戦死した夫の写真手にさしあげ泣いて奉迎した妻子もあるという

（以上一九二九年メーデー記念「プロレタリア短歌集」より、昭和四年五月刊）

横山賀茂水（林二）

せきして二三人ひなたにかたまっていた
またうなりだした機械から夜をかえれないでいる
朝からさむい石はこぶ仕事をつづけている
一日働いてきてあすの仕事がない夕焼の下にいる
晴れた大きな門が罷業されているのだ
仕事はじめろというのだ汽笛が鳴っている
まだ夜明けない背をまげてはたらいている
ぺったり虫がついている灯が機械の上
どこも寒くてきょう崩す崖の下に集っている
罷業にあつまってきた煙突が見ている
まだ夜業がある水をのんでいる

機械にうつむけた髪のおちそうなかんざしです
背をまげねばならぬ仕事に老いているのか
星空へなにもかもぶちこんで火を焚きあげた
さむいレールではたらく唄をわすれない
土管投げだして海風の雑草だ
星夜がつづいていてまだ罷業されているドックだ
夜業が明けしらんできた痰はいている
機械から放たれた二三人で月夜を歩いている
せきがとまらないベルトが夜をうごきだした
争議の朝の氷りついた空に日がてりだした
明けしらむさむさになってきた歯車の歯
うしろすがたがみんな深夜業にかかるのだ
罷業してからの空が春らしくなっているだけだ

せきが夜業から放たれてゆくのだ
日がなくなってしまったビルジングの壁の靴みがきです
旗をまもってべっとりぬれた一団がゆくのだ
唆きこむ目の前歯車がかみあっているのだ
機械へのびてきて月が十五夜だった
聞け腕をくんで唄わずにはいられない歌なのだ
仰ぐ天井も寒夜のベルトの交錯
組織がなったおれ達のしずかな朝の海だ
デモが流れてきた、散った、舗石の血
夜通し焔を吹きつけるボイラアについてろという
もぎとられた真赤な旗だ目にしみついている

栗林一石路

けさはストライキとなった船の煙突
土掘る仕事があって朝鮮人の顔がやけている
なにもかも月もひん曲ってけっかる
くらしの足しにはなるほどの白い繭です
大根の虫がとりきれない旱の畑にいる
これから秋の母に繭すこし売り残しある
何かしら毎日銭がいるくらしの朝顔がすがれ
組み重なった鉄骨の中で暮れてくる火花を散らす
太陽がどろどろで土工らの背がみなうごく
くもった太陽が落ちようとするに鶴嘴ぶっこむ
これだけの銭で一と月はたらいて落葉した

宿直で明けた元日の空のなにもない
鉄索が空をひっぱっていて一月一日
ぎちぎち杭に鉄索が捲きつけられてある霜
巻取紙を食っちまった機械と更けている
雪風の地べたで今日の出来事のビラ書いている
もう夜勤に子の紙鳶をおろさねばならぬ
寒夜のビルジングからもう出てくる人がない
鉄を叩いて人間が空のどこかにいる

橋本夢道

雪のガード下で熱いたべものすすらせている
血をはいただまった顔がうえ向いて天井の夜の蠅が黒い
潜水作業の水のおもてにわく泡を仕事がなくてみている

この集団が動くのだまっかの旗がつづくのだ
芽ぶくプラタンに沿うてゆくメーデーの行列だ
雑草に昼寝の風が吹いてここも人間があまっているんだ
ものうい通夜の星空へ夜業のけむが黒々とのぼっている
休まず行軍さそうという炎天の喉へ一口しか水筒になかった

新井夜雨

烈日の鉄骨にしがみついている
ひゆる指先を、ビラをとってくれない
寒夜の鋪道がビラばかりになってビラ配りがひとり
螢に水をやって夜勤から戻っている子だ
ガラス戸に月ひえてきて活字ひろっている

わたすとすてられてゆくビラだわたしている
もう落ちかかっている月が十五夜である交換手たち
それからまたもそもそと活字ひろいそめるのであった
雨で仕事がないかたわらに子も雨を見ていた
月の寒さいうでもなく坑口に二三人立った
明日は金にしよう繭のまえの老いしちちはは
明日からどうしようもねえおっ母アのところへ出征祝の
旗立てにきた
女工になってゆきますと書けない手紙書いてよこした
おいらの血すすりこくって奴らの稲はらみやがった

上野冬生

びしびし凍ててくる手で自動車洗っている

起重機にひっかかって更けた月であった
暗い機械がなりたててひっぱりこまれるように眠い
機械の唸りがひろがってゆく冬の空がからからだ
また蚕を捨てるほかなくて夕餉の暗い板敷に座る
くらい月に顔むけてから地を掘りはじめた
俺らの田圃荒し銃剣光らせて行った
標的にするためおっ母アからふんだくって行きやがっ
た
貧乏な港で時雨たり月を出したりしているわい

浜口弥十郎

職をさがしにきょうも空へ出ていった
師走のゆききのかたわものとて這うのです

大掃除の鼻の煤かいで夜業におくれまいとする

小沢武二

日なた押し合っていて誰にも煙草がない
雪風の電線から落ちまい仕事している
堅い腰掛で酔っていてきょうは仕事があったんだ
巡査の顔が折り重って来て旗をかくすところがない

小林空車

ここも使ってくれない門番が居る
火を焚きだした夜業をしろと言うのか
ぺっとり濡れて今日の賃金が同じだ

ぶっ倒れそうな製糸工場の空の曲った月
仕事のない社会の一隅の赤いビラ
海の落日を見ている俺は労働者

土呂工夫

食うためにこんな小さな子が花売っている
巡査をやっつけろと真黒な渦の中の顔々

野田混迷人（神代藤平）

凍った大地に鶴嘴ぶっこむ人々
反逆の唄を凍った大地に投げる
石炭の山にまろびふかく考えていた

神山木石水

朝から冷えている鉄骨で働けというのだ

吉田立鳥

貧乏だから貧乏だからと母を慰めてきた
いまこそ風にさからいビラをぶちまく
何でもやってのける力をきょうもだまって働く

千原昧旦

硫酸工場からくる風にむせている生活だ
カンカン夜更の火を散らすまっくろな人間でいた

工場のテッペンの月へサイレンを鳴らす

中野風葉

このレールの果てのどこかに坑夫として働いているのだ
干されたシャツはわがシャツで凍てている

中村苦味生

夜更けの監房の大きな錠を見ていた
鉢花に照りかげりする捕縄巻いている

鷹取源一郎

春めく枕木に憩うている労働者です

夜の凍てた波止場の飢えた犬がいってしまった

奥村竹路

煙突も錆びて歪んだ風景が野末にある
夜業している手に知らない虫でとまろうとしている
あぶれて日向にさむく動いている
手足もげた人形で露路で遊ぶよりほかない

横山梨青郎

ペンチの顔が日なたになってくるのであった
どろどろおし流れる血をなめている機械だ
おふくろの手の皺顔の皺六十年

ちびた靴ひきずりひきずり東京の陽がおちる

浪本蕉一

水道の凍てた夕暮でびら貼りに来た
蝶が飛ぶ花が咲くだが俺達は飢えている
ぺっとり土工の血がかかった羊歯の葉

熊沢沙郎

月夜ひらひらと争議のビラがふる
月さし現代社会の鉄骨のあみ目

柄沢丹郎

冷飯かっこんで今日も小さな家から出てゆく

革命語る友の頬やつれ窶ぶる

杉崎正作

失業つゞく夕べの街に風が出る

機械にしばりつけられている生活に月が出た

北村冬陽

大根葉のきれぎれの汁呑み働く

東京の真中にも泥だらけの俺らの仲間みつけた

横山林二

スチームハンマアがまた一人食いやがった

日南ぶちまいて行った争議のビラだ

蛙のように罷業決議を笑いやがった

あいつも裏切って行った草の上の煙草

解説

蔵原惟人

一

この巻には一九二八年（昭和三年）四月の全日本無産者芸術連盟（ナップ）創立、「戦旗」創刊から、一九二九年の六月ごろまでに発表された作品がおさめられている。

ナップが創立された一九二八年の二月に、日本最初の普通選挙法による総選挙が施行され、無産政党と称されていた社会民衆党、日本労農党、労働農民党が総計四九万票を獲得し、しかもそのうちの二〇万票が共産主義的な傾向をもつ労働農民党の得るところとなった。このことは当時の日本における階級闘争の激化、大衆の左翼化を示すものであった。

しかも重要なことは、普通選挙法を通過させた一九二五年（大正一四年）の帝国議会が、同時に治安維持法を通過させて、それもただちに実施されたという事実である。第一次世界大戦とその後の時期には、世界と日本に民主主義運動、労働運動が高揚し、政府はその風潮におされて形だけでも普通選挙法を制定して、民主主義的な若干の政策を実行せざるを得なかった。しかし同時に政府は、この民主主義を日本の支配的な地主や資本家などにとって無害な限界におしとどめておいて、それが「国体を変革し」「私有財産制を否認する」ような革命運動にまで発展することをあくまでも阻止しようと決意し、

ここに治安維持法を実施するにいたったのである。

しかしそれにもかかわらず、この治安維持法の対象になる日本の革命運動は、この時期に急速に発展していった。日本共産党は一九二六年の十一月にその再建大会をもって以来、とくに一九二七年七月のテーゼ以来、ようやくその陣営をととのえ、一九二八年二月の第一回普選法による総選挙カンパニヤを通じて、その非合法の存在を大衆の前に示し、労働者、農民、インテリゲンチャ、その他の勤労大衆に、ますます大きな影響力をもちはじめた。中央機関紙「赤旗」が創刊され、日本共産青年同盟が創立されたのもこの時であった。

それは世界的には中国革命運動の発展の時期であり、ソヴェート同盟における第一次五カ年計画開始の時期であったが、同時にそれは世界におけるファシズム擡頭の時代でもあった。日本でもその前年の四月に軍部内の反動的強硬分子と結びついて登場した田中義一内閣は、国内における反動体制の樹立と大陸侵攻を企図していたが、二月の総選挙を通じて日本共産党がその活動を公然化したのを機会に、革命運動全体にたいする未曽有の弾圧にとりかかった。

一九二八年三月十五日の未明に全国にわたって数千名の党員、非党員が検挙され、そのうちの四五〇名が治安維持法違反で起訴された。ついで四月十日には合法的に活動していた労働農民党、日本労働組合評議会、全日本無産青年同盟が解散を命ぜられた。しかし政府はこれに満足せず、その四月の議会に治安維持法改正案なるものを上程し、これが審議未了となるや、世論を無視して六月に緊急勅令の形でそれを公布してしまった。

改悪された治安維持法は、「国体を変革することを目的として結社を組織したる者、又は結社の役員其の他の指導的任務に従事したる者」を死刑または無期、もしくは五年以上の懲役あるいは禁錮に処し、「情を知りて結社に加入したる者又は結社の目的遂行の為にする行為を為したる者」を二年以上の

有期の懲役または禁錮に処するものであり、「私有財産制を否認することを目的として」同様の行為をなしたものを十年以下の懲役または禁錮に処するものであった。この治安維持法が、さらに拡張解釈されて日本国内のファッショ体制の強化と中国その他にたいする帝国主義的侵略に大きな役割をもったことはよく知られている通りである。

しかしこのような弾圧と死刑をもってする脅迫にもかかわらず、それは高揚したこの時期の革命運動を阻止することができなかった。大検挙ののち共産党は急速に再建され、その十一月には解散された評議会にかわる日本労働組合全国協議会（全協）も結成され、日本の革命運動はいぜんとして上昇線をたどりつつあった。

このような政治的情勢のうちでナップが結成され、日本のプロレタリア芸術運動が発展し、開花していったのである。この時期のプロレタリア芸術運動の得失を問題とする場合にも、われわれはこのような政治的情勢を考慮に入れて考えなければならない。

日本の革命運動の未熟さ、とくに「統一の前の分離」を主張するいわゆる福本主義と、それに反撥する左翼社会民主主義者の強い影響によって四分五裂した日本のプロレタリア芸術運動は、一九二八年のはじめからようやく統一の方向に向っていった。当時左翼的立場に立っていた主な芸術団体には次のようなものがあった。

一、プロレタリア芸術連盟（機関誌「プロレタリア芸術」、中野重治、久板栄二郎、谷一、鹿地亘、窪川鶴次郎、森山啓、江馬修、その他）

二、労農芸術家同盟（「文芸戦線」、青野季吉、前田河広一郎、金子洋文、小牧近江、葉山嘉樹、小堀甚二、里村欣三、平林たい子、黒島伝治、鶴田知也、岩藤雪夫、その他）

三、前衛芸術家同盟（「前衛」、藤森成吉、山田清三郎、林房雄、蔵原惟人、上野壮夫、川口浩、槇

本楠郎、佐々木孝丸、村山知義、永田一脩、その他）
四、日本無産派文芸連盟（「解放」、「尖鋭」、小川未明、江口渙、村松正俊、松本淳三、中西伊之助などによって創立されたが、間もなく小川、中西、村松、松本は脱退し、江口渙、内藤辰雄、越中谷利一、細野孝二郎などが残った）
五、左翼芸術家同盟（壺井繁治、江森盛彌、三好十郎、上田進、明石鉄也、高見順、その他）
六、農民文芸会（「農民」、犬田卯、石川三四郎、和田伝、加藤武雄、吉江喬松、中村星湖、中山義秀、黒島伝治、山川亮、鑓田研一、佐々木俊郎、その他）
一九二八年一月の「前衛」で私は、これらの各団体が、「その組織的ならびにイデオロギー的独立を保持する」ことを条件とする統一連合を提唱し、それがいれられてその年の三月十三日に日本左翼文芸家総連合が成立した。これには前記六団体の他に全国芸術家同盟、闘争芸術家同盟、辻馬車同人、帝大同人雑誌連盟有志、および個人として小川未明、山内房吉、大宅壮一、松本正雄などが参加した。ここに一九二五年のアナーキストと分裂する以前のプロレタリア文芸連盟よりもさらに広はんな左翼作家の統一戦線がいちおう出来あがったわけである。
しかしこの総連合の組織と並行して、前年末から進められていたが、芸術理論や芸術運動方式の対立によって行きなやんでいた前記プロ芸と前芸の合同問題が、三月十五日の暴圧を契機として急速に進展し、同月二十八日にこの二団体の合同の基礎の上に闘芸と左芸の二団体が合体して、ここに全日本無産者芸術連盟（ナップ）が成立した。
前記日本左翼文芸家総連合に参加した芸術団体のうちでは、日本無産派文芸連盟は間もなく解体してナップに参加し、全国芸術家同盟もいつの間にか解散してしまったので、残るものは農民文芸会を除くと、労農芸術家連盟と全日本無産者芸術連盟となり、いわゆるナップ・文戦並立時代が現出したのであ

る。しかも日本における左翼的作家の大同団結であった日本左翼文芸家総連合は、各派に属する十九作家の反戦創作集「戦争に対する戦争」を出版し、左芸、闘芸、無産派文芸などの団体をナップに結びつける役割を果したうえで、ナップ成立以後は自然に消滅してしまう形になってしまった。

ここにその後の日本のプロレタリア芸術運動の歴史にとって重要な意味をもつ二つの問題が存在している。それは第一に、なぜナップは総連合に参加した全団体を包含することをしなかったかという問題であり、第二には、あのような形でナップが成立したとしても、なぜ総連合の活動を推進し発展させることが出来なかったかという問題である。

第一の問題は、当時の芸術団体の在り方に関連している。その頃のプロレタリア芸術団体は、公然とはそれを掲げなかった場合にも、事実上は政治的見解の一致を要求していた。したがってアナーキズムの思想的立場に立つ芸術家とマルクス主義の立場に立つ芸術家、左翼社会民主主義の政治的見解を支持する芸術家と共産主義の政治的見解を支持する芸術家とは、同一の団体内で活動することが不可能であるという考えがその双方に支配的であった。このことは今日から見れば奇異にも感ぜられるし、また誤りでもあるが、当時は労働組合運動でも労資協調主義に立つ日和見主義的労働組合にたいして革命的労働組合が別個の組織をもっていた時代で、それは労働運動、芸術運動における革命的、共産主義的勢力を結集するという歴史的積極的な意義をもっていた。したがってナップがあのような形で成立したのには、それなりの時代的根拠と必然性とがあったのであって、それを今日的観点からたんなる誤りであったと見ることは誤りである。しかし同時にこのような組織原則が社会情勢の緊迫化とともに芸術を通じてする反帝、反封建、反ファシズムのための共同行動を広はんに組織し、プロレタリア芸術を国民的基盤の上に発展させてゆく妨げとなっていったことも争えない事実である。

ではこのようにしてナップが成立した後に、左翼文芸家総連合は、なぜ自然消滅の形になってしまっ

たのであろうか。それは当時一般にこのような統一戦線にたいする過少評価、というよりもむしろその重要性にたいする無理解があったからである。それはナップの内部にもあった。すでに総連合に加盟していた芸術団体の大部分がナップに統一された以上、そのような組織を積極的に維持してゆく必要はなくなったというような考え方である。総連合はその提唱者としての私と、その事務を担当していた武田麟太郎が事実上の世話人となって出来上ったものであるが、この二人にさえ、このような広い統一戦線がその後の日本の進歩的文学の発展のうちにもつであろう歴史的意義にたいする強い確信がなかったために、一般の過少評価に抗してその組織をおしすすめ、発展させてゆくことをしなかった。

それにこの組織にははじめから困難があった。それはそれ以前の対立抗争から来る作家や団体間の感情的もつれである。総連合は前芸の提唱によって出来たものだが、プロ芸は組織としてははじめからそれに熱心でなく、労芸はそれに賛成して準備会に参加し、反戦創作集には作品を送って来ていながら、創立大会には代表を送って来なかったというような状態である。それやこれやがいっしょになって総連合は事実上その機能を停止し、それ以後このような統一戦線の機会が失われてしまったのである。

ナップは創立以来、文学、演劇、美術、映画、音楽の各専門部にわかれていたが、その年の十二月に再組織されて全日本無産者芸術団体協議会と改称され、各部は独立した日本プロレタリア作家同盟、おなじく演劇同盟、美術同盟としてナップに加盟し、それぞれ特殊な活動を展開することになった。

二

ナップの機関誌「戦旗」の創刊号(一九二八年五月号)には、プロ芸と前芸の「合同に関する声明」の他に、「文芸戦線は何処に門を開くか?」という中野重治の論文と、「プロレタリア・レアリズムへ

の道」[*]という蔵原惟人の論文とが、並んで発表された。
中野の論文は、「文芸戦線」四月号の青野季吉の論文「政治的見解その他一二」を反駁して、労芸のいう「理論拘泥主義者、左翼小児病者、即ち宗派的分裂主義者の徹底的克服」は、事実上日本プロレタリアートの大衆的前衛党の清算を意味するもので、そのような方法によっては真の統一戦線はありえないと論じて、ナップの政治的立場を明らかにしたものである。しかしここでは芸術上の統一戦線がどのようにして実現されるか、「文芸戦線」と「戦旗」との思想的な相違が、どのようにその作品の上に反映しているかということには触れられていない。この巻に収録した窪川鶴次郎の「作品に現われた左翼社会民主主義者の曝露」[*]（二九年三月）は、平林たい子の作品を例にとって「文芸戦線」の傾向を明らかにしようと試みたものであるが、ここでも主としてその政治的立場が取りあげられている。
私の「プロレタリア・レアリズムへの道」は、その前月の「前衛」に発表した「生活組織としての芸術と無産階級」の続篇として書かれたもので、プロレタリア文学運動のうちで、はじめて創作方法の問題をやや具体的に取りあげたものとして注目された。この二つの論文は論争的な形をとっていないが、文戦に多く残っていた自然主義的方法と旧プロ芸からナップにもちこまれた「進軍ラッパ」「武器の芸術」の理論にむけられたものである。第一の論文ではプロレタリアートの「主観的自己表現の芸術」と「現代生活の客観的叙事詩的展開」の芸術との二つの型を指摘して、後者の意義を強調し、第二の論文ではブルジョア・レアリズムとの対比のうちに、この芸術創作方法としてのプロレタリア・レアリズムの特徴を示そうとした。
私はそこで「我々にとって重要なことは、現実を我々の主観によって、歪めたり粉飾したりすることではなくして、我々の主観――プロレタリアートの階級的主観――に相応するものを現実の中に発見することにあるのだ」とのべたが、この主観と客観の統一については、「芸術の階級性と階級芸術の客観

性」という第三の論文のうちで、もっと具体的に触れるつもりでいて、色々の事情でそれが果されなかった。

私のこの見解は、そのはじめ近代主義的な傾向をもった作家や芸術家の反対にあったが、しだいにそういう人々や「文芸戦線」の一部の作家や批評家をもふくめて、一般に承認されるようになり、「新写実主義論」という題名で中国語にも翻訳された。しかし今日から見れば、第一に、そこではブルジョア・レアリズムというものが自然主義によって代表されており、当時の我々のもっていた文学史上、芸術理論上の理解の欠陥を反映して、いわゆる批判的レアリズムの伝統が正しく取りあげられておらず、したがって「ブルジョア・レアリズム」の継承の問題が具体的に提起されていない。第二には、いわゆる「抒情詩的自己表現」と「客観的叙事詩的展開」とが、プロレタリア芸術の「二つの相関連する型」としてとらえられていて、この二つの統一に重点がおかれていなかったために、革命的ロマンチズムとレアリズムとの統一が問題とされていない、等々。ここにこのプロレタリア・レアリズムの提唱が「文芸戦線」の創作方法やプロ芸からもち込まれた芸術理論を完全に止揚して、統一的なプロレタリア芸術の創作方法を打出すことに十分成功しなかった理由の一つがあるのであって、そのために次のいわゆる芸術大衆化の論争をよびおこす基盤が残されたのである。

その後翌年八月に私は平林初之輔の批判に答えて、「再びプロレタリア・レアリズムについて」を書き、一九三一年十月には「芸術的方法についての感想」を書いて創作方法の問題を発展させようとしたが、以上にあげた欠陥は克服されないままに残った。

いわゆる芸術大衆化の論争は、この年(一九二八年)八月の「戦旗」に私が「芸術運動当面の緊急問題」*という論文を書いて、同誌六月号の中野重治の論文「いわゆる芸術大衆化論の誤りについて」*と七月号の鹿地亘の「小市民性の跳梁に抗して」を批判したことからはじまった。それにたいして中野が九

月号に「問題の捩じ戻しとそれについての意見」を書き、私がさらに十月号に「芸術運動における左翼清算主義」を書き、最後に中野が十一月号に「解決された問題と新しき仕事」を書いて、この論争はひとまず終結した。

今この論争を讀みかえして見ると、その双方に理論の未熟と誤解とがあり、それに副次的な色々の問題がからみあって来ていて、その論点と結論とがかならずしも明瞭でないところがある。平野謙も戦後に書いた「ふたつの論争」というう文章のうちで、「中野の自己批判をこめて、あの論争の結着には解せぬふしがおおい」と書いている。しかしそれはこの論争において二つの主要な問題がからみあっているからである。その二つの問題とは、第一が、私のいわゆる「プロレタリア芸術確立の運動」と「大衆の直接的アジ・プロのための運動」、中野君のいわゆる「芸術的プログラム」と「政治的プログラム」との問題であり、第二は、プロレタリア芸術そのものの大衆化の問題である。

第一の問題は、当時のプロレタリア芸術運動が、本来ならば党や青年同盟や労働組合がやるべき煽動・宣伝の仕事の一部を負わされていた、もしくは自ら引受けていたという、その頃の日本の運動の実情から生じたものである。そしてこの仕事とプロレタリア芸術を創造的に発展させてゆく仕事との混同、というよりもむしろ後者を前者のうちに解消してしまうような傾向が、とくにプロ芸の指導者である、鹿地、久板、谷などの見解のうちにあった。つまりこれらの人々は、政権獲得の前にプロレタリア芸術の芸術としての発展を望むことは誤りであって、芸術運動はそのための条件をつくり出す政治闘争の補助手段でなければならないと主張していた。ここからプロ芸の「進軍ラッパ」、「武器の芸術」などのスローガンが出て来たのであって、それがナップのうちに鹿地などによって持込まれた。それにたいして私はこのような仕事は必要であるが、そのうちに芸術運動を解消してしまうのは誤りであって、芸術運動にはプロレタリア芸術を芸術として発展させてゆくという本来の仕事があるのであって、この二つの

仕事ははっきりと区別した上で、その結びつきが考えられなければならないという立場に立っていた。

第二の問題は、プロレタリア芸術そのものの大衆化の問題である。それはそれまで鹿地、久板などと同意見であると思われていた中野が「いわゆる芸術大衆化論の誤りについて」で、突如として「大衆の求めているのは芸術の芸術、諸王の王なのだ」「時空の如何に拘らず、大衆の求めるところのものは芸術のヒマラヤなのだ」という意見を発表したことにはじまった。この論文は今讀んで見ると、芸術の卑俗化に警告を発している点で、多くの正しい見解を含んでいる。しかし私はプロレタリア文学が大衆から遊離しており、その大衆化が問題となっている時に、このような論文が書かれることは不適当であり、それは日本の大衆の実状を無視した理想論であるとして反対した。当時の私には中野がその指導者であったプロ芸の「進軍ラッパ」的芸術論の自己批判をこのような飛躍的な問題提起によってすりかえてしまったと考えられたのである。論争の結果は中野が「大衆を目安とする文学」の必要を認めることでいちおう終ったか、しかしこの論争も多くの問題を残して次にもちこされた。

この論争をきっかけとして、ついで起ったのが、いわゆる形式主義論争と芸術価値にかんする論争とである。形式主義論争は私が「芸術運動当面の緊急問題」のうちで、鹿地を反駁して、「芸術はイデオロギーであると共に技術である。内容であると共に形式である。そして形式が内容に決定されることが事実であるとするならば、その形式が内容から自然発生的に生れて来たことも事実だ。芸術作家の形式は新しき内容に決定されたる過去の形式の発展としてのみ発生する」といったのにたいして、そのころいわゆる新感覚派の流行作家であった横光利一が、芸術の形式が内容を決定するのは「主観が客観を決定する」という唯心論で、芸術の内容（主観）は「客観物である形式が読者に与える幻想である」といったのにはじまる。そしていわゆる形式主義者の側からは、横光利一、犬養健、中河与一、池谷信三郎、川端康成など、マルクス主義者の側からは蔵原惟人、勝本清一郎、小宮山明敏、大宅壮一などが出

て大きな論争になった。
芸術的価値についての論争は平林初之輔が一九二八年九月および十月の「新潮」に「文芸批評論」「批評家の任務について」という論文を書き、さらにその翌年三月の同誌に「政治的価値と芸術的価値*」という論文を発表して、マルクス主義の批評家が認める芸術作品の価値は政治的価値であって、芸術にはその他にそれと無関係な芸術的価値がある、という見解をのべたのにたいして、勝本清一郎と私とが、それはそういうふうに二元的に見るべきでなくて、芸術作品の価値は社会的価値として一元的に見るべきであると主張したのに端を発して、それにさらに大宅壮一、川口浩、小宮山明敏、青木壮一郎、中野重治、三木清などが加わって、これもまた長期にわたる論争に発展していった。
これらの論争は、その時代の制約をもちながら、日本のプロレタリア芸術理論を推進するうえに大きな意義をもったばかりでなく、そのプラスの面でもマイナスの面でも、現在の我々の文学実践にかかわりあう多くの問題をふくんでいる。私は今ここでこれらの論争の内容に立入って詳論することは出来ないが、読者はこの巻に収録した勝本、大宅、川口の論文でその一半を知ることが出来るであろう。
これらの論争を通じて、ナップはプロレタリア文学運動のうちにおける指導的地位を獲得したばかりでなく、既成文壇にも大きな影響をあたえ、そこに多くの、いわゆる転換作家や同伴者作家があらわれた。しかしナップはそれらの作家たちを広く包括する統一戦線の方向に向わず、また過去の芸術的遺産の継承を問題としながら、日本の文学の立入った科学的な分析の上にたって、そこから十分に学び、その遺産を十分に摂取発展させることをしなかった。そこに当時のプロレタリア文学運動が歴史的に負わされていた弱さの一つがあった。そのうちで若い宮本顕治が一九二八年八月に「敗北の文学」を書いて芥川龍之介の文学を分析し注目されたが、それも一般的な方向とならずに終ってしまった。

このようにこの時期にはいるとプロレタリア文学運動の組織的中心がナップにうつり、理論的な指導もナップに帰したが、創作の実際の面ではかならずしもそうではなかった。労芸は会員の数においてはナップにおよばなかったが、多くの勤労者出身のすぐれた作家をその組織のうちにもっていた。その頃の「文芸戦線」にはその前からの前田河広一郎、金子洋文、今野賢三、葉山嘉樹、小堀甚二、里村欣三、平林たい子、黒島伝治などの作家が書きつづけている他に、いわゆるブルジョア文壇からの転換作家細田民樹、細田源吉や、新しい勤労者作家がその作品を発表した。

三

一九二八年になって「文芸戦線」は注目すべき新しい作家山内謙吾、山本勝治の二人を送り出した。山内謙吾はこの年の四月に素朴ではあるが手がたい手法で阿蘇山における架橋工事にまつわるエピソードを扱ったすぐれた短篇「線路工夫」(前巻所収)を書いて注目されたが、ついで六月には「三つの棺」八月には「暴徒」を発表した。ともに労働者の争議を扱ったもので、前者におよばないが、しかし今でも読むにたえる作品である。

山本勝治は一九二七年十一月の労芸分裂後に、「文芸戦線」に加わり、沖仲仕組合の組織などに従事しながら小説を書いていた作家で、二八年五月号の「文芸戦線」に「十姉妹*」を発表してからその才能を認められるようになった。これは農村の小作争議を背景にして家庭内における世代の対立を描いたもので、維新の際に区長をしたことのある頑固な祖父と気の弱い父と「社会主義者」の子の性格がよく描かれている。前の山本の「線路工夫」とともに、この時期における新人の最もすぐれた短篇の一つであった。彼はついで、七月に「荒療治」を、十一月に「員章を打つ」を発表してその将来を期待されてい

たが、翌年三月十七日の未明に、新聞配達従業員の争議失敗の責任を感じ、省線東中野・中野間の線路に身を投じて自殺した。

のちに「コシャマイン記」によって第三回芥川賞をえた鶴田知也が「文芸戦線」に書きはじめたのもこの頃である。彼は一九〇二年小倉市に生れ、中学卒業後上京して東京神学社神学校に学んだが、信仰上の疑惑から中退して北海道におもむき、放浪生活にはいって、百姓、馬車曳き、職工などを転々とした。その後名古屋にいって同郷の葉山嘉樹のもとで労働運動をしたこともあったが、一九二七年に、「文芸戦線」に参加し、二八年一月に「海鳴り」、六月に「牧場を追われて」*、二九年一月に「闇の怒」九月に「夏」など、主として北海道放浪中の生活から取材した短篇を発表した。

この頃また岩藤雪夫が「文芸戦線」に書きはじめた。彼は一九〇三年に生れ、早稲田工手学校機械科を卒業後、機械工、船員、土工、新聞配達などをやりながら労働運動に参加していたが、葉山嘉樹と知るようになってから小説を書きはじめ、一九二七年八月にはじめて短篇「売られた彼ら」を「文芸戦線」に発表してから、二八年七月には北海道のタコ部屋を描いた「吹雪」、十二月には船員の生活を取りあつかった「ガトフ・フセグダー」、二九年三月には鉄工場の争議を描いた「鉄」、十月——十二月には長篇「賃金奴隷宣言」などを書いて、その特異の作風を注目された。このうちでは「鉄」*が鉄工場の争議を、労働者の家庭生活をふくめて多面的に描いたものとして、この時期における「文芸戦線」「戦旗」を通じてのプロレタリア文学の傑作の一つとなっている。彼の作品には、たとえば「ガトフ・フセグダー」のように葉山嘉樹の強い影響が認められるが、「鉄」ではその模倣から脱却して独自の作風を示しはじめている。この作と同じ頃に「改造」に出た「海へ行く」はゴーリキーの或る作をおもわせる好短篇である。

「文芸戦線」の前からの作家では前田河広一郎、平林たい子、黒島伝治などが、この時期にも精力的

に書きつづけているが、前二者については次の巻で解説する。黒島は前の時期に「橇」（前巻所収）「渦巻ける烏の群」などですでにプロレタリア作家としての名声をえていたが、この時期にはいってからは同じシベリアをあつかった「穴」「パルチザン・ウォルコフ」「氷河」などを書きつづけた。農民作家としての黒島もその処女作「電報」（前巻所収）「二銭銅貨」「豚群」などののちに、二八年一月の「文芸戦線」に「農民の鞭」を発表して注目されたが、この年の六月には同じような題材をあつかった「氾濫*」が発表された。この作には追いつめられた貧農の暗い生活と自分の最後のものを守ろうとする農民の原始的な抵抗とが、村の金持の生活との対比のうちに、まとまった手がたい写実の筆で描かれている。

　間宮茂輔は一八九九年に東京で生れ、慶応義塾仏文科を中退後、古河鉱業に入社、足尾、岐阜の銅山に勤めた。はじめ「不同調」その他に小説を発表して認められていたが二九年二月の「新潮」に「朽ちゆく望楼*」を発表して、プロレタリア文学運動に近づき、「文芸戦線」に加わった。これはこの頃の間宮の代表作で、同じ月に「改造」に出た片岡鉄兵の「綾里村快挙録」とともに、それまでの日本文学にあまり見られなかった漁民の生活を描いたものとして注目される。資本主義の侵入による漁村の階級的再編成、網元と網子、船子、労働者との対立とそのともだおれのテーマは、戦後に書かれた村山知義の戯曲「死んだ海」に通ずるものがある。

　「文芸戦線」のこれらの作家たちにたいして、「戦旗」では、そのはじめ「前衛」からの藤森成吉、山田清三郎、村山知義、林房雄、立野信之、橋本英吉、片岡鉄兵、「プロ芸」からの中野重治、鹿地亘、久板栄二郎、江馬修、「左芸」からの三好十郎などが代表的作家として活動した。そのうち立野の「軍隊病」（二八年五月）、「豪雨*」（十月）、中野の「春さきの風」（八月）、三好の「傷だらけのお秋*」（八―十一月）は、そのはじめの時期の代表的作品である。

江馬修と片岡鉄兵とはすでに早くから文壇で名声をえていたが、この前からプロレタリア文学運動に

積極的に参加して来たいわゆる「転換作家」であった。そのうち江馬修は一八八九年の生れで、一九一六年（大正五年）以来長篇「受難者」「暗礁」「不滅の像」などによって新しい恋愛作家として多くの読者をもっていたが、一九二三年の関東大震災を機としてプロレタリア文学の陣営に近づき、渡欧して帰国してからは、「プロレタリア芸術」「戦旗」などにエッセイや小説を発表した。この巻に収めた「黒人の兄弟」*（「戦旗」創刊号所載）は、作者洋行中の船中の見聞をもとにして書かれたもので、イギリス帝国主義の植民地支配、その人種的偏見がよく描かれているが、ここではまだ帝国主義が日本人自身の問題として扱われていない。

片岡鉄兵は一八九四年に岡山県に生れ、慶応大学仏文科予科を中退後、代用教員、新聞記者などを経て、関東震災後の一九二四年に横光利一、川端康成などと雑誌「文芸時代」を創刊し、「幽霊船」「綱の上の少女」などによっていわゆる新感覚派の文学の代表的作家として広く読まれていたが、一九二七年六月の「新潮」に中篇「金銭について」を書いた頃から社会の暗い面に眼をむけるようになり、その後急速にプロレタリア文学運動に近づき、翌二八年三月に前芸に加盟した。この頃から彼は「小児病」（二八年一月）「芸術の貧困」（二月）をはじめ、「面白くなる」（七月）、「大島争議君」（二九年一月）、「打倒六卿会」（同月）など、主として京浜地方の工場労働者の争議のエピソードから取材した小説を多く書いている。二九年二月に「改造」に発表された中篇「綾里村快挙録」は、前に触れたように漁村のボスと官憲にたいする漁民の闘争を描いたもので、今から見ると他の作と同様描写の荒っぽいところが目立つが、ともかくこの時期の作者の代表作であった。また二八年六、七月の東京朝日に連載された「生ける人形」*は資本主義の虚偽と矛盾にみちた社会で出世を夢みるサラリーマンの不安定な生活を諷刺的に描いた作品で、映画にもなって広く普及した。

三好十郎は一九〇二年に佐賀市に生れ、一三歳で孤児になってから、土方、百姓をしながら中学に学

び、早稲田大学予科を卒業した。彼は在学中から詩を書いていたが、この一九二八年になって処女戯曲「首を切るのは誰だ」をはじめ「炭塵」「傷だらけのお秋」などを次々に発表して劇作家としてのすぐれた才能を発揮した。「傷だらけのお秋」はある港の沖仲仕の争議を背景とした港町の酒場に働くお秋その他の酌婦と沖仲仕たちとの人間的な結びつきを描いて、その点で小林多喜二の初期の短篇にも通ずるものをもっているが、そのころのプロレタリア戯曲にありがちな観念主義的な偏向が少く、一人一人の性格もよく書け、戯曲としてのまとまりもあって、この時期のすぐれた作品である。

立野信之は一九〇三年千葉県五井町の生れで、早く祖父母の手で農村に育てられ、東京中学に学んだが中退し、二年間佐倉連隊で軍隊生活をした。一九二八年の四月に処女作「標的にされた彼奴」(前巻所収)を発表してから、「軍隊病」(五月)、「豪雨」*(十月)などのいわゆる軍隊ものを書きつづけた。彼はのちに「小作人」(二九年二月)その他農民をあつかったものも書いているが、彼の文学的地位をきずいたのはこの軍隊もので、そこでは日本軍隊の非人間的な環境における兵士の生活が生々と写実的に描かれている。とくに「豪雨」は戦後に書かれた野間宏の「真空地帯」に通ずるものとしても注目される。

この時期のプロレタリア文学は小林多喜二の出現によって、新しい段階にはいった。小林は一九〇三年に秋田県の貧しい農家に生れ、幼少のころ一家とともに北海道の小樽に移住した。そこで彼は働きながら商業学校に通い、小樽高商を卒業した。卒業後銀行につとめながら、小説を書き、また社会科学を勉強し、労働運動に近づいていった。この頃書いた「防雪林」は当時未発表で残されたが、彼の初期の代表的作品である。ついで小樽における三・一五事件をあつかった「一九二八・三・一五」*を書いて、この年の「戦旗」十一月、十二月号に発表された。これは特高警察の残虐な拷問とそれとたたかう革命家たちの姿を描いたもので、この作によって日本文学史上はじめて、国家権力の問題が真正面から取り

あげられ、共産主義的革命家が生きた形象として文学的に造形された。その意味でこの作品は、部分的な欠陥をもちながらも、日本のプロレタリア文学だけでなく、日本文学全体にとっても劃期的であったといえる。

この作品とともに、日本のプロレタリア文学に新しい段階をもたらした作品は、その翌年の三月に「戦旗」に発表された中野重治の「鉄の話」*であった。中野は福井県の農村に生れ、東大独文科を卒業し、在学中マルクス主義芸術研究会に参加し、プロレタリア芸術連盟にはいっていったことについては前に書いた。彼はまた同人雑誌「驢馬」の同人として多くの詩やエッセイを書いて、その方面で早くから知られていた。小説を書きだしたのは少し後の「プロレタリア芸術」発刊後であるが、この一九二八年の八月には三・一五のエピソードをあつかった抒情詩的な美しい短篇「春さきの風」を書いて好評だった。この「鉄の話」も説話体風の詩的な形式をもったものだが、その形式のうちに農村の生活が客観的にリアリスチックに描かれ、そこには民衆の生活にのしかかっている天皇制や封建性にたいするはげしい批判がにじみ出ている。短篇ではあるが、プロレタリア文学の発展に大きな影響をもった作品である。

これらの作品についで小林多喜二の「蟹工船」、徳永直の「太陽のない街」、村山知義の「暴力団記」などが出たのであるが、それらは次の巻に属するので、そこで触れることにする。

四

小説とならんで詩もまたこの時期に「戦旗」を中心に同じような方向に大きく発展していった。前時期に支配的であった労働者詩人たちの日常的生活、自然発生的な憤怒や憎悪をうたった詩、「赤と黒」の詩人たちの無政府主義的な反逆の詩、「驢馬」の詩人たちの抒情性のゆたかなロマン的革命詩のあと

をうけ、またそれにかわって、一九二八年のはじめごろから、はっきりとしたプロレタリア階級意識のうえに立つ現実的、生活的な詩が支配的になった。

しかしこの変化は日本のプロレタリア詩の発展にとって、そのプラスとマイナスをもっていた。一方でそれはプロレタリア詩の主題の積極性をもたらし、その思想性を高めた。労働者や農民の闘争や拷問などをテーマとした詩、戦争や国際的な革命的現実をうたった詩がいちじるしく目立って来た。この以前にもローザ・ルクセンブルグやサッコ・ヴァンゼッチなどをうたった詩もあったが、この時期になるとロシヤ革命、中国革命、レーニンなど、国内の問題では労働組合、党、ストライキ、小作争議、デモなどをとりあげたものが、めっきりふえている。拷問をあつかった詩が多いのは、三・一五事件の後で、階級闘争が激化し、それにたいする官憲の圧迫が強暴化したことの反映である。

しかしこのことは他方では、階級意識や階級感情が客観化された形象のうちに表現されずに、概念的ないし観念的なままの形で叫びだされるような傾向、観念的な思想性と自然発生的な憎悪とを高い詩的形象のうちに純化し統一することなしに、なまのままの形で機械的に結びつけてぶちまけられるというような傾向をともなって、この時期の終りごろプロレタリア詩は面白くないという批判の声をきくようになった。

このような風潮のうちに前期の才能ある詩人の多くは沈黙したり、運動から離れていった。ただこの前年あたりからロマンチックで抒情的な自分の詩的素質を生かしながら、しだいにリアリスチックな思想性を高めていった中野重治のような詩人が、この時期にも「夜刈りの思い出」*のようなすぐれた詩作を残している。三好十郎、森山啓なども自分の素質を生かして歌いつづけた。

この時期の大きな特徴は、多くの新人、とくに労働者、農民その他の勤労大衆のあいだからの新人がプロレタリア詩の運動にはいってきたことである。中には小林園夫、波立一、高木進二、B丸のKなど

といったような、その詩作はいくつか残っているが、現在にいたるまでその人物が不明のままでいる作家もいる。このことについて戦旗社発行の「日本プロレタリア詩集」一九二九年版の序文は次のように書いている。

「一九二八年五月から二九年五月までの一年間、日本プロレタリアートの生んだ詩の最善の収穫がここにある。特に我々の誇りとすることは、現に工場にハムマを振り、農場に鍬を押して居るわが労働者農民諸君が、詩におけるその大旗をたかだかとかかげて居ることである。それはわがプロレタリアートの詩の里程標であり、三・一五と四・一六との全国的大弾圧の下に、血にまみれて戦いつつあるわが労働者農民のさながらの姿である。」

これらの詩の中では松田解子の「シキの娘*」、波立一の「艦の中*」、小林園夫の「あいつ安んぜよ*」、田木繁の「拷問を耐える歌*」などが、注目される。

短歌や俳句もプロレタリア文学運動の一般的傾向のうちで、詩と同様の方向に進んでいった。

一九二七年のはじめごろから活潑になってきた歌壇の保守伝統的な結社に宣戦する短歌革新運動は、その年の五月の雑誌「まるめら」に掲載された大塚金之助の論文「無産者短歌」に刺戟されて、その戦線統一の方向に動き、翌二八年の九月には新興歌人連盟が結成された。この連盟の創立に積極的に参加したのは、歌壇結社内の革新派と「生活派」の口語歌作家たち、石榑茂、前川佐美雄、柳田新太郎、筏井喜一、渡辺順三、伊沢信平、浅野純一、坪野哲久、などで、他に大塚金之助、大熊信行、矢代東村なども参加したが、間もなく分裂して、渡辺、伊沢、浅野、坪野、大塚などはその年の十一月に別に無産者歌人連盟を結成し、十二月に機関誌として「短歌戦線」を創刊した。この「短歌戦線」は、渡辺順三を中心として、思想的にはマルクス主義の立場に立ち、ひろく労農歌人を結集してプロレタリア短歌運動の中心となった。

プロレタリア俳句運動は、荻原井泉水の自由律俳句雑誌「層雲」のうちから生れた。一九二八、九年ごろからこの「層雲」誌上に若い作家によるプロレタリア俳句の主張があらわれ、それとともに当時の一般俳壇に支配的であったホトトギス的花鳥諷詠や、「層雲」の小市民的な心理主義的傾向に反対してそのころの社会の現実である罷業、夜業、馘首、失業、生活苦、女工、小作と地主、凶作、戦争などをうたった横山賀茂水、栗林一石路、橋本夢道、新井夜雨、小林空車などの作品があらわれた。しかしこの時期には、この運動は雑誌「層雲」の内部でおこなわれ、独立の団体として、ひろく勤労者大衆のうちに基礎をもつ運動とはなっていない。またこの時期にはまだ自由律以外の定型的伝統俳句のうちには新しい革新的運動は見られなかった。

これらのプロレタリア短歌、俳句の運動は、新しい社会意識の上にたって現実の生活に密着した短詩形の文学を確立しようとしたもので、その意味で日本の短歌や俳句の歴史に劃期的な革新の第一歩をふみ出したものであった。それだけにそれは多くの困難をともなわざるをえなかった。その際短歌は多く石川啄木以来の生活派の流れをくみ、俳句は河東碧梧桐、荻原井泉水の新傾向運動のうちから生れて来たのであるが、もともと短い詩形のうちに高い思想性をもろうとして、しばしば観念的になり、また散文的になってゆく傾向をまぬがれなかった。プロレタリア短歌や俳句が長い論争と実践を通じて、広く大衆化していったのはもっと後のことである。

（一九五四・八・八）

文中＊じるしのある作品は、すべて本巻に収録されたものをしめす。

日本プロレタリア文学年表III

日本近代文学研究所

一九二八年（昭和三年）三月二五日以降

作品（『』内は発表誌・紙、刊は単行本）

生活組織としての芸術と無産階級（蔵原惟人）『前衛』4

文芸戦線は何処に門を開くか（中野重治）『戦旗』5

プロレタリヤ・レアリズムへの道（蔵原惟人）『戦旗』5

軍隊病（立野信之）『戦旗』5

黒人の兄弟（江馬修）『戦旗』5

壊滅（ファジェーエフ、蔵原惟人訳）『前衛』3・4『戦旗』5—7

社会主義の方へ（小ブルジョア作家の転向を吾等は何と見るか）（青野季吉・平林たい子・金子洋文その他）『文芸戦線』5

穴（黒島伝治）『文芸戦線』5

十姉妹（山本勝治）『文芸戦線』5

『戦争に対する戦争』（左翼文芸家総連合編）南宗書院刊 5

文学運動および関係事件

全日本無産者芸術連盟（ナップ）結成、プロ芸・前芸合同声明書発表 3・25

全日本無産者芸術連盟東京支部創立総会（神楽坂倶楽部）4・15

同創立大会（本郷基督教青年会館）4・28

東京左翼劇場創立第一回公演（前衛劇場、プロレタリア劇場の合同による）4

『プロレタリア芸術』『前衛』終刊 4

『戦旗』創刊（ナップ機関誌）戦旗社

朝鮮無産階級芸術運動の過去と現在（李北満）『戦旗』5

『驢馬』終刊 5

『第一戦線』（全国芸術家同盟機関誌）創刊 5

第一回全連邦プロレタリア作家大会

政治的および社会的事件

労農党・日本無産青年同盟・日本労働組合評議会の三団体解散を命ぜらる。4

労農党再建新党準備会発会、直ちに解散を命ぜらる。4

日本軍第二次山東出兵。5

張作霖爆死、国民党北伐成る。6

治安維持法改正緊急勅令（死刑）、悪法反対運動拡まる。6

済南事件。6

特高警察全国的に設置。7

全国労組会議第一回準備会開く。7

無産大衆党結党。7

コミンテルン第六回大会。8

十字路（シナリオ・衣笠貞之助）『映画時代』5
『プロレタリア詩集一九二八年版』南宗書院刊　5
左傾について（片岡鉄兵）『文芸春秋』5
牧場を追われて（鶴田知也）『文芸戦線』6
所謂芸術の大衆化論の誤りについて（**中野重治**）『戦旗』6
統一戦線と総連合の活動を希む（金子洋文）『創作月刊』6
生ける人形（片岡鉄兵）『東京日日』6―7
プロレタリア・リアリズムの問題（勝本清一郎）『都新聞』6
小市民性の跳梁について（**鹿地亘**）『戦旗』7
正宗白鳥論（壺井繁治）『戦旗』7
氾濫（黒島伝治）『改造』7
彼女等の会話（窪川いね子）『戦旗』7
『マルクス主義と芸術運動』（**田口憲一**）白楊社刊　7
波（山本有三）『東京（及大阪）朝日』7―11

5（ソ同盟）
『尖鋭』（無産文芸連盟機関誌）創刊　6
誰だ？花園を荒す者は？（中村武羅夫）『新潮』6
全国芸術家同盟講演会（読売講堂）6
麻生久・加藤勘十・村松正俊・松本淳三ら講演
芸術大衆化論争『**戦旗**』**誌上**6―11
『女人芸術』創刊　7
『農民』終刊　7
「新恋愛の道」（コロンタイ夫人の恋愛観）（林房雄）『中央公論』7．
『大学左派』（東大同人雑誌連盟による）創刊　7
ナップ映画部創立（左翼劇場映画班の独立による）7
トルストイ百年祭　8　秋田雨雀・米川正夫・蔵原惟人ら読売講堂で講演
ナップ常任中央委員会（「論争の方法に関する意見書」発表）9・12
不当検閲反対演説会（帝大基督教青年会館にて）10　藤森成吉・片岡鉄兵・林房雄・矢部友衛ら講演
新興歌人連盟結成　9・22（機関誌『短歌革命』創刊11）

全国反戦同盟成立。8
労組再建方針転換し、左翼組合の全国的結成へ集中。9
渡辺政之輔等中国へ出発。三田村四郎主として労組を指導。9
思想善導機関設置決定。9
市川正一コミンテルン第六回大会より帰国し党再建に加わる。10
日本労働組合全国協議会（全協）全国代表者会議開催され準備会発足。12
『労働新聞』発刊。12
労働者農民党結成大会開催、解散を命ぜらる。新党準備会結社禁止。12
政治的自由獲得労農同盟全国準備委員会組織成立。12
『赤旗』八月以来はじめて再刊。12

モスクワの印象（中条百合子）『改造』8
芸術運動当面の緊急問題（**蔵原惟人**）『戦旗』8
春さきの風（**中野重治**）『戦旗』8
疵だらけのお秋（三好十郎）『戦旗』8―11
真知子（**野上彌生子**）『改造』8より分載
浮浪児（下村千秋）『中央公論』8
或る砲手の死（細田民樹）『文芸戦線』8
玖瑰の花（今野賢三）『文芸戦線』8
問題の捩じ戻しとそれについての意見（**中野重治**）『戦旗』9
マルクス主義文芸批評の任務に関するテーゼ（**ルナチャールスキー・蔵原惟人訳**）『戦旗』9
密偵（林房雄）『戦旗』9
文芸批評論（平林初之輔）『新潮』9
反軍国主義的作品三篇（時評・新居格）『都新聞』9
科学としての批評について（時評・青野季吉）『都新聞』9
殴る（**平林たい子**）『改造』10
或る職工の手記（宮地嘉六）『新潮』10

新興童話作家連盟結成10・13（機関誌『童話運動』創刊二九年1）
主義者の主義知らず（生田長江）『新潮』10　問題となる。
国際文化研究所創立10
『国際文化』（国際文化研究所機関誌）創刊11
新興歌人連盟分裂11・19（12・23解散）
無産者歌人連盟結成11
『短歌戦線』（無産者歌人連盟機関誌）創刊12
ナップ臨時大会（**日本青年館―検束**）**12・25　右の大会によってナップの再組織行われ、全日本無産者芸術団体協議会**（**略称はやはりナップ**）**成立12・25**

芸術運動に於ける左翼清算主義（蔵原惟人）『戦旗』10
プロレタリア大衆文学の問題（林房雄）『戦旗』10
論争の方法に関する意見書（ナップ常中委）『戦旗』10
プレハーノフ『階級社会の芸術』（蔵原惟人訳）叢文閣刊 10
文芸と国家（平林初之輔）『新潮』10
夜刈りの思い出（詩・中野重治）『戦旗』10
坑内の娘（詩・松田解子）『戦旗』10
豪雨（立野信之）『戦旗』10
パルチザン・ウォルコフ（黒島伝治）『文芸戦線』10
解決された問題と新しい仕事（中野重治）『戦旗』11
一九二八・三・一五（小林多喜二）『戦旗』11―12
ガトフ・フセグダー（岩藤雪夫）『文芸戦線』12

一九二九年（昭和四年）六月迄

戦線統一から具体的活動へ（山田清三郎）『戦旗』1
一兵卒多仲の死（越中谷利一）『戦旗』1
氷河（黒島伝治）『中央公論』1
綾里村快挙録（片岡鉄兵）『改造』2
プロレタリア芸術の内容と形式（**蔵原惟人**）『戦旗』2
あいつ、安んぜよ（詩・小林園夫）『戦旗』2
南葛労働者（詩・森山啓）『戦旗』2
煙草女工（窪川いね子）『戦旗』2
小作人（**立野信之**）『戦旗』2
鉄の流れ（セラフィモーウィッチ、蔵原惟人訳）『戦旗』2・4・5・6・7・8・9
ナップ大会記と活動方針『戦旗』2
形式主義文学説を排す（勝本清一郎）『新潮』2
歌舞伎とプロレタリアート（林房雄）『中央公論』2
組織活動と作家の任務（鹿地亘）『戦旗』3
作品に現われた左翼社会民主主義者

日本プロレタリア美術家同盟（AR）創立。1・22
日本プロレタリア映画同盟（プロキノ）創立。2・2
日本プロレタリア劇場同盟（プロット）創立。2・4
日本プロレタリア作家同盟創立大会（**浅草信愛会館**）2・10 同盟員八〇
『戦旗』発行部数一万
築地小劇場分裂。3
日本プロレタリア音楽家同盟（PM）創立。4・4（これによって）全日本無産者芸術団体協議会（ナップ）全く成立す。**戦旗社独立**（『**戦旗**』**は大衆的啓蒙雑誌となる**）
貴司山治・勝本清一郎作家同盟へ加入4
佐藤武夫歿・ナップ葬。4・3
『近代生活』創刊 4
『文学時代』創刊 5
新築地劇団結成。5

世界経済恐慌はじまる。
議会解散要求闘争。1
共産党孤立化の危険を訴う。2
トロツキー国外追放。2
山本宣治暗殺さる。3
洋モス亀戸ストライキ。3
共産党非合法主義的偏向に警告。3
「就職難と知識階級の高速度没落」（大宅壮一、『中央公論』3）のような問題一般化す。
左翼組織全国的大弾圧（**四・一六事件**）4
スターリン『ソ同盟共産党内の右翼的偏向について』4
ブハーリン主義批判され理論戦線全般に互り討論起る。4
水野成夫、浅野晃反党運動開始。4
メーデーを期に関東地方の全協加盟組合の連絡恢復し、関東地方協議会再建さる。5
全協中央部再建。6

曝露（窪川鶴次郎）『戦旗』3
鉄の話（その一）（中野重治）『戦旗』3
鉄（岩藤雪夫）『文芸戦線』3
政治的価値と芸術的価値（平林初之輔）『新潮』3
夜明け前（島崎藤村）連載はじまる『中央公論』4
支那（前田河広一郎）『中央公論』4—9
我々は前進しよう（中野重治）『戦旗』4
騰写版の奇蹟（林房雄）『戦旗』4
拷問を耐える歌（田木繁）『戦旗』4
平林初之輔氏の所論その他（川口浩）『戦旗』5
妥協はない（村山知義）『戦旗』5
蟹工船（小林多喜二）『戦旗』5・6
五月祭前後（山田清三郎）『戦旗』5
『日本プロレタリア詩集』（作家同盟編）戦旗社刊 5
『プロレタリア短歌集』（無産者歌人同盟編）紅玉堂刊 5
『放浪記』（林芙美子）改造社刊 5
あんな男こんな男（片岡鉄兵）『中央公論』5

内田魯庵歿。6・29
プロレタリア歌人同盟結成。7

田中清玄・前納善四郎等により共産党中央再建はじまる。6
『産労時報』再刊 6

芸術に対する労働者の手紙（一労働者）『戦旗』6

農民闘争と芸術家の活動（中野浩一）『戦旗』6

わが心を語る（広津和郎）『改造』6

太陽のない街（徳永直）『戦旗』6──11

日本プロレタリア文学大系　3　定価一二〇〇円

一九五四年十月三十一日　第一版発行
一九六九年四月十五日　第四刷発行

編者代表　野間宏
発行者　竹村一
発行所　株式会社　三一書房
東京都千代田区神田駿河台二の九
電話東京（二九一）三一三一～五
振替東京八四一一六〇番
郵便番号　一〇一
印刷　文栄印刷株式会社
製本　有限会社佐伯製本所

全9巻　第4回配本